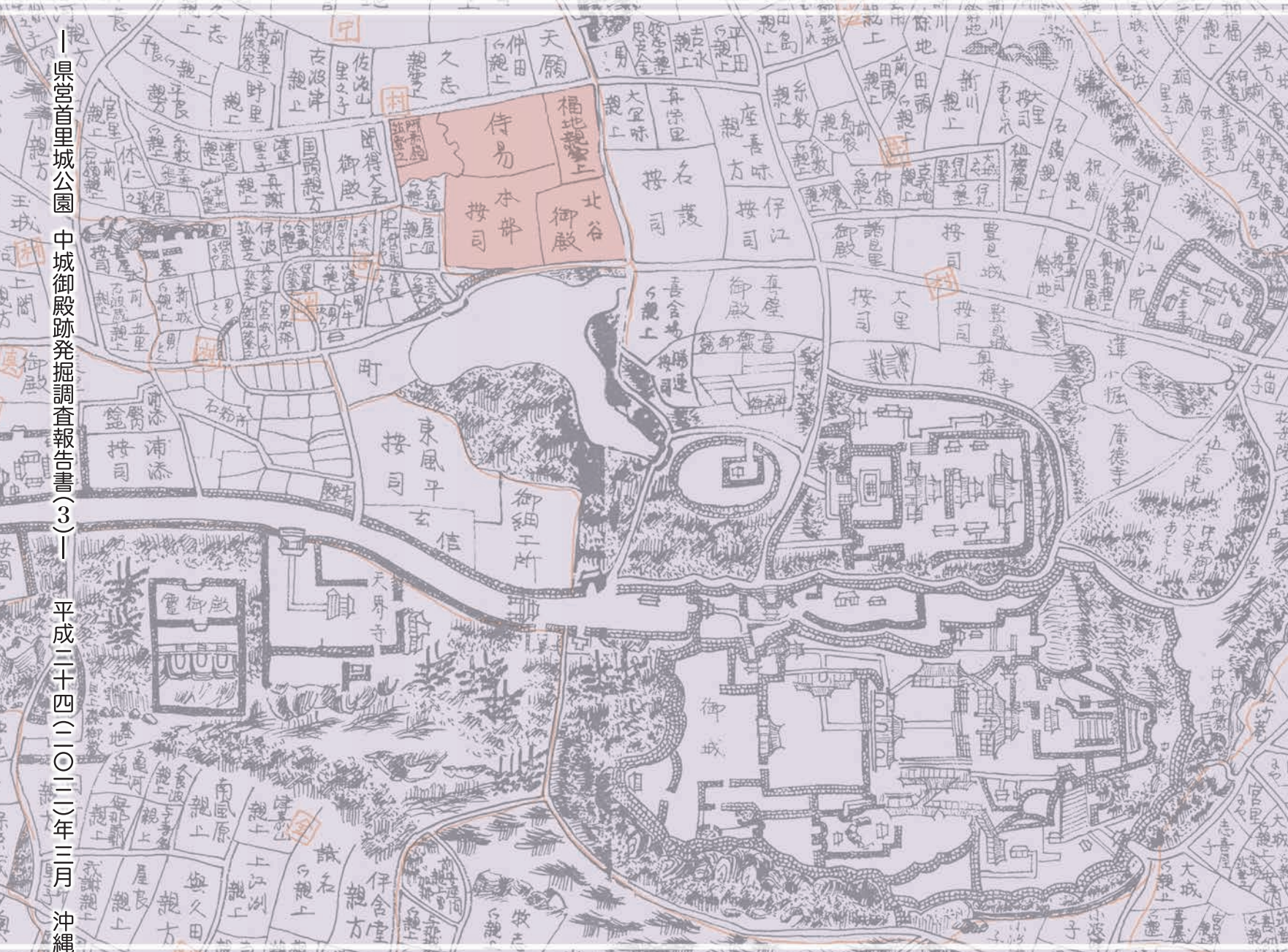


中城御殿跡

# 中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3) —

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3) — 平成二十四(二〇二二)年三月 沖縄県立埋蔵文化財センター



平成24(2012)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター







# 中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3) —

平成24(2012)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター



## 序

本報告書は、首里城公園整備に伴い、沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成22(2010)年度に遺構確認調査を実施し、平成23(2011)年度にまとめたものです。

中城御殿は、次期国王となる世子の邸宅として、当初は現在の首里高等学校敷地内に創建されましたが、1870(明治3)年に今回の調査対象となった大中町に新御殿の造営が開始され、1875(明治8)年に移転します。そして、1879(明治12)年の王国の崩壊を経て、1945(昭和20)年の沖縄戦により破壊されるまでの間、当地に存在していました。

発掘調査は県営首里城公園整備を目的として、平成19(2007)年度より遺構確認調査として開始され、平成22(2010)年度は4本のトレンチを設けて行いました。これにより、石畳や溝、石積み、階段などの遺構が良好な状態で遺されていることがわかりました。また、これに伴い、中国や日本各地で焼成された陶磁器が多数出土しているほか、戦時中に避難させたと思われる朱塗りの位牌などが確認され、この状況から中城御殿における戦前～戦後のくらしを垣間見ることができます。

この成果をまとめた本報告が、本県における琉球王府時代末期の歴史・文化を理解する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について関心を持っていただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、ご指導・ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成24(2012)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 大城 慧







巻頭図版1 調査区遠景（東から）



巻頭図版2 トレンチ3 階段遺構（東から）



巻頭図版3 トレンチ2 石牆根石、暗渠ほか



巻頭図版4 トレンチ2 溝・石畳ほか



巻頭図版5 トレンチ4 旧石畳・階段跡、開渠3



巻頭図版6 トレンチ4 方形石組み4、溝6・7ほか



巻頭図版7 トレンチ1 遺物溜まり1出土遺物



巻頭図版8 トレンチ3 遺物溜まり2出土遺物



巻頭図版9 トレンチ2 遺構上出土遺物



巻頭図版10 トレンチ2 暗渠内出土遺物



巻頭図版11 トレンチ4 遺構内出土遺物



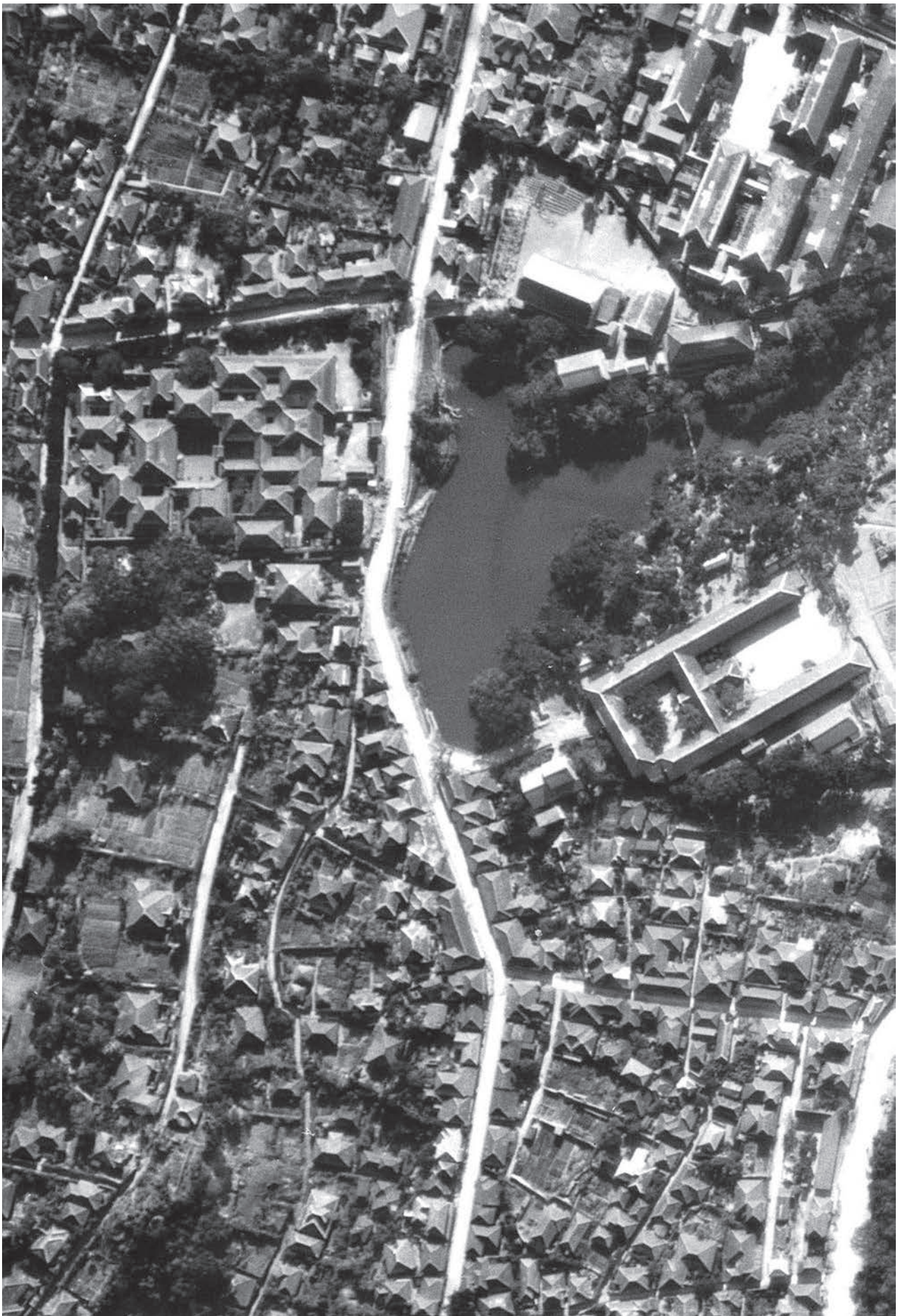
巻頭図版12 トレンチ2 第三層出土遺物



巻頭図版13 トレンチ4 第III・IV層出土遺物



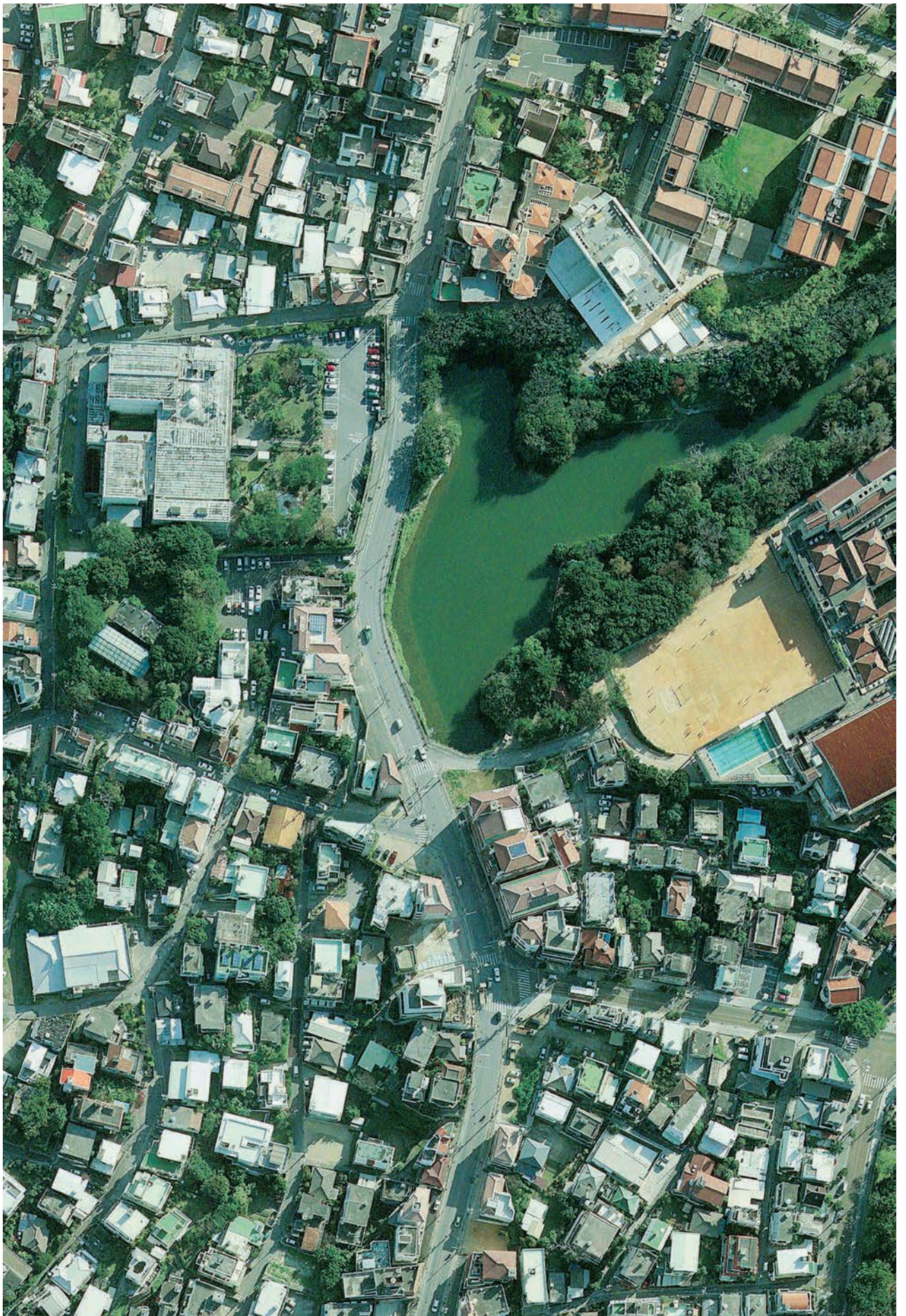
巻頭図版14 その他の遺物



(沖縄県教育庁文化財課史料編集班所蔵)

巻頭図版15 米軍撮影航空写真（1944年撮影）





卷頭図版16 航空写真（1993年撮影）



(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)

巻頭図版17 玄関（御番所）

公衆送信権により未表示

巻頭図版18 庭園

(坂本万七撮影 日本民藝館所蔵)

## 例 言

1. 本報告書は、県営首里城公園の整備に伴い、平成 22 (2010) 年度に実施した中城御殿跡の埋蔵文化財発掘調査成果を、平成 23 (2011) 年度に資料整理作業を行い、まとめたものである。
2. 発掘調査、資料整理作業ともに、沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課より予算の分任を受けての実施である。
3. 資料整理作業にあたり、調査体制の項で記した多くの方々に資料の同定・整理指導をいただいた。記して謝意を表したい。
4. 本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。
5. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1 / 25,000 地形図を使用した。
6. 本報告書に掲載した航空写真は、国土地理院の 93OKINAWA49-12 と、沖縄県教育庁文化財課史料編集班が所蔵する、1944 年に米軍により撮影された CV20-103-63 を用いた。
7. 本書に掲載した中城御殿屋根伏図や、板図撮影写真(現資料：海洋博記念公園管理財団所蔵)を起こした翻刻図は、中城御殿跡地整備検討委員会資料〔沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課提供〕を用いた。
8. 本書に掲載した古写真は、鎌倉芳太郎資料を所蔵する沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館より、坂本万七撮影資料を財団法人日本民藝館の許可を得て掲載した。また、井伊文子所蔵資料に関しては、『旧中城御殿関係資料集』(沖縄県立博物館 1992) より沖縄県立博物館・美術館の協力を得て転載した。これらの写真及び、その他所有者不明の写真については、出典か所蔵先・所有者を明記し、文献は巻末にまとめた。
9. 本書に掲載した調査時の写真撮影は仲座久宜が行い、出土遺物の写真撮影は矢舟章浩、伊佐えりな、金属製品の X 線撮影は知念隆博が行った。
10. 本書に掲載した遺構図は、仲座久宜の指示のもと、宮城明恵、具志堅清大のほか、平成 22 年度発掘作業員により作成し、主要な平面図は琉球サーベイ株式会社に委託して作成した。
11. 本報告書の編集は、調査体制の項で記した多くの方々の協力のもと仲座久宜が行い、各章の執筆は次のとおり行った。

仲座久宜	第 1・2 章、第 3 章 第 5 節 4～10・14・16・17・20・22、第 5 章
具志堅清大	第 3 章 第 5 節 1～3・12・13・15・18・21
宮里知恵	第 3 章 第 5 節 11
宮城明恵	第 3 章 第 5 節 19
伊藝由希	第 3 章 第 5 節 23
菅原広史	第 3 章 第 5 節 24
株式会社文化財サービス	第 4 章
12. 自然科学分析及び位牌の保存処理は、株式会社文化財サービスに委託した。
13. 各章で参考・引用した文献の一覧は、巻末にまとめて掲載した。
14. 発掘調査で得られた出土品、図面、写真等の記録は、沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。



# 目 次

序

巻頭図版

例 言

## 第1章 調査の経緯

- 第1節 調査に至る経緯 ..... 1
- 第2節 調査体制 ..... 1

## 第2章 位置と環境

- 第1節 地理的環境 ..... 3
- 第2節 歴史的環境 ..... 3
- 第3節 間取りと名称 ..... 8

## 第3章 調査の方法と成果

- 第1節 調査区の設定 ..... 21
- 第2節 調査経過 ..... 23
- 第3節 資料整理作業の経過 ..... 23
- 第4節 層序と遺構・主な遺物
  - 1 層序 ..... 26
  - 2 遺構と主な遺物 ..... 33
- 第5節 出土遺物
  - 1 中国産青磁 ..... 105
  - 2 中国産白磁 ..... 114
  - 3 中国産青花 ..... 120
  - 4 中国産色絵 ..... 136
  - 5 中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器 ..... 142
  - 6 その他の輸入陶磁器 ..... 146
  - 7 本土産陶磁器 ..... 154
  - 8 沖縄産施釉陶器 ..... 184
  - 9 初期沖縄産無釉陶器 ..... 204
  - 10 沖縄産無釉陶器 ..... 212
  - 11 陶質土器 ..... 226
  - 12 土器・硬質土器・瓦質土器  
・土製品・埴埴 ..... 232
  - 13 円盤状製品・碁石 ..... 236
  - 14 金属製品 ..... 242
  - 15 煙管 ..... 250
  - 16 骨・貝製品 ..... 252
  - 17 ガラス玉・ガラス製品 ..... 254
  - 18 石製品・石器・石造製品 ..... 259
  - 19 瓦・塼 ..... 266
  - 20 漆製品 ..... 280
  - 21 銭貨 ..... 285
  - 22 その他の遺物 ..... 288
  - 23 貝類遺体 ..... 291
  - 24 脊椎動物遺体 ..... 295
  - 出土遺物集計表 ..... 319

## 第4章 自然科学分析

- 第1節 方形石組み遺構内の土壌分析 ..... 349
- 第2節 出土炭化材の樹種 ..... 352
- 第3節 位牌の分析 ..... 353

## 第5章 総 括 ..... 358

引用・参考文献 ..... 374

報告書抄録 ..... 379

## 挿図目次

第 1 図	沖縄本島の位置図	4	第 39 図	トレンチ4 遺構5 (石列4・旧石畳3)	103
第 2 図	中城御殿跡の位置及び周辺の遺跡	5	第 40 図	トレンチ4 遺構直上・遺構内(Ⅱb層)出土遺物	104
第 3 図	中城御殿屋根伏図	9	第 41 図	トレンチ4 (Ⅲ・Ⅳ層) 出土遺物	104
第 4 図	中城御殿間取り復元図	9	第 42 図	中国産青磁 1	108
第 5 図	中城御殿御普請板図翻刻図	10	第 43 図	中国産青磁 2	110
第 6 図	トレンチ設定図	21	第 44 図	中国産青磁 3	112
第 7 図	層序1	28	第 45 図	中国産白磁 1	116
第 8 図	層序2	29	第 46 図	中国産白磁 2	118
第 9 図	遺構全体平面図	31	第 47 図	中国産青花 1	124
第 10 図	トレンチ1 遺構1 (石積み1・2)	34	第 48 図	中国産青花 2	126
第 11 図	トレンチ1 遺構2 (石積み1・2)	35	第 49 図	中国産青花 3	128
第 12 図	トレンチ1 遺構3 (方形石組み1)	38	第 50 図	中国産青花 4	130
第 13 図	トレンチ1 遺構4 (方形石組み2・石列1)	39	第 51 図	中国産青花 5	132
第 14 図	トレンチ1 遺物溜まり1出土遺物	43	第 52 図	中国産青花 6	134
第 15 図	トレンチ2 遺構1 (石牆根石、暗渠ほか)	45	第 53 図	中国産色絵 1	138
第 16 図	トレンチ2 遺構2 (溝、石畳、埋甕ほか)	46	第 54 図	中国産色絵 2	140
第 17 図	トレンチ2 遺構3 (石畳立・断面図)	53	第 55 図	中国・タイ産褐釉陶器	144
第 18 図	トレンチ2 遺構4 (石畳立・断面図)	54	第 56 図	その他の輸入陶磁器 1	148
第 19 図	トレンチ2 遺構5 (方形石組み3トイレ遺構)	57	第 57 図	その他の輸入陶磁器 2	150
第 20 図	トレンチ2 遺構6 (方形石組み3トイレ遺構)	59	第 58 図	その他の輸入陶磁器 3	152
第 21 図	トレンチ2 遺構7 (埋甕1ほか)	62	第 59 図	本土産陶磁器 1 (染付1)	162
第 22 図	トレンチ2 遺構直上・遺構内(Ⅱb層) 出土遺物	65	第 60 図	本土産陶磁器 2 (染付2)	164
第 23 図	トレンチ2 (Ⅲ層) 出土遺物	65	第 61 図	本土産陶磁器 3 (色絵)	166
第 24 図	トレンチ3 遺構1 (階段遺構)	68	第 62 図	本土産陶磁器 4 (青磁・白磁・施釉陶器)	168
第 25 図	トレンチ3 遺構2 (門・階段踊り場)	70	第 63 図	本土産陶磁器 5 (施釉陶器)	170
第 26 図	トレンチ3 遺構3 (階段踊り場・土坑)	75	第 64 図	本土産陶磁器 6 (褐釉陶器 1)	172
第 27 図	トレンチ3 遺構4 (テラス周辺石積み)	76	第 65 図	本土産陶磁器 7 (褐釉陶器 2)	174
第 28 図	トレンチ3 遺構5 (周辺石積み・階段遺構)	77	第 66 図	本土産陶磁器 8 (近代陶磁器 1)	176
第 29 図	階段部位名称・計測位置	80	第 67 図	本土産陶磁器 9 (近代陶磁器 2)	178
第 30 図	トレンチ3 遺構6 (暗渠・開渠・階段遺構)	81	第 68 図	本土産陶磁器 12 (近代陶磁器5)	182
第 31 図	トレンチ3 遺構7 (階段遺構)	82	第 69 図	沖縄産施釉陶器 1	188
第 32 図	トレンチ3 遺構8 (階段遺構)	83	第 70 図	沖縄産施釉陶器 2	190
第 33 図	トレンチ3 遺構9 (石積み1)	85	第 71 図	沖縄産施釉陶器 3	192
第 34 図	トレンチ3 遺物溜まり 2 出土遺物	87	第 72 図	沖縄産施釉陶器 4	194
第 35 図	トレンチ4 遺構1 (石列3、旧階段・石積み、 石積み2、開渠3)	89	第 73 図	沖縄産施釉陶器 5	196
第 36 図	トレンチ4 遺構2 (開渠3・溝)	91	第 74 図	沖縄産施釉陶器 6	198
第 37 図	トレンチ4 遺構3 (溝6・7、方形石組み4)	97	第 75 図	沖縄産施釉陶器 7	200
第 38 図	トレンチ4 遺構4 (方形石組み4)	101	第 76 図	沖縄産施釉陶器 8	202
			第 77 図	初期沖縄産無釉陶器 1	208
			第 78 図	初期沖縄産無釉陶器 2	210

第 79 図 沖縄産無釉陶器 1	216	第 100 図 石製品・石器・石造製品 3	264
第 80 図 沖縄産無釉陶器 2	218	第 101 図 瓦 1	270
第 81 図 沖縄産無釉陶器 3	220	第 102 図 瓦 2	272
第 82 図 沖縄産無釉陶器 4	222	第 103 図 瓦 3	274
第 83 図 沖縄産無釉陶器 5	224	第 104 図 瓦 4	276
第 84 図 陶質土器 1	228	第 105 図 埴	278
第 85 図 陶質土器 2	230	第 106 図 位牌 1	282
第 86 図 土器・硬質土器・瓦質土器・土製品・埴塙	234	第 107 図 銭貨	286
第 87 図 円盤状製品サイズ別出土状況	236	第 108 図 その他の遺物 1	289
第 88 図 円盤状製品 1	238	第 109 図 出土地区別検出状況	291
第 89 図 円盤状製品 2	240	第 110 図 種別検出状況	291
第 90 図 錠前・簪の部位名称	242	第 111 図 各層における種別検出率	291
第 91 図 金属製品 1	244	第 112 図 生息場所組成表	291
第 92 図 金属製品 2	246	第 113 図 脊椎動物遺体の層別同定標本数 (NISP)	300
第 93 図 金属製品 3	248	第 114 図 方形石組み 4 及び遺構外の脊椎動物遺体組成	300
第 94 図 煙管の部位名称	250	第 115 図 魚類組成図	301
第 95 図 煙管	251	第 116 図 哺乳類組成図	301
第 96 図 骨・貝製品	253	第 117 図 Py-GC/MS 分析結果 (左:赤漆、右:茶漆)	354
第 97 図 ガラス玉・ガラス製品	257	第 118 図 現生および出土漆の 87Sr/86Sr	355
第 98 図 石製品・石器・石造製品 1	261	第 119 図 遺構平面図と屋根伏図の重ね図	359
第 99 図 石製品・石器・石造製品 2	262		

## 図版目次

図版 1 尚家邸の跡 (首里市役所と首里バス)	6	図版 21 三御師 (饗宴用) 錫製酒瓶御玉貫と朱塗沈金台盆	17
図版 2 新館開館式直前の風景	6	図版 22 瓦塀	18
図版 3 御拝所	8	図版 23 尚家の井戸	18
図版 4 米軍撮影中城御殿航空写真	8	図版 24 新御殿の正面	19
図版 5 正門・大御門	11	図版 25 新御殿の廊下	19
図版 6 大広間東面と庭園	11	図版 26 新御殿の庭の門 (正面)	20
図版 7 新御殿の裏の井戸	12	図版 27 新御殿の庭	20
図版 8 中門	12	図版 28 新御殿の内部	20
図版 9 玄関貝窓	13	図版 29 トレンチ設定状況	22
図版 10 尚侯爵邸大広間	13	図版 30 作業経過画像①	24
図版 11 黒塗青貝中央卓	13	図版 31 作業経過画像②	25
図版 12 外廊東南隅望楼	14	図版 32 層序画像	30
図版 13 石灯笼	14	図版 33 トレンチ 1 遺構①石積み 1・2	36
図版 14 御寝廟前の中庭	14	図版 34 トレンチ 1 遺構②方形石組み 1・2、石列	40
図版 15 副門・御中御門	15	図版 35 トレンチ 1 遺構③石積み 1・2 及び方形石組み 1・2 遺物検出状況	41
図版 16 脇門・御門小	15	図版 36 トレンチ 1 遺構④遺物溜まり 1 検出状況	42
図版 17 御寝廟	16	図版 37 トレンチ 2 遺構① (石積み根石・開渠 1・暗渠・石畳)・暗渠内遺物関係画像①	48
図版 18 御寝廟の内部 (前の廊下)	16	図版 38 トレンチ 2 暗渠内遺物関係画像②	49
図版 19 御二階御殿	17		
図版 20 三御師 (美御前御揃) 御酒用品一具	17		

図版 39	トレンチ 2 遺構③	50	図版 77	その他の輸入陶磁器 3	153
図版 40	トレンチ 2 遺構④ (石畳・溝 2・3)	52	図版 78	本土産陶磁器 1 (染付 1)	163
図版 41	トレンチ 2 遺構⑤ (石畳ほか)	55	図版 79	本土産陶磁器 2 (染付 2)	165
図版 42	トレンチ 2 遺構⑥ (方形石組み 3 トイレ遺構)	57	図版 80	本土産陶磁器 3 (色絵)	167
図版 43	トレンチ 2 遺構⑦ (方形石組み 3 トイレ遺構ほか)	58	図版 81	本土産陶磁器 4 (青磁・白磁・施釉陶器)	169
図版 44	トレンチ 2 遺構⑧ (方形石組み 3 トイレ遺構)	60	図版 82	本土産陶磁器 5 (施釉陶器)	171
図版 45	トレンチ 2 遺構⑨ (埋甕 1・石列 2・大御庭面検出状況)	63	図版 83	本土産陶磁器 6 (褐釉陶器 1)	173
図版 46	トレンチ 2 遺構⑩ (埋甕 2)	64	図版 84	本土産陶磁器 7 (褐釉陶器 2)	175
図版 47	トレンチ 3 遺構①検出経過	67	図版 85	本土産陶磁器 8 (近代陶磁器 1)	177
図版 48	トレンチ 3 遺構② (門・階段跡)	69	図版 86	本土産陶磁器 9 (近代陶磁器 2)	179
図版 49	トレンチ 3 遺構③ (門跡)	71	図版 87	本土産陶磁器 1 0 (近代陶磁器 3)	180
図版 50	トレンチ 3 遺構④ (踊り場・テラス・階段西側石積み)	73	図版 88	本土産陶磁器 1 1 (近代陶磁器 4)	181
図版 51	トレンチ 3 遺構⑤ (階段西側石積み・暗渠・溝)	78	図版 89	本土産陶磁器 1 2 (近代陶磁器 5)	183
図版 52	トレンチ 3 遺構⑥ (暗渠・溝)	79	図版 90	沖縄産施釉陶器 1	189
図版 53	トレンチ 3 遺構⑦ (階段)	84	図版 91	沖縄産施釉陶器 2	191
図版 54	トレンチ 3 遺構⑧ (石積み 1)	86	図版 92	沖縄産施釉陶器 3	193
図版 55	トレンチ 4 遺構① (石列 3・旧階段・旧石畳)	92	図版 93	沖縄産施釉陶器 4	195
図版 56	トレンチ 4 遺構② (石積み 2・開渠 3)	94	図版 94	沖縄産施釉陶器 5	197
図版 57	トレンチ 4 遺構③ (溝 6・7)	96	図版 95	沖縄産施釉陶器 6	199
図版 58	トレンチ 4 遺構④ (溝 6・7)	99	図版 96	沖縄産施釉陶器 7	201
図版 59	トレンチ 4 遺構⑤ (方形石組み)	102	図版 97	沖縄産施釉陶器 8	203
図版 60	トレンチ 4 遺構⑥ (石列 4・旧石畳 3・旧造成層)	103	図版 98	初期沖縄産無釉陶器 1	209
図版 61	中国産青磁 1	109	図版 99	初期沖縄産無釉陶器 2	211
図版 62	中国産青磁 2	111	図版 100	沖縄産無釉陶器 1	217
図版 63	中国産青磁 3	113	図版 101	沖縄産無釉陶器 2	219
図版 64	中国産白磁 1	117	図版 102	沖縄産無釉陶器 3	221
図版 65	中国産白磁 2	119	図版 103	沖縄産無釉陶器 4	223
図版 66	中国産青花 1	125	図版 104	沖縄産無釉陶器 5	225
図版 67	中国産青花 2	127	図版 105	陶質土器 1	229
図版 68	中国産青花 3	129	図版 106	陶質土器 2	231
図版 69	中国産青花 4	131	図版 107	土器・硬質土器・瓦質土器・土製品・埴埴	235
図版 70	中国産青花 5	133	図版 108	円盤状製品 1	239
図版 71	中国産青花 6	135	図版 109	円盤状製品 2	241
図版 72	中国産色絵 1	139	図版 110	金属製品 1	245
図版 73	中国産色絵 2	141	図版 111	金属製品 2	247
図版 74	中国・タイ産褐釉陶器	145	図版 112	金属製品 3	249
図版 75	その他の輸入陶磁器 1	149	図版 113	煙管	251
図版 76	その他の輸入陶磁器 2	151	図版 114	骨・貝製品	253
			図版 115	板ガラス・鏡	255
			図版 116	ガラス玉・ガラス製品 1	257
			図版 117	ガラス製品 2	258
			図版 118	石製品・石器・石造製品 1	261
			図版 119	石製品・石器・石造製品 2	263
			図版 120	石製品・石器・石造製品 3	265
			図版 121	瓦 1	271



図版 122 瓦 2	273	図版 147 新御殿の庭の門 (正面)	361
図版 123 瓦 3	275	図版 148 裏木戸を開けた所にある水甕	361
図版 124 瓦 4	277	図版 149 トレンチ 2 埋甕 1・石列 2	362
図版 125 塼	279	図版 150 御寝廟前の庭	362
図版 126 漆製品	280	図版 151 新御殿の正面	362
図版 127 位牌 1	281	図版 152 トレンチ 1・4 女中居間・寄満付近 遺構平面	363
図版 128 位牌 2	283	図版 153 トレンチ 3 階段跡	364
図版 129 位牌 3	284	図版 154 尚家の井戸	364
図版 130 銭貨	287	図版 155 大岩の上部に残る階段状のはつり痕	365
図版 131 その他の遺物 1	289	図版 156 大岩とトレンチ 4 面端の遺構	365
図版 132 その他の遺物 2	290	図版 157 御拝所	365
図版 133 貝類遺体 1 巻貝	292	図版 158 敷地北側に現存する石牆	366
図版 134 貝類遺体 2 上:巻貝 下:二枚貝	293	図版 159 瓦塀	366
図版 135 貝類遺体 3 二枚貝	294	図版 160 トレンチ 3・1・4 (門・階段・石牆ほか)平面	367
図版 136 脊椎動物遺体 1	314	図版 161 新御殿の内部	368
図版 137 脊椎動物遺体 2	315	図版 162 新御殿の庭	368
図版 138 脊椎動物遺体 3	316	図版 163 円覚寺 開山芥院隠和尚大弾師位牌	369
図版 139 脊椎動物遺体 4	317	図版 164 三御飾 (饗宴用) 朱塗沈金御籠飯と台盆	369
図版 140 脊椎動物遺体 5	318	図版 165 朱塗箔絵鳳凰雲文櫃	369
図版 141 寄生虫卵・花粉化石	351	図版 166 御寝廟御殿	370
図版 142 炭化材	356	図版 167 玄関貝窓	372
図版 143 木材	356	図版 168 石灯籠	372
図版 144 布	357	図版 169 石灯籠	372
図版 145 漆塗膜	357		
図版 146 トレンチ 2 埋甕 2 ほか	361		

## 挿表目次

第 1 表 中城御殿跡関連年表	7	第 17 表 踊り場・土坑	72
第 2 表 主要層序一覧	27	第 18 表 テラス面	72
第 3 表 石積み 1・2	33	第 19 表 テラス周辺石積み	74
第 4 表 方形石組み 1・2	37	第 20 表 暗渠・開渠	79
第 5 表 石列 1	37	第 21 表 階段跡	80
第 6 表 石牆根石・暗渠石積み	44	第 22 表 石積み 1	85
第 7 表 暗渠上石畳	44	第 23 表 石列 3	88
第 8 表 暗渠・溝 1	47	第 24 表 旧石畳 1	88
第 9 表 石畳 1～6	51	第 25 表 旧階段	88
第 10 表 溝 2・溝 3	52	第 26 表 旧階段北・西側石積み	88
第 11 表 方形石組み 3 (トイレ遺構)	56	第 27 表 石積み 2	93
第 12 表 溝 4・5	56	第 28 表 開渠 3	93
第 13 表 埋甕 1・2	61	第 29 表 溝 6・7	95
第 14 表 石列 2	61	第 30 表 旧石畳 2	95
第 15 表 門跡	66	第 31 表 方形石組み 4	100
第 16 表 門跡内礎石	66	第 32 表 石列 4	100

第 33 表	旧石畳 3	100	第 66 表	方形石組 4 IIb層出土の鳥類・哺乳類骨 一覧表 1～4	309～312
第 34 表	中国産青磁観察一覧 1・2	106・107	第 67 表	哺乳類の顎骨の詳細および計測値	313
第 35 表	中国産白磁観察一覧	115	第 68 表	中国産青磁	320
第 36 表	中国産青花観察一覧 1～3	121～123	第 69 表	中国産白磁	320
第 37 表	中国産色絵観察一覧 1・2	136・137	第 70 表	中国産青花 1・2	321・322
第 38 表	中国・タイ産褐釉陶器観察一覧 1・2	142・143	第 71 表	中国産色絵	323
第 39 表	その他の輸入陶磁器観察一覧 1・2	146・147	第 72 表	中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器 1・2	323
第 40 表	本土産陶磁器観察一覧 1～7	155～161	第 73 表	その他の輸入陶磁器	324
第 41 表	沖縄産施釉陶器観察一覧 1～3	185～187	第 74 表	本土産陶磁器 1・2	325・326
第 42 表	初期沖縄産無釉陶器観察一覧 1～3	205～207	第 75 表	沖縄産施釉陶器 1～3	327～329
第 43 表	沖縄産無釉陶器観察一覧 1～3	213～215	第 76 表	初期沖縄産無釉陶器 1・2	330・331
第 44 表	陶質土器観察一覧	227	第 77 表	沖縄産無釉陶器 1・2	332・333
第 45 表	土器・硬質土器・瓦質土器観察一覧	233	第 78 表	陶質土器 1・2	334
第 46 表	土製品観察一覧	233	第 79 表	土器・瓦質土器・土製品・埴埴 1・2	335
第 47 表	埴埴観察一覧	233	第 80 表	円盤状製品・基石 1・2	335
第 48 表	円盤状製品観察一覧	237	第 81 表	金属製品	336
第 49 表	基石観察一覧	237	第 82 表	煙管	336
第 50 表	金属製品観察一覧 1・2	242・243	第 83 表	貝・骨製品	336
第 51 表	煙管観察一覧	250	第 84 表	ガラス玉・ガラス製品	336
第 52 表	骨・貝製品観察一覧	252	第 85 表	明朝系軒瓦 1・2	337
第 53 表	ガラス玉観察一覧	254	第 86 表	明朝系丸瓦遺存状況	337
第 54 表	ガラス製品観察一覧	254	第 87 表	明朝系平瓦遺存状況	337
第 55 表	板ガラス計測・集計表 (遺構内 IIb～III層)	255	第 88 表	明朝系平瓦における桶板留紐痕状況	337
第 56 表	ガラス瓶ほか観察一覧	256	第 89 表	近世大和瓦遺存状況	337
第 57 表	石製品・石器・石造製品観察一覧 1・2	260	第 90 表	埴	338
第 58 表	瓦・埴観察一覧 1～3	267～269	第 91 表	石器・石製品・石造製品	338
第 59 表	銭貨観察一覧	285	第 92 表	銭貨	338
第 60 表	その他の遺物観察一覧	288	第 93 表	二枚貝 1・4	339・340
第 61 表	貝類生息場所類型 (habitat) 表	291	第 94 表	巻貝 1～3	341～343
第 62 表	脊椎動物遺体出土分類群一覧	296	第 95 表	魚類・ヘビ類集計表	344
第 63 表	脊椎動物遺体 (魚骨) 出土一覧表 (方形石組 4 出土分を除く)	303	第 96 表	鳥類・哺乳類集計表 1～4	344～347
第 64 表	方形石組 4 IIb層出土の魚骨・ヘビ骨 一覧表 1・2	304・305	第 97 表	同定標本数 (NISP) 及び最小個体数 (MNI) 一覧	348
第 65 表	脊椎動物遺体 (鳥類・哺乳類) 出土一覧表 1～3	306～308	第 98 表	寄生虫卵分析結果	350
			第 99 表	炭化材樹種同定結果	351

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

かつての首里には、国宝を含む多くの文化財が残されていたが、先の沖縄戦によりその殆どが灰燼に帰すことになる。終戦後発足した琉球政府文化財保護委員会は、戦災により破壊された文化財の復元整備として、昭和31(1956)年に園比屋武御嶽を嚆矢として整備を開始する。その後、同委員会は昭和45(1970)年に首里城跡及び周辺の戦災文化財復元計画を策定し、同年、日本政府は第一次沖縄復帰対策要綱を閣議決定した。その中で戦災文化財の復元修理を推進する旨を明らかにし、翌年にはその調査費が計上されている。

そして沖縄は、昭和47(1972)年に本土復帰を果たす。その一環で同年策定された第一次沖縄振興計画に盛り込まれた要項に基づき、総理府外局沖縄開発庁の予算で、沖縄県教育庁文化課による首里城跡の復元整備を目的とした発掘調査が開始されることになる。その調査成果により、今日まで多くの建造物が復元を見ることができ、一般に公開されている。

今回の報告に係る中城御殿の遺構確認調査は、昭和63(1988)年度に沖縄県土木建築部が策定した、首里城公園基本設計に基づく公園整備を目的とした調査で、平成19(2007)年度から沖縄県土木建築部より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施している。

なお、敷地内にはこれまでの調査により、多くの遺構が良好な状態で埋蔵されていることが判明しつつある中、竣工当時の平面図(中城御殿御普請板図・翻刻図は第5図)を写した古写真が発見されたことも相まって、その重要性から遺構が保存され、将来的に復元整備を行うことが取り決められた(平成24年1月)。現在は中城御殿跡地整備検討委員会(平成22年10月より開催)により、復元整備計画から活用についての話し合いが行われている。

調査にあたっては、過年度に予算分任元である沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課と調整した上で予算要求を行い、調査開始後には文化財保護法第99条の規定により、沖縄県教育庁文化課へ着手報告を行った(平成22年10月5日付 埋文第432号)。

また、調査終了後には終了報告を行うとともに(平成23年3月28日付 埋文第774号)、発見された埋蔵文化財(出土品)の内訳・数量の報告を行った(平成23年3月8日付 埋文第735号)。

## 第2節 調査体制

本報告書に係る発掘調査業務は、平成22(2010)年度に実施し、調査報告書作成に係る資料整理業務は、平成23(2011)年度に実施した。その体制は次のとおりである(職名は当時のもの)。

### 平成22(2010)年度(発掘調査)

事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	金武正八郎
事業所管	沖縄県教育庁文化課	課長	大城 慧
		記念物班 班長	島袋 洋、指導主事 久高 健
事業総括・実施	沖縄県立埋蔵文化財センター	所長	守内泰三
		総務班 班長	嘉手苺勤、主査 恩河朝子、主査 玉寄 秀人、主事(臨任) 玉城飛鳥

調査班 班長 金城亀信、主任専門員 仲座久宜

発掘調査作業 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班 主任専門員 仲座久宜  
文化財調査嘱託員 宮城明恵、具志堅清大、大城歩、岸本竹美、長嶺優  
発掘調査作業員 赤嶺涼一、安里勝則、川上益子、喜瀬 彰、呉我フジ子、  
佐渡山正子、新屋雅美、砂辺光義、砂辺理恵、玉城初美、  
當眞 哲、中塚末子、中村フサ子、西島本成子、宮國恵子、  
吉田正志

平成 23 (2011) 年度(資料整理)

事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 大城 浩

事業所管 沖縄県教育庁文化課 課長 長堂嘉一郎、副参事 島袋 洋  
記念物班 班長 盛本 勲、主任専門員 長嶺 均

事業総括・実施 沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 大城 慧  
総務班 班長 荻堂治邦、主査 西島康二、  
主事(臨任) 玉城飛鳥、砂川めぐみ  
調査班 班長 金城亀信、主任専門員 仲座久宜、主任 羽方 誠

資料整理作業 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班 主任専門員 仲座久宜  
文化財調査嘱託員 宮城明恵、宮里知恵  
資料整理嘱託員 赤嶺雅子、池原直美、伊佐えりな、石嶺敏子、伊藤恵美利、  
金城政史、崎原美智子、瑞慶覧尚美、高良三千代、玉寄智恵子、  
矢舟章浩、吉村綾子  
資料整理作業員 宮良佐弥香、島袋久美子

整理協力者 沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班 主任 新垣力、知念隆博  
資料整理嘱託員 伊藝由希、上地由紀子、上原園子、上原美穂子、大村由美子、  
荻堂さやか、喜瀬リサ、久貝祐子、具志良子、國吉咲子、  
後田多昌代、城間千鶴子、高橋弘治、津多 恵、比嘉登美子、  
比嘉なおみ  
文化財調査嘱託員 具志堅清大、仲程勝哉

資料整理指導・助言・協力機関

上原 静(沖縄国際大学)  
大橋康二(佐賀県立九州陶磁文化館)  
神谷厚昭(金城町石畳研究所)  
久保智康(京都国立博物館)  
黒住耐二(千葉県立中央博物館)  
菅原広史(浦添市教育委員会)  
森 達也(愛知県陶磁資料館)  
向井 互(金沢大学国際文化資源学センター)  
矢島律子(町田市立博物館)  
堀内秀樹(東京大学埋蔵文化財研究室)

沖縄県立博物館・美術館  
沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課  
沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館  
公益財団法人 日本民藝館  
東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室  
明治大学理工学部応用化学有機合成化学研究室  
明治大学理工学部応用化学天然物化学研究室  
パリーノ・サーヴェイ株式会社  
株式会社文化財サービス  
琉球サーベイ株式会社

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした邸宅跡である。名称の由来は、王子が王世子(王位継承者)になると、領地として中城間切及び知行を下賜され、中城王子あるいは中城御殿と称されたことによる。当初その建物は、17世紀前半に王府の別邸である大美御殿の東面、現首里高等学校敷地内(首里真和志町)に創建され、東宮とも呼ばれた。その後、中城御殿は明治3(1870)年に現在の首里大中町に移転することが決まる。ここでは今回の調査対象となる移転後の環境について記すことにする。

中城御殿跡は、沖縄本島南部の那覇市首里、北緯26°13'15"、東経127°43'05"、標高約100mの台地上に位置し、地番是那覇市首里大中町1丁目1番1～3にあたる(第1図)。

この基盤を構成するのは、地質時代の第四紀更新世(180-160万年前～1万年前)に区分される琉球石灰岩で、敷地西側の上之御殿が存在した地区においては、拝所及び庭園でその露頭が確認できる。またその下位には、鮮新世(500万年前～160万年前)から中新世(2,300万年前～500万年前)に区分される島尻層群が堆積している。この表層を成す琉球石灰岩層は透水性が高く、そこに浸透した雨水は、不透水層である島尻層のクチャ(泥岩・砂岩)の面でとめられ、両者の境界から泉として湧き出すことになる。この湧水を利用した井泉・樋川は、現在も首里の各地に点在するほか、中城御殿の古写真においても確認でき、今日も豊富な湧水量を誇っている(図版7・23)。

中城御殿の南は、道路を隔てて龍潭に面し南東側に首里城を望むことができる。地形は首里城に至る南側が高い形状をなすが、敷地の大半はテラス状の比較的平坦な場所に位置しており、この北側に面する儀保町や末吉町の町並みを見渡すことはできない。しかし、上之御殿が建つ西側は石牆で区画され小高くなっており、西方に広がる那覇の街や港をはじめ、遠くは慶良間・粟国諸島の島影を望むことができる。

この立地に関し、中城御殿の南東側に近接する首里城をもとにみることにする。首里城は、北側に虎頭山及び真嘉比川を配し、東に弁ヶ嶽及びナゲーラ川、南に安里川を擁して立地している。1713年、蔡温はこの立地に関し「恭しく玉陵を觀るに、国都の高処に発祖し、最も好し」(球陽688号 球陽研究会編1974)と遺している。なお、この立地を風水地理学的観点から見ると、弁ヶ岳は発祖としてエネルギーの源泉である龍脈として捉えられている。その龍脈は虎頭山や西森、末吉の連続する山並みをとおり、西海岸へ抜けていく。そしてその先に浮かぶ慶良間諸島は錦屏という案山にあてられ、北谷・読谷の丘陵が白虎、小禄・豊見城の丘陵を青龍とする風水空間としている。つまり、龍脈から流れでる気を隅々まで巡らせることにより、国王の安泰を願ったのである(都築昌子2005)。このように首里城の立地は、軍事・政治・経済的な実利性のみならず、風水思想の上からも蔵風得水の地として優れた条件を備えているとされる。

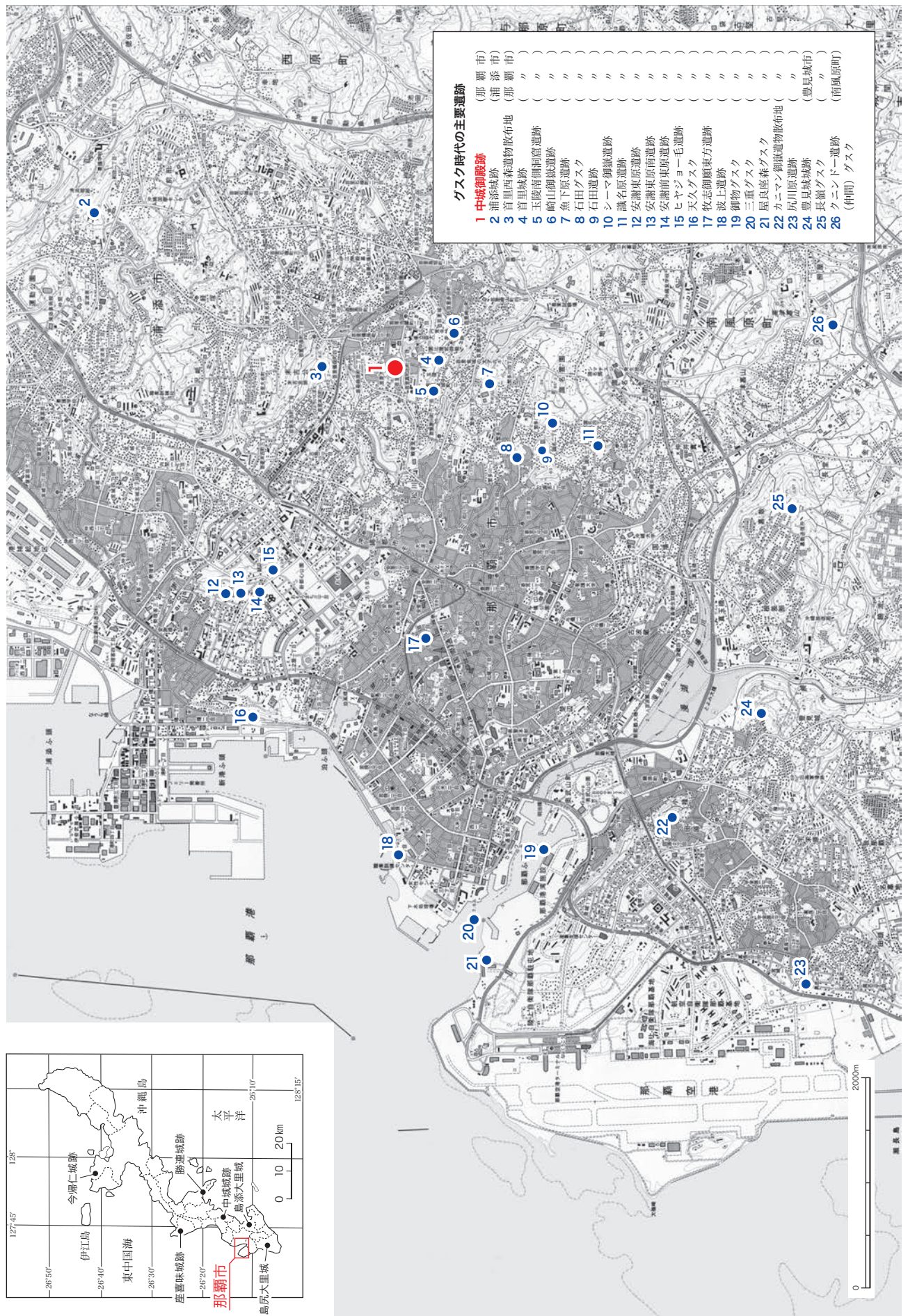
今報告の対象となる中城御殿の造営に際しても、1868年に久米村の地理師である与儀親雲上ら3人を中国福州に派遣して風水を学ばせ、建物の配置が行われたとされ(球陽2206号 球陽研究会編1974)、前記した首里城の例とも調和した思想により、選定立地から設計・施工までが計画的に行われたことが考えられる。

### 第2節 歴史的環境

中城御殿は、国王の世子殿として、当初は尚豊王代(在位1621～1640年)に綾門大道北側、現在の首里高等学校敷地内に創建された(第4図・第1表)。その後、明治1(1868)年に尚泰王の王子である尚典の立太子に伴い、龍潭北側に位置する大村按司、摩文仁按司、川平親方、小禄親雲上らの宅地を合わせた敷地に移転することが取り決められた。工事は明治3(1870)年に着工、明治7(1874)年3月に竣工し、尚典は明治8(1875)年に移転した。世子はこの御殿において生活を送るとともに執務を行った。



第1図 沖縄本島の位置図



第2図 中城御殿跡の位置及び周辺の遺跡

そして、明治12(1879)年の廃藩置県により琉球王国は終焉を迎えることになる。首里城は明け渡され、熊本鎮台沖繩分遣隊により占拠される。これにより、それまで正殿や大美御殿等で暮らしていた国王をはじめとする王族は退去を余儀なくされ、一時的に中城御殿に移り住むことになるが、明治18(1885)年には華族令により東京に移転することになる。

その後、第二次世界大戦が始まると御殿の一部は陸軍少佐の宿舎として使用される。その際に中城御殿所蔵の宝物を分散させ、敷地内の岩陰に隠すなどの避難措置を執った。しかし、昭和20(1945)年4月、米軍の砲撃により建物は破壊されることになる。避難した宝物類は残されていなかったため、建物とともに焼失したか、米軍により戦利品として持ち去られたことが考えられる(その一部は1947年にフィリピンから、1953年にアメリカから返還)。その直後は、陸軍の機関銃陣地として使用されることで尚家職員は退去させられ、終戦を迎えることになる(沖縄県立博物館1996)。それまでの間、御殿は尚家の屋敷(尚侯爵邸)として、王府の伝統的なしきたりが保たれた空間であったとされる。

終戦直後の跡地には、一時引揚者のバラックが建つが、その後、首里市役所、首里バス会社として使用され(図版1)、のちに龍潭東側にあった博物館を移転するため、琉球政府により買い上げられる。そして昭和40(1965)年から翌年にかけて、米国民政府の援助により琉球政府立博物館新館が建設され(図版2)、昭和47(1972)年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称される。

この本土復帰から20年を記念し、首里城正殿を含む周辺一帯が首里城公園として開園するにあたり、その一環として中城御殿の石牆を復元する計画が浮上した。復元に先立ち平成3(1991)年度、平成4(1992)年度、平成6(1994)年度の3次にわたり石牆部分の発掘調査が実施され、石積み根石や石組み遺構、ピット等の遺構を検出し、平成4(1992)年に正面及び東側石牆の復元整備が行われた(沖縄県立博物館1993、1994、1995)。その後、博物館は開館から40年が過ぎ、施設の老朽化及び収蔵機能の低下に伴い新館への移転が計画され、平成18(2006)年3月に休館、平成19(2007)年3月に閉館・移転し、同年11月3日、那覇市おもろまちに沖縄県立博物館・美術館が開館する。そしてこの旧館建物は、平成21(2009)年の解体工事により撤去された。博物館移転後は、平成19(2007)年度より跡地利用計画策定に先立ち、埋蔵文化財の基礎資料を得るための遺構確認調査が行われている。

なお、中城御殿跡ではこれまでの調査により、多くの遺構がその間取りや構造を示す良好な状態で埋蔵されていることが判明している。このような中で、1874(明治7)年竣工当時の詳細な平面図(中城御殿御普請板図・翻刻図は第5図)を写した古写真が発見された。これらの重要な発見から、遺構は保存されることになり、将来的に復元整備を行うことが取り決められた(平成24年1月)。現在は中城御殿跡地整備検討委員会(平成22年10月より開催)により、復元整備計画から利活用についての話し合いが行われているところである。今後は、これまでの遺構確認調査から復元整備計画に合わせた発掘調査を継続して行い、復元整備の基礎資料を作成していく予定にしている。



図版1 尚家邸の跡(首里市役所と首里バス)



図版2 新館開館式直前の風景(1966年11月3日)



第1表 中城御殿跡関連年表

西 暦	元 号	事 項
1621～40	尚豊王代	尚豊王代 中城御殿が現県立首里高等学校の地に建設される
1864年	尚泰 17 / 元治1	尚典（のちの中城王子）が生まれる
1866年	尚泰 19 / 慶応2	尚泰王が冊封をうける
1868年	尚泰 21 / 明治1	尚典が尚泰王の世子となる
		久米村の与儀親雲上ら3人を福州に派遣 風水を学ばせ中城御殿の風水見を行う
1870年	尚泰 23 / 明治3年	中城御殿が龍潭北側に新しく造営されることが決まる
1872年	尚泰 25 / 明治5年	琉球藩設置
1874年	尚泰 27 / 明治7年	中城御殿竣工
1875年	尚泰 28 / 明治8年	中城王子が新築された屋敷に移る
1879年	尚泰 32 / 明治12年	3月 廃藩置県 首里城を明け渡し尚泰王以下中城御殿に移る
		5月 尚泰・尚典ともに上京し東京麹町に屋敷を賜り華族となる
1880年頃	明治13年頃	尚泰子女の安室御殿が離縁のため中城御殿へ移り住み最後の間得大君として御殿の神事に奉仕する
1884年	明治17年	中城御殿ほか21ヶ所の敷地・建物など尚泰の私有財産と確定される
1901年	明治34年	尚泰逝去し玉陵に葬られる
1906年	明治39年	尚典帰郷し中城御殿で暮らす
1917年	大正6年	5月20日 尚昌の長女 文子が東京で生誕する
1920年	大正9年	尚典 57歳で没し玉陵に葬られる
		尚泰子息の尚時が妻静子とともに上之御殿に移り住む
		このころ文子が中城御殿を訪れる
1921年	大正10年	東宮殿下（のちの昭和天皇）来訪にあたり事前に大広間が洋間に改装される
		3月4日 東宮殿下が来県し中城御殿を訪問する
1922年	大正11年	尚泰夫人の松川御殿が中城御殿で逝去する
1923年	大正12年	鎌倉芳太郎が中城御殿にあった多くの美術品を調査する
1932年	昭和7年	尚典子女の今帰仁御殿が安室御殿（間得大君）を継ぐため北之御殿に移る
1933年	昭和8年	文子が来訪し新御殿に滞在する
1934年	昭和9年	田邊泰（工学博士・古建築）が来訪する
		尚典夫人の野嵩御殿が逝去する
1936年	昭和11年	尚昌義姉の津軽照子（1887-1972・歌人）が来訪する
1937年	昭和12年	4月 文子が井伊家に嫁ぐ
1939年	昭和14年	日本民藝協会の柳宗悦・坂元万七らが来訪する
1944年	昭和19年	第32軍司令部参謀の長野英夫少佐が御殿の一室を宿泊所として使用する
		10月10日 米軍による空襲により旧那覇市の9割が焼失する（十・十空襲）
1945年	昭和20年	3月下旬 中城御殿の宝物を3つの大金庫へ移す
		4月6日頃 中城御殿が米軍の砲撃をあびて炎上する
		4月8日頃 火災をのがれた御後絵（肖像画）を御嶽岩のうしろに移す
		4月10日頃 日本軍が上之御殿や防空壕などを機関銃陣地にする
		戦後 一時引き揚げ者のバラックが建つ
1950年	昭和25年	1月 首里市役所が中城御殿跡地に移転する
		7月 首里市営バスが営業所を同敷地内に設置される（1966年まで）
1954年	昭和29年	首里市が那覇市に合併され首里市役所が首里支所となる
1959年	昭和34年	井伊文子が中城御殿跡を訪れる
1965年	昭和40年	琉球政府が敷地を購入する
		6月 米国民政府の援助により鉄筋コンクリート建の博物館新館建設を起工
1966年	昭和41年	首里支所が当蔵へ移転 首里バス（1951年に民営化）が当蔵へ移転する
		10月6日 博物館新館落成
		11月3日 龍潭池畔にあった琉球政府立博物館が移転・開館する
1972年	昭和47年	5月15日 日本復帰にともない「沖縄県立博物館」と改称する
1991年	平成3年	沖縄県立博物館による石牆部分の第1次発掘調査が実施される
1992年	平成4年	沖縄県立博物館による石牆部分の第2次発掘調査が実施される
1994年	平成6年	沖縄県立博物館による石牆部分の第3次発掘調査が実施される
2004年	平成16年	11月22日 井伊文子が彦根で逝去し遺骨の一部が伊是名玉陵に葬られる
2006年	平成18年	3月 沖縄県立博物館が那覇市おもろまちの新館へ移転するため休館する
2007年	平成19年	沖縄県立埋蔵文化財センターによる遺構確認調査が開始される
2010年	平成22年	12月 第1回中城御殿跡地整備検討委員会が開催される

### 第3節 間取りと名称

中城御殿の敷地は3,408坪(11,246㎡)で、そのエリアは東西に大きく二分することができる。東側は主要な建物が群立する約2,400坪の区域で、30棟前後の建造物が密接して軒を連ねていた(巻頭図版15・図版4)。これに対し、西側は約1,000坪の区域で、巨木が鬱蒼と茂る中に上之御殿が1棟建ち、周辺は自然の岩盤を利用した庭園や、大岩を取り囲むように石造の螺旋階段を敷設した拝所が存在した(図版3)。

中城御殿が機能していた当時、その内部は表の一部を除いて一般に公開されておらず、その様子を記した記録も希少であることから全容についてはわかっていないが、ここでは、その様子を見聞きしてまとめた文献や、現存する古写真から判明している範囲で、中城御殿の間取りやその様子について解説してみたい。なお、間取りの復元については、真栄平房敬氏からの聞き取りにより構成した概念図や(沖縄県立博物館1992)、海洋博記念公園管理財団による聞き取り調査を基に、米軍撮影航空写真の屋根伏せから間取りの復元を行った情報(財団法人 海洋博記念公園管理財団2010)のほか、近年新たに発見された中城御殿御普請板図の情報(中城御殿跡地整備検討委員会資料〈沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課提供〉2011)を用いた(第3～5図)。

かつて、中城御殿敷地の四方は琉球石灰岩の高く厚い石牆で囲われ、その石牆の一部は現在も敷地の南及び西側、北側の一部に残存している。



図版3 御拝所

(井伊文子)



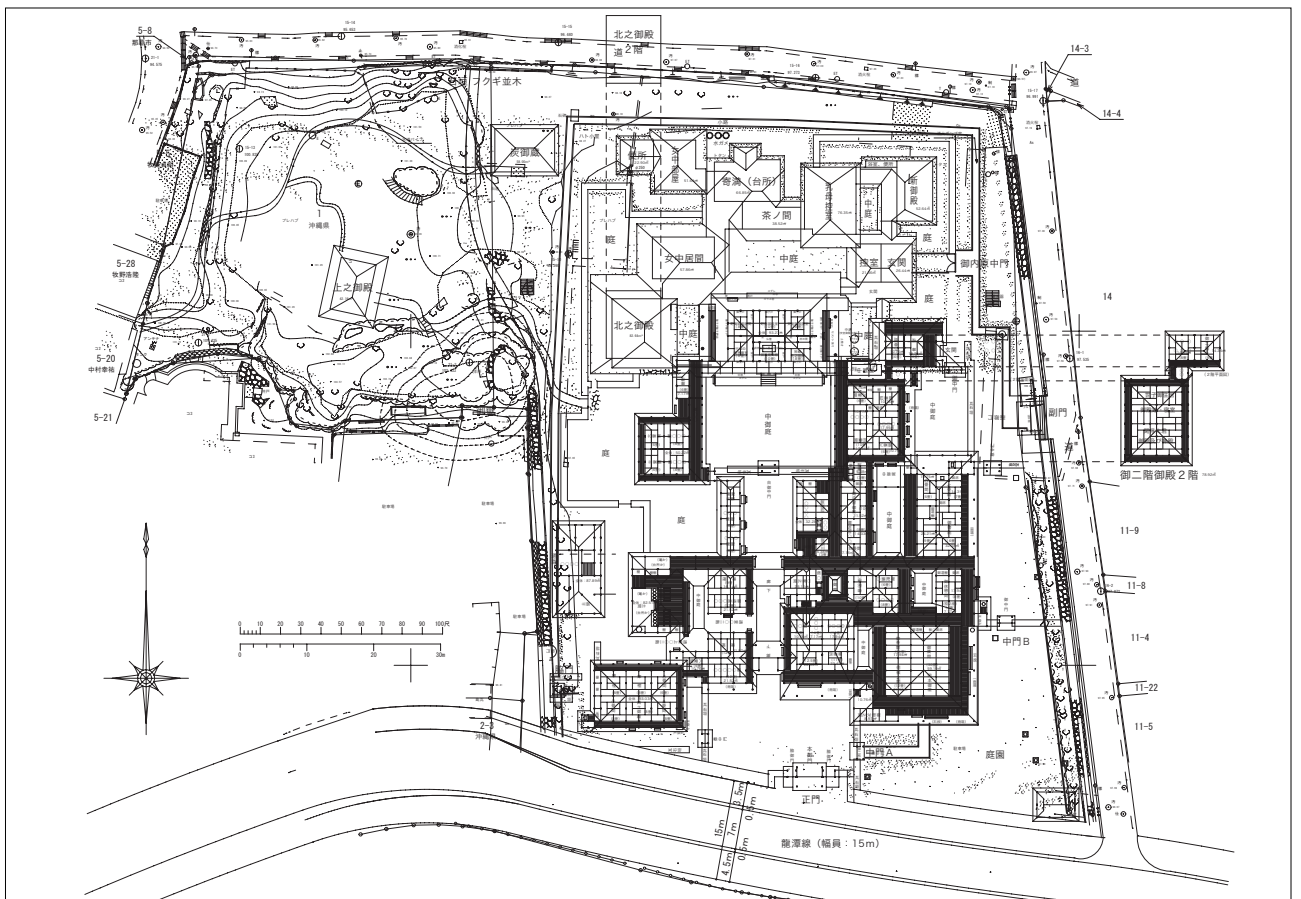
図版4 米軍撮影中城御殿航空写真

(沖縄県教育庁文化課史料編集班所蔵)



(沖縄県都市計画・モノレール課提供)

第3図 中城御殿屋根伏図(中城御殿跡地整備検討委員会資料)



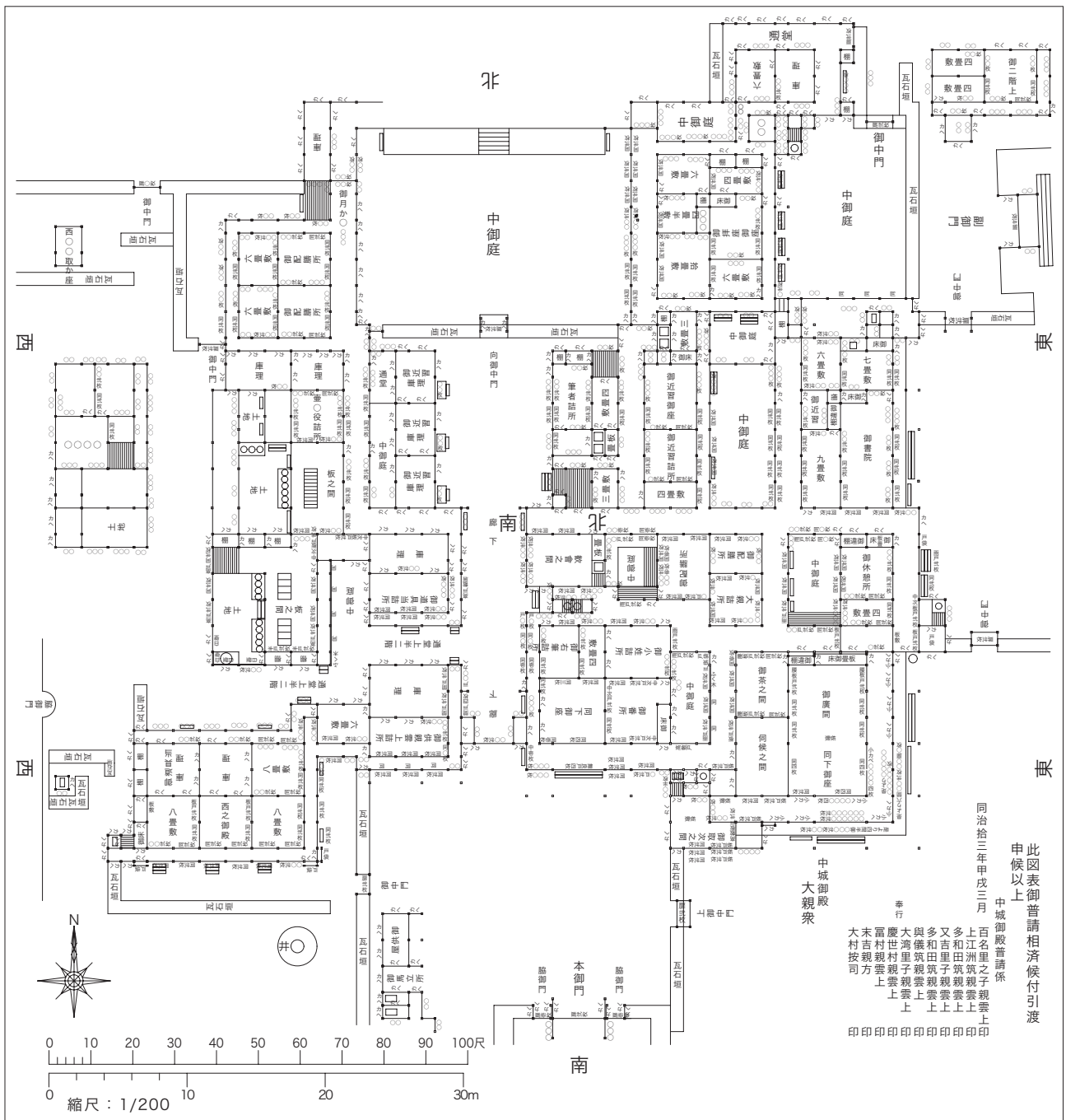
(沖縄県都市計画・モノレール課提供)

第4図 中城御殿間取り復元図(中城御殿跡地整備検討委員会資料)

第2章 位置と環境

この内、西側石牆及び門の周辺部では方形に加工した石灰岩が用いられるが、それ以外では扇形に加工した石灰岩を精緻に積み上げ、主要な角には隅頭石を設けることにより壮麗さを増している。この石牆には複数の門が設置されており、南側中央の正門(大御門、図版5)、東側の副門(御中御門、図版15)は赤瓦の切妻屋根を有する門、西側の脇門(御門小、図版16)は石造アーチの門に木製の扉が取り付けられていた。また、この石牆の内側には、前と御内原とを仕切るように、下半部が石積み、上半部が漆喰塗りで、頂部に瓦が葺かれた瓦塀が設置され、複数の板葺きの中門により出入りする構造になっている(図版8)。

さらに、この西側と北側石牆の内側に沿い、縁石で縁取られ舗装された浮道がL字状に敷設される(図版7・22)。この浮道は脇門から入ると、水質の良さから霊泉と謳われた井戸(図版7・23)がある左(北)方向へ直に延びており、続いて炭御蔵付近で右(東)に折れると、敷地最奥のフクギ並木を左(北)に見つつ、北東角へ抜けるルートを進んでいた。これらの主要な門には、常時門番が配置され、外部からの出入りは容易でなかったとされる。



第5図 中城御殿御普請板図翻刻図(中城御殿跡地整備検討委員会資料)

(沖縄県都市計画・モノレール課提供)



(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)

図版5 正門・大御門

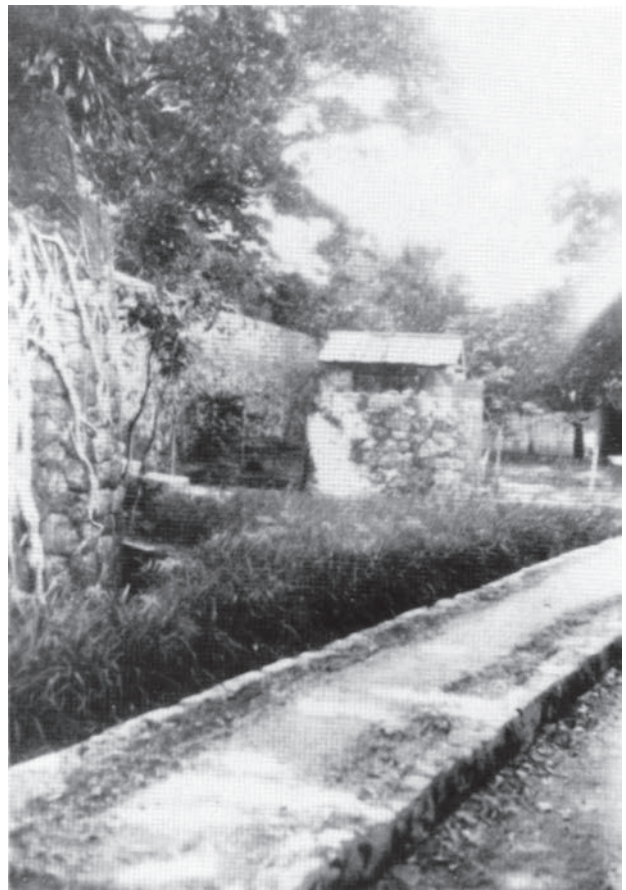


(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)

図版6 大広間東面と庭園

ここで、平成22年度調査中に中城御殿跡近隣の住人(男性・80代か)から御教示いただいた戦前の門にまつわる話を紹介したい。話者が幼少の頃、正門は常に開いた状態であったため、敷地内に植樹されていたリュウガンやヤマモモの実ほしさに走って門をくぐり、何度も御殿内部へ入ろうと試みた。しかし、その脇に常駐する門番により、すぐに捕らえられ追い出されたという。だが、時にはこの立ち入りに際し例外もあった。その当時、身体にふきでもの(ニーブター)が生ずると、正門から脇門に走り抜けることで治癒するという民間療法が信じられており、門番にこの事情を話すと快く通してもらえたという。その他聞き取りにおいても、御内原のエリアまで子どもの立ち入りが許されたというから(財団法人 海洋博記念公園管理財団2010)、そのしきたりは首里城の御内原より嚴重でなく、むしろおおらかな環境であったことが想像できる。

この建物が群がる東側は、首里城内と同様に表と奥の領域に分けられていた。表を指す前(メー)と呼ばれる空間は、世子や役人の執務が行われる男性の空間で、これに対し奥側一帯を指す御内原(ウーチバラ)は、世子及びその親族、そこに仕える女官らが生活する場であった。次にこの状況について、前の空間と御内原の空間とに分けて記す。



(井伊文字)

図版7 新御殿の裏の井戸



(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)

図版8 中門

### 前の空間

この中城御殿の中で、前(メー)とされる領域は、世子や前之御役人と呼ばれる職員をはじめとする男性が執務を行うとともに、公式行事等を執り行う空間であったとされ、明治6(1873)年の「琉球藩雜記」(琉球政府1965)によると、親方や親雲上等の役人46人のほか下代や門番が勤務していたとされる。ここを構成する建物群は表御殿と総称され、それぞれの建物間は渡り廊下により連結している上、いくつもの部屋で構成されていることから一見複雑な構造を連想させる。しかし、その間取りは機能的なものであったとされる。

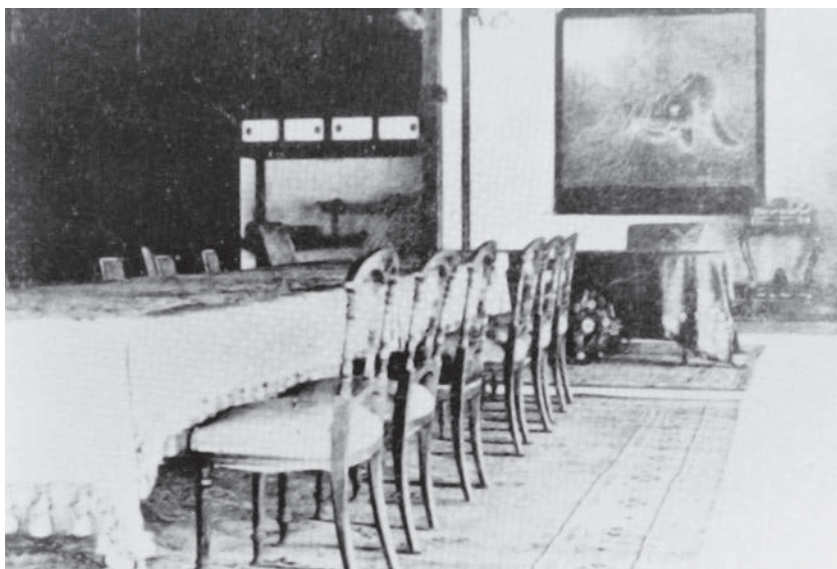
この間取りと機能について、現時点で判明している部屋の名称・機能を、正門からの順路を辿りつつ割り出してみる。まず、石牆南側の正門(大御門・図版5)から入ると、正面つきあたりに御番所と呼ばれる6畳ほどの玄関(巻頭図版17)があり、この裏に『おもろさうし』等の書物を取めたとされる書庫や着替之間が接している。

玄関から幅1間ほどの絨毯敷きの廊下を東へ進むと、右手に御着替之間とトイレが設置されている。このトイレの小窓には透光性のある薄貝が嵌め込まれ、明かり取りとしていた(図版9)。その右手には廊下を隔て、別棟として御伺候之間、大広間、御休憩之間等の部屋が存在する表書院(図版6)にあたる。この中で大広間の内部については古写真が残ることから、これを基に解説してみたい(上原永盛1935、図版10)。写真は、大広間の南東隅から北側を撮影したとみられる。床には2枚の絨毯が敷かれ、その上にテーブルクロスが掛けられた長テーブルと、座面にクッションが施された背もたれのある椅子(ウインザーチェア)が配置されている。またその奥側上部には、シャンデリアのような照明器具と思われる洋風の調度品が見える。さらにそのつきあたりの壁面には、上部に引き戸を持つ違い棚と床の間が設えられている。そこには掛軸や螺鈿細工が施された漆器の中央卓が見え、卓の下段には陶磁器が飾られている(図版11)。また、この部屋をとりまく廊下の中戸や壁面には、極彩色の花鳥画が描かれていたとされ、大広間の内外は様々な様式が混在した装飾がされていたことがわかる。なお、この大広間の内装については、大正10(1921)年に東宮殿下(後の昭和天皇)が御殿を訪問するに先立ち洋間に改装され、障子もガラス戸に取り換えられたという。



(田辺泰1972)

図版9 玄関貝窓



(上原永盛1935)

図版10 尚侯爵邸大広間



(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)

図版11 黒塗青貝中央卓

この大広間の東及び南側は廊下を隔てて窓及び濡れ縁に面しており、その窓からは庭園を望むことができる(巻頭図版18、図版6)。この造園に際しては、庭師を薩摩に派遣し技術を習得させて造ったとされ、そこには手入れが行き届いたリュウキュウマツやソテツをはじめとする樹木のほか、奇岩及び花卉文が陽刻された多層塔様の石灯籠が、芝を張った築山上に効果的に配置されている(図版13)。またその奥の隅には、首里城を遙拝する目的で造られたとされる物見の御殿(望楼)が見え(図版12)、そこへ上る階段は川に例えられていた。また、庭の低位置には白い枝サンゴを敷き詰めることで水辺を表現しており、築山や川とともに美しい山水式庭園を構成している。しかし、この様式も和漢折衷の琉球独特な様式とされる。



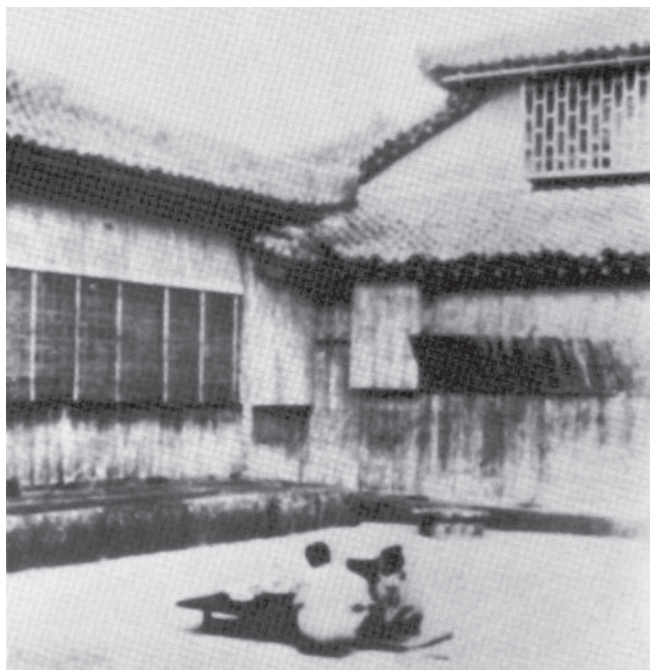
図版12 外廊東南隅望楼

(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)



図版13 石灯籠

(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)



図版14 御寝廟前の中庭

(井伊文子)





(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)

図版15 副門・御中御門



(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)

図版16 脇門・御門小

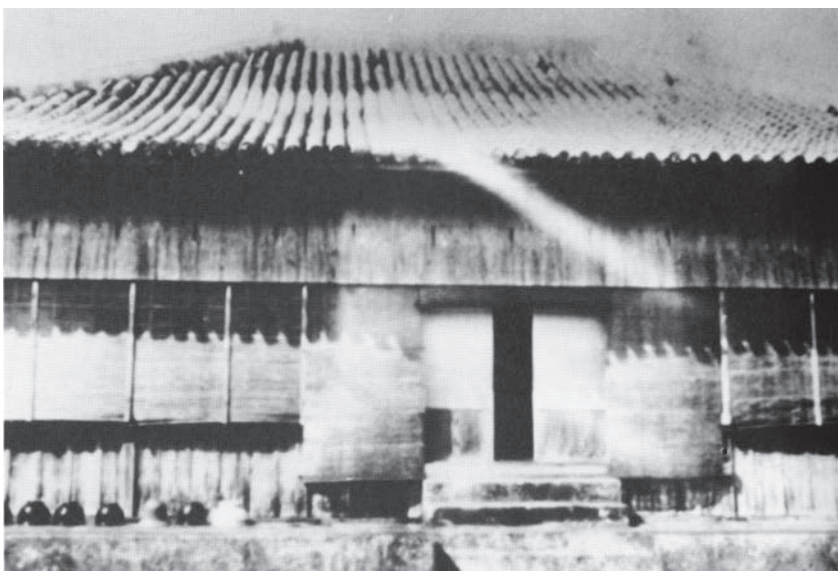
この大広間の裏には、御休憩之間があり、御座楽・路次楽に用いる楽器が常備されていたという。そこから廊下を隔て北側の区画西端には、そこで働く御用拜、下代、お掃除人、御水仕達らの控え室である御茶煮詰、下代詰があり、前之御座（職員室）や中庭、御書院、御吟味之間を経て御二階殿へとつながる（図版 19）。ここが前と御内原の境界にあたり、取次の鈴が設置されていた。ここは2階建てで、1階部分は世子や側近の執務室である御御仕御座や御近習座等の部屋が置かれ、御内原に属する2階部分は、当初、世子らの寝室であったが、増築され神殿として使用されたという。

その他、前のエリアには、玄関となる御番所の西に接するトールー御門をはさみ、離れに取納座、御蔵、酒御蔵、御道具蔵、高御蔵（材木蔵）が建ち、そこから距離をおいて北端に炭御蔵が配置されていたとされる。これらの建物の機能については、その名称から類推可能なものも含まれるが、現時点で情報に乏しく判然としないものが多い。

### 御内原の空間

中城御殿御内原一帯の建物は奥御殿と総称され、世子の親族や女官らが生活していた男子禁制の空間であった。御内原専用の出入口である東側石牆に設けられた副門（図版 15）をくぐると、周辺はさらに瓦塀に仕切られ目隠しにするとともに、表との区画を分けていた。戦前に撮影された航空写真によると、このエリアだけで10棟前後の建物が確認できるが（図版 4）、その中で名称が判明しているのは、御二階御殿、御寝廟殿、新御殿、北之御殿、寄満（台所）などの一部に限られていた。しかし、その後実施された沖縄県土木建設部都市モノレール課や、首里城公園管理センターなどの調査により、その大勢が判明している（第3・4図、沖縄都市計画・モノレール課2010、海洋博記念公園管理財団2010）。

この御内原は、大御庭を中心として、その東西及び北側に寝殿造りを思わせる「コ」の字型に建物が配置されており、建物は石階段を数段上るほどの基壇上に建てられていた。大御庭は一面に白い枝サンゴが敷かれる中、東西に3ヶ所ずつ防火用の大甕が埋められるのみで、他に庭園としての装飾は見あたらない（図版 14・24）。しかし、そこは朝夕に四方の建物が描く影が美しく、静寂で荘厳な影絵の庭であったとされる。この中で中心となる建造物は御寝廟殿で、中城御殿最大の建物であった（図版 17）。内部は長御道と呼ばれる畳敷きの廊下で囲われ、南北3部屋ずつの計6部屋で構成される（図版 18）。正面となる南側は、左から行事の準備に用いる三番御座、御寝廟、先之御殿の間取りがあり、御寝廟には国王五位の大位牌が祀られた祭壇が設えられていた。この祭壇の前には、壮麗な絹地の布や水引により飾られた、御唐裙（うとうけん）と呼ばれる四つ足の高い台が置かれ、その上には朱塗り高丸盆、金銀盃が置かれていた（図版 20）。また、その後背には御玉貫の瓶が一对置かれ（図版 21）、左右には灯明が一对、前面には金属製の金香炉が置かれ、昼間でもその火は消えることはなく、静寂な空間であったとされる。



(井伊文子)

図版17 御寝廟



(井伊文子)

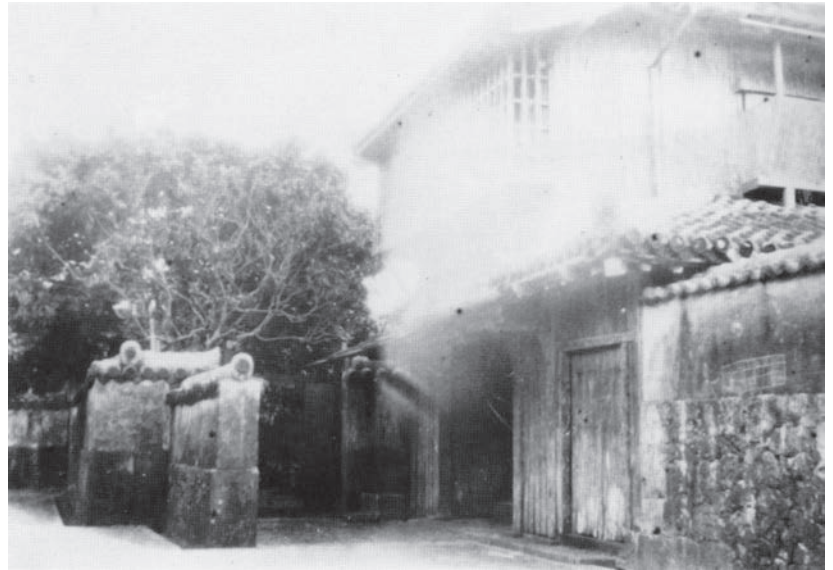
図版18 御寝廟の内部（前の廊下）

この右隣にあたる先之御殿の南東角には、鈴引きが設置された御錠口があり、そこで鈴の音を合図に表との取り次ぎが行われていた。次に、この御寝廟殿の裏座として、野嵩御殿居間が二間と安室御殿の部屋の計3部屋が配置され、その向かいには、東西に長い方形の区画を有する中庭があった。これらの部屋には、京箆笥や箔絵の施された唐長持等の調度品が配置され、そこでは老女たちが清明茶を飲みつつ穏やかな沖繩口で語らう姿や、白装束の女官たちが静かに芭蕉糸を紡ぐ光景が見られたという。

次に御寝廟殿の東側には、御二階御殿と呼ばれる2階建ての建物があった(図版19)。内部は幾筋にも分岐する廊下により仕切られ、迷路のようであったとされる。1階部分は間口の広い玄関があり、前の空間で記した御側仕御座や御近習座の間取りがある。この2階部分は、当初、北側のみが造られ世子と妃の寝室として使用されていたが、廃藩置県に伴い一時的に国王の寝室となる。

その後、首里城から遷した神を祀るため、明治後期に2階南側を増築した。またその際に、寝室としていた北側部分も、汀志良次(現首里汀良町首里中学校内)にあった聞得大君御殿から遷した神を祀る神殿として使用されることになり、2階部分全体が「御二階御殿の二階」と称される神聖な場所として立ち入りが制限されていた。また、そこに設えられた祭壇は「天地の御側」と呼ばれ、夏至・冬至には国王名大や女性司祭者により「天地御祭」が行われた。

なお、この増築の際には隣接する御寝廟殿からのみ行き来できるように、廊下の改装が行われたという。



(井伊文字)

図版19 御二階御殿



(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)

図版20 三御飾(美御前御揃)御酒用品一具



(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)

図版21 三御飾(饗宴用)錫製酒瓶御玉貫と朱塗沈金台盆

公衆送信権のため未表示

図版22 瓦塀

(坂本万七撮影 日本民藝館所蔵)

公衆送信権のため未表示

図版23 尚家の井戸

(坂本万七撮影 日本民藝館所蔵)

このように、これまで世子が寝室として使用していた2階部分に国王や神殿が遷ったため、世子が使用する新たな御殿が必要となった。そこで御寝廟殿の西側、大御庭の西に面して存在した「鈴の下」と呼ばれる女官が詰めていたとされる建物を撤去し、新御殿が増築された。その間取りについては不明であるが、内外を写した数点の写真が残る(図版25～28)。廊下は畳敷きで、琉球画が描かれた中戸により仕切られており、窓には日除けのカーテンがなびく(図版25)。この新御殿の周辺は、精緻に組まれた石畳と石造の溝で巡らされている(図版26)。その北側は、様々な観葉植物が植え込まれた鉢植えが配置された庭園をはさみ(図版27)北之御殿が存在するが、この建物についても詳細は不明である。

この新御殿や北之御殿の西側には、石牆をはさみ上之御殿が存在したエリアが広がる。御内原よりも2mほど高くテラス状に整地された空間には、拝所が2箇所と池を有する庭園、上之御殿と称される建物が1棟存在した。この建物に関する記録はほとんどなく、その規模や間取りは不明であるが、米軍の航空写真により、屋根の一部が木々に覆われた状態で確認できる(図版4)。この建物の機能について、1920(大正9)年に尚泰子息の尚時が妻静子とともに上之御殿に移り住むとの記録があり、王族の生活が営まれていたことがわかる。なお、首里城明け渡しの際には、王城に収められていた多くの宝物も中城御殿に持ち込まれたが、祭祀用具以外の不要品は、数回にわたり売立会を開き処分されたという(鎌倉芳太郎1982)。

以上、現存する写真や聞き取りをまとめた文献から、現時点で判明している範囲で中城御殿の様子を復元してみた。これらの建物は世子の邸宅とはいえ、目立った装飾もない質素な造りであったとされる。しかし、その存在は王国が崩壊しても依然としてその威容を誇り、人々は畏敬の念を抱き続けた。また、鎌倉芳太郎や伊藤忠太、柳宗悦らの文化人は、建物や庭園、調度品に至るまで、質素ながらも多くの様式が混在した琉球式ともいえる御殿をこぞって賞賛し、多くの写真や文章を残している。

そして、この中城御殿において滞在経験のある歌人の井伊文子(尚昌の子女)や津軽照子(津軽家の一族)は、その様子を回想し格調高い御殿での暮らしを伝える一方で(井伊1972・1978、津軽1942)、井伊文子は首里城や中城御殿をはじめとする首里の文化財が戦災により破壊されたことを嘆き、詩文として遺している。



(井伊文子)

図版24 新御殿の正面



(井伊文子)

図版25 新御殿の廊下



図版26 新御殿の庭の門（正面）

（井伊文子）



図版27 新御殿の庭

（井伊文子）

公衆送信権により未表示

図版28 新御殿の内部（人物は井伊文子氏）

（井伊文子）

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査区の設定

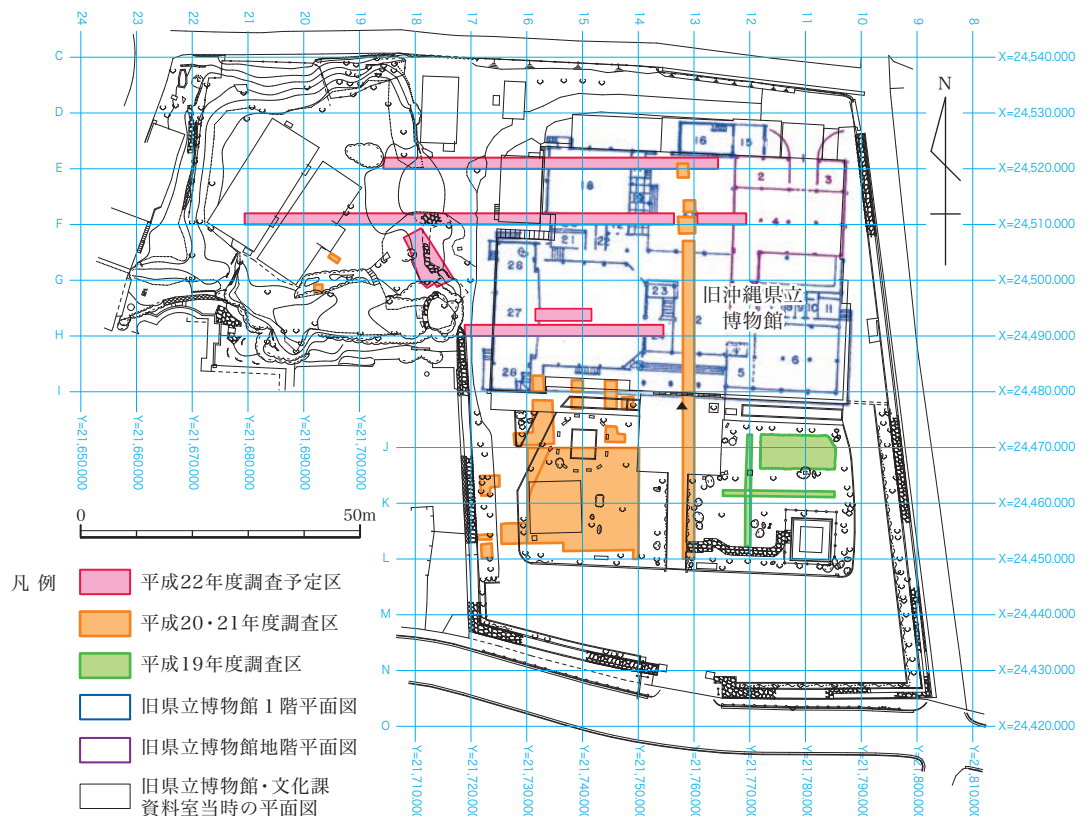
平成22年度の調査区は、平成19年度の調査開始時に設定した10m四方のグリッドに基づき、御内原と北之御殿周辺に4本のトレンチを設けて実施した。各トレンチの設定は次のとおりである(第6図)。

トレンチ1：御内原と北之御殿エリアを結ぶラインにおいて、東西90m、幅2mのトレンチを設定した。屋根伏せによると、御内原内に所在した女中部屋などの建物や、その西側に位置していた上之御殿が所在した地点にあたる。また、県立博物館当時は、自然史展示室と中庭、地下収蔵庫が設置されていた。

トレンチ2：トレンチ1の20m南側に、東西約35m、幅2mのトレンチを設定した。屋根伏せによると、新御殿と大御庭に付近に位置する。県立博物館当時は講堂が存在した。

トレンチ3：トレンチ1と2の間、御内原と上之御殿の境界部を確認する目的で、境界と思われる箇所に、傾斜した地形に合わせる形でトレンチ3を任意に設けた。米軍の航空写真によると樹木に覆われ、施設の確認はできない(図版4)。県立博物館当時は、建物やフェンスなどの施設は設置されておらず、古井戸の背後に位置する小高い丘であった。

トレンチ4：トレンチ1の10m北側に、東西約65m、幅2mのトレンチを設けた。上之御殿エリアの大岩付近から東にのびるトレンチで、屋根伏せによると大岩の拝所から寄満を通過するラインにあたる。県立博物館当時は、自然史展示室と中庭、地下収蔵庫が設置されていた。



第6図 トレンチ設定図



1. トレンチ設定状況① (南東から)



2. トレンチ設定状況② (東から)



3. トレンチ設定状況③ (西から)

図版29 トレンチ設定状況



## 第2節 調査経過

平成22(2010)年度発掘調査は、御内原と上之御殿に埋蔵する遺構を確認することを目的として開始した。

まず、7月27日に現場事務所設置箇所の草刈り作業を行い、7月28日・29日の2日間で現場事務所(ユニットハウス)の設置を行う。その後、道具類を搬入し、現場作業開始の準備を整えた。

8月からは発掘作業員を15人雇用し、敷地内の除草作業を開始する(図版29-1)。その間、トレンチ設定のための測量を行い(図版29-2)、8月17日より重機による表土剥ぎを開始する(図版29-3)。表土除去後には不発弾探査目的の磁気探査業務を委託し、探査を実施した(図版29-4)。この結果、鉄筋や釘類のほか砲弾片が確認されたが、不発弾は確認されなかった。引き続き発掘作業員を投入して表土の清掃を行い、徐々に遺構や層の状況が明らかになってくる。

トレンチ1は、旧県立博物館建物の真下にあたり、その基礎部分の遺構は破壊されているものの、中城御殿の地下構造物と思われる石組みや、旧造成層を確認した(図版29-5)。これに対してトレンチ2では遺構の残存が良好で、地表から約20cmのレベルから石畳などの遺構が検出された。屋根伏図(第3・4図)から、当地点には新御殿が存在した可能性が高く、これらは新御殿に関する遺構であることが想定できた(図版29-6)。当初はこのトレンチ2までで今年度の調査を終える予定であったが、トレンチ1の遺構残存が思わしくないことから、引き続きトレンチ3を設定し、調査を開始した。設定箇所は御内原西側の斜面地にあり、一部石積みが露出していたことから、その方角に合わせて任意に設定した。その結果、御内原と上之御殿を行き来する門と階段の遺構が検出され、その存在が明らかになった(図版29-7)。その後、トレンチ1の北側に並行する形でトレンチ4を設け、最終的に4本のトレンチを設けて発掘調査を行った(図版29-8)。

調査開始時は気温が高く、日差しも強いことから遮光ネットによる日除けを設置し、日の傾きにあわせて移動しつつ発掘を行った。遺構の記録作業は随時写真(35mm判カラー・カラーリバーサル・白黒フィルム、ブローニー判カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ)、実測により行い(図版30-9)、雨天時には遺物洗浄作業を行った(図版30-10)。また、調査中に3度の台風(台風第7・9・11号)に見舞われ、接近前には調査区及び現場事務所の台風対策を行い、通過後は被害の有無を確認後、全面的な清掃を行った。その後、調査区に溜まった水を汲み出し調査を再開した。

なお、調査終盤には高所作業車による空撮を行うとともに、遺構平面図作成を目的とする写真測量を実施した。さらに、調査中に検出したトイレ遺構と思われる遺構内の土砂について、寄生虫卵分析を委託するとともに、トレンチ2暗渠内から発見された位牌の保存処理及び漆塗膜分析、炭化材同定を委託した。

調査終了後には、遺構保護のため遺構上に白砂を10cmの厚さで敷き広げ、ブルーシートで覆ったのちに土砂を投入し埋戻しを行った。

## 第3節 資料整理作業の経過

調査報告書の刊行に向け、平成23(2011)年度に資料整理作業を実施した。出土遺物の洗浄は現場の雨天時にほぼ終了していたことから、遺物の整理作業は層序や遺構の関係を確認後、注記作業から開始した。その後、順次分類、接合、図化対象遺物の抜き出しを行い、図化(図版30-13)、トレース(図版30-16)、図版作成、写真撮影(図版30-15)を行った。これと並行して、自然遺物は種の同定後、図版用資料を抜き出し、集計を行った(図版30-14)。また、整理作業中には随時、有識者に陶磁器や金属製品に関する検討・分析を依頼するとともに(図版30-11)、比較資料収集として各地で調査を行った(図版30-12)。

これらの作業と並行して、遺構図・土層図等のトレース後、発掘現場で撮影した写真と併せてレイアウトを行い、原稿執筆ののち編集後(図版30-16)、指名競争入札により落札した印刷業者と契約を行い、本調査報告書を刊行する手順をとった。



1. 除草作業



2. トレンチ設定作業



3. 表土除去作業



4. 磁気探査作業



5. トレンチ1発掘作業



6. トレンチ2発掘作業



7. トレンチ3発掘作業



8. トレンチ4発掘作業



9. 遺構実測作業



10. 遺物洗浄作業



11. 出土陶磁器分析・同定作業



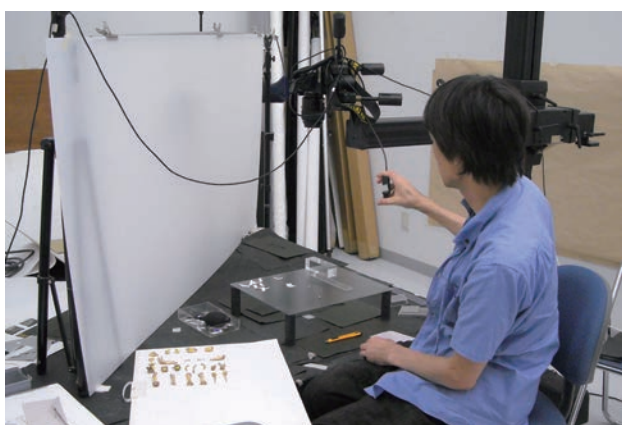
12. 陶磁器比較資料調査



13. 遺物実測作業



14. 自然遺物（貝類）整理作業



15. 写真撮影作業



16. 実測図トレース及び報告書編集作業

## 第4節 層序と遺構・主な遺物

### 1 層序

平成22年度調査区の層序は、基本的に平成19年度調査から設定している層序を踏襲し、第Ⅰ層～第Ⅴ層までを設定している。しかし、平成22年度調査においては、これまで第Ⅱ層としていた遺構上面堆積土を二分し、第Ⅱb層として遺構直上堆積土を追加した。なお、各層の状況については本文に記すが、一覧は第2表に示した。また、そこから出土した主な遺物は概要説明をするとともに集成して図示し、その詳細は第5節で記す。

#### 第Ⅰ層

層の状況： 表土、攪乱層。おもに戦後の開発により攪乱された層や、開発に際し持ち込まれた土砂を指す。県立博物館解体後の造成土も含まれ、コンクリート片や鉄筋類を多く含むが、攪乱により混入した中城御殿当時の遺物も多数含まれる。これらの遺物は、表土除去の最中にⅠ層の遺物として回収した。

主な遺物： 攪乱層が主体であることから、新旧の遺物が多数混在している。古手の遺物としては、15世紀代の青磁や白磁のほか、17世紀以降の肥前磁器などが含まれるが、大半は沖縄産の無釉陶器である。これらの遺物から、本遺跡の変遷を見ることができるとともに、戦災やその後の開発により、大きく改変されたことをうかがい知ることができる。

#### 第Ⅱ層

層の状況： 戦中～終戦後の堆積層。中城御殿の遺構上に堆積する層である。終戦直後、一帯は砲弾穴や破壊された建物の瓦礫で埋め尽くされていたが、一時引揚者の滞在地としてバラックを建てるため、周辺の瓦礫を敷き均して平場にするとされる。本層はその際に造成した層を指す。そのため、木炭や瓦礫、様々な生活物資などを多く含む泥質～砂質の様々な土砂が混在し、全体に暗い色調を示す。

主な遺物： かつて中城御殿に葺かれた大量の瓦や、戦中～戦後に廃棄されたと思われる靴や衣類、ガラス瓶類、金属製品が多く含まれる(巻頭図版14)。その中には戦前のある一定期間、全国各地で焼成された統制陶器や軍用食器が含まれている。また、ゴムタイヤやチューブを加工したサンダルやその他リサイクル製品も多数含まれ、戦前～戦後にかけての生活をみる事ができた。

#### 第Ⅱb層

層の状況： 中城御殿当時の遺構直上に堆積する層。第Ⅱ層に含まれるが、本層は被熱した状態で木炭を多く含み、遺構表面を覆うように堆積している。この状況から、戦災により破壊された直後に堆積した層であることがわかる。本層は第Ⅱ層造成時に転圧され堅くしまっており、その影響で含まれる遺物も破碎した製品が多い。

主な遺物： Ⅱb層の例としてトレンチ2出土遺物をあげる。遺物は被熱して破碎した製品が大半である。明治以降に焼成された肥前や瀬戸美濃産の陶磁器が主体となり、中でも錦手や金彩などが目立つ傾向にある(巻頭図版9、第22図)。蓋付きの碗や小碗・急須類が多く、複数個体が確認されていることから、揃いで存在していたことがわかる。その他、景德鎮産の蛍手や官窯製と思われる銘の入った製品や青磁の衛生陶器、金彩入りのカットガラス、箔絵のみられる漆製品や調度品金具など優品がまとまって出土している。また、西側暗渠内からは、戦時中に避難させたと思われる朱塗りで緻密な彫刻が施された位牌が確認されている(巻頭図版10)。

## 第 III 層

層の状況： 基本的には中城御殿を造営するために盛土造成した層を指し、中城御殿の遺構が破壊された箇所から確認されている。中城御殿ではこの造成土上に石畳みや基壇を敷設し、建物が建造されている。土層は均質でなく、礫などの混入も規則性が見あたらない。また、陶磁器などの遺物も多数含まれることから、周辺の土砂をランダムに投入したことが想定できる。

また、上記した造成土以外に、遺構内や建替えの際の堆積を第III層としている場合があるが、遺構名と併記することで区別している。

主な遺物： 造成層には近世以降の沖縄産陶器が多く含まれ、その中に中国や肥前産陶磁器がわずかに含まれる。中城御殿造営にあたり客土として持ち込まれた土砂に混入していた遺物であることが考えられる（巻頭図版12、第23図）。

次に遺構中及び建替えに係る堆積土中には、近代～戦中の遺物が含まれており、戦災により破壊される直前まで機能していたことを窺わせている。

## 第 IV 層

層の状況： 中城御殿以前の生活層と考えられる層である。中城御殿が当地に移転する前には、首里古地図によると数件の土族屋敷が存在していたとされ、本層はこの時期のものと考えられる。遺物は近世以降の陶磁器が主体であるが、それ以前となる中世段階の陶磁器類もわずかながら散見でき、当地の変遷を物語っている。

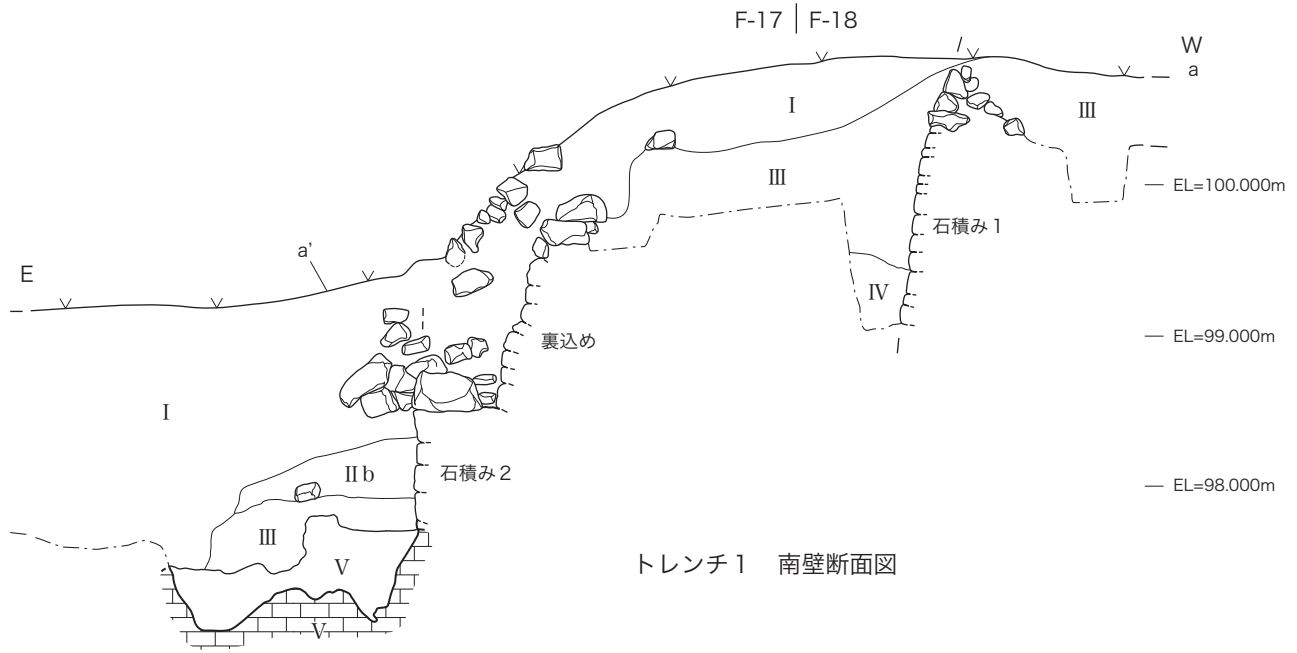
主な遺物： 近世以降の沖縄産陶器や薩摩産陶器のほか、陶質土器が多い傾向にある。その中で沖縄産陶器は、焼成時の目跡として貝目やサンゴ目を有し、胎土に白土を混入する初期沖縄産無釉陶器が多く見られる。その他中国や肥前産の陶磁器が含まれるが、福建など中国南部で焼成された染付が多くみられる（巻頭図版13、第41図）。

## 第 V 層

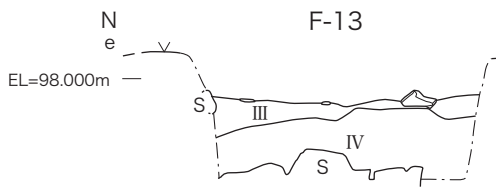
層の状況： 平成19～21年度実施の調査においては、地山として泥岩（クチャ）及び赤土（マージ）が確認されていたが、今調査では一部で琉球石灰岩の岩盤が確認されている。石灰岩はトレンチ2西及びトレンチ3で検出した範囲では、白色で緻密な上硬く、トレンチ1西側検出石灰岩は黄白色を呈し軟質である。この石灰岩の検出により、敷地の南東側には赤土、南西側には泥岩、北西側に琉球石灰岩が分布している可能性が想定できる。

第2表 主要層序一覧

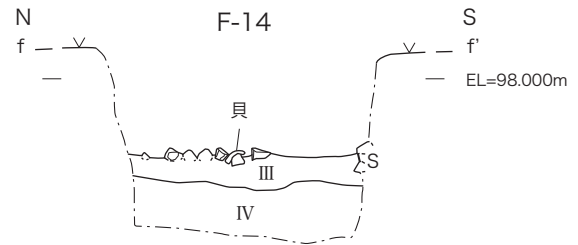
層序	層厚 (約・cm)	主な色調	主な出土遺物	年代	層・土質所見
I層	30～170	暗褐色	多くは瓦・沖縄産の陶器で、その他金属製品、近・現代遺物が多量に出土。	現代	県立博物館やその解体後の造成土で、コンクリート片や鉄筋、埋設管用の砂、石灰岩礫・切石などが多く含まれる。
II層	50～200	黒褐色・鈍い黄褐色	各地で焼かれた統制陶器やゴム・樹脂製品、ガラス、金属製品などの現代遺物が多量に含まれている。	沖縄戦直後	総じて砂質で大小の石灰岩切石・自然礫や木炭を含む。含まれる遺物から、終戦直後に周辺の瓦礫を被弾痕に投棄して整地したものと思われる。
IIb層	50～130	鈍い褐色・オリーブ褐色	溝などの遺構内や石畳直上に肥前や瀬戸・美濃産染付、色絵のほか、沖縄産施釉陶器が多くみられる。	近代～沖縄戦	砂質・砂利質の焼土や木炭を多く含む層であることから、沖縄戦により家屋が焼失した際の堆積層と思われる。
III層	20～110	暗オリーブ褐色	造成土中に初期沖縄産無釉陶器や中国産青花のほか、肥前産染付や白磁が含まれている。	近代	中城御殿築造に係る造成層か、建物改修の際の層と思われる。土質は密で粘性が高く、こぶし大前後の石灰岩礫が混入する。
IV層	30～50	暗オリーブ褐色・鈍い黄褐色	初期沖縄産無釉陶器や中国産青磁、白磁、青花のほか、肥前産染付や白磁が出土。	近世～近代	中城御殿築造に係る造成層か、土族屋敷が存在した頃の文化層と思われる。土質は密で粘性が高く、こぶし大前後の石灰岩礫が混入する。
V層	—	白色・黄白色	—	—	地山、岩盤。敷地の北西一帯に分布するとみられる。白色で硬質、黄白色で軟質の石灰岩がみられる。



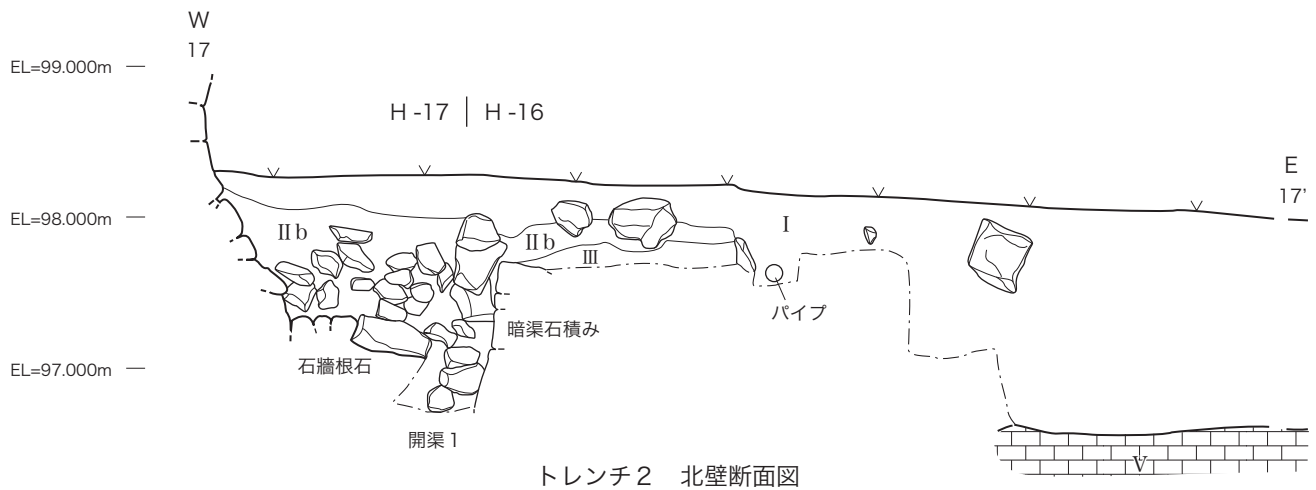
トレンチ1 南壁断面図



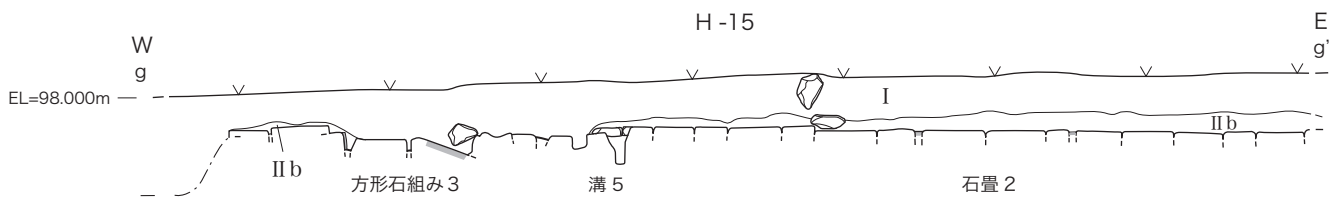
トレンチ1 F-13 東壁断面図



トレンチ1 F-14 東壁断面図



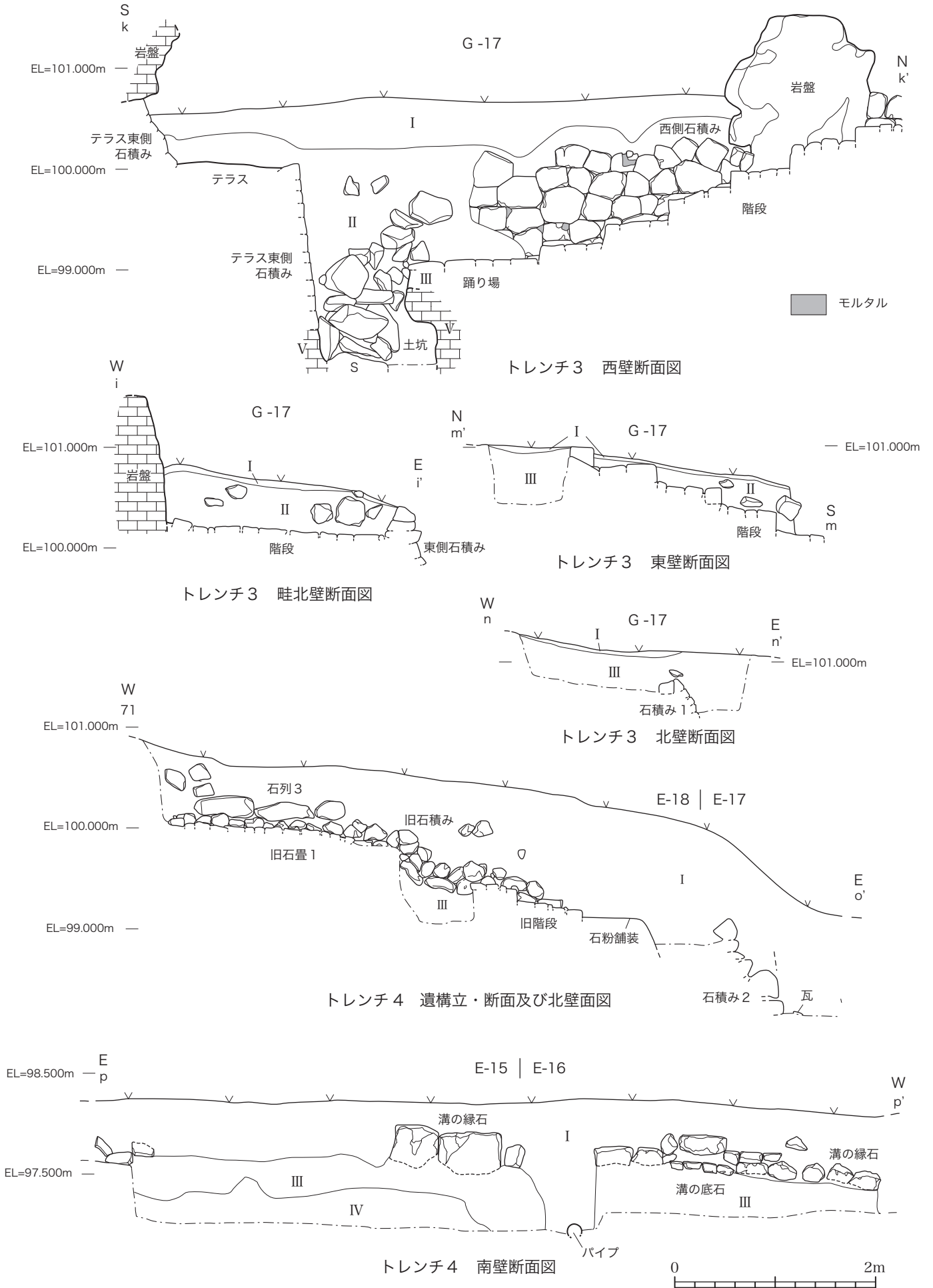
トレンチ2 北壁断面図



トレンチ2 北壁断面図



第7図 層序1



第8図 層序2



1. トレンチ1 (F-18南壁)



2. トレンチ1 (F-14東壁)



3. トレンチ2 (H-14北壁)



4. トレンチ2 (H-13東壁)



5. トレンチ3 (G-17西壁)



6. トレンチ3 (G-18西壁)



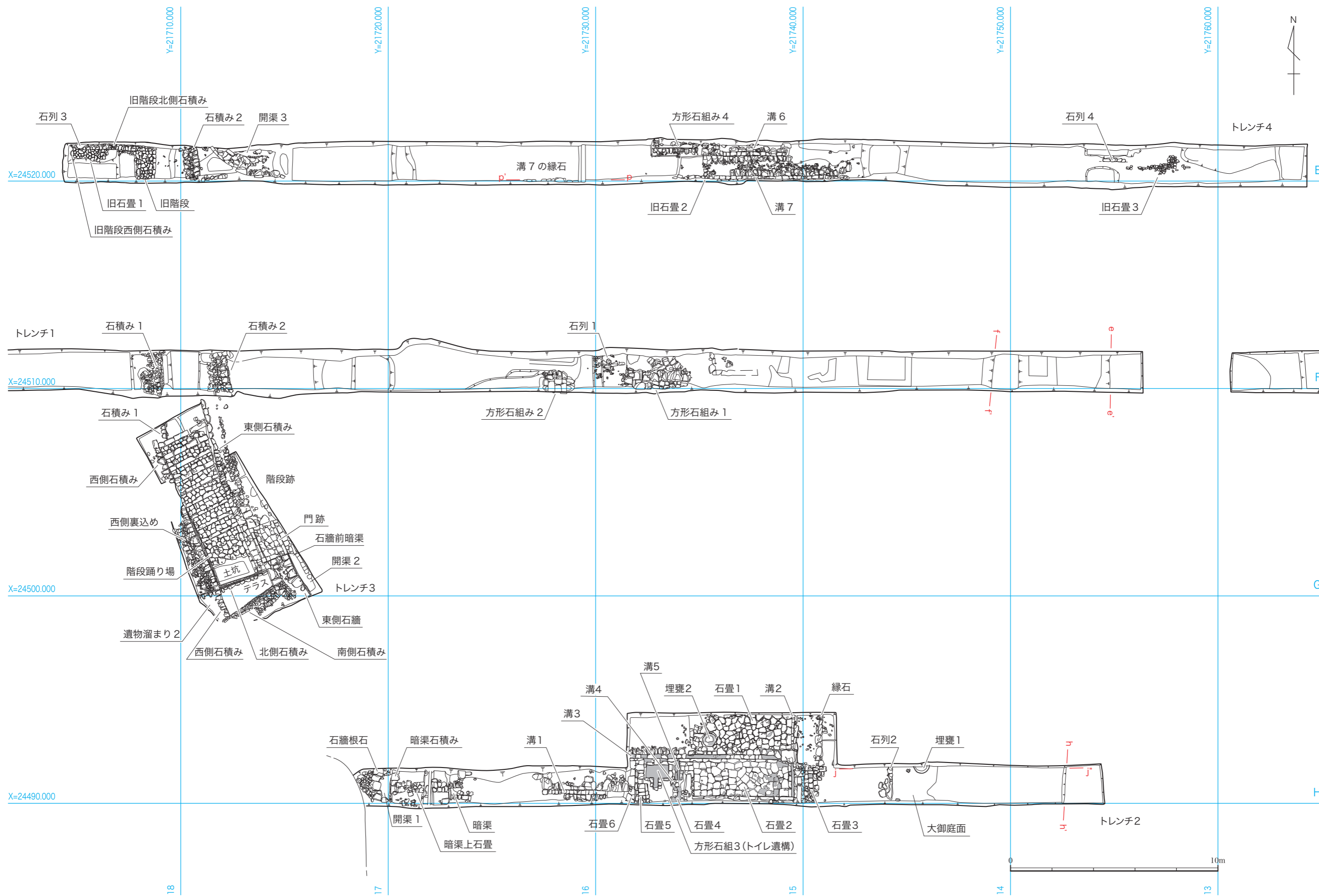
7. トレンチ4 (E-17・18北壁)



8. トレンチ4 (E-15南壁)

図版32 層序画像





第9図 遺構全体平面図

※アルファベットの赤文字表記は遺構図中に入らなかった断面ラインを示す



## 2 遺構と主な遺物

平成22年度の調査では、合計4本のトレンチを設けて遺構確認を行った。トレンチの設定及び概略は、第3章第1節で示したが、ここではトレンチごとに遺構の報告を行い、その解釈にあたっては往事の情報を照合しながら行った。なお、遺構の情報は文章で詳述するが、概要は表で示し、続いて遺構図、写真を掲載した。また、遺構から出土した主な遺物は実測図を集成して掲載し、詳細は第5節に示した。各トレンチの遺構は次のとおりである。

### トレンチ1

御内原と北之御殿エリアを結ぶラインにおいて、東西90m、幅2mのトレンチを設定した。表土を除去したところ、遺構面はこれまでのレベルより低く検出され、その大半は破壊されたかのように思われた。しかし、厚い表土の下には石造の地下構造物や石積み、旧造成層が残存していた。次に遺構ごとの報告を行う。

#### 石積み1

F-18グリッドより、1列の石積みを検出した。石積みは東面しており、20～30cm大、控えは20cm前後に粗く加工した野面に近い石灰岩を積んでいる。傾斜角は残りのいい南側で82°を示すが、北側は西側からの土圧により孕み、前傾している。天端は破壊されている上、掘削範囲の都合により根石の確認に至らず、高さは不明である。また、その長さは2m幅のトレンチ壁面に入り込むため不明だが、南側に近接するトレンチ3の北端に連続する石積みが発見されていることから、ある程度連続して積まれていることがわかる。石積みの背面は盛り土され、この傾斜面に幅50cm前後で10～20cm大の裏込め石を詰めつつ積み上げたと思われることから、片面積みであることがわかる。これらの点とこの東側には、後述する石積み2が発見されている点から、本石積みは中城御殿以前の遺構であることが考えられる。石積み前面からは、沖縄産陶器を中心とする近世段階の遺物が出土している。

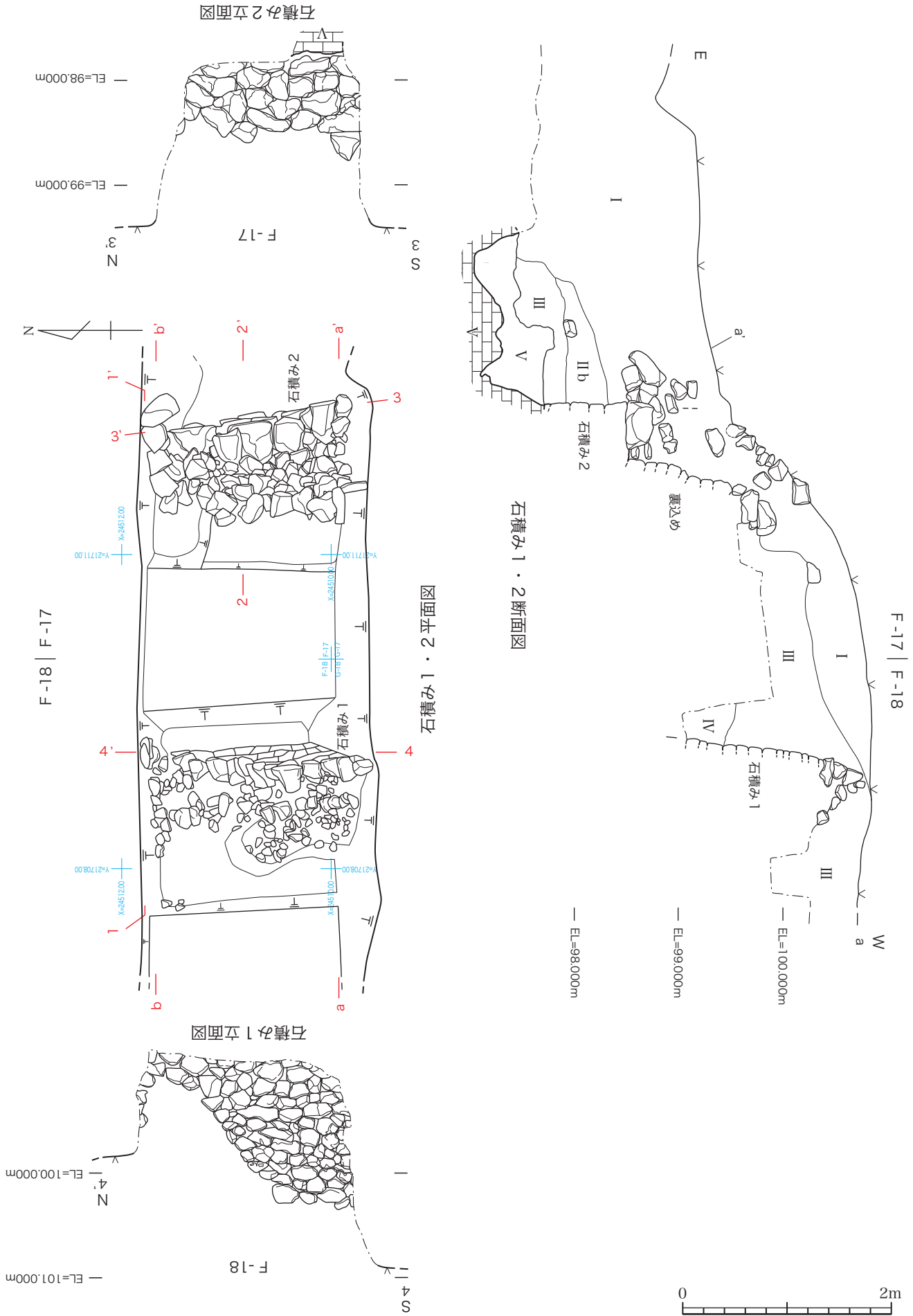
#### 石積み2

石積み2はF-17グリッド、石積み1から約350cm東側に位置する遺構である。石積みは東面しており、表面及び控えが40cm前後の粗加工の石灰岩を傾斜角90°で積んでいる。背面は赤色土により盛り土がされ、先述した石積み1同様に、裏込めを詰めながら積み上げられた片面積みとなっている。天端は破壊されているが、この石積み2につながると考えられる石積みが発見され、調査区北側に天端を有した状態で残る。この天端は標高約101.4mを示しており、この高さをあてると根石下面から約350cm前後の高さであったことが想定できる。根石は琉球石灰岩の岩盤上に配置され、その前面は石灰岩粉により転圧されており、この面が施工時の地表面にあたる事が考えられる。この旧地表面から想定天端高までの高さは340cmであり、本来の石牆高を示すものと思われる。

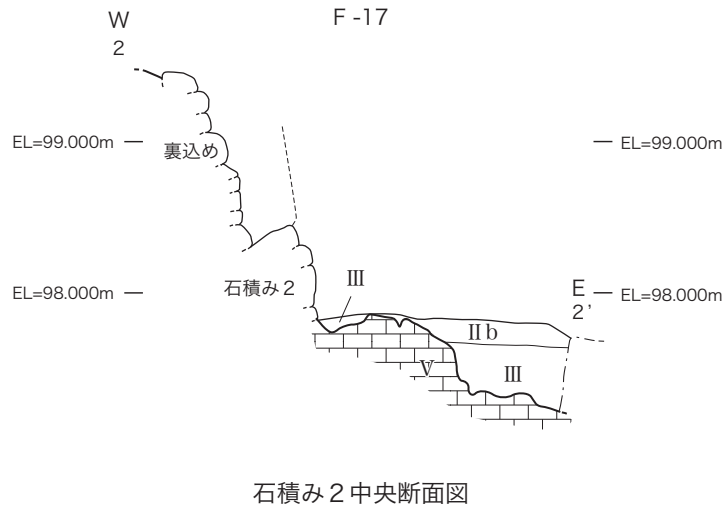
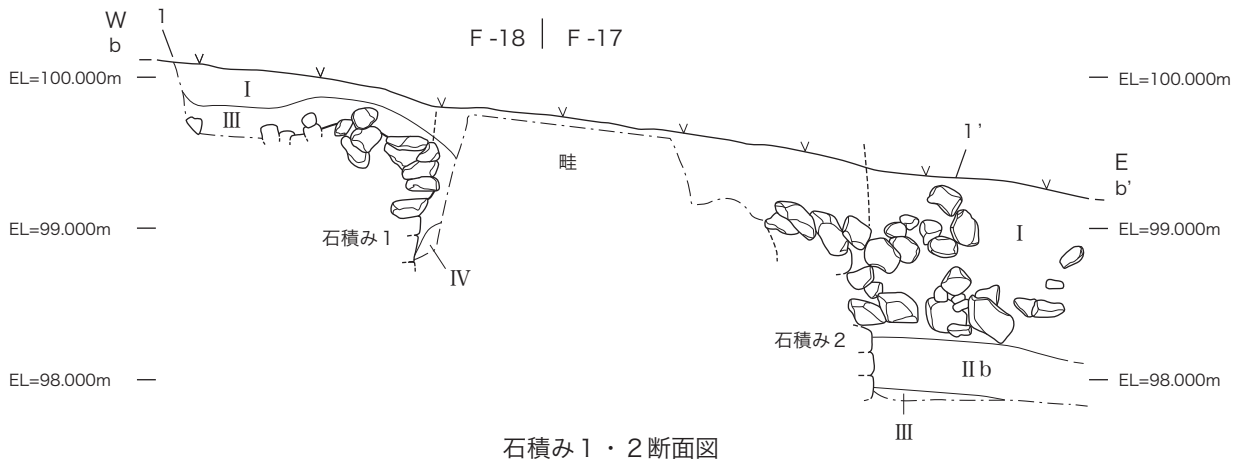
この根石検出時には沖縄産の陶器をはじめ、中国・本土産の近世～近代に属する陶磁器が一定量得られている。この遺物を含む石積み前面の堆積土は、石積みから前面にかけて下るように堆積しており、清掃などの際に隅に寄せられたことが推測できる。この石積みは、北側のトレンチ4及びその延長上、南側のトレンチ3東端でもつながるように検出されていることから、中城御殿当時は御内原と上之御殿エリアを区画するとともに、上之御殿エリアをテラス状に高める石積みとして機能していたことが考えられ、その様子は古写真でも確認できる。なお、この石積み2背面を盛り土する際には、石積み1を埋め殺す形で行われており、この状況からも石積み1の後に石積み2が積まれたことがわかる。

第3表 石積み1・2

遺構名	グリッド	サイズ(cm)		傾斜角	残存		形成・調整・文様等
		高さ	幅		根石	天端	
石積み1	F-18	140～	200～	82°	○	×	片面積み トレンチ3・石積み1につながる
石積み2	F-17	100～	170～	90°	○	×	片面積み トレンチ3・4につながる



第10図 トレンチ1遺構1（石積み1・2）



第11図 トレンチ1遺構2 (石積み1・2)



1. 石積み1・2 (東側上空から)



2. 石積み1 (画像左が北)



3. 石積み1 立面 (東から)



4. 石積み2 立面 (東から)



5. 石積み2 検出前 (裏込め石と崩落した切石・北から)



6. 石積み2 立面と根石 (東から)

### 方形石組み1

方形石組み遺構はトレンチ1で2基検出されている。屋根伏せによると、この付近は中城御殿当時、女中居間と称される建物が存在した地点にあたる。博物館当時には、自然史展示室などの部屋が存在したこともあり、この一帯はその基礎工事により遺構の残りがよくない。しかし、調査時地表から約60cm地下より、中城御殿当時の地下構造物と思われる本遺構が検出された。ここでは便宜上、東側で低い位置に検出された遺構を方形石組み1、そしてその西側の遺構を方形石組み2とした。

方形石組み1は、F-17グリッドの南壁に入り込む形で検出された遺構である。サイズは石組み内側で東西に約234cm、南北は約40cmが検出されるが、大半が南壁に入ると思われ不明である。しかし、北面の軸から遺構方角は磁北に沿って築造されているものと思われる。高さは天端が破壊されているが、縦20cm、幅40cm内外の切石を相方積みしており、西側で2段、約60cmが、東側は1段約30cmが残存する。底面の断面は緩いV字形で、亀甲状に敷石が密に施されており、東側底面の勾配は西側下へ約23°、西側は東側下へ約19°である。この底面からは沖縄産の瓦や陶器が出土しているほか、薄い二枚貝を方形に加工した製品が数枚出土している。

この製品については、戦前に御殿を訪れた文化人らにより記された記述や写真が残る(図版9)。これによると、御殿の玄関やトイレの窓には、貝殻を薄く加工したものを格子に嵌め込み、明り取りにしていたとされる。現存する写真は不鮮明であることから、薄貝の形状は不明であるが、その様子から、ひとつの窓にかなりの数の薄貝が用いられたことが想定できる。この薄貝の詳細は遺物の項で述べる。

### 方形石組み2

方形石組み2は、方形石組み1の約3m西側に検出された遺構である。天端は残されていないが、下半部の残りは良好で、方角は磁北に沿う。サイズは平面で東西58cm、南北90cm、側面の石積みは最大で90cmが残存する。発掘当初は方形石組み1同様、遺構南側が南壁に入り込んでいたため、堆積を確認するため遺構内を半截した。その結果、遺構の底面付近まで表土(第I層)が入り込んでおり、遺構内部は破壊される直前まで空洞であったことがわかる。その後、全面を掘り下げると、遺構内の南側壁面が現れるが、中央の石にスロープ状の傾斜が施されていることが判明した。この傾斜は何らかの液体を石組み内に流し込む機能が考えられる。そのひとつとして、人間の排泄物を貯えるトイレの便槽としての機能が想定できたことから、底面に堆積した黒色の土砂を採取し、寄生虫卵分析を含めた自然科学分析を委託した。その結果、人間に寄生する寄生虫卵が検出されている(第4章参照)。これにより、本遺構は便槽である可能性が高く、この上部がトイレとして機能していたことが考えられる。石組みの一部には、目地材としてモルタルが用いられている。

第4表 方形石組み1・2

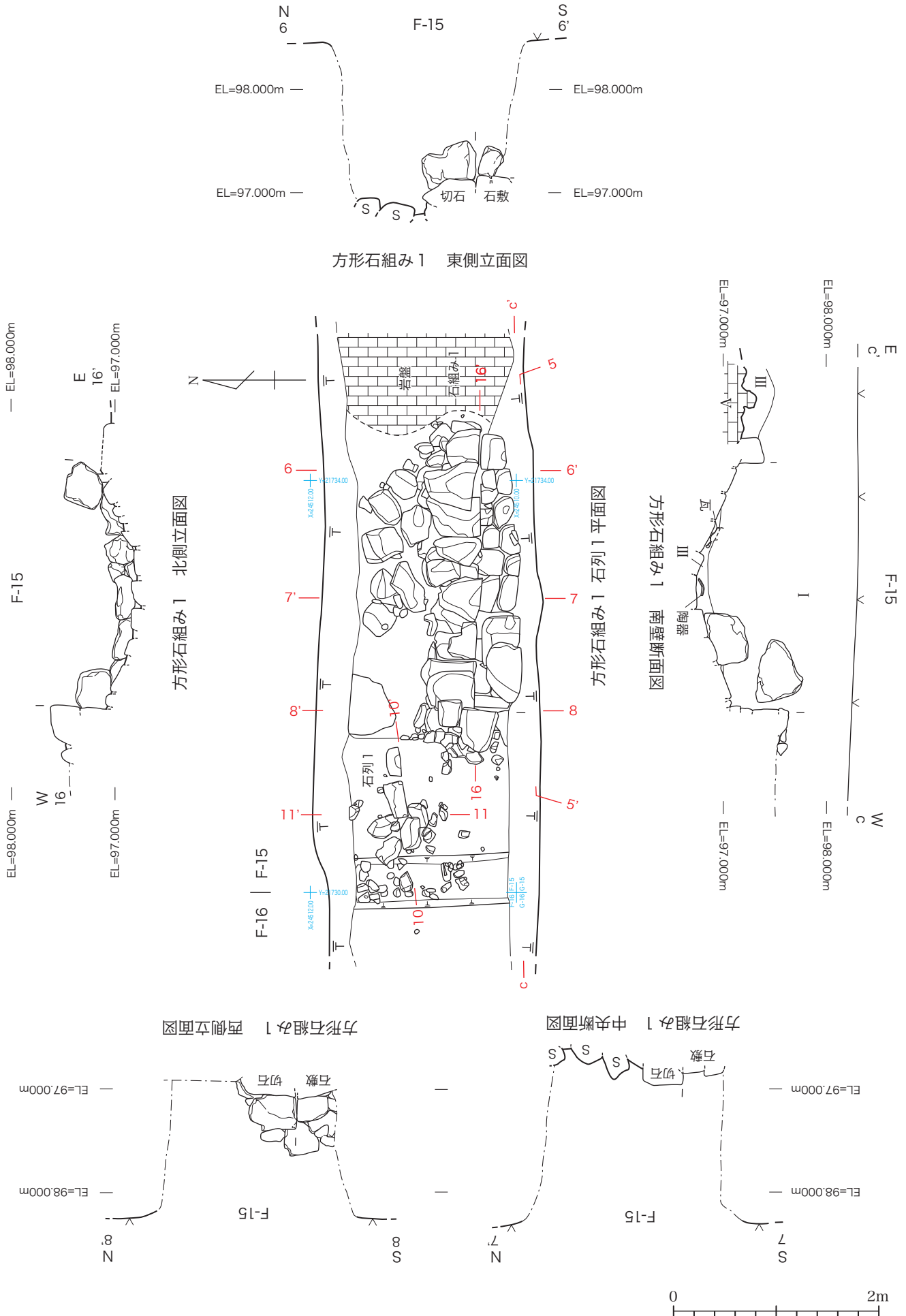
遺構名	グリッド	サイズ(cm)								底面傾斜角
		東辺		西辺		北辺		南辺		
		幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	
方形石組み1	F-15	30～	30	40～	60	234	40	-	-	東側:西下23°・西側:東下19°
方形石組み2	F-16	58	60	58	74	90	90	90	56	南下7°

### 石列1

F-15グリッドの地表から約30cmの地点より石列を検出した。石列は高さ30cmで、幅30～35cm、奥行き16cm程度の切石を3点ならべ、合計98cmの石列を構成している。なお、この石列はその形状と南側に底石と思われる石が外れた状態で検出されていることから、溝の縁石になる可能性がある。

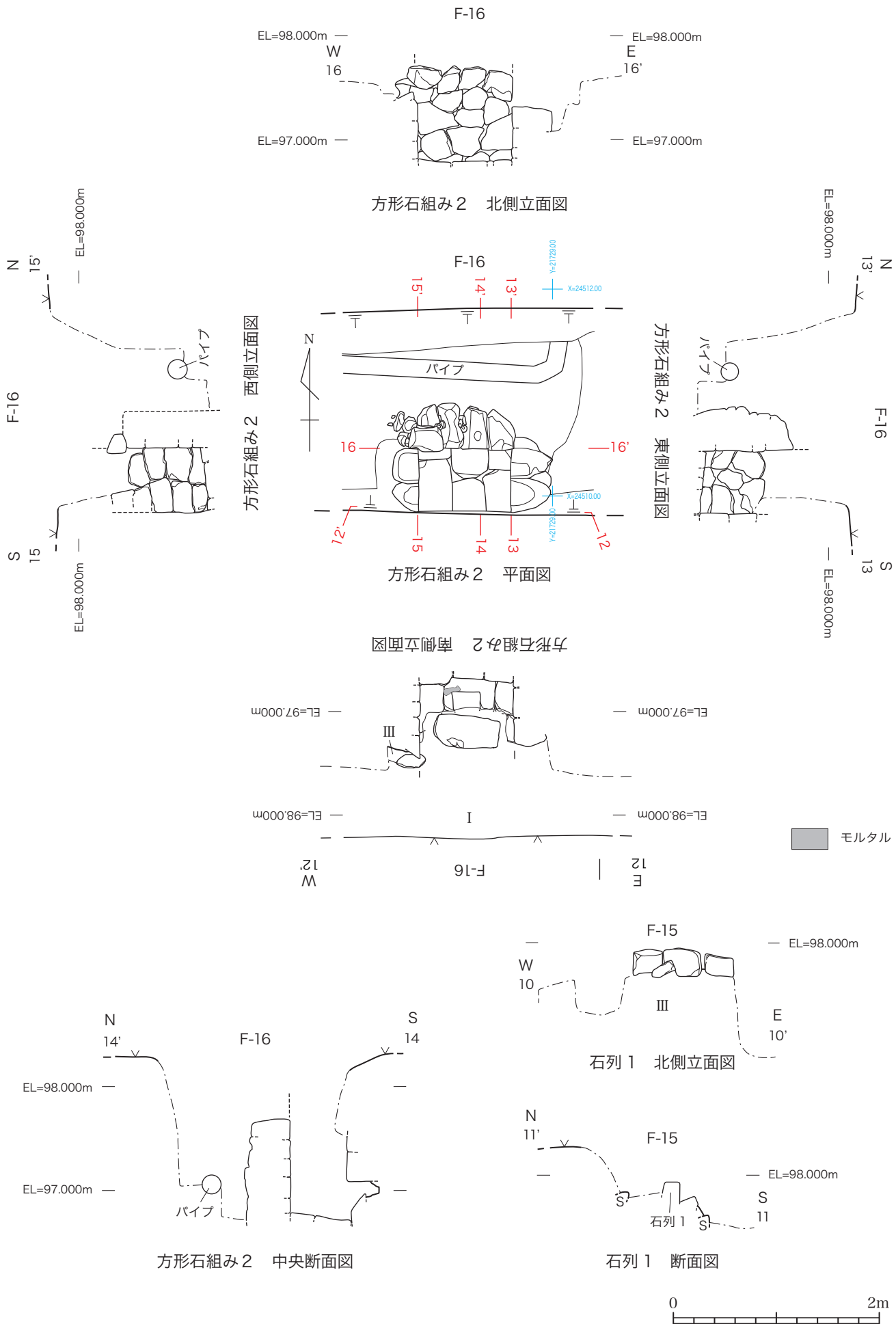
第5表 石列1

遺構名	グリッド	サイズ(cm)		備考
		高さ	幅	
石列1	F-15	30	98	溝の縁石になる可能性あり



第12図 トレンチ1 遺構3 (方形石組み1)





第13図 トレンチ1遺構4(方形石組み2、石列1)



1. 方形石組み1・2、石列1平面(上空から・画像下が北)



2. 方形石組み1(画像下が北)



3. 方形石組み1 調査状況



4. 方形石組み2平面(画像上が北)



5. 方形石組み2 内部堆積状況



6. 方形石組み2 底面・南側壁面の状況



7. 石列1 検出状況(南から)



1. F-18石積み1前面第Ⅲ層遺物出土状況



2. F-17石積み2前面第Ⅲ層遺物出土状況①



3. F-17石積み2前面第Ⅲ層遺物出土状況②



4. 方形石組み1底面遺物出土状況



5. 方形石組み1底面石畳・遺物出土状況

### 遺物溜まり 1

F-20グリッドより、破損した陶磁器類が集中する状況が1ヶ所確認できた(位置は第119図参照)。現状では遺構と言いがたいが、今後範囲を広げた調査を行うことにより性格が判明する可能性もあるため、この場で報告する。屋根伏せによると、この地点にはかつて上之御殿の建物が存在したとされる。この遺構確認のため発掘を行ったところ、局地的に遺物が集中する箇所が確認された(図版36-1)。周囲の土は攪乱層で、戦後に文化財保護委員会の建物が建てられたこともあり、周辺にはそのコンクリート基礎が点在する。遺物溜まりは沖縄産の陶器がほとんどで、大型の施釉陶器が目立つ。これらは状態がいいことから、当初は埋納したことを想定し、平面検出後、半截を行った(図版36-2)。陶磁器集中部の下位には20cm前後大の石灰岩礫が詰められている(図版36-3)。しかし、これらの陶磁器及び石灰岩礫は、土坑(図版36-4)に入った状態でモルタルが大量に流し込まれており、現時点で性格は判然としない。

この遺物溜まりより出土した主な資料を、まとめて第14図及び巻頭図版7に示した。個々の詳細は次項で述べる。



1. 掘削前



2. 半截状況

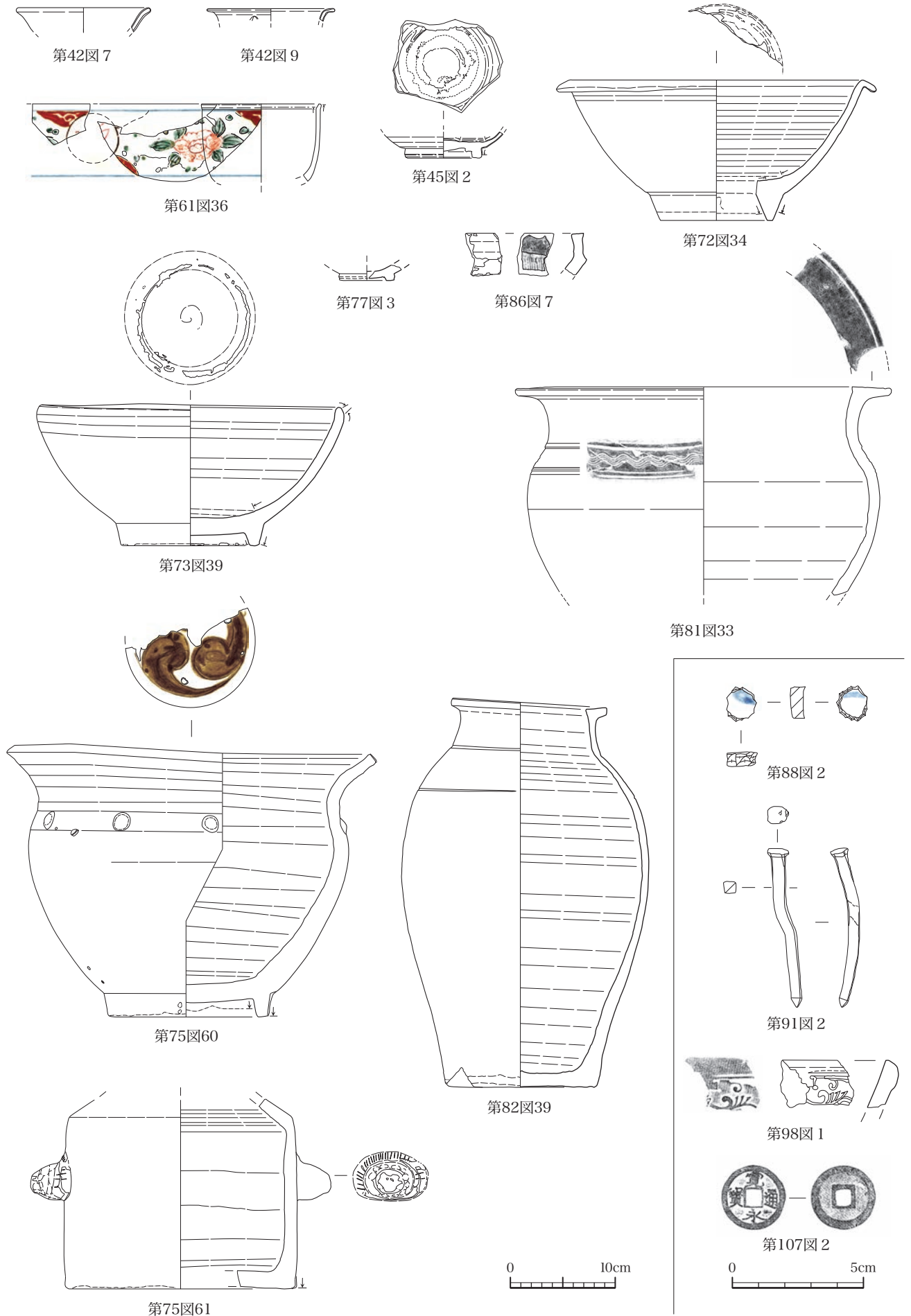


3. 遺物取り上げ後



4. 完掘状況

図版36 トレンチ1遺構④遺物溜まり1検出状況



第14図 トレンチ1遺物溜まり1出土遺物

## トレンチ2

トレンチ1の20m南側に、東西約35m、幅2mのトレンチを設定した。本トレンチは旧博物館建物内に位置していたが、20cm程度の表土をはがすと、多様な遺構が残されていることが判明した。この要因として、トレンチの地点は、柱などの基礎構造物が少ない講堂が存在したことにより、破壊を免れたことが考えられる。次に遺構の状況を西側から報告する。

### 石牆根石

このトレンチ2の西端には、高さ約2mの石積みが南北に連なっている。この石積みは根石が現地表から積まれている上、根石の下部に現代遺物が含まれていることから、戦後に積み直された石積みであることがわかる。中城御殿当時のものと思われる石牆の根石は、この積み直された石積みの東側直下、H-17グリッドより検出されている。高さは最大60cmで、長さは南北壁に入ることから不明である。積み石のサイズは、縦40cm～、横30～40cm、控えが40cm前後で、東面して南北に列をなしている。全体に石積み前面となる東側に傾斜することと、掘削土より砲弾片と思われる鉄塊が出土する点から、戦災により破壊されたことが想定できる。石積みの東側は開渠として機能していたと思われ、御殿北側あるいは次に報告する暗渠からの排水を南へ逃す役割が想定できる。

### 暗渠石積み

暗渠の排水口を有する石積みを暗渠石積みとした。石積みは西面しており、南北はトレンチ壁面に入ることから全長は不明であるが、上面はわずかに西へ弧を成しており、上部では縦20cm、幅40、控えが40cm前後の切石を積む。調査範囲が狭小であることから根石の確認はしていないが、確認できる範囲で7段程度、約110cmの高さに積み上げている。積み方は基本的に横目地を通す相方積みだが、暗渠部分でやや不規則になる。この暗渠についての詳細は後述するが、石積みの天端から約50cm下に石組みにより構成されている。石積み下部の目地は、部分的にモルタルによる目張りがされている。なお、この石積みの前面は傾斜が北に約7°あり、暗渠から排出された水を更に南へ逃す開渠の機能が考えられる。

第6表 石牆根石・暗渠石積み

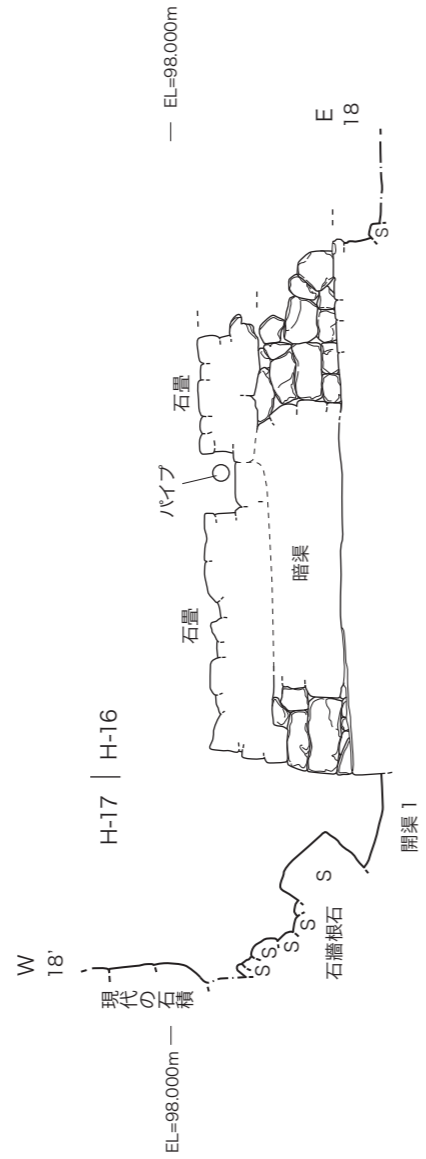
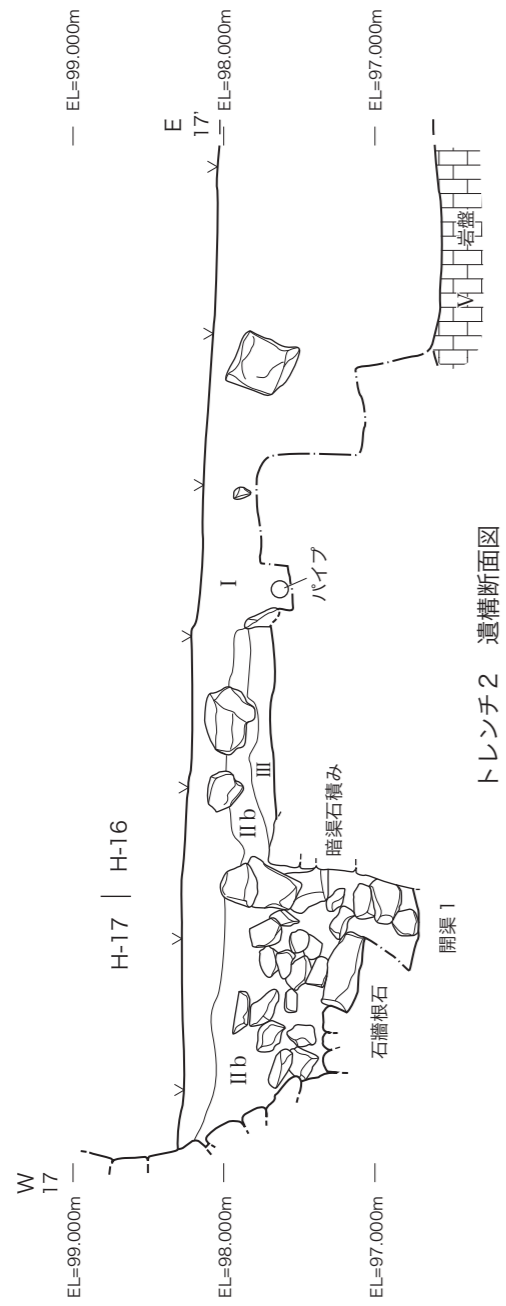
遺構名	グリッド	サイズ (cm)		傾斜角	残存		備考
		高さ	幅		根石	天端	
石牆根石	H-17	60	160～	-	○	×	
暗渠石積み	H-16	118	160～	80°	○	○	

### 暗渠上石畳

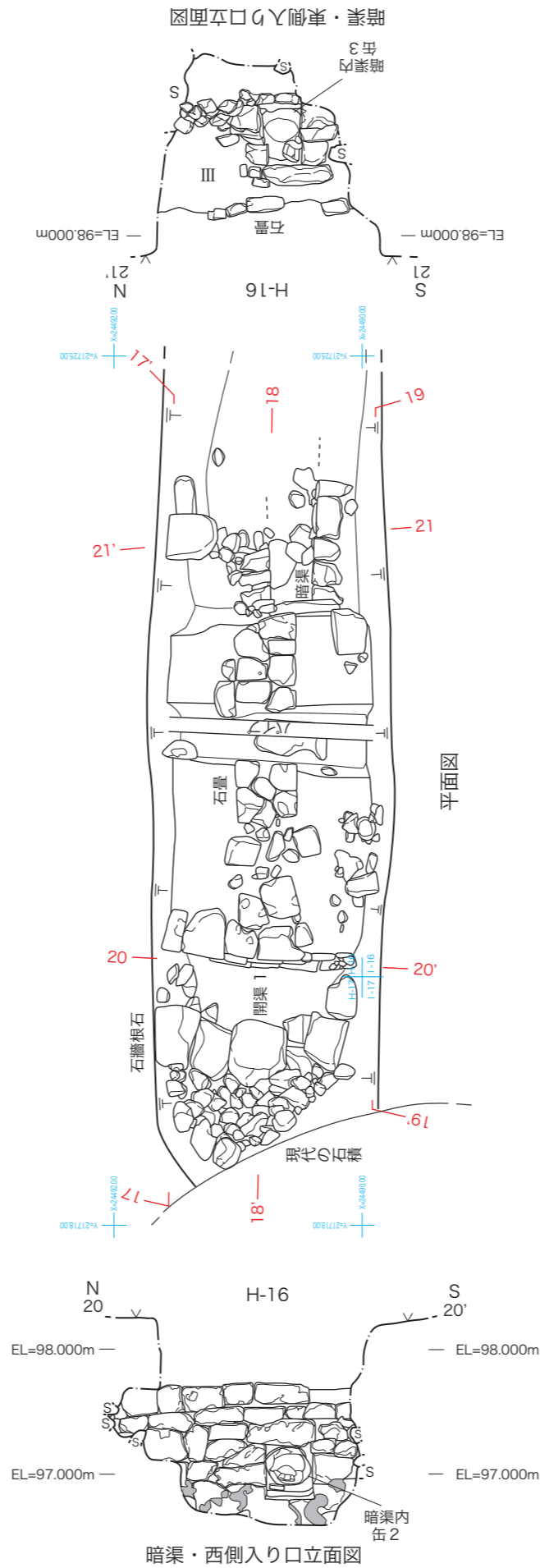
前記した暗渠石積みの上面には、切石が東西方向に敷かれた状態で検出されており、これを暗渠上石畳とした。石畳は幅約50cmで、その東側は戦後の開発により破壊されるが、約260cmが南北に面をそろえて平滑に敷設される。切石のサイズは20cm前後である。戦前に撮影された写真によると、この辺りには南北に連なる浮道が見えることから、本遺構は浮道の一部であることも考えられるが、連続した石畳が確認できないことと、写真の浮道と方向が異なるため、性格は判然としない。

第7表 暗渠上石畳

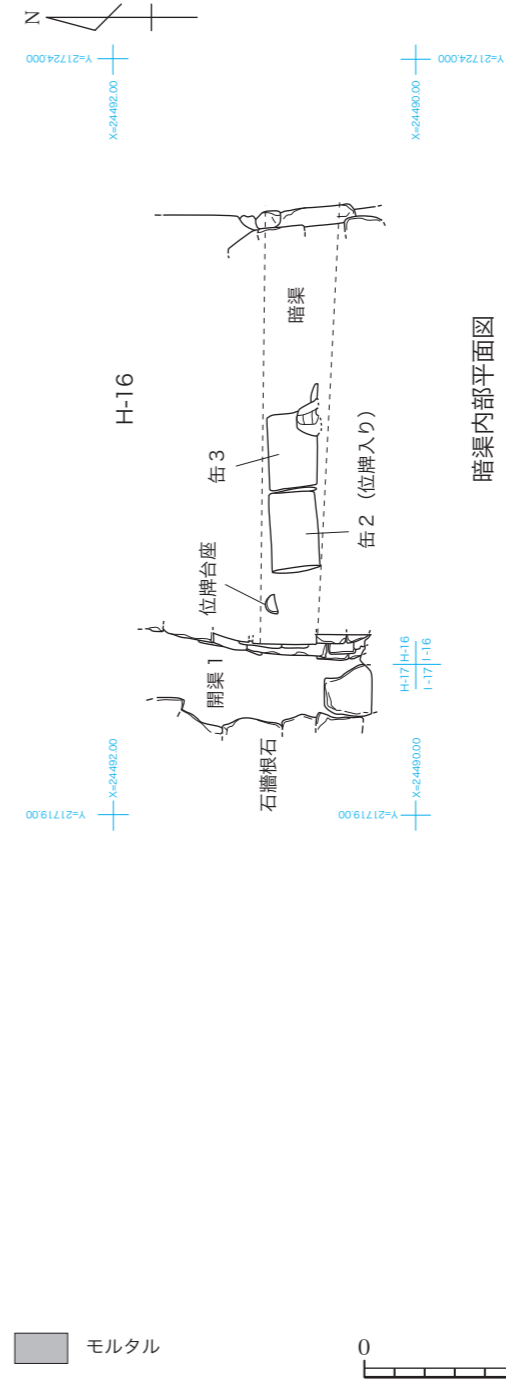
遺構名	グリッド	サイズ (cm)		備考
		東西	南北	
暗渠上石畳	H-16	260	50	浮道の一部か



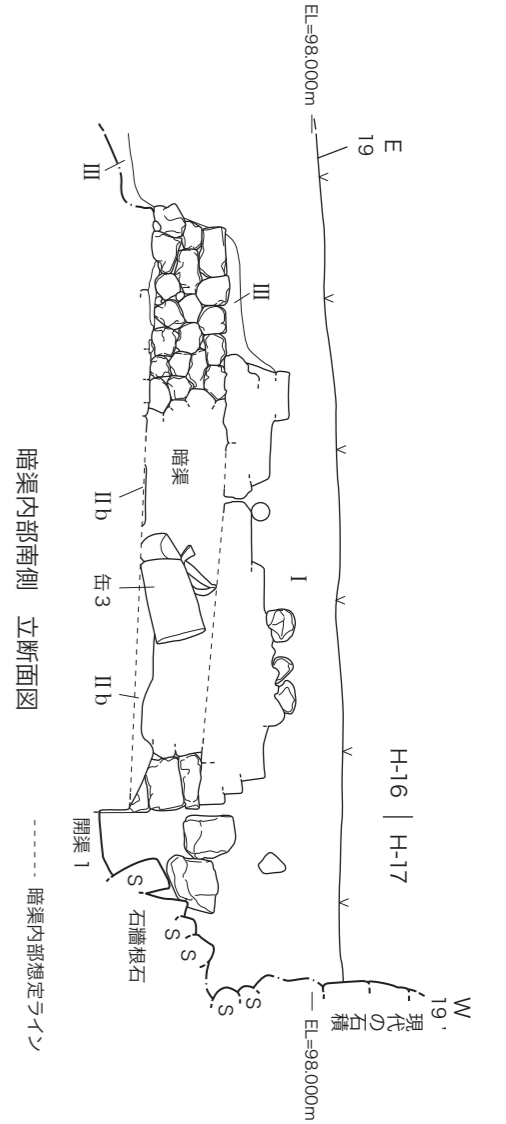
暗渠・石置断面図



暗渠・西側入り口立面図



暗渠内部平面図

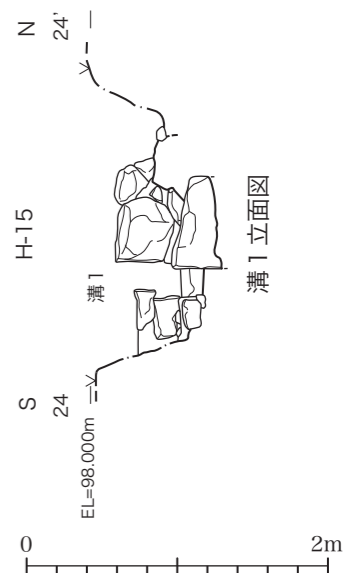
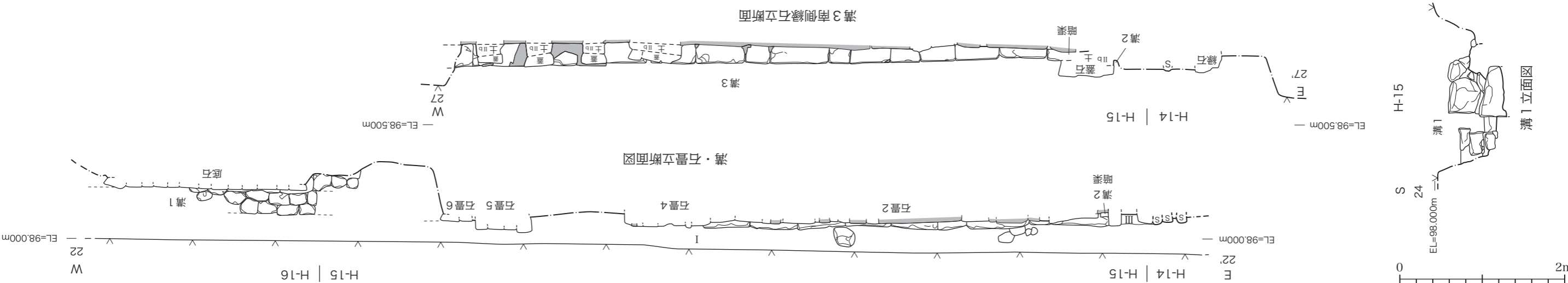
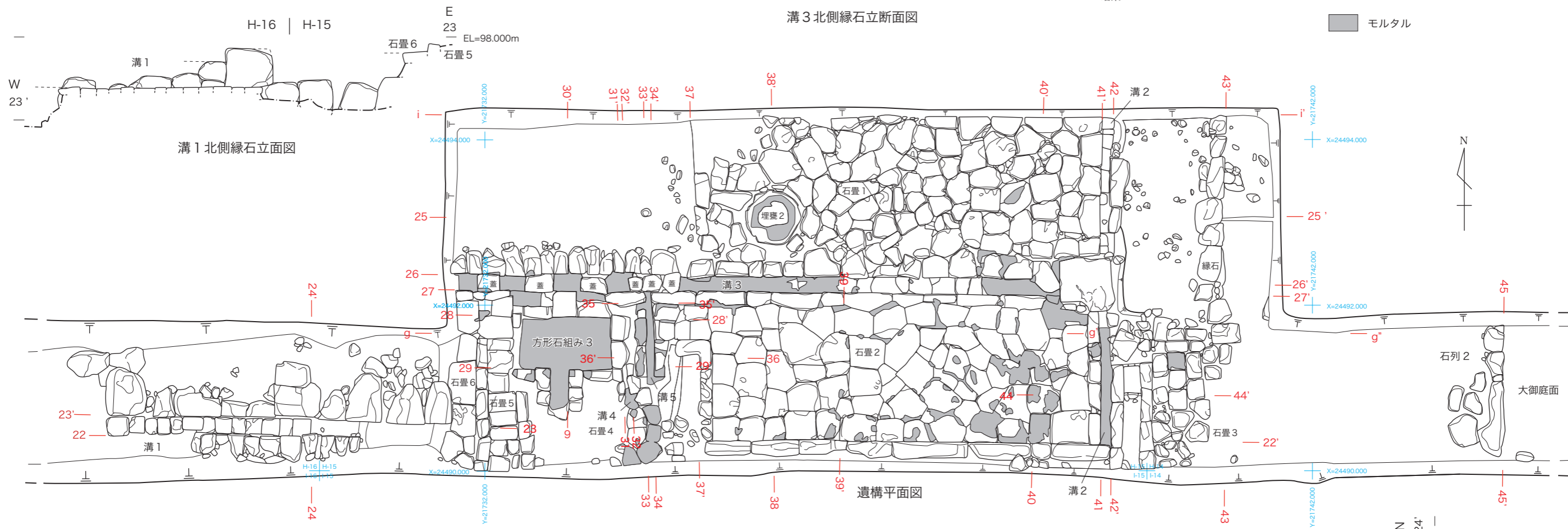
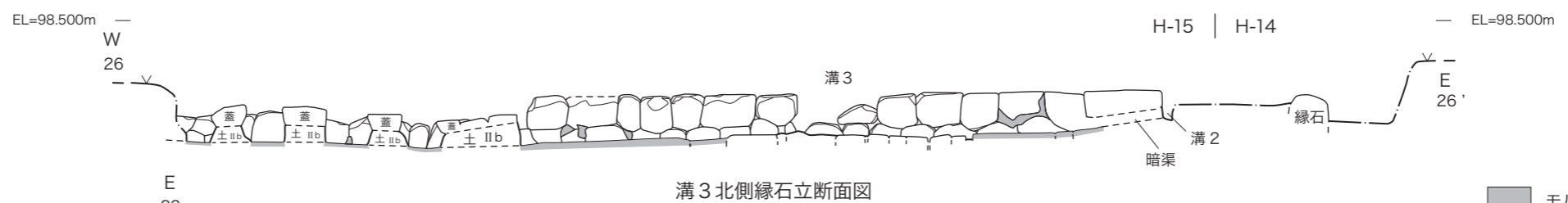
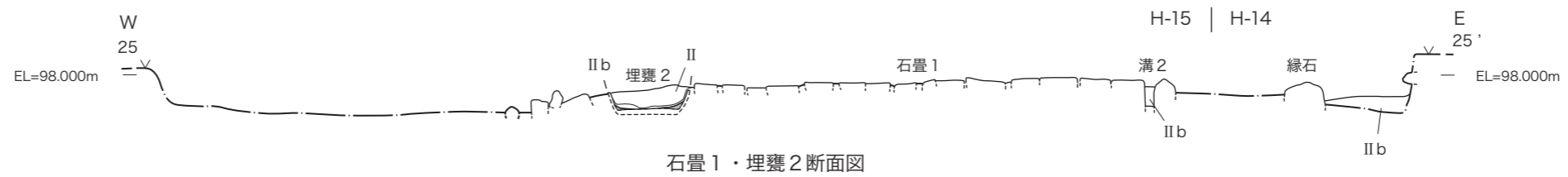


暗渠内部南側 立面図

第15図 トレンチ2遺構1 (石牆根石、暗渠ほか)

モルタル





第16図 トレンチ2 遺構2 (溝、石畳、埋甕ほか)



## 暗渠

暗渠はH-16グリッド西側に検出した遺構である。先述した暗渠石積み及び暗渠上石畳の暗渠部分にあたり、東側は戦後の開発により破壊されている。残存するサイズは東西方向に最大で約390cmを測り、底面の勾配は西へ5°下ることから、排水は東から西へ行われていたことがわかる。西側の排水口は高さ44cm、幅40cm、東側は高さ48cm、幅34cmである。暗渠内部は石灰岩の切石により密に組まれている。積み石は側面及び底面で縦横20cm、控えが30cm前後、天井は縦18cm、横60cm、奥行き60cm前後の板状切石で溝を覆うように敷設され、その上部に土を入れ、石畳を据えた上でつき固めている。底面の大部分は排水を円滑にする目的でモルタルが塗布されている(図版37・38・39-1・2)。

この暗渠を調査中、排水口に鉄製の缶1と金属製の鍋が入る状況が確認された(図版37-3・4)。その形状と錆化が進んでいない点から、戦中か戦後の遺物であることが考えられたが、確認のため記録を取りつつ取り上げを行った(図版37-5)。最初に取り上げたのは、缶1と缶2の蓋、アルミ製の鍋である(図版37-6)。この缶2の蓋には、紙のラベルが貼られており、印刷による文字と手書きの文字が確認できる(図版37-7)。ラベルの左側には縦書きの印字で「・・年度小作料」、その下部に横書きで「¥」の印字と、その右に続けて手書きにより「21・・」の文字が確認できる。小作料を納めた缶であろうか。

続いて、缶1の下から確認されたアルミ製鍋であるが、この中には土砂が堆積しており、陶磁器製の碗が一部露出していたことから、これを確認するために鍋内の土砂を慎重に除去した(図版38-1)。その結果、内部には磁器製の色絵碗が1点のみ確認された(図版38-2・第66図94)。

この缶1を取り上げ後、暗渠内を確認したところ、更に缶2が横になった状態で残されており、その中及び前面に漆製品が確認できた(図版38-3)。この漆製品は発掘当初、暗渠内が暗い上、埃に覆われていたことから性格が判然としなかったが、照明をあてて確認することで、製品が位牌であることが判明した(図版38-4)。位牌は缶2に入った本体部と、その手前に台座がはずれた状態で配置されている。この位牌は、表面は朱塗りにより原形をとどめているように見えるが、その内部の木胎部は腐食が進んでいることが想定できたため缶2ごと取り上げ(図版38-6)、埋蔵文化財センターに持ち込み、まず缶に入った状態で写真撮影を行った(図版38-5)。その後、クリーニングを行い、位牌に残された文字の痕跡を確認するため、赤外線照射による確認、撮影を行い、腐食をくい止めるため、保存処理及び分析を委託した。この詳細については、遺物及び自然化学分析の項で報告する。

次に、位牌が入った缶2を取り上げると、その奥に缶2と同様な体勢で缶3が確認できる(図版38-7・8)。蓋が南側にはずれた状態で確認されるが、内部及びその周辺には何も残されていなかった。

## 溝1

ここで溝1としたのは、前記した暗渠の西側、H-16・17にまたがって検出された遺構を指す。この溝は西側が戦後の開発により破壊されているが、平・断面図で確認すると、かつては西側暗渠とつながっていたことが想定できる(図版37-1)。しかし、検出時は分断され、暗渠の天井部分が残されていないことから、ここでは暗渠と分けて溝として報告しておく。溝は東西に連なり、残存する範囲で約250cm、幅24cm、深さ30cm前後である。底面の勾配は西へ2°下がるため、西側への排水を目的に敷設されたことがわかる。この溝は東側に行くと後述する石畳6の下に位置しており、内部の堆積土は、出土遺物から戦後の堆積でないことから、ある時期に溝付近で建物の建て替えなどが行われ、その際に埋め殺されて溝として機能しなくなったことが考えられる。なお、溝の側石が外された地点の堆積土からは、清代の茶器類が出土している(図版39-5)。

第8表 暗渠・溝1

遺構名	グリッド	サイズ(cm)			底面 傾斜角	備 考
		長さ	高さ (深さ)	幅		
暗渠	H-16	390	44	40	西下5°	H-16・17の溝1につながる 新御殿築造により役目を終える
溝1	H-16・17	250	30	24	西下2°	H-16・18の暗渠につながる 新御殿築造により破壊



1. トレンチ2 西側 (H-16・17) 遺構平面 (画像上が北)



2. 石積み根石・暗渠ほか平面 (画像下が北)



3. 暗渠石積み立面 (西から)



4. 暗渠排水口遺物出土状況 (西から)



5. 暗渠内遺物取上げ状況



6. 暗渠内出土遺物 (缶1・アルミ鍋)



7. 缶2底板表面のラベル

図版37 トレンチ2遺構① (石積み根石・開渠1暗渠・石畳)・暗渠内遺物関係画像①



1. 暗渠内出土 鍋内の発掘



2. 鍋内遺物出土状況



3. 暗渠内缶2・位牌出土状況(西から)



4. 缶2内遺物出土状況拡大(西から)



5. 缶2内位牌



6. 暗渠内位牌・缶2取り上げ状況



7. 暗渠内缶3出土状況(東から)



8. 暗渠内缶3出土状況(西から)



1. 暗渠断面（東から）



2. 暗渠断面及び堆積状況（東から）



3. 溝1検出状況（西から）



4. 溝1内堆積状況（東から）



5. 溝1破壊部堆積土内遺物出土状況

### 石畳1

石畳1としたのは、H-15グリッド北側拡張部に検出した遺構を指す。石畳は確認できる範囲で東西に484cm、北側がトレンチ外にのびるが190cmが検出される。表面は被熱により変色している。敷石は20～40cm大の不規則な形状の切石を亀甲状に敷き詰め、一部の目地はモルタルによる目張りがされている。南及び東側には縁石を配し、それぞれ溝が敷設されている。西側は戦後の開発のためか、石畳が見られない箇所が存在する。また、石畳内に1ヶ所、水甕の底部が埋め込まれた状態で検出されていることから(埋甕2)、この石畳1は屋外に位置していたことが想定できる。

### 石畳2

石畳2は、石畳1南側の溝3を境に検出した石畳である。四方に縁石を有し、北及び東側には石畳1にも接する溝2が敷設される。そのサイズは、東西に465cm、南北に200cmである。表面は被熱しており、敷石は20～40cm大の石が使われるが、40cm大の大きめの石を多用しており、石畳1よりも丁寧に敷かれている。また、その目地の大半はモルタルで目張りがされ、この点でも石畳1と異なる。石畳は一部で歪み、その隙間から下部は空洞になっている状況が確認できることから、石畳下に暗渠が敷設されている可能性がある。この点と石畳周辺に溝が巡らされていること、次に石畳の目地がモルタルで丁寧に埋められている点、さらに西側には方形石組み3(トイレ遺構)が設置されていることから、本遺構は建物内に位置する水場であった可能性がある。

この石畳2の直上からは、明治期以降に焼成された国産の陶磁器類が多数出土している。特に色絵や錦手・染付類の製品は量・種類とも豊富で、戦前まで当地で使用していた陶磁器類の組成をうかがい知ることができる(巻頭図版9、第22図)。

### 石畳3

石畳2の東側に溝をはさんで検出した石畳である。東側が破壊を受けているとみられ、当初のサイズは不明であるが、東西110cm、南北180cmが残る。敷石は20cm内外の切石を南北方向に3列並べるように、やや規則性を持たせて敷かれる。屋根伏せによると、新御殿から北之御殿への渡り廊下が存在した地点にあたることから、これに関連する遺構であることが考えられる。この表面にはモルタルの痕跡が残る。

### 石畳4

石畳2西側縁石をはさんで検出した石畳である。東西約50cm、南北110cmと小規模で、20cm内外の石を不規則に敷く。表面にモルタルが張られるが、後述する方形石組み3よりも低いレベルにあることから、両遺構には時期差が存在する可能性がある。

### 石畳5

方形石組み3の西側に位置する石畳である。東西70cm、南北は検出範囲で170cmを測る。長方形の切石を南北に3列並べており、北側の一部は方形石組み3により破壊されていることから、築造された先後関係を読むことができる。

第9表 石畳1～6

遺構名	グリッド	サイズ(cm)		備考
		東西	南北	
石畳1	H-15 北拡	484	190～	新御殿北側建物外
石畳2	H-15	465	200	新御殿北側建物内
石畳3	H-15	110	180～	敷石の配置から暗渠になる可能性あり 渡り廊下部分か
石畳4	H-15	90	100～	方形石組み3の下部に位置するため石組み以前か
石畳5	H-15	70	180～	敷石の配置から暗渠になる可能性あり
石畳6	H-15	45	170～	西側の溝を埋めて敷設される

石畳6

石畳5の西側に接して敷かれた石畳である。掘削範囲は東西45cm、南北170cmである。敷石は石畳2に似るが、モルタルによる目張りはみられない。大半が戦後の開発により破壊されるが、その西側の断面には溝1が本石畳に埋め殺された形で検出されており、遺構の先後関係が理解できる。

溝2

石畳1・2の東側を南北に走る溝である。検出範囲で南北390cm、幅12cm、深さ12~30cmと小規模で、底面の傾斜は北側部分で南に約10°下るが、南側は傾斜しない。この南北の境界部には溝3が直行しており、そこから南への排水を目的に敷設されていることがわかる。本溝の底面は、石畳2の範囲のみ底面にモルタル張りが施されている。なお、この施工法については、石畳1の破損箇所から、縁石を配置後、底石を敷いたことがわかる。溝内からは被熱した瓦類とともに、青銅製の方位磁石が1点出土している(図版40-2)。

溝3

石畳1・2の間に東西方向へ走る溝である。長さは検出範囲で390cmを示すが、東側の一部は破壊されている可能性があり、西側はトレンチ外に及ぶため全長は不明である。その深さは、石畳1が石畳2よりも約10cm高く敷設されているため、石畳1の南側縁石となる北壁で28~40cm、石畳2北側縁石の溝南壁では15~28cmを示している。底面はモルタルが塗布され、西側に3°下ることから、前記した溝2からの水を取り込み、西側への排水を目的としていることがわかる。

なお、この溝の内部には木炭を多く含むII b層が堆積しており、その中から石畳2直上で出土する陶磁器類と共通する遺物が出土している。特に明治期以降に製作された、肥前や瀬戸美濃産といった国産の色絵や染付の碗・小碗類の破片が集中して出土しており、この付近で使用されていた陶磁器類の様相を示している。

第10表 溝2・溝3

遺構名	グリッド	サイズ(cm)			底面傾斜角	備考
		長さ	高さ(深さ)	幅		
溝2	H-15・H-15北拡	390	12~30	12	北側：南下10° 南側：0°	北側は屋外でモルタル張り 南側は新御殿建物内の溝
溝3	H-15北拡畦	730~	北側縁石：28~40 南側縁石：15~	20	西下3°	新御殿建物境界部の溝

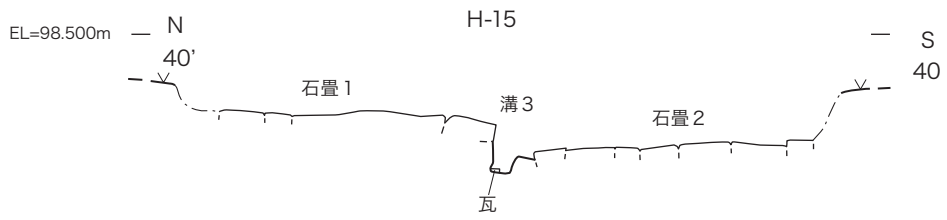


1. 石畳1~3、溝2・3検出状況(南東から)

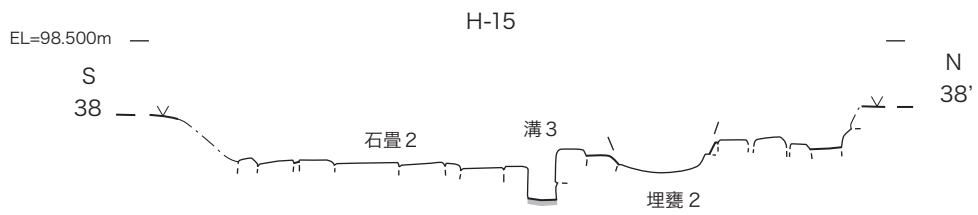


2. 溝2内遺物(方位磁石)出土状況

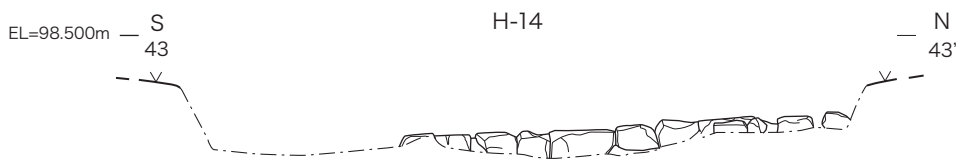
図版40 トレンチ2遺構④(石畳、溝2・3)



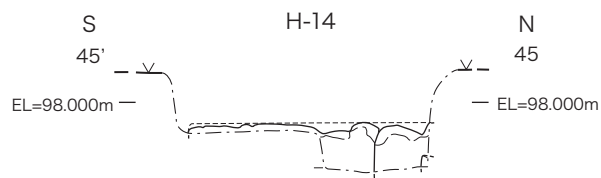
石畳1・2断面図



石畳2・埋甕2断面図



縁石立面図

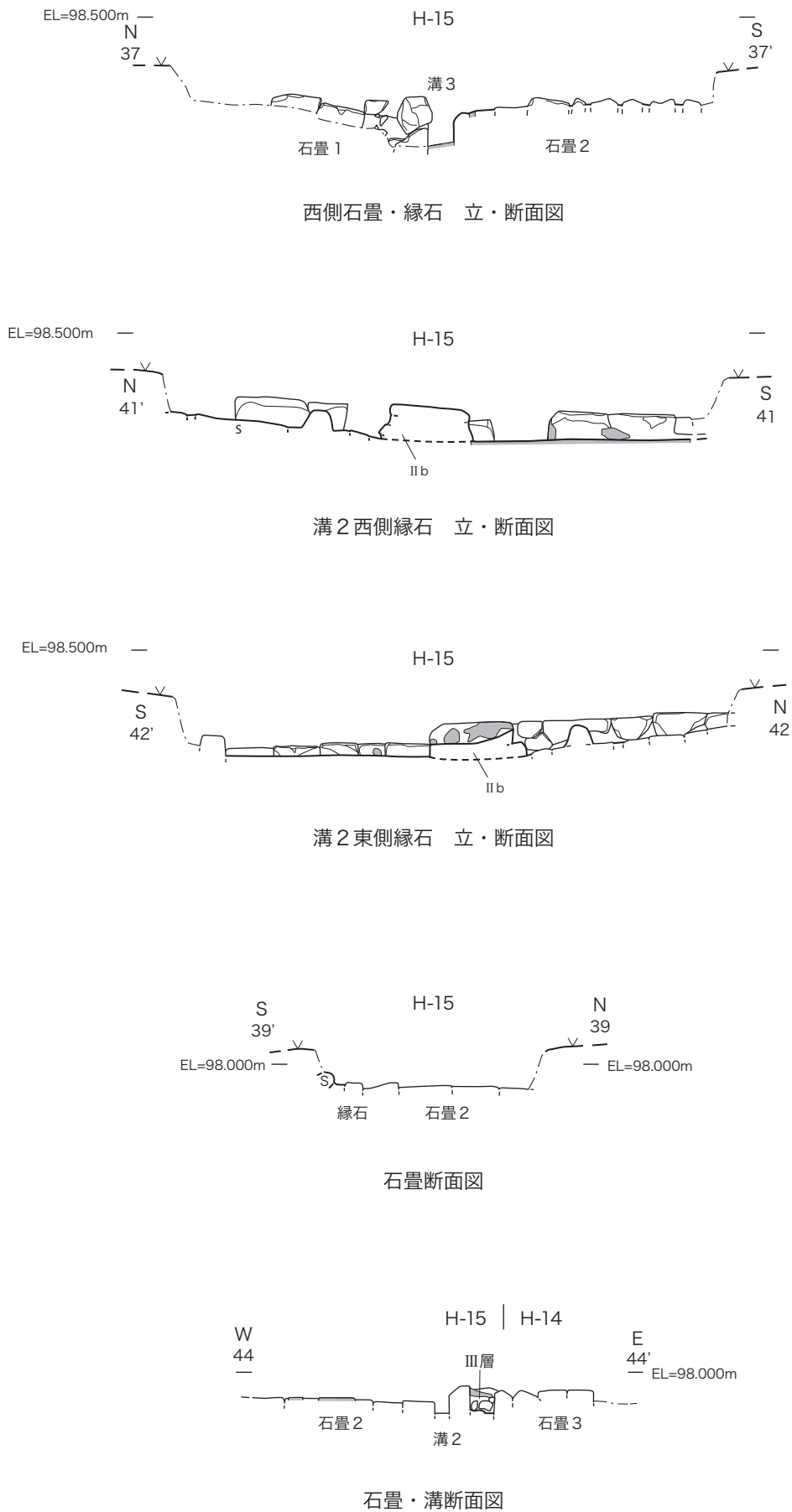


石列2立面図

モルタル



第17図 トレンチ2遺構3 (石畳立・断面図)



第18図 トレンチ2遺構4（石畳立・断面図）





1. トレンチ2 中央 (H-14~16) 遺構検出状況 (画像上が北)



2. H-15遺構検出状況 (画像下が北)



3. 石畳1~4・溝2・3・埋甕2検出状況

図版41 トレンチ2遺構⑤ (石畳ほか)

方形石組み3 (トイレ遺構)

H-15グリッドより方形石組み3が検出された。遺構は石灰岩を方形に組み、南側にスロープを設け、底面はこのスロープにつながるように北側へ傾斜させている。この構造から、方形石組み部分は便槽で、その南側がトイレ本体部にあたると思われる。遺構内面は、スロープを含めモルタルが薄く塗られており、一部はがれた箇所に15~30cm大の石灰岩が相方積みされた状態で確認できる。

発掘当初、方形石組みの上面には板状の石灰岩が水平に置かれていたことから、蓋が残存していると思われたが、これを外すと内部は多くの切石を含む転石とII b層が詰まった状態であり、戦災による破壊後に埋没したことが想定できる。遺構のサイズは、東辺で62cm、北辺で105cmの長方形を呈し、深さは南側で50cm、北側で75cmを測り、傾斜角はスロープ部分で50°を示すが、徐々に緩くなり底面部分で10°程度になる。底面を傾斜させる構造は、トレンチ1及び4で確認された方形石組み遺構でもみられ、液体を溜まりやすくすることで汲み取りを容易にしたものと思われる。

また、この石組み東壁の右側上部には、後述する溝4につながる穴が施工されていることが確認されている。この便槽は汲み取り式であり、糞尿以外の液体が入ることは考え難いことから、この溝4の南側あるいは上部には、小便器が設置されていた可能性がある。

なお、この遺構内及び周辺からは、1cm以上もの器壁を有する厚手の青磁・白磁片が一定量得られている。これらはその形状から便器などの衛生陶器の機能が考えられ、中城御殿ではトイレにおいても格調高い調度品が設置されているとともに、大小個別のトイレが存在した可能性を示している。これを実証する目的で、遺構検出中において底面に堆積した土砂を分析した結果、寄生虫卵は検出されなかったが、類似する形状を持つ方形石組み2では寄生虫卵が確認されており、トイレとしての可能性を示している。

溝4

方形石組み3の東側に近接して位置する溝である。前項でも記したが、方形石組み3東壁につながる構造を有する。サイズは南北に40cm、深さ8~20cm、幅は6cm程度と小規模で北側に32°下り、その後西へ曲がって方形石組み3東壁より抜ける仕組みである。この規模と便槽へ至る構造から、小使用トイレに付随する溝の可能性が考えられる。溝の南側にはモルタルの痕跡が残る。

溝5

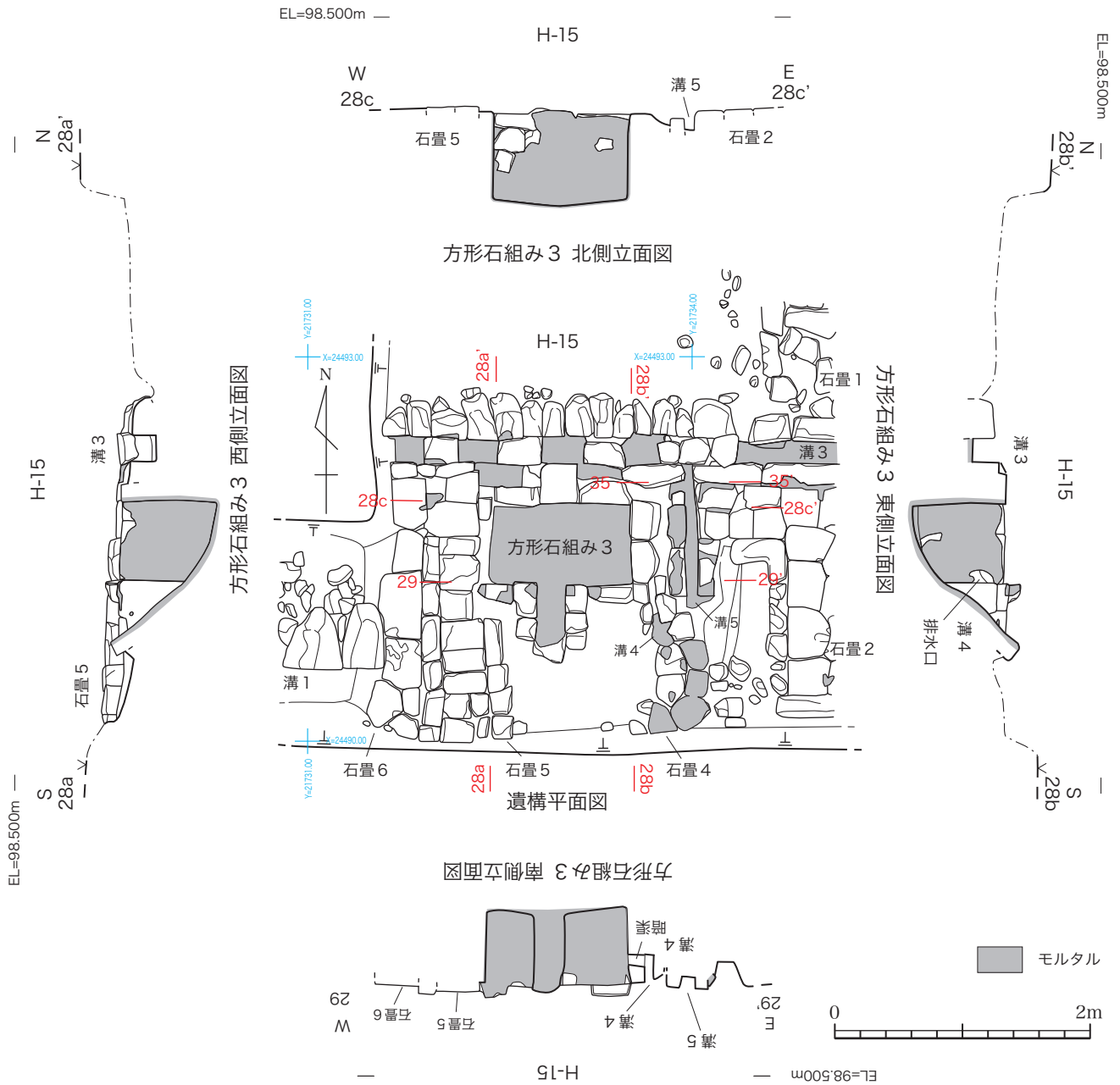
前記した溝4の東側に並列して南北に走る溝で、内外にモルタルが塗布されている。サイズは長さが112cm、深さ4~18cm、幅10cmで北側に10~20°下り、北端で溝3につながる。本遺構は便槽となる方形石組み3に至らず、雨水などを排する溝3につながる点から、糞尿でなく通常の排水を目的としたことが考えられる。周辺からは衛生陶器のほか、骨製・セルロイド製の歯ブラシが数点得られていることを合わせて考えると、本遺構は洗面所などの機能が想定できる。

第11表 方形石組み3 (トイレ遺構)

遺構名	グリッド	サイズ (cm)								底面 傾斜角	備考
		東辺		西辺		北辺		南辺			
		幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ		
方形石組み3	H-15	62	50~72	60	50~75	105	68~75	110	56~62	北下10~35°	全面にモルタル張り

第12表 溝4・5

遺構名	グリッド	サイズ (cm)			底面 傾斜角	備考
		長さ	高さ (深さ)	幅		
溝4	G-17	40	8~20	6	北下32°	北へ流れのちに西へと曲がり方形石組み3東壁に抜ける
溝5	G-17	112	4~18	10	北下10~20°	溝3につながる



第19図 トレンチ2遺構5 (方形石組み3トイレ遺構)



1. 方形石組み3 (南から)



2. 方形石組み3 (西から)

図版42 トレンチ2遺構⑥ (方形石組み3トイレ遺構)

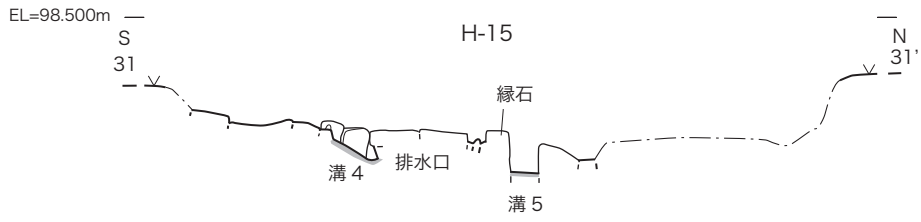


1. 方形石組み3検出状況（北東から）

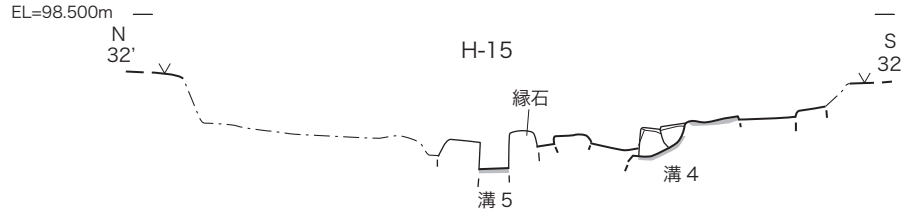


2. 方形石組み3検出状況（南西から）

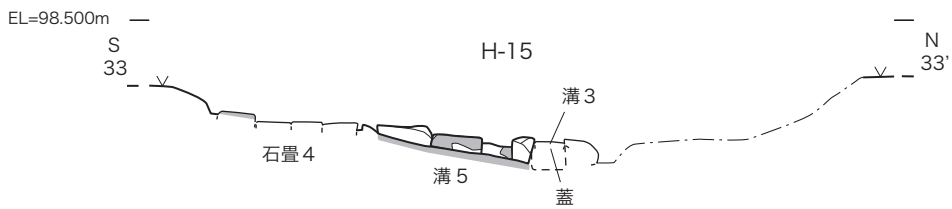
図版43 トレンチ2遺構⑦（方形石組み3トイレ遺構ほか）



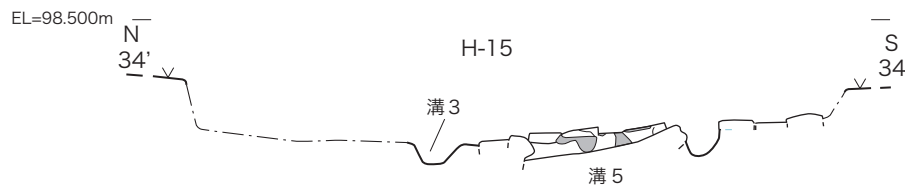
溝4西側 立面図



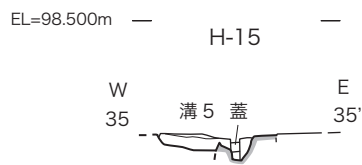
溝4東側 立面図



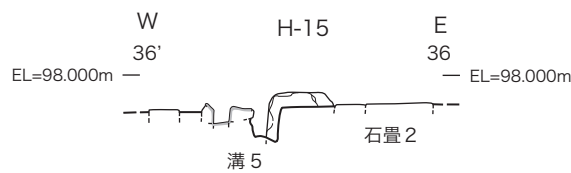
溝5西側 立面図



溝5東側 立面図



溝5 断面図1



溝5 断面図2

モルタル



第20図 トレンチ2遺構6 (方形石組み3トイレ遺構)



1. 方形石組み3発掘前



2. 遺構内衛生陶器・転石出土状況



3. 遺構内堆積半截状況（西から）



4. 遺構内堆積半截状況拡大（西から）



5. 遺構底面土砂サンプリング状況



6. 遺構周辺遺物出土状況（南から）



7. 遺構内東壁



8. 遺構内東壁拡大（溝4から通ずる穴）

## 埋甕1

埋甕1は石畳が集中して検出された地点よりやや東側に位置する。大甕の北側半分がトレンチ北壁に入り込む状態で胴部以下が検出されており、そのサイズは残存箇所で最大径86cm、内底径24cm、内底までの深さが最大55cmである。遺構は木炭を含むII b層に埋没した状態で検出され、甕の内部には多くの破砕した瓦片のほか、同一個体と思われる甕の口縁・胴部片が底面まで落ち込んだ状態で出土している。このことから、甕の内部は破壊直前まで空洞あるいは水で満たされていたことがわかる。

また、大甕の周辺は細かなサンゴ砂利層により面を構成しており、西側には基壇状の石列2が確認できる。屋根伏せによると、この地点は新御殿と大御庭の境界部分にあたり、埋甕は大御庭の東西縁辺部にそれぞれ3ヶ所ずつ設置されていたとされる。戦前の古写真にも同地点と思われる箇所が見て取れることから(図版4・25)、本遺構は位置的に大御庭西側に3ヶ所設置された埋甕の北端部分にあたると思われる。

## 埋甕2

埋甕2は、石畳1内に設置された遺構で、大甕の底部のみが検出されている。サイズは残存する最大径が66cm、内底径が44cm、内底までの深さは最大で16cmを測る。前記した埋甕1に較べると浅く埋められ、一見不安定に見える。しかし、甕本体の底径が広い上、甕を設置後に周辺を石畳で囲う工法をとることから、その敷石により甕底部周辺が強固に固められ、安定感を増している。

甕の内底部は亀裂が走るが、モルタルにより埋められ補修されている。また、内部の土砂は基本的にII b層で構成されることから、埋甕1と同様に破壊直前まで空洞あるいは水で満たされていたことが考えられる。この内部の土砂掘削時には、陶磁器類や金属、ガラス製品のほか、沈金が施された漆製品が出土している。

本遺構が検出された地点は、屋根伏せによると新御殿の裏手軒下部分にあたることが想定でき、軒を伝って落ちる雨水を貯える目的で設置されたことが想定できる。

第13表 埋甕1・2

遺構名	グリッド	サイズ(cm)			備考
		最大径	内底径	深さ	
埋甕1	H-14	86	24	55	大御庭西端埋甕の一部か
埋甕2	H-15北拡	66	44	16	甕設置後に石畳敷設 亀裂を漆喰で補修

## 石列2

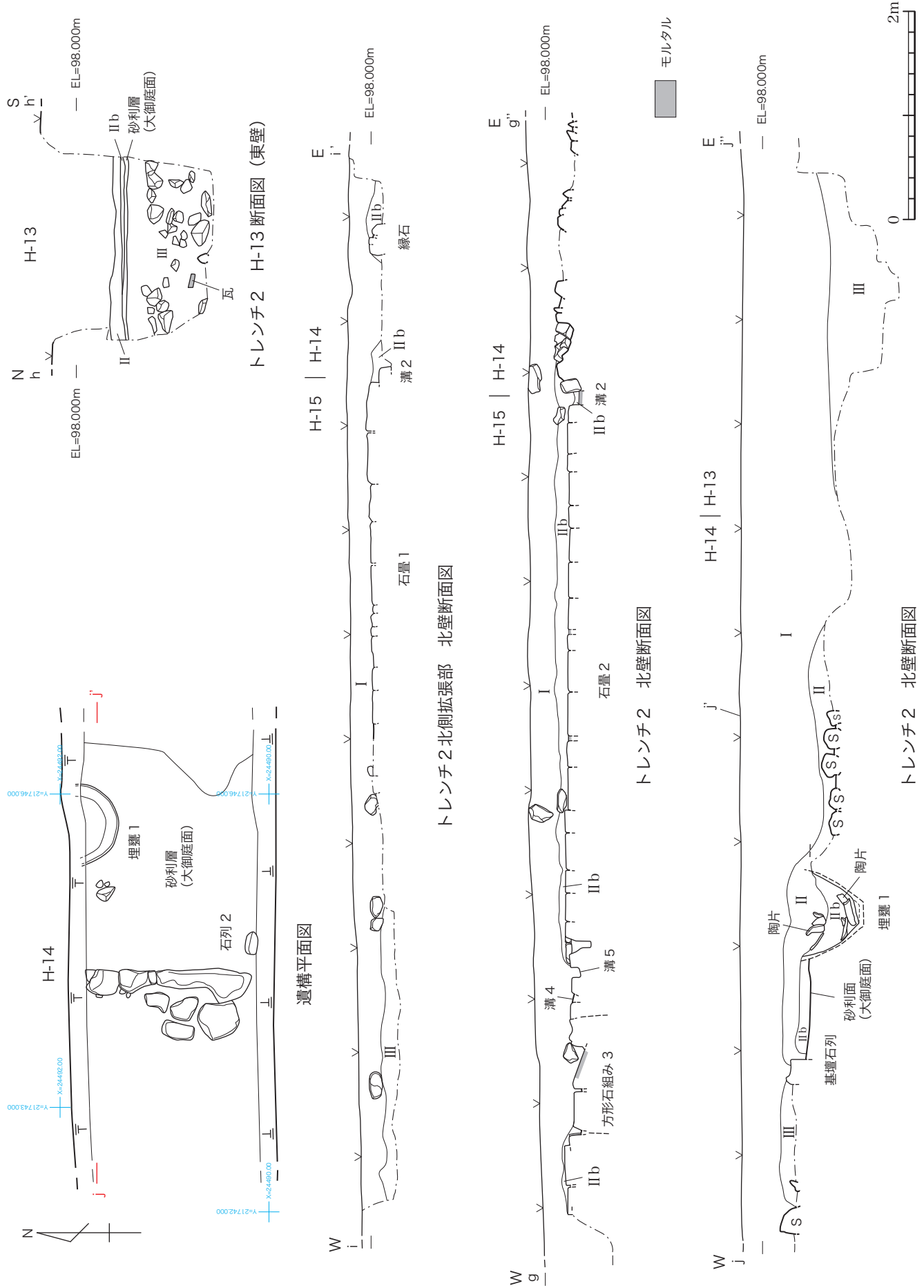
石列2としたのは、H-14グリッド埋甕1西側に、トレンチを南北に縦断する形で検出された遺構である。琉球石灰岩の切石を並列しており、表面は被熱により変色して脆くなっている。石列の全長は、この南北がトレンチ壁面に入るため不明であるが、検出範囲で170cmを測り、高さは天端が破壊されるが大御庭面から最大で35cmが残る。屋根伏せによると当地は新御殿と大御庭の境界部にあたることから、新御殿の基壇であることが想定できる。またその北西部には類似する石列がみられ、屋根伏せから判読するとそこには北之御殿や御寝廟殿へ通ずる渡り廊下が存在しており、石畳3も合わせ渡り廊下の下部遺構であることが想定できる。

第14表 石列2

遺構名	グリッド	サイズ(cm)		備考
		高さ	長さ	
石列2	H-14	35	170~	トレンチ南北の壁面に入る 天端破壊 新御殿の基壇か

## 大御庭面

大御庭面はH-13・14グリッドで検出されている。5cm内外のサンゴ砂利層により構成されており、下層は造成に用いられた第III層が厚く堆積している。庭の規模は、屋根伏せ図から推測すると東西約20m、南北約15mの長方形である。また、戦前の航空写真には、その東西縁辺に3ヶ所ずつ防火用の埋甕が設置されている状況がみえるが、今回の調査により埋甕1として検出されており、この情報と一致する。



第21図 トレンチ2遺構7 (埋甕1ほか)





1. 埋甕1・石列2・大御庭面検出状況(南から)



2. 埋甕1・石列2・大御庭面検出状況(東から)

図版45 トレンチ2遺構⑨(埋甕1・石列2・大御庭面検出状況)



1. 埋甕2検出前(画像上が北)



2. 埋甕2内半截状況



3. 埋甕2内遺物検出状況(画像下が北)



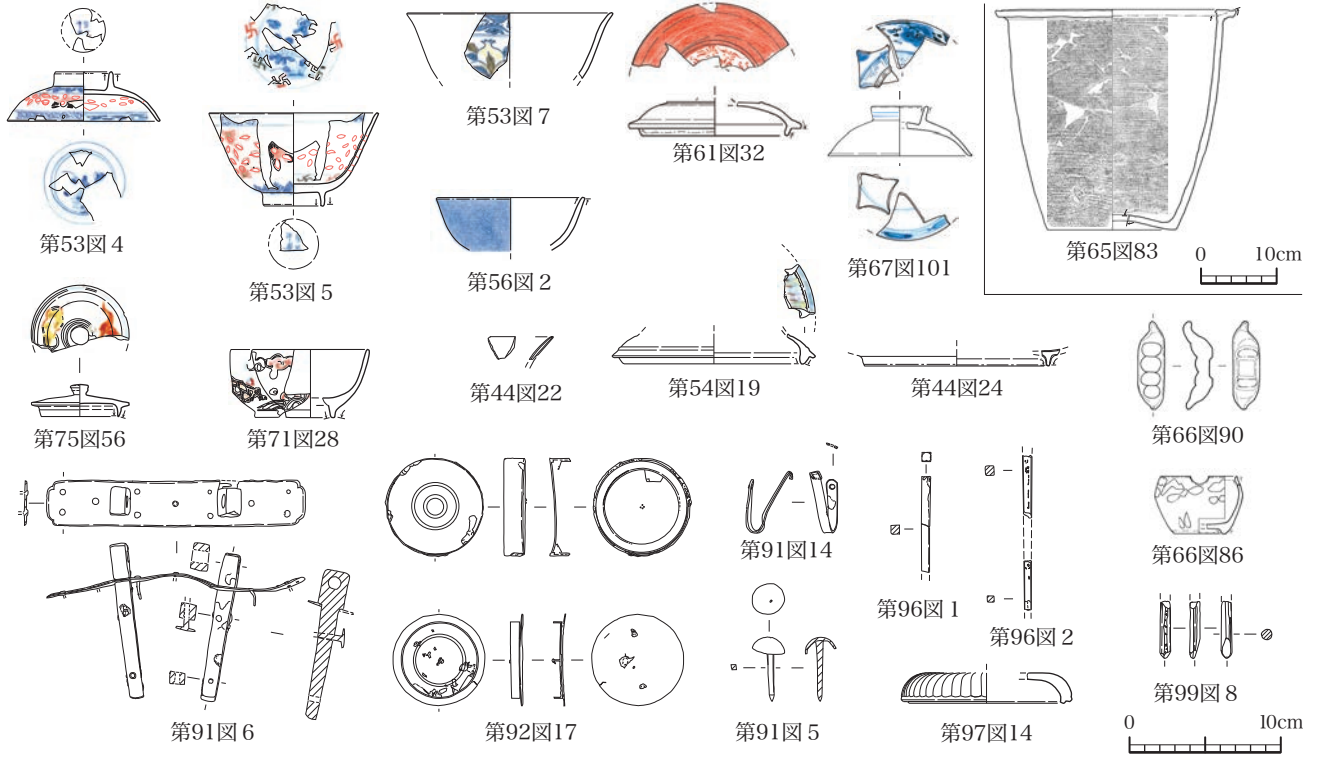
4. 埋甕2内遺物検出状況拡大(左:ガラス製器、右:金属製品)



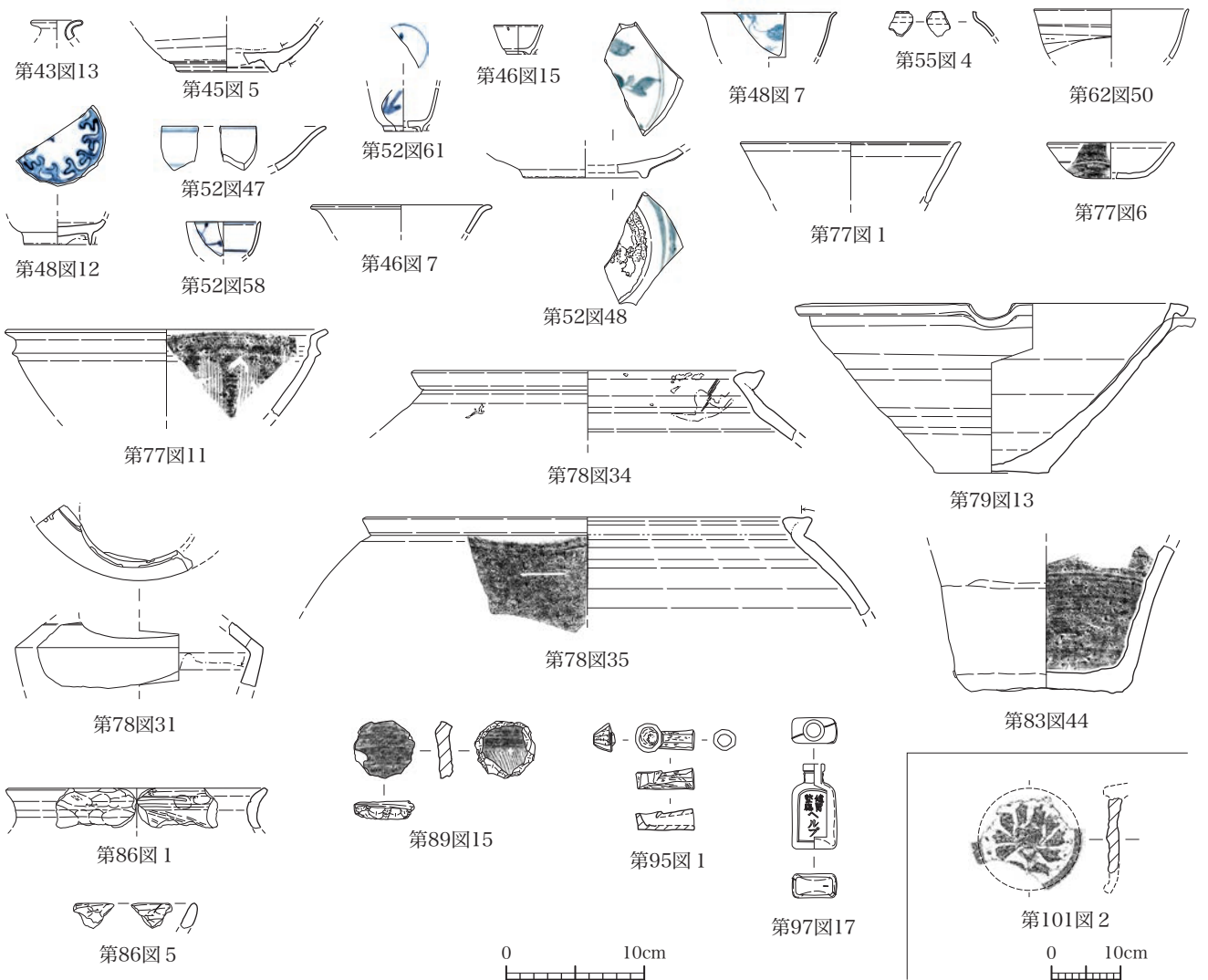
5. 埋甕2底面漆塗膜出土状況



6. 埋甕2内完掘状況(画像下が北)



第22図 トレンチ2遺構直上・遺構内(IIb層)出土遺物



第23図 トレンチ2(III層)出土遺物

### トレンチ3

トレンチ1と2の中間にトレンチ3を任意に設けた。トレンチは遺構の向き及び規模にあわせる形で、西北西～東南東を長軸として約10m、幅約5mの長方形に設定した。中城御殿当時の様相は、古写真の一部にみられるのみで判然としない。県立博物館当時は、古井戸の背後に位置する小丘陵で施設は存在しない。

検出の経過を解説すると、まず除草作業を行い地表をあらわにする(図版47-1)。その後人力により発掘を開始する(図版47-2)。土砂とともに巨大な切石を除去し続けると、徐々に遺構が見え始める(図版47-3)。踊り場部分は特に崩落した石が多く撤去に難渋した(図版47-5)。切石は門及び周辺を構成していたものと思われ、中には門の部材を差し込むホゾ孔と思われる施工がされた石が数点見られる(図版47-7・8)。本トレンチから出土した切石は、風化が進んでおらず被熱の痕跡も見られないことから、今後、本遺構が復元されることがあれば使用可能と思われたため、他地点の石とは分けて敷地内に集積している。遺構の状況は次のとおりである。

#### 門跡

門跡はトレンチ3の南東側に検出した。古写真にその一部がわずかに写り込むが(図版23)、聞き取りによっても得られておらず判然としなかった。古写真は北東側から撮影されたもので、御内原西側を南北に走る浮道に突き当たるように敷設された階段を数段上ると、門の入口に至る状況が確認できる。

検出した門跡は浮道の階段から1段高くなっており、間口となる東辺は176cm、西辺175cm、北辺129cm、南辺130cmの東西に長い長方形を呈する。石材は東辺の縁石で縦20cm、横50cm、奥行き20cm前後の切石を用い、内面は40～50cmの不規則な形状の石を亀甲状に組み、目地をモルタルで埋める。この門の隅3ヶ所には礎石が残されているが、当初は4ヶ所存在していたと思われ、これに門を支える柱が設置されていたことが考えられる。礎石は石畳の面から4cm高く、20cm四方の切石を用いる。このうち2点の礎石上面には、木柱がずれないように突起状のホゾがしつらえられている。これにより、門跡にはかつて4本の木製柱と扉が設置され、板屋根が葺かれていたことが想定できる。この想定の見直しとして、図版23の古写真をみると、西辺に柱と桁及び扉が写されている。さらに写真の細部を観察すると、柱の高さは扉の高さを上回ることから、当初は各所に存在した中門にみえるような板屋根が存在していた可能性がある。

なお、この門扉のサイズを遺構から推定すると、礎石2・3の西側には扉を止めるための段差が設けられていることから、扉は礎石2・3間にあり、東側に開く構造であったことが考えられる。その間隔は134cmであることから、観音開きの扉1枚の幅はその半分、67cm以内となる。図版23においても、開いた扉の幅が間口より狭いことから、2枚の扉が東側へ観音開きする構造であったことがわかる。

次に門両側の石牆の高さについては、天端が残されていないことから不明であるが、この南北に現存する石牆の天端高である標高101.4mをあてると、門跡面から270cm前後であったことが想定できる。

第15表 門跡

遺構名	グリッド	サイズ(cm)				傾斜角	備考
		東辺	西辺	北辺	南辺		
門跡	G-17	176	175	129	130	北東下3°	四隅に礎石(1点欠失)

第16表 門跡内礎石

礎石No.	グリッド	サイズ(cm)					礎石間の距離		備考		
		東辺	西辺	北辺	南辺	高さ (門踏面から)	端部(近位)	中央部			
礎石1	G-17	20	20	22	20	4	70	-	90	-	ホゾあり、モルタル補修痕
礎石2	G-17	20	21	20	20	4		132	154	ホゾあり	
礎石3	G-17	20	20	20	20	4	(68)	礎石1・4間 (130)	(88)	礎石1・4間 (150)	欠失のため( )内は推定値
礎石4	G-17	(20)	(20)	(20)	(20)	(4)					



1. 階段跡検出前(除草後・東から)



2. 検出作業状況(東から)



3. 検出途中(東から)



4. 階段跡検出状況(東から)



5. 階段踊り場検出前(北から)



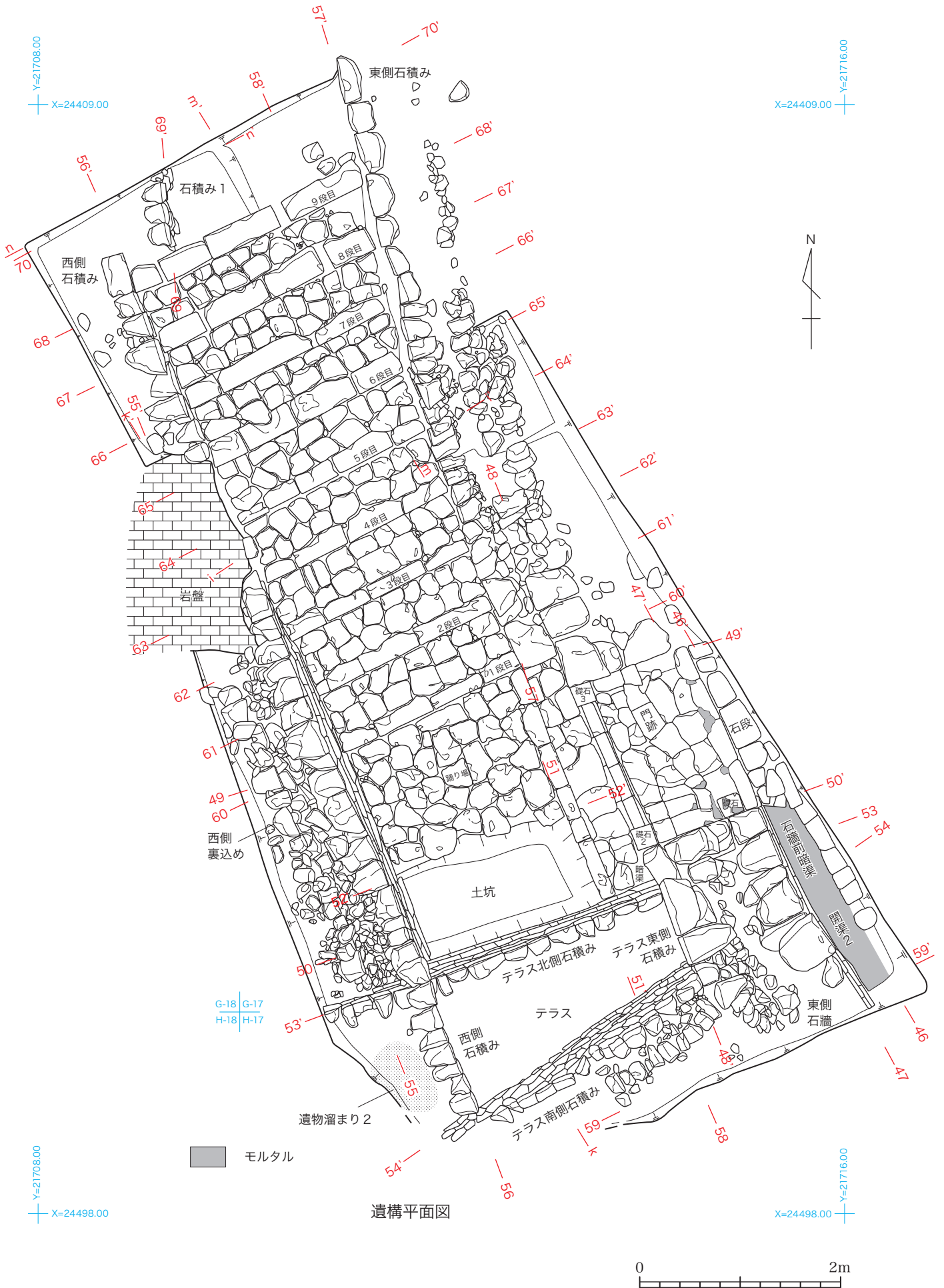
6. 階段踊り場検出後(北から)



7. トレンチ3出土切石①



8. トレンチ3出土切石②



第24図 トレンチ3遺構1（階段遺構）

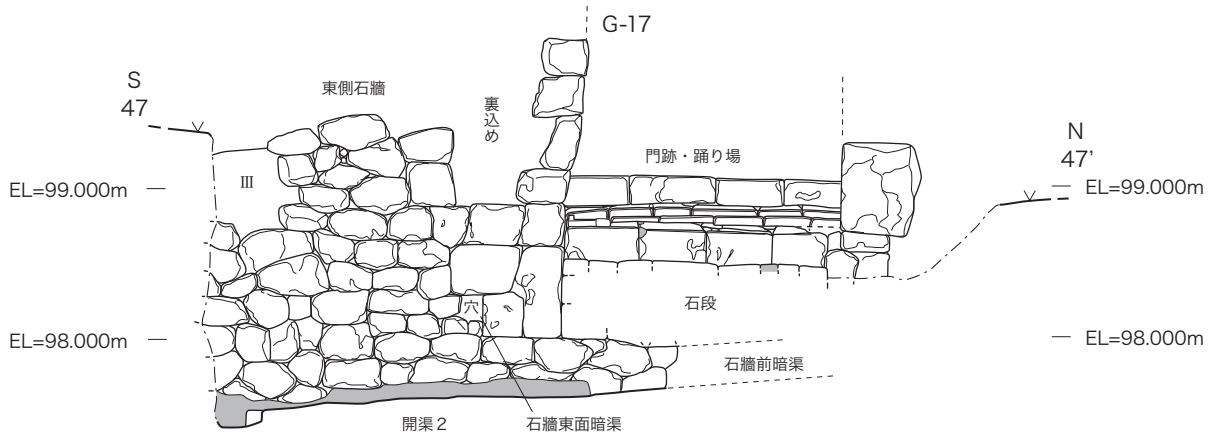


1. 門・階段跡平面 (画像右が北)

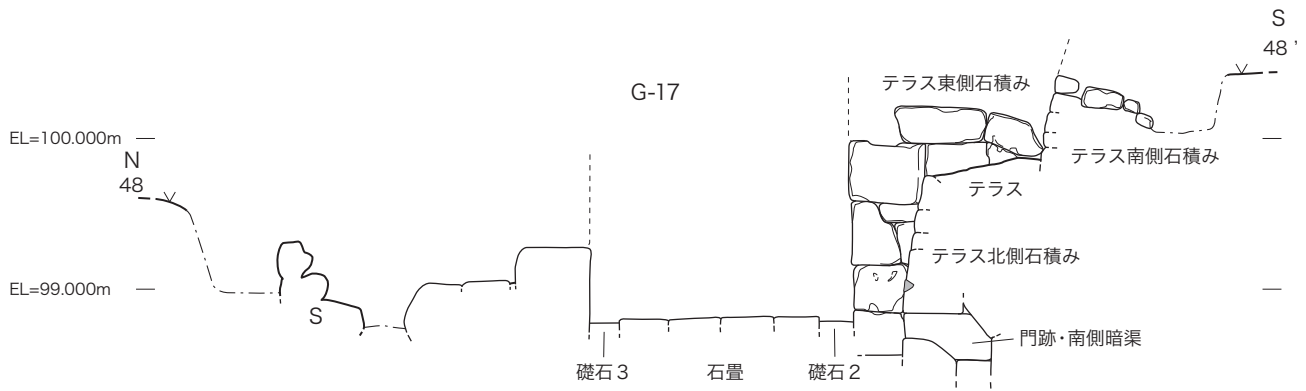


2. 門・階段跡南側テラス部分 (北から)

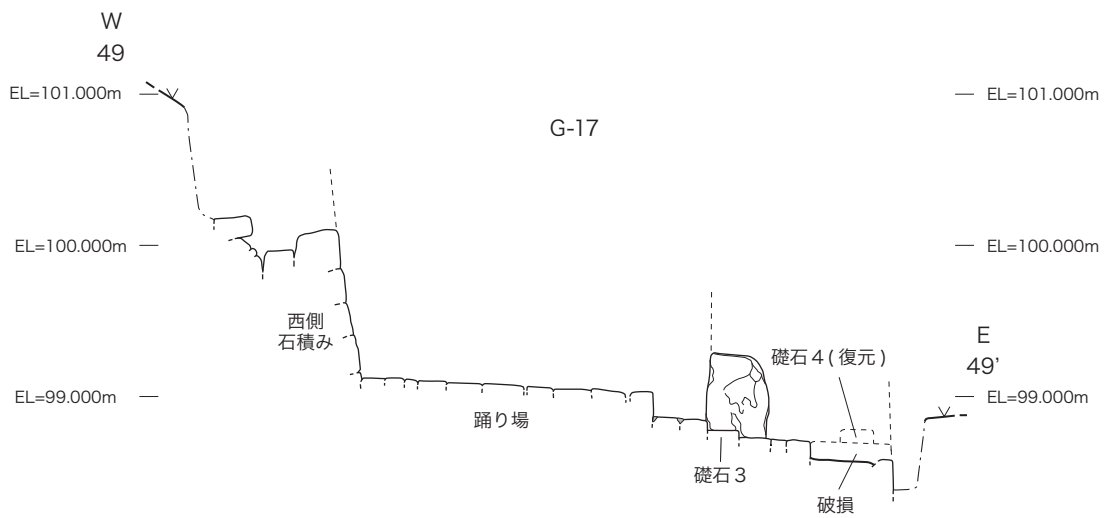
図版48 トレンチ3遺構②(門・階段跡)



石牆・門跡立面図



門跡・石畳断面図



門跡・踊り場断面図

モルタル



第25図 トレンチ3遺構2（門・階段踊り場）

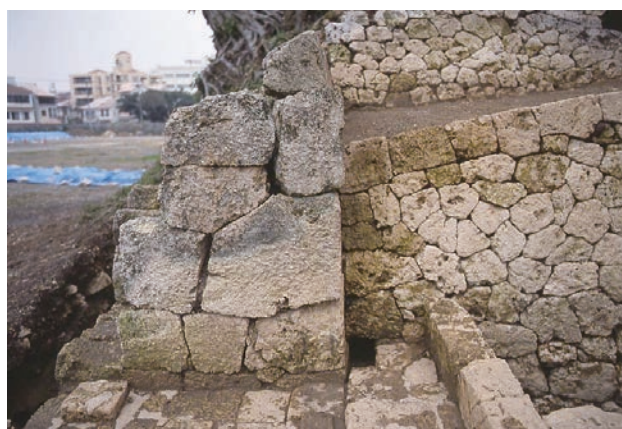




1. 門跡正面(東から)



2. 門跡裏面(西から)



3. 門跡南側(北から)



4. 門跡礎石(北東から)



5. 門跡北側(南から)

図版49 トレンチ3遺構③(門跡)

階段踊り場

門跡の西側に接して階段踊り場が配される。サイズは門跡から1段上がる階段を含めると、東辺244cm、西辺220cm、北辺230cm、南辺230cmのほぼ長方形を呈する。縁石は縦16cm、横22～60cm、奥行き16cm前後の切石を用い、敷石には30～50cmの石を不規則に施工する。表面は摩滅が著しいことから、人々が頻繁に出入りしていたことを想像させる。

この踊り場の南側に東西約175cm、南北に約90cm、深さは踊り場の面より最大で141cmの規模で、土坑が確認されている。調査当初は、戦時中に被弾した痕跡かと思われたが、周辺の石積みが破壊を受けていないことと、堆積状況及び出土遺物から人為的に掘削された坑であることが判明した。土坑は石畳をはずした上で、岩盤を削りつつ掘り下げられ、更に西側へ掘り進んでいる。土坑内には門や周辺の遺構を構成していた切石が多量に落ち込んでおり、その中に砲弾片をはじめとする遺物が含まれているほか、底面からは土坑の掘削に使用した可能性のあるツルハンが1点出土している(図版50-4、第93図24)。

聞き取り調査によると、戦況が悪化してきた1945(昭和20)年3月下旬～4月上旬頃、御殿に納められた多くの宝物を分散して避難させるため、敷地内の数ヶ所に坑を掘るなどして納めたことが情報として得られていることから、この土坑はそのうちのひとつにあたる可能性がある。なお、避難させた宝物類は、終戦後確認に戻ると、一つも残されていなかったといわれている。

第17表 踊り場・土坑

遺構名	グリッド	サイズ(cm)				傾斜角		備考
		東辺	西辺	北辺	南辺			
踊場	G-17	244	220	230	230	南東下3°		門跡間の石段含む
土坑	G-17	90	90	176	174	-	-	深さ：踊場面より最大141cm

テラス

階段踊り場の南側には、テラス状の平面を構成する石積みが施工されている。テラス面は東辺76cm、西辺140cm、北辺246cm、南辺254cmの東西に長い台形を呈する。このテラス面は四方を石積みで囲われ、褐色の土を入れていることから、かつては観賞用の植物を植え込んでいたことが考えられる。なお、このテラス面は北東下に9°傾斜させており、排水を考慮したことが考えられる。

第18表 テラス面

遺構名	グリッド	サイズ(cm)				傾斜角		備考
		東辺	西辺	北辺	南辺			
テラス面	G-17	76	140	246	254	北東下9°		

テラス周辺石積み

続いて、このテラスの四方には石積みが4本確認されているが、その切りあいから東、南、北、西の順で積まれたことが読み取れる。ここではテラス周辺石積みとして、積まれた順に報告を行う。

**東側石積み：**東側石積みは、御内原と北之御殿を区画する石牆の西面で、門跡の南側石積みも兼ねている。そのため、50cm前後の大型の切石が布積みにより複雑に積むことで強固にしている。残存高は門跡面から約160cm、幅は130cmで傾斜角は86°である。古写真ではその間口が写されている(図版23)。この天端高を北側に現存する石牆の高さをあてて復元すると、門跡面から約270cmとなる。

**南側石積み：**次に南側石積みは北面する石積みで、天端を残すが下部はテラス面に入り、東側は東側石積み当たり、西側は岩盤に接する。高さは最大で80cm、幅300cmで、積み石は天端で縦20cm、横30cm、控えが20cm前後の立面で長方形の切石を並列し、その下部は15～30cm角の石を菊花状に相方積みしている。また、傾斜角は70°でほかの3面より緩く積まれている。



1. 階段踊り場・テラス平面 (画像下が北)



2. 階段踊り場土坑内堆積状況



3. 階段踊り場土坑完掘状況 (画像上が北)



4. 階段踊り場土坑内遺物出土状況



5. 階段南側テラス・側面石積み (北西から)

図版50 トレンチ3遺構④(踊り場・テラス・階段西側石積み)

**北側石積み：**北側石積みは、唯一根石から天端まで残る北面する石積みで、テラスの前面を構成している。踊り場面からの高さは最大で110cmであるが、石積みは岩盤上から積まれており、この場合、最大で170cmの高さを有する。この東端は東側石積み当たり留まるが、西側では西側石積みの中を通過するように交差し、西壁に入り込むため全長は不明である。石積み天端は東側に10°下る傾斜を有する。その積み石は、南側石積みと同様で菊花状の組み合わせを保ち均整に積み、傾斜は80°となっている。なお、本石積みはその一部が古写真に残されており、門の間口奥に石積みの傾斜した天端と積み石が確認できる(図版23)。

**西側石積み：**西側石積みは南側石積み南端を接し、北側石積みをもたぐように積まれた東面する石積みである。天端は残されていない。この北側はテラスの範囲を超え、南から580cm付近の階段3段目まで延びるが、一端岩盤に接して止まる。そして岩盤を超え、階段6段目で再び現れ、階段最上段の9段目で終息する。この時点で合計920cmを測る。積み石は20～50cmの石灰岩を相方積みし、傾斜角は80°前後である。一部でモルタルによる目張りがされるが、この状況は本石積みを分断している岩盤の東面くぼみ部分にも見られることから、石の境界を埋めて強化する目的のほか、表面を平滑にする化粧としての役割も考えることができる。

なお、この石積みを分断する岩盤は、東面及び上面を石積みの面・天端に合わせて削ったとみられ、傾斜角は80～85°を示し、石積みの傾斜角とほぼ同じである。また、この類推に基づき本石積みの高さを復元すると、踊り場の面から240cm、テラス面(北側石積み)から136cm、階段9段目上面から45cmの高さとなる。この高さは、標高で約101.50mであり、調査区北側に残存する石牆天端レベルとほぼ一致している。

**西側裏込め：**上記した西側石積みの裏側より、西側石積みの下地と思われる石積みを確認されている。積み石はサイズが様でなく、雑切石を用いており隙間も多いことから、埋めることを前提として積まれたことが判断できる。石積みは東面しており、西側石積みの裏手に潜り込むことから全形は不明であるが、確認範囲で高さ50cm、幅340cm、傾斜角は80°前後である。

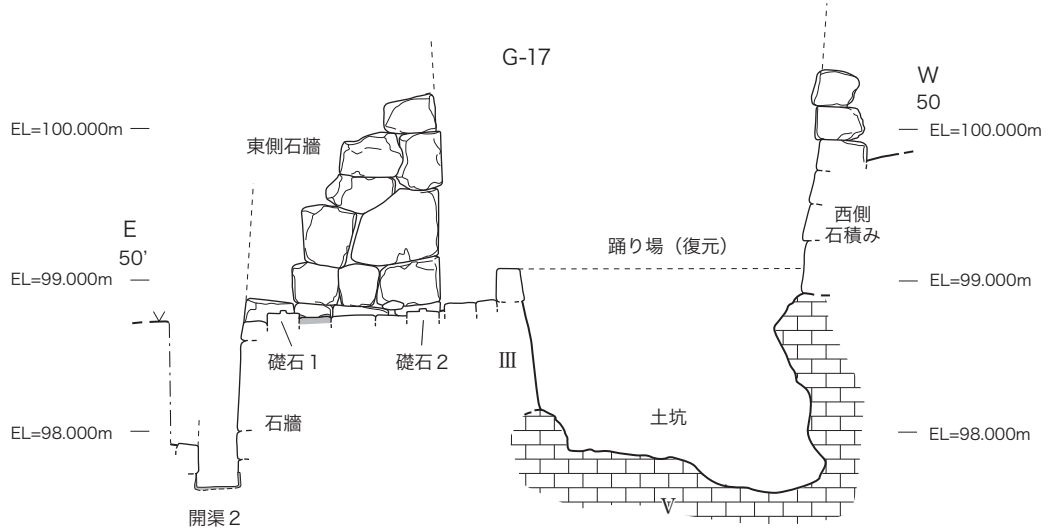
第19表 テラス周辺石積み

遺構名	グリッド	サイズ(cm)		傾斜角	残存		備考
		高さ	幅		根石	天端	
東側石積み	G-17	120～	150	86°	○	×	テラス面内に入る
南側石積み	H・G-17	80～	300	70°	○	○	下部はテラス面内に入り西側は岩盤に接する
北側石積み	G-17	166	350～	80°	○	○	西壁に入る
西側石積み	H・G-17 G-18	155	530	84°	○	×	岩盤に接する(最大922cm) 裏に遺物集中
西側裏込め	G-17・18	50～	340	80°	○	×	西側石積みの土留めか

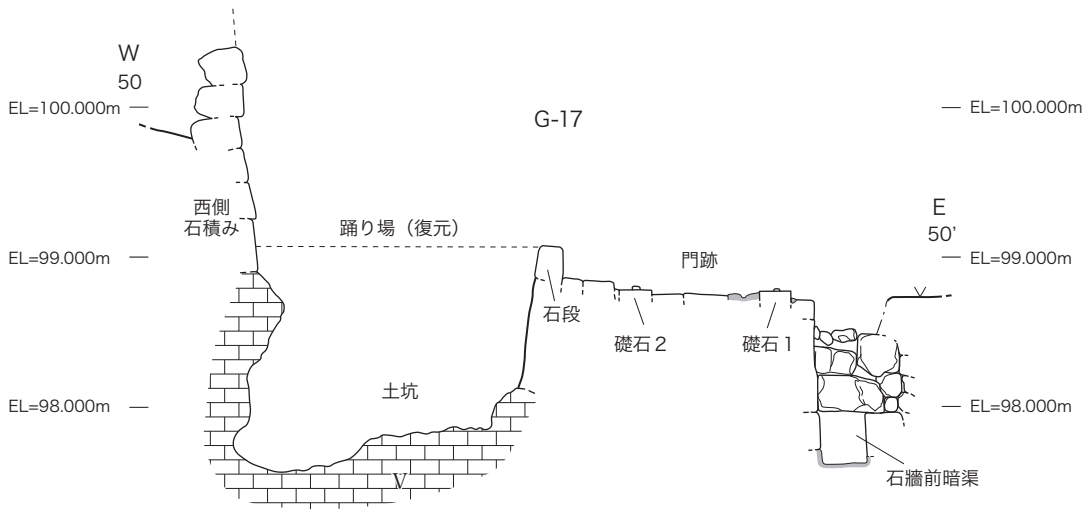
**遺物溜まり2(テラス北・西側石積み裏)**

テラス西側石積み裏側の岩盤沿いより、陶磁器片が集中した状態で確認されている(第24図・図版51-3)。遺物は近代以降に焼成されたと思われる沖縄産陶器が中心となるが、本土及び中国産の磁器も含まれている(第34図)。中でも沖縄産陶器の甕瓶はこれまで類例がなく、この組成から日用雑器が中心に一括投棄されたことが想定できる。

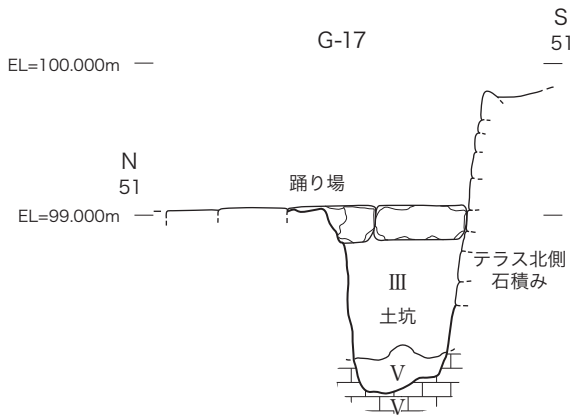
なお、この遺物は前記したテラス北及び西側石積みの裏手より出土していることと、遺構築造後に上部から穴を掘って埋めることは考えられないことから、階段築造前にあたることが考えられるが、現時点で詳細は不明である。



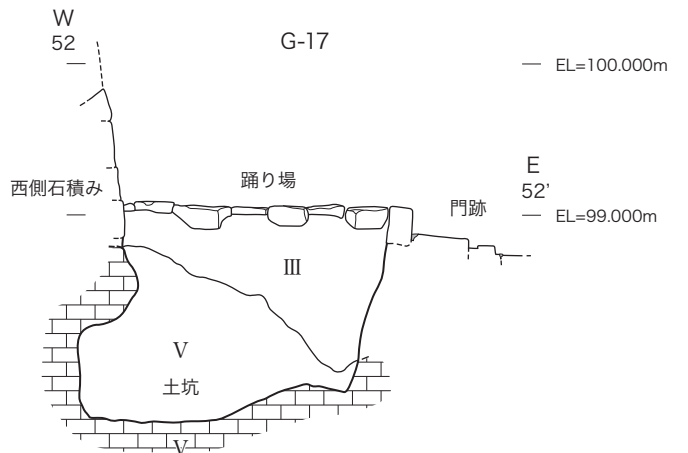
遺構立断面図



遺構立断面図



トレンチ3 土坑内東側断面図

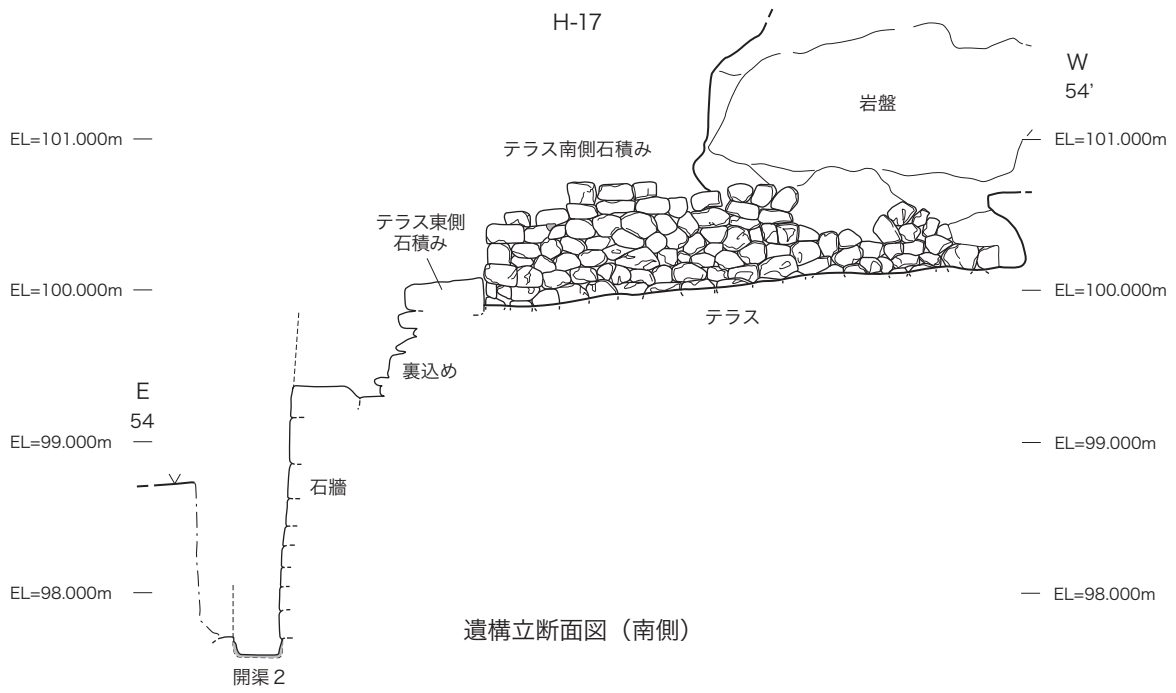


トレンチ3 土坑内北側断面図

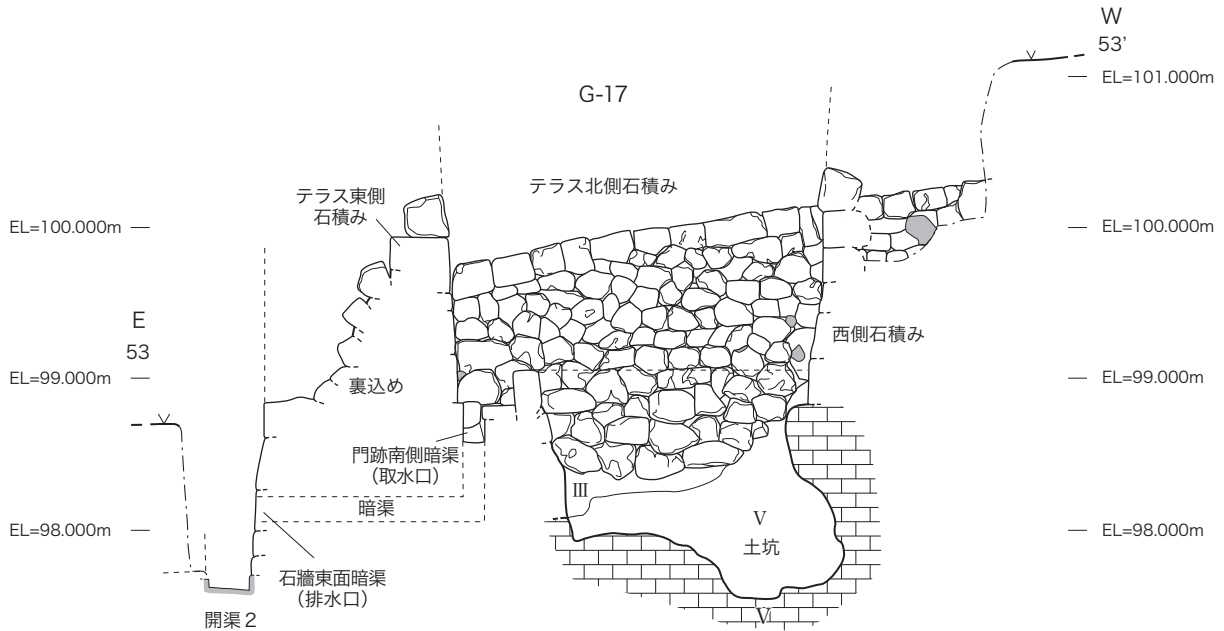
モルタル



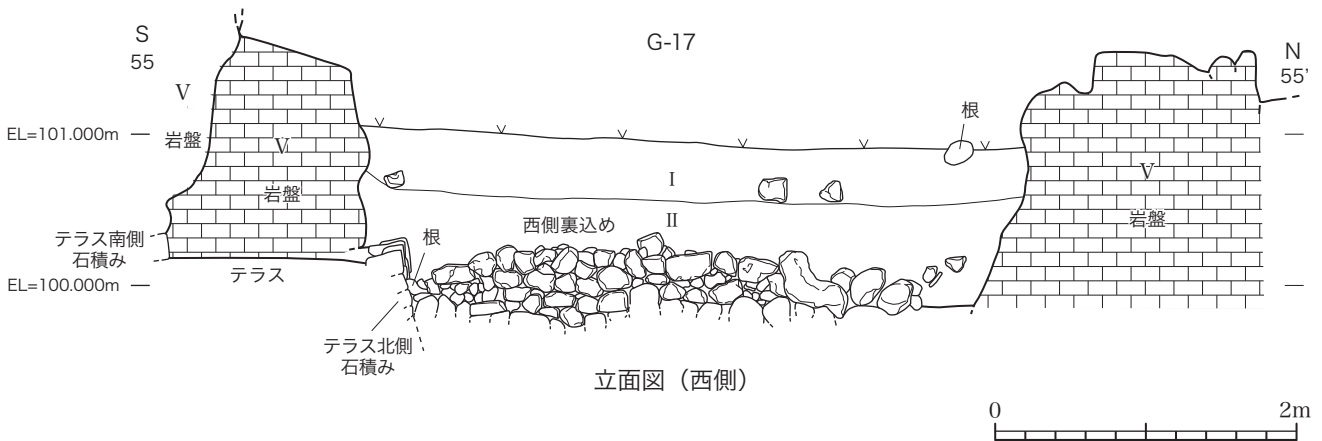
第26図 トレンチ3遺構3(階段踊り場・土坑)



遺構立断面図 (南側)



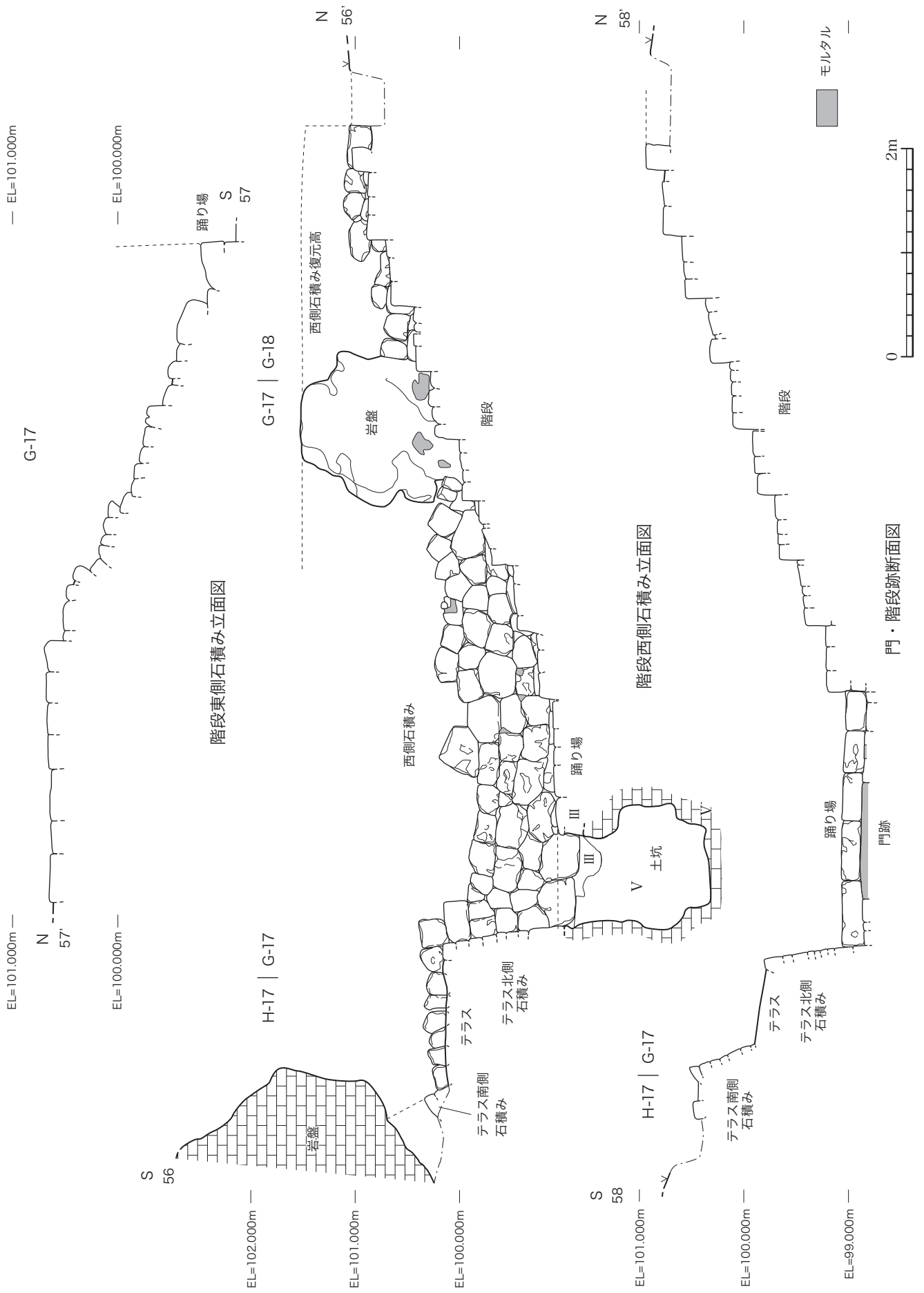
階段遺構壁面図 (南側)



立面図 (西側)



第27図 トレンチ3遺構4 (テラス周辺石積み)



第28図 トレンチ3遺構5 (周辺石積み・階段遺構)



1. 階段南側テラス・西側石積み（東から）



2. 階段西側石積み裏石積みと堆積（南東から）



3. 遺物溜まり2出土状況（北から）



4. 門跡南側暗渠取水口（画像中央下・北から）



5. 門跡南側暗渠取水口拡大（北西から）

図版51 トレンチ3遺構⑤（階段西側石積み・暗渠・溝）



## 暗渠・開渠2

階段跡に付随する遺構として、暗渠と開渠が確認されている。門跡南側暗渠は階段踊り場の南端、テラス北側石積みの東下に設けられたもので、開口部は縦16cm、横14cmを測る。開口部の手前には、踊り場との間に10cm程深い方形の区画を設けており、暗渠内への土砂流入を防ぐ目的で施工したものと思われる。暗渠内部に堆積した土砂を除去すると、その奥に空洞が保たれている状況が確認できた。空洞は開口部から南側へ水平に約16cm進むと、37°下方へ約50cmの深さまで進んでL字に東側へ折れる。その出口を辿ると、最終的に東側石牆の東面に設けられた穴(石牆東面暗渠)に至ることが判明した。この暗渠築造の目的として、門跡に設置された木製の門扉が閉じた状態を想定してみると、階段を伝い階段踊り場に流れ込んだ水が溜まらないように排する役割が考えられる。また、この排水口となる石牆東面暗渠を抜けた水は、その下方に設けられた石牆前の開渠2に落ちて南へと排出される仕組みになっており、排水に関し細部まで工夫が凝らされている状況がみえる。

なお、開渠底面からは、鉄製の平鍬が出土している(図版52-3)。この平鍬の裏面上部には、文字らしき刻印がみられたため、解読のためX線撮影を試みたところ、縦に「アカ小」の文字が確認できた(図版112)。

第20表 暗渠・開渠

遺構名	グリッド	サイズ(cm)		底面 傾斜角	備考
		高さ (深さ)	幅		
門跡南側暗渠	G-17	16	14	-	石牆東面暗渠への取水口
石牆東面暗渠	G-17	16	15	-	門跡南側暗渠からの排水口で排水は開渠2へ注ぐ
石牆前暗渠	G-17	35	30	南下6°	浮道～門跡へ至る階段下暗渠 水は開渠2へ至る
開渠2	G-17	110	30	南下5°	石牆前暗渠とつながる 深さは門跡面からの値



1. 石牆東面暗渠と開渠2



2. 石牆東面暗渠拡大(南東から)



3. 開渠2内遺物出土状況(画像右が北)



4. 開渠2・石牆前暗渠(南から)

階段跡

階段跡は南北に510cm、東西250cmの範囲で9段が検出されている。そのルートは、東側の御内原から浮き道を伝って西へ門をくぐり、踊り場を右(北)へ折れて階段を南から北へ上ることで上之御殿へと至る。このサイズを第29図の略図に示した計測位置に基づき解説する。階段幅は1段目が196cmで、7段目まで各々2~6cmずつ広くなり、その後階段東側石積みの軸を変え、8・9段目では約20cm間隔ずつ広がる。そして最上段の9段目は1段目から54cmも広い250cmを測る。この幅が異なる理由として、階段を上る際には行く先が実際より広く見え、逆に下る際には階段が実際より長く、より奥行きを感じさせるという錯覚を意図して築造していることが考えられる。

踏面奥行きは、最上段の9段目以外は60~62cmで、蹴上げは18cmで蹴込みはなく直立する点で規則性を示す。また、首里城跡ほか 沖縄における石造の階段に特有な踏面の傾斜もみられ、木根などの影響を除くと南へ2~5°下る傾向があることがわかった。

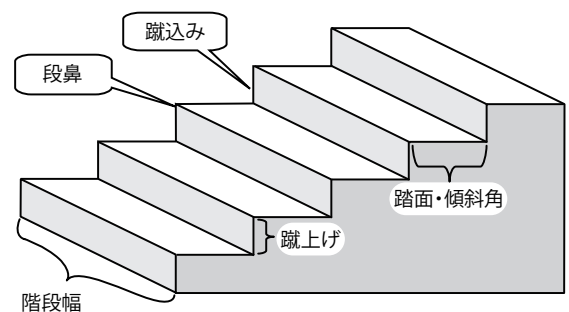
石材は琉球石灰岩で、蹴上げを成す段鼻部は幅30~60cm、高さ、奥行きが20~30cmの長方形の切石を用い、踏面の石畳には、30cm内外の切石を丁寧に施工する。これら石材の表面及び角は、長年の使用により摩滅し、光沢を帯びる。

階段の東西に当たる両脇には、天端のない石積みの痕跡が残る。この内西側石積みは、先にテラス周辺石積みの中で、西側石積みとして報告した石積みにあたり、この南側に位置する岩盤から続いている。そのサイズは、南から580cm付近の階段3段目まで延びるが、一端岩盤に接して止まる。そして岩盤を超え、階段6段目で再び現れ、階段最上段の9段目で終息する。この時点で合計920cmを測る。積み石は20~50cmの石灰岩を相方積みし、傾斜角は80°前後である。この上面はかつての石積みの天端に合わせて削られていることが想定でき、この類推に基づき石積みの高さを復元すると、踊り場の面から240cm、テラス面(北側石積み)から136cm、階段9段目上面から45cmの高さとなり、傾斜角は80°前後である。積み石は20~50cmの石灰岩を相方積みし、一部でモルタルによる目張りがされる。

次に東側の石積みは、御内原と上之御殿を区画する石牆西面にあたるが、残りが悪く、階段踏面より1段程度露出するものがほとんどである。

そのため、高さは最大で30cmであり、傾斜角は70~90°を示すが、70°の地点は木根の進入により広がるもので、80°が標準と言える。

遺構掘削時の覆土からは、戦後の遺物が多量に確認されたことから、戦災により埋没したか、終戦直後に周辺を造成する際に埋められたことが考えられる。

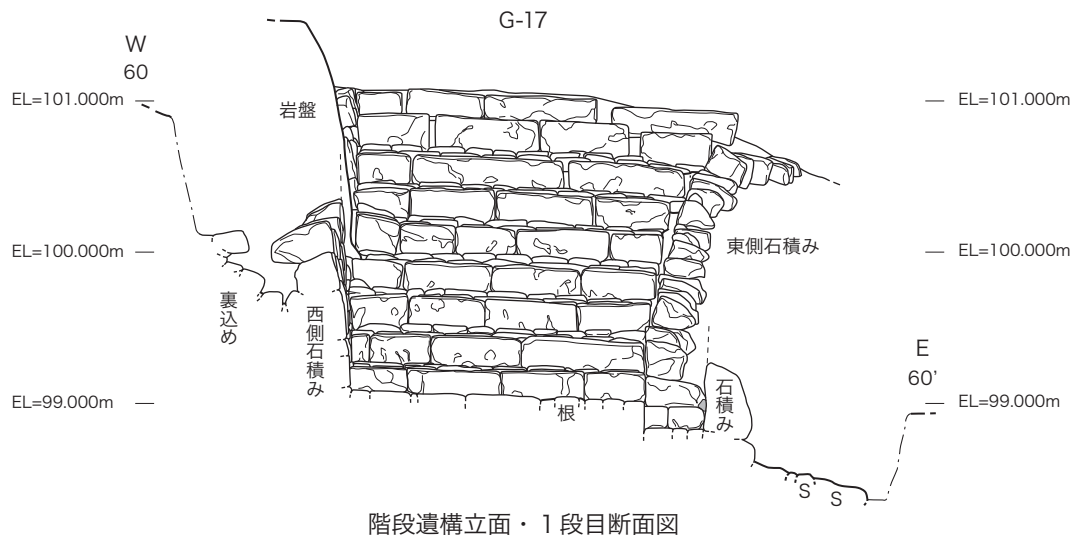
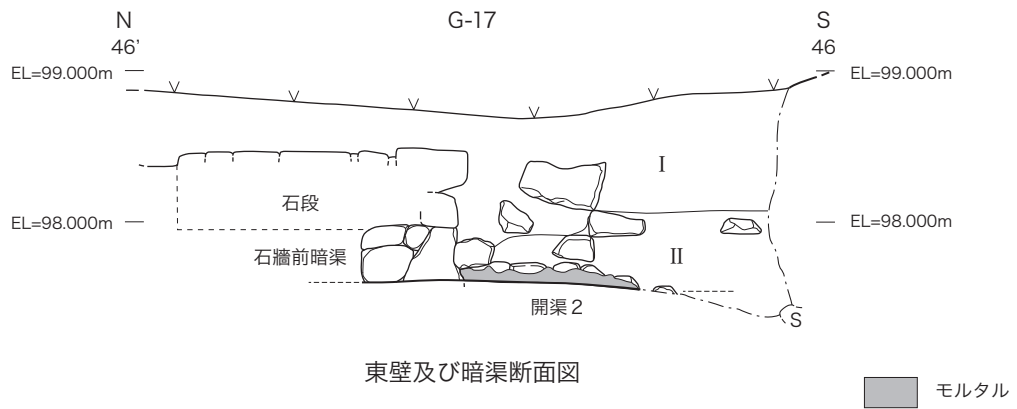
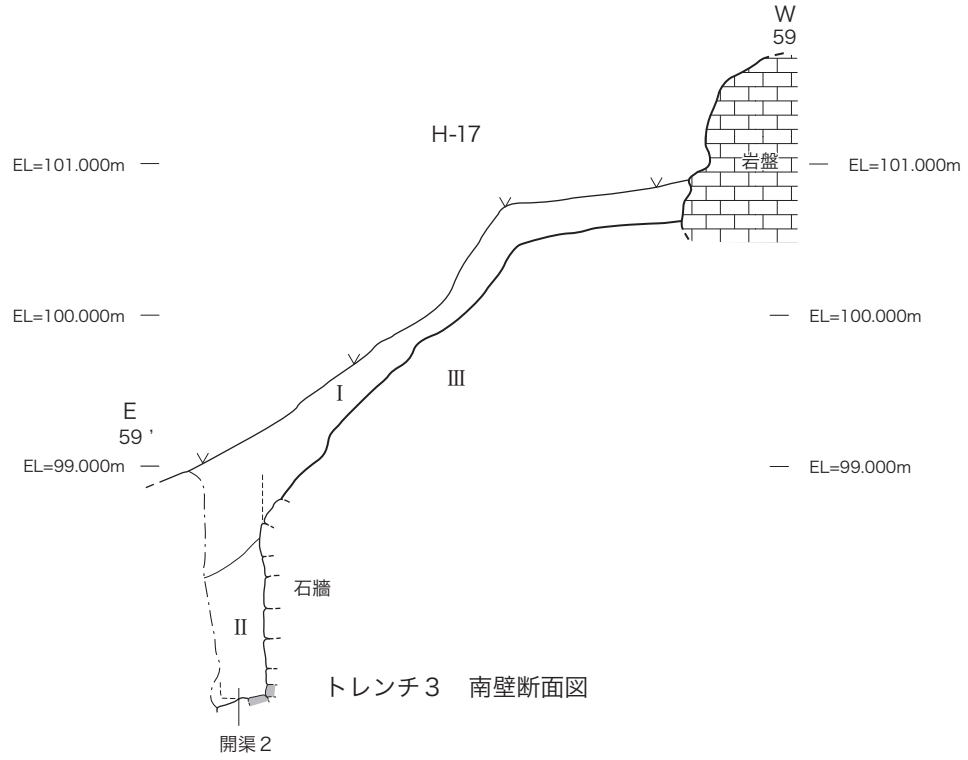


第29図 階段部位名称・計測位置

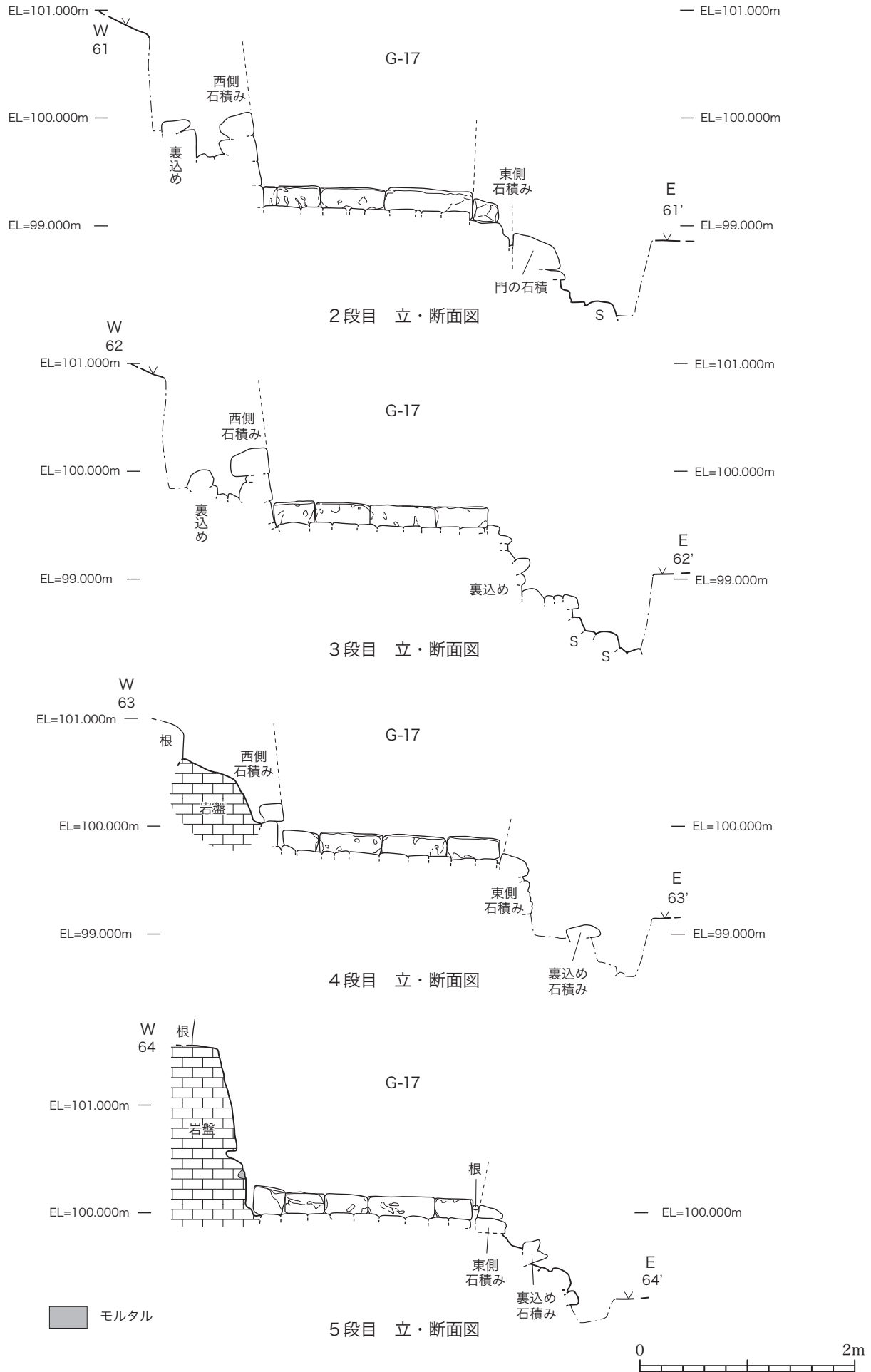
第21表 階段跡

階段No. (南から)	グリッド	サイズ(cm)		踏面		西側石積み		東側石積み		備考
		幅	蹴上げ高	奥行き	傾斜角	高さ	傾斜角	高さ	傾斜角	
1段目	G-17	196	18	62	南下2~5°	94	80~86°	18	90°	
2段目	G-17	192	18	62	南下5~9°	90	80°	20	89°	
3段目	G-17	198	18	62	南下5~15°	75	80°	-	-	
4段目	G-17	200	18	62	南下5°	40	85°	5	80°	
5段目	G-17・18	206	18	62	南下5°	160(岩盤)	80~85°	12	80°	
6段目	G-17・18	208	18	62	南下2~5°	100(岩盤)	78~80°	30	80°	
7段目	G-17・18	214	18	60	南下5°	40	75~78°	20	70°	東側石積みは木根により東へ開く
8段目	G-17・18	234	18	61	南下0~2°	40	78°	2	90°	
9段目	G-17・18	250	18	14~	南下1°	25	80°	-	85°	石畳がないため踏面が浅い

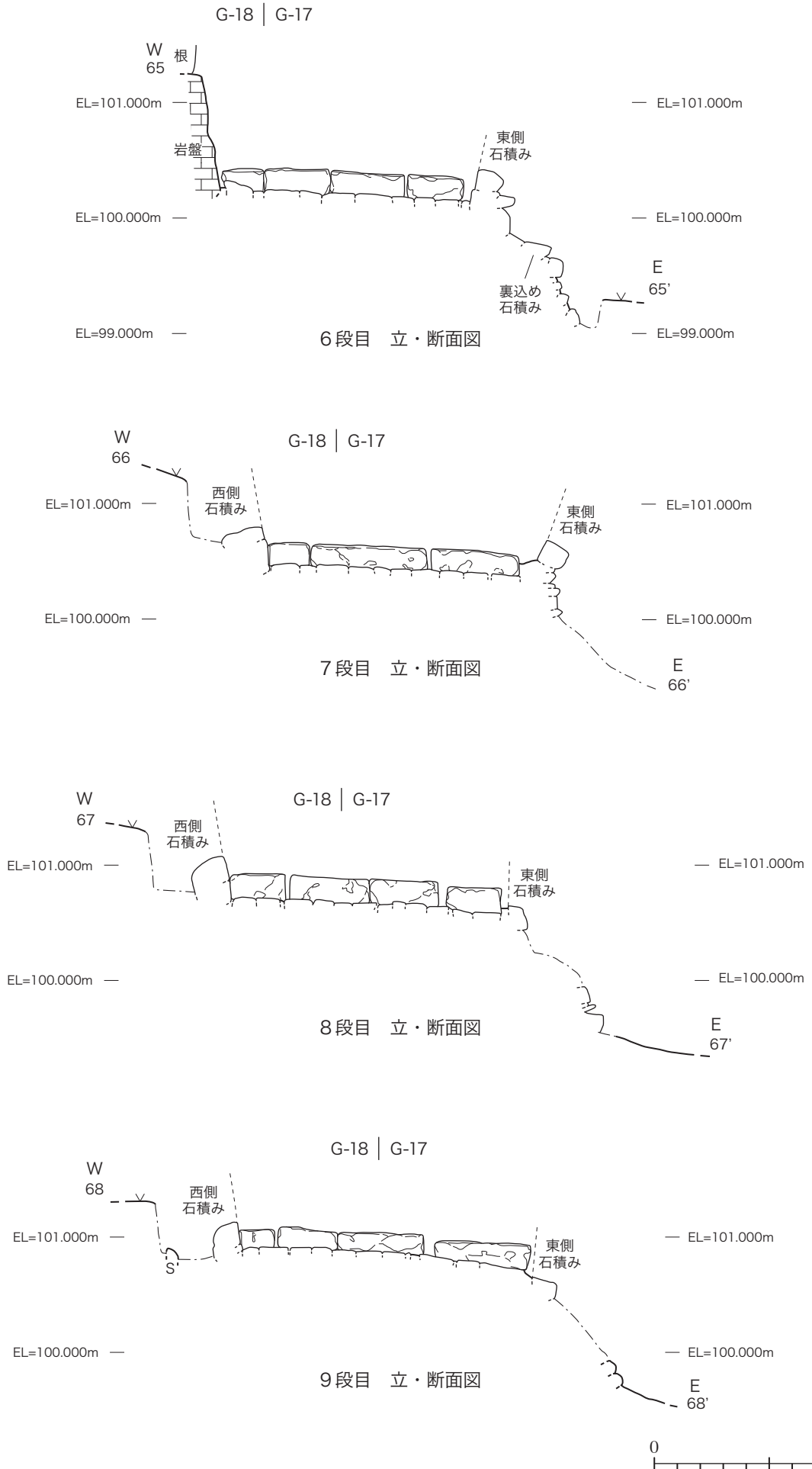
※計測位置は第29図参照



第30図 トレンチ3遺構6 (暗渠・開渠・階段遺構)



第31図 トレンチ3遺構7（階段遺構）



第32図 トレンチ3遺構8(階段遺構)



1. 階段跡（南から）



2. 階段跡（北から）



3. 階段跡北端（南から）



4. 階段跡立面（南から）

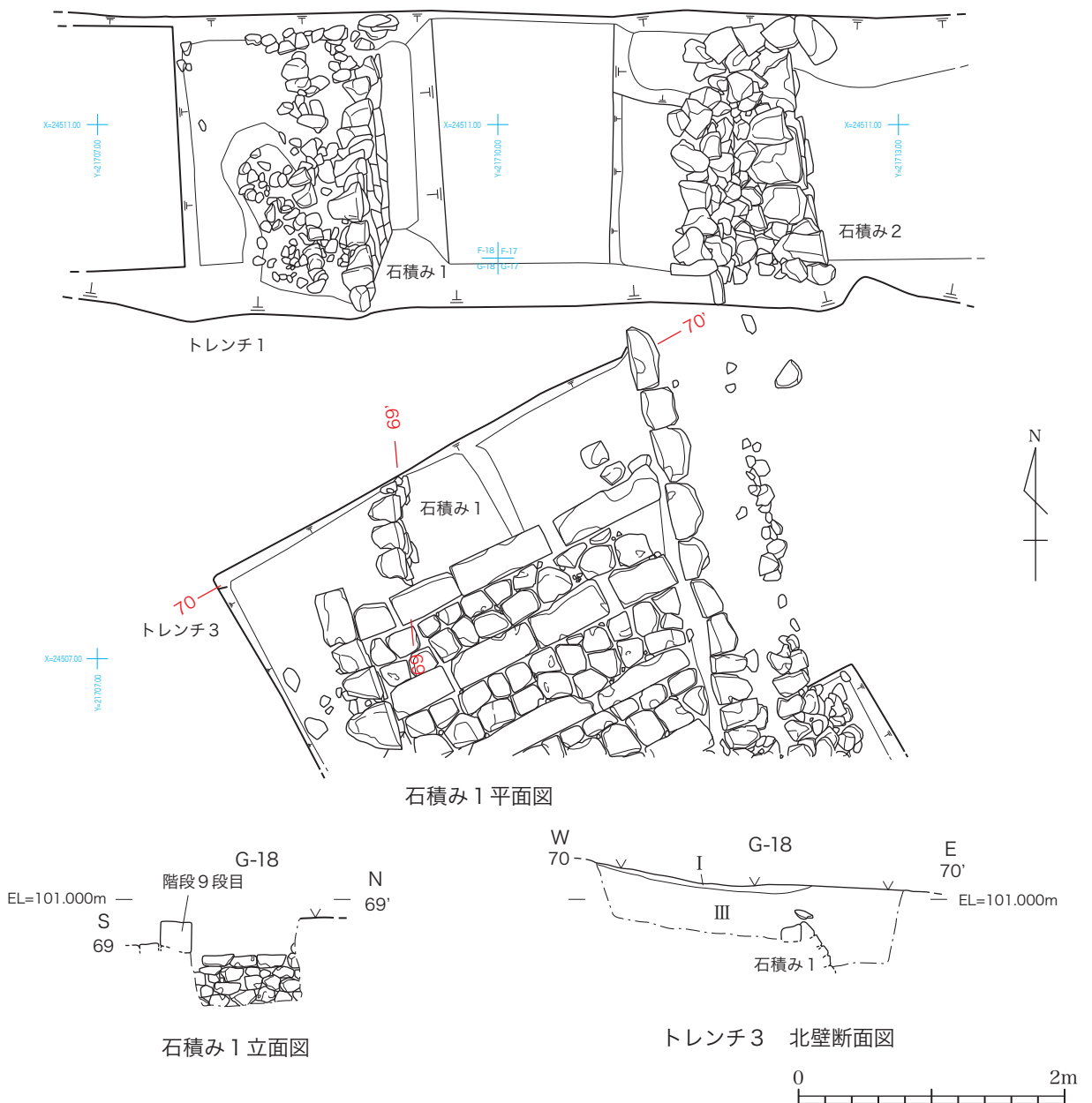
### 石積み1

石積み1としたのは、階段9段目の北側に検出した遺構である。石積みは片面積みで、天端は残されておらず、根石も確認していない。掘削範囲が狭いことから全長は不明であるが、確認できる範囲で高さ40cm、幅80cmを測る。傾斜角は65°と緩やかである。積み石は縦10cm、横25cm程度の雑切石を野面積みしている。石積みは、階段9段目の下部にあたる南方向へ入り込み、また北側のトレンチ1の石積み1につながることも判明していることから、中城御殿以前の遺構として捉えることができる。

なお、この石積みの性格を把握するため、前後の発掘を行ったところ、沖縄産陶器を中心とする遺物が一定量得られている。遺物は近代頃の製品が殆どでありあまり古さを感じさせないが、このことはかつての土族屋敷が営まれていた時期から間断なく、当地において土地利用が行われたことを示している。

第22表 石積み1

遺構名	グリッド	サイズ(cm)		傾斜角	残存		備考
		高さ	幅		根石	天端	
石積み1	G-18	40~	80~	65°	○	×	トレンチ1・石積み1と組み合わせると幅400cm~



第33図 トレンチ3遺構9(石積み1)



1. 階段跡下に検出された石積み1 (東から)



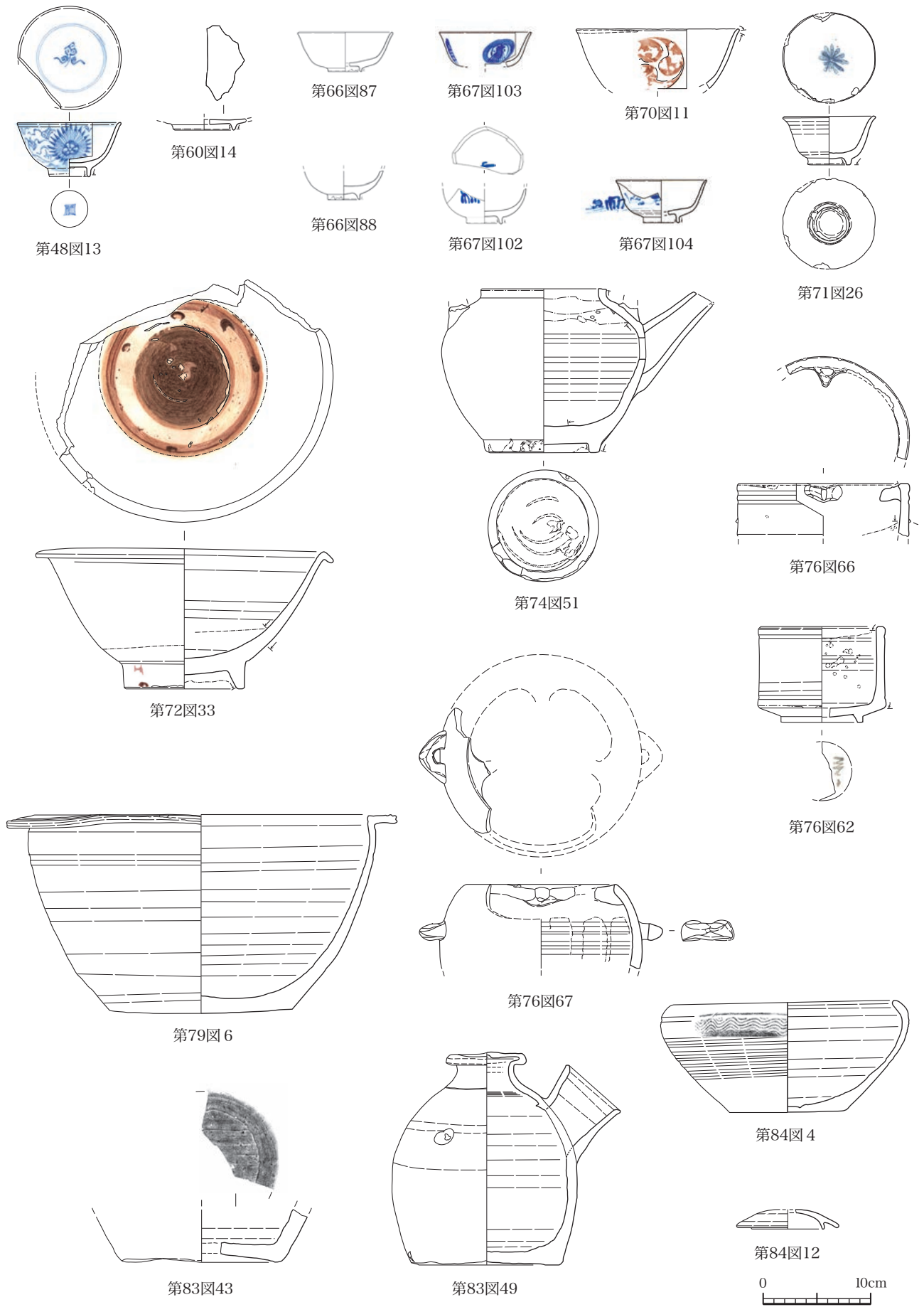
2. 石積み1立面 (東から)



3. トレンチ1石積み1につながるトレンチ3の石積み1 (画像左が北)

図版54 トレンチ3遺構⑧ (石積み1)





第34図 トレンチ3 遺物溜まり2 出土遺物

## トレンチ4

トレンチ1の10m北側に、東西約65m、幅2mのトレンチ4を設けた。遺構の残りは比較的良好で、新旧の各種遺構が検出されている。中城御殿当時は、御内原裏手の女中居間・寄満一帯から上之御殿大岩の拝所付近にあたる。県立博物館当時は、自然史展示室と中庭、地下収蔵庫が設置されていた。西側から報告を行う。

### 石列3

トレンチ4の西端部、琉球石灰岩の大岩付近に検出された遺構である。壁面より3点の切石が露出しており、そのサイズは検出範囲で南北に150cm、高さ20cmである。60cm幅の雑に加工した石灰岩を並べていることから石列としているが、当地にはかつて拝所が存在していたことが古写真などで判明している(図版3)。この情報からすると大岩の周囲を取り巻くように螺旋状の石階段が敷設されていることから、本遺構はその一部にあたることから推測できる。なお、現存する大岩の一部には、階段の一部を構成していたと思われる加工の痕跡が残る。また、本遺構は後述する旧石畳に付随する石積みを破壊して築造されていることから、中城御殿当時の遺構としての解釈が可能である。

第23表 石列3

遺構名	グリッド	サイズ(cm)		備考
		高さ	幅	
石列3	E-18	20	150～	拝所の遺構か

### 旧石畳1

トレンチ4西端底面より検出した遺構である。上記した石列3の下部より検出したため、中城御殿以前の遺構と考え旧石畳とした。東西120cm、南北60cmの範囲で検出され、南及び東側は破壊されるが、北及び西側は石積みに接して面を残す。敷石は20cm前後の野面に近い石を密に敷き詰めている。表面はさほど摩滅しておらず。凹凸が顕著である。

第24表 旧石畳1

遺構名	グリッド	サイズ(cm)		備考
		東西	南北	
旧石畳1	E-18	120～	60～	旧階段の一部になる可能性あり

### 旧階段及び旧階段北・西側石積み

この遺構も前項旧石畳1同様の理由により中城御殿以前の遺構としたものである。範囲が限られ全長は不明であるが、東西110cm、南北140cmの範囲で2段が検出されている。段鼻の石材は幅30cm前後の石灰岩を用いるが、踏面は10～30cmの多様なサイズの石を敷く。蹴上げは8～12cmと浅く、1段目東側は石粉により舗装されている。この北側は石積みが旧石畳1の範囲までつながることから、両者が一連の遺構になる可能性があるが、中間が破壊されていることにより判然としない。

第25表 旧階段

階段No. (南から)	グリッド	サイズ(cm)		踏面		備考
		幅	蹴上げ高	奥行き	傾斜角	
1段目	E-18	135～	8～	65	東下10°	
2段目	E-18	135～	12	48～	東下10°	

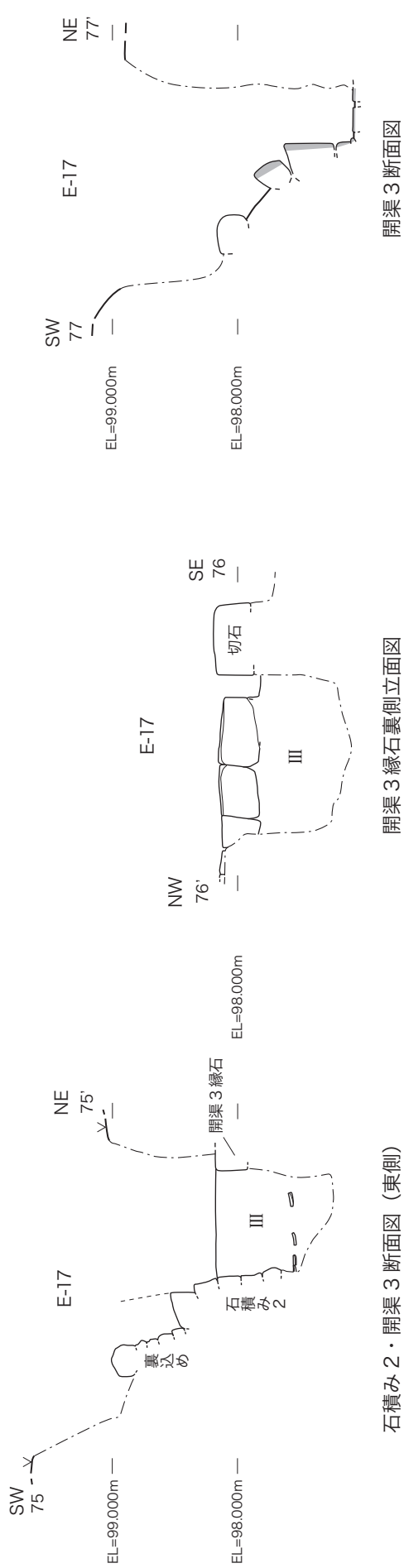
第26表 旧階段北・西側石積み

遺構名	グリッド	サイズ(cm)		傾斜角	残存		備考
		高さ	幅		根石	天端	
北側石積み	E-18	24	380	89°	○	×	
西側石積み	E-18	6	30	90°	○	×	



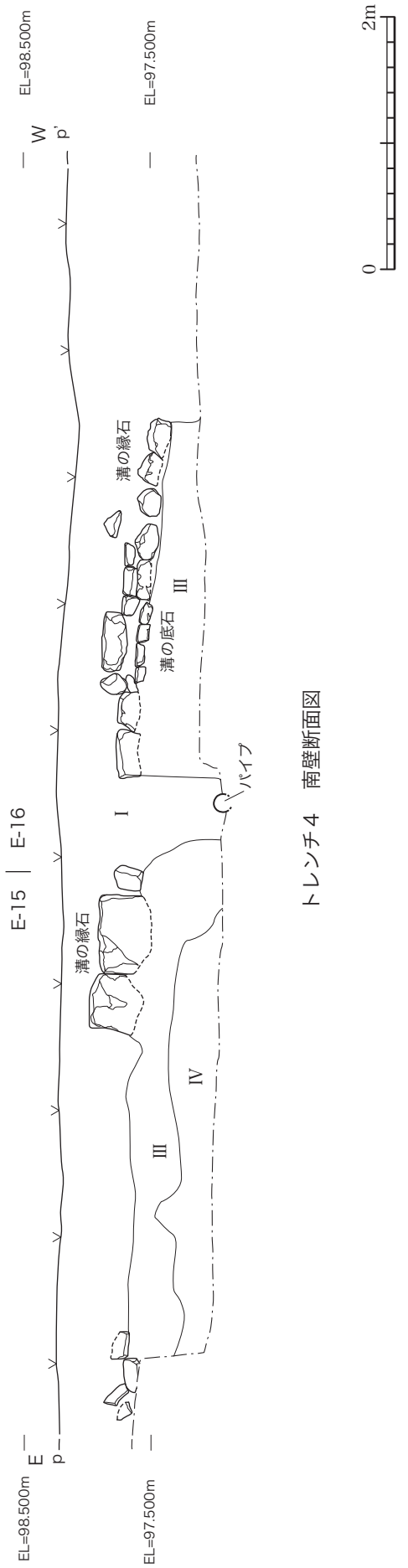
第35図 トレンチ4遺構1 (石列3、旧階段・石積み、石積み2、開渠3)





モルタル

第36図 トレンチ4遺構2(開渠3・溝)



トレンチ4 南壁断面図



1. トレンチ4西側 E-18遺構検出状況 (画像上が北)



2. 旧階段・旧石畳1 (東から)



3. 石列・旧階段・旧石畳1 (南東から)



4. 石列3・旧階段・旧石畳1 (東から)



5. 石列3・旧階段・旧石畳1 (西から)

図版55 トレンチ4遺構① (石列3・旧階段・旧石畳)

## 石積み2

本遺構は、南北に走り東面する石積みである。石積みは御内原と上之御殿を区画する石牆として、南に位置するトレンチ1でも検出しており、さらに調査区北側では天端が残った状態で残存している。検出範囲は南北95cm、高さ94cmで根石は灰色土上より積まれている。積み石は、根石で縦22cm、横40cmの石を用いるが、2段目以降は25~40cm内外の雑切石を不規則に積んでおり、傾斜角は80°を示す。

石積みの前面は3層に分かれており、下層に造成土となる灰色土、中層には石積みの根固めと思われる赤色土、そして上層に石積み施工後に堆積した褐色土が堆積している。この上層からは沖縄産陶器などの遺物が得られている。石積みの推定高だが、この北側に現存する石積みの天端高が標高約101.4mを示しており、この高さを本石積みの推定高として根石下面から測ると、370cm前後の高さであり、また石牆前面の旧地表面よりの推定高は、310cm前後であったことが想定できる。この石積み2の前面には、次に報告する排水を目的として築造された開渠3が走る。

第27表 石積み2

遺構名	グリッド	サイズ(cm)		傾斜角	残存		備考
		高さ	幅		根石	天端	
石積み2	E-17	94	150~	80°	○	×	

## 開渠3

H-17グリッド石積み2東側より検出した遺構で、周辺から確認された各種溝より規模が大きいことから開渠とした。遺構はトレンチ北壁から東に湾曲して延び、東側は戦災により破壊を受けていることによりその続きを確認することができない。また、溝の北側半分はトレンチ北壁に入るため、検出範囲は溝の南側縁石と底面の一部に留まる。その検出サイズは、長さ250cm、深さ110cmで底面の幅は45cm以上である。この底面は東側に5°下る傾斜を示していることから、東側への排水を目的に施工していることがわかる。

縁石は石組み内に赤色土を詰める工法により、高さ110cm、幅60cmの厚さで構築されている。その底面までの深さは、御内原内の建物遺構面から約1mもの低い位置にあることから、本遺構は中城御殿の基礎工事として施工されたことが考えられる。

遺構の内面及び縁石にはモルタルの痕跡が残っており、特に底面は丁寧に仕上げられている。この溝の内部からは戦前~戦中に使用されたと思われる陶磁器や金属片が出土したほか、北壁断面には大型の鉄鍋が3枚重ねられた状態で出土している。この目的については、現時点で情報がなく判然としないが、トレンチ2暗渠内から確認された位牌の状況や、聞き取り調査により戦前に宝物類を敷地内に分散させて避難させたとする情報を合わせて勘案すると、戦中に持ち出すことができなかつた生活物資を、一時的に埋納した可能性が考えられる。確認された鉄鍋は、トレンチ北壁に入ることから現地に残し埋め戻した。

なお、この開渠3については、トレンチ2西端の石牆前面に検出された開渠1と及び、トレンチ3検出の開渠2同様な性格を有することが考えられる。その目的として、このような大型の溝を石牆に沿って巡らせることにより、中城御殿の敷地が冠水することがないようにしたことが考えられる。このことから当時の中城御殿造営の設計に際しては、降雨量が多い沖縄の気象条件を熟知した上で、計画的に施工が行われていたことを示している。

第28表 開渠3

遺構名	グリッド	サイズ(cm)			底面傾斜角	備考
		長さ	高さ(深さ)	幅		
開渠3	E-17	250~	110	45~	東下5°	



1. トレンチ4 E-17遺構検出状況 (画像上が北)



2. 石積み2立面 (後方は旧階段・東から)



3. 石積み2根石と前面堆積状況 (北西から)



4. 開渠3壁面石組み表面遺物出土状況



5. 開渠3内遺物出土状況

図版56 トレンチ4遺構② (石積み2・開渠3)



## 溝6

E-15グリッドより検出した東西方向に走る溝で、後述する溝7の約1m北側に並列する。遺構は東西が戦後の開発により破壊されているが、検出範囲で東西に320cm、幅20cm、深さは最大で30cmを測る。縁石、底面ともに琉球石灰岩が用いられており、底面の石を縁石で挟み込むように施工されている。縁石は残りのいい箇所縦30cm、横40cm、控えが25cm前後の切石で、底面は20cm幅で長さ30cm、厚さ8cm前後の長方形の板状切石を密に並べている。底面の勾配は西に1～5°下るため、西側への排水を目的に施工されていることがわかる。

溝内部の堆積は表土層と木炭の多いII b層で構成されており(図版58-4)、戦災により破壊されるまで空洞であったことが考えられる。また、その中から沖縄産陶器や近代頃の陶磁器のほか、板ガラス片が出土している。

なお、この溝は東西が破壊されていることにより、つながりが判然としないが、平面図上で観察すると本遺構より15mほど東のE-13グリッドより検出された石列4と、北側縁石の並びが一致することから、一連の遺構になる可能性がある。

## 溝7

溝7は、溝6の約1m南側に並列して検出した溝である。溝6同様に東西が戦後の開発により破壊されているものの、検出範囲は東西870cm以上を測る。その幅は16cmで高さは20cm、石材のサイズは溝6とほぼ同様であるが、北側縁石の一部で2段積まれる箇所が存在するのと、目地材として一部にモルタルを用いる点で溝6と異なる。また、内部の堆積に関しては溝6と同じく表土とII b層で構成されており、この底面には近代以降の陶磁器片や板ガラス片が多く出土している(図版58-5・6)。

なお、本遺構の西側は戦後の開発により深く破壊を受けているが、溝7につながると思われる遺構がE-16グリッド南壁に長さ4.9mの範囲で検出されている。この範囲を含めると、溝7東端から15.5mの長さになる。また、溝7の範囲では底面の勾配はなかったが、このE-16グリッド南壁にみられる溝底面の傾斜は、西に4°下るように築造されており、西への排水を考慮した造りになっている。

第29表 溝6・7

遺構名	グリッド	サイズ(cm)			底面 傾斜角	備考
		長さ	高さ (深さ)	幅		
溝6	E-15	320～	30	20	西下1～5°	E-13石列4につながる可能性あり
溝7	E-14・15	870～	20	16	0°	E-16南壁遺構につながるか
溝7西側	E-16	490～	20	16	西下4°	南側縁石と底石の一部 E-14・15溝7につながるか

## 旧石畳2

E-15グリッドに小規模で検出された石畳を指す。検出範囲が東西30cm、南北45cmと狭く、敷石は20cm内外の石をまばらに数点敷き、表面は摩滅している。この状況で中城御殿以前の遺構かどうかの判別は困難であるが、溝7北側縁石が外された箇所に位置することと、石畳がまばらに残る点で、のちに溝7を築造する際に破壊された可能性があり、ここでは旧石畳とした。

第30表 旧石畳2

遺構名	グリッド	サイズ(cm)		備考
		東西	南北	
旧石畳2	E-15	30	45	溝7下部に位置する



1. トレンチ4中央 E-14・15溝6・7検出状況 (画像上が北)



2. 溝6・7、旧石畳2検出状況 (西から)



3. 溝6・7検出状況 (東から)

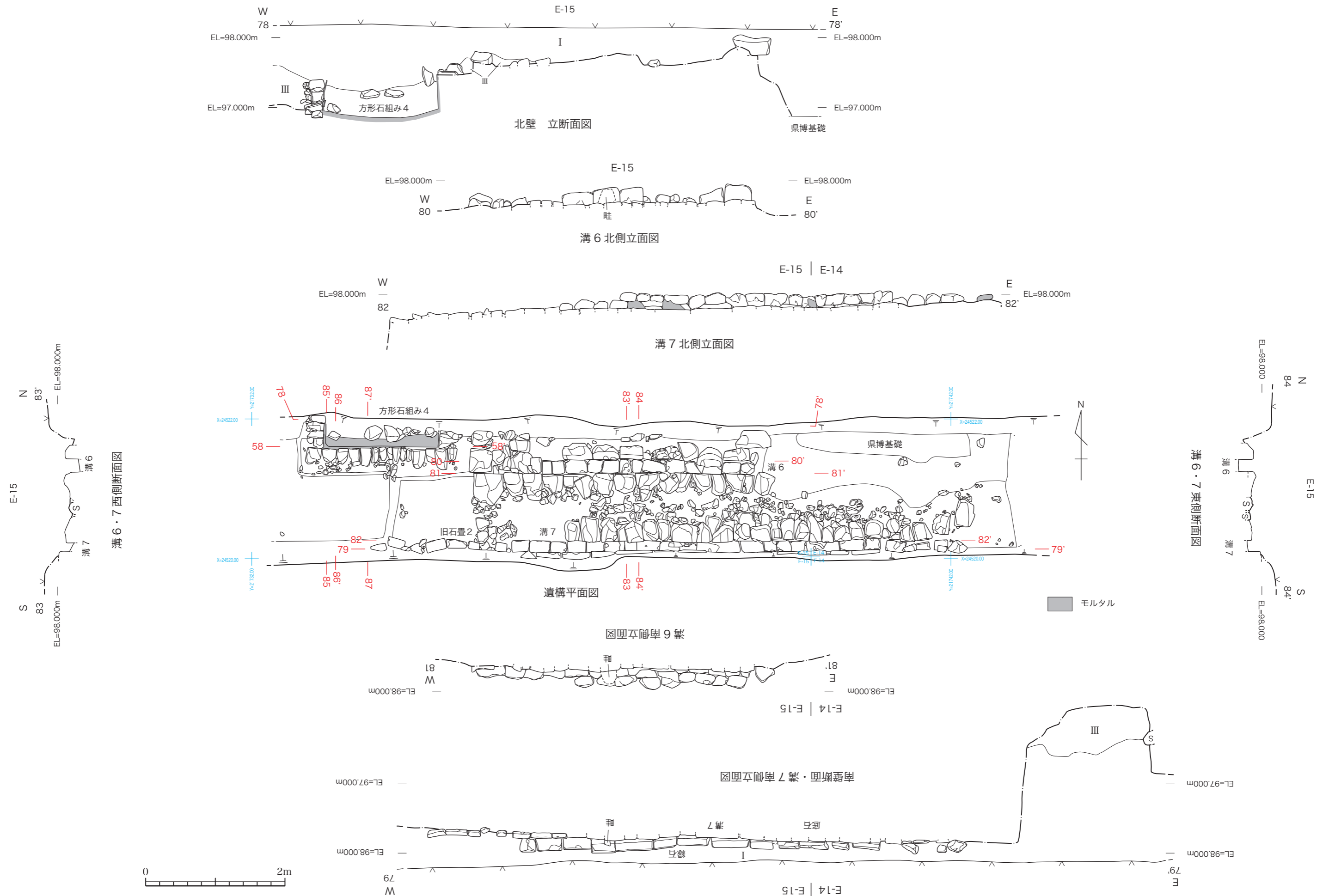


4. 溝7検出状況 (北から)



5. 溝7検出状況 (北西から)

図版57 トレンチ4遺構③ (溝6・7)



第37図 トレンチ4 遺構3 (溝6・7、方形石組み4)





1. 溝6中央部(西から)



2. 溝7西側(北から)



3. 溝7下部検出の旧石畳2(画像下が北)



4. 溝6内堆積状況(西から)



5. 溝7内遺物出土状況(画像上が北)



6. 溝7内遺物出土状況拡大(画像上が北)

方形石組み 4

方形石組み 4 としたのは、E-15 グリッドより検出した遺構である。東西に長い長方形を呈しており、天端が破壊されている状態で検出されたが、サイズは東西 165 cm、南北 40 cm、高さは最大で 72 cm を示す。

遺構は 20 cm 前後の琉球石灰岩切石を組み、内面はモルタルで丁寧に仕上げる。石積みはその切り合いから、南側を先に積み、その後東西の石積みを積んだことがわかる。内部には多量の動物骨が堆積しており、その中に近代以降の陶磁器がわずかに混入している。この内容物から、遺構は主に生ゴミを廃棄したゴミ穴（シーリ）と考えられる。底面は下方に緩く湾曲しており、その勾配は西側で 16°、東側で 10° を示すが、この傾斜はトレンチ 1 方形石組み 1 や方形石組み 3（トイレ遺構）でも確認されており、底面の一部に液体を溜まりやすくすることにより、かき出しを容易にしたことが考えられる。

次に、この出土骨に関して詳細な同定作業を行った結果、魚骨が最も多く、その他ブタやニワトリ、ヤギ、ネコ、イヌ等の動物骨で構成されていることがわかった（脊椎動物遺体参照）。遺構検出地点は、屋根伏せによるとかつての台所である寄溝の周辺にあたる。そこから出土した膨大な動物骨は、その寄溝で調理された食材であることも考えられ、戦災により破壊を受ける直前の食生活を考える上で興味深い。

第31表 方形石組み 4

遺構名	グリッド	サイズ (cm)								底面傾斜角
		東辺		西辺		北辺		南辺		
		幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	幅	高さ	
方形石組み 4	E-15	22~	55	40	52	165	56	165	72	東側：西下 10° 西側：東下 16°

石列 4

E-13 グリッドより検出した遺構で、東西方向に 4 点の切石が残る。サイズは東西 112 cm、高さ 28 cm、奥行き 18 cm で、厚さ 10 cm の板状の石を用いている。面として加工されているのは上面と南面で、底石などは確認されていないが、この西側に検出された溝 6 の北側縁石につながる並びをすることから、同様な溝であった可能性がある。

第32表 石列 4

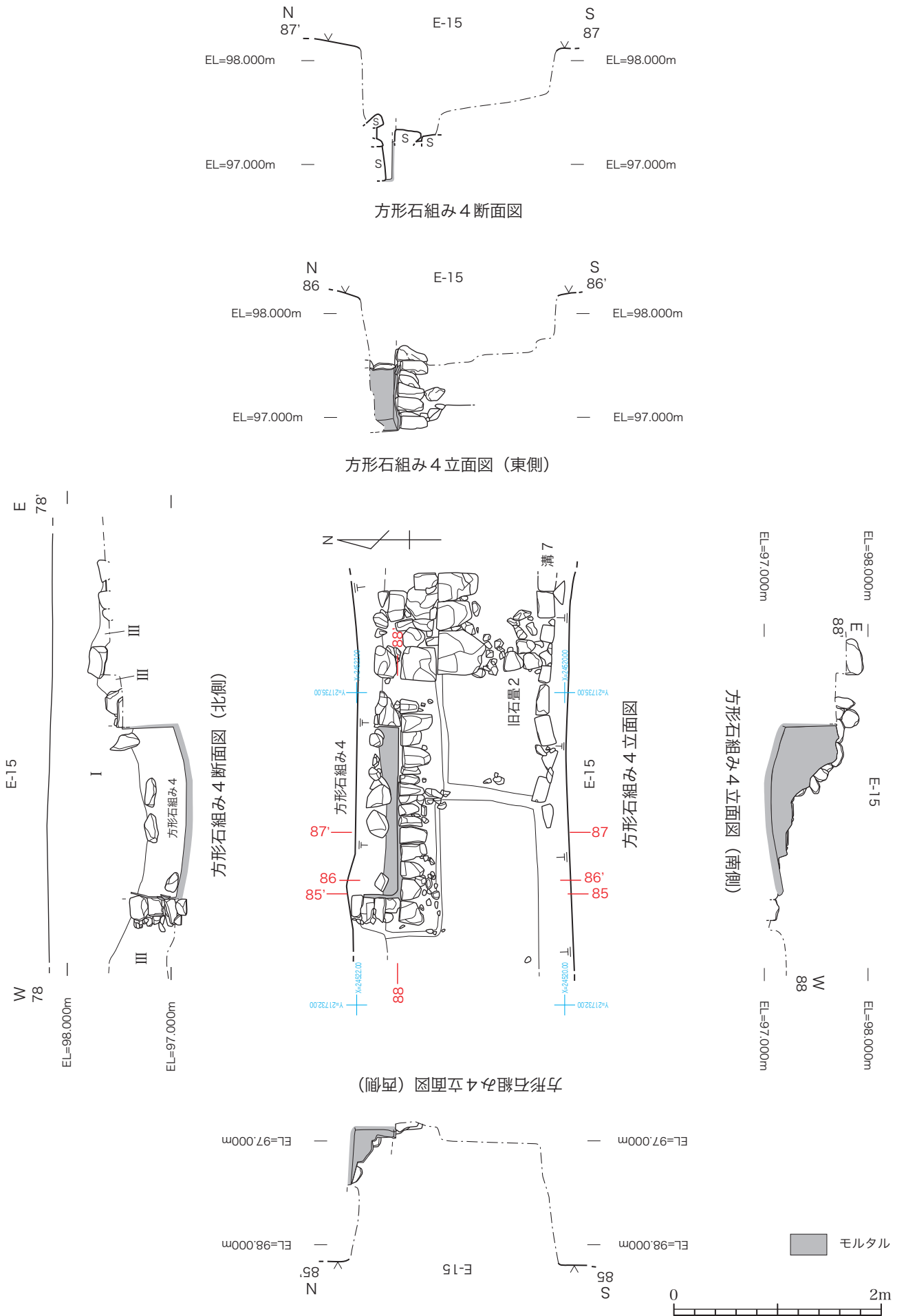
遺構名	グリッド	サイズ (cm)		備考
		東西	南北	
石列 4	E-13	28	112	E-15 溝 6 北側縁石になる可能性あり

旧石畳 3

旧石畳み 3 としたのは、遺構が先述した石列より低いレベルに位置することと、石畳がまばらに残る点にある。その規模は、東西に 250 cm、南北に 80 cm の範囲でまばらである。表面は摩滅しておらず、石材のサイズも 15 cm 内外と小ぶりであることから、敷石になる可能性があるが、検出範囲が狭く判然としない。

第33表 旧石畳 3

遺構名	グリッド	サイズ (cm)		備考
		高さ	幅	
旧石畳 3	E-13	200	100	石列より低い位置にある



第38図 トレンチ4遺構4 (方形石組み4)



1. 方形石組み4 (南西から)



2. 方形石組み4 (画像下が北)



3. 方形石組み4 (南から)

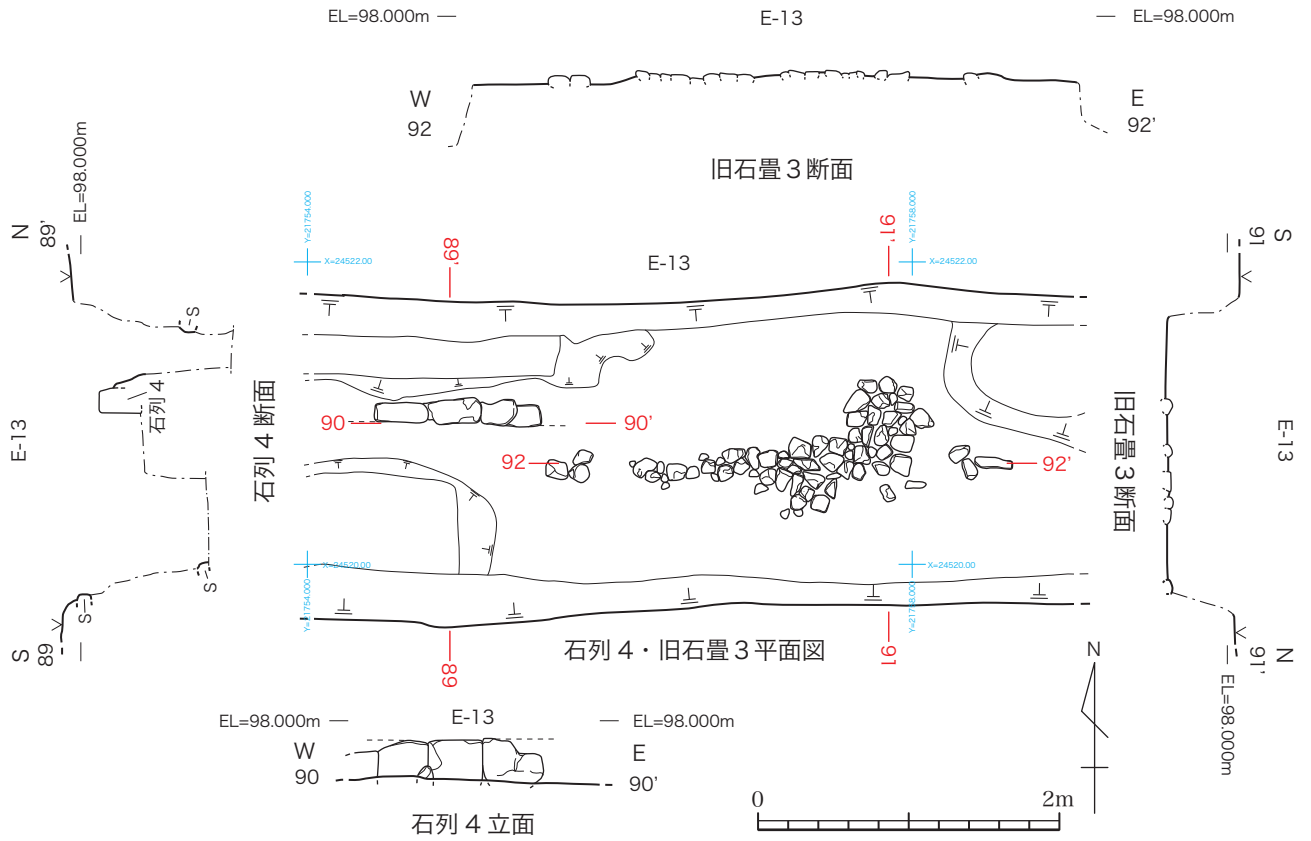


4. 方形石組み4内遺物出土状況1



5. 方形石組み4内遺物出土状況2





第39図 トレンチ4遺構5(石列4・旧石畳3)



1. トレンチ4東側石列・旧石畳3(南東から)



2. 石列4立面(南から)



3. 旧石畳3(北東から)

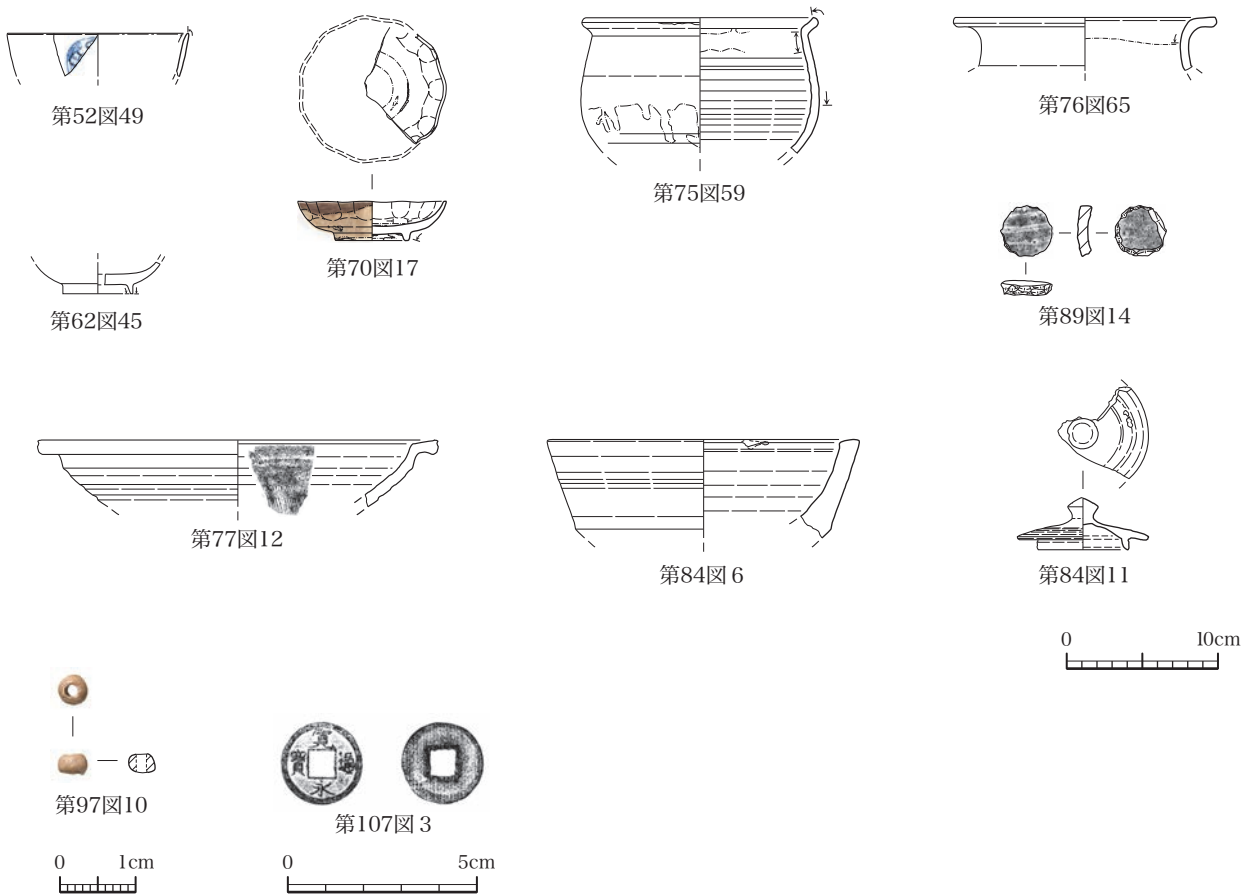


4. 第IV層遺物出土状況(画像下が北)

図版60 トレンチ4遺構⑥(石列4・旧石畳3・旧造成層)



第40図 トレンチ4 遺構直上・遺構内（II b層）出土遺物



第41図 トレンチ4（III・IV層）出土遺物

## 第5節 出土遺物

本報告の対象となった人工遺物は総計で15,828点で、自然遺物を加えたコンテナ数は55箱におよぶ。その種別は、瓦が最も多く、次いで陶磁器類では沖縄産陶器、本土産陶磁器、中国産陶磁器と続く。この中で目立つ遺物として、中国産陶磁器では官窯クラスの青磁や色絵、瑠璃釉などがあり、本土産陶磁器においても、金彩が施された色絵磁器が多量に出土している。また、これらを模した沖縄産陶器が含まれている状況がみえ、これらはいずれも複数個体が確認されていることから、揃いで存在していたことが考えられる。

ここでは遺物の種別ごとに概要、観察表、実測図、写真の順に報告を行い、集計表は本章の末尾(319頁～)に掲載した。また、胴部片や小片等のため図化対象としないが、当地の特質を表し、変遷を知る上で必要と思われる陶磁器は写真と観察表で報告を行い、陶磁器以外の遺物に関しても、図化対象外で必要と思われる遺物は、その他の遺物として写真と観察表を掲載した。なお、これら遺物の写真は、その特性をより詳細に見せる目的から、実測図の傾きと異なる場合がある。また、その縮尺も基本的に33～50%としたが、大型・小型の遺物に関しては適宜縮小・拡大し、展開を追加した資料がある。

### 1 中国産青磁

中国産青磁は216点が得られている。産地は龍泉窯産の粗製品が多いが、景德鎮窯産の官窯クラスと思われる製品も一定量得られている。器種は碗・小碗・皿・小鉢・盤・瓶・壺・杯が確認されており、碗類が大半を占める。次に器種ごとの概要を記し、詳細は観察表に記載する。

#### ①碗(1～6)

A類：明代の龍泉窯産をまとめた。端反口縁や直口口縁を呈するものがある(1～5)。

B類：明代の福建・広東系とされるもので、底部片が得られている(6)。

#### ②小碗(18～21)

清代の景德鎮窯産で直口口縁を呈する。外底に銘款を描くものがある(19・20)。

#### ③皿・小鉢(7～11・22～28)

A類：明代の龍泉窯産のもので、器形は端反皿、稜花皿、口折れの小鉢がある(7～9・11)。

B類：清代の景德鎮窯産で官窯クラスと思われるもの。薄手で腰部が屈曲する器形となる(22～28)。

#### ④盤(12・17)

鏝縁口縁で端部を摘み上げるもの(12)や高台が低い底部(17)がある。明代の龍泉窯産。

#### ⑤袋物(13～15・29)

瓶(13・14)と壺(15・29)を袋物としてまとめた。産地不明でラッパ状に外反するもの(13)や、明代の龍泉窯産で高台がハの字状に開くものがある(14)。壺は明代の龍泉窯産の酒会壺で、頸部は直口し胴部で膨らむ(15)や清代の景德鎮窯産で頸部が屈曲するもの(29)がある。

#### ⑥杯(16)

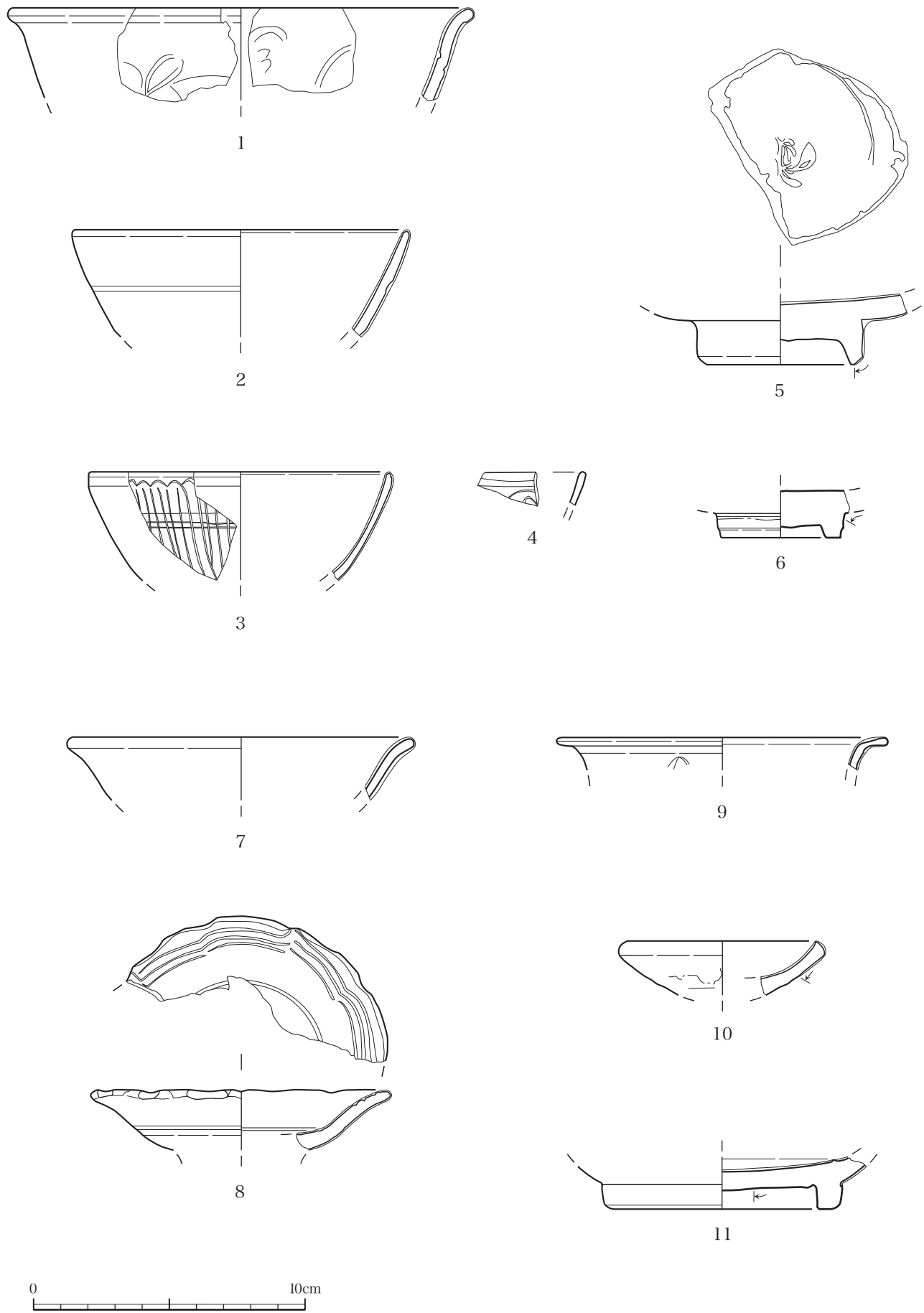
高足杯の脚部で外面に竹ノ節がみられる。明末清初の龍泉窯産。

第34表 中国産青磁観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項			グリッド・層
					口径	器高	底径	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等	
第42図 図版61	1	碗	A	口縁部	17.2	—	—	オリブ灰色の釉を両面に施釉。両面に細かい貫入。	灰白色で細かい。微細な黒色粒を少量含む。	両面に草花文を施すが不鮮明。轆轤成形。龍泉窯産で14c後半~15c中葉。碗V類(瀬戸ほか2007)。	4トレE-13 I層
	2	碗	A	口縁部	12.5	—	—	オリブ灰色の釉を両面に施釉。両面に荒い貫入。	灰白色で細かい。微細な黒色粒を少量含む。	外面に陰圏線を轆轤成形。龍泉窯産で15c。碗VかVI類(瀬戸ほか2007)。	1トレF-14 I層
	3	碗	A	口縁部	11.2	—	—	オリブ黄色の釉を両面に施釉。両面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。黒色粒を含む。	外面に細蓮弁文。轆轤成形。龍泉窯産で15c~16c。碗VI類(瀬戸ほか2007)。	1トレF-19
	4	碗	A	口縁部	—	—	—	灰オリブ色の釉を両面に施釉。	灰白色でやや細かい。微細な黒色粒を含む。	外面に蓮弁文。轆轤成形。15c~16c。	1トレF-18 石積IⅢ層
	5	碗	A	底部	—	—	6.1	オリブ灰色の釉を内底から高台外面まで施釉。全面に荒い貫入。	灰白色でやや細かい。黒色粒、白色粒を多く含む。	内底に陰圏線+印花文。轆轤成形。龍泉窯産で14c後半~15c中葉。碗V類(瀬戸ほか2007)。	4トレE-17 I層
	6	碗	B	底部	—	—	4.4	灰オリブ色の釉を内底から外面腰部まで施釉。細かい貫入。	灰白色でやや細かい。黒色粒を多く含む。	無文で轆轤成形。福建・広東系で15c~16c。碗VI類(瀬戸ほか2007)。	4トレE-13 I層
	7	皿	A	口縁部	12.8	—	—	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。黒色粒を含む。	無文で轆轤成形。龍泉窯産で14c後半~15c前半。皿V類(瀬戸ほか2007)。	1トレF-20 I層
	8	皿	A	口縁部	11.1	—	—	灰オリブ色の釉を両面に施釉。全面に細かい貫入。	灰色でやや粗い。黒色粒、白色粒を多く含む。	口唇部は稜花状。内面に波状文、内底に陰圏線。轆轤成形。龍泉窯産で15c中葉~16c初頭。碗VI類(瀬戸ほか2007)。	1トレF-19 I層
	9	小鉢	A	口縁部	12.2	—	—	オリブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で緻密。	外面に蓮弁文。轆轤成形。龍泉窯産で14c後半~15c初頭。	1トレF-20 I層
	10	皿	C	口縁部	7.6	—	—	オリブ灰色の釉を内面から外面胴部まで施釉。全面に細かい貫入。	灰白色でやや細かい。黒色粒を含む。	無文で轆轤成形。国産の可能性はある。明代か。	4トレE-14 I層
	11	皿	A	底部	—	—	8.6	黄橙色の釉を内底から高台内面まで施釉。	橙色で細かい。黒色粒を含む。	内底に陽圏線。轆轤成形。龍泉窯産で14c後半~15c中葉。	2トレH-15 I層
第43図 図版62	12	盤	—	口縁部	22.5	—	—	オリブ灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。黒色粒を多く含む。	内面に蓮弁文。轆轤成形。龍泉窯産で14c後半~15c中葉。皿V類(瀬戸ほか2007)。	表採
	13	瓶	—	口縁部	3.8	—	—	オリブ灰色の釉を両面に施釉。全面に細かい貫入。	灰白色で緻密。黒色粒を含む。	内面上部に陰圏線。轆轤成形。明代か。	2トレH-15 Ⅲ層
	14	瓶	—	底部	—	—	7.2	明灰黄緑色の釉を両面に施釉後、外底と畳付を釉剥ぎ。全面に粗い貫入。	灰白色で細かい。黒色粒を含む。	無文。轆轤成形。龍泉窯産で14c後半~15c中葉。	4トレE-18 I層
	15	壺	—	口縁部	—	—	—	オリブ灰色の釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。黒色粒を多く含む。	外面に蓮弁文。轆轤成形。龍泉窯産で14c後半~15c中葉。	4トレE-13 IV層

第34表 中国産青磁観察一覽2

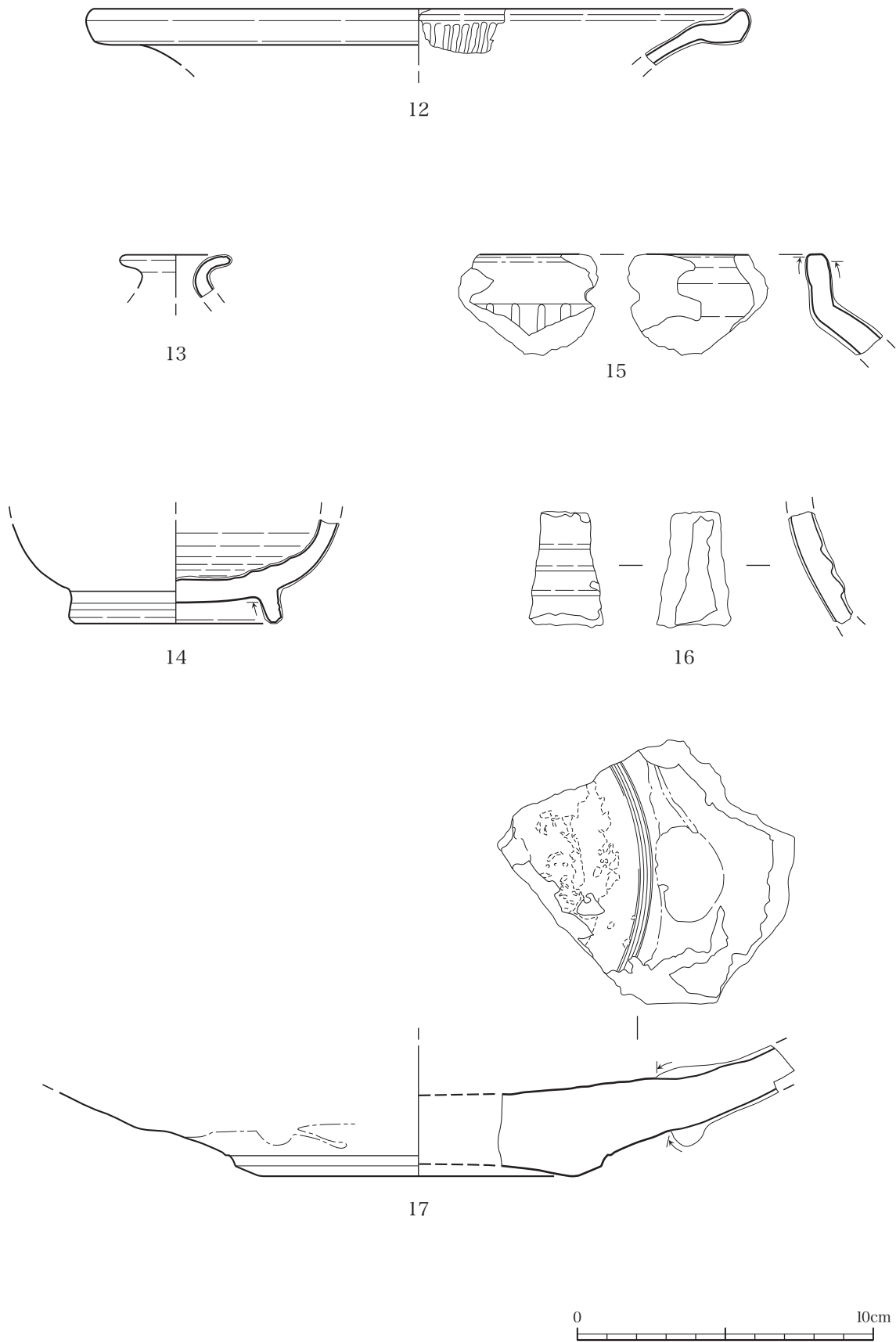
挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項			グリッド・層
					口径	器高	底径	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等	
第43図 図版62	16	杯	—	底部	—	—	—	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。内面に粗い貫入。	灰白色で細かい。黒色粒を含む。	外面に竹ノ節がみられる。轆轤成形。龍泉窯産で16c~17c。	4トレE-17 II層
	17	盤	—	底部	—	—	12.4	オリーブ灰色の釉を内底から腰部まで施釉。内底を釉剥ぎ。全面に細かい貫入。	灰白色で細かい。黒色粒を含む。	無文で轆轤成形。龍泉窯産で15c~16c。	2トレH-15 I層
第44図 図版63	18	小碗	—	口縁部	9.4	—	—	外面に明灰黄緑色釉、内面に透明釉を掛け分ける。	白色で緻密。	無文で轆轤成形。景德鎮窯産で18c後半~19c前半か。	3トレG・ H-17 I層
	19	小碗	—	底部	—	—	3.3	外面に明灰黄緑色釉、内面と外底に透明釉を掛け分ける。畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外底に銘款。轆轤成形。景德鎮窯産で19c。	4トレE-13 IV層
	20	小碗	—	底部	—	—	3.6	外面に明灰黄緑色釉、内面に透明釉を掛け分ける。畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外底に銘款。轆轤成形。景德鎮窯産で18c後半。乾隆年間。	1トレF-14 I層
	21	小碗	—	口縁部	8.8	—	—	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に草文。轆轤成形。景德鎮窯産で18c。官窯クラスか。	1トレF-17 II層
	22	皿	B	口縁部	—	—	—	明灰黄緑色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	無文で轆轤成形。景德鎮窯産で清代。官窯クラス。	2トレH-15 IIb層
	23	皿	B	底部	—	—	—	両面に明灰黄緑色の釉、外底に透明釉を掛け分ける。畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	無文で轆轤成形。景德鎮窯産で清代。官窯クラス。	2トレH-15 石組3 IIb層
	24	皿	B	底部	—	—	12.3	両面に明灰黄緑色の釉、外底に透明釉を掛け分ける。畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	無文で轆轤成形。景德鎮窯産で清代。官窯クラス。	2トレH-15 IIb層
	25	皿	B	底部	—	—	9.2	両面に明灰黄緑色の釉、外底に透明釉を掛け分ける。畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	無文で轆轤成形。景德鎮窯産で清代。官窯クラス。	2トレH-15 石組3 IIb層
	26	皿	B	底部	—	—	9.6	両面に明灰黄緑色の釉、外底に透明釉を掛け分ける。畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	無文で轆轤成形。景德鎮窯産で清代。官窯クラス。	2トレH-15 I層
	27	皿	B	底部	—	—	9.7	両面に明灰黄緑色の釉、外底に透明釉を掛け分ける。畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	無文で轆轤成形。景德鎮窯産で清代。官窯クラス。	2トレH-15 石組3 IIb層
	28	皿	B	底部	—	—	—	内底に明灰黄緑色の釉、外底に透明釉を掛け分ける。	白色で緻密。	外底に銘款。轆轤成形。景德鎮窯産で清代。官窯クラス。	2トレH-15 石組3 IIb層
29	壺か瓶	—	口縁部	—	—	—	明緑灰色の釉を両面に施釉。	灰白色で細かい。黒色粒を含む。	外面に葉文か植物の文様。轆轤成形。景德鎮窯産で18c後半~19c前半。	4トレE-17 II層	



第42図 中国産青磁 1

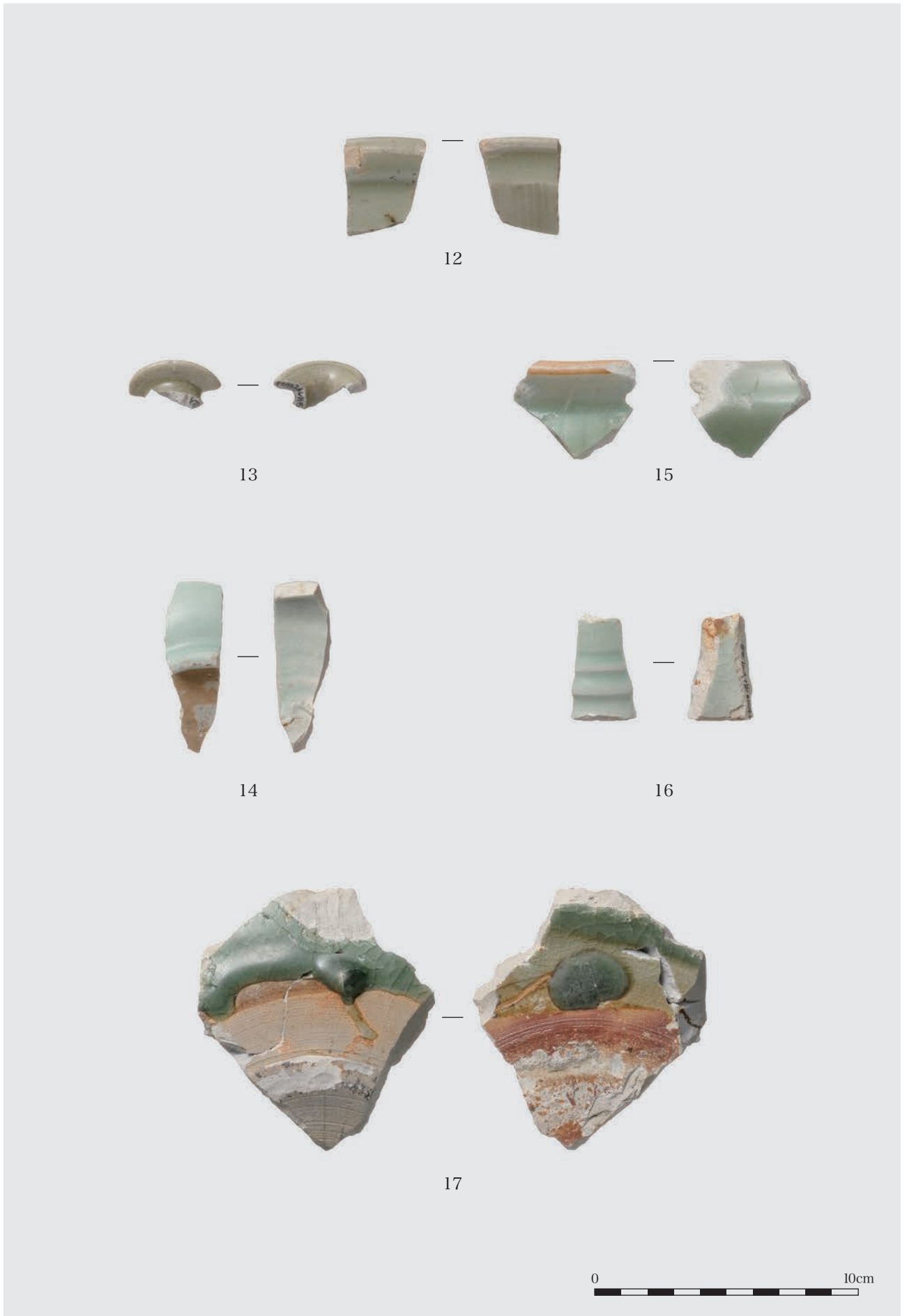


図版61 中国産青磁 1

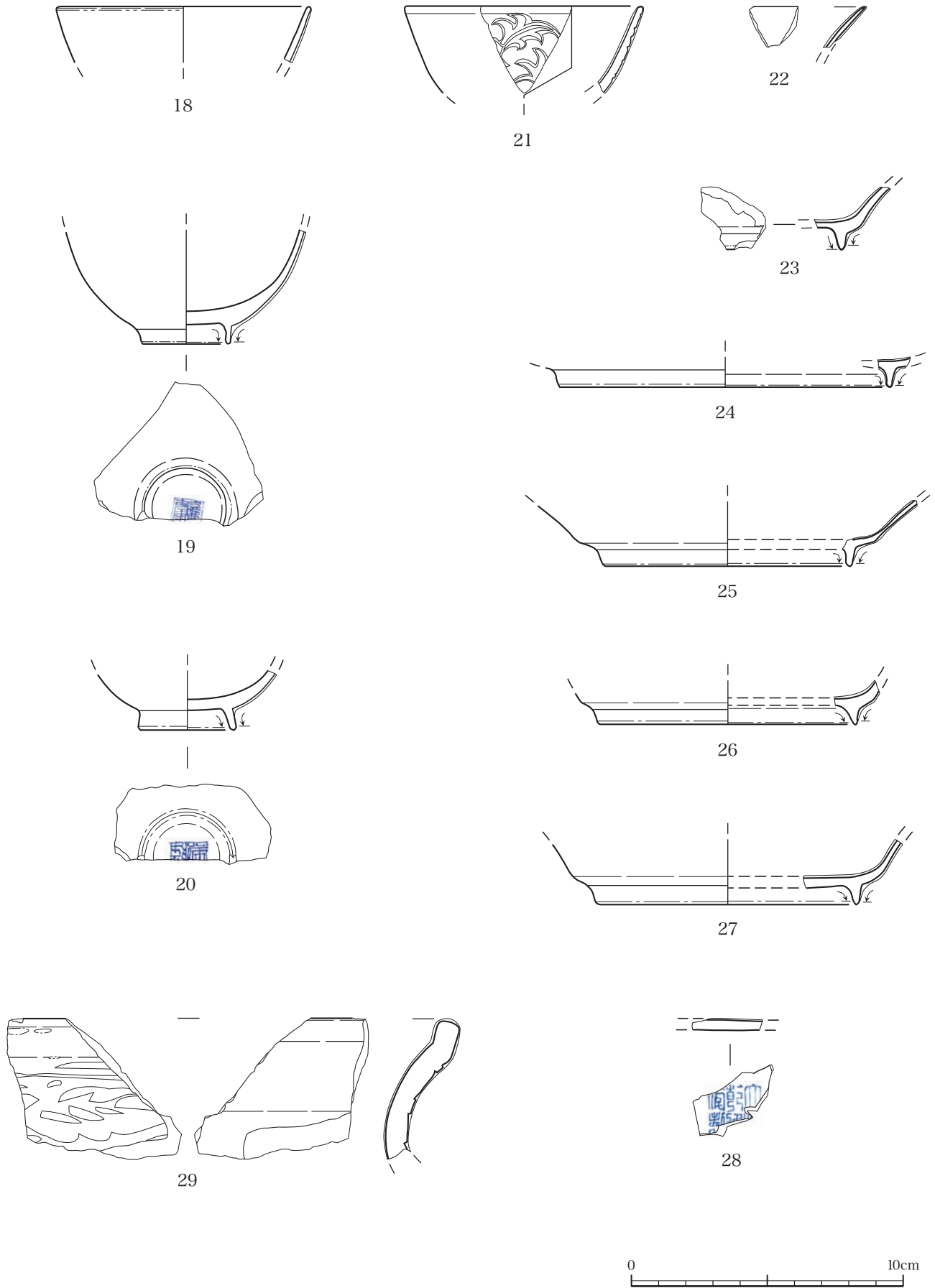


第43図 中国産青磁2

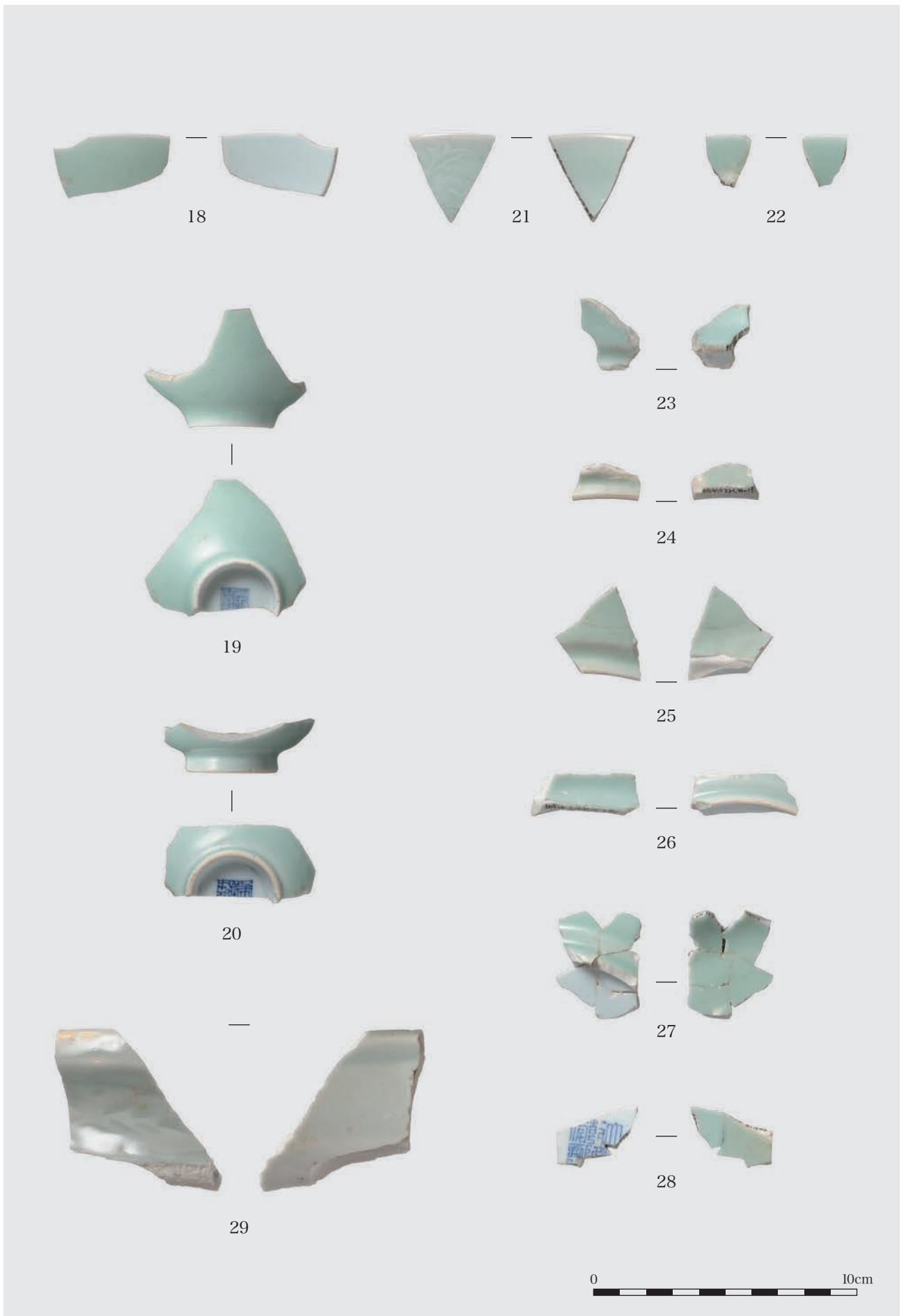




図版62 中国産青磁2



第44図 中国産青磁3



図版63 中国産青磁 3

## 2 中国産白磁

中国産白磁は180点が得られている。産地は福建・広東系のものが多く、景德鎮窯産や徳化窯産の製品も得られている。器種は碗・小碗・皿・鉢・小杯・壺・合子が確認されている。次に器種ごとの概要を記し、詳細は観察表に記載する。

### ①碗（1・2・5・6）

A類：福建・広東系で明末清初に位置づけられるもの（1・2・5）。

B類：明代の景德鎮窯産で成形が丁寧なもの（6）。

白磁碗はこの中でA類が多い傾向にある。

### ②小碗（12・13）

清代の徳化窯産で、薄手で型造りとなるもの。端反口縁（12）があり、その他に胴に陽刻文が施された優品が含まれる。

### ③皿か鉢（3・4）

底部のみの資料で皿もしくは鉢と考えられるもの。明代の福建・広東系。

### ④皿（7～10）

明代のものは景德鎮窯産の端反口縁皿（7）や福建産の灯明皿（8）があり、清代に位置づけられるものは徳化窯産の端反皿（9）、福建・広東系の碁笥底の底部（10）がある。

### ⑤小杯（11・14・15）

A類：明末清初の景德鎮窯産で外底に「玉」の字が描かれる（14）。

B類：明末～清代の徳化窯産を一括した。型成形で端反口縁（15）となるものや、象牙質の八角杯と思われる上質の資料（11）がある。

### ⑥壺（16）

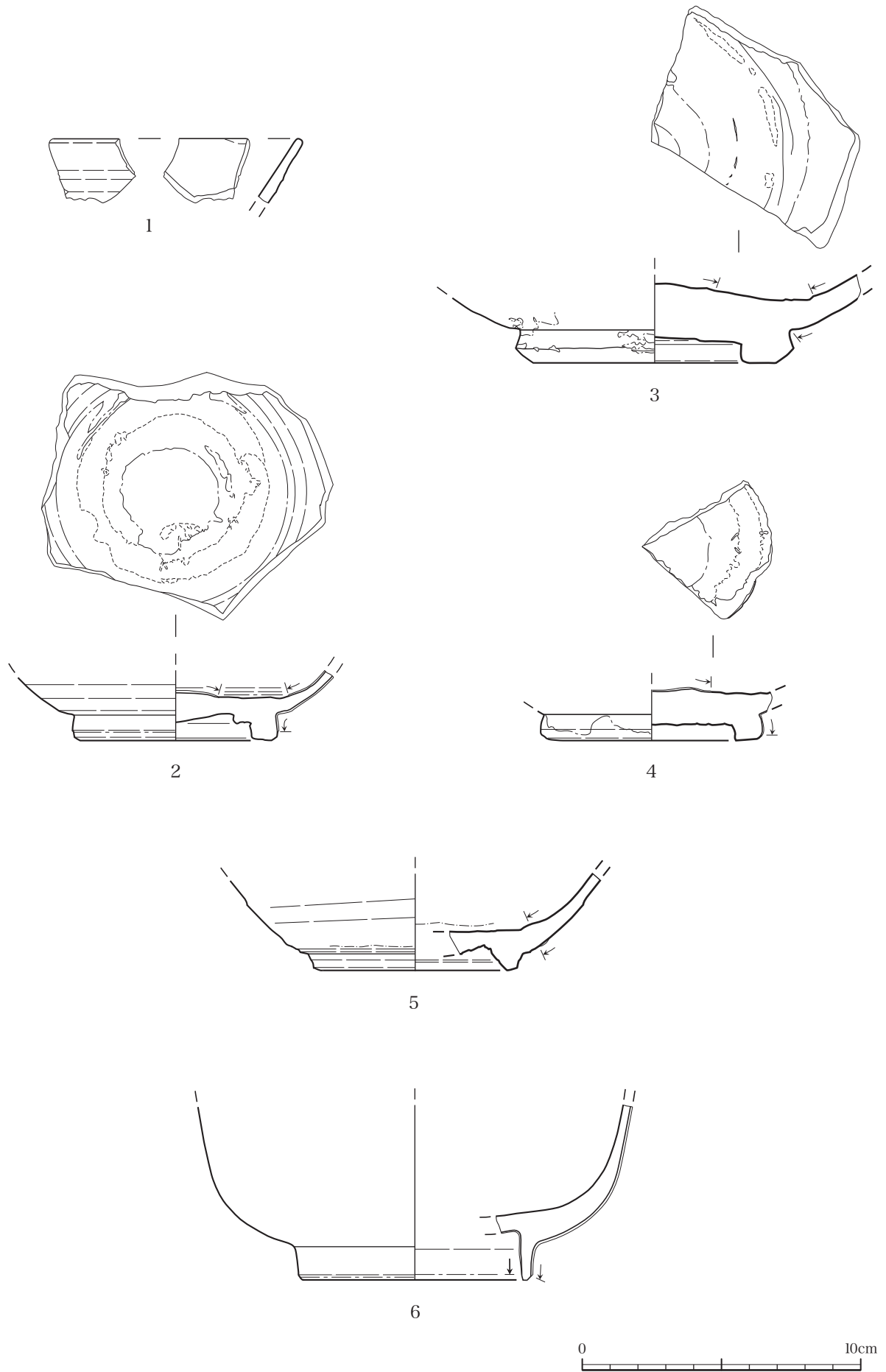
16は明末清初の福建産と考えられる底部資料である。

### ⑦合子（17）

17は合子の蓋で、産地は不明であるが清代とみられる。本資料は数種のサイズが確認されており、形態から化粧品などの容器として使用されたことが想定できる。

第35表 中国産白磁観察一覧

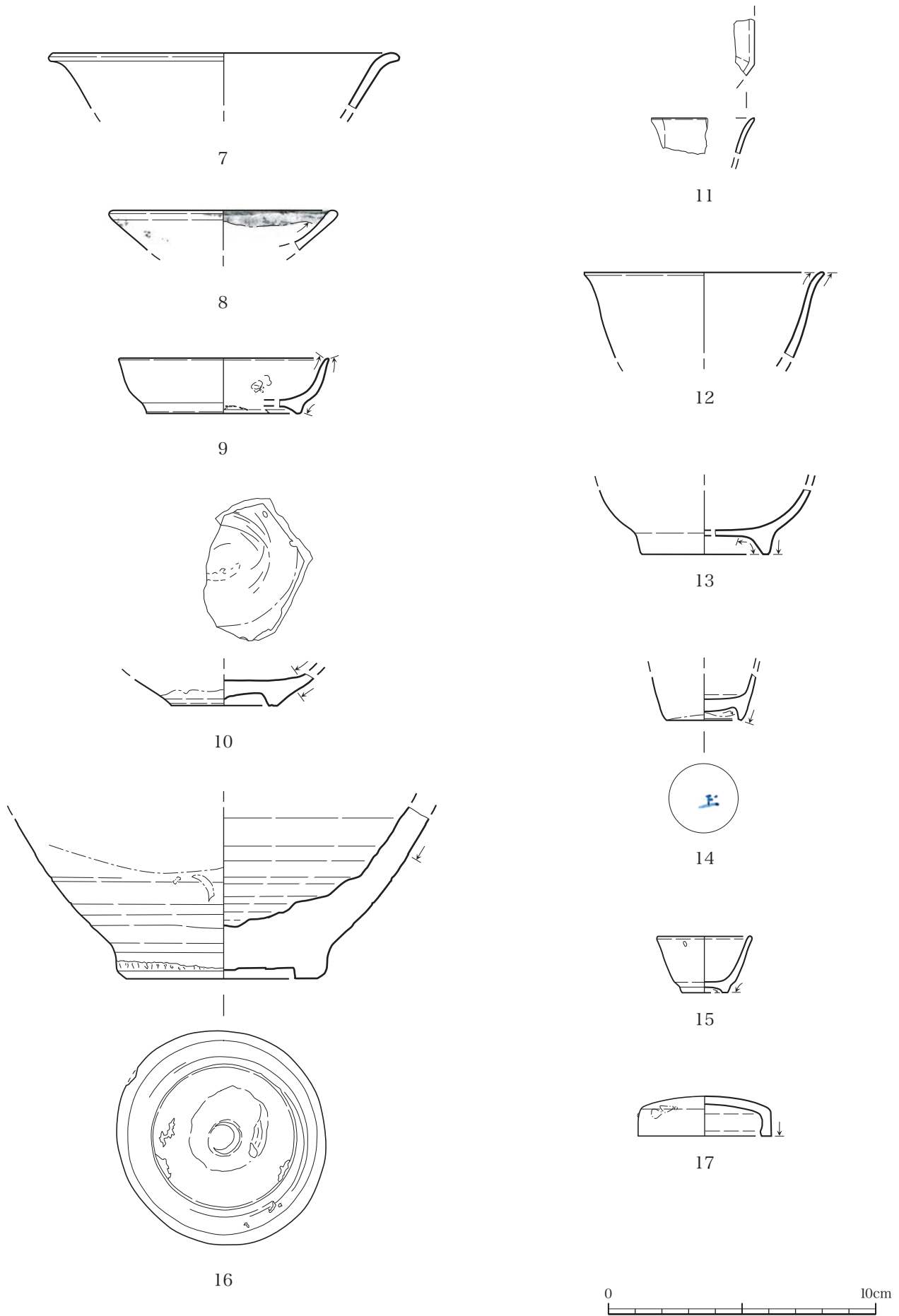
挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項			グリッド・層
					口径	器高	底径	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等	
第45図 図版64	1	碗	A	口縁部	—	—	—	灰黄色褐色の釉を両面に施釉。内面口唇部に釉だまりがみられる。両面に細かい貫入。	橙色で粗い。黑色粒を少量含む。	無文で轆轤成形。福建産で17c前半。	2トレH-15 I層
	2	碗	A	底部	—	—	7.4	オリーブ灰色の釉を内底から高台脇まで施釉後、内底を蛇ノ目釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	無文で轆轤成形。高台内に段を設け蛇目凹形状態に整形。福建・広東系で16c後半～17c前半。	1トレF-20 I層
	3	皿か鉢	—	底部	—	—	10.0	明オリーブ灰色の釉を内底から外面腰部まで施釉後、内底を蛇ノ目釉剥ぎ。両面に細かい貫入。	白色で細かい。	無文で轆轤成形。16c後半～17c前半。	4トレI層
	4	皿か鉢	—	底部	—	—	8.0	明オリーブ灰色の釉を内底から高台脇まで施釉後、内底を蛇ノ目釉剥ぎ。内面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	無文で轆轤成形。福建・広東系で16c後半～17c前半。	1トレF-15 I層
	5	碗	A	底部	—	—	7.3	灰白色の釉を内面から外面腰部まで施釉後、内底を釉剥ぎ。両面に細かい貫入。	淡黄色で細かい。黑色粒を含む。	無文で轆轤成形。福建・広東系で17c。	2トレH-13 III層
	6	碗	B	底部	—	—	8.4	透明釉を全面に施釉後、暈付を釉剥ぎしアルミナを塗布。全面に細かい貫入。	白色で細かい。	無文で轆轤成形。景德鎮窯で15c後半～16c中葉。	4トレE-14 I層
第46図 図版65	7	皿	—	口縁部	13.1	—	—	透明釉を両面に施釉。	白色でやや緻密。	無文で轆轤成形。景德鎮窯で16c。	2トレH-15 III層
	8	皿	—	口縁部	8.6	—	—	灰白色の釉を内底から内面口縁部下まで施釉。口唇部～外面は露胎。	灰白色で緻密。	灯明皿。無文で轆轤成形。煤が付着。福建産で14c～15c。	1トレF-18 III層
	9	皿	—	口～底	7.9	2.05	5.8	透明釉を内底から暈付まで施釉後、口唇部と暈付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	無文で型成形。徳化窯で18c～19c前半。	4トレE-18 I層
	10	皿	—	底部	—	—	4.0	透明釉を内面から外面腰部まで施釉。内底は露胎。	白色で緻密。	基筭底。無文で轆轤成形。福建・広東系で17c後半～18c前半。	3トレI層
	11	小杯	B	口縁部	—	—	—	透明釉を両面に施釉。	白色で細かい。	八角杯。無文で型成形。徳化窯で17c前半。	3トレG・H -17 I層
	12	小碗	—	口縁部	9.0	—	—	透明釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。	白色で緻密。	無文で型成形。徳化窯で18c～19c前半。	4トレE-14 IV層
	13	小碗	—	底部	—	—	4.8	透明釉を内面から高台内面まで施釉後、暈付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	無文で型成形。徳化窯で18c～19c前半。	3トレI層
	14	小杯	A	底部	—	—	2.8	透明釉を全面に施釉後、暈付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	外底に「玉」の字。轆轤成形。景德鎮窯で16c後半～17c前半。	1トレF-18 I層
	15	小杯	B	口～底	3.6	2.1	1.8	灰白色釉を全面に施釉後、暈付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	無文で型成形。暈付に溶着防止の粉殻痕。徳化窯で18c～19c前半。	2トレH-14 III層
16	壺	—	底部	—	—	7.8	灰白色の釉を内底から外面胴部まで施釉。	淡黄色で細かい。黑色粒を含む。	無文で轆轤成形。福建産で16c～17c。	1トレF-20 I層	
17	合子	—	蓋	5.0	1.5	—	全体に白化粧後、外面に透明釉を施釉。	灰白色で細かい。	無文で型成形か。17c～18c。	1トレF-17 II層	



第45図 中国産白磁 1

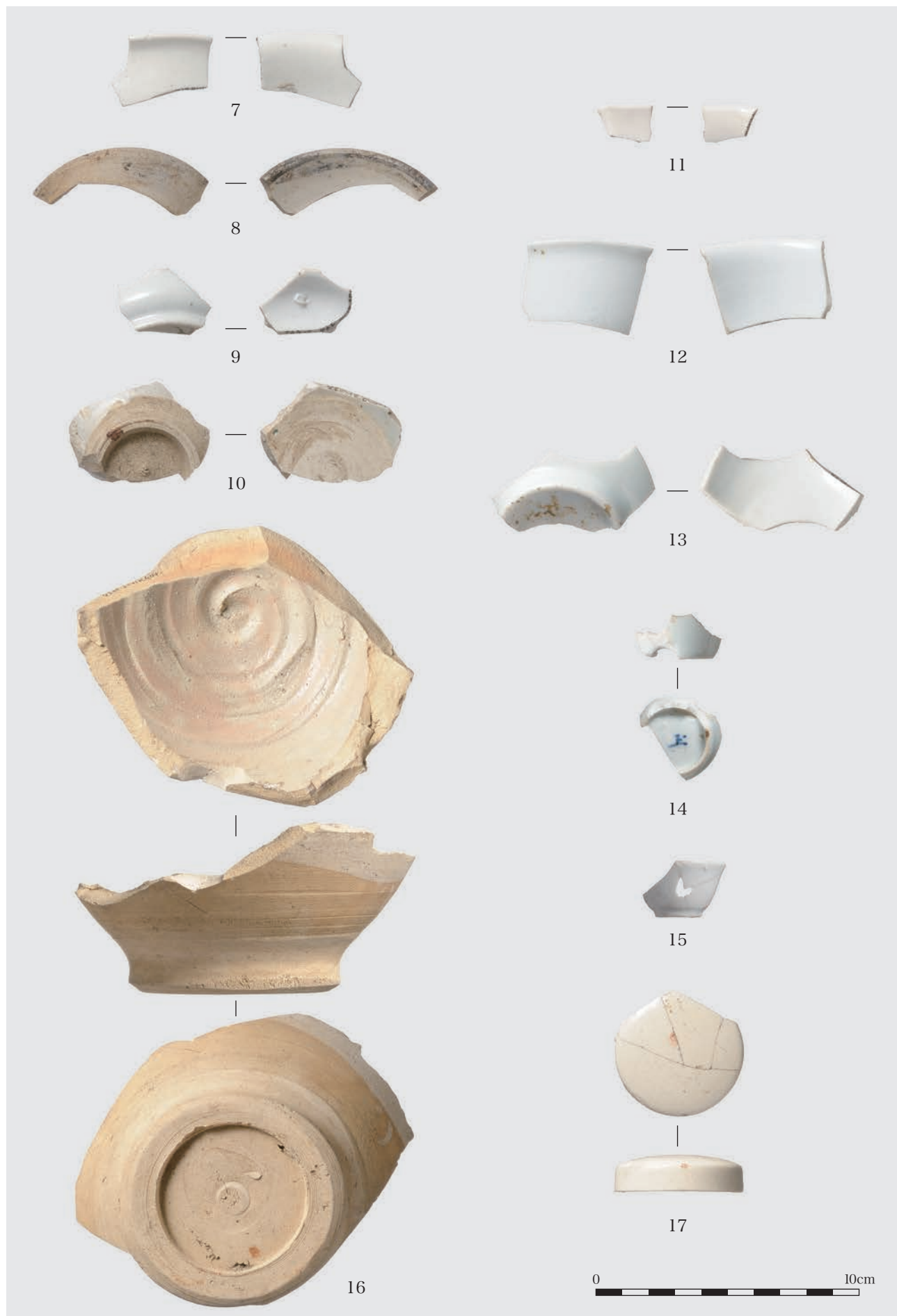


図版64 中国産白磁 1



第46図 中国産白磁2





図版65 中国産白磁2

### 3 中国産青花

青花は1333点が得られている。清代の景德鎮窯産や福建・広東系のものが多く、この他に徳化窯や漳州窯産の製品も得られている。今回の調査では芙蓉手の皿や官窯クラスとみられる製品も出土している。なお、ここでは青磁染付、鉄釉染付も含めた。

以下に器種ごとの概要を記し、詳細は観察表に記載する。

#### ①碗 (1～9、11～13、15、18～28)

A類：明代の景德鎮窯産で蓮子碗や腰折碗がある(1～3)。

B類：明末清初の景德鎮窯産で外反口縁のもの(12・13)。

C類：清代の景德鎮産。器形は外反口縁や直口口縁があり、ゴム印を施すものもある(4～9、11・15)。

D類：清代の福建・広東系で粗製のもの(18～28)。

#### ②小碗 (14、16・17、49・50)

A類：清代の景德鎮窯産を一括した。褐釉染付や青磁染付がある(14、16・17)。

B類：清代の徳化窯産で型成形のもの(49・50)。

#### ③皿 (29～48)

A類：明代の景德鎮窯産で外反口縁のもの(29)と碁笥底で直口口縁のもの(31)がある。

B類：明末清初の景德鎮産のものをまとめた。轆轤成形で碁笥底となるものや外底に鈹痕を有するものがある(32、36～39)。芙蓉手の皿(30)は型成形で口縁は輪花状となる。

C類：清代の景德鎮窯産で直口口縁や折縁となるものがある(33～35、40～42)。

D類：福建産あるいは漳州窯系のもの。福建産は清代で直口口縁や端反口縁がある(43～46)。

漳州窯系の上ものは明末清初(47・48)。

#### ④小鉢 (10)

10は腰折れを呈する小鉢の底部片である。明代の景德鎮窯産。

#### ⑤瓶・小瓶 (51～54)

瓶は2点図化した。51は外反する口縁部片、52は外面に渦文を描く底部片である。いずれも明代の景德鎮窯産である。小瓶(薬瓶)は轆轤成形(53)と型成形のもの(54)がみられる。54の内面には型成形のバリ痕がみられ赤色物が付着する。湧田古窯跡や首里城などに類例がある。

#### ⑥蓋 (55・56)

55は蓋の庇部分で、清代の景德鎮窯産の官窯クラスと思われる資料である。外面に如意頭繫文を描き、丁寧なつくりとなる。56は明末清初の福建産。

#### ⑦小杯・高足杯 (57～61)

小杯(58～61)は明末清初～清代の景德鎮窯産のものが得られている。59は外底に「成化年製」銘。高足杯(57)は明末清初の景德鎮窯産で渡地村跡に類例がある。

第36表 中国産青花観察一覧1

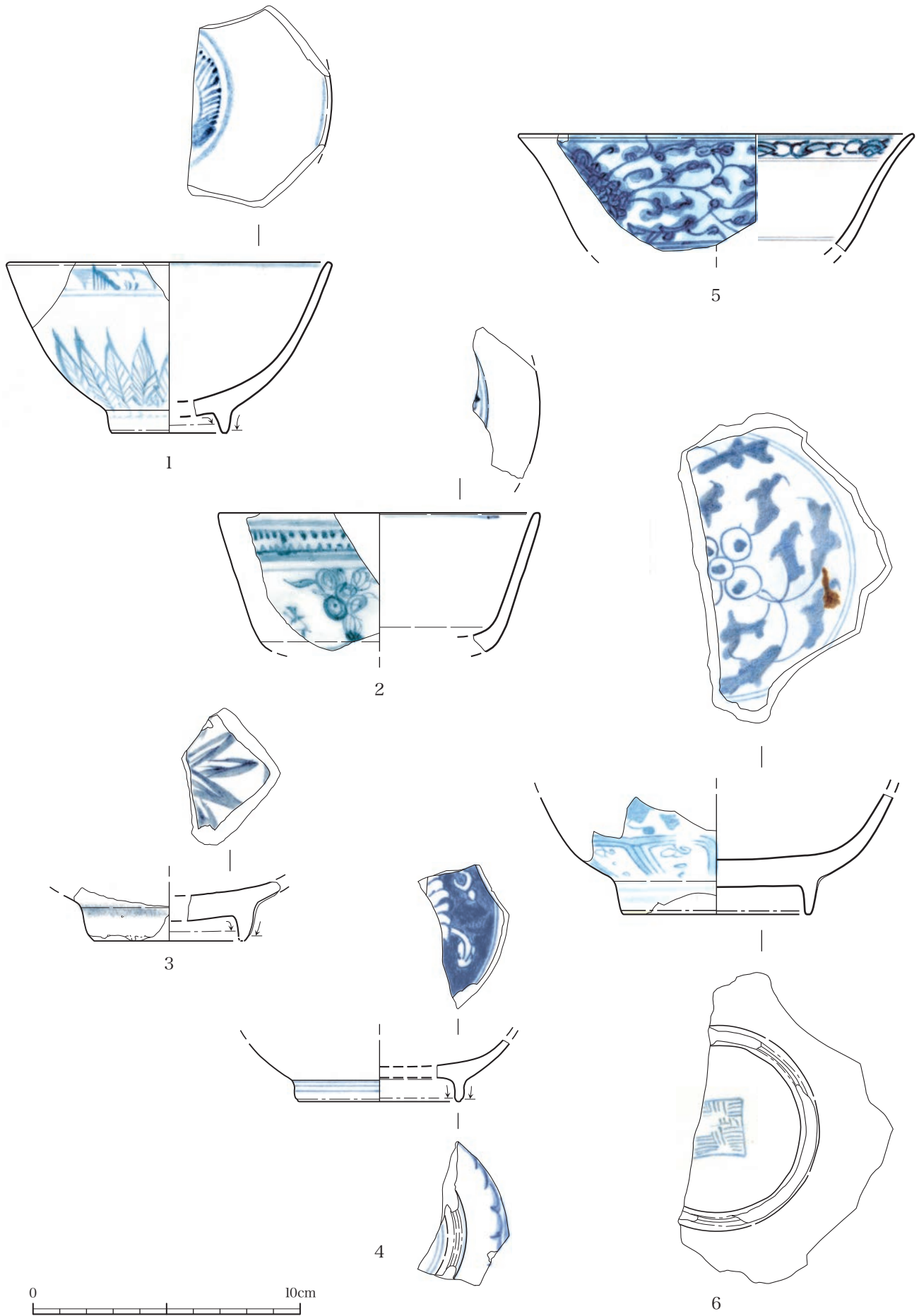
挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項			グリッド・層
					口径	器高	底径	釉(色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	文様等	
第47図 図版66	1	碗	A	口 底	12.2	6.4	4.5	明緑灰色釉を内底～畳付まで施釉、白磁釉を外底に塗布後、畳付を釉剥ぎ。	白色で細かい。	外面に波濤文+蕉葉文、内底に法螺貝文か。轆轤成形。景德鎮窯産で16c前半～中葉。蓮子碗。碗C群(瀬戸ほか2007)。	1トレF-15 石組Ⅲ層
	2	碗	A	口 縁部	12.0	—	—	明緑灰色の釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に波濤文+アラベスク文、内底文様は不明。轆轤成形。景德鎮窯産で16c前半～中葉。碗D群(瀬戸ほか2007)。	1トレF-19 Ⅰ層
	3	碗	A	底 部	—	—	6.0	明緑灰色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。黒色粒を含む。	内底に十字花文か。轆轤成形。景德鎮窯産で16c前半～中葉。碗D群(瀬戸ほか2007)。	4トレE-17 Ⅲ層
	4	碗	C	底 部	—	—	6.3	明緑灰色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	外面に蓮弁文、内底に白抜き菊唐草文か。轆轤成形。景德鎮窯産で17c末～18c。	1トレF-17 Ⅱ層
	5	碗	C	口 縁部	14.8	—	—	明緑灰色釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に牡丹唐草文+ラマ式蓮弁文か、内面に花唐草文。轆轤成形。景德鎮窯産で19c前半。	1トレF-17 Ⅰ層
	6	碗	C	底 部	—	—	7.0	明緑灰色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面に花唐草文+ラマ式蓮弁文、内面に花唐草文、外底に銘款。轆轤成形。景德鎮窯産で19c前半。	2トレH-15 Ⅰ層
第48図 図版67	7	碗	C	口 縁部	9.8	—	—	灰白色釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に三友文か。轆轤成形。景德鎮窯産で17c後半。	2トレH-13 Ⅲ層
	8	碗	C	口 縁部	8.6	—	—	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に宝文。轆轤成形。景德鎮窯産で17c後半～18c初。	3トレG・H-17 Ⅰ層
	9	碗	C	口 縁部	—	—	—	明緑灰色釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に白抜き菊唐草文、内面に白抜き半菊文。轆轤成形。景德鎮窯産で17c末～18c前半。	3トレG・H-17 Ⅱ層
	10	小鉢	—	底 部	—	—	5.4	灰白色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面にアラベスク文、内底に花鳥文か。轆轤成形。景德鎮窯産で15c末～16c前半。	1トレF-18 石積Ⅰ層
	11	碗	C	底 部	—	—	5.1	灰白色釉を両面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面に楼閣山水人物文。外底に「大明成化年製」銘。轆轤成形。景德鎮窯産で19c前半。	4トレE-13 Ⅳ層
	12	碗	B	底 部	—	—	4.9	灰白色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	内底に波文か。轆轤成形。景德鎮窯産で16c末～17c初頭。	2トレH-13 Ⅲ層
	13	碗	B	口 底	9.6	5.0	3.9	明緑灰色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で細かい。	外面に花唐草文、内底に草花文、外底に銘款。轆轤成形。景德鎮窯産で17c前半(1630～40年代)。	3トレG・H-17 Ⅲ層
	14	小碗	A	口 底	7.4	2.6	3.4	灰白色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面に花唐草文。轆轤成形。景德鎮窯産で18c末～19c前半。	2トレ北拡 H-15Ⅱb層/ 2トレH6・17Ⅰ層
	15	碗	C	口 底	11.5	(5.4)	4.8	明緑灰色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面に草花文をゴム印。轆轤成形。景德鎮窯産で20cか。	2トレ表採/ 2トレH-15 Ⅰ層・Ⅱb層
16	小碗	A	口 底	7.6	4.4	4.2	外面褐釉、内面透明釉の掛け分け後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	内底に山水文。轆轤成形。景德鎮窯産で17c後半。	4トレE-15 Ⅰ層	
17	小碗	A	口 縁部	10.0	—	—	外面青磁釉、内面透明釉の掛け分け。	灰白色で細かい。黒色粒を含む。	内面に八卦文。轆轤成形。景德鎮窯産で18c後半～19c前半。	4トレⅠ層	
第49図 図版68	18	碗	D	口 縁部	14.0	—	—	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に草花文。轆轤成形。福建・広東系で18c。	表採
	19	碗	D	口 縁部	12.6	—	—	明緑灰色釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に草花文。轆轤成形。福建・広東系で18c。	4トレE-13 Ⅳ層
	20	碗	D	口 縁部	13.0	—	—	明緑灰色釉を両面に施釉後、口唇部を釉剥ぎ。全面に細かい貫入。	白色で細かい。	外面に簡略化された草文。轆轤成形。福建・広東系で17c後半～18c前半。	4トレⅠ層

第36表 中国産青花観察一覧2

挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項			グリッド・層
					口径	器高	底径	釉(色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	文様等	
第49図 図版68	21	碗	D	口縁部	13.5	—	—	透明釉を両面に施釉。全面に細かい貫入。	灰白色で細かい。	外面にスタンプによる草文か。轆轤成形。福建・広東系で17c後半～18c前半。	4トLE-14 IV層
	22	碗	D	口縁部	16.0	—	—	明緑灰色釉を両面に施釉。全面に粗い貫入。	灰白色で細かい。	外面にスタンプによる菊花文+草花文?。轆轤成形。福建・広東系で17c後半～18c前半。	表採
	23	碗	D	口縁部	11.4	—	—	灰白色釉を両面に施釉。	灰色でやや細かい。	外面に丸文か。轆轤成形。産地不明で18～19c。	4トLE-17 II層
	24	碗	D	底部	—	—	6.5	明緑灰色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面に草花文、内底に不明の文様。轆轤成形。福建産で18c。	1トLF-14～ 16I層
	25	碗	D	底部	—	—	5.9	透明釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面に丸文+折枝文か。轆轤成形。福建産で18c。	4トLE-13 IV層
	26	碗	D	底部	—	—	6.8	明緑灰色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細かい。	外面に蓮弁文+寿字文か。外底に不明な文様。轆轤成形。福建産で18c。	4トLE-13 IV層
	27	碗	D	底部	—	—	7.0	灰白色釉を内面胴部から外面腰部まで施釉。	淡黄色で細かい。	文様不明。轆轤成形。福建・広東系で17c後半～18c前半。	3トLG-H-17 I層
	28	碗	D	底部	—	—	8.0	灰白色釉を内底から高台外面・外底まで施釉後、内底を蛇目釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	外面に不明な文様。轆轤成形。福建・広東系で17c後半～18c前半。	1トLF-15 I層
第50図 図版69	29	皿	A	口底	13.2	2.7	7.7	明緑灰色釉を全面施釉後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	外面に宝相華唐草文、内底に玉取獅子文。轆轤成形。景德鎮窯産で16c前半～中葉。皿B1群(瀬戸ほか2007)。	1トLF-16 I層
	30	皿	B	口縁部	18.4	—	—	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面文様は不明、内面は花卉内に宝文+吉祥文。口縁は輪花状で型成形。景德鎮窯産で17c前半。芙蓉手。皿I群(瀬戸ほか2007)。	1トLF-17 石積2皿層
	31	皿	A	口底	9.8	2.85	2.9	明緑灰色釉を内底～外面、外底に施釉し、畳付は露胎。	白色でやや緻密。	外面に波濤文+蕉葉文、内面に草花文、内底に稔花文。碁笥底で轆轤成形。景德鎮窯産で16c前半～中葉。皿C群(瀬戸ほか2007)。	1トLF-19 I層
	32	皿	B	底部	—	—	4.3	明緑灰色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で細かい。	内底に草花文+魚文(白盛り・鉄錆)。碁笥底で轆轤成形。景德鎮窯産で17c前半～中葉。	3トLEI層
	33	皿	C	口縁部	16.0	—	—	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面文様は不明、内面に唐草文。轆轤成形。景德鎮窯産で17c末～18c前半。	1トLF-15 I層
	34	皿	C	口縁部	15.0	—	—	灰白色釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面及び内面に梵字文。轆轤成形。景德鎮窯産で17c末～18c前半。	3トLG-H-17 II層/ 4トLE-17I層
	35	皿	C	口縁部	17.0	—	—	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に草花文?、内面は白抜き宝文か。内底に不明な文様。轆轤成形。景德鎮窯産で17c末～18c前半。	1トLF-16 I層
	36	皿	B	底部	—	—	6.8	透明釉を内底から高台外面まで施釉。	白色で緻密。	内面に列点文、内底に不明な文様。轆轤成形で外底に鈚の跡。景德鎮窯産で17c前半(1620～40年代)	4トLE-17 石積2IV層
第51図 図版70	37	皿	B	底部	—	—	4.0	透明釉を内底から高台外面まで施釉。	白色で緻密。	高台外面に圈線。轆轤成形。景德鎮窯産で17c前半。	1トLF-13 I層
	38	皿	B	底部	—	—	7.0	灰白色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	内底に兎文+山水文、外底に銘款。轆轤成形。景德鎮窯産で17c前半。	2トLE北 H-15I層
	39	皿	B	底部	—	—	8.8	灰白色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面及び内底に草花文。轆轤成形。景德鎮窯産で17c前半。	1トLF-16 I層
	40	皿	C	底部	—	—	6.5	灰白色釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	内底に楼閣か。轆轤成形。景德鎮窯産で18c前半。	3トLG-H-17 II層
	41	皿	C	底部	—	—	11.2	透明釉を全面に施釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	内底に花唐草文。轆轤成形。景德鎮窯産で17c末～18c前半。	1トLF-13 I層

第36表 中国産青花観察一覧3

挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項			グリッド・層
					口径	器高	底径	釉(色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	文様等	
第51図 図版70	42	皿	C	底部	—	—	9.3	透明釉を全面に施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	内面に唐草文、内底に牡丹文をペンシルド ロイニング。轆轤成形。景德鎮窯産か福建産 で18c末～19c前半。	2トレ北拡H-15 IIb層
	43	皿	D	口 底	16.1	3.2	8.4	灰白色釉を全面に施釉 後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で緻 密。	内面に梵字文、内底に吉祥文、外底に不明な 文様。轆轤成形。福建産で18c。	表採
	44	皿	D	口 底	15.0	3.0	8.0	灰白色釉を全面に施釉 後、畳付と外底際を釉剥 ぎ。	灰白色で細 かい。黒色粒 を含む。	外面及び内面に草花文。轆轤成形。福建産で 18c。	4トレE-13 IV層
	45	皿	D	底部	—	—	8.7	灰白色釉を全面に施釉 後、畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	内底に菊唐草文。轆轤成形。福建産で18c。	表採
第52図 図版71	46	皿	D	底部	—	—	7.7	明緑灰色釉を全面に施 釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で細 かい。	内底に山水文か。轆轤成形。福建産で18c。	3トレG・H-17 I層
	47	皿	D	口 縁部	(21.6)	—	—	白化粧後に灰白色の釉 を両面に施釉。	灰白色で細 かい。	外面及び内面に圈線。轆轤成形。漳州窯系で 17c前半。	2トレH-13 III層
	48	皿	D	底部	—	—	9.0	白化粧後に灰白色釉を 全面に施釉。	灰色でやや 細かい。黒色 粒を含む。	内底に草花文。轆轤成形。畳付に砂が付着。 漳州窯系で17c前半。	2トレH-13 III層
	49	小碗	B	口 縁部	12.0	—	—	透明釉を両面に施釉後、 口唇部を釉剥ぎ。	白色で細 かい。	外面に丸文。型成形。徳化窯産で18c。	4トレE-13 III層
	50	小碗	B	口 底	8.4	4.2	3.8	灰白色釉を両面に施釉 後、口唇部と畳付を釉剥 ぎ。	灰白色で緻 密。	外面に山水文。型成形。徳化窯産で18c。	1トレF-14 I層
	51	瓶	—	口 縁部	8.0	—	—	灰白色釉を両面に施釉。	灰白色で細 かい。	外面に蕉葉文か。轆轤成形。景德鎮窯産で 16c末～17c。	4トレE-18 I層
	52	瓶	—	底部	—	—	10.8	明緑灰色釉を全面に施 釉後、畳付を釉剥ぎ。	白色で細 かい。	外面に渦文。轆轤成形。景德鎮窯産で16c。	表採
	53	小瓶	—	胴 部	—	—	—	灰白色釉を外面に施釉。	灰白色で細 かい。	外面に「平安散○」銘。轆轤成形か。景德鎮窯 産。	3トレG-17 III層
	54	小瓶	—	底部	—	—	1.5	明緑灰色釉を外面に施 釉し、底面は露胎。	灰白色で細 かい。	外面に「平安散○」銘。型成形(貼り合わせ後外底 へう削り)。外底は揚げ底状。内面にはバリが残 り隙間に赤色の物質が残存。景德鎮窯産で18c。	3トレG・H-17 I層
	55	蓋	—	庇	—	—	—	透明釉を全面に施釉。	白色で緻密。	外面に如意頭繫文。轆轤成形。景德鎮窯産で 18c。官窯クラス。	4トレE-13 I層
	56	蓋	—	庇 袴	—	—	—	灰白色釉を両面に施釉し、 庇端部～袴部は露胎。庇端 部は緋色。外面に貫入。	淡黄色で細 かい。	外面に不明な文様。轆轤成形。福建・広東系 で17c。	4トレE-15 I層
	57	高足 杯	—	底部	—	—	3.7	明緑灰色釉を外面に施 釉し、内面～底面は露胎。	灰白色で細 かい。黒色粒 を含む。	外面に幅広の圈線。轆轤成形。景德鎮窯産で 16c～17c前半。	2トレH-15 石組3IIb層
	58	小杯	—	口 縁部	5.4	—	—	透明釉を両面に施釉。	白色で緻密。	外面に丸文他。轆轤成形。景德鎮窯産で17c 後半～18c前半。	2トレH-13 III層
	59	小杯	—	底部	—	—	1.7	灰白色釉を全面に施釉 後、畳付を釉剥ぎ。	灰白色で細 かい。	外面に山水文?、外底に「成化年製」銘。轆轤 成形。景德鎮窯産で17c後半～18c前半。	表採
60	小杯	—	底部	—	—	2.0	明緑灰色釉を内底から 高台外面まで施釉。	灰白色で緻 密。	外面及び内底に梵字文。轆轤成形。景德鎮窯 産で19c前半。	3トレG・H-17 I層	
61	小杯	—	底部	—	—	2.7	透明釉を全面に施釉後、 畳付を釉剥ぎ。	白色で緻密。	外面に草花文、内底に不明の文様。轆轤成 形。景德鎮窯産で17c前半。	2トレH-13 III層	



第47図 中国産青花 1



図版66 中国産青花 1

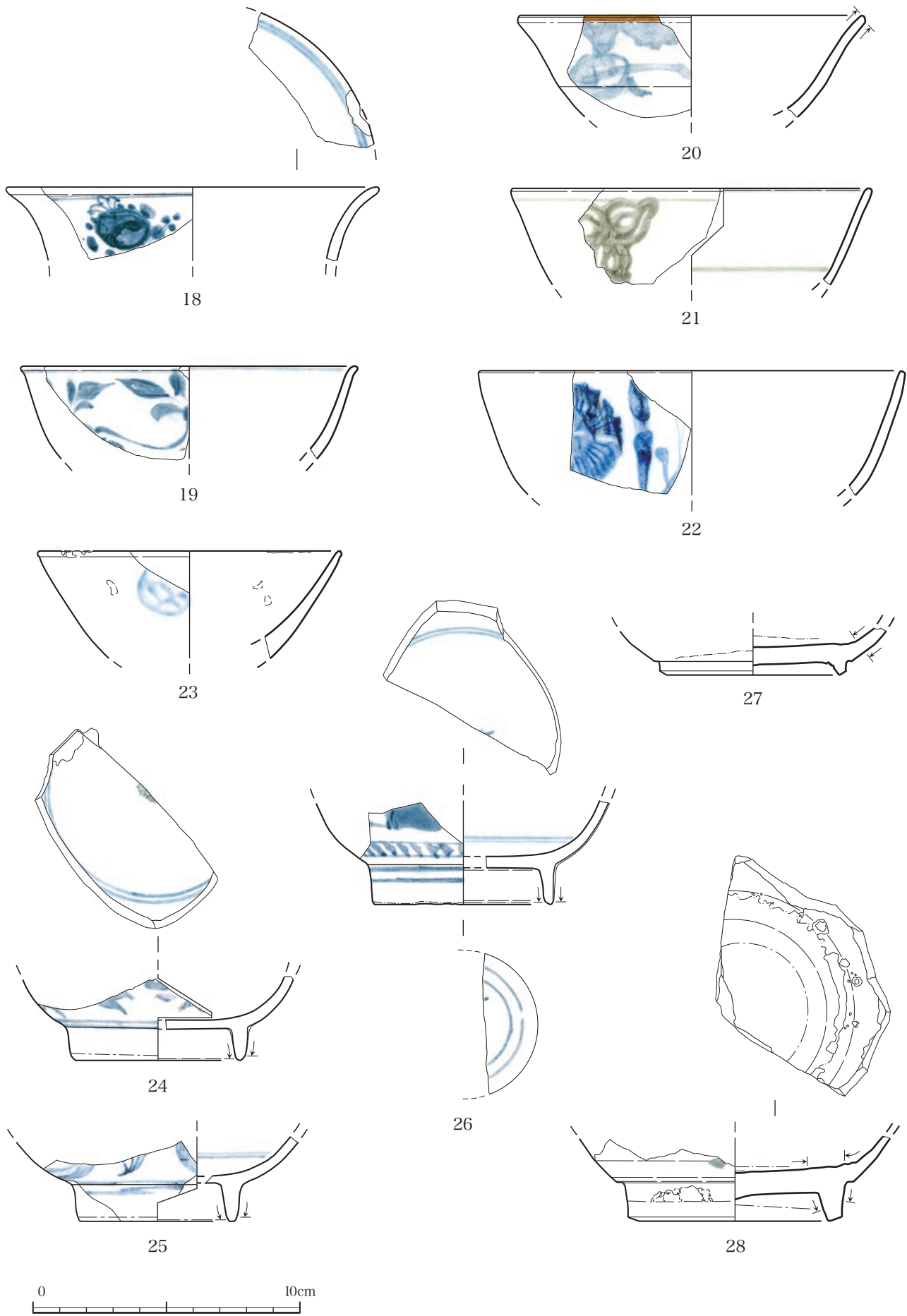


第48図 中国産青花2

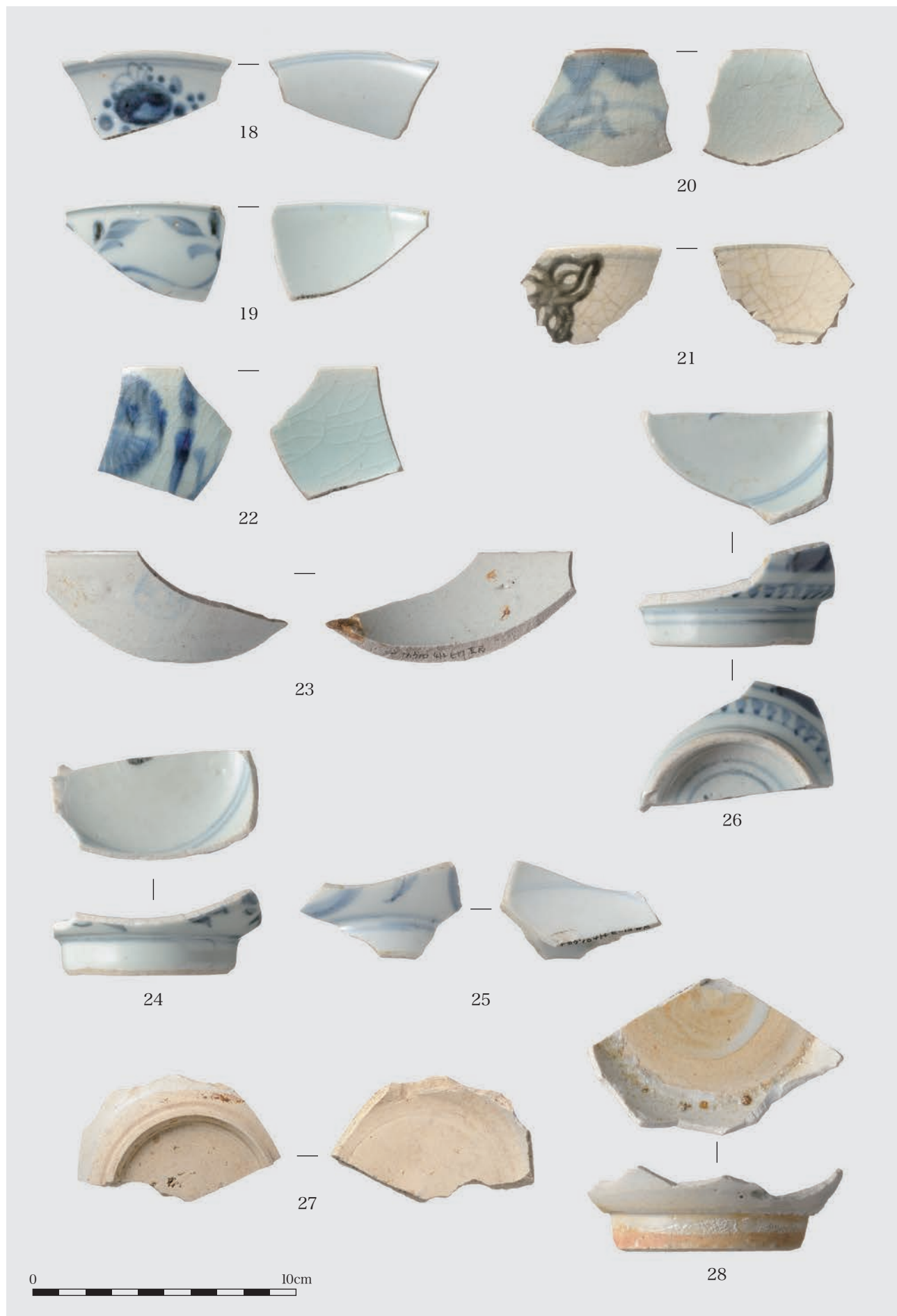




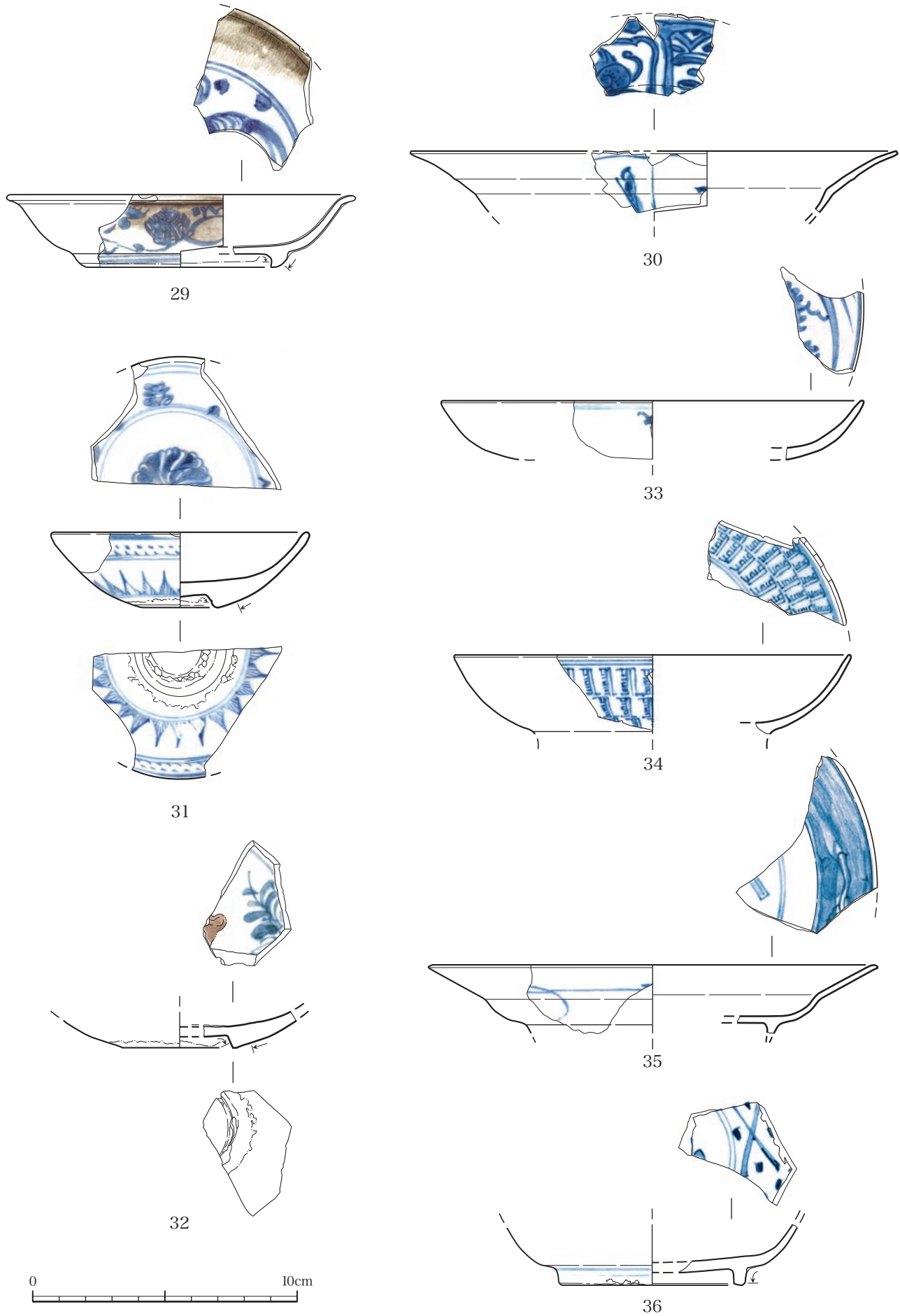
図版67 中国産青花2



第49図 中国産青花3



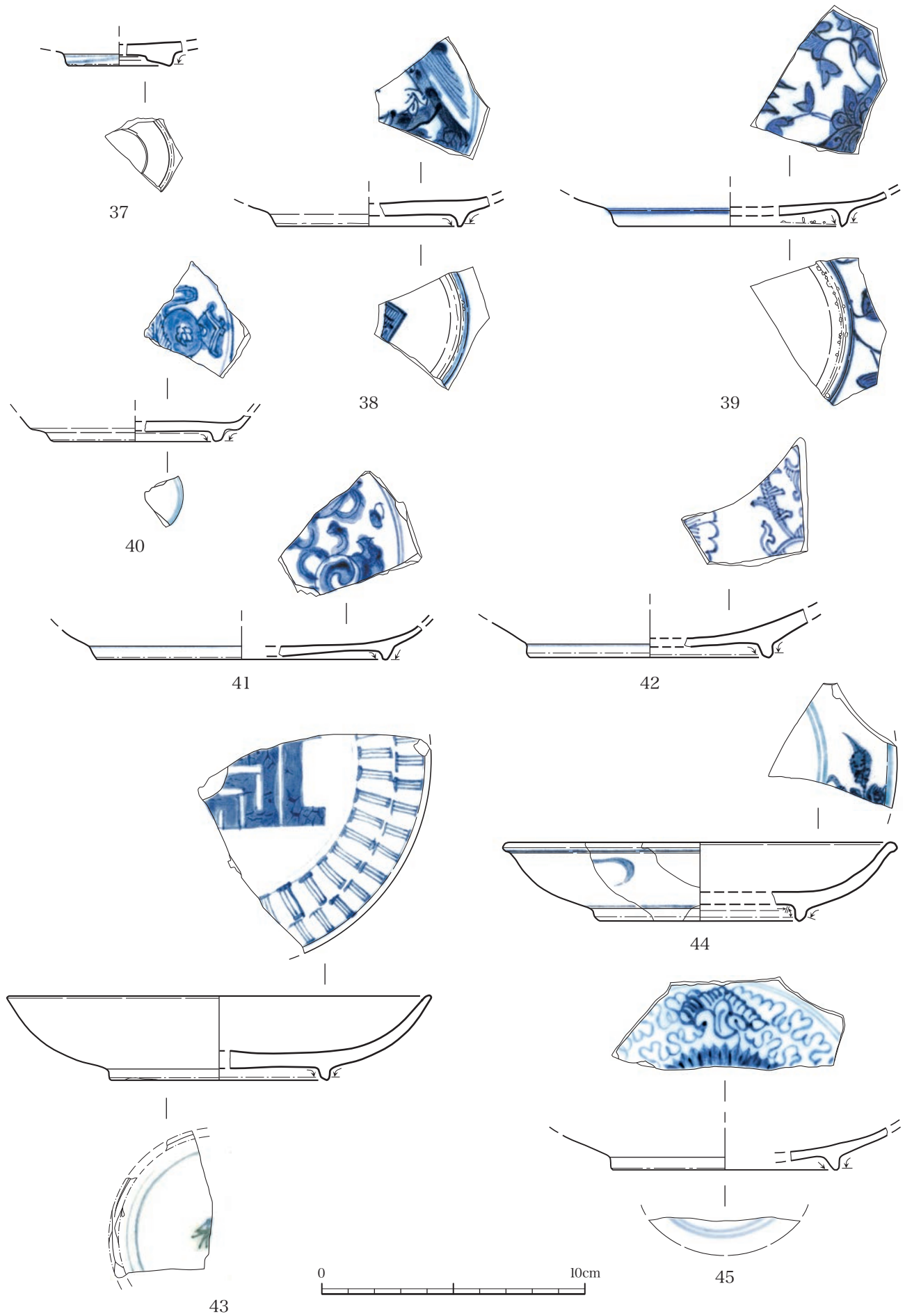
図版68 中国産青花3



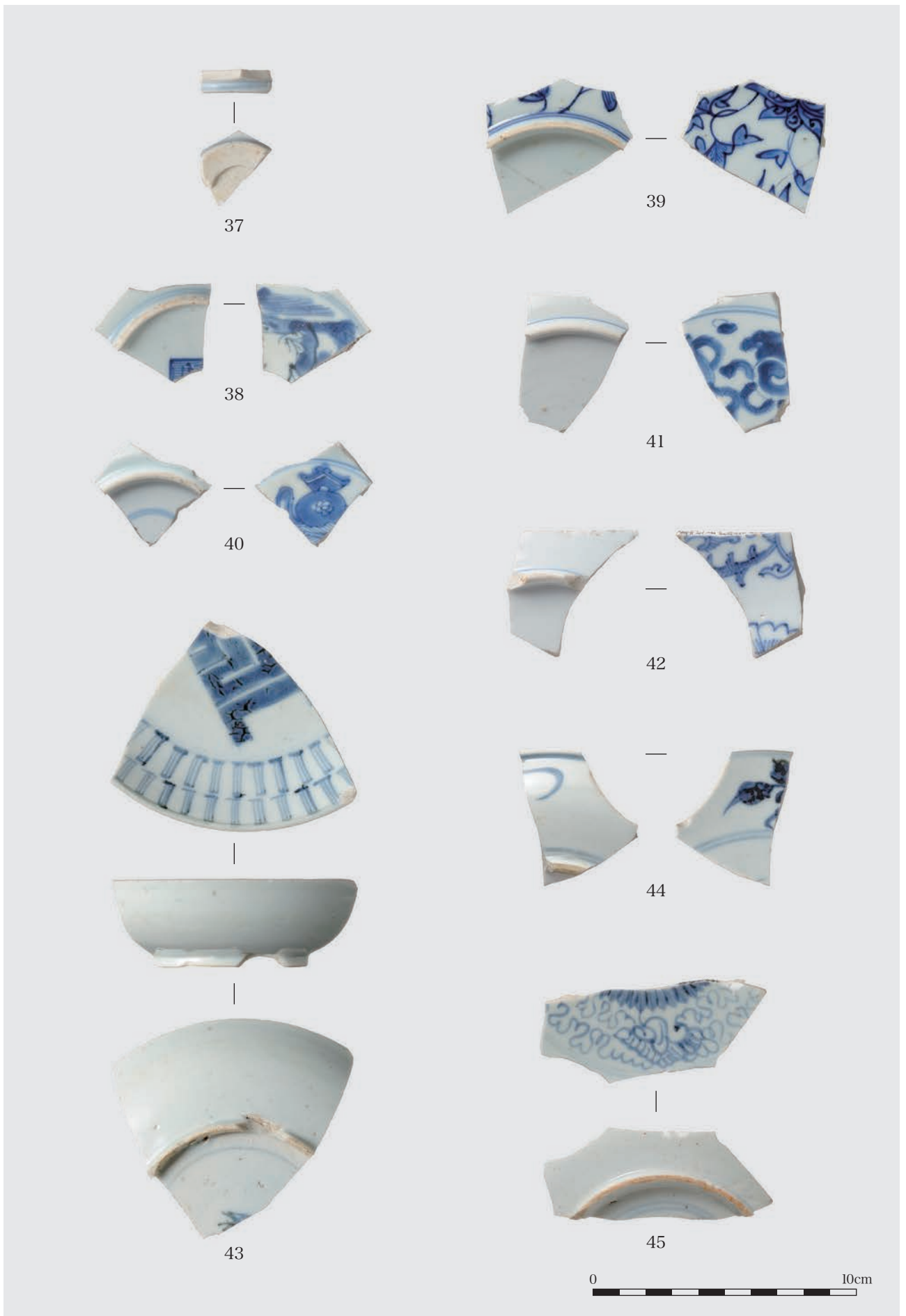
第50図 中国産青花4



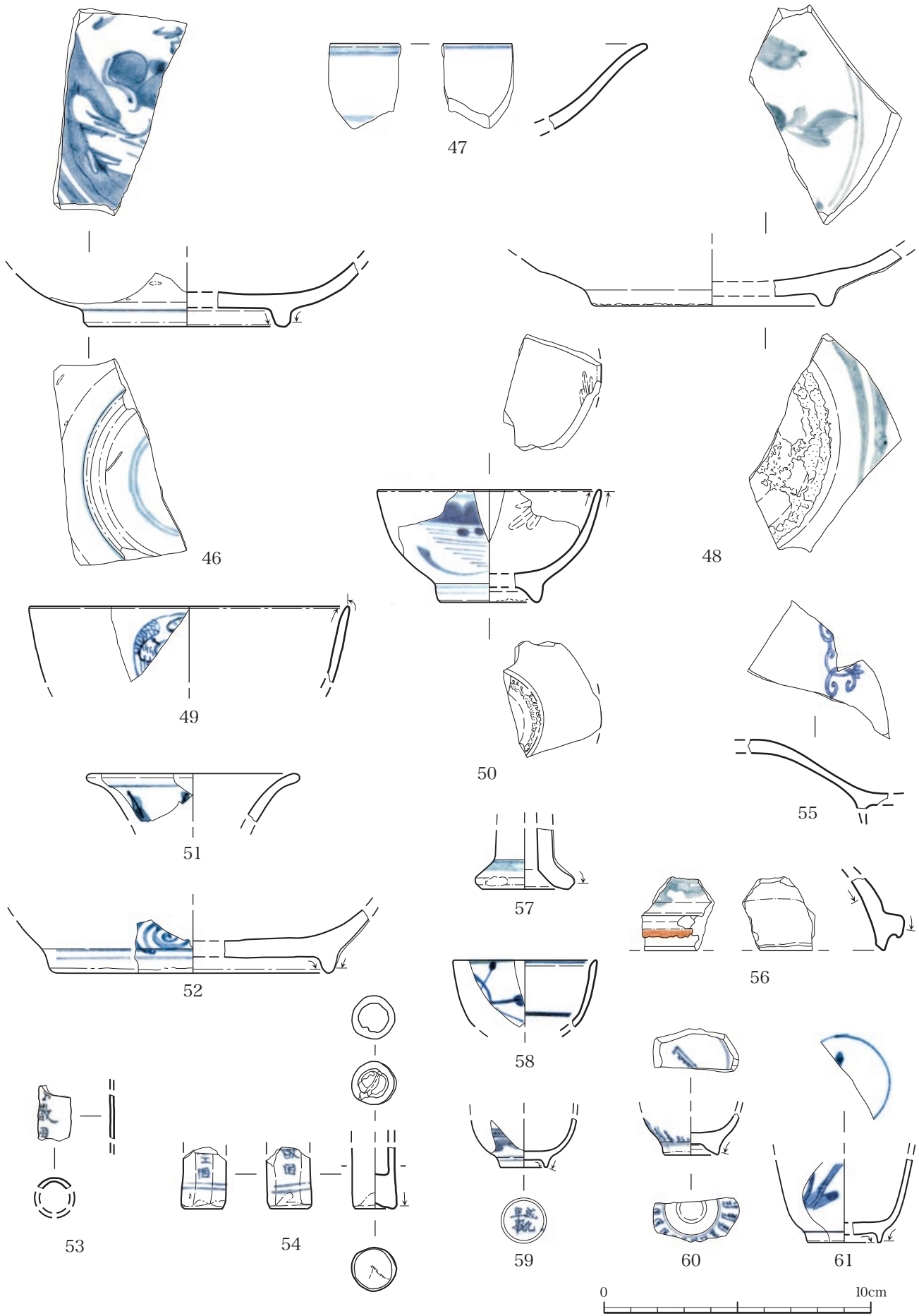
図版69 中国産青花 4



第51図 中国産青花5

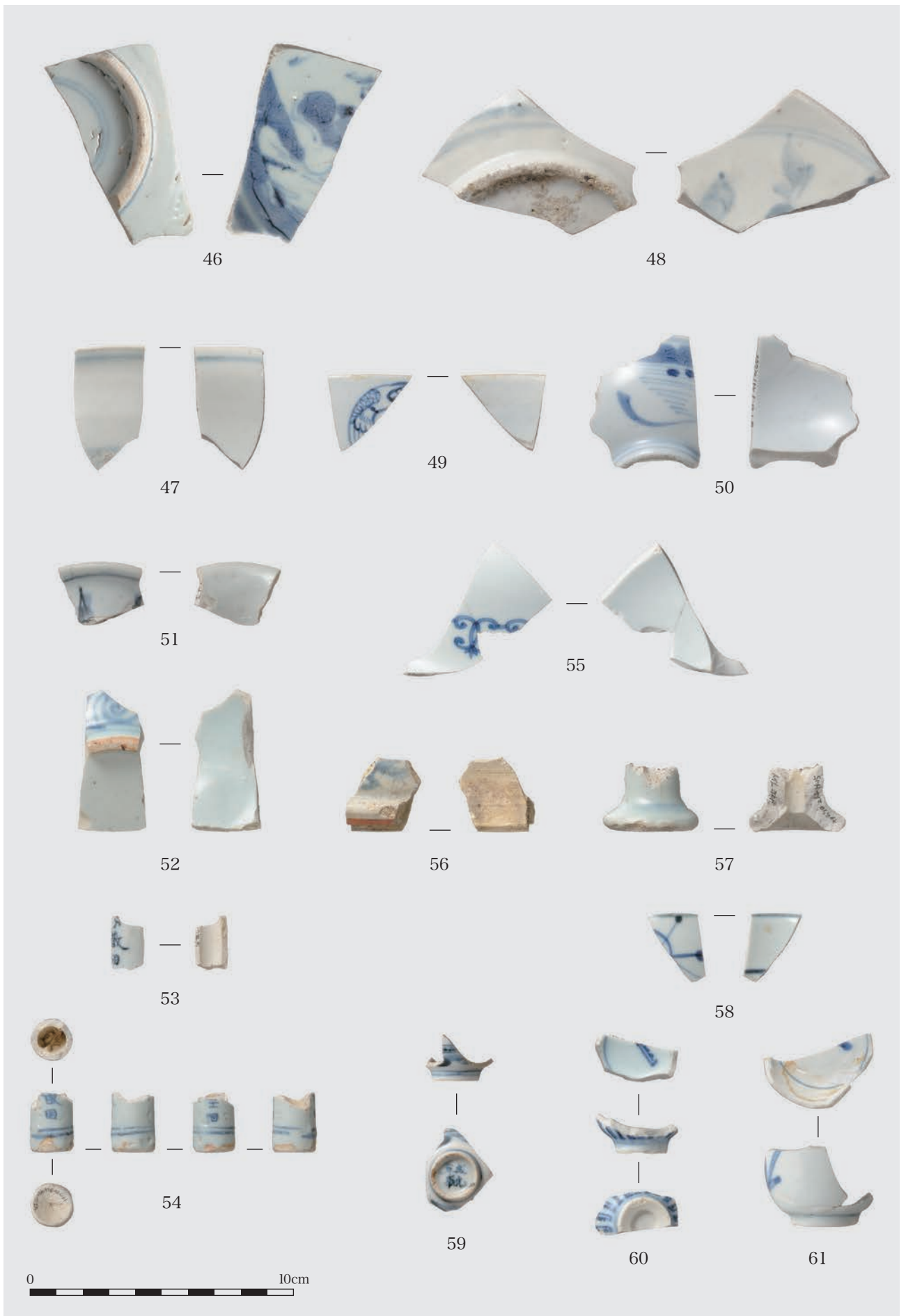


図版70 中国産青花5



第52図 中国産青花6





図版71 中国産青花6

## 4 中国産色絵

中国産色絵は167点が得られている。産地は景德鎮産や福建、徳化窯産が得られているが、後者が若干多い傾向にある。次に器種ごとの概要を記し、詳細は観察表に記載する。

### ①碗・蓋（1～9・19）

碗は景德鎮産、福建産の2産地の製品が得られている。前者の製品は16世紀前後の赤絵を主体とした色絵も含まれるが、大半は18世紀以降の染付を併用したタイプで、特に蓋付きの碗が数個体分ずつ出土している。中でも4・5の蚩手碗は、少なくとも5個体分の破片が確認されており、揃いで存在していた可能性がある。8・9の福建産は厚手の製品で、赤・黄の色絵が主体の製品である。19は壺類の蓋で、造り・施文とも丁寧で上質であることから、官窯クラスの製品と考えられる。

### ②小杯（10～12）

小杯は徳化窯産が多く、外反薄手（10・12）と直口厚手（11）の製品がみられる。

### ③皿（13～18・20）

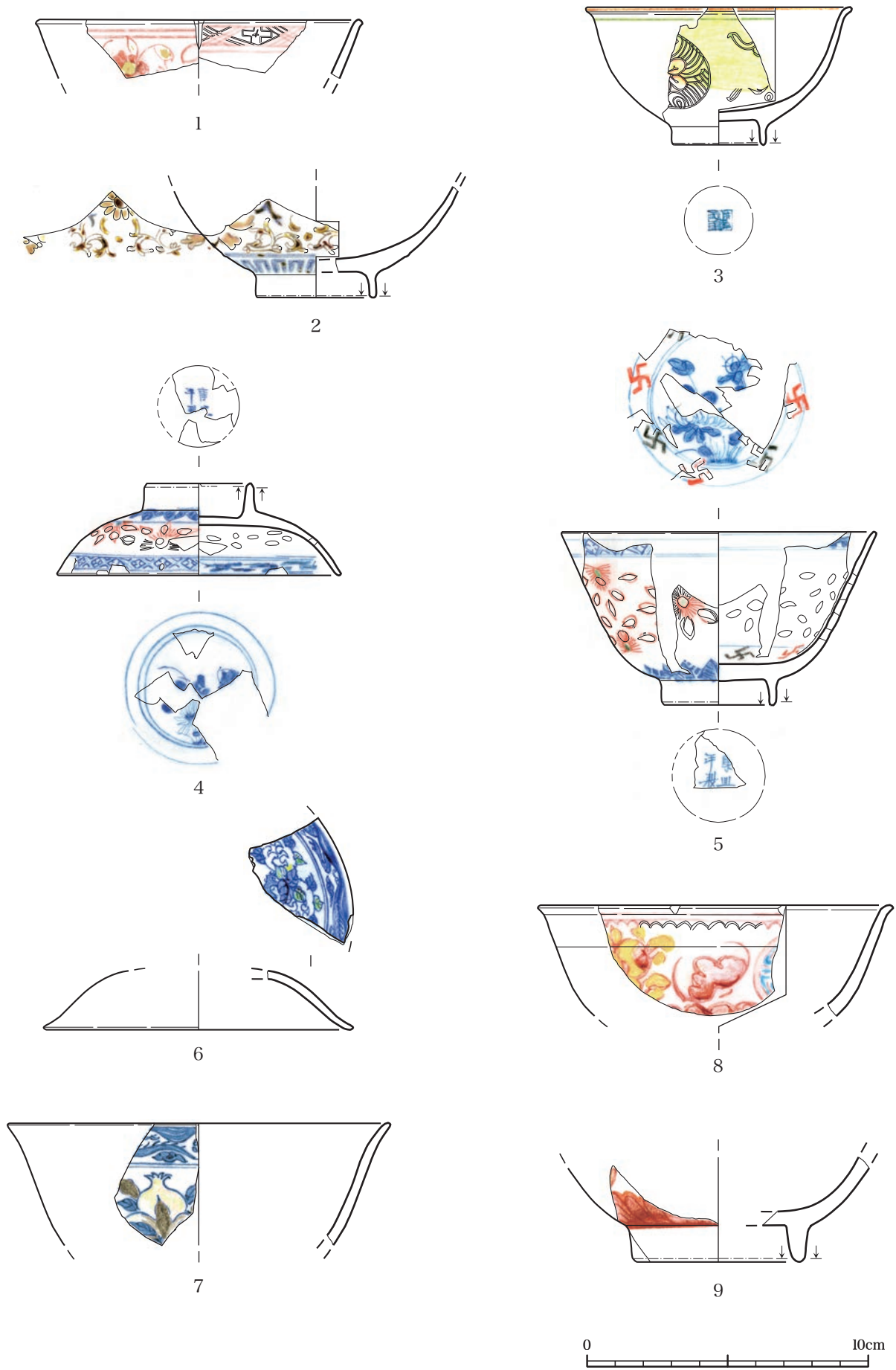
皿は福建・徳化・景德鎮窯産がみられ、福建産は碗と同様の厚手で（13・14）、徳化産は薄手で型造り（15・16）、景德鎮産は大ぶりの資料（17・18）のほか、官窯クラスと思われる上質の製品（20）が含まれる。

第37表 中国産色絵観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	器種	器形	部位	産地	法量 (cm)			釉 (色・範囲)	素地 (色・質)	文様等	グリッド 層
						口径	器高	底径				
第53図 図版72	1	碗	直口	口縁	景德鎮	11.6	-	-	内外面透明釉掛け上絵赤・黄で外面口縁下二重圏線と花唐草文。内面四方禪文。	やや灰白色で堅緻。	直口の碗で丁寧な造り。16c 前後。	1トH-14 I層
	2	碗	-	底	景德鎮	-	-	4.2	内外面透明釉掛け畳付無釉。外面のみ上絵黒の細描で花唐草文輪郭引き赤・黄・青で彩色。胴下部に上絵青で圏線と簡略化された角張るラマ式連弁。	白色で堅緻。	粉彩の碗。造り、施文とも丁寧。18c。	4トE-17 II層
	3	碗	外反	口～底	景德鎮	9.4	4.9	3.3	内外面透明釉掛け畳付無釉。外面のみ上絵で緑の圏線・唐草と丸文内に花描き、全面を黄で覆う。口鏽。高台内に染付で銘あり。	白色で堅緻。	被熱して底部変色する粉彩の碗。高台内の銘は「乾隆年製」か。18c 後半。	2トH-15 IIb層・ 溝3IIb層
	4	蓋	-	庇～撮	景德鎮	10.1	3.25	3.9	器壁に丸・葉状に透かし彫りし、内外面染付で四方禪文・連弁文・草花文描く。全面に透明釉掛け撮上端釉剥ぎ。外面のみ透かしに沿い上絵赤スタンプで半菊花文・手書き葉文描き、花中央丸透かし上に緑で丸。撮内に染付で銘あり。	白色・ややガラス質で堅緻。	蚩手碗の蓋。撮内の銘は「康熙年製」か。19c 後半～20c。	2トH-15 IIb層
	5	碗	直口	口～底	景德鎮	11.2	6.15	4.1	器壁に丸・葉状に透かし彫りし、内外面染付で四方禪文・連弁文・草花文描く。全面に透明釉掛け畳付釉剥ぎ。外面透かしに沿い上絵赤スタンプで菊花文・手書き葉文描き、花中央丸透かし上に緑で丸。内面見込み圏線に沿い上絵赤・黒の卍文スタンプ。高台内に染付で銘あり。	白色・ややガラス質で堅緻。	蓋付蚩手碗の身。高台内の銘は「康熙年製」か。19c 後半～20c。	2トH-15 IIb層

第37表 中国産色絵観察一覧2

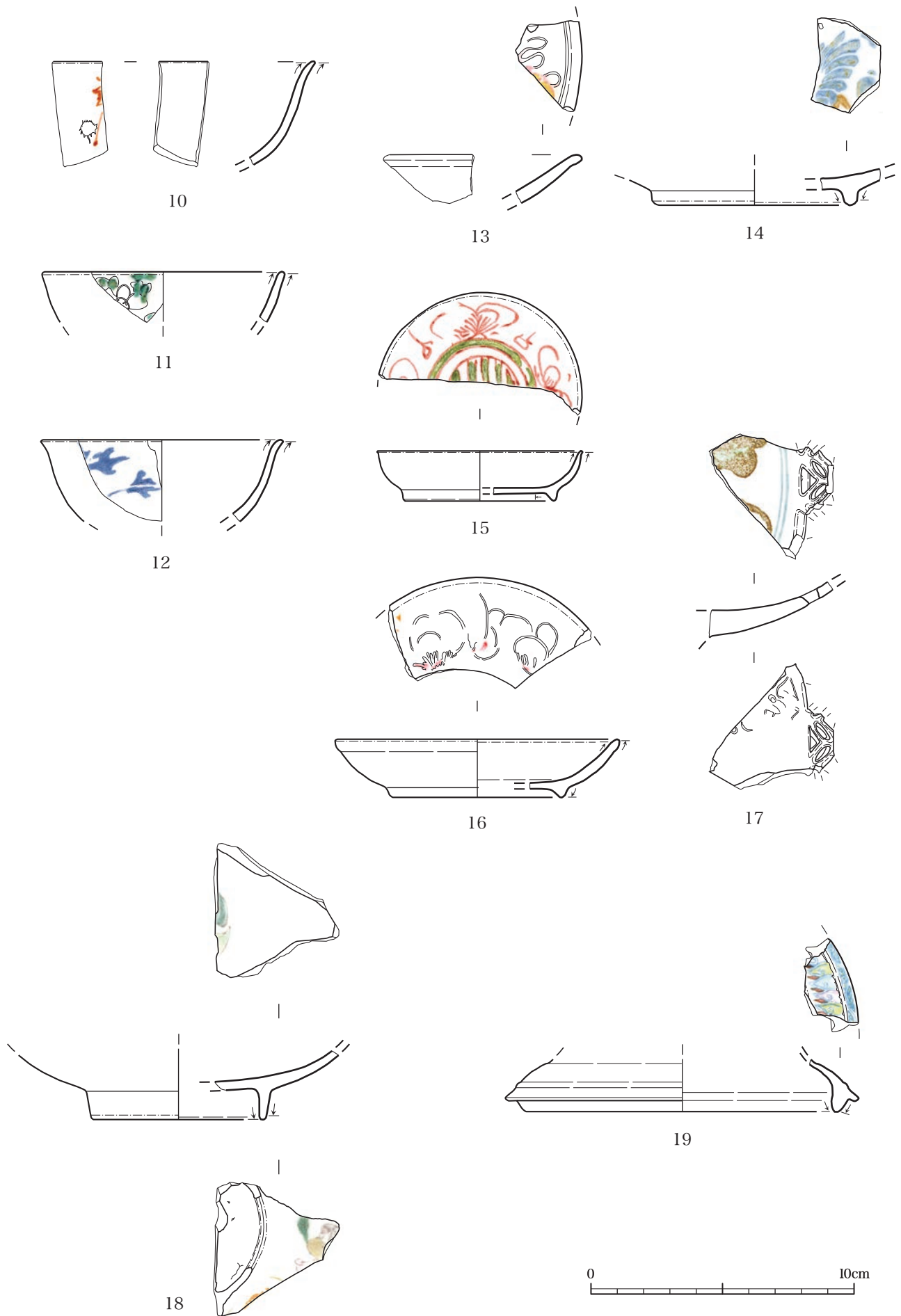
挿図番号 図版番号	番号	器種	器形	部位	産地	法量 (cm)			釉 (色・範囲)	素地 (色・質)	文様等	グリッド 層
						口径	器高	底径				
第53図 図版72	6	蓋	-	底	景德鎮	11.0	-	-	外面染付で龍雲・圏線・三果文描き内外面透明釉。外面上絵で仏手柑に黄、葉に緑の彩色。	白色・ややガラス質で堅緻。	蓋付き粉彩碗の蓋。造り、施文とも丁寧。18c。	3トG・H-17 I層
	7	碗	外反	口	景德鎮	13.6	-	-	外面染付で龍雲・圏線・三果文描き内外面透明釉。外面上絵で石榴に黄、葉に緑の彩色。	白色・ややガラス質で堅緻。	蓋付き粉彩碗の身。造り、施文とも丁寧。18c。	2トH-15 石組3IIB層
	8	碗	外反	口	福建	12.6	-	-	内外面透明釉施し、外面に上絵赤で圏線、連弁・草花文及び吉祥丸文描き、草花黄で彩色、吉祥丸文内青でなぞる。	灰白色で堅緻。	18cの厚手碗。	4トI層
	9	碗	-	底	福建	-	-	6.1	内外面やや青灰色の透明釉で暈付釉剥ぎ。外面上絵赤で連弁輪郭描き赤で塗りつぶす。	灰白色で堅緻。	18c後半の厚手碗。	4トE-13 I層
第54図 図版73	10	小杯	外反	口	徳化	-	-	-	内外面透明釉で口唇釉剥ぎ。外面上絵赤で不明文字。	白色で堅緻。	口唇端反りで断面尖る形状。18c後半～19c前半。	4トE-13 IV層
	11	小杯	直口	口	徳化	9.2	-	-	内外面透明釉で口唇釉剥ぎ。外面上絵黒で草花文輪郭描き中を緑で厚く施釉する。	白色で堅緻。	全体に厚手で直口の形状。18c後半～19前半c。	1トF-17・ 18表採
	12	小杯	外反	口	徳化	9.2	-	-	内外面透明釉で口唇釉剥ぎ。外面上絵青で草花文厚く施す。	白色で堅緻。	口唇端反りで断面尖る形状。18c後半～19c前半。	1トF-17～19 I層
	13	皿	端反り	口	福建	-	-	-	内外面やや灰色の透明釉厚く施し内面上絵赤・黄で丸文と草花文か。	灰白色で堅緻。	口唇が端反りになる皿。18c。	1トF-17 I層
	14	皿	-	底	福建	-	-	7.8	内外面透明釉施し暈付釉剥ぎ。内面上絵青・黄で草花文か。	やや灰白色で堅緻。	暈付断面丸く成形。見込器壁薄い。18c。	4トE-13 IV層
	15	皿	直口	口～底	徳化	7.8	1.9	5.8	全面白濁釉掛け口唇・高台内釉剥ぎし、内面見込みに赤・緑で吉祥丸文、周囲にラフな花文巡らす。	やや灰白色で堅緻。	型打ち成形の皿。18c後半～19c前半。	1トF-16 I層
	16	皿	直口	口～底	徳化	10.8	2.2	6.6	口唇・底部無釉で透明釉掛け、上絵赤で草花文。	やや灰白色で堅緻。	型打ち成形の皿。外面釉下にシワあり。18c後半～19c前半。	1トF-17～19 I層
	17	皿	-	胴	景德鎮	-	-	-	内面染付で二重圏線引き透かし七宝繫側面以外透明釉。内面上絵で緑の植物か。	白色で堅緻。	七宝繫の透かし彫りが施された色絵皿。官窯クラスか。18c。	1トF-17 II層
	18	皿	-	底	景德鎮	-	-	6.6	暈付以外透明釉。外面胴部上絵赤、黄、緑で植物、見込み緑、黄色で草花文。	白色で堅緻。	大ぶりの碗。高台内釉にヒビあり。18c～19c。	1トF-16 I層
	19	蓋	-	底	景德鎮	13.4	-	-	染付で緑に如意頭、内に連弁細描し輪郭内上絵の緑、黄、桃、赤で塗り分け。	白色で堅緻。	官窯クラスの豆彩。底は内湾し下面無釉。18c。	2トH-15 IIb層
20	皿か	-	胴	景德鎮	-	-	-	染付で龍描き裏面透明釉。上絵紅彩で雲。	白色で堅緻。	官窯クラスの皿。紅彩は細描で輪郭・内線引き薄い赤で彩色。18c。	4トE-17 II層	



第53図 中国産色絵 1



図版72 中国産色絵 1



第54図 中国産色絵2



図版73 中国産色絵2

## 5 中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器

褐釉陶器は中国産で539点、タイ産で38点出土しているほか、ミャンマー産が4点出土しており、その殆どが中国産である。中国産褐釉陶器は、首里城などでは見かけない清代の資料が一定量得られており、またタイ産褐釉陶器が激減する傾向からも、首里城との時期差を感じさせる。ここでは中国産12点、タイ産1点を図化した。ミャンマー産は胴部片のみであることから図化していない。次に中国、タイ産褐釉陶器の概要について記し、遺物の特徴は、観察表に示した。

### 1. 中国産褐釉陶器（1～12）

中国産褐釉陶器は、総数で539点が出土している。

4～7は明代の製品と思われる資料で、この内6・7は平口縁の大型壺である。本資料は首里城等で多量に出土する部類の壺である。次いで4・5は小型の壺である。これらは茶壺として使用された可能性があり、伝世して使用されていた可能性も考えられる。1～3・8～12は17～18世紀に製作されたと思われる褐釉陶器である。この内10～12は同形の壺になると思われるが、これらの中国清代に製作された褐釉陶器は、首里城などで殆ど得られないことから、中城御殿特有の遺物の一つとしてあげることができる。

### 2. タイ産褐釉陶器（13）

タイ産褐釉陶器は38点が出土している。産地は小片が多いことから形態的な判断は困難であるが、釉や素地の状況からメナムノイ産が多勢であることが考えられる。この内13の底部資料1点を図化した。資料は厚手で胎土が赤褐色・暗灰褐色を呈し石英粒を多く含み、外面は削るように調整されている。これらの特徴から16～17世紀にメナムノイ窯で焼成された製品であることが考えられる。

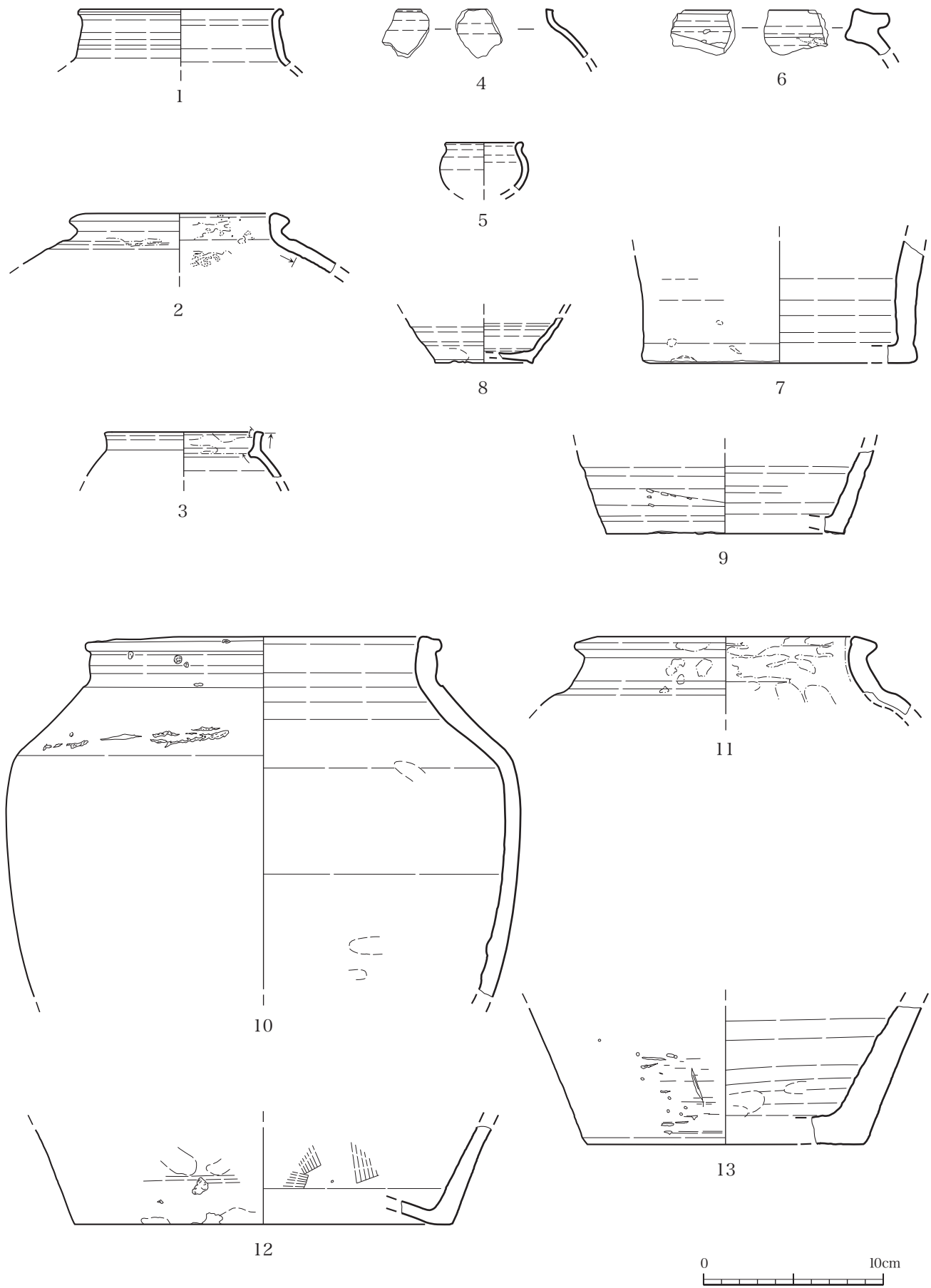
第38表 中国・タイ産褐釉陶器観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項			グリッド・層
					口径	器高	底径	釉（色・範囲・貫入）	素地（色・質・混和材）	文様等	
第55図 図版74	1	壺	口	福建・広東	11.4	—	—	内外面に薄く微光沢の暗茶褐色釉。	胎土は茶褐色・暗茶褐色が混在。微細な石英粒やや多く含む。	有頸薄手の壺で口縁は外傾する。口縁断面は方形。外面轆轤痕顕著。内面釉斑状。17・18c。	4トE-13IV層
	2	壺	口	中国	12.2	—	—	黒褐色釉を内面口縁下まで。	胎土は灰褐色で粗い黒色粒子少々含む。	口縁三角形で口唇平坦。口縁外面脇を僅かに凹ませる。17・18cか。	4トE-17 石積2IV層
	3	壺	口	福建・広東	8.8	—	—	口唇無釉で内外光沢ある茶褐色釉。	胎土緻密な茶褐色で、石英、赤・黒色粒子含む。	蓋付きの壺か急須の口縁。口縁直立し胴は丸くなるか。口縁内側に蓋受けあり。17・18c。	4トE-13I層
	4	壺	口	中国	—	—	—	やや光沢ある黒褐色釉を全面。	黄白色土に粗石英粒少し含む。	茶壺か。丸い胴部から緩やかに口縁を直立させ、口唇平坦に仕上げる。明か。	2トH-15III層



第38表 中国・タイ産褐釉陶器観察一覧2

挿図番号 図版番号	番号	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項			グリッド・層
					口径	器高	底径	釉(色・範囲・貫入)	素地(色・質・混和材)	文様等	
第55図 図版74	5	壺	口	中国	4.4	—	—	やや光沢ある黒褐色釉を全面。	胎土は淡茶褐色で堅緻。	茶壺か。口唇断面丸くS字状に丸い胴部へ至る形状。明代。	1トF-19Ⅲ層
	6	壺	口	中国	—	—	—	やや光沢ある灰黄褐色釉を全面。	灰褐色土に石英、粗赤色粒、薄く白土含む。	平口縁の壺。口縁内側に蓋受けの段あり。明代。	2トH-16 II b層
	7	壺	底	中国	—	—	15.3	やや光沢ある灰黄褐色釉を底面以外施釉。	灰褐色土に粗石英、粗赤色粒、薄く白土含む。	資料6の上げ底状になる底部。明代。	1トF-17 石積2Ⅲ層
	8	壺	底	中国	—	—	5.4	無釉。内外面積褐色。	赤褐色土に微石英含む。	上げ底状の小壺底部。底面砂目あり。17・18c。	4トE-13IV層
	9	壺	底	中国	—	—	13.2	無釉だが底面・内底に暗茶褐色釉付着。	灰褐色・灰色の2層で粗石英含む。	上げ底状の壺底部。内外面轆轤痕顕著。底部から胴部へに立ち上がりは明瞭な角残す。17・18cか。	1トF-19I層
	10	壺	口 胴	中国	19.8	—	—	外面に薄い暗茶褐色釉	胎土は暗灰色・橙褐色の2層で石英粒含む。	口縁直立し肩が張る壺。叩き成形か。肩に淡橙色の目跡が巡る。一部焼成不良。清代。	4トE-13IV層
	11	壺	口	中国	16.8	—	—	暗褐色の泥砂を外面に非常に薄く塗りつける。	茶褐色土に粗石英多く含む。	口縁三角形、口唇平坦な壺の口縁部。内部に指紋残る手形の釉が付着。清代。	4トE-17II層
	12	壺	底	中国	—	—	21.0	無遊だが内面に暗褐色の泥砂釉付着。無釉。外面茶褐色、	茶褐色土に粗石英多く含む。	資料11の底部と思われる。上げ底状で底面に砂目あり。清代。	4トE-17II層
	13	壺	底	タイ	—	—	15.4	内面灰茶褐色。	胎土は赤褐色・暗灰色の2層で石英・粗黒色粒含む。	メナムノイ窯産褐釉陶器の底部。厚手で底部から胴部への角はやや丸い。内面轆轤痕、外面削り痕明瞭。16~17c。	3トG・H-17 I層



第55図 中国・タイ産褐釉陶器



図版74 中国・タイ産褐釉陶器

## 6 その他の輸入陶磁器

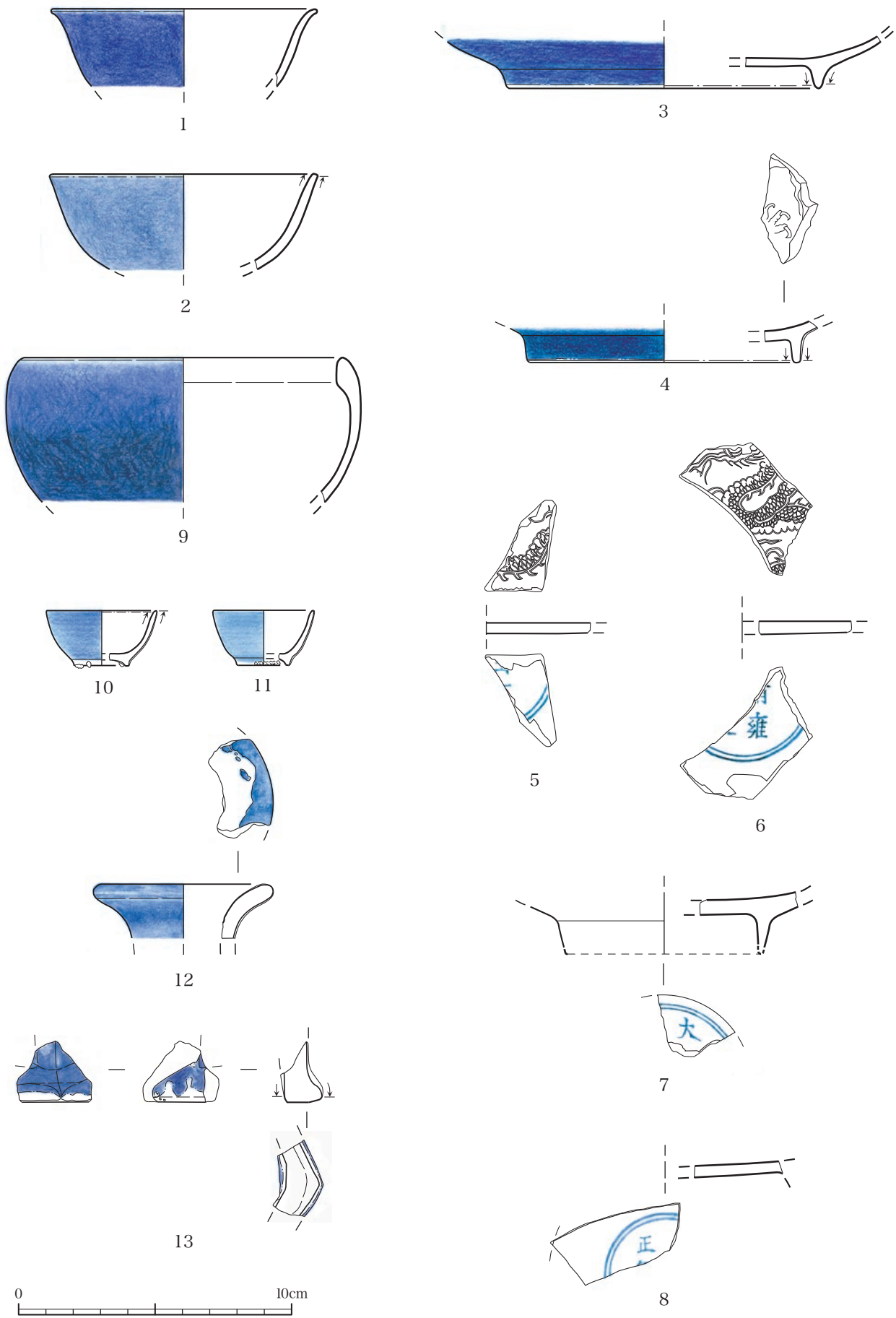
その他の輸入陶磁器として報告するのは、中国産瑠璃釉、翡翠釉、三彩、紫泥・朱泥、ベトナム産青花、タイ産青磁、西洋陶器である。中でも「大清雍正年製」銘のある官窯製と思われる製品が、色絵、青花、瑠璃釉に一定量みられ、同器種が複数個体確認できることから、揃いで存在していた可能性がある。その他紫泥・朱泥茶器も豊富で、青磁や白磁、色絵の小碗が多く出土していることから、喫茶が盛んに行われていたことがわかる。さらに、西洋陶器の出土もみられ、デザートプレート(取り皿)やディナープレートのほか、カップ&ソーサーの可能性もある器種も出土しており、この種別から中城御殿ではさまざまな嗜好が存在していたことを窺わせている。これら遺物の詳細は、第39表の観察表に記した。

第39表 その他の輸入陶磁器観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	器種	器形	部位	産地	種別	法量(cm)			文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	観察事項	グリッド 層
							口径	器高	底径					
第56図 図版75	1	小碗	外反	口	景德鎮	瑠璃釉	9.8	-	-	無文。	内面〜口縁透明釉で外面瑠璃釉。	淡灰白色で堅緻。	成形・施釉とも丁寧。瑠璃釉厚手。18c。	4トVE-13 IV層
	2	碗	直口	口	徳化	瑠璃釉	9.8	-	-	無文。	内面〜口縁透明釉に貫入で外面淡い瑠璃釉。	白色でやや軟質。	口唇無釉の碗。型造りのためか器面に歪みあり。18c後半〜19c前半。	2トIH-14 IIb層
	3	皿	-	底	景德鎮	瑠璃釉	-	-	11.6	無文。	内外面均質な瑠璃釉で高台内透明釉。	白色で堅緻。	官窯クラスの皿で畳付無釉。器面なめらか。底面厚3.4mm。景德鎮産で18c前半。	1トIF-17 II層
	4	碗	-	底	景德鎮	瑠璃釉	-	-	10.0	見込に細沈線で龍文。	外面:均質な瑠璃釉 内面・高台内:透明釉	白色で堅緻。	官窯クラスの碗で畳付無釉。器面なめらか。底面厚3.9mm。18c前半。	1トIF-12 I層
	5	碗	-	底	景德鎮	瑠璃釉か青花	-	-	-	見込に細沈線で龍文、高台内に銘。	内外面透明釉。	白色で堅緻。	「大清雍正年製」銘と思われる官窯クラスの碗。高台内二重圏線内に「正」下線「年」上部がみえる。底面厚3.6mm。18c前半。	1トIF-17 II層
	6	碗	-	底	景德鎮	瑠璃釉か青花	-	-	-	見込に細沈線で龍文、高台内に銘。	内外面透明釉。	白色で堅緻。	「大清雍正年製」銘と思われる官窯クラスの碗。高台内二重圏線内に「清」右と「雍」、「製」下線がみえる。底面厚4.7mm。18c前半。	2トI層
	7	碗	-	底	景德鎮	青花か	-	-	約7.2	高台内に銘。	内外面透明釉。	白色で堅緻。	「大清雍正年製」銘と思われる官窯クラスの碗。高台内二重圏線内に「大」がみえる。底面厚5.6mm。18c前半。	2トI層
	8	碗	-	底	景德鎮	青花か	-	-	-	高台内に銘。	内外面透明釉。	白色で堅緻。	「大清雍正年製」銘と思われる官窯クラスの碗。高台内二重圏線内に「正」と「年」上線がみえる。底面厚4.0mm。18c前半。	1トIF-17 I層
	9	鉢	内湾	口	景德鎮	瑠璃釉	11.6	-	-	無文。	外面瑠璃釉で内面透明釉。	淡灰白色で堅緻。	浅鉢型の形状で口縁内に陵を有する。内側は轆轤痕頭者。18〜19c前半。	4トVE-13 III・IV層
	10	小杯	直口	口 底	徳化	瑠璃釉	4.0	2.0	2.0	無文。	外面瑠璃釉で内面透明釉。	淡灰白色で堅緻。	型打ち成形の小杯で口禿。底部は砂目あり。18c後半〜19c前半。	4トVE-17 I層
	11	小杯	直口	口 底	徳化	瑠璃釉	3.7	2.0	2.0	無文。	外面瑠璃釉で内面透明釉。	淡灰白色で堅緻。	型打ち成形の小杯。底部は砂目あり。18c後半〜19c前半。	4トVE-13 IV層
	12	瓶	外反	口	景德鎮	瑠璃釉	6.6	-	-	無文。	外面瑠璃釉で内面透明釉。	淡灰白色でやや軟質。	轆轤成形の瓶。厚手で外面の瑠璃釉が口縁に付着する。16c。	2トIH-14 I層
	13	器台	-	底	景德鎮	瑠璃釉	-	-	-	無文。	外面瑠璃釉で内面粗く瑠璃釉。	淡黄白色でやや緻密。	6〜8角の器台。胴部は角を残して窓状に切り抜かれる。高台脇・畳付無釉。景德鎮産で16〜17c前半。	2トIH-15 溝3 IIb層

第39表 その他の輸入陶磁器観察一覧2

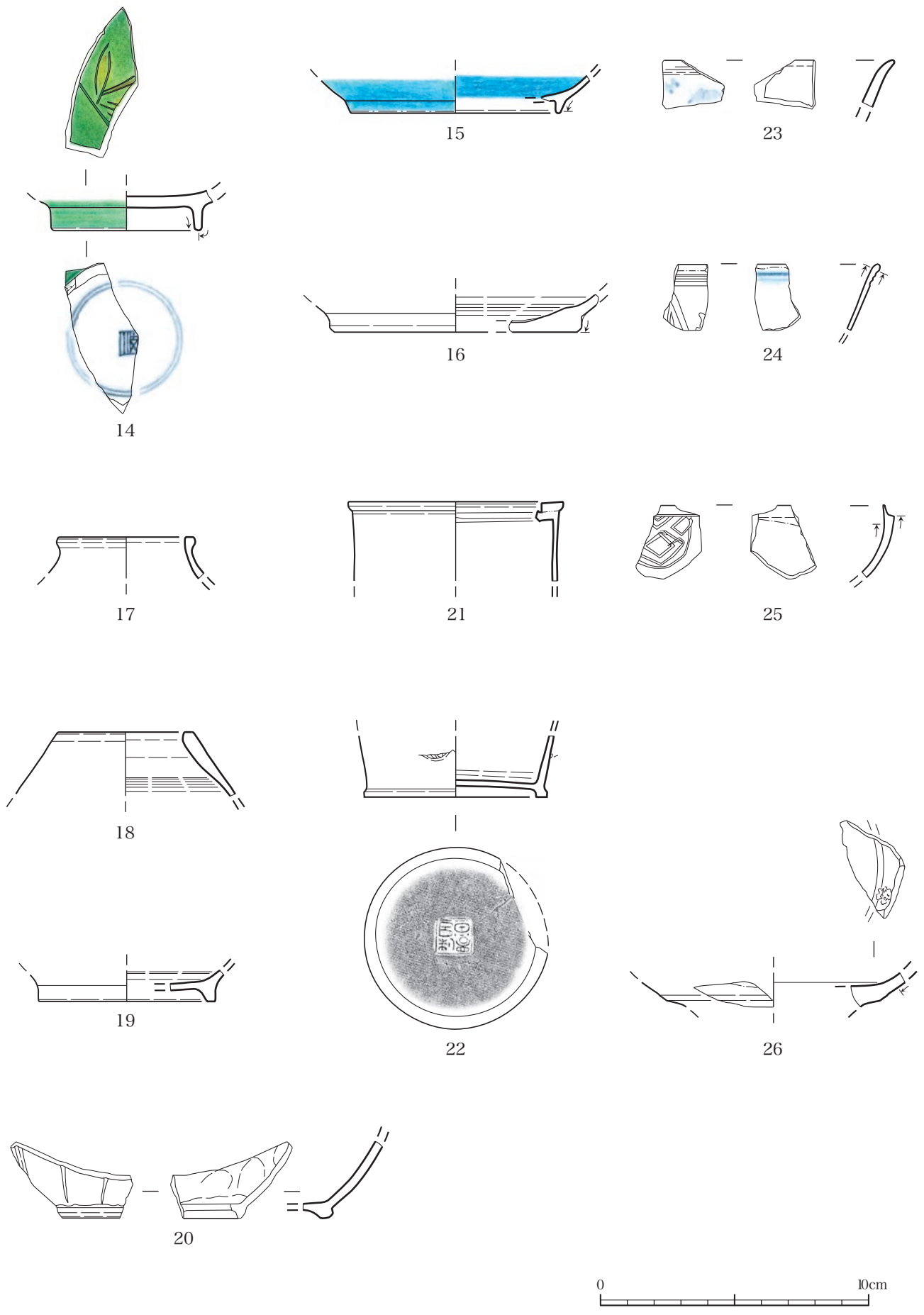
挿図番号 図版番号	番号	器種	器形	部位	産地	種別	法量(cm)			文様構成	釉 (色・範囲・貫入)	素地 (色・質・混和材)	観察事項	グリッド 層
							口径	器高	底径					
第57図 図版76	14	皿	-	底	景德鎮	素三彩	-	-	5.6	見込に線彫り植物描き黄・紫彩色、高台内呉須銘。	内外面緑釉で高台内透明釉。	淡灰色を淡黄色で挟み堅緻。	硬質の三彩。量付無釉。高台内呉須で二重圈線内に「岐」銘か。景德鎮産で17c末~18c前半。	4トVE-13 IV層
	15	皿	-	底	景德鎮	翡翠釉	-	-	7.8	無文。	内外面白化粧に翡翠釉で高台内無釉。	淡橙色~淡灰色でやや軟質。	轆轤成形で釉の剥落が著しく、白化粧が露出。16~17c前半。	3トVG・ H-17 I層
	16	皿・鉢	-	底	中国	三彩	-	-	9.4	無文。	内外面濃緑釉。	灰色で硬質。	高台内を削らないタイプ。中国産で明代。	4トVE-13 I層
	17	急須	玉縁	口	宜興	紫泥	5.2	-	-	無文。	無釉。	暗灰色で硬質。	茶器の口縁。器面内外なめらかだが口縁内側のみざらつく。清代。	1トVF-14 I層
	18	急須	内湾	口	宜興	紫泥	5.0	-	-	無文。	無釉。	暗灰色で硬質。	器表面なめらかだが口縁内側のみざらつき内面轆轤痕顕著。清代。	4トVE-15 IV層
	19	急須	-	底	宜興	紫泥	-	-	6.6	無文。	無釉。	暗茶褐色で硬質。	器表面なめらかだが内面轆轤痕顕著。清代。	4トVE-17 III層
	20	急須	-	底	宜興	紫泥	-	-	-	無文。	無釉。	暗茶褐色で硬質。	型押し成形で瓜型。器表面なめらかだが内面ざらつき指頭痕あり。清代。	4トVE-13 I層
	21	急須	平縁	口	宜興	紫泥	8.0	-	-	無文。	無釉。	暗灰色で硬質。	筒型茶器の口縁。器表面なめらかだが内面ざらつく。口縁と蓋受け別に造り貼り付ける。清代。	4トVE-12 I層
	22	急須	-	底	宜興	朱泥	-	-	6.8	無文。	無釉。	橙褐色でやや硬質。	轆轤成形で筒型。高台は貼り付けか。胴に把手の端部残る。高台内に「恵呉官制」銘凸印。清代。	2トIH-15
	23	碗	外反	口	ベトナム	青花	-	-	-	外面呉須で不明施文。	内外面透明釉。	淡灰色でやや軟質。	轆轤成形の端反り碗。文様不鮮明。17c。	4トVE-12 I層
	24	碗	外反	口	ベトナム	青花	-	-	-	口縁下呉須で二重圈線。外面口縁下沈線3条巡らせ胴に連弁線刻。	内外面白化粧上に透明釉。	淡黄白色でやや軟質。	轆轤成形の口禿薄手腕。15~16c。	4トVE-17 I層
	25	合子身	直口	口	ベトナム	白磁	-	-	-	半楕円の区画内に四方禪文を陰刻。	内外面白化粧上に口縁部以外に透明釉。	淡黄白色でやや軟質。	轆轤成形の合子の身。口縁蓋受け無釉。15~16c。	1トVF-15 I層
	26	皿	腰折れ	胴	タイ	青磁	-	-	-	無文。	内面淡い青磁釉で外面腰付近まで淡い青磁釉。	灰白色で黒色微粒子含む。	腰折皿。内底平坦で腰部は陵を付けて折れる。	1トVF-18 石積1 III層
	第58図 図版77	27	皿	折縁	口底	西洋	白磁	18.0	1.85	10.5	無文。	内外面薄い透明釉で細かな貫入走る。	白色緻密でやや軟質。	口径からデザートプレート(取り皿)と思われる製品。量付無釉。
28		皿	折縁	口	西洋	染付	24.2	-	-	口縁内面に緑の二重圈線。	内外面薄い透明釉で細かな貫入走る。	白色緻密でやや軟質。	口径からディナー(ミート)プレートと思われる。	4トVE-17 II層
29		皿	折縁	口底	西洋	色絵	24.4	2.4	14.3	鋸歯状の色絵の痕跡残る。	内外面薄い透明釉で細かな貫入走る。	白色緻密でやや軟質。	口径からディナー(ミート)プレートと思われる。	4トVE-17 II層
30		皿	外反	口底	西洋	色絵	13.7	-	-	口縁内面に黒で圈線と鋸歯状文、丸描き鋸歯、丸内青色塗り口縁外面下に黒の圈線。	内外面薄い透明釉で細かな貫入走る。	白色緻密でやや軟質。	被熱受けた小皿。口径小さいためソーサーか。	2トIH-15 I層
31		皿	外反	口底	西洋	色絵	14.4	2.2	9.4	口縁30と同様で見込に桃、黄、緑で草花文。	内外面薄い透明釉で細かな貫入走る。	白色緻密でやや軟質。	被熱受けた小皿。口径小さいためソーサーか。	2トIH-15 溝3 IIb層
32		鉢	外反	口底	西洋	染付	17.3	4.5	12.8	口縁外面下に紺の二重圈線。	内外面薄い透明釉で細かな貫入走る。	白色緻密でやや軟質。	浅鉢。量付無釉。	1トVF-17 II層
33		小碗	-	底	西洋	白磁	-	-	4.2	無文。	内外面薄い透明釉で細かな貫入走る。	白色緻密でやや軟質。	形状からティーカップか。	2トIH-15 石組3 IIb層



第56図 その他の輸入陶磁器 1

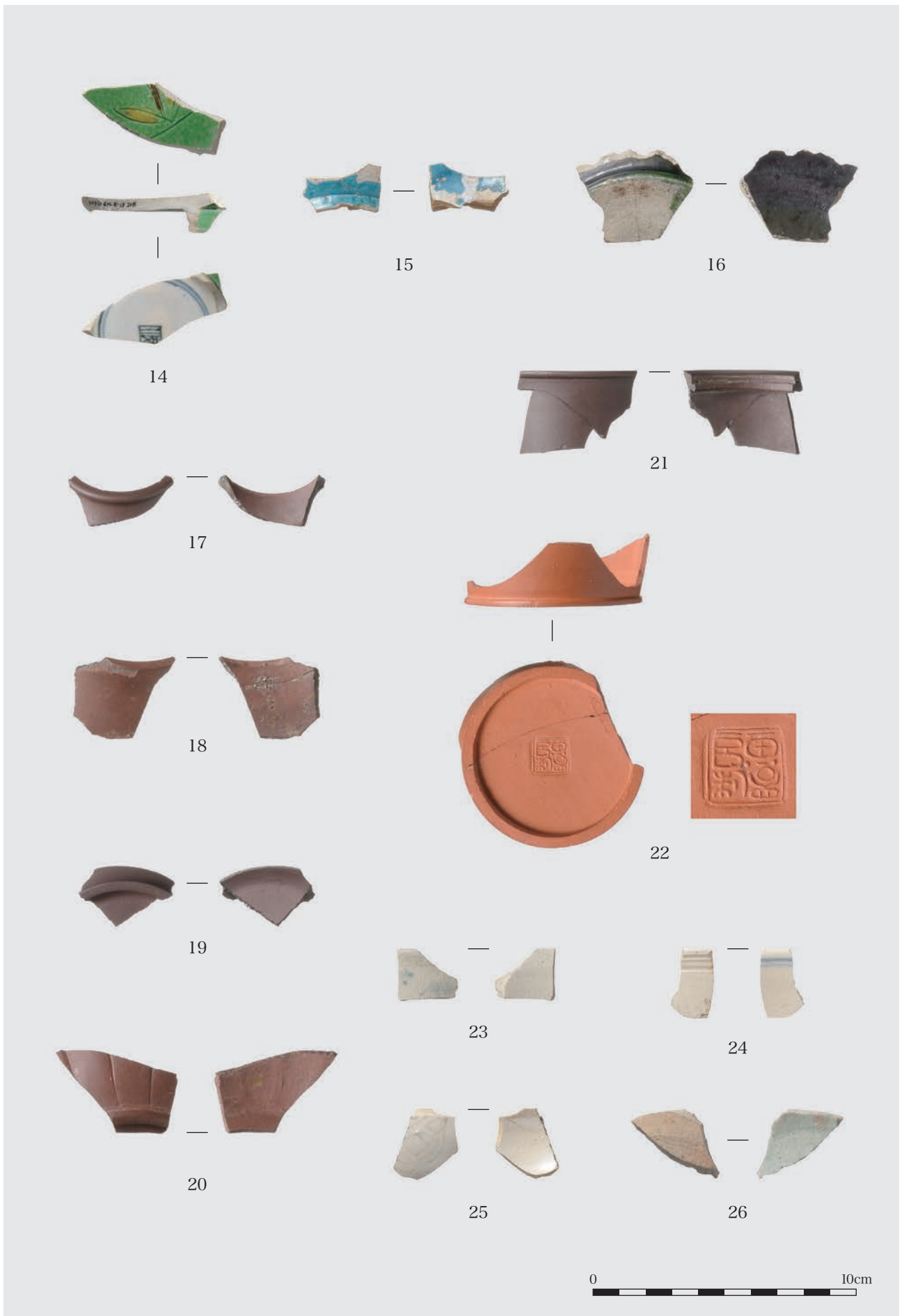


図版75 その他の輸入陶磁器 1

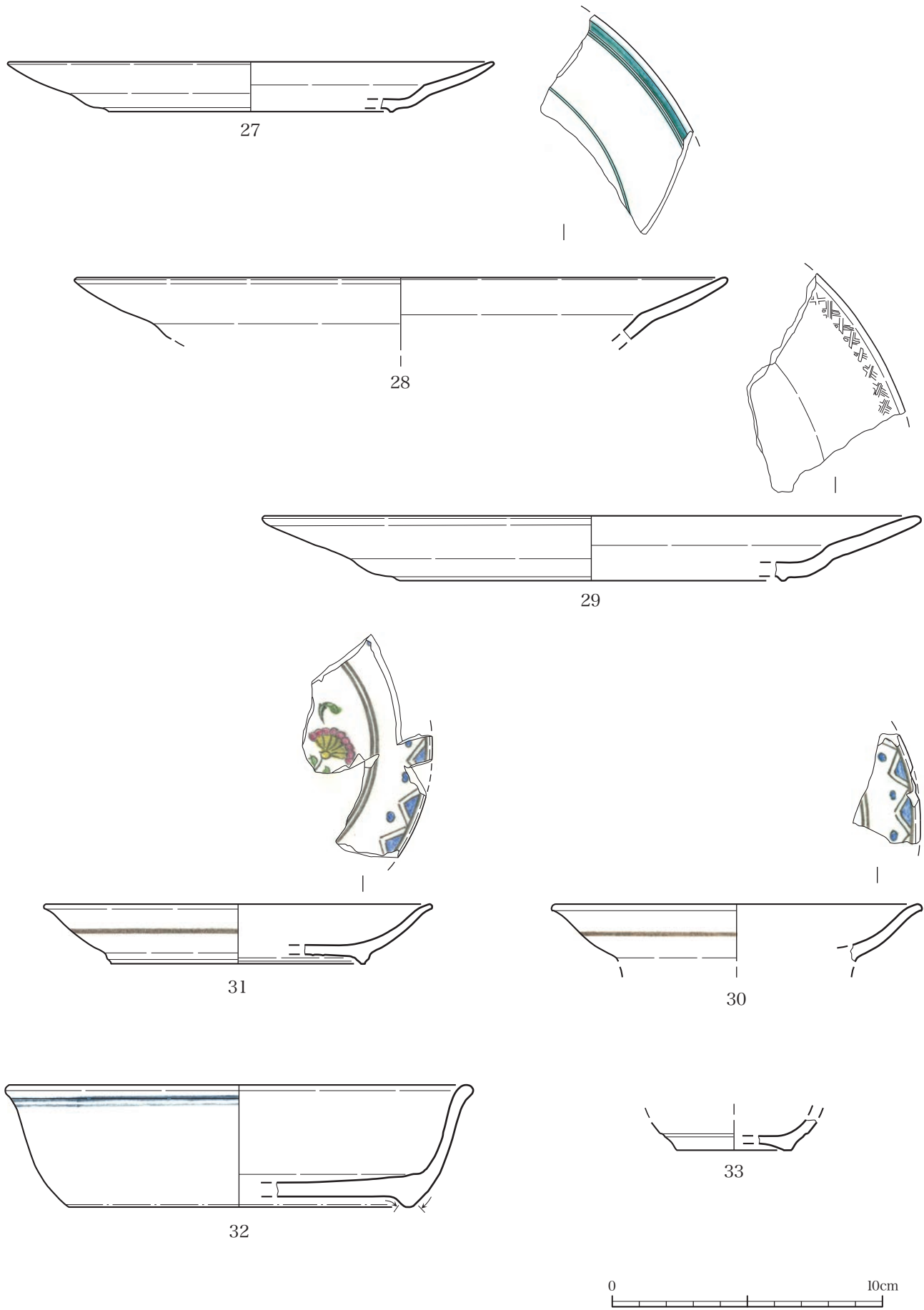


第57図 その他の輸入陶磁器2

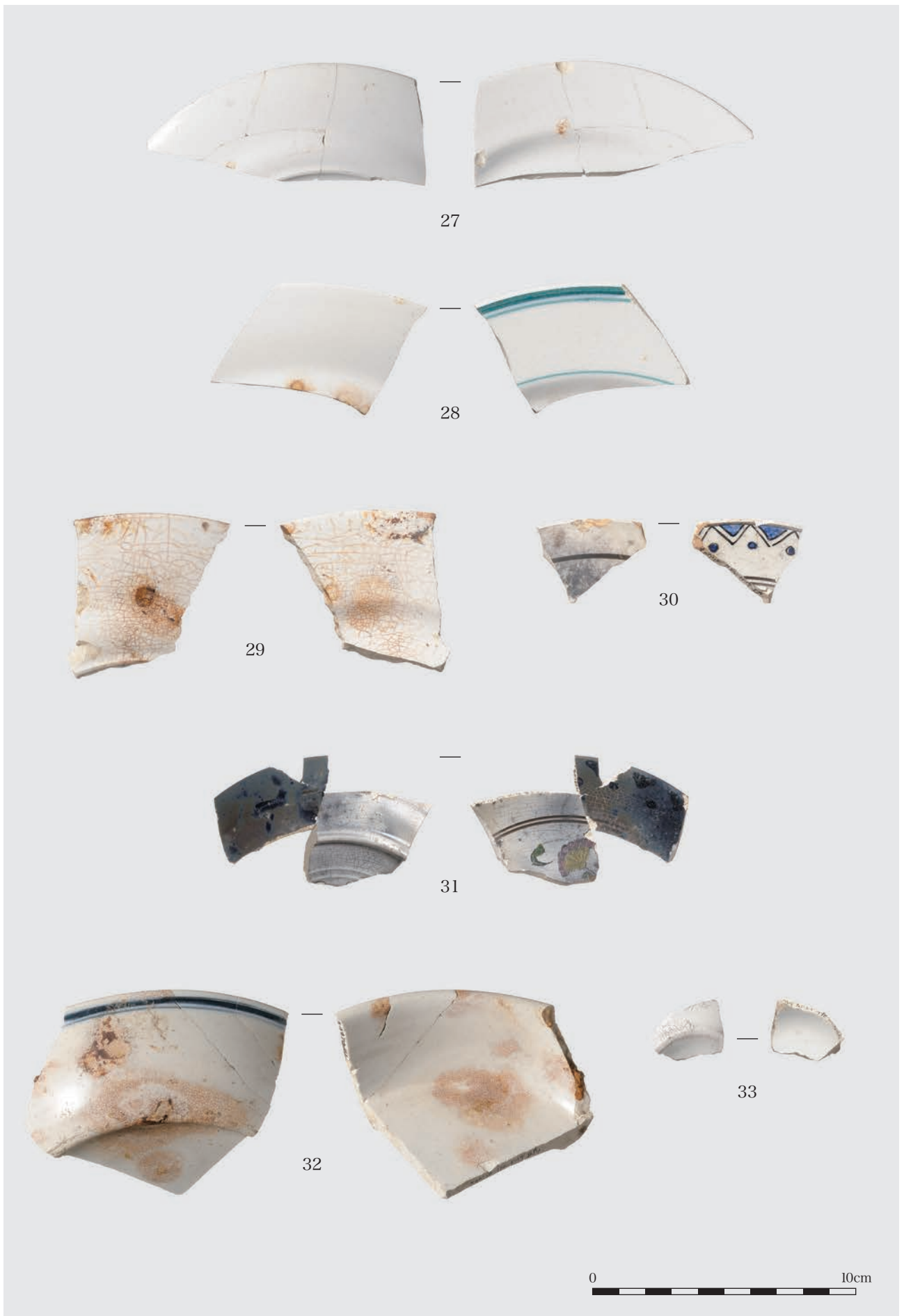




図版76 その他の輸入陶磁器 2



第58図 その他の輸入陶磁器 3



図版77 その他の輸入陶磁器 3

## 7 本土産陶磁器

近世までの琉球には、中国をはじめタイ・ベトナム産の陶磁器が持ち込まれたが、近世以降になると、肥前や薩摩を中心とする日本産の陶磁器が増加する。時代が下るにつれその産地や種別は増加し、近代頃になると九州産以外でも、瀬戸美濃を含む関西・中部地方のほか、砥部など四国の製品もみられるようになる。殊に中城御殿においてはそのバリエーションが豊富な状況が出土品からみることができる。ここではこれらの製品を本土産陶磁器として一括し、種別ごとに報告を行う。なお、近代以降の陶磁器に関しては、近代陶磁器として後半にまとめ、その一部は写真で報告する。

### 1. 染付 (1～22)

染付は342点が出土しており、本土産陶磁器中で最多である。この中から22点を図化した。産地は肥前が殆どで、その他薩摩、瀬戸美濃産を含む関西製が少量含まれる。器種は碗・皿・小碗類が多く、碗は蓋付きが多い。その他鉢、火取、瓶などの製品が得られている。

### 2. 色絵 (23～39)

本土産色絵として515点が出土している。ここから14点を図化し、3件を写真で報告する。産地は染付と同様で肥前が多く、関西、薩摩が少量含まれている。器種は碗・皿類も一定量得られているが、鉢や壺類が多く含まれており、染付と異なる傾向がみえる。ここでは薩摩産の陶器質の色絵も含めたが、その特殊なものとして、金欄手の丁子風炉片が得られている(図版37)。

### 3. 青磁・白磁・施釉陶器 (40～69)

3種の陶磁器をまとめた。その中で青磁(青磁染付含む)5点、白磁1点、施釉陶器24点について報告する。青磁・白磁は量的に希少で、碗や鉢、火入れなどが数点得られるのみである。施釉陶器は唐津産の天目茶碗(46・47)や三島手皿(55)や二彩手の鉢(57)、灰釉の鉢(58・59)などのほか、内野山産の銅緑釉掛分け碗・皿が多い傾向にある(50～55)。希少な資料としては肥前産の玉子手の呉器手茶碗(48・49)や唐津産褐釉瓶(60)、白薩摩の碗・急須の蓋(61～63)などが得られている。

### 4. 褐釉陶器 (70～85)

褐釉陶器として、無釉・黒釉褐釉を含め16点を報告する。器種は主に壺・甕・植木鉢類で、その大半を薩摩産が占めている。その他備前の播鉢(84)や九州産と思われる鉢(85)が少量得られている。

### 5. 近代陶磁器 (86～134)

近代陶磁器としてあげたのは、前項までに収まらない明治以降の製品や、1941～1945年まで生産されたいわゆる統制陶器を指し、ここでは49点を報告する。

統制陶器の成立は、第二次世界大戦中に当時の商工省が定めた陶磁器工業整備要綱に基づき、陶磁器の計画的な生産を行う目的で生産者別標示記号(統制番号)を付し、製品を管理下に置くようになったことにある。産地表示の方法は、碗・皿類では主に、高台内に印判及び凹凸印により行われ、産地の頭文字とその下に窯元を示す数字を組み合わせる。この統制番号からは産地となる地域名のほか、「岐」銘製品に関しては生産していた組合や生産者まで特定できるが、ここでは組合名までを記した(土岐津町誌編纂委員会1999)。今回の出土品では「岐」岐阜、「品」愛知県の旧品野村(瀬戸市品野地区)、「肥」肥前、「ト」砥部か、「長」長崎か、「波」波佐見など数種の銘款がみられ、各地で生産された製品が持ち込まれていることが判明している。その他、軍用食器や金属製品の代用品もみられ、そこから当地の変遷が見て取れる。本報告では特徴的な遺構や層から出土した資料は図化したが、その他遺構外や表土などからの出土品で特徴的な資料は写真で掲載し、その特徴を観察表で報告する。

第40表 本土産陶磁器観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	器種	産地	種別	部位	法量(cm)			釉・文様等 (色・範囲)	素地 (色・質・ 混和材)	所見	グリッド 層
						口径	器高	底径				
第59図 図版78	1	碗	肥前	染付	底	-	-	5.5	見込、外面に染付で圏線、草花文。やや白濁する青白色釉全面施し、 暈付無釉。	灰白色で細かい。	見込広めの厚手碗。暈付周辺に砂目。 1650~60年代	表採
	2	碗	波佐見	染付	底	-	-	5.0	外面に草花文巡らし高台内に不明銘款。 青白色釉全面施し暈付無釉。	灰白色で細かい。	高台内角丸く削る厚手碗。18c中 ~末。	1トF-18 石積1 IV層
	3	碗	肥前	染付	口縁	10.6	-	-	口縁内面に呉須で四方摺、見込二重圏線、 外面微塵唐草に花卉文巡らす。	白色で細かい。	胴が丸みを帯びる直口の碗。19c 前半	1トF-17 II層
	4	碗	薩摩か	染付	口縁	7.6	-	-	淡青色の呉須で外面圏線間に2本一組の縦線 巡らし草文。	白色で細かい。	筒状の碗で外面轆轤痕。1820~60年代。	1トF-16 I層
	5	碗	肥前	染付	底	-	-	3.6	外面染付で風景か。やや青みがかった透明釉を 掛け暈付釉剥ぎ。	白色で細かい。	暈付周辺に砂目。1820~60年代。	4トE-13 IV層
	6	碗	肥前	染付	底	-	-	4.8	外面胴下部と高台脇に圏線巡らす。全面青白色の 透明釉施し暈付、見込蛇目釉剥ぎ。	白色で細かい。	高台浅く見込蛇目釉剥ぎ内砂目。19c初~ 幕末。	1トF-13 I層
	7	碗	肥前	染付	底	-	-	4.0	見込呉須で花文、外面胴青で塗り高台脇二重圏線。 暈付釉剥ぎ。	白色で細かい。	望龍形の碗。高台ハ字型に開く。18c後半。	4トE-13 IV層
	8	鉢	肥前	染付	底	-	-	4.9	見込呉須で二重圏線、外面区画され不明文様。 暈付釉剥ぎ。	白色で細かい。	高台断面方形の鉢。18c後半	4トE-12 I層
	9	鉢	肥前	染付	底	-	-	6.1	見込呉須で二重圏線内に三友文、外面胴下部に 花卉文、胴に蛸唐草。暈付釉剥ぎ。	白色で細かい。	高台幅薄い鉢。18c後半	1トF-17 石積2 III層
	10	皿	肥前	染付	口縁	-	-	-	内面淡い呉須で芙蓉手の絵付け。	白色で細かい。	芙蓉手の皿。17c後半。	4トE-14 I層
	11	皿	肥前	染付	底	-	-	-	内面呉須で蛸唐草、見込剣先連続文、外面唐草、 圏線間に○×連続文。暈付釉剥ぎ。	白色で細かい。	やや被熱。高台断面三角形で浅い。18c後半。	2ト北 H-15 I層
	12	皿	肥前	染付	底	-	-	9.8	内面密に2色の呉須で絵付け。外面高台脇二重圏線。 暈付釉剥ぎ。	白色で細かい。	形状や文様構成から芙蓉手の皿になると 思われる。17c後半。	1トF-15 I層
第60図 図版79	13	皿	肥前	染付	口縁	18.4	-	-	内面呉須で蛸唐草、外面唐草文と圏線。	白色で細かい。	大きく波打つ波縁皿。口唇やや平坦。18c後半。	1トF-17 I層
	14	皿	肥前	染付	底	-	-	5.8	見込に呉須で東屋ほか風景。暈付釉剥ぎ。	白色で細かい。	見込平坦な皿。19c初~幕末。	3トG・ H-17 III層
	15	皿	肥前	染付	口~底	22.0	3.3	12.7	内面口縁に呉須で雷文帯、内底草花文、外面圏線。 暈付釉剥ぎ。	白色で細かい。	口唇厚手で暈付断面丸い。1820~60年代。	1トF-17 II層
	16	皿	肥前	染付	底	-	推定 3.9	-	内面呉須で蛸唐草、花区画文、内底三友文で 外面唐草と圏線。暈付釉剥ぎ。	白色で細かい。	型打ち成形の角皿。1770~1810年代。	1トF-17 II層・2ト H-151層
	17	皿	肥前	染付	底	-	-	-	内面呉須で微塵唐草、花区画文、内底三友文で 外面・高台内圏線。暈付釉剥ぎ。	白色で細かい。	型打ち成形の角皿。19c前半。	1トF-17 II層
18	蓋	関西か	染付	蓋	9.5	2.8	4.0	撮頂部無釉。庇端部に口紅。呉須で内外に連続する丸文 スタンプした上到手描きの文様追加。	白色で細かい。	碗の蓋。轆轤成形で撮外へ開く。19c前半。	1トF-17 I層	
19	蓋	肥前	染付	蓋	10.2	-	-	内面庇に沿って呉須で四方摺文、外面蛸唐草文で埋める。	白色で細かい。	碗などの蓋か。18c後半。	1トF-17 II層	

第40表 本土産陶磁器観察一覧2

挿図番号 図版番号	番号	器種	産地	種別	部位	法量(cm)			釉・文様等 (色・範囲)	素地 (色・質・ 混和材)	所見	グリッド 層
						口径	器高	底径				
第60図 図版79	20	蓋	肥前	染付	蓋	11.2	-	-	外面染付により格子文で内外透明釉施し底下釉剥ぎ。	白色で細かい。	袴付きの蓋。底下釉剥ぎ部に砂目。1820~60年代。	4トE-13 I層
	21	火入	肥前	染付	底	-	-	7.6	外面胴下部に染付圏線。内面無釉で蛇目釉剥ぎ高台外透明釉。	白色で細かい。	筒型の火入れ。蛇目釉剥ぎ高台にチャツ痕あり。18c末~19c前半。	3トEII層
	22	瓶	肥前	染付	底	-	-	5.6	外面染付で牡丹唐草、胴下部花卉文、圏線巡らせ透明釉外面のみ掛け付釉剥ぎ。	白色で細かい。	内底の器壁薄い胴丸の瓶。胴径8.6cm。18c第2・3四半期。	1トF-15 I層
第61図 図版80	23	碗	肥前	色絵	口縁	10.0	-	-	外面口縁上絵で黄地に赤で唐草文巡らせ、胴に丸文内格子・青海波文。一部金泥残る。	白色で細かい。	胴が丸みを帯びる碗。器壁薄く被熱している。18c~19c。	1トF-17 II層
	24	碗	肥前	色絵	口縁	11.4	-	-	口縁内面呉須帯状に巡らせ、濃藍で渦巻き文。外面染付松葉を金泥で輪郭。口唇薄い鉄錆。	白色で細かい。	薄手で直口の碗。1820~60年代。被熱により変色した直口碗。19c前後か。	3トE G・H-17 I層
	25	碗	肥前	色絵	口縁	12.7	-	-	外面口縁呉須で圏線巡り、上絵で唐草等絵付け。口唇金泥。	白色で細かい。	被熱により変色。明治~昭和初め。	2トH-15 石組み3 IIb層
	26	碗	肥前	色絵	底	-	-	4.5	外面染付で胴を縦に区画、胴下部に連弁。区画内上絵赤・緑・金泥で四方襷、植物文。墨付釉剥ぎ。	白色で細かい。	被熱により変色。明治~昭和初め。	2トH-15 溝3 IIb層 ほか
	27	皿	肥前	色絵	口縁	-	-	-	内外面口縁に圏線巡り、内面上絵赤で花唐草輪郭絵付け緑、黄で彩色。	白色で細かい。	波縁の大皿でやや被熱。18c後半~19c前半。	1トF-17 I層
	28	皿	肥前	色絵	底	-	-	16.8	内外面染付で圏線、植物。内面上絵赤・金泥で唐草ほか絵付け。墨付釉剥ぎ。	白色で細かい。	色絵大皿の底部。18c第2・3四半期。	4トE-17 II層
	29	蓋	肥前	色絵	蓋	12.5	-	-	外面染付で圏線と木瓜形窓。余白密に赤・緑に白抜きし黄・金泥で花唐草。窓・丸文内に牡丹、桜文。底下無釉。	白色で細かい。	段重などの蓋か。中央に紐の痕跡。18c末~19c前半。	2トH-15 石組み3 IIb層・I層
	30	蓋	肥前	色絵	蓋	9.5	-	-	内外面瑠璃釉厚く、外面上絵で果実文の痕跡。	白色で細かい。	碗の蓋か。18c末~19c前半。	4トE-13 IIb層
	31	蓋	肥前	色絵	蓋	17.4	-	-	外面染付で圏線と文様、上絵赤、黄色で彩色。底下、袴部無釉。	白色で細かい。	大型鉢類の蓋か。底は内傾する。18c後半。	4トE-17 II層
	32	蓋	関西か	色絵	蓋	11.4	-	-	上絵赤で外面外側塗りつぶし、内側花唐草文絵付け。底下部無釉。	白色ガラス質で細かい。	壺や鉢などの蓋か。19c。	2トH-15 IIb層
	第62図 図版81	33	蓋物	肥前	色絵	身	9.5	-	-	外面染付圏線、上絵赤で白抜きの花唐草文、白抜きに金泥。口縁無釉。	白色で細かい。	蓋物の身。全体に丸い形状。18c。
34		壺	薩摩	色絵	口縁	10.0	-	-	貫入多い透明釉。外面上絵黒の細描輪郭に緑・藍の圏線。口唇釉剥ぎ。	白色で細かい粉末状。	口縁直立する形状で口唇平坦。資料38と同一か。19c。	2ト北拓 H-15 IIb層
35		蓋物	肥前	色絵	身	16.8	-	-	外面染付圏線、上絵赤で区画し白抜きの鶴。口唇釉剥ぎ。	白色で細かい。	色絵蓋物の筒型鉢か。18c末~19c前半。	1トF-14 I層
36		鉢	肥前	色絵	口縁	11.6	-	-	外面上下に染付圏線巡らし、上絵赤で牡丹、葉は緑で葉脈黒。丸文。口唇釉剥ぎ。	白色で細かい。	蓋付きの深手鉢。19c。	1トF-19・20 I層
37		風炉	薩摩	色絵	胴	-	-	-	内外面貫入多い透明釉。上絵で肩に青七宝繫、赤の花連続文、胴に草花文を金泥多く絵付け。	白色で細かい粉末状。	金欄手丁字風炉の破片。厚手資料は炉部分で透かし窓と獸耳付く薄手資料は炉上部に接地する釜で獸耳付く。19c。	2ト北拓 H-15埋 甕2内II b層ほか
第62図 図版81	38	壺	関西か	色絵	口縁	-	-	-	付け内外面透明釉で上絵餅花手菊花ほか細描し緑、赤、青で彩色し連弁金泥。	白色で細かい。	細密植物文の金欄手蓋付き壺か。19c。	2トH-15 溝3IIb層 ほか
	39	急須	九谷	色絵	胴	-	-	-	内外面透明釉。上絵赤細描で連弁	白色で細かい。	急須の胴上部片。極細の筆致。19c。	2トH-14 IIb層 ほか

第40表 本土産陶磁器観察一覧3

挿図番号 図版番号	番号	器種	産地	種別	部位	法量(cm)			釉・文様等 (色・範囲)	素地 (色・質・ 混和材)	所見	グリッド 層
						口径	器高	底径				
第62図 図版81	40	碗	肥前	青磁	口縁	11.0	-	-	内外面淡緑色半透明の青磁釉施し外面あばた状。	白色で緻密。	直口の碗。外面釉下に轆轤痕。17c中葉。	表採
	41	碗	肥前	青磁	口縁	-	-	-	外面～口縁内面淡緑色半透明の青磁釉、内面透明釉の掛け分け。	白色で緻密。	17c中葉～末。	4トE-17 石積2 IV層
	42	碗	肥前	青磁	底	-	-	4.7	内外面淡緑色半透明の青磁釉施し畳付釉剥ぎ。	白色で緻密。	高台内が僅かに尖り断面M字状。高台内に砂目。1630～40年代。	4トE-17 I層
	43	鉢	肥前	青磁	口縁	9.8	-	-	外面淡緑色半透明の青磁釉、内面透明釉で口禿。	白色で緻密。	直口の蓋付き鉢の身か。17c後半～18c初頭。	3トG・ H-17 I層
	44	鉢	肥前	磁染	底	-	-	9.2	青内面青磁釉に見込染付で不明文様。外面青磁釉厚く高台内透明釉付で畳付無釉。	白色で緻密。	高台断面がやや尖る鉢の底部。18c後半	1トF-16 I層
	45	碗	肥前	白磁	底	-	-	4.6	内面透明釉、外面やや青白色の透明釉で畳付無釉。細かい貫入多い。内外面マットな暗茶褐色釉。	白色で緻密。	高台内丸く成形し高台薄い造りの碗。17c後半～18c初頭。	4トE-13 III層
	46	碗	肥前	施釉	口縁	10.8	-	-	内面霜降り状の黒色釉。	灰色～橙褐色で細かい。	天目形の茶碗。唐津産で1590～1610年代初頭。	4トE-13 I層
	47	碗	肥前	施釉	底	-	-	3.9	黄白色釉全面に掛け畳付釉剥ぎ。	赤褐色で微砂粒混入。	天目茶碗の底部か。見込凹む形状で高台幅広い造り。唐津産で1590～1610年代。	3トG-17 I層
	48	碗	肥前	施釉	底	-	-	5.2	米色釉全面に掛け畳付釉剥ぎ。微細な貫入多い。	白色で粉末状。	玉子手の呉器手茶碗。高台内丸く成形。17c前半。	1トF-17 石積2 III層
	49	碗	肥前	施釉	底	-	-	4.4	外面緑、内面白釉の掛け分け。	褐色で細かい。	呉器手茶碗。高台内、畳付角丸く成形。18c前半。	4トE-13 IV層
	50	碗	肥前	施釉	口縁	11.2	-	-	外面緑、内面白釉の掛け分け。	灰白色で細かい。	内野山産。外面轆轤痕。17c末～18c前半。	2トH-13 III層
	51	碗	肥前	施釉	底	-	-	4.6	内外面緑釉で底部無釉。	灰白色で細かい。	高台断面三角で高台内僅かに尖る。17c末～18c前半。	4トE-15 I層
	52	碗	肥前	施釉	底	-	-	4.6	外面緑、内面褐釉の掛け分け。	褐色で細かく黒色微粒子混入。	高台内面やや丸く削る。畳付平坦。17c末～18c前半。	4トE-16 I層
	53	碗	肥前	施釉	底	-	-	4.2	内外面透明釉で底部無釉。	灰白色で細かい。	見込やや尖り、高台造り丁寧。17c末～18c前半。	3トG・ H-17 I層
54	皿	肥前	施釉	底	-	-	4.4	内面白象嵌で花卉施文し内外面緑灰釉。	褐色で細かく黒色微粒子混入。	高台断面台形で浅い造りの皿。見込と畳付に3点ずつ砂目痕。1610～30年代。	1トF-15 I層	
第63図 図版82	55	皿	肥前	施釉	口縁	-	-	-	内外面緑灰釉で畳付釉剥ぎ。	暗灰色～橙褐色で石英粒含む。	やや大ぶりの皿か。唐津・三島手で17c末～18c前半。	4トE-13 I層
	56	皿	九州	施釉	底	-	-	5.7		暗灰色で細かい。	見込、畳付に胎土目痕。薩摩か福岡産で17c前半。	2トI層
	57	甕	肥前	施釉	口縁	-	-	-	緑灰釉外面と内面口縁下までで角部剥落。	暗灰色で細かい。	平口縁で内湾する鉢。唐津の二彩手で17c中～末。	4トE-17 石積2 IV層
	58	鉢	肥前	施釉	底	-	-	10.1	内面白濁した褐色釉。	淡橙褐色で石英粒含む。	高台幅広く浅い鉢底部。唐津産で1590～1610年代。	4トE-17 I層
	59	鉢	肥前	施釉	底	-	-	6.8	内面と外面胴下部まで淡茶灰色釉。	淡茶褐色で細かい。	碁笥底状の鉢。唐津産で1590～1610年代。	3トG・ H-17 I層
	60	瓶	肥前	施釉	頸	-	-	-	外面と内面口縁下まで光沢ある褐釉。	淡茶褐色～灰色で細かい。	渦巻き状の耳を貼付する瓶。頸部に竹節状の沈線巡らす。唐津産で17c中頃。	4トE-13 IV層

第40表 本土産陶磁器観察一覧4

挿図番号 図版番号	番号	器種	産地	種別	部位	法量(cm)			釉・文様等 (色・範囲)	素地 (色・質・ 混和材)	所見	グリッド 層
						口径	器高	底径				
第63図 図版82	61	碗	薩摩	施釉	底	-	-	4.2	全面透明釉掛け暈付釉剥ぎ。微細貫入多い。	淡黄白色で細かい。	高台浅く、胴が丸みを帯びる碗。19c前半。	1トF-15 石組1 Ⅲ層
	62	碗	薩摩	施釉	底	-	-	4.6	全面透明釉掛け暈付釉剥ぎ。微細貫入多い。	淡黄白色で細かい。	高台内、暈付角丸く成形。19c前半。	1トF-17 1層
	63	蓋	薩摩	施釉	庇～撮	6.8	-	4.8	上面透明釉掛で微細貫入多い。	淡黄白色で細かい。	急須の蓋か。庇玉縁状。18c後半～19c。	3トG・ H-17 1層
	64	壺	薩摩	施釉	口縁	6.8	-	-	外面鮫肌釉、内面透明釉で口唇、口縁内面無釉。	茶褐色で細かい。	口縁直口で口唇断面丸い小壺。19c。	1トF-17 石積2 Ⅲ層
	65	瓶	薩摩	施釉	底	-	-	6.9	外面透明な茶灰色釉で底面釉剥ぎ。	淡茶褐色釉で細かい。	胴が丸くなるタイプの瓶。底面縁辺に粉殻痕。見込丸棒で押した痕あり。19c。	4トE-13 石組内 Ⅳ層
	66	瓶	薩摩	施釉	底	-	-	4.7	外面褐釉で底面釉剥ぎ。	淡茶褐色釉で細かい。	底面縁辺に砂目痕。見込丸棒で押した痕あり。龍門寺系で19c。	1トF-13 1層
	67	中子	九州	施釉	底	-	-	4.0	内面に貫入多い透明釉。	淡灰白色で細かい。	蓋物の中に入る中子。ベタ底。化粧品などの容器か。19c。	2トH-15 溝3 Ⅱb層
	68	餌入	関西	施釉	底	-	-	4.2	内外面・底部内淡褐色釉。	淡灰白色で細かい。	筒形の餌入れ。底面やや上げ底状。18c後半～19c。	2トH-14 1層
	69	壺	備前か	施釉	底	-	-	2.4	外面光沢ある薄い柿釉。	灰色～茶褐色で細かい。	肩付長胴の茶入れか。底面やや上げ底状。17～18c。	3トI層
第64図 図版83	70	甕	薩摩	褐釉	口縁	17.4	-	-	黒褐釉を外面厚く内面薄く施し口唇釉剥ぎ。	暗灰色～暗茶褐色で石英粒多い。	口縁断面逆台形の甕。肩は大きく広がる。18c～19c。	4トI層
	71	壺	薩摩	褐釉	口縁	18.0	-	-	白濁した茶褐色釉薄く口唇以外に塗布。	茶褐色～橙褐色で石英多い。	口縁断面逆三角形の壺。18c。	3トG-17 Ⅲ層
	72	壺	薩摩	褐釉	口縁	13.6	-	-	暗緑褐色釉を外面厚く内面薄く施し口唇釉剥ぎ。	暗灰色で間隙・黒粒・石英多い。	口縁断面逆台形の甕。で口唇内側に突出。18c。	1トF-17 1層
	73	壺	薩摩	褐釉	口縁	-	-	-	褐釉を外面厚く内面薄く施す。	黒灰色で細かい。	口縁玉縁状の壺。17c。	4トE-14 1層
	74	壺	薩摩	褐釉	口縁	16.1	-	-	褐釉を外面厚く口縁・内面薄く施す。	黒灰色で石英多い。	口縁が外へ鉤状に屈曲する壺。口唇に貝目らしき凹み。17c～18c。	4トE-13 Ⅳ層
	75	壺	薩摩	褐釉	口縁	14.3	-	-	褐釉を外面厚く内面薄く施し口唇釉剥ぎ。	灰色で石英含む。	黒平口縁の壺で、口縁粘土外へ広げ内へ折り返して成形。口唇に貝目痕あり。17c。	表採
	76	壺	薩摩	褐釉	底	-	-	9.4	内面赤茶色、外面褐色釉で底面無釉。	黒灰色で石英含む。	底部の立ち上がりやや丸く面取り成形。底面摩滅。17c。	1トF-14 ～16I層
	77	壺	薩摩	褐釉	底	-	-	12.6	褐釉を外面厚く内面薄く施し底面無釉。	赤褐色～黒灰色で石英含む。	内外面横位に刷毛目状の沈線が密に入る。18c～19c。	2トH-15 1層
	78	鉢	薩摩	無釉	口縁	14.1	-	-	無釉。	赤褐色で石英含む。	口唇やや肥厚し内湾する鉢。口唇平坦。17c。	2トH-13 1層
	79	鉢	薩摩	褐釉	口縁	16.8	-	-	口縁外面と内面に褐釉。	暗赤褐色で石英含む。	口縁鐔状で内湾する鉢。17c後半～18c。	3トG・ H-17 1層
第65図 図版84	80	植木鉢	薩摩	褐釉	口縁	29.4	-	-	褐釉を外面厚く内面薄く施し口唇釉剥ぎ。	暗褐色で石英含む。	口縁逆L字状の植木鉢か。口縁外面二段の波縁に成形。内外面横位に擦痕。18c～19c。	4トE-17 Ⅱ層
	81	植木鉢	薩摩	褐釉	口縁	-	-	-	口唇外面に褐釉厚く、口唇薄く塗布。	淡赤褐色で石英含む。	口縁粘土外へ広げ内へ折り返して成形。口縁外面二段で上段刻み入れ下段波縁に成形。17c。	1トF-16 1層



第 40 表 本土産陶磁器観察一覽5

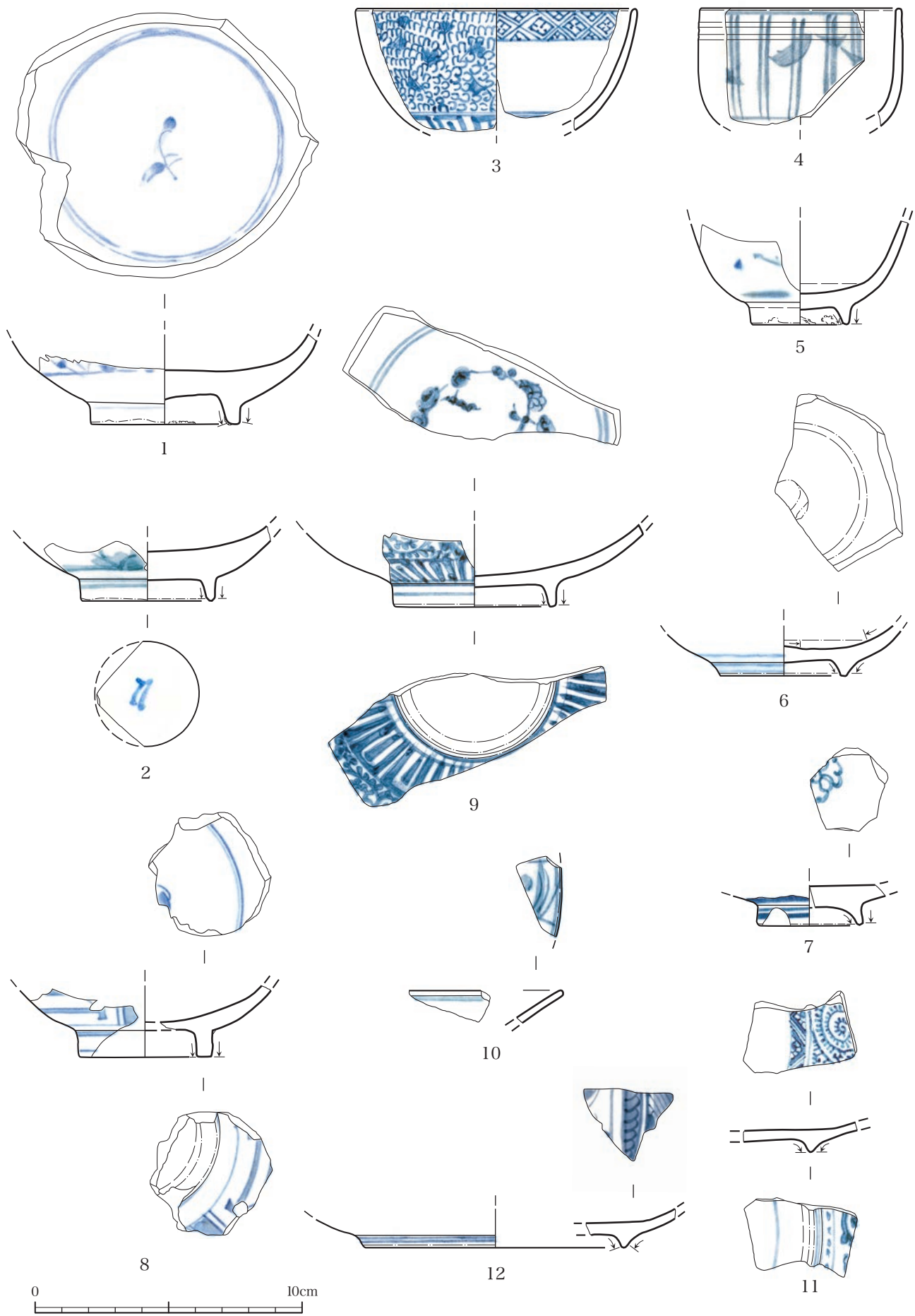
挿図番号 図版番号	番号	器種	産地	種別	部位	法量(cm)			釉・文様等 (色・範囲)	素地 (色・質・ 混和材)	所見	グリッド 層
						口径	器高	底径				
第 65 図 図版 84	82	植木鉢	薩摩	褐釉	口縁	28.0	-	-	褐釉を内外面厚く口唇薄く施す。	暗灰色で石英含む。	口縁粘土外へ広げ内へ折り返して成形。口縁外面二段で下段波線に成形。17c後半～18c前半。	4トVE-13 1層
	83	植木鉢	薩摩か	褐釉	口～底	31.4	28.75	16.9	茶褐色釉を外厚く内面薄く施し口唇釉剥ぎ。	赤褐色で白砂、石英含む。	口縁粘土外へ広げ内へ折り返して成形。内外面横位に擦痕。底面中央に水抜き孔を焼成後穿孔。18c～19cか。	2トIH-15 IIb層
	84	播鉢	備前	無釉	底	-	-	-	無釉。外面やや緋色で光沢あり。	赤褐色で白砂、石英含む。	轆轤成形の播鉢で、内面9本の節目を間隔あけて施す。15c～16c。	1トVF-14 1層
	85	鉢	九州か	黒釉	口縁	16.6	-	-	内外面黒釉。	黄橙褐色で白色粒含み粗い。	口縁く字状の鉢。口唇に叩き痕。火炉や火鉢の可能性あり。19c。	3トI層
第 66 図 図版 85	86	小鉢	瀬戸美濃	近代	口～底	5.0	3.8	3.4	成形後外面に彫文施し、全面クロム青磁釉施釉後、口唇・畳付濃釉剥ぎし畳付鉄錆。	緑白色で細かい。	轆轤成形で口縁に半円状の持ちあり。薬味入れか鳥餌入れ。明治頃。	2トIH-15 IIb層
	87	小碗	瀬戸美濃	近代	口～底	8.8	3.65	3.1	畳付以外透明釉。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形の器高低い小碗。明治頃。	3トIG・H-17 III層
	88	小碗	瀬戸美濃	近代	底	-	-	2.9	畳付・高台内以外透明釉。内面にコバルトの飛斑。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形の器高低いタイプの小碗。明治頃。	3トIG・H-17 III層
	89	碗	瀬戸美濃	近代	口～底	14.2	6.5	6.2	口縁下に五芒星の陰刻で全面透明釉施し畳付釉剥ぎ。	灰白色・ガラス質で堅緻。	玉縁の碗。大日本帝国陸軍の帽章となる五芒星(五光星)が陰刻されることから、軍用の食器と思われる。20c。	1トVF-17 II層
	90	箸置き	肥前	近代	完形	縦 5.8	横 1.75	高 1.9	畳付以外透明釉。	白色で堅緻。	エンドウマメ形の箸置き。型造りか。接地は無釉長円形の2点。大正～昭和初期。	2ト北拡 H-15 1層
	91	碗	砥部	近代	口縁	-	-	-	型紙刷りの染付で外面花唐草、口縁内面草花文に圏線。	灰白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形の碗で轆轤痕顕著。	4トVE-15 溝6内 IIb層
	92	碗	砥部	近代	底	-	-	4.7	型紙刷りの染付で外面菱形組み合わせ鋸歯状文。高台側面・脇・見込圏線手書き。見込型紙摺り花文か。畳付無釉。	灰白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形の碗で轆轤痕顕著。内底に目跡あり。	1トVF-15 石組1 III層
	93	碗	関西	近代	口～底	11.4	5.4	4.4	外面染付で童子文描き上下に圏線。高台内に圏線と銘。畳付無釉	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形の碗で高台内染付で二重四角内に「福」字。	4トVE-17 II層
	94	碗	瀬戸美濃	近代	口～底	11.2	6.05	4.2	内面口縁下に染付で帯文。外面白土で鶴・雲盛りコバルト・赤で彩色。	白色・ガラス質で堅緻。	暗渠内のプリキ缶1内アルミ鍋に納められていた碗。	2トIH16・ 17暗渠内 IIb層
	95	碗	瀬戸美濃	近代	口縁	11.0	-	-	コバルトで内面口縁に草花文、外面口縁下に圏線引き胴に印判で花鳥丸文。	白色・ガラス質で堅緻。	端反りの碗。遺構内出土。	4トVE-15 溝7内 IIb層
96	碗	瀬戸美濃	近代	口～底	11.2	5.7	4.4	内面コバルトで圏線、見込菊花文印判し、外面圏線、木瓜内菊花・胴下部に松葉。	白色・ガラス質で堅緻。	鑄込み成形の直口碗で畳付無釉。遺構内出土。	4トVE-14 溝7内 IIb層	
97	急須	瀬戸美濃	近代	口～底	9.3	10.2	8.6	外面胴上部にコバルトで8条一組の網代状文様施し、口縁内面、底部以外透明釉。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形で注口・釣り手・茶漉し部別造し貼り付け。石組み4内出土。	4トVE-15 石組4内 IIb層	
第 67 図 図版 86	98	皿	肥前	近代	口縁	15.1	-	-	内面に具須印判で微塵唐草、外面に唐草文巡らす。	白色で堅緻。	型打ち成形の波縁皿。	4トVE-17 III層
	99	皿	砥部	近代	底	-	-	8.7	内面に具須型紙摺りで花唐草、外面に圏線巡らす。高台内釉剥ぎ。	白色・ガラス質で堅緻。	蛇目凹形高台の皿。轆轤成形。	2トIH-16 暗渠内 IIb層
	100	皿	瀬戸美濃	近代	口～底	12.2	2.7	6.7	銅板転写で内面染付により烏帽子、短冊に短歌、桜。クロム釉で桐葉、桜写し、桜中央桃色。外面コバルト圏線で口唇鉄錆。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形の皿。見込の短歌は本居宣長による「倉敷の大和心を人となわば朝日に匂う山桜花」か。溝2内出土	4トVE-14 溝7内 IIb層

第40表 本土産陶磁器観察一覧6

挿図番号 図版番号	番号	器種	産地	種別	部位	法量(cm)			釉・文様等 (色・範囲)	素地 (色・質・ 混和材)	所見	グリッド 層
						口径	器高	底径				
第67図 図版86	101	蓋	瀬戸美濃	近代	庇〜撮	3.8	3.25	9.5	内面呉須で圏線と草花文、外面ゴム印で花唐草文とラマ式連弁。撮頂部無釉。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形。蓋付き碗の蓋。蓋・身ともに複数個体分出土していることから揃いで存在したか。	2トH-15 IIb層
	102	小碗	瀬戸美濃	近代	底	-	-	3.3	外面胴部、見込にコバルトで染色体文様。全面透明釉施し暈付釉剥ぎ。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形の小碗。高台内に砂目。明治頃。	3トG・ H-17 III層
	103	小碗	瀬戸美濃	近代	口縁	8.5	-	-	外面胴部にコバルトで丸文、葉文。内外白濁透明釉施し口銹。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形の小碗。明治頃。	3トG・ H-17 I・III層
	104	小碗	瀬戸美濃	近代	口〜底	8.4	3.95	3.4	外面胴部にコバルトで唐草文様。全面透明釉施し暈付釉剥ぎ。口銹。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形の小碗。外面口縁下に沈線3〜4条巡る。明治頃。	3トG・ H-17 III層
	105	小碗	肥前	近代	底	-	-	3.2	外面染付で祥瑞文、山水巡らす。高台内圏線と銘。	白色で堅緻。	高台内銘は口内に「鹿」。大正〜昭和初期。	2トH-15 IIb層・ 溝3IIb 層
	106	小碗	瀬戸美濃	近代	口〜底	7.9	4.8	3.8	外面青、緑、茶で人物文。暈付無釉。高台内呉須薄く銘不明。暈付無釉。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形の小碗。大正〜昭和初期。	4トE-15 石組4内 IIb層
	107	小碗	瀬戸美濃	近代	口〜底	7.3	5.0	3.3	外面口縁にクロム釉の二重圏線。全面透明釉施し暈付釉剥ぎ。	白色・ガラス質で堅緻。	高台内銘は「岐524」のクロム印。土岐津陶磁器工業組合内の製品。	4トE-17 II層
図版87	108	碗	瀬戸美濃	近代	口〜底	12.0	5.15	5.0	暈付無釉。胴に桃・緑・黄・青・赤の上絵で植物などの文様描く。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形で高台内銘は緑呉須印で「岐965」か。	I層
	109	碗	瀬戸美濃	近代	底	-	-	4.4	全面鉛釉地に内外面褐釉で太く螺旋巡らす。暈付無釉。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形で暈付無釉。高台内銘は茶呉須印の「岐78」。西南部陶磁器工業組合内の製品。	1トF-17 II層
	110	碗	瀬戸美濃	近代	底	-	-	3.6	暈付無釉の内外面透明釉。	白色・ガラス質で堅緻。	鑄込み成形で高台内銘は「岐1043」のクロム印。瑞浪陶磁器工業組合内の製品。	4トE-17 II層
	111	碗	瀬戸美濃	近代	底	-	-	4.0	高台脇青で二重圏線、胴に吹墨青・黄で施文。暈付無釉。	白色・ガラス質で堅緻。	鑄込み成形で高台内角圏線内に銘は「岐1075」緑呉須印。瑞浪陶磁器工業組合内の製品。	4トE-17 II層
	112	碗	瀬戸美濃	近代	底	-	-	4.0	胴に带状の呉須巡らす。暈付無釉。	淡灰色で堅緻。	轆轤成形で高台内銘は凸印で「岐110」。西南部陶磁器工業組合内の製品。	1トF-17 II層
	113	小碗	瀬戸美濃	近代	口〜底	8.6	4.9	3.5	暈付無釉。外面口縁下にクロム釉で二重圏線巡らす。	白色・ガラス質で堅緻。	被熱。轆轤成形で高台内銘はクロム印で井内に「家」か下に「岐364」。土岐津陶磁器工業組合内の製品。	1トF-17 I層
	114	湯飲み	瀬戸美濃	近代	口〜底	8.2	8.3	4.7	胴に雲状白盛りで枠内に呉須、茶で渦巻き施文。暈付無釉。	白色・ガラス質で堅緻。	鑄込み成形で高台内銘は凸印で「岐518」。土岐津陶磁器工業組合内の製品。	1トF-17 II層
	115	皿	瀬戸美濃	近代	口〜底	11.6	2.4	5.9	内面に呉須印判で松・建物・漢詩文か。暈付無釉。	白色で堅緻。	鑄込み成形で高台内銘は「岐471」の呉須印。土岐津陶磁器工業組合内の製品。	1ト F-17〜19 I層
	116	皿	瀬戸美濃	近代	口〜底	11.2	2.75	6.4	暈付無釉。内面印花で果樹文。葉は青、実は鉄釉。	白色で堅緻。	型打ち成形の角皿で高台内銘は「品66」の凹印で旧品野村(瀬戸市品野地区)製。	1トF-17 II層
	117	碗	肥前	近代	口〜底	11.0	5.6	4.4	暈付無釉。胴に印判で植物。	白色で堅緻。	轆轤成形で高台内銘は「肥71」呉須印。	1トF-17 II層
	118	碗	長崎か	近代	底	-	-	4.8	暈付無釉。高台脇に呉須二重圏線と波文巡らす。胴に赤の上絵。	白色で堅緻。	轆轤成形で高台内角に呉須の圏線内に呉須印銘「長」下に○内「エ」。	4トE-17 III層
	119	碗	波佐見	近代	口〜底	11.2	5.8	3.9	暈付無釉。胴部に呉須印判で縦位に刷毛目、高台脇二重圏線。高台内角に圏線。	白色で堅緻。	鑄込み成形で高台内「波21」銘呉須印。	1トF-17 表採

第40表 本土産陶磁器観察一覧7

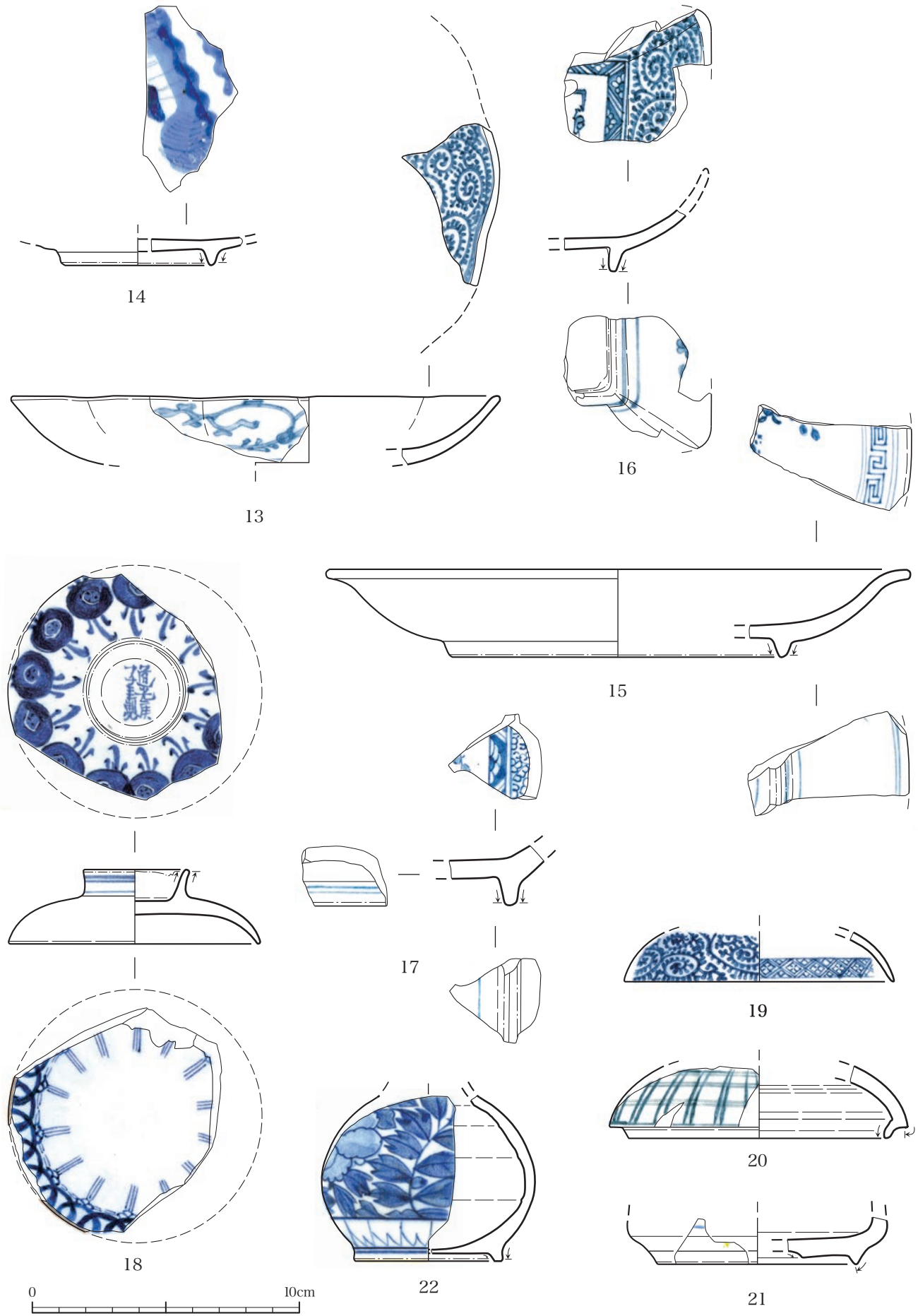
挿図番号 図版番号	番号	器種	産地	種別	部位	法量(cm)			釉・文様等 (色・範囲)	素地 (色・質・ 混和材)	所見	グリッド 層	
						口径	器高	底径					
図版87	120	碗	砥部か	近代	底	-	-	5.0	晝付無釉。高台脇に呉須で二重・見込一重圈線。型紙摺りにより胴に鋸歯状文・花文、見込に三友文。	明灰色で堅緻。	轆轤成形で高台内に黒呉州印銘○内に「ト」下に「11」。	1トF-17 II層	
	図版88	121	碗	肥前か	近代	口〜底	12.2	5.4	5.0	晝付無釉。内底にクロム印で桜、中央に文字端部あるも不明。	白色で堅緻。	鑄込み成形で軍用食器か。	4トE-17 II層
		122	皿	瀬戸美濃	近代	口〜底	9.4	1.9	5.3	晝付無釉。口縁にクロム二重圈線。高台内に菱形内に丸のクロム印。	白色・ガラス質で堅緻。	胴・底部に型成形によるシワ残る。軍用食器か。	2トI層
		123	蓋	瀬戸美濃	近代	底	14.2	-	-	底端部にクロム釉二重圈線、胴にクロム印文字。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形で胴にクロム印文字右から左へ「荏原栄養食」。「荏原」は東京品川、富山に地名あり。軍用食関係か。	4トI層
		124	碗	瀬戸美濃	近代	口〜底	9.7	4.9	3.2	晝付無釉。外面全面上絵で青に染め黒線で笑う象、背に赤の絨毯。黄で丸文。	白色・ガラス質で堅緻。	子供用茶碗。鑄込み成形。	4トE-17 II層
		125	小碗	瀬戸美濃	近代	口・底	8.3	-	3.5	口禿げ。外面全面を上絵で赤く染め、胴に銀で丸文。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形。高台内に上絵で赤の銘□内に「東陶」。	1トF-17 II層
		126	小碗	瀬戸美濃か	近代	底	-	-	3.4	全面透明釉。	白色・ガラス質で堅緻。	高台は基筒底状で高台内に上絵赤による「菊水硬質陶磁器 TsujisoCo.」の印。岐阜卓あたりの製品か。	2ト北拓 H-15 I層
		127	湯飲み	瀬戸美濃か	近代	口	6.8	-	-	全面透明釉。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤製器の筒型湯飲み。胴には上絵により青で「道路・・・」文字あり。22資料とセットか。	4トE-17 II層
		128	急須	瀬戸美濃	近代	口〜底	9.6	10.2	9.2	全面透明釉施し晝付と口唇釉剥ぎ。	白色・ガラス質で堅緻。	轆轤成形で注口、茶漉し、紐は貼り付け。高台基筒底状で胴部に上絵青で「道路港湾課」、高台内に上絵赤印で□内に○ト「台北 富村製」銘。台湾産か。	1トF-17 II層
129	おろし器	肥前か	近代	-	-	-	-	全面白濁する透明釉。	白色で堅緻。	型成形と思われる方形のおろし器。おろし目は4mm目の櫛状工具により、上下から往復して10mm間隔で突起部を目立て、その後透明釉をかける。下面端部に砂目。金属製品の代用品。	4トI層		
第68図 図版89	130	蓋	常滑	近代	底〜底	11.4	4.2	4.7	上面に暗茶褐色釉でネジ下面の一部にも付着。	茶褐色で表裏面薄く暗灰色で細かい。	硫酸瓶の蓋。1.1mm厚の円盤下面に外ネジが付着する。円盤下部とネジ部は一体の型造りで縦にバリ残る。ネジ内側は中空。	I層	
	131	壺	常滑	近代	口縁	13.6	-	-	外面茶褐色釉、内面明茶色釉で口唇に白土。	茶褐色で細かい。	硫酸瓶の口縁部。口縁断面方形のドーナツ状で内ネジ。形は直線的斜位に折れ、筒状の胴部へ至る形状。口縁下と形に型造りのバリ残る。内径6.8〜5.6cm。	3トG・ H-17 I層	
	132	便器	瀬戸	近代	縁	-	-	-	内外面透明度高い厚手のクロム青磁釉。	白色・ガラス質で堅緻。	朝顔形小便器の受け皿部。多角形で、釉下生地表面にシワがみえることから型造りと思われる。明治末。	2トH-15 溝3 IIb層	
	133	便器	瀬戸	近代	底	-	-	-	内外面透明度高い厚手のクロム青磁釉で下面釉剥ぎ。	白色・ガラス質で堅緻。釉際緋色。	朝顔形小便器の後面角の底部。釉下生地表面にシワがみえることから型造りして貼り合わせ、施釉後に底部釉剥ぎとともに面取り。明治末。	2トH-15 石組3 IIb層	
	134	便器	瀬戸	近代	縁	-	-	-	内外面白化粧施し、染付で口唇に微塵唐草、側面に雷文帯を手書きし透明釉。	灰褐色でやや粗い。	染付陶器の角形大便器。型造りして貼り合わせ、角を丸く成形か。明治前半。	4トE-17 II層	



第59図 本土産陶磁器 1 (染付 1)



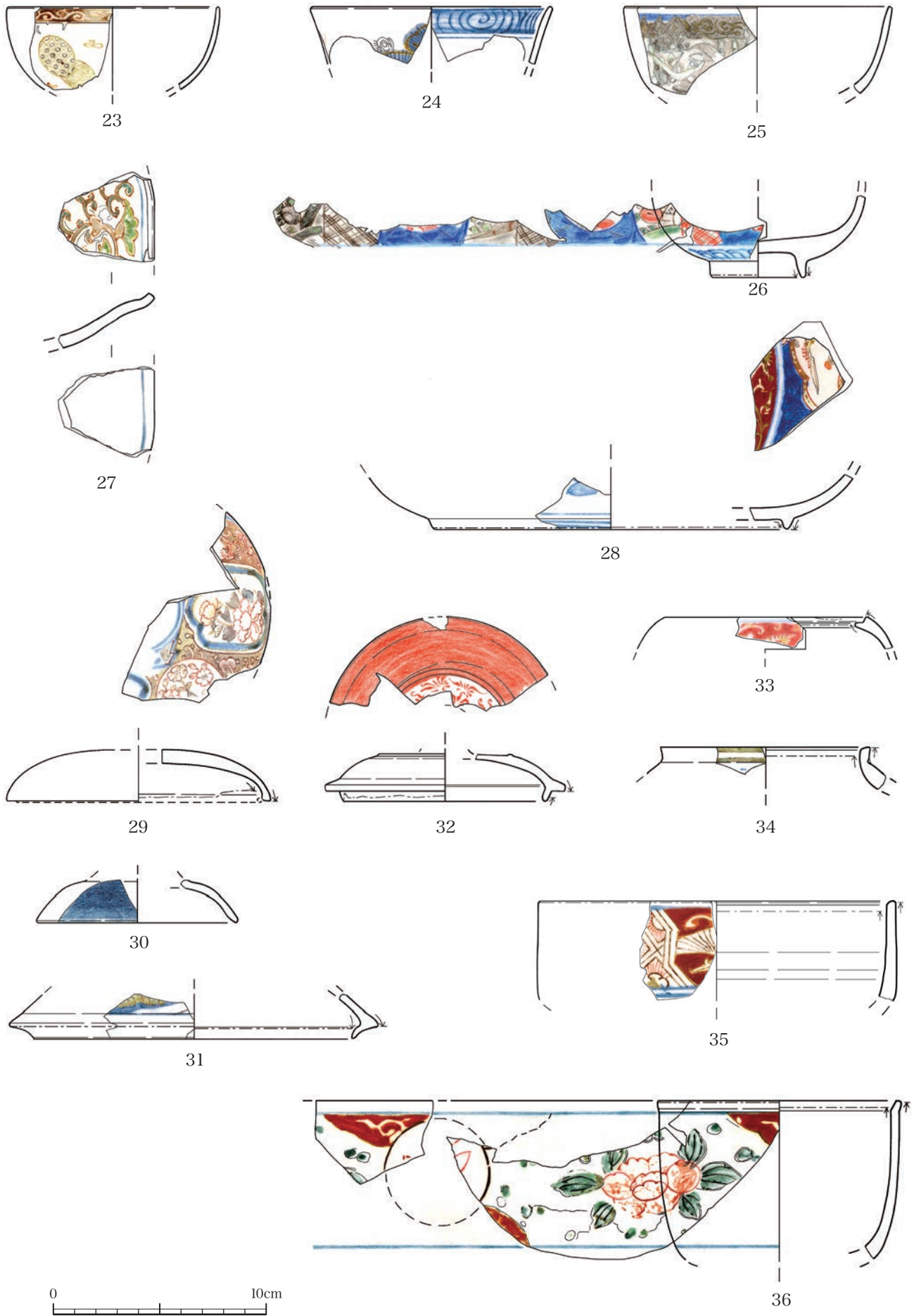
図版78 本土産陶磁器 1 (染付 1)



第60図 本土産陶磁器 2 (染付 2)

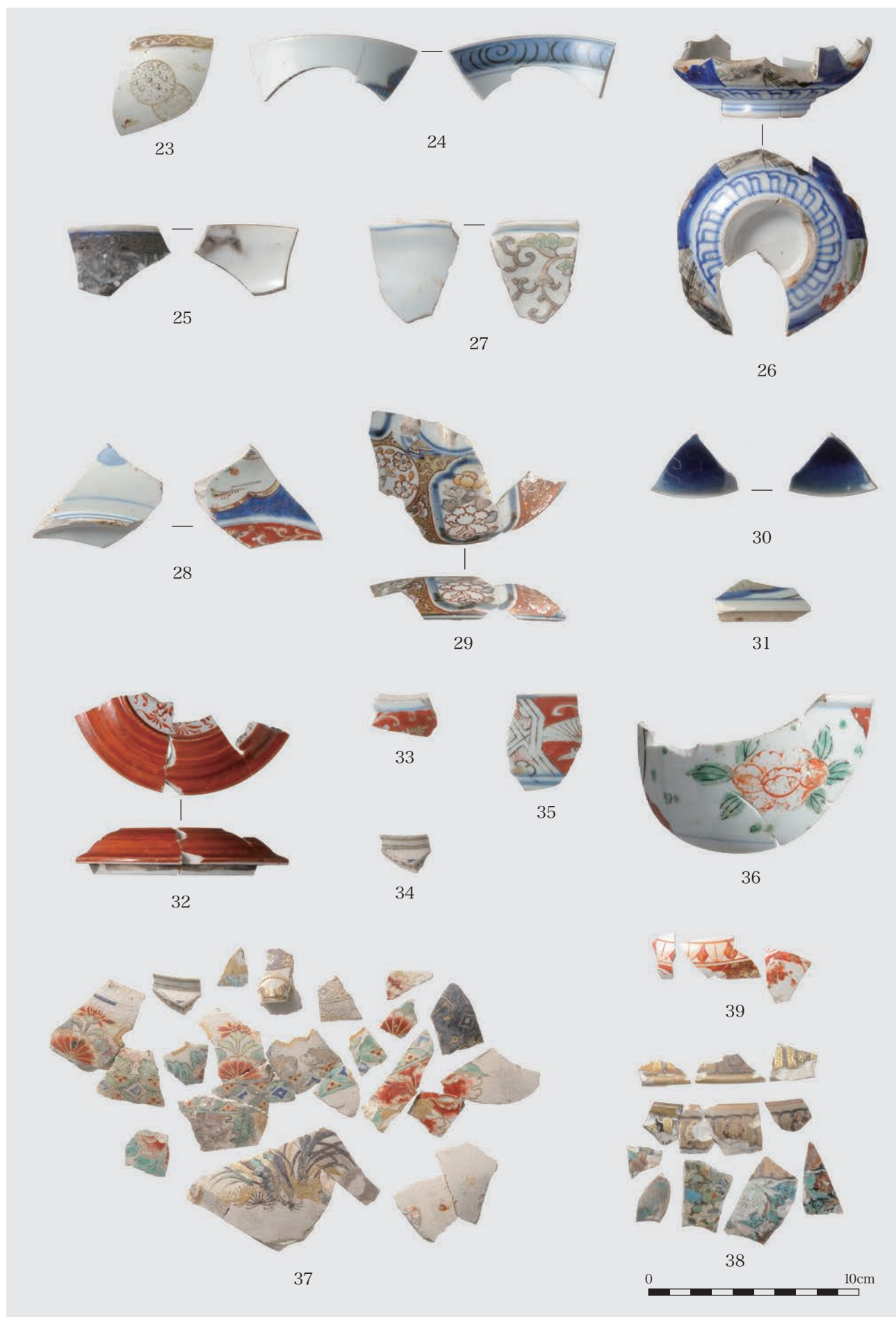


図版79 本土産陶磁器 2 (染付 2)

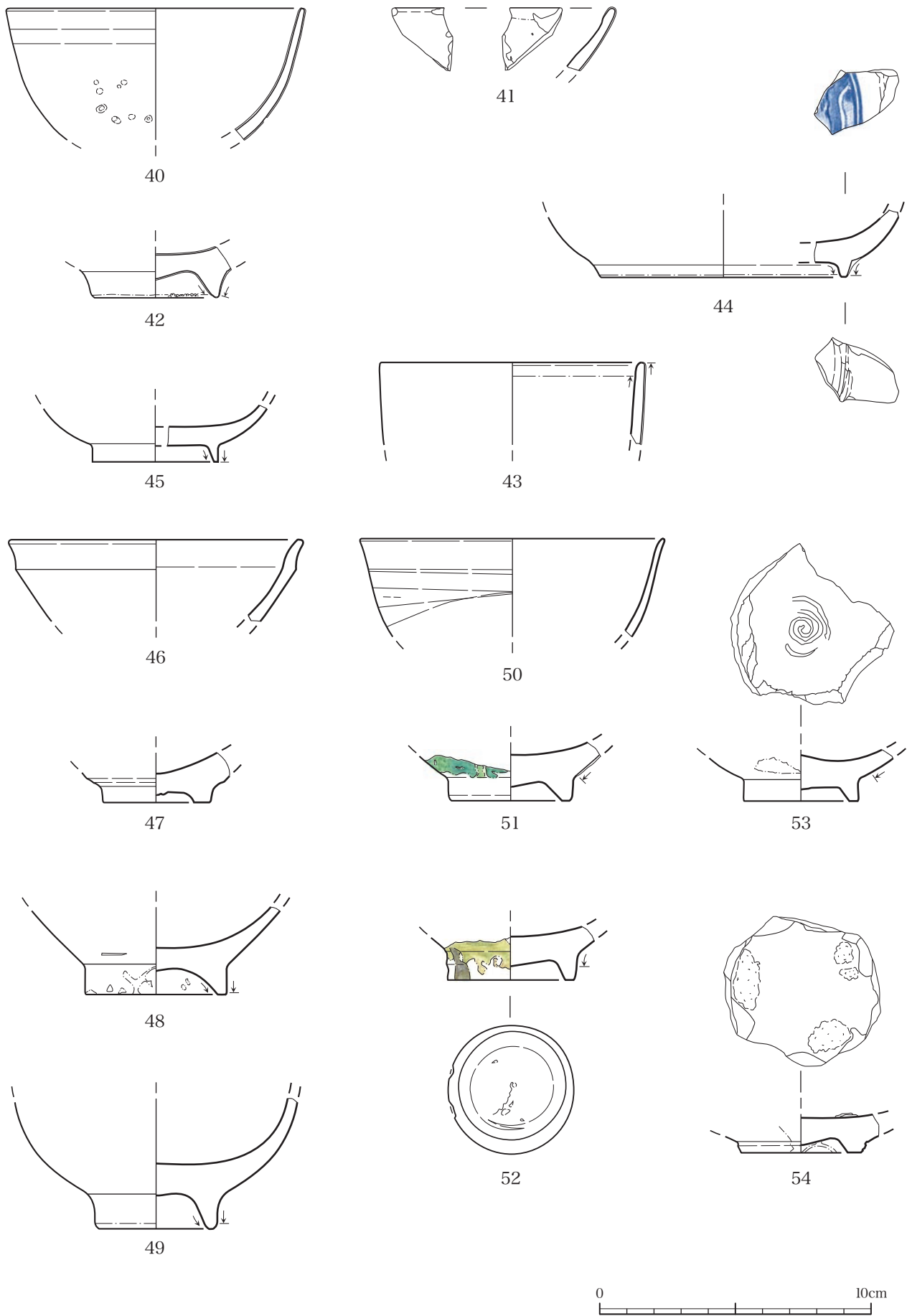


第61図 本土産陶磁器 3 (色絵)





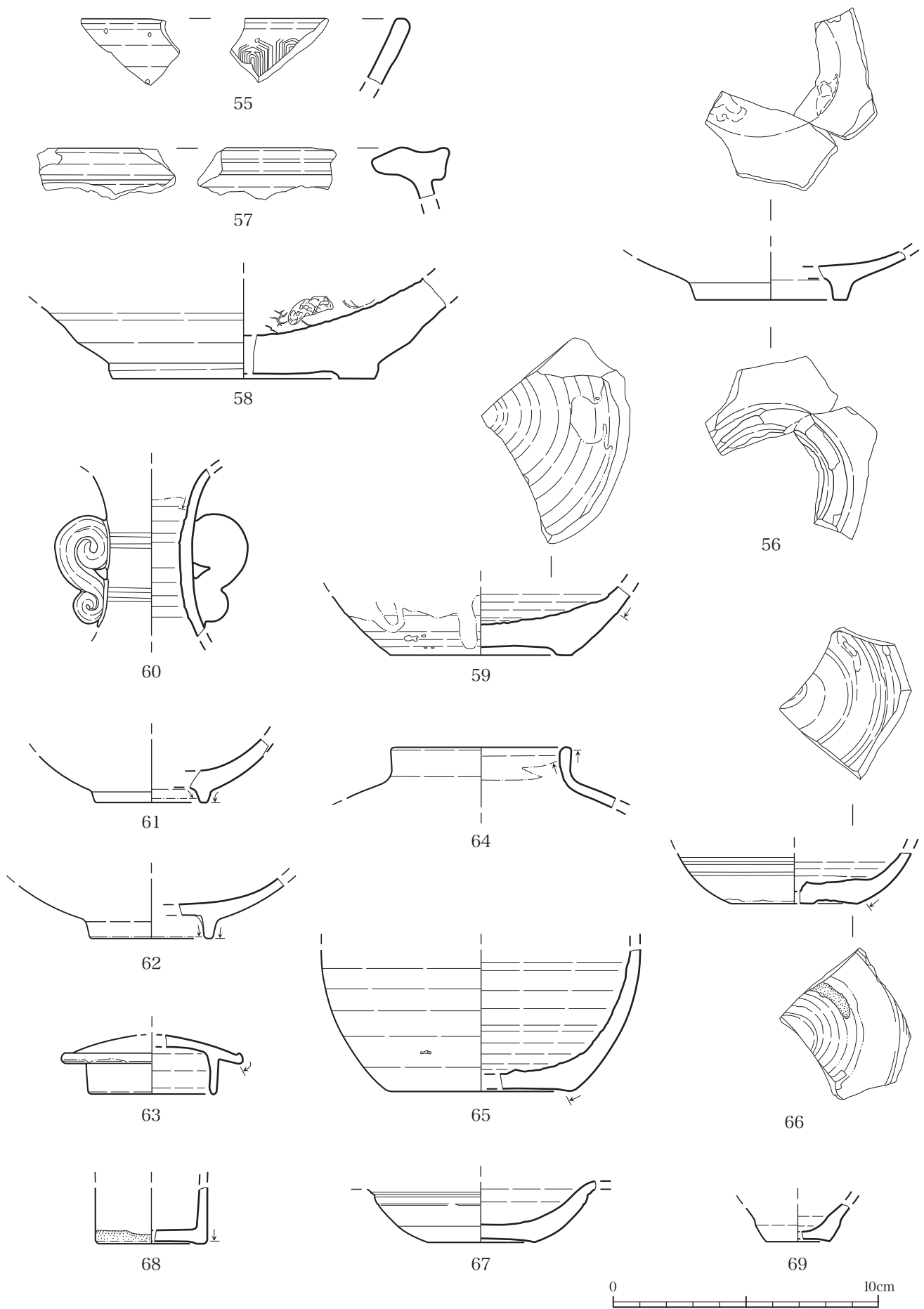
図版80 本土産陶磁器 3（色絵）



第62図 本土産陶磁器4（青磁・白磁・施釉陶器）



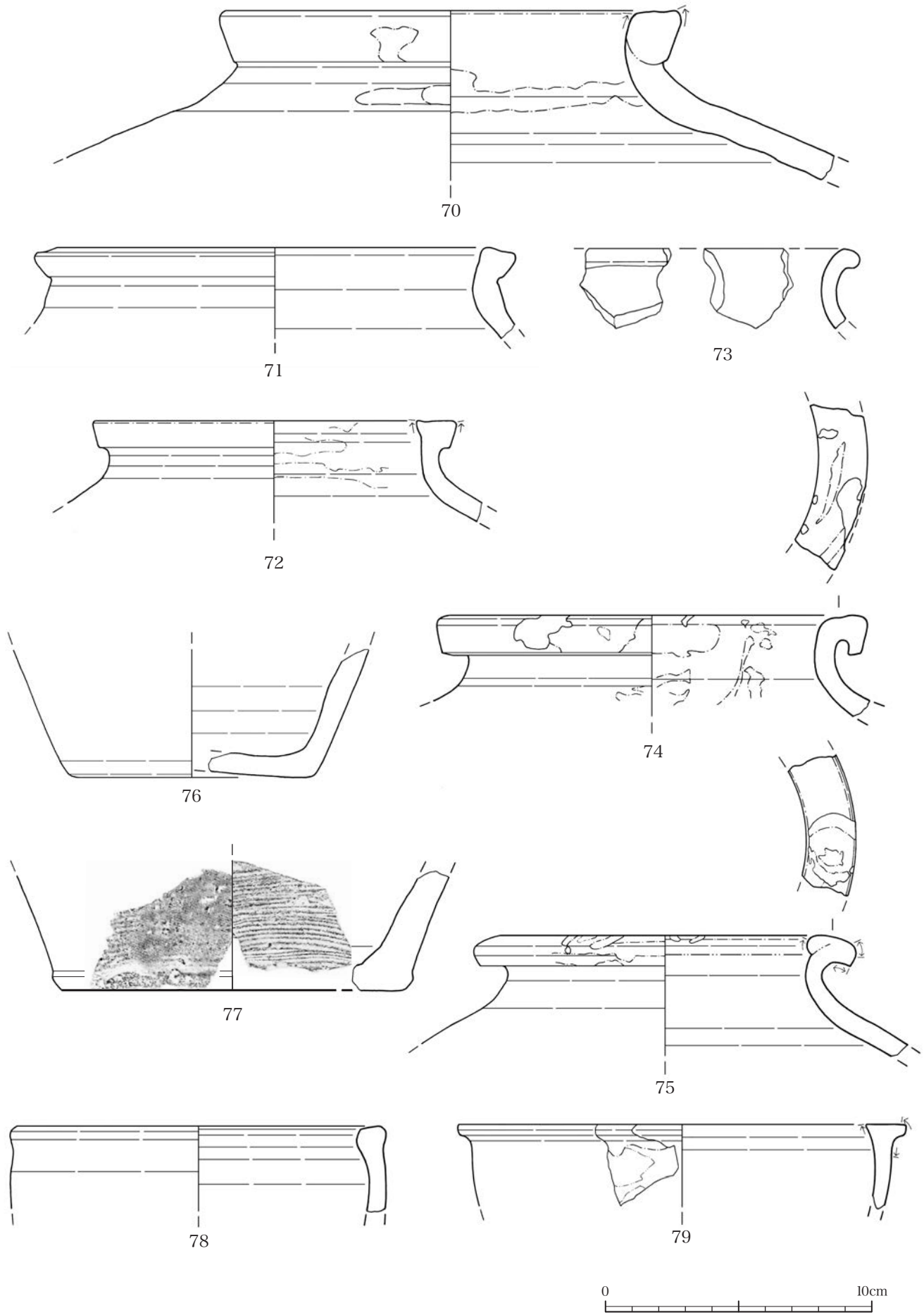
図版81 本土産陶磁器 4（青磁・白磁・施釉陶器）



第63図 本土産陶磁器5（施釉陶器）



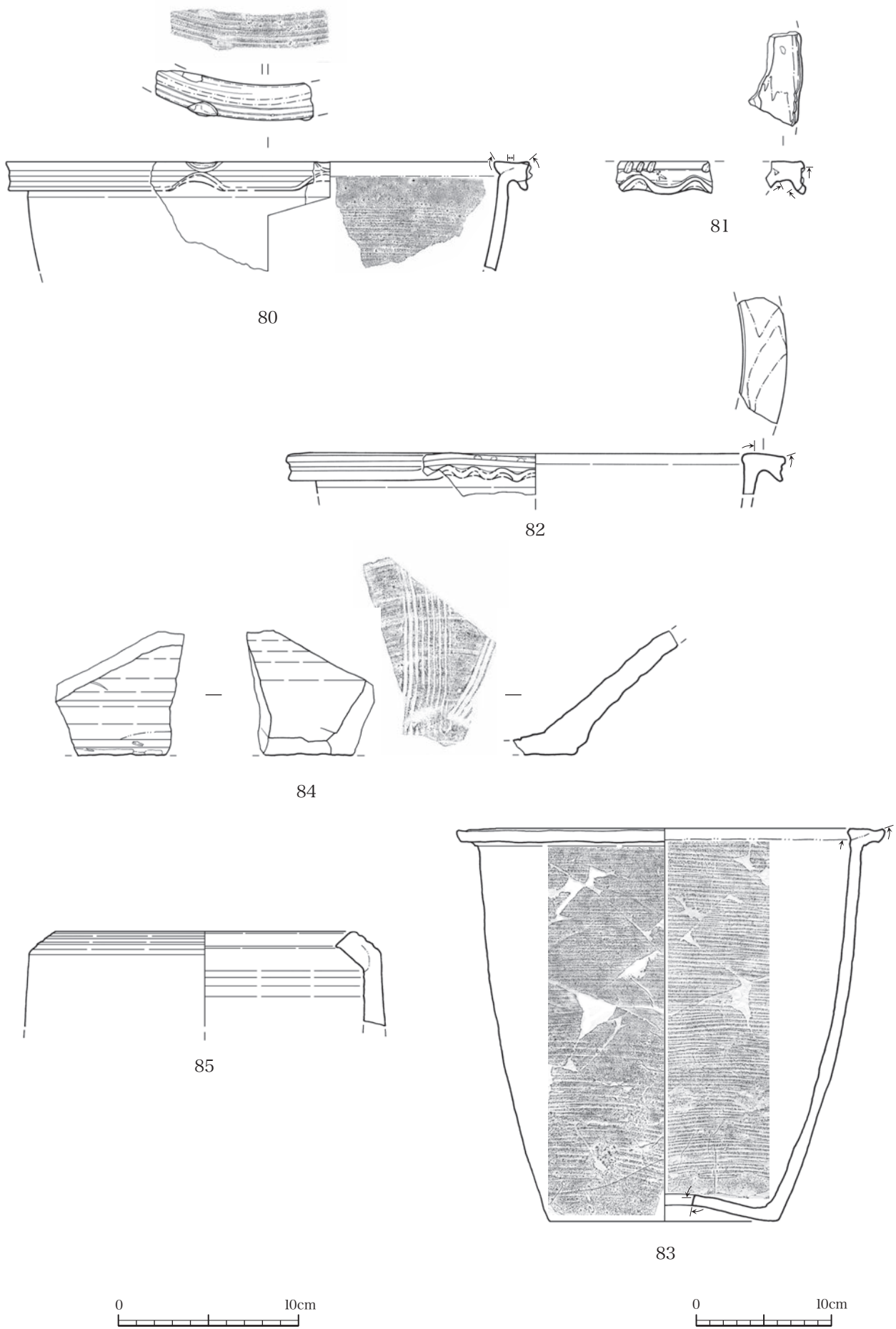
図版82 本土産陶磁器 5 (施釉陶器)



第64図 本土産陶磁器6（褐釉陶器1）



図版83 本土産陶磁器 6（褐釉陶器 1）

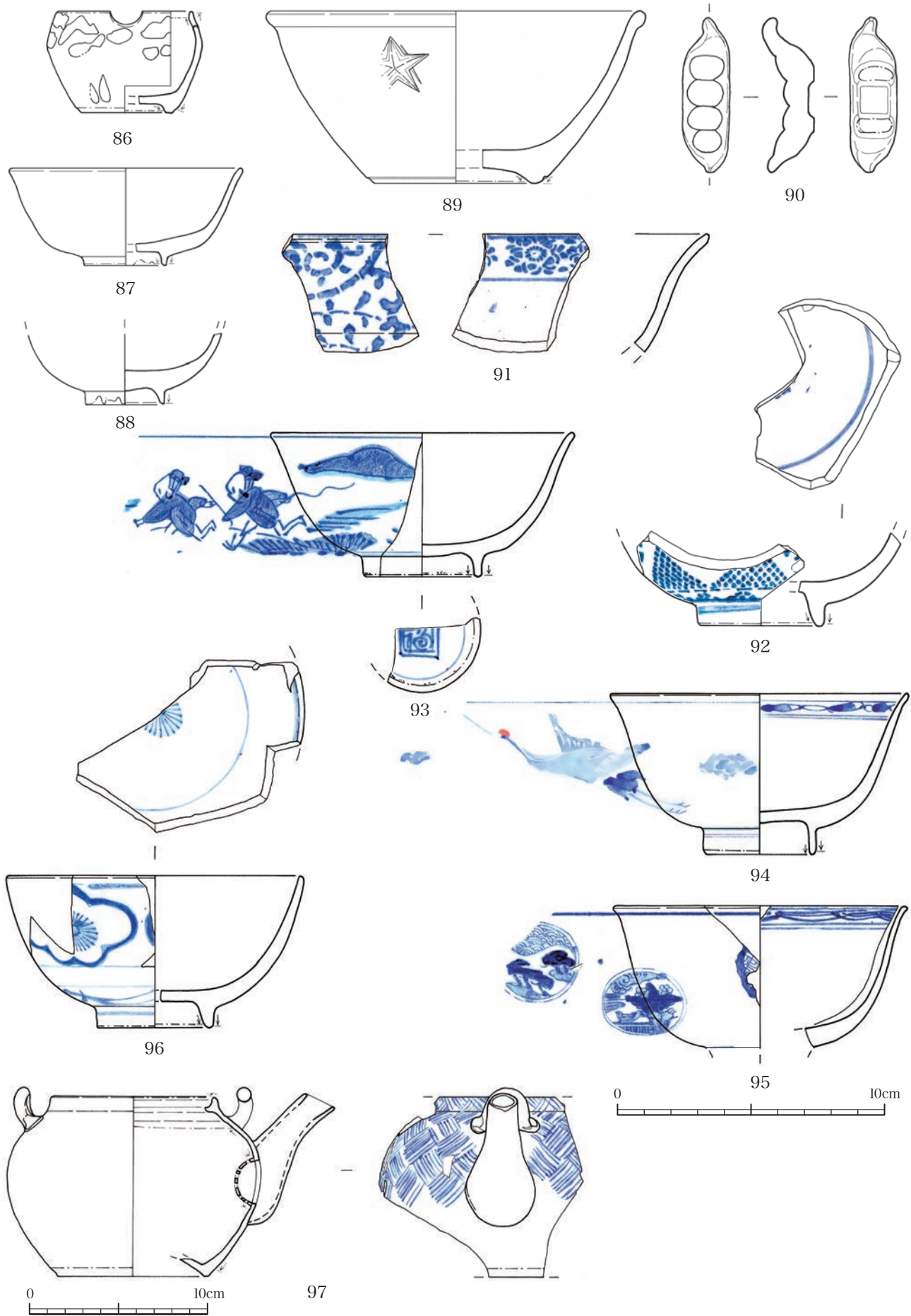


第65図 本土産陶磁器7（褐釉陶器2）





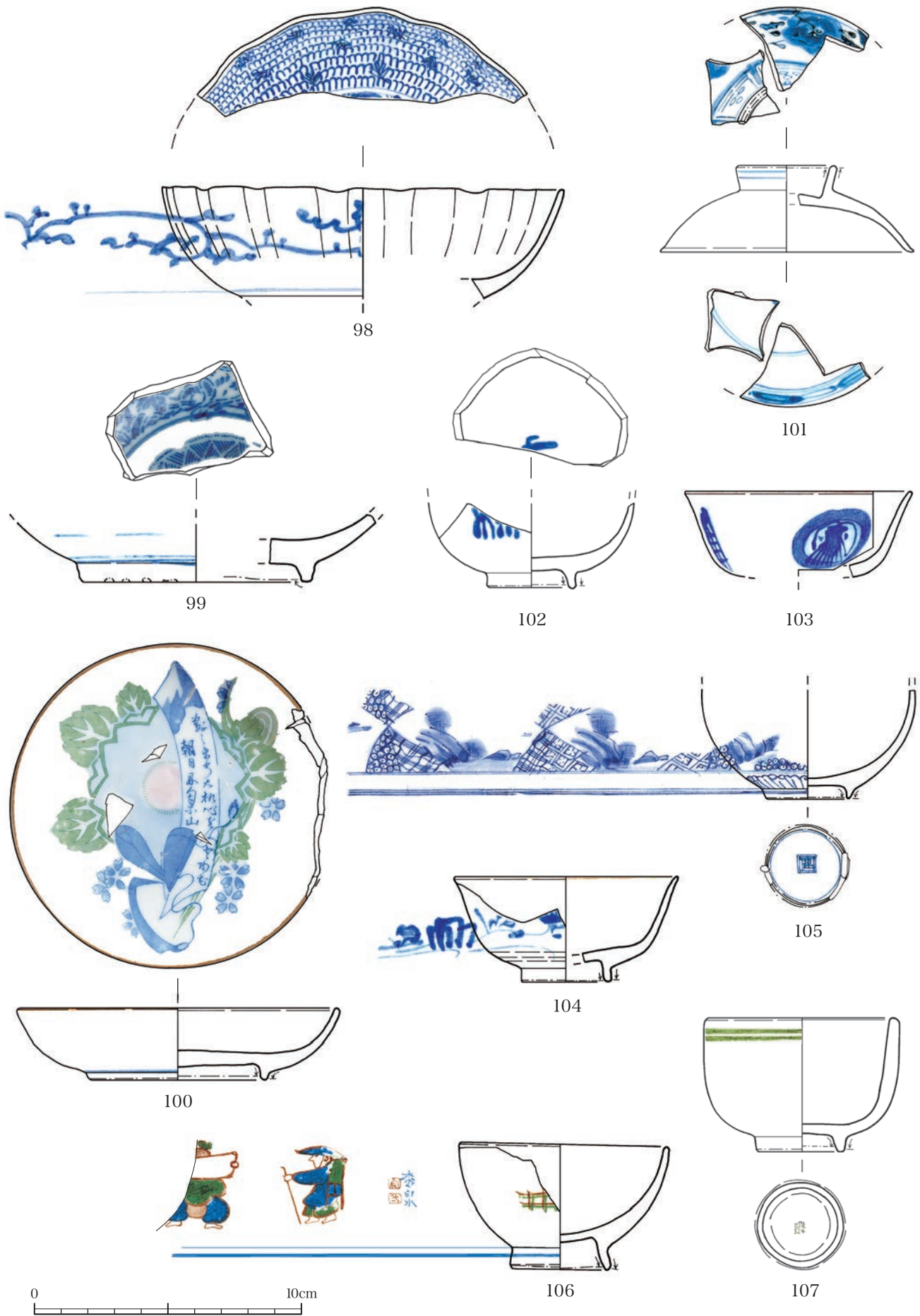
図版84 本土産陶磁器7（褐釉陶器2）



第66図 本土産陶磁器 8 (近代陶磁器 1)



図版85 本土産陶磁器 8（近代陶磁器 1）



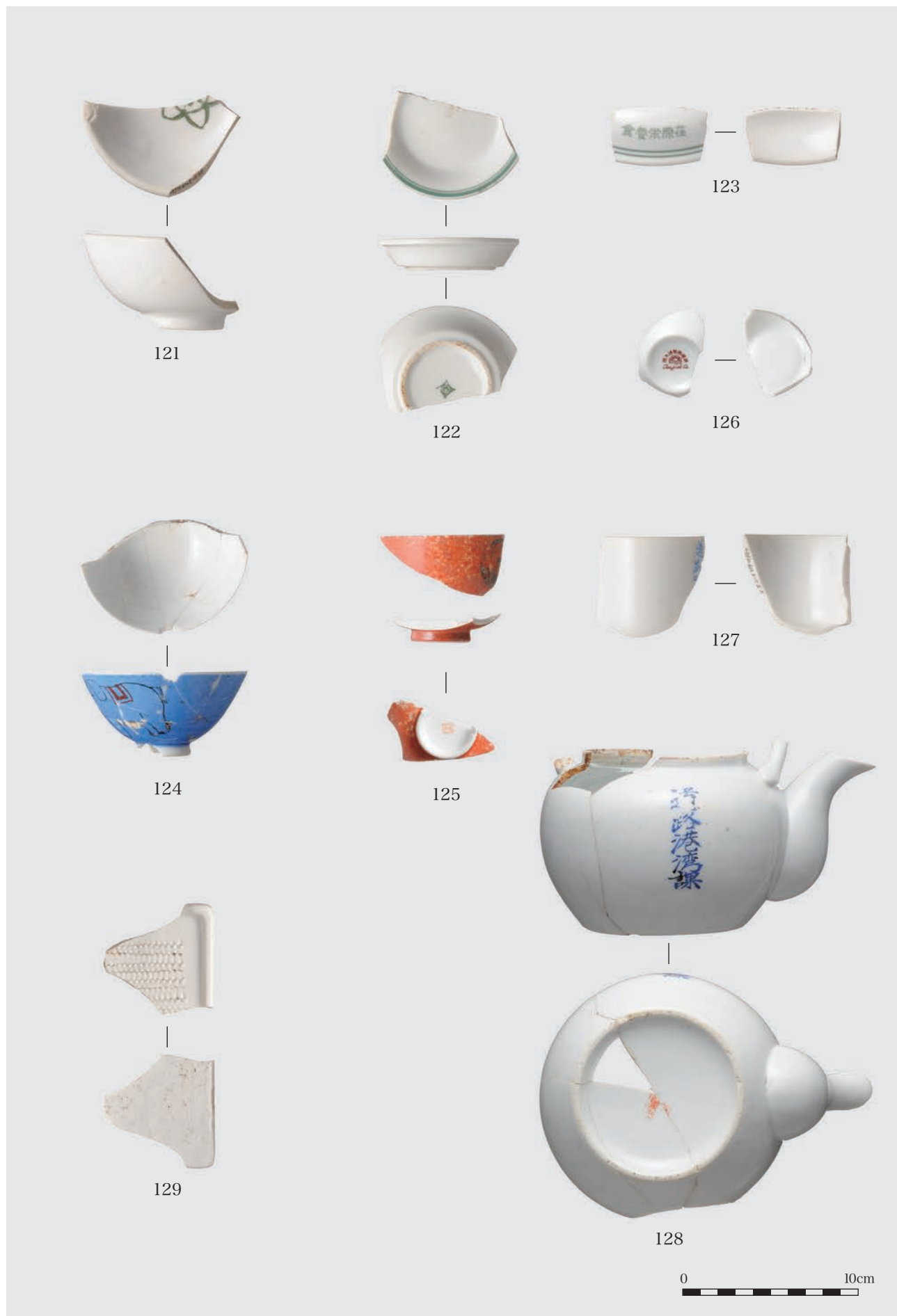
第67図 本土産陶磁器9（近代陶磁器2）



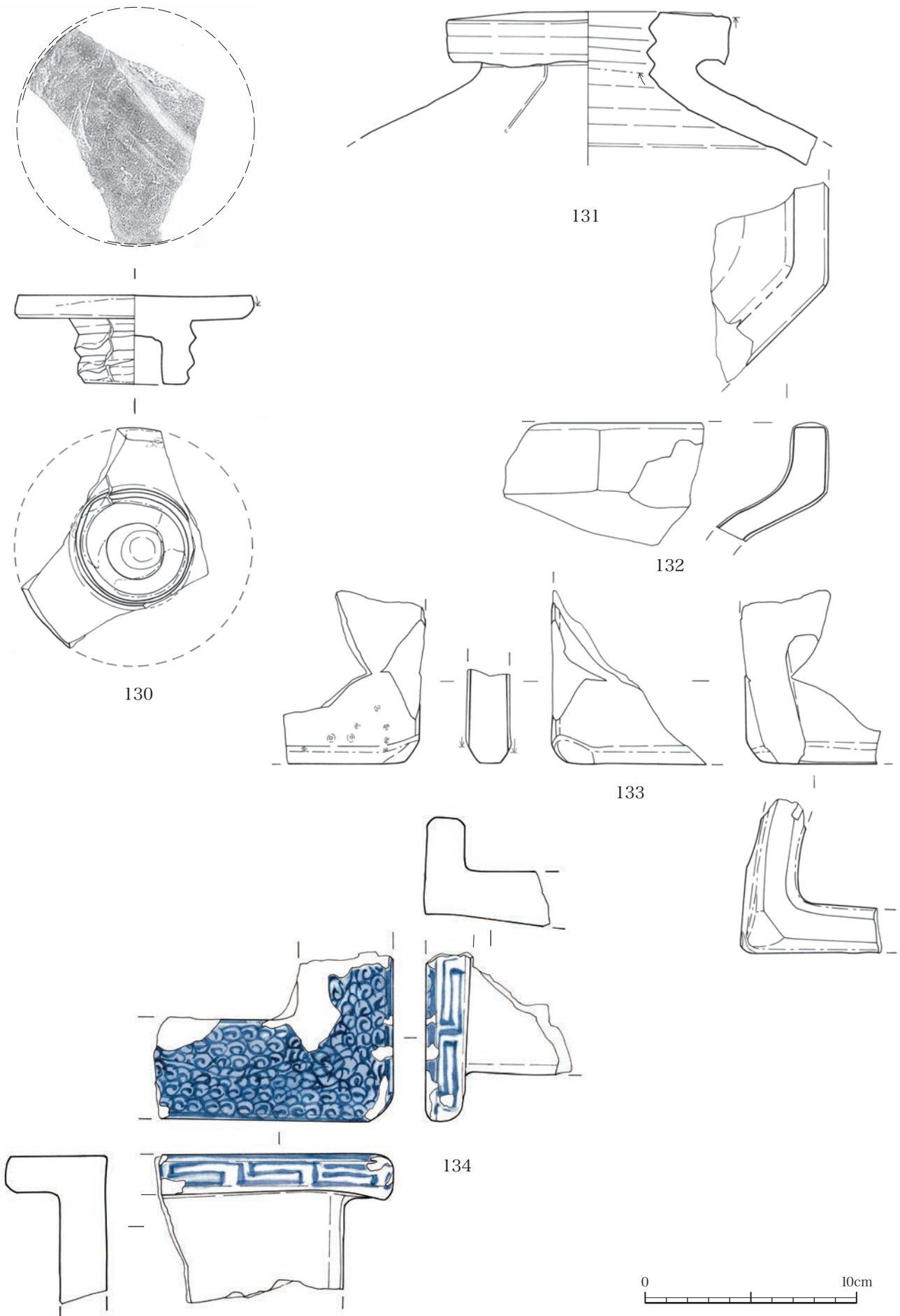
図版86 本土産陶磁器9 (近代陶磁器2)



図版87 本土産陶磁器10 (近代陶磁器3)



図版88 本土産陶磁器11（近代陶磁器4）



第68図 本土産陶磁器12 (近代陶磁器5)





図版89 本土産陶磁器12 (近代陶磁器5)

## 8 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器は6,127点が出土しており、灰釉とその他施釉に大別できる。以下にその概要を示し、詳細は観察表に記載する。

### 1. 灰釉陶器 (1～9)

灰釉陶器は碗、小碗、皿(灯明)、瓶などが得られている。碗の量は膨大で、その他製品は少ない傾向にある。碗の器形は高台断面が三角形で、直線的に口縁に伸びるタイプや、やや腰部が丸くなる碗で、灰釉を底部と見込以外に掛けるいわゆる湧田碗が多く、鉄絵が施された製品も含まれている。これに対し、小碗は胴が丸く、口唇内側に小型の玉縁を有するタイプが数点出土している。

### 2. 施釉陶器 (10～70)

灰釉以外の施釉陶器として碗、小碗、皿、小杯、鉢、瓶、水注(水滴、急須、カラカラ、アンビン)、蓋、鍋、火入れ、灯明具、餌入れ等の多種多様な製品が出土している。次に主な資料の概要を3件に分けて報告する。

#### ①碗、小碗、皿、小杯、鉢

この種は施釉陶器の中でも多く、施釉法も色絵、染付、掛け分け、白釉、いっちゃん等多様である。この中で中城御殿特有な資料として、三巴文が絵付けされた碗や小碗(11・24・25)のほか、細密な施文が施され、高台内に「中」の字が記された皿(18)をあげることができ、白色に近い緻密な土を用い、施文・施釉・焼成に至るまで丁寧に行われている。これらの類品は首里城跡でも出土しており、王府やその関係者用に製作された可能性がある。

#### ②瓶、水注(水滴、急須、カラカラ、アンビン)

瓶は大小が認められ、小型で胴が丸くなるタイプ(45・46)と大型・厚手で獣耳が付く特殊なタイプ(61)に分けることができる。水注は沖縄の酒器でカラカラと称される48とその小型は水滴として掲載した(47)。急須の出土量は蓋を含め多く(49～53・55・56)、大型急須のアンビンも一定量得られている(51・54)。

この中でも61の瓶や48のカラカラ、56の色絵急須の蓋は王府用と思われる。

#### ③鍋、火入れ、灯明具、餌入れ

鍋(57～59)や火入れ類(62～67)は多く出土しており、日常的に多用していたことを窺わせている。対して灯明具の出土は少なく(68・69)、近代になって建造された中城御殿ではすでに配電が行われ、古写真に電柱や電球などの照明具が確認できることから、これらの製品は使われなくなった可能性が考えられる。

次に鳥の餌入れである(70)。この製品は現時点で首里城やその周辺でのみ出土しており、王家や土族のたしなみとして飼い鳥の慣習が浸透していたことを窺わせている。本資料のほか、本土産陶磁器の項において報告した関西系の筒形餌入れが出土しているほか(68)、平成6(1994)年度に沖縄県立博物館が実施した中城御殿石垣工事に係る第3次発掘調査においても、筒形の沖縄産餌入れが出土している(沖縄県立博物館1995)。今回出土した資料は底部が小さく口縁が内湾する形状で、鳥籠の格子に固定するための環耳が2点並列しており、平成19年度に実施した首里城跡より出土している14世紀後半～15世紀前半に位置づけられる中国産青磁の餌入れと類似している(沖縄県立埋蔵文化財センター2010b)。両者の年代に幅があるものの、類似した製品が沖縄で製作されていることから、飼い鳥の趣味は王府時代を通して存在していたことが考えられる。

第41表 沖縄産施釉陶器観察一覧1

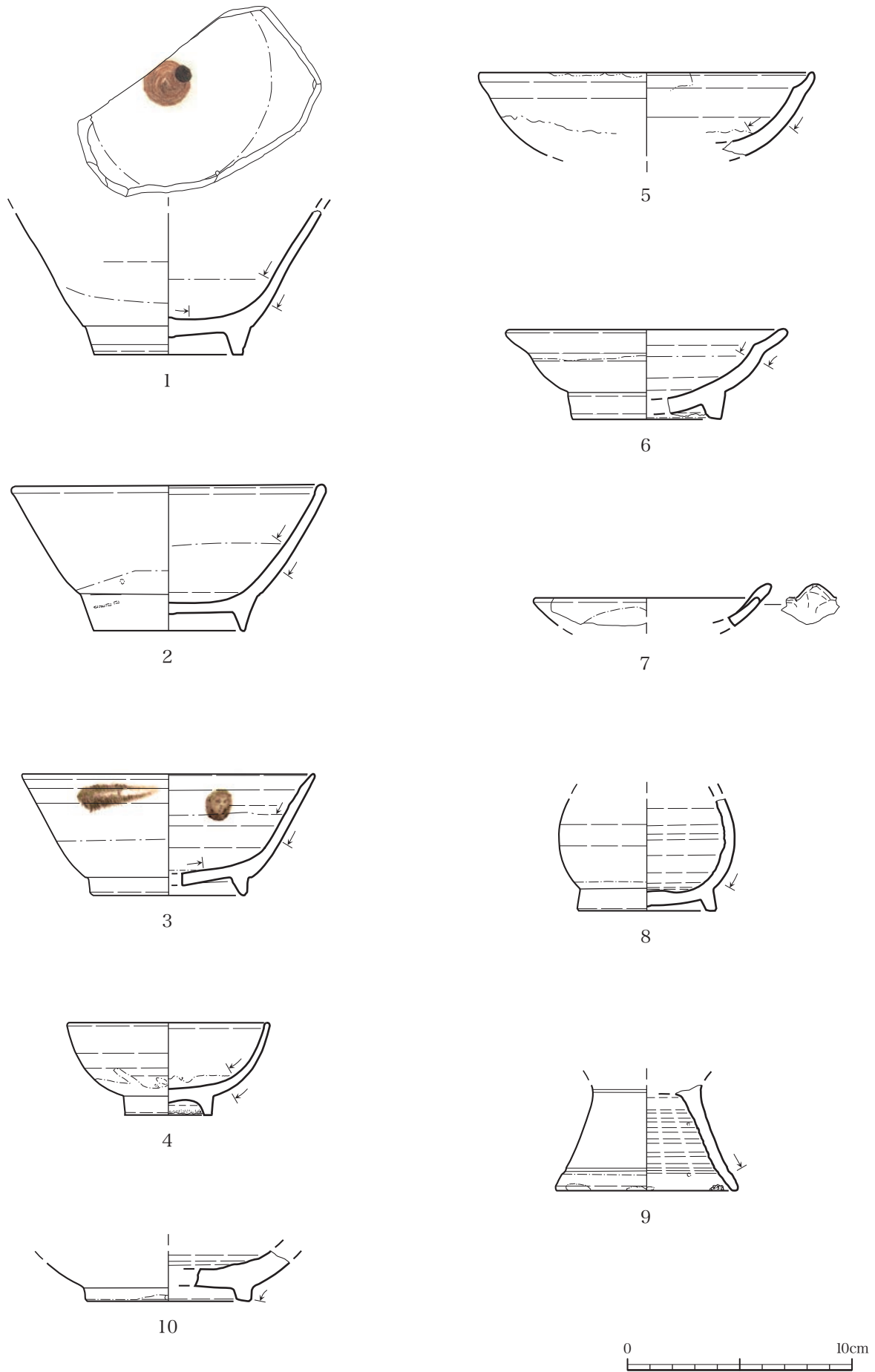
挿図番号 図版番号	番号	器種	器種	部位	法量(cm)			釉・文様 (種類・色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見	グリッド 層
					口径	器高	底径				
第69図 図版90	1	碗	直口	底	-	-	6.6	灰釉 緑灰色の半透明釉を内外胴半ばまで 掛け、内底に褐釉で径20mmの丸。	淡黄色で細 かい。	高台断面三角形の碗。	4トLE-13 IV層
	2	碗	直口	口～底	14.0	6.5	6.7	灰釉 オリーブ茶色の半透明釉を内外胴半 ばまで掛ける。	淡橙褐色で 細かい。	高台断面三角形の碗で内面 に砂目残る。	4トLE-13 I層
	3	碗	直口	口～底	13.0	5.4	7.0	灰釉 緑灰色の灰釉を内外胴半ばまで掛 け、一部鉄絵施す。内底に灰釉で径20 mmの丸。	灰白色で細 かい。	やや胴下部が丸い浅手の 碗。	1トLF-15 I層
	4	小碗	直口	口～底	9.0	4.1	3.9	灰釉 緑灰色釉を内外胴下部まで掛ける。	灰白色で細 かい。	口縁内側に玉縁で高台内丸 く成形。露胎面緋色で畳付 に砂目。	1トLF-17 表採
	5	皿	折縁	口	15.0	-	-	灰釉 灰白色釉を内外胴下部まで掛け口縁 の一部に鉄斑。	灰白～淡橙 褐色で細か い。	焼成不良で折縁の皿。	1トLF-15 I層
	6	皿	折縁	口～底	12.6	4.0	6.6	灰釉 橙白色釉を内外胴上部まで掛ける。	淡橙褐色で 細かい。	焼成不良で折縁の皿。	4トLE-13 I層
	7	皿	直口	口	10.1	-	-	灰釉 緑灰色釉を内外胴上部まで掛ける。	灰色で細か い。	施釉範囲と口縁から突き出 した突起部から灯明と思わ れる皿。	4トLE-13 III層
	8	瓶	-	底	-	-	6.2	灰釉 外面に明灰色釉を高台脇まで。	明灰色で堅 緻。	高台やや「ハ」字状に開く。 轆轤痕顕著。	I層
	9	瓶	袴状	底	-	-	8.1	灰釉 緑白色釉を高台下付近まで。	灰色で粗黒 色粒子僅 か。	高台が袴状に高く開く瓶。 畳付に砂目。	1トLF-15 I層
	10	袋物	-	底	-	-	7.4	黒釉 黒釉を厚手に高台脇まで、内面は暗 茶褐色釉薄い。	赤褐色で堅 緻。	付け高台の壺か。	1トLF-15 I層
第70図 図版91	11	碗	外反	口	15.2	-	-	色 絵 透明釉上に赤で三巴文施し二度焼。	乳白色で緻 密。	胴部丸くなる外反の碗。 口縁外面一部露胎。	3トG-H-17 III層
	12	碗	外反	口～底	13.2	5.8	6.0	染付 白化粧上にコバルトと褐釉で花文描 き、透明釉高台脇まで施し内底蛇目 釉剥ぎ。	灰白色で細 かい。	外反碗。口縁歪み、釉剥落あり。 文様上部に流れるため伏せ焼き したか。高台内と見込みに漆喰。	4トLE-17 I層
	13	碗	直口	口～底	11.8	5.5	5.3	いつちん 4mm幅の白土で内外面圏線数条と外面 に波状文施し、透明釉掛ける。畳付、 見込み蛇目釉剥ぎし白化粧巡らす。	暗灰色で細 かい。	厚手の碗で外面に窯着あ り。	4トLE-17 II層
	14	碗	外反	口～底	12.5	6.3	6.0	いつちん 白土で半菊花文描き全面に薄く白化 粧後透明釉掛け、畳付、見込み蛇目 釉剥ぎ。蛇目部白化粧巡らす。	淡赤褐色で やや軟質。	施文・施釉が雑。	4トLE-17 II層
	15	皿	直口	口～底	10.1	3.2	4.6	褐 釉 内面と外面胴下部まで褐釉掛け見込 み蛇目釉剥ぎ。	淡黄色で細 かい。	畳付に白土付着。	3トG-17 石積I皿層
	16	皿	外反	口～底	9.5	2.3	4.8	掛分 内面白化粧・透明釉施し蛇目釉剥ぎ。 外面褐釉で畳付無釉。	灰白色で細 かい。	畳付に白土・砂付着。	1トLF-17 石積2IIb層
	17	皿	直口	口～底	9.8	2.6	5.0	掛分 内面白化粧・透明釉施し蛇目釉剥ぎ。 外面褐釉・黒釉で畳付無釉。	灰色で細か い。	波縁の皿。口唇は平坦。	4トLE-13 III層
	18	皿	直口	口～底	15.2	5.0	8.4	染付 口唇鉄銹。呉須で内面胴に印判で微塵 唐草、線刻鋸歯状圏線内に花、見込みに 三友文線刻した上に呉須。外面は蜻 唐草巡らせ高台内に「中」の楷書。高台 脇と外面に浅い沈線巡らす。内外面透 明釉で蛇目凹形高台無釉。	灰白色で堅 緻。	波縁の皿。畳付を浮かせて 焼成する蛇目凹形高台で チャツ痕あり。見込み中央 に圏線施文時の支点と思わ れる凹み残る。19世紀前半 の肥前磁器を模倣か。	3トG-H-17 I層
	19	皿	直口	口～底	13.8	5.1	7.8	染付 口唇鉄銹。呉須で内面菊花と植物を ラフに描く。内外面透明釉で蛇目凹 形高台、畳付無釉。	淡橙褐色で 軟質。	波縁の皿。蛇目凹形高台だが 畳付も無釉で、見込みに目跡 あり。肥前磁器を模倣か。	表採
第71図 図版92	20	小碗	外反	口	8.0	-	-	透明 内外面光沢ある透明釉薄く均質。	白色で緻 密。	硬質で薄手、丁寧な造り。	4トLE-17 III層
	21	小碗	-	底	-	-	4.5	透明 内面光沢ある透明釉。内底印花深め に施文。	白色で緻 密。	硬質で丁寧な造り。高台内 に砂目。	2ト北拓 H-14IIb層
	22	小碗	外反	口～底	10.1	4.9	4.6	掛分 内面灰釉掛け蛇目釉剥ぎ。外面高台 内側まで褐釉掛け口縁及び畳付無 釉。	黄白色でや や軟質。	見込みに砂目痕。	4トLE-13 IV層
	23	小碗	-	底	-	-	3.8	掛分 内面緑灰釉掛け蛇目釉剥ぎ。外面高 台脇まで褐釉掛け畳付に白土。	黄白色でや や軟質。	高台内に墨書あり。	1トLF-13 I層
	24	小碗	直口	口～底	7.9	4.4	3.4	染付 全面に透明釉掛け畳付釉剥ぎ。 胴にコバルトで三巴文。	白色で緻 密。	硬質で丁寧な造り。	4トLE-15溝 6内IIb層

第41表 沖縄産施釉陶器観察一覧2

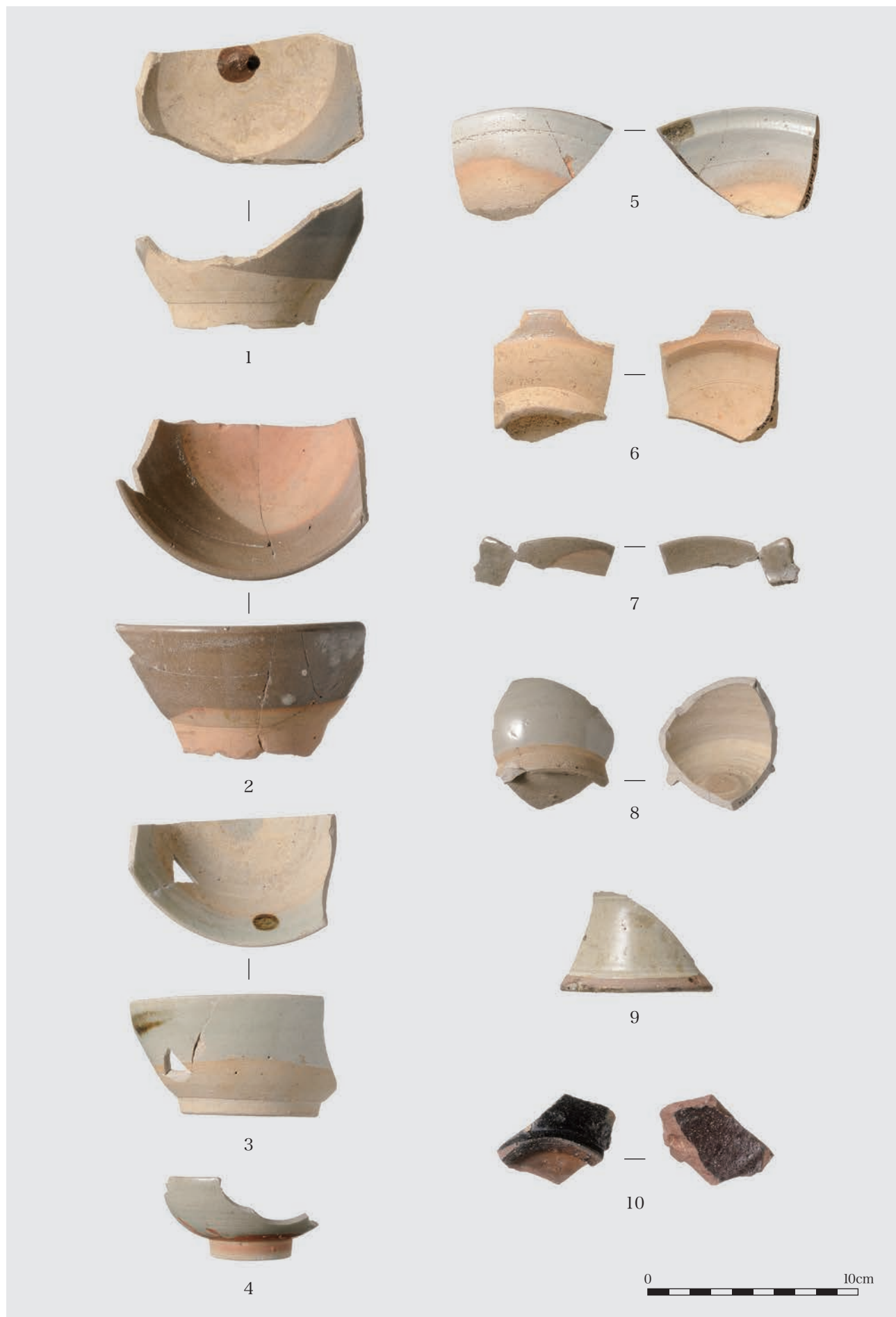
挿図番号 図版番号	番号	器種	器種	部位	法量(cm)			釉・文様 (種類・色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見	グリッド 層
					口径	器高	底径				
第71図 図版92	25	小碗	-	底	-	-	3.8	染付 全面に透明釉掛け畳付け釉剥ぎ。 胴に三巴文線刻しコバルト塗布。	白色で緻密。	硬質で丁寧な造り。	1トF-17 石積2IIB層
	26	小碗	外反	口〜底	8.6	4.5	3.8	染付 全面白釉で畳付け釉剥ぎ、白土塗布。 見込にコバルトで菊花文。	白色でやや軟質。	造りは丁寧だが高台内に窯割れ痕あり。	3トG・H-17 III層
	27	小碗	外反	口〜底	8.5	4.5	3.8	白釉 全面厚い白釉で見込蛇目・畳付け釉剥ぎで白土塗布。	淡茶褐色でやや軟質。	外面21面に面取り。	1トF-17 石積2III層
	28	小碗	直口	口〜底	7.8	4.5	3.2	色絵 全面に透明釉掛け畳付け釉剥ぎ。 外面に赤青黄の上絵で雲気文、亀、波濤文か。	白色で緻密。	被熱するが硬質で丁寧な造り。	2トH-15 II b層
	29	小碗	-	底	-	-	3.6	色絵 全面に透明釉掛け畳付け釉剥ぎ。 外面高台側面まで赤黄の上絵で野菜文乗せ、黄色上に黒で細描の葉脈。	白色で緻密。	硬質で丁寧な造り。	1トF-14 I層
	30	小杯	外反	口〜底	3.5	1.9	1.1	透明 全面に透明釉掛け高台内・畳付け釉剥ぎ。	灰白色で緻密。	硬質で丁寧な造り。	4トE-13 I層
	31	小杯	直口	口〜底	4.6	2.4	2.2	透明 透明釉内面と外面高台脇まで。	灰白色で緻密。	硬質で丁寧な造り。	4トE-16 I層
	32	小杯	-	底	-	-	1.8	透明 半透明釉内面と外面高台側面まで。	灰白色で緻密。	硬質で丁寧な造り。高台内角は丸く削る。	4トE-13 I層
第72図 図版93	33	鉢	鐙縁	口〜底	27.7	13.1	11.2	褐釉 内外面・高台内褐釉で見込蛇目釉剥ぎ後、蛇目部鉄銹巡らせる。高台側面に釉で指痕。	淡黄白色でやや軟質。 露胎部緋色。	縁が外に下がる形状の鉢。見込磨滅著しい。捏ね鉢として使用か。	3トG・H-17 III層
	34	鉢	鐙縁	口〜底	30.4	13.4	10.6	掛分 内面厚い白釉で見込蛇目釉剥ぎ。外面高台側面までと高台内に褐釉。畳付けに白土。	淡黄白色でやや軟質。	縁が外に下がる形状の鉢。見込蛇目内に目痕あり。	1トF-20 I層
	35	鉢	鐙縁	口	30.6	-	-	掛分 口唇〜内面マツな白釉、外面厚い褐釉。	灰褐色で細かい。	縁幅広い鉢口縁。	4トE-13 I・IV層
	36	鉢	端反	口〜底	23.6	7.7	10.55	鉄絵 内面灰釉に蛇目釉剥ぎし胴・見込に鉄釉の点を円形に列す。外面褐釉。	淡黄白色でやや軟質。	端反りの鉢。露胎部緋色。	1トF-15 III層
	37	鉢	端反	口	27.6	-	-	灰釉 内外面白濁する灰釉。	灰褐色で細かい。	端反りの鉢で口唇部平坦。	4トE-13 I層
第73図 図版94	38	鉢	内湾	口〜底	25.4	11.5	11.5	瑠璃釉 白化粧後に全面瑠璃釉施し畳付け釉剥ぎ。	灰色で細かい。	口唇丸く内湾する鉢で被熱。高台幅広いが外側のみ接地。	2トI層
	39	鉢	内湾	口〜底	28.0	13.4	13.1	掛分 口唇〜内面白釉で蛇目釉剥ぎ、コバルト飛斑あり。外面褐釉、口唇畳付け無釉で白土。	淡黄白色でやや軟質。	口唇丸く内湾する鉢。見込蛇目釉剥ぎ内に目痕あり。	1トF-20 I層
	40	鉢	輪花	口〜底	23.2	14.4	9.8	緑絵 高台内以外の内外面白化粧し緑釉の点で丸文。全面透明釉施し見込蛇目・畳付け釉剥ぎ後白土塗布。	淡黄白色でやや軟質。	口縁波縁外反の鉢。焼成前高台内外から1ヶ所穿孔。見込蛇目釉剥ぎ内に目痕。	4トE-13 IV層
	41	鉢	-	底	-	-	10.9	掛分 内面白釉後蛇目釉剥ぎ。外面全面黒釉施釉後畳付け釉剥ぎし白土塗布。	灰色で細かい。	高台高い鉢。見込蛇目釉剥ぎ内に目痕。	1トF-17 II層
	42	鉢	-	底	-	-	15.2	掛分 内面白釉、外面緑釉厚く、高台内褐釉で畳付け無釉。	淡黄白色でやや軟質。	胴が内傾する厚手の鉢。見込白釉に砂着着。	1トF-16 I層
	43	鉢	直口	口	15.4	-	-	褐釉 内外面褐釉。	淡黄白色でやや軟質。	型造りの可能性。粗い造りの腕。軍用食器か。	4トE-17 II層
	44	鉢	内湾	口〜底	15.2	4.5	11.0	褐釉 内外面褐釉で外面胴下部まで。	灰色で粗い。	口唇丸く高台・脚の無いべた底の浅鉢。	1トF-17 II層
第74図 図版95	45	瓶	鐙縁	口	5.0	-	-	褐釉 外面〜頸部内面まで褐釉。	灰白色で細かい。	口縁開き口唇は上に尖る。内面轆轤痕著者。	1トF-17 石積2IIB層
	46	瓶	-	底	-	-	4.9	褐釉 外面胴下部に褐釉、内面に滴。	灰白色で細かい。	高台内角を丸く削る。高台内外に砂目跡。	I層
	47	水注	水滴	口〜底	2.9	6.0	3.8	白釉 外面白釉に注口基部に緑釉。口縁緑釉。	暗茶褐色で緻密。	形状カラカラだが小降りのため水滴と思われる。底面窯割れ。胴径7.4cm。	3トG・H-17 I層
	48	水注	カラカラ	口〜胴	-	-	-	色絵 白土で雲龍文貼り付けしてコバルト鉄釉褐釉で彩色後、透明釉掛ける。	器部灰色で緻密。貼り付け部明灰白色で緻密。	注口部に白土で龍の頭部を貼り付けし、口から酒を注ぐ意匠。胴径12.2cm。	3トI層
	49	急須	-	口〜胴	7.4	-	-	紫泥 無文・無釉。	暗灰色・赤褐色の2層で粗め。	紫泥風の急須口縁部。把手の痕跡あり。	1トF-18 石積1III層

第41表 沖縄産施釉陶器観察一覧3

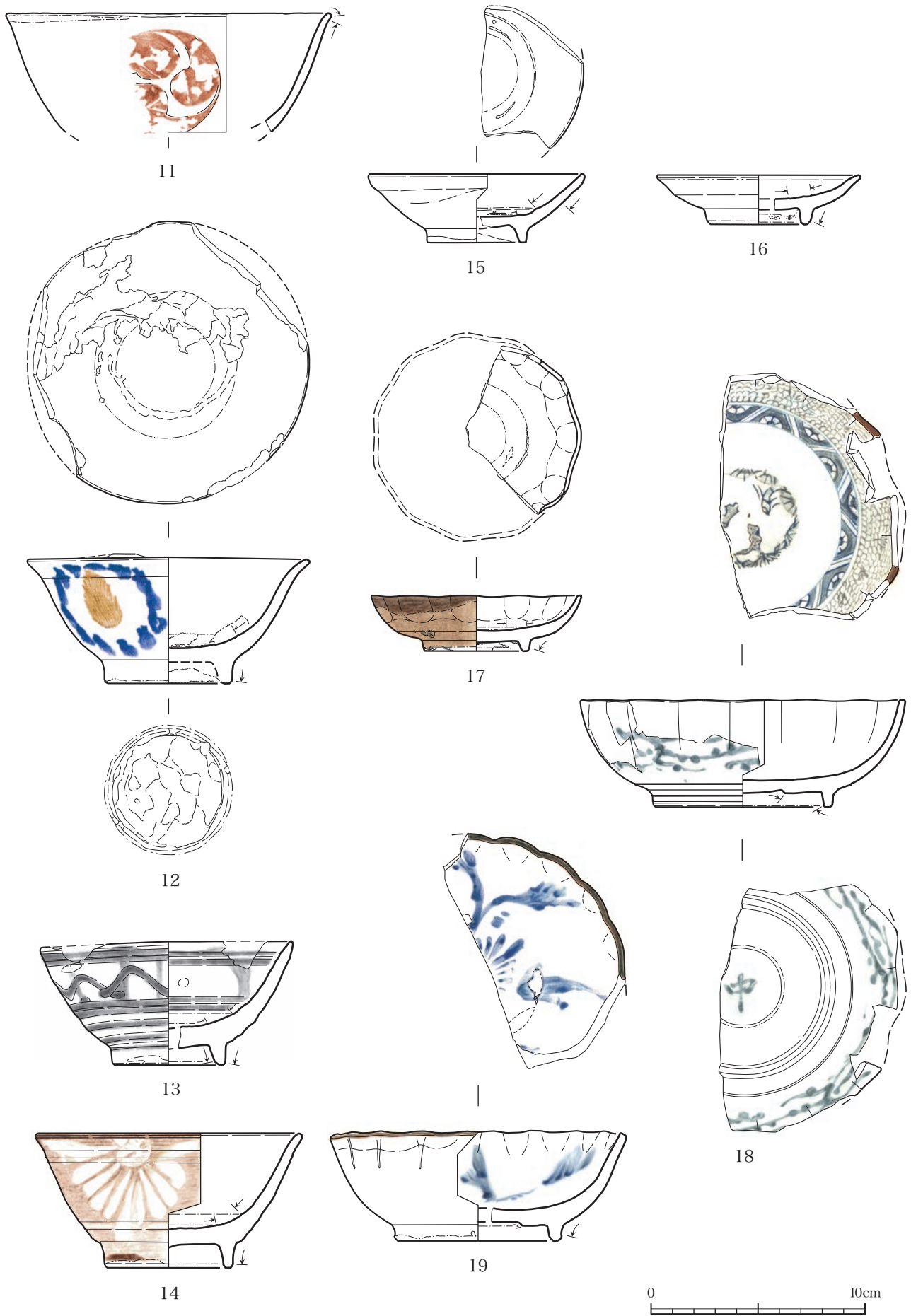
挿図番号 図版番号	番号	器種	器種	部位	法量(cm)			釉・文様 (種類・色・範囲)	素地 (色・質・混和材)	所見	グリッド 層
					口径	器高	底径				
第74図 図版95	50	急須	-	口~胴	7.4	-	-	色絵 全面白化粧し線刻により圏線及び区画・斜線を施してコバルト・緑釉・褐釉をさす。外面透明釉で口唇釉剥ぎ。	淡黄白色でやや軟質。	注口部は胴に2点の孔開ける。釣り手部は型造りして貼り付け。	1トF-17 石積2Ⅲ層
	51	急須	アンピン	口~底	11.7	15.3	10.3	黒釉 外面高台側面まで厚く黒釉で口唇釉剥ぎ。高台内、内面胴部に薄く黒釉塗りつけ。	灰色で細かい。	注口部は胴に孔1点。断面半月状の把手は胴上部に貼り付け。内底に小型製品の窯着痕あり。	3トG-H-17 Ⅲ層
第75図 図版96	52	蓋	急須	撮~袴	7.6	3.0	5.2	褐釉 刷毛目状に薄く白土巡らせ、褐釉端部まで施す。	淡赤褐色で粗く白砂含みや軟質。	粗い造りの蓋。撮頂部に窯着痕。	4トE-17 Ⅱ層
	53	蓋	急須	庇~袴	6.7	-	5.1	褐釉 上面端部まで褐釉。	淡黄白色でやや軟質。	急須の蓋か。撮欠失し傍に孔。	1トF-17 石積2Ⅲ層
	54	蓋	アンピン	撮~袴	11.9	4.7	8.6	黒釉 上面端部まで黒釉。庇下面端部3ヶ所に白土塗布。	淡黄白色で緻密。	アンピンの蓋か。宝珠形の撮。	1トF-15 石組1Ⅲ層
	55	蓋	急須	庇~袴	5.2	-	3.9	印花 上面に黒象嵌状の印花を巡らせ透明釉掛ける。	淡黄白色で緻密。	急須の蓋か。撮欠失し傍に孔。	4トE-17 Ⅰ層
	56	蓋	急須	撮~袴	6.45	2.2	5.2	色絵 全面透明釉施釉後、畳付釉剥ぎ。上面に青の圏線、赤・黄の雲気文を上絵描き。	白色で緻密。	急須の蓋か。造り・施釉・施文ともに丁寧。	2トH-15 Ⅱb層
	57	蓋	鍋	庇	-	-	14.4	灰釉 灰釉を内外面端部のみ。	淡橙色で軟質。	鍋の蓋と思われる。端部丸く成形。	4トE-13 Ⅲ・Ⅳ層
	58	鍋	双耳	口~胴	17.4	-	-	灰釉 マットな泥砂か灰釉を内面口縁以外と外面口縁~胴中央まで。	淡橙褐色で粗く白砂多く含み軟質。	薄手の土鍋。胴は丸く口縁鏝縁で端部に紐状の耳。胴下部に煤付着。胴径18.4cm。	4トE-13 Ⅳ層
	59	鍋	双耳	口~胴	15.6	-	-	灰釉 光沢ある灰釉を外面口縁~胴中央まで掛け、内面薄く口縁下に掛ける。	淡橙褐色で粗く白砂多く含み軟質。	薄手の土鍋。胴は丸く口縁鏝縁。胴下部に煤付着。胴径15.8cm。	4トE-13 Ⅲ層
	60	甕	外反	口~底	35.2	26.0	30.5	掛分 内面白釉、見込に三巴文線刻し枠内に褐釉。外面黒釉厚く掛け、畳付薄く塗る。畳付無釉。	淡橙色で細かい。	厚手の施釉甕。頸部窄まり胴で膨らむ。形に丸文貼り付け。漆喰付着。	1トF-20 Ⅰ層
	61	瓶	獸耳	胴~底	-	-	22.0	黒釉 外面底部脇まで黒釉厚く掛け、内面柿釉薄く掛ける。胴中央付近に獅子頭の獸耳貼付。底部無釉。	淡灰色で細かい。	ベタ底で胴が直立し、肩が斜位に折れる厚手の瓶。内面轆轤痕顕著。獸耳内中空。	1トF-20 Ⅰ層
第76図 図版97	62	火入	直口	口~底	11.8	8.9	7.6	褐釉 褐釉を口縁内~腰部まで掛ける。外面口縁下と腰部に沈線巡らす。	淡橙色で細かい。	内面胴以下に灰の痕跡。口唇に細かい傷。高台内に墨書あり。	3トG-H-17 Ⅲ・Ⅰ層
	63	火入	直口	底	-	-	10.0	象嵌 線刻で圏線・沈線及び梅文印花し白土を象嵌後、灰釉腰まで掛ける。	灰色で細かい。	筒型の火入れで底部斜位に成形。露胎部緋色。胴径11.6cm。	4トE-13 Ⅳ層
	64	火入	直口	底	-	-	5.6	褐釉 褐釉外面高台脇と高台内に施釉。	淡橙色で細かい。	小型の火入れか。内面無釉で轆轤痕顕著。	4トE-13 Ⅳ層
	65	香炉	鏝縁	口	17.4	-	-	鉄釉 鉄釉を口縁内面~外面まで施釉。	灰色で細かい。	薄手香炉。頸部下の窯割れ部で破損か。	4トE-13 Ⅲ層
	66	火炉	直口	口	16.0	-	-	黒釉 黒釉を外面と内面口縁下まで掛け口唇釉剥ぎで白土塗布。外面口唇下に2条の沈線巡らす。	淡黄色で細かい。	筒型の火炉で口縁内側に平面三角形の突起貼付。口唇摩擦減激しい。	3トG-H-17 Ⅲ層
	67	火炉	内湾	口	13.8	-	-	黒釉 光沢ある黒釉を外面と内面口縁下まで。外耳は獸面か。	灰白色で細かい。	内湾する火炉で口縁内側に突起貼付し、胴には横位に耳貼付。	3トG-H-17 Ⅲ層
	68	灯明	内湾	口~底	5.2	4.8	4.4	褐釉 マットな褐釉を内面と外面高台脇まで。	淡橙色で細かくやや軟質。	高足の内湾する乗燭。灯芯を支える突起は欠失。胴径6.2cm。	4トE-13 Ⅳ層
	69	灯明	高足	胴	-	-	-	掛分 下部に褐釉掛け、内面と上部に緑釉を掛け分け。	灰白色~淡橙色で細かい。	高足の乗燭脚部。灯芯を支える突起に基部が残る。最小径2.8cm。	1トF-17 石積2Ⅲ層
	70	餌入	内湾	口~底	4.1	2.7	2.0	透明 透明釉を内面と外面胴下部まで。	白色で緻密。	環耳2点を並列する内湾形状。基筒底。環耳孔径3.7mm。	3トG-17 Ⅲ層



第69図 沖縄産施釉陶器 1



図版90 沖繩産施釉陶器 1

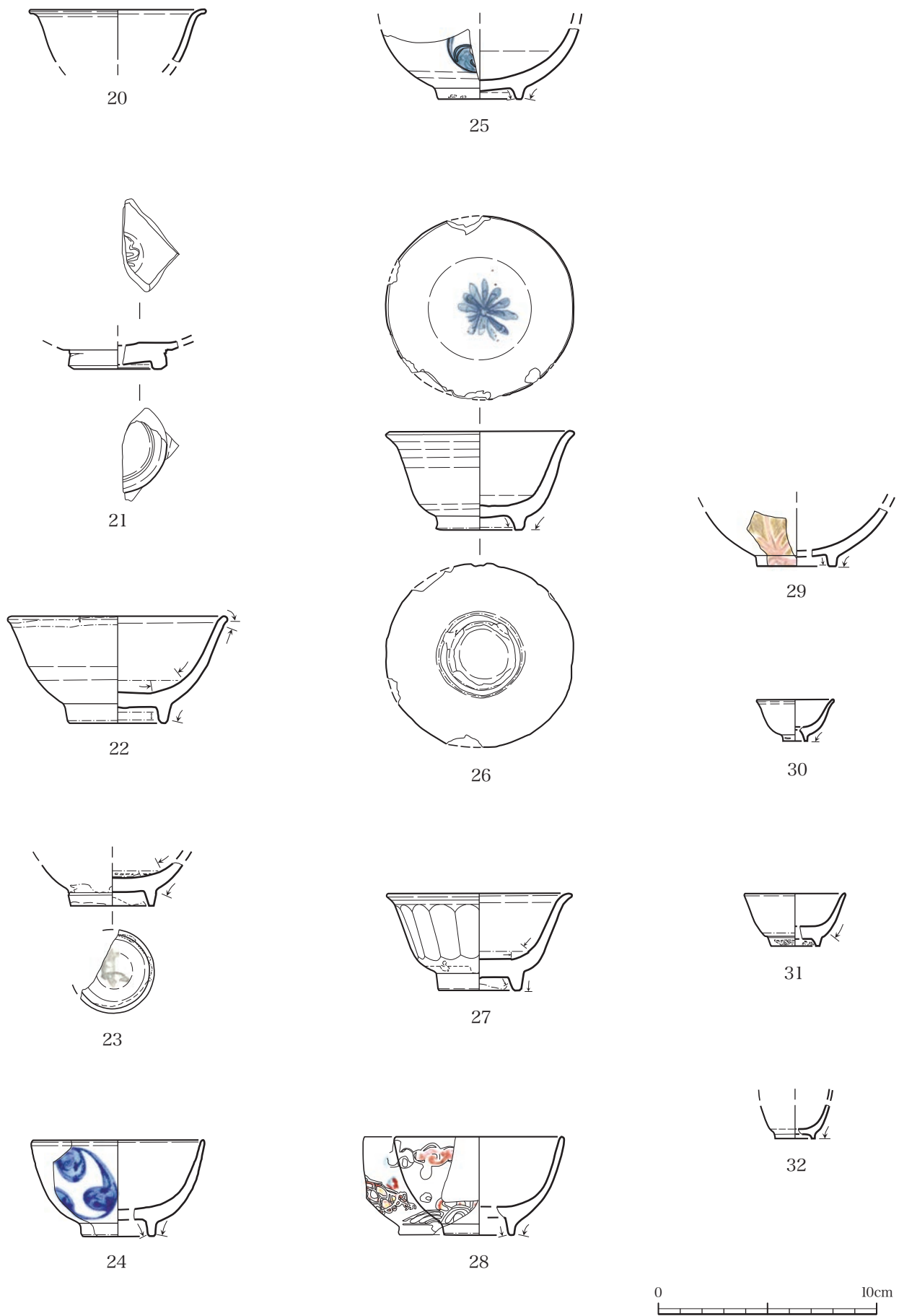


第70図 沖縄産施釉陶器 2





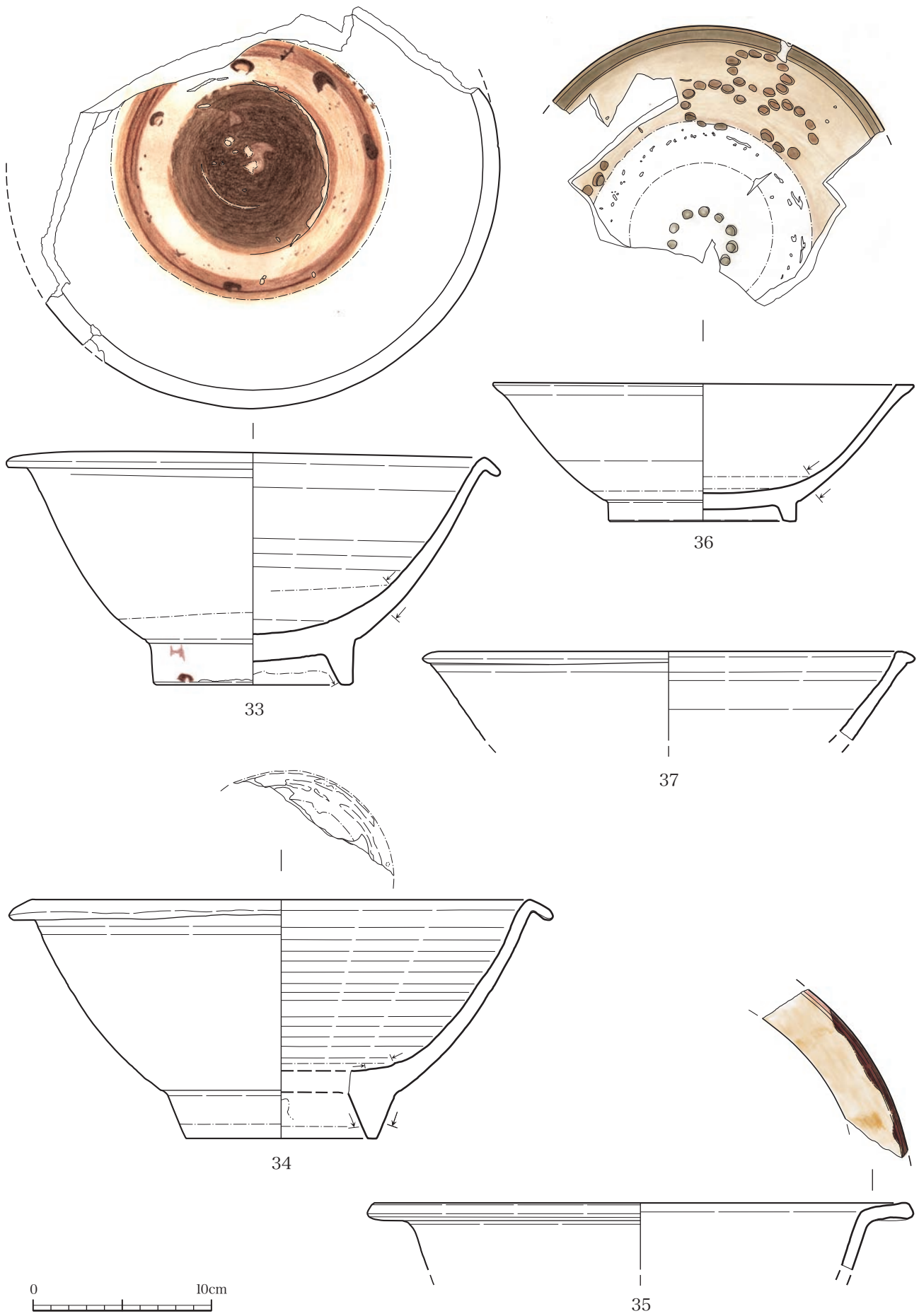
図版91 沖繩産施釉陶器 2



第71図 沖縄産施釉陶器 3



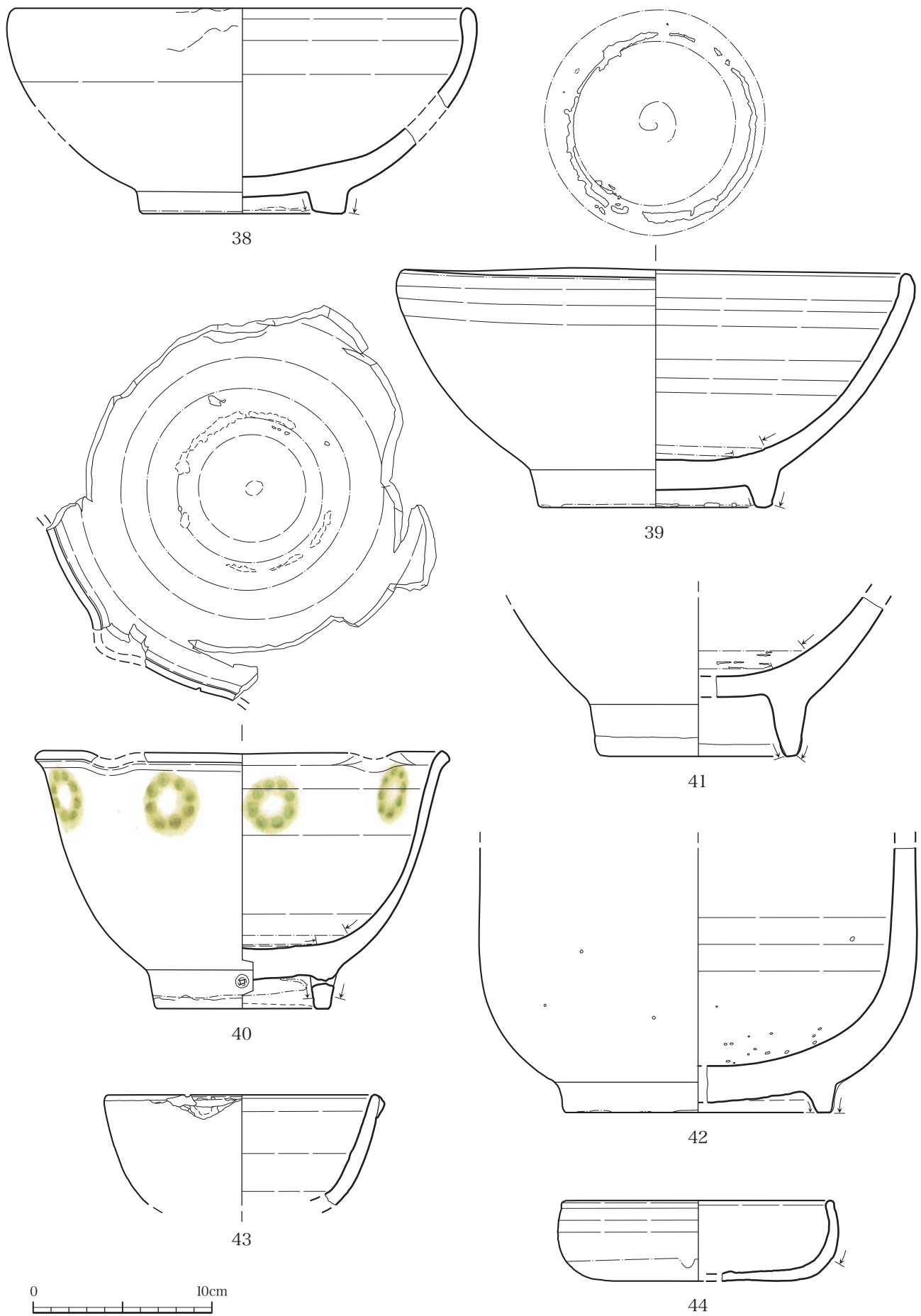
図版92 沖繩産施釉陶器 3



第72図 沖縄産施釉陶器 4



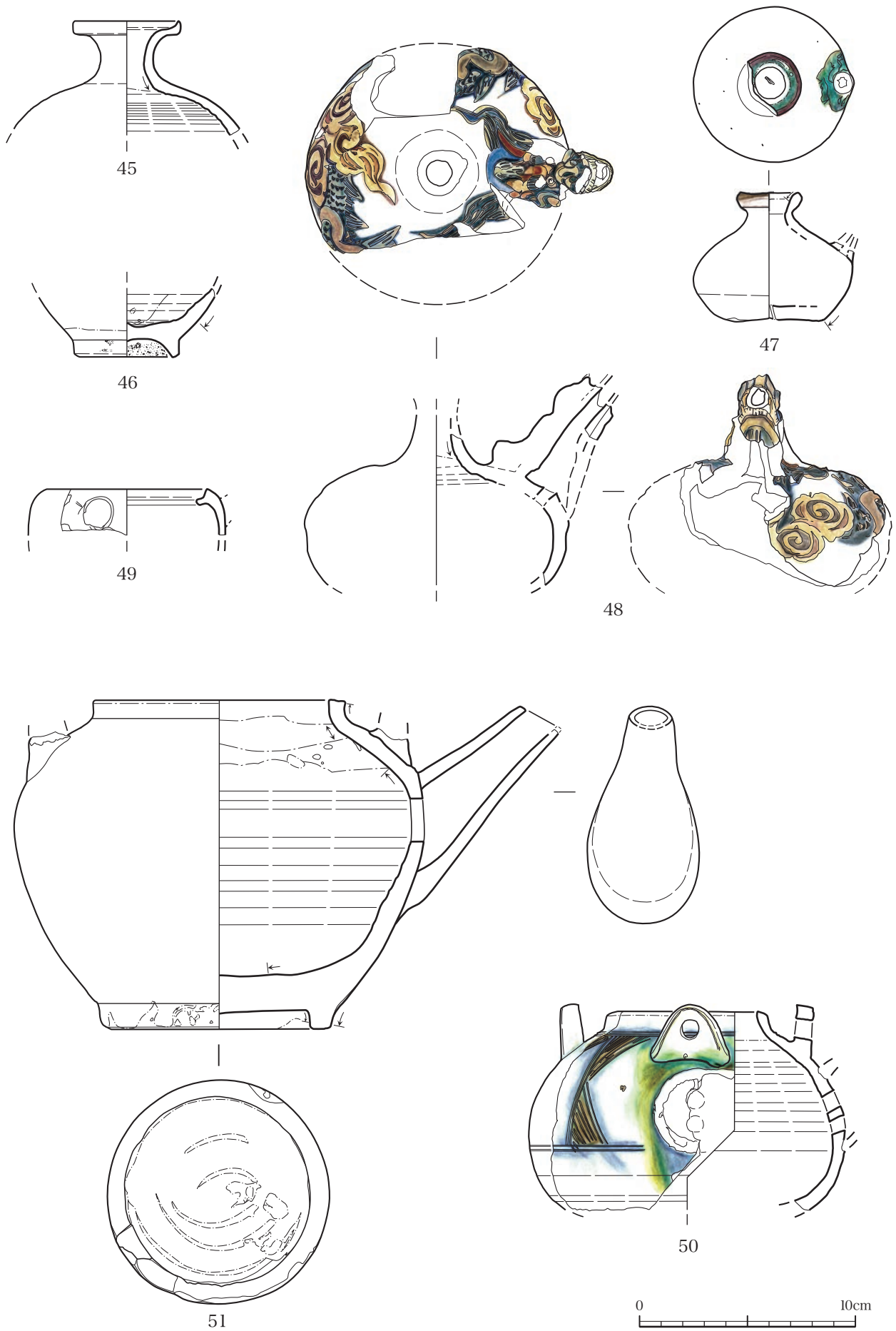
図版93 沖繩産施釉陶器 4



第73図 沖縄産施釉陶器 5



図版94 沖繩産施釉陶器 5

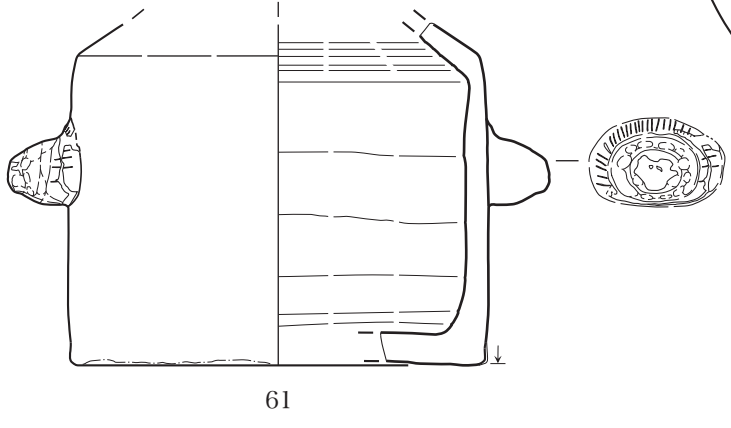
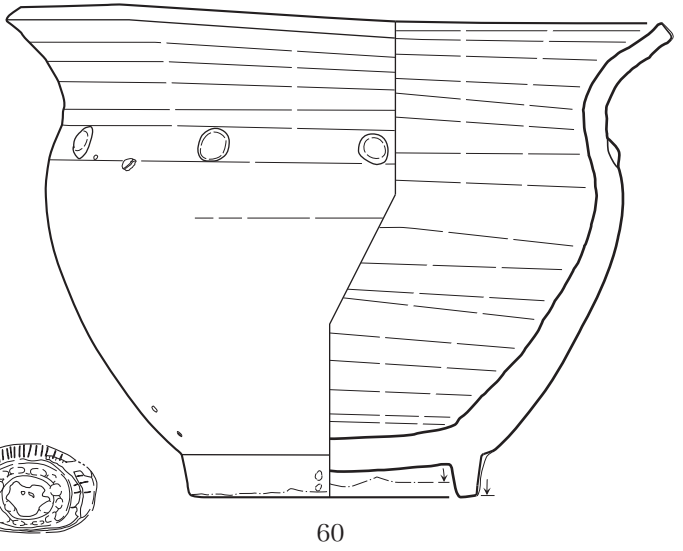
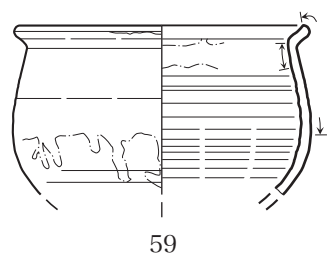
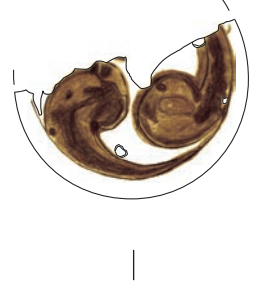
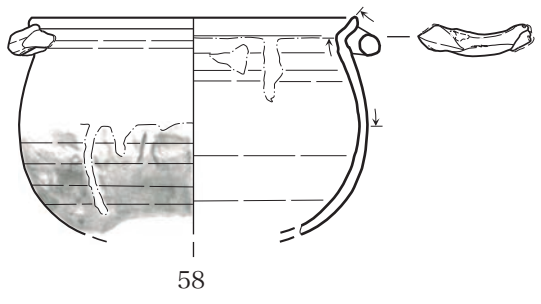
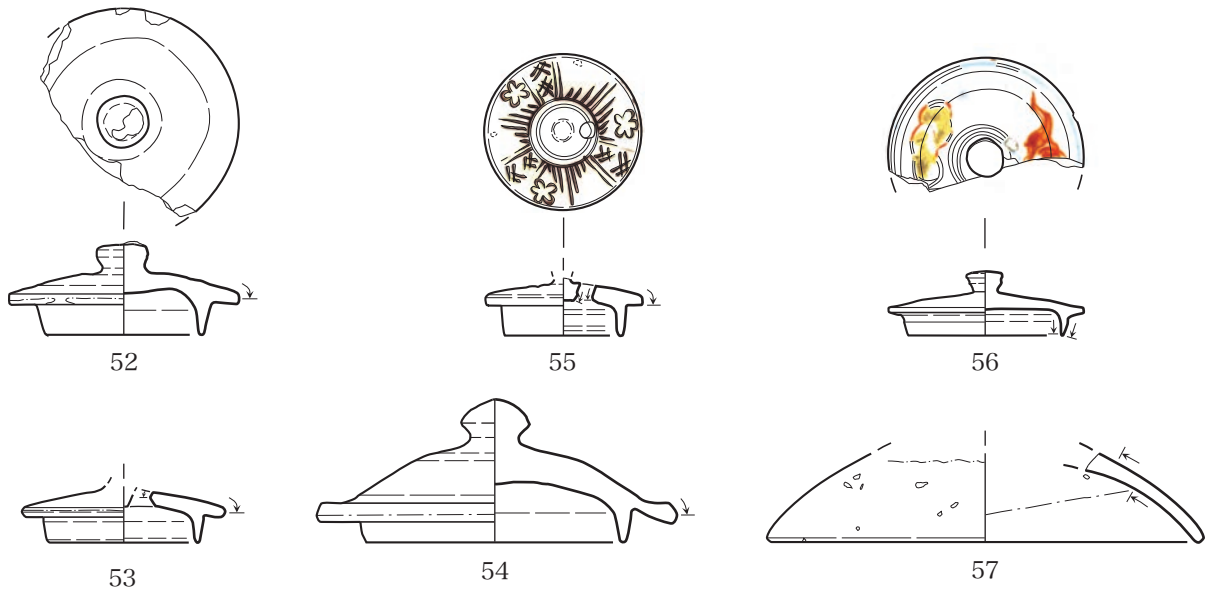


第74図 沖縄産施釉陶器 6





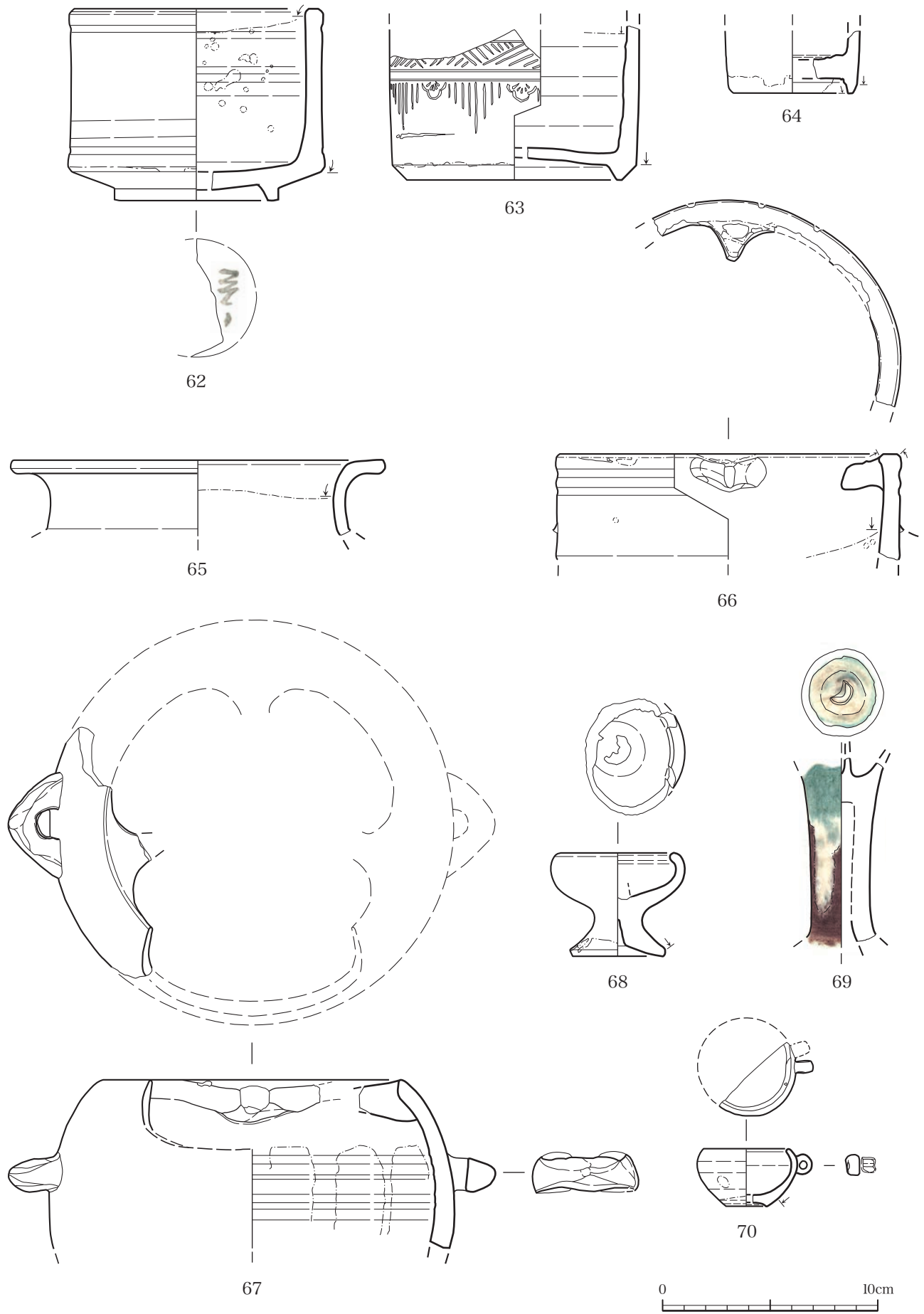
図版95 沖繩産施釉陶器 6



第75図 沖縄産施釉陶器 7



図版96 沖繩産施釉陶器 7



第76図 沖縄産施釉陶器 8



図版97 沖繩産施釉陶器 8

## 9 初期沖縄産無釉陶器

ここで初期沖縄産無釉陶器としたのは、那覇市湧田古窯跡を中心に焼成されたことが考えられる資料で、その中でも薩摩焼の影響が強く認められる一群と(新垣2009,2011)、平成19年度に実施した首里城跡(御内原北地区)発掘調査において、17世紀前半に位置づけられるゴミ穴(シーリ遺構)からまとまって出土した一群を指す(沖縄県立埋蔵文化財センター2010b)。

製品の特徴は、前記した出土資料の情報を基にして次に掲げたa~hのとおりである。本報告ではこの観点から遺物を分類し、その後壺屋などで焼成されたと思われる製品(沖縄産無釉陶器)と区分した。

### 初期沖縄産無釉陶器の主な特徴

- a. 器種：碗、皿、急須、蓋、壺、甕、瓶、片口、鉢、播鉢、植木鉢、火炉、火入、煙管雁首など。
- b. 成形：碗類は轆轤成形で高台は付け高台と削り高台があり、皿はベタ底。壺・甕類は粘土輪積みで叩き成形後、口縁は粘土を外側に広げた後に内側へ折り返して仕上げる。
- c. 施文：鉢の口縁下及び口唇に櫛描きの波状文を巡らせる資料や、甕類の胴部に縄目状の凸帯を巡らせる例のほか、植木鉢の口唇外側を波状に装飾する資料がある。また希に泥釉による圏線を巡らせる例がある。
- d. 施釉：無釉の製品と、外面及び口縁付近に黒褐色～茶褐色の泥釉を薄く塗布する資料のほか、碗や瓶類の胴部に、灰黄色の釉を部分的に掛ける製品がみられる。
- e. 胎土：暗灰色～橙褐色を呈し、練り上げ状に薄く白色土が混入する場合がある。また混和剤として、希に石灰岩や石英粒を多く含む資料がある。
- f. 窯積み：碗・鉢・蓋類の小型製品は合わせ口による重ね焼きで、壺・甕・鉢・蓋などの中～大型製品は目跡として二枚貝や枝サンゴなどを用いて重ね焼きを行う。
- g. 焼成：製品は総じて薄手で焼締められ、暗灰色を呈し硬質だが、火膨れにより器壁が膨張・剥落する製品が一定量あり、また希に明灰色・淡橙色を呈す焼成不良の製品が含まれる。
- h. 器面：外面は輪積み痕・叩き目ともにナゲ消され、重ね焼きの目跡として使用した二枚貝やサンゴに含まれる塩分により、目跡の周辺に光沢を発する製品がある。また、重ね焼きした器物の内面は暗灰色で紙やすり状にざらつき、壺・甕類では粘土輪積み痕と、肩部内面に叩き成形時の当て具痕が残る製品がみられる。

上記した条件に相当する製品は、破片総数で239点が出土しており、壺・甕類が多く、次いで播鉢を含む鉢類、瓶類の順が多い。第I層以外では第III～IV層からの出土が目立つ。ここでは40点を図化し、第77・78図に示した。次に主な製品の特徴を記すが、個々の詳細は第42表1～3にて報告する。

#### ①碗(1～5)

やや厚手の口縁が直線的に開く碗で、口唇は平坦で外へ尖り、合わせ口により焼成される。底部は高台を方形に削り出す例と、高台内を上げ底状に凹ませる資料がある。

#### ②皿(6・7)

口縁に煤が付着することから灯明と思われる。ベタ底で合わせ口により重ねて焼成。

#### ③播鉢(8～13)

口縁が鐮状に開く形状で、口縁下に凸帯状の陵を有する例と、肥厚させ段を有する例がある。播り目は7本前後の櫛状工具でやや密に上から下に施文する。浅手と深めになる2種が存在する。

④ 鉢・片口(14~23・25・26・30)

口縁が内湾する小型の浅鉢と、逆L字状に折れるタイプの鉢がある。前者は口縁部を三角形状に成形し上面を平坦にする。無文と口縁下及び口唇に波状文を巡らせる資料がある。底部は高台を有する資料と、ベタ底の2者が存在する。

⑤ 蓋(27・28)

袴が付くタイプとない資料がある。27は縁辺付近に泥釉による圈線が2条施されている。

⑥ 壺・瓶(24・36・38~40)

小型と中型の壺があり、38は小型の資料である。39は壺の底部に、38及び40は壺か瓶の底部になると思われ、底部付近のサンゴ目が顕著に残る。

⑦ 甕(33~35)

口縁は上端を平坦にした三角形で、貝目を有する。胴部には縄目条凸帯を巡らせる資料がある。

⑧ 植木鉢(37)

口縁を逆L字状に成形し、上面に2条の沈線を巡らせ、外面に縄目文を2段施す。全面に泥釉を掛けたのち、口唇のみ拭きとる。合わせ口の痕跡が残る。

⑨ 火炉(31)

口縁の上面観が三つ葉状になるタイプの火炉。外面と口縁内側付近まで泥釉を掛ける。

⑩ 火入(32)

3足になると思われる火入れの底部。底部から胴部へ至る角は面取りされ、外面に泥釉が施される。

第42表 初期沖縄産無釉陶器観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量(cm)			色調			混入物	形成・調整・文様等	グリッド層
				口径	器高	底径	外面	断面	内面			
第77図 図版98	1	碗	口縁部	16.0	-	-	茶褐色	茶褐色・ 暗灰色	茶褐色	砂粒僅か	轆轤成形で全面に泥釉を掛け光沢を成す。合わせ口焼成。	2トH-13Ⅲ層
	2	碗	底部	-	-	5.6	暗灰色・ 黄褐色	淡赤褐色	暗灰色	白土僅か	轆轤成形で高台削り出し。全面に泥釉を掛けるが艶消し。	3トG・H-17Ⅰ層
	3	碗	底部	-	-	5.2	赤褐色	赤褐色	暗赤褐色	粗赤色粒 僅か	轆轤成形で付け高台か。無釉。	1トF-20Ⅰ層
	4	碗	底部	-	-	5.0	暗灰色	暗灰色・ 茶褐色	暗灰色	なし	轆轤成形で高台削り出し。高台内は上げ底状成形。表面の一部が発泡、自然釉か。	4トE-13Ⅰ層
	5	碗	底部	-	-	5.0	暗灰色・ 赤褐色	赤褐色	暗赤褐色	粗黒色粒 僅か	轆轤成形で高台削り出し。高台内は上げ底状成形。高台脇まで黒褐色釉あり、見込に飛沫。	表採
	6	皿	口~底	9.2	2.6	4.0	灰色	灰色	灰色	粗白色粒 僅か	轆轤成形でベタ底。合わせ口焼成か。口唇のみ薄く泥釉掛け煤付着。	2トH-13Ⅲ層
	7	皿	口縁部	10.7	-	-	茶褐色	暗灰色・ 茶褐色	茶褐色	白色粒 僅か	轆轤成形で合わせ口焼成。外面に成形時の傷あり。全面泥釉掛け一部光沢を成す。	1トF-15Ⅰ層

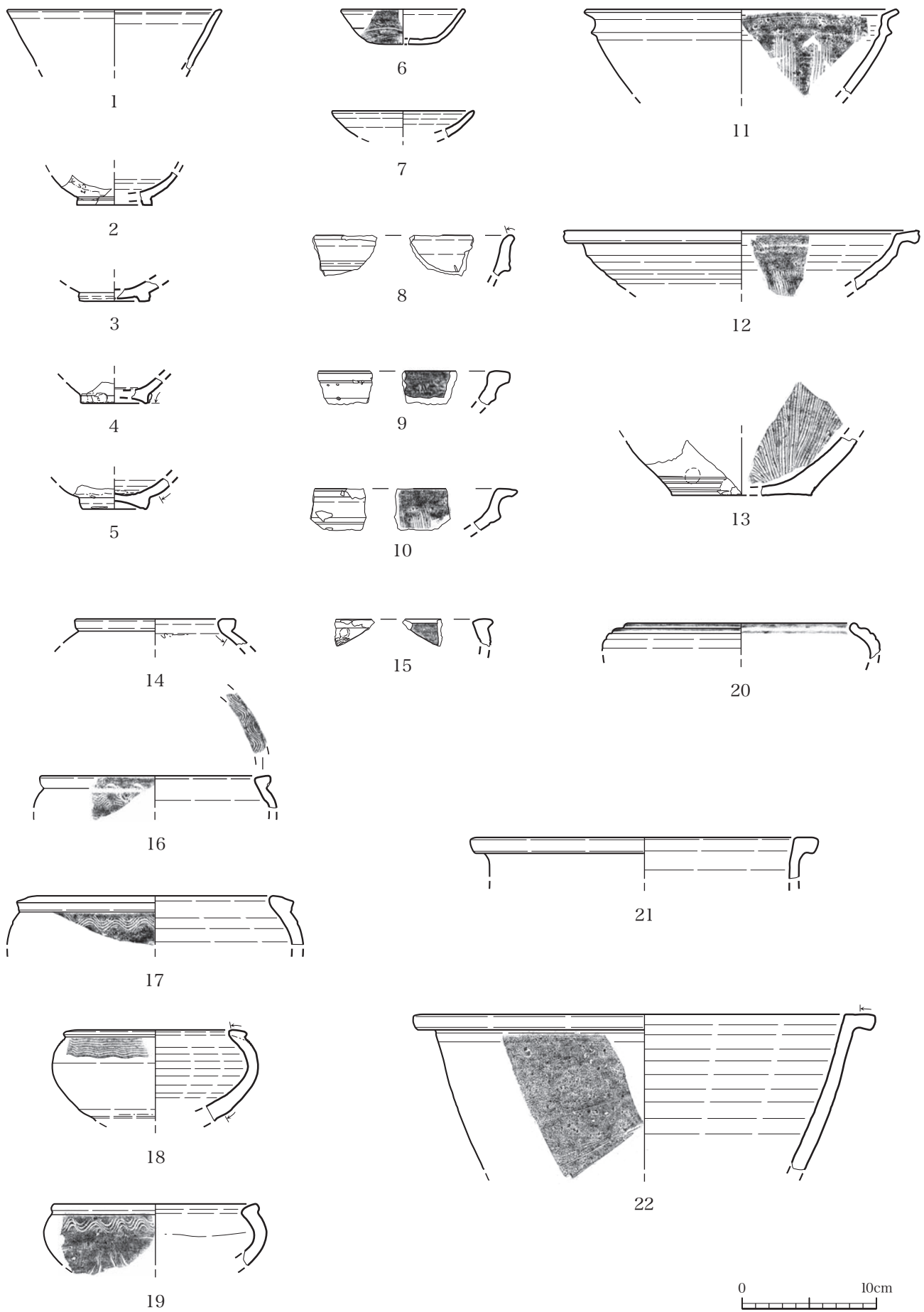
第42表 初期沖縄産無釉陶器観察一覧2

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量(cm)			色調			混入物	形成・調整・文様等	グリッド層
				口径	器高	底径	外面	断面	内面			
第77図 図版98	8	擂鉢	口縁部	-	-	-	暗灰色	茶褐色	茶褐色	なし	轆轤成形で合わせ口焼成。口縁外面肥厚。外面に泥釉掛け光沢を成す。	1トF-141層
	9	擂鉢	口縁部	-	-	-	黒褐色	茶褐色	黒褐色・茶褐色	なし	轆轤成形。口縁外側に広げ口唇平坦。外面・口唇に泥釉厚く掛け光沢を成す。櫛目端部確認。	4トE-13IV層
	10	擂鉢	口縁部	-	-	-	黒褐色	茶褐色	暗茶褐色	粗白色粒僅か	轆轤成形で合わせ口焼成。口縁外側に広げ口唇平坦。外面に泥釉掛けるが艶消し。櫛目端部確認。	3トG・H-171層
	11	擂鉢	口縁部	23.4	-	-	茶褐色	淡茶褐色	茶褐色	粗石英白土多い	轆轤成形で合わせ口焼成。口縁外側に広げ口唇平坦。全面に泥釉掛け外面光沢成す。櫛目7~8条で間隔あける。	2トH-13III層
	12	擂鉢	口縁部	26.4	-	-	暗茶褐色	暗灰色・橙褐色	茶褐色	粗赤色粒僅か	轆轤成形で合わせ口焼成。口縁外側に広げ口唇平坦。外面光沢あるも無釉か。櫛目確認。	4トE-13III層
	13	擂鉢	底部	-	-	10.4	暗茶褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	白土僅か	轆轤成形で底面円盤上に胴部積み上げ。底部脇にサング目と塩釉。櫛目密。	1トF-181層
	14	鉢	口縁部	12.0	-	-	茶褐色	暗灰色・茶褐色	茶褐色	白土僅か	轆轤成形で口縁三角、口唇平坦。泥釉を外側と口縁内面下まで掛け光沢を成す。	4トE-181層
	15	鉢	口縁部	-	-	-	暗褐色	茶褐色	茶褐色	粗赤色粒僅か	轆轤成形で合わせ口焼成。口縁三角、口唇平坦。泥釉を外側に掛け光沢を成す。	4トE-13IV層
	16	鉢	口縁部	17.2	-	-	暗褐色	暗灰色・茶褐色	茶褐色	粗赤色・白色粒僅か	轆轤成形で合わせ口焼成。口縁三角、口唇平坦。外面に薄く泥釉か。	1トF-151層
	17	鉢	口縁部	20.6	-	-	茶褐色	赤褐色	茶褐色	粗赤色粒多い	轆轤成形で合わせ口焼成。口縁三角、口唇平坦。無釉か。	1トF-18石積IIII層
	18	鉢	口縁部	13.6	-	-	暗褐色・茶褐色	茶褐色	赤褐色	粗赤色粒多い	轆轤成形で合わせ口焼成。口縁僅かに外へ広げ口唇平坦。口縁下に数条の沈線巡らせ波状文を引き直す。	4トE-13IV層
	19	鉢	口縁部	15.4	-	-	暗茶褐色	茶褐色	赤褐色	粗白色粒僅か	轆轤成形で合わせ口焼成。口縁僅かに外へ広げ口唇平坦。口縁下に数条の沈線波状文を巡らす。表面に泥釉僅かに施す。	4トE-13IV層
	20	鉢	口縁部	17.0	-	-	淡橙褐色	淡橙褐色	淡橙褐色	白土多い	内湾する浅鉢で合わせ口焼成。口唇丸く成形し外面を圈線状に3条凹ませ、口唇・口縁外面突起部に暗灰色の圈線を巡らす。焼成不良。	1トF-18石積II層
	21	鉢	口縁部	25.8	-	-	暗茶褐色	茶褐色・橙褐色	暗茶褐色・赤褐色	粗白色粒・白土僅か	口縁逆L字状の鉢か甕の口縁で、全面に泥釉掛けるが内面薄い。	1トF-151層
	22	鉢	口縁部	34.4	-	-	暗茶褐色	茶褐色・赤褐色	赤褐色	粗赤色粒多い	口縁逆L字状の鉢で合わせ口焼成。口唇中央付近から外面に泥釉掛け光沢を成す。胴部に数本の線刻あるが意匠不明。	4トE-13IV層
23	鉢	底	-	-	12.6	暗茶褐色	暗赤褐色	赤褐色	なし	轆轤成形で高台削り出し。高台脇と畳付け付近に僅かに黒褐色釉付着。	4トE-171層	
第78図 図版99	24	壺	底	-	-	11.3	茶褐色	暗茶褐色	橙褐色	粗白色粒白土多い	轆轤成形で高台脇にサング目と塩釉残り、暗茶褐色釉が流れる。	4トE-161層
	25	鉢	底	-	-	9.8	暗茶褐色	暗赤褐色	赤褐色	なし	轆轤成形で胴下部まで泥釉か塩分による光沢あり。	4トE-13IV層
	26	鉢	底	-	-	8.6	暗茶褐色	暗赤褐色・暗灰色	暗灰色	なし	轆轤成形で胴下部に塩釉と思われる光沢あり。胴部と底部の境界は火膨れにより内部で発泡・膨張する。	1トF-151層

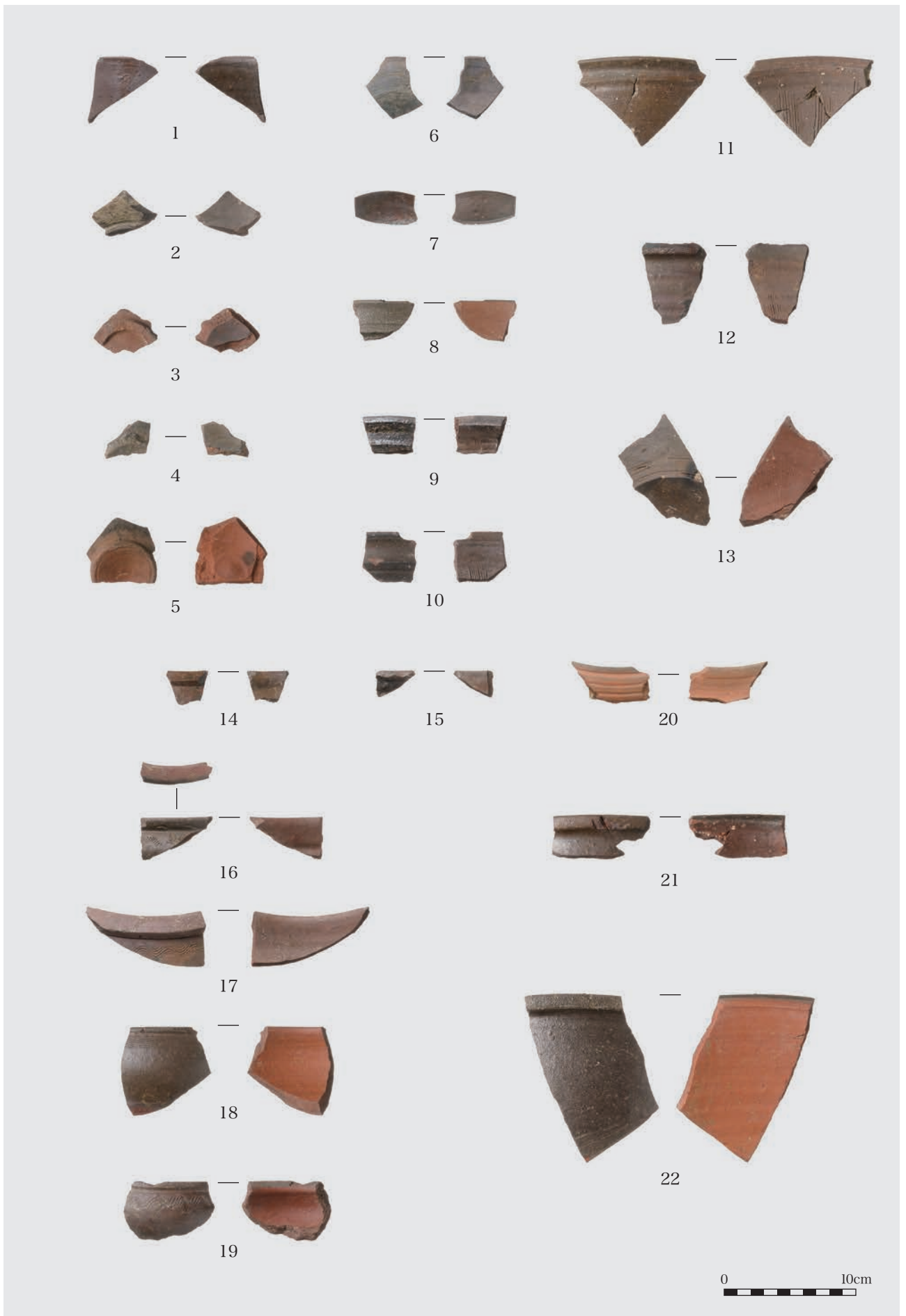


第42表 初期沖縄産無釉陶器観察一覧3

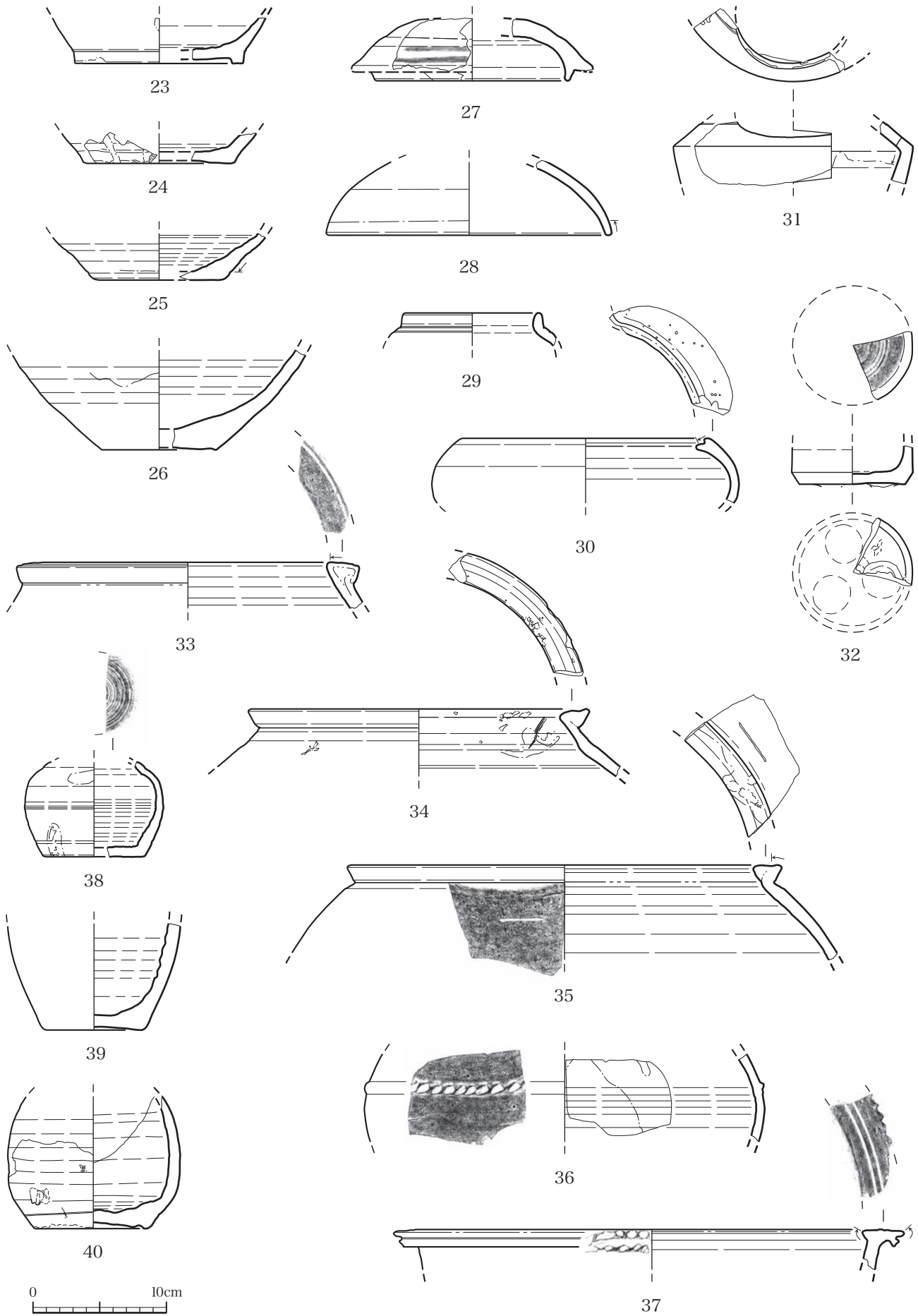
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量(cm)			色 調			混入物	形成・調整・文様等	グリッド 層
				口径	器高	底径	外面	断面	内面			
第78図 図版99	27	蓋	底~袴	18.1	-	14.6	淡茶褐色	茶褐色	赤褐色	粗赤色粒 僅か	轆轤成形の蓋。表面縁辺に泥釉で2条の圏線を巡らせる。火膨れによる弾けがみられる。	1トF-12石敷 Ⅲ層
	28	蓋	底	21.4	-	-	茶褐色	茶褐色	暗茶褐色	白土僅か	轆轤成形で内面と口縁のみ自然釉の光沢。仰向けで壺甕類口縁に重ねて焼いたか。	1トF-13I層
	29	壺	口縁部	10.4	-	-	茶褐色・ 黄褐色	暗茶褐色	茶褐色	粗赤色粒 僅か	轆轤成形。内外で色が異なるため蓋をして焼成したか。口縁下に2条の沈線。	1トF-18石積1 Ⅲ層
	30	片口 か	口縁部	18.6	-	-	暗褐色	暗赤褐色	赤褐色	なし	蓋付きの片口か。轆轤成形。外面に泥釉塗布した上に黒褐色釉の飛沫あり。	1トF-17石積2 Ⅱb層
	31	火炉	口縁部	-	-	-	暗褐色	茶褐色	暗褐色・ 赤褐色	赤色粒多 い	口縁上面観三つ葉状の火炉。胴径18.0cm。轆轤成形で外面と口縁内面下まで泥釉施す。口縁切り口はシャープ。	2トH-13Ⅲ層
	32	火入	底部	-	-	7.9	暗茶褐色	茶褐色	茶褐色	白土やや 多い	底部から胴部への立ち上がり部は面取り。先の平たい三角錐状の脚が3点付くと思われ、脚の基部は円形にナデる。	3トG・H-17I層
	33	甕	口縁部	25.6	-	-	暗褐色	茶褐色	茶褐色	なし	口縁を三角、口唇は平坦に成形。口唇外側に1条の圏線巡らす。口唇から外面まで泥釉。口唇内側角に重ね焼きの痕跡。	4トE-17I層
	34	甕	口縁部	25.5	-	-	暗茶褐色	茶褐色 赤褐色・	茶褐色・ 暗茶褐色	白土多い	口縁を外側に折り曲げ三角形に成形。泥釉を外側～口縁まで掛け、内面はまばら。口唇に貝目。轆轤成形か。	2ト北抜H-15 Ⅲ層
	35	甕	口縁部	32.5	-	-	暗茶褐色	茶褐色	暗茶褐色	白土多い	口縁を外側に広げたのちに折り曲げ三角形に成形。泥釉を全面に掛け外面光沢あり。口唇に貝目。肩に「一」の線刻。	2トH-13Ⅲ層
	36	瓶か 壺	胴部	-	-	-	暗褐色	暗褐色 暗茶褐色	暗褐色・ 茶褐色	白土僅か	胴径約30cm。縄目状凸帯を横位に1条巡らす。外面全面と内面一部に泥釉。轆轤成形か。	4トE-17石積2 Ⅲ層
	37	植木鉢	口縁部	37.8	-	-	暗褐色	暗茶褐色	暗褐色	白土僅か	口縁が内外に張り出すT字状。口唇外面は2段の縄目を施す。全面泥釉施釉後、口唇拭き取る。口唇に合わせ口痕。	4トE-16I層
	38	瓶か 壺	胴~底	-	-	7.6	暗茶褐色	暗灰色・	暗茶褐色	なし	轆轤成形で肩の一部に黄色釉。胴下部に縦位のサンゴ目と周囲に塩分による光沢。	表採
	39	瓶か	胴~底	-	-	8.0	暗茶褐色	茶褐色	暗茶褐色	なし	轆轤成形の小壺か。外面泥釉か塩釉による光沢。底部にサンゴ目らしき痕跡。	4トE-13IV層
40	壺か	胴~底	-	-	8.8	暗黄褐色	茶褐色	茶褐色	なし	輪積み成形か。外面全面に泥釉、塩分による光沢。底部にサンゴ目らしき痕跡。	3トG・H-17Ⅲ層	



第77図 初期沖縄産無釉陶器 1



図版98 初期沖繩産無釉陶器 1



第78図 初期沖縄産無釉陶器 2



図版99 初期沖繩産無釉陶器 2

## 10 沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器は、前項に提示した初期沖縄産無釉陶器の特徴から外れる資料をまとめた。破片総数で1,642点が出土しており、壺・甕類が多く、次いで播鉢を含む鉢類、火炉、植木鉢の順で続く。出土層は第I層～第IIb層が最も多い傾向にある。ここでは51点を図化し、第79～83図に示した。次に主な製品の特徴を記すが、個々の詳細は第43表にて報告する。

### ①皿（1～3）

口縁に煤が付着することから灯明と思われる。1、2の資料はベタ底で合わせ口により重ねて焼成。

### ②鉢（4～10）

口縁が内湾する小型の浅鉢と、口縁が逆L字状に折れるタイプのほか、端反りの鉢がある。前者は口唇を丸く成形し、無文と口縁下に波状文を巡らせる資料がある。底部は高台を有する資料と、ベタ底の2者が存在する。

### ③播鉢（11～15）

口縁が鐙状に開く形状で、口縁下に凸帯状の陵を有する例と、稜を成さず逆L字状の例がある。稜を有する資料は、側面観が直線的な三角形を呈すのに対し、もう一方は胴部が丸い形状となっている。播り目は後者が隙間を見せず密に施されている。

### ④植木鉢（16～22）

口縁を逆L字状に成形し、その端部に縄目文を施す資料と、口縁が鈎状あるいは肥厚させた資料が存在している。前者の胴部には、貼り付けによる唐草等の植物文が施され、後者は無文で底部中央に水抜きの孔を有し、胴部はほぼ直立する形状を呈す。

### ⑤甕（23～38）

甕は様々な大きさの資料が出土している。23～27は口縁が三角に肥厚するタイプの甕で、小～中型の甕に多い。一方、口縁が逆L字状の甕は中～大型品に多く、口縁下に沈線や波状沈線を巡らせるほか、丸文を貼付する場合がある。底部は広めで38・43のように内底面を横位に指ナゲし、仕上げに縁辺をなでる傾向が見える。また、34・35のように三巴文を貼付する例があり、別注品と考えられる資料も出土している。埋甕1・2の事例から、大甕の中でも底径が大きい資料は据え置くタイプで、埋めるのは狭いタイプであることがわかる。また、埋甕を設置する場合、胴上部の凸帯まで埋めている事例が、今回の検出例（図版45・46）と戦前に撮影された古写真において確認されている（図版14・24）。

### ⑥壺（39～46）

口縁が逆L字・く字状か、玉縁の資料がみられる。前者は頸を有し、頸部下か肩部に沈線を巡らせる。後者は頸がなく、緩やかに胴部へ至る資料と思われる。底部～胴部の角は面取りされる資料が多い。

### ⑦蓋（47）

急須の蓋になるとと思われる小型の製品や、壺の蓋になるとと思われる中型の製品が中心であるが、無釉の製品は施釉に比べると少ない。

⑧焜炉（51）

楕円か半円形になる焜炉の底部。口縁は折縁状の破片が数点得られている。

⑨火入（50）

厚手の資料が多く、脚が3点付く場合とベタ底の2種がある。

⑩澁瓶（49）

壺形で頂部に円盤状の把手が付くタイプの澁瓶。内面に石灰分が多く付着する。頂部まで一気に轆轤引きし、口縁付着部をくり抜いて筒状口縁を貼付する。底径は広めで安定感がある。

⑪その他（48）

用途不明製品として48を図化した。形状から灯火具の脚の可能性が考えられる。

第 43 表 沖縄産無釉陶器観察一覧 1

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量(cm)			色 調			混入物	形成・調整・文様等	グリッド 層
				口径	器高	底径	外面	断面	内面			
第 79 図 図版 100	1	皿	口～底	11.0	2.5	4.9	淡橙褐色	淡橙褐色	淡橙褐色	なし	ベタ底の灯明皿。内外面轆轤痕。口唇は舌状で煤付着。底部造り粗い。	4トE-18I層
	2	皿	口～底	10.0	2.8	4.0	淡橙褐色	淡橙褐色	淡橙褐色	なし	ベタ底の灯明皿。内外面轆轤痕。口唇は舌状で煤付着。底部造り粗い。	4トE-13IV層
	3	皿	口縁部	-	-	-	灰褐色	灰褐色	灰褐色	なし	灯明皿の口縁に付く把手。器部を轆轤成形後、貼り付けて成形。	不明
	4	鉢	口縁部	16.8	-	-	茶褐色	赤褐色	淡橙褐色	なし	口唇丸く内傾する浅鉢。内外面轆轤痕。	4トE-13IV層
	5	鉢	口縁部	14.2	-	-	橙色	橙褐色	橙褐色	赤・黒色粒僅か	口唇丸く内傾する浅鉢。内外面轆轤痕。外面口縁下に飾描きで波状文。	4トE-13IV層
	6	鉢	口～底	36.3	18.5	17.0	橙褐色	橙褐色	橙褐色	なし	口縁逆L字状の鉢。口唇外面に1条、上面に2条の沈線巡らす。内外面轆轤痕、腰部へう削り。底面も丁寧な成形。	3トG・H-17III層
	7	鉢	口縁部	16.0	-	-	暗褐色	赤褐色・暗灰色	淡赤褐色	なし	口縁逆L字状の口径が小さい鉢。口唇外面に1条の沈線巡らす。内外面轆轤痕で合わせ口焼成か。	3トG・H-17III層
	8	鉢	口縁部	24.0	-	-	淡灰色	赤褐色	赤褐色	なし	口縁が逆ハ字状に開く鉢。口縁内は断面三角状に肥厚。内外面轆轤痕。	3トG・H-17II層
	9	鉢か甕	底部	-	-	15.4	淡茶褐色	橙褐色	灰褐色	なし	胴部の開きが緩やかで丁寧な造り。内面ナデ、外面へう削り。	1トF-15I層
	10	鉢か	底部	-	-	9.2	橙褐色	橙褐色	橙褐色	なし	高台を有する鉢。轆轤成形で高台内はやや上げ底。	1トF-18石積1III層
	11	擂鉢	口縁部	31.7	-	-	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	黒色粒僅か	轆轤成形。口縁外側に広げ口唇平坦にし、口縁下に綾を成す。櫛目7～8条で間隔狭い。	1トF-20III層
	12	擂鉢	口縁部	-	-	-	茶褐色	赤褐色	赤褐色	赤色粒僅か	轆轤成形。口縁外側に広げ口唇平坦にし、口縁下に綾を成す。櫛目間隔やや広め。合わせ口焼成か。	4トE-13IIb層
	13	擂鉢	口～底	28.4	12.3	8.3	灰褐色・赤褐色	茶褐色	灰褐色・赤褐色	赤色粒僅か	片口の擂鉢で轆轤成形。口縁外側に広げ口唇平坦にし、口縁下に綾を成す。櫛目9～10条で間隔密。	2ト北拓H-15III層
	14	擂鉢	口縁部	32.7	-	-	橙褐色・茶褐色	橙褐色	橙褐色	白砂・黒色粒僅か	口縁逆L字状の擂鉢。口唇外面に1条沈線巡らす。内外面轆轤痕で櫛目は浅く斜位に密。	4トE-13IV層
	15	擂鉢	底部	-	-	12.1	橙褐色	橙褐色	橙褐色	なし	胴部が丸く張る擂鉢の底部。底径は広めで口縁は14の逆L字状になるタイプ。櫛目は隙間なく密。	4トE-15石組4内IIb層
第 80 図 図版 101	16	植木鉢	口縁部	48.1	-	-	茶褐色	茶褐色	灰色	粗赤色粒僅か	口縁逆L字状の植木鉢。口唇外面に縄目貼付し端部下がる。口縁下に蔓植物状の貼り付け文で境界ナデ消す。	I層
	17	植木鉢	口縁部	35.4	-	-	茶褐色	茶褐色	灰色	粗赤色粒僅か	口縁逆L字状の植木鉢。口唇外面に縄目貼付し端部下がる。破片下に貼り付け文痕跡。	1トF-17～19I層
	18	植木鉢	胴部	-	-	-	暗茶褐色	茶褐色	茶褐色	白・赤粒僅か	貼花文の植木鉢胴部。型造りの葉と紐状の茎を貼り付ける。轆轤成形。	1トF-18石積1IV層

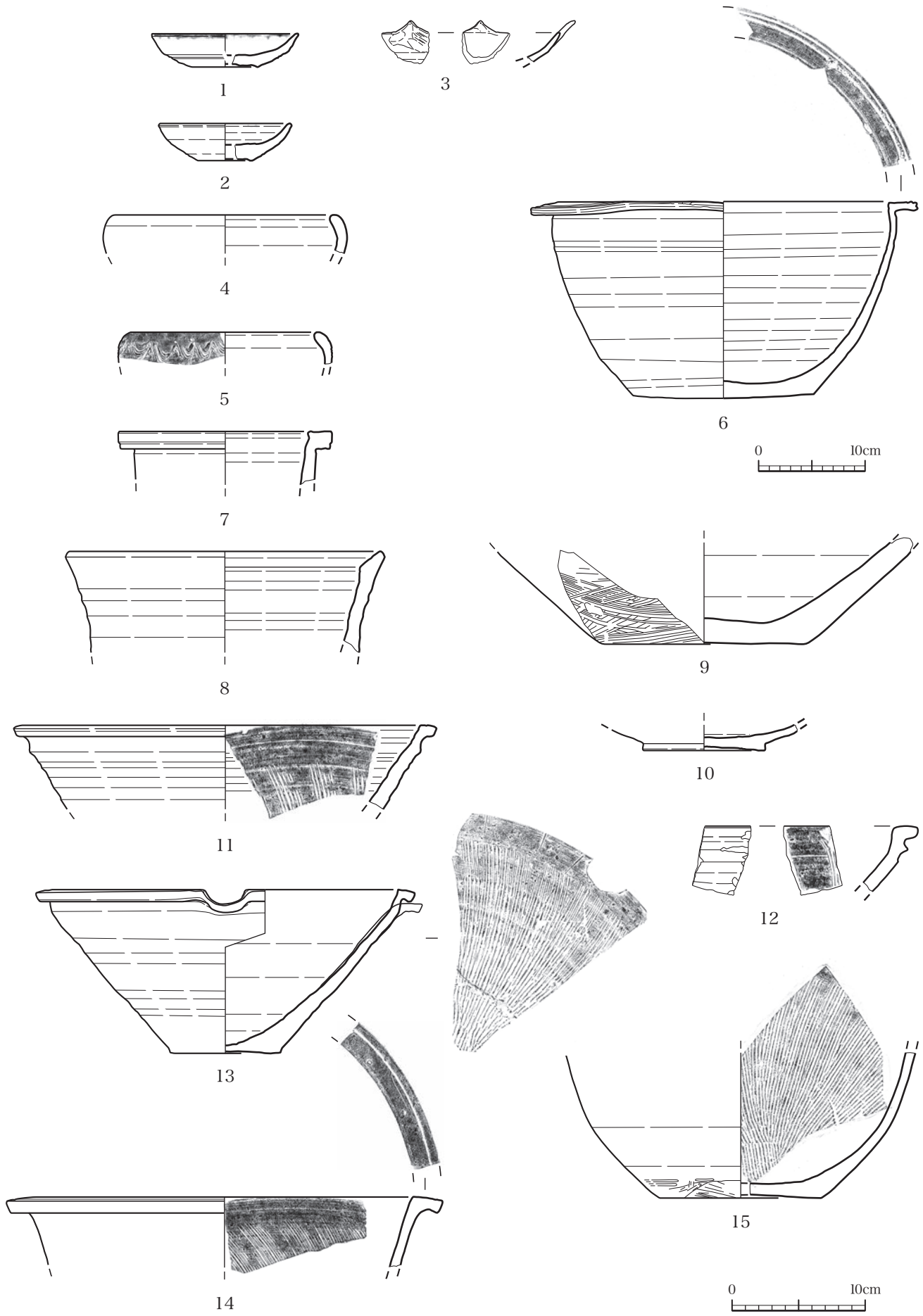
第43表 沖縄産無釉陶器観察一覧2

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量 (cm)			色 調			混入物	形成・調整・文様等	グリッド 層
				口径	器高	底径	外面	断面	内面			
第80図 図版101	19	植木鉢	胴部	-	-	-	淡茶褐色	赤褐色	赤褐色	なし	貼花文の植木鉢胴部。型造りの葉と紐状の茎を貼り付ける。轆轤成形。	3㌧G・H-171層
	20	植木鉢	口縁部	23.6	-	-	暗橙色	暗橙色	暗橙色	なし	口縁が鉤状に折れる植木鉢口縁部。底部は21・22の形状か。	3㌧G・H-171層
	21	植木鉢	底部	-	-	18.0	淡橙褐色	淡橙褐色	淡橙褐色	粗赤色粒多い	底面に水抜き孔を有する植木鉢。胴部は底面脇から粘土積み上げ、直に立ち上げる。	2㌧H-15溝3 IIb層
	22	植木鉢	底部	-	-	18.8	淡橙褐色	橙褐色	淡橙褐色	なし	底面に水抜き孔を有する植木鉢。胴部は直に立ち上がる。	1㌧F-17II層
	23	甕	口縁部	-	-	-	橙褐色	橙褐色	橙褐色	粗白粒僅か	口唇上面平坦で内外の端部が僅かに張り出す。口縁外面下に3条の沈線、丸文貼り付けし、下部に凸帯巡らす。	3㌧G・H-171層
	24	甕	口縁部	-	-	-	淡赤褐色	赤褐色	赤褐色	粗黒色粒僅か	口唇上面平坦で内外の端部が僅かに張り出す。口縁外面下を窪ませ3段に成形し、その下位に浅く凸帯巡らす。	I層
	25	甕	口縁部	-	-	-	淡赤褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	なし	口唇上面やや丸く、内外の端部が僅かに張り出す。口縁外面下に沈線による波状文巡らす。口唇～内面の光沢は塩釉か。	4㌧E-17III層
	26	甕	口縁部	33.8	-	-	暗茶褐色	茶褐色	灰色	粗赤色粒僅か	口唇上面平坦で内外の端部が僅かに張り出す。口縁外面に縄目文1条。その下位に丸文貼り付けし、1条の凸帯巡らす。	1㌧F-17
第81図 図版102	27	甕	口縁部	52.4	-	-	灰茶褐色	赤褐色	淡橙褐色	なし	口唇上面平坦で内外の端部が僅かに張り出す。口縁外面下を2条窪ませ下位に段形成。その下位に浅く凸帯巡らす。	3㌧G-17I層
	28	甕	口縁部	18.9	-	-	淡茶褐色	淡赤褐色	淡赤褐色	なし	口縁断面が方形になる甕。口縁下に沈線を数条巡らす。	3㌧I層
	29	甕	口縁部	38.9	-	-	茶褐色	赤褐色	赤褐色	なし	口縁を断面逆台形状に成形し、口縁外面下部に2条の沈線。口縁下に窯印らしき沈線。肩部に数条の沈線巡らす。	3㌧G・H-171層
	30	甕	口縁部	39.8	-	-	暗茶褐色	暗茶褐色・灰色	橙褐色	なし	口縁逆L字状の甕。口縁下に沈線を数条巡らす。	1㌧F-14～16I層
	31	甕	口縁部	45.6	-	-	橙褐色	橙褐色	橙褐色	なし	口縁逆L字状の甕。口唇上面外側に2条の沈線。口縁下に波状沈線を数条巡らす。口唇の摩滅が著しい。	1㌧F-16I層
	32	甕	口縁部	42.3	-	-	橙褐色・茶褐色	赤褐色	赤褐色	なし	口縁逆L字状の甕。口唇上面外側に3条の沈線。口縁下に波状沈線を2条巡らす。	3㌧G・H-17III層
	33	甕	口縁部	35.8	-	-	橙褐色	橙褐色	橙褐色	なし	口縁逆L字状の甕で胴部にかけてS字状に湾曲。口唇上面外側に1条の沈線。口縁下に沈線と波状沈線。石灰付着多い。	1㌧F-20I層
	34	甕	胴部	-	-	-	暗灰色	赤褐色	赤褐色	なし	口縁下の部分。8条の沈線巡らせ、下位に波状沈線と圈線あり、その上に印刻三巴文貼り付け。	2㌧北拡H-15 溝内IIb層
第82図 図版103	35	甕	胴部	-	-	-	暗茶褐色	暗茶褐色	赤褐色	なし	甕の肩に波状沈線施し、その上に陽刻三巴文の貼り付け。	2㌧北拡H-15 溝内IIb層
	36	甕	口縁部	85.6	-	-	橙褐色	橙褐色	灰色	なし	埋甕1の口縁部。胴～底部は現地保存。口縁断面く字状で外面下に沈線1条。口縁下に数条の沈線巡らせ、線上に丸文貼り付け。その下位に太い凸帯巡らす。	2㌧H-14 埋甕1内IIb層

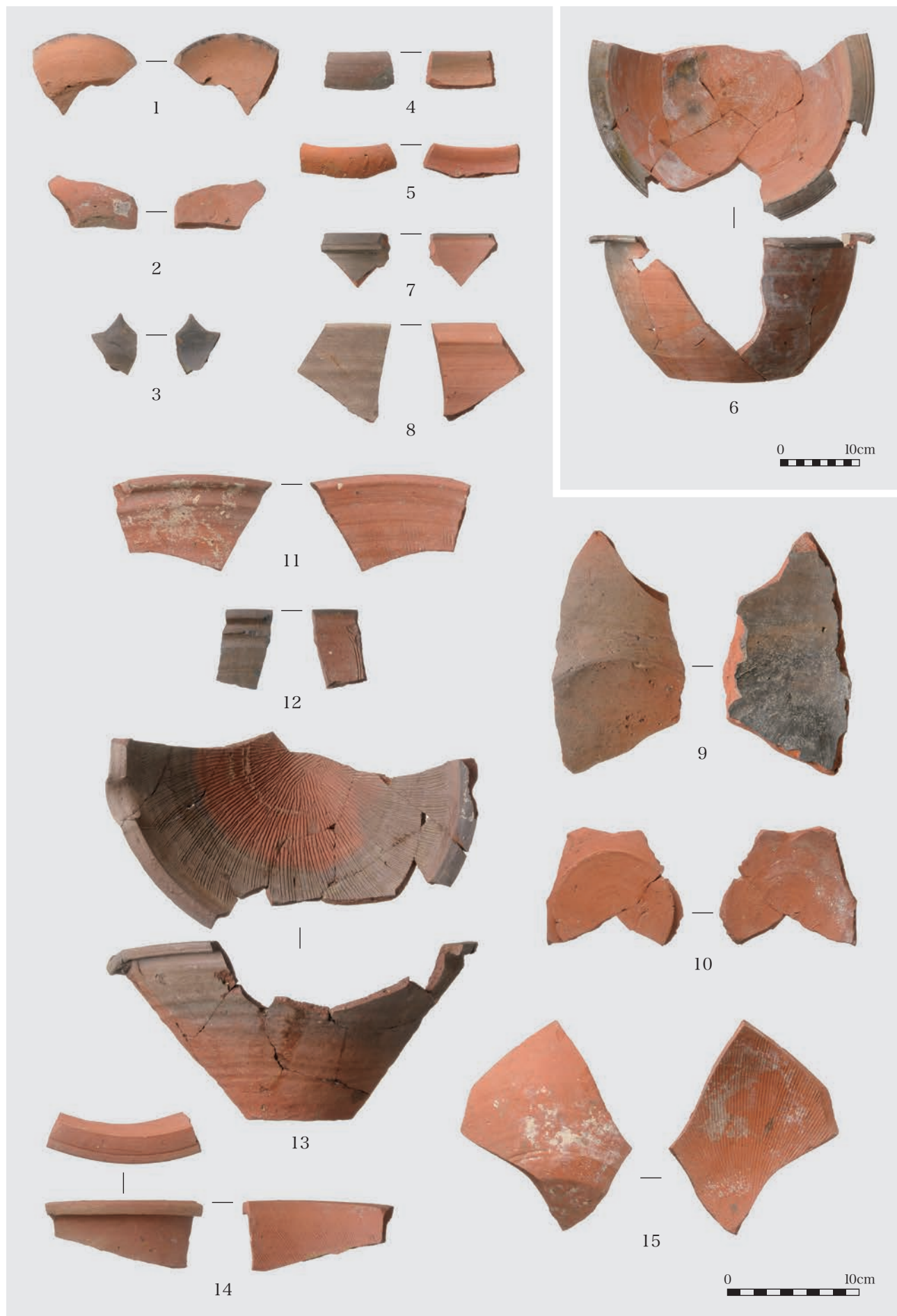


第43表 沖縄産無釉陶器観察一覧3

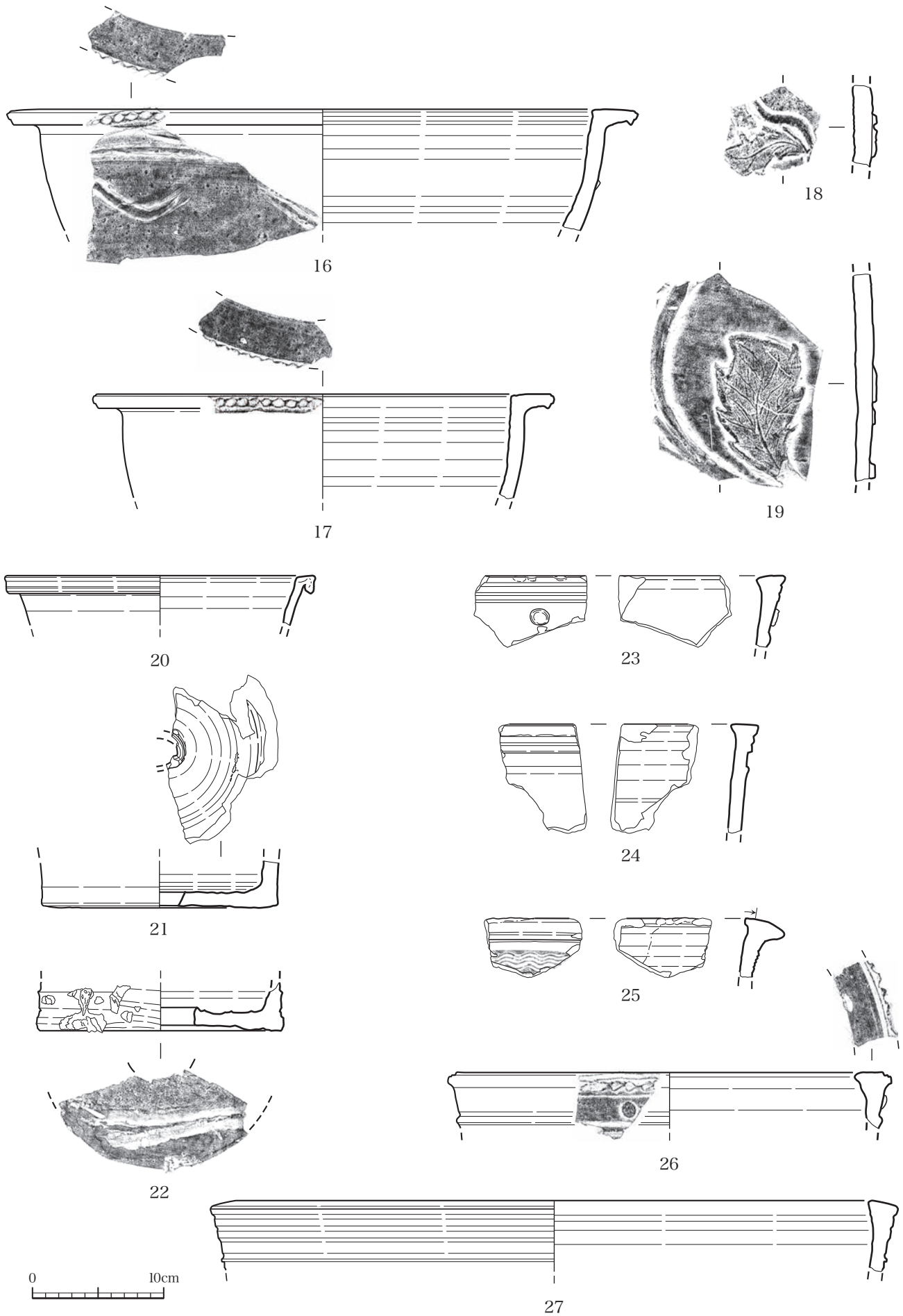
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量(cm)			色調			混入物	形成・調整・文様等	グリッド層
				口径	器高	底径	外面	断面	内面			
第82図 図版103	37	甕	口縁部	-	-	-	灰茶褐色	赤褐色	茶褐色	粗白色粒 多い	大甕か植木鉢の口縁部。平たな口唇端の凸帯はさみに上に縄目文、下部に波状文貼付し巡らす。	4トE-13IV層
	38	甕	底部	-	-	33.7	淡赤褐色	赤褐色	灰色	粗黒色粒 僅か	大甕の底部か。内底は指ナデ痕。	1トF-16I層
	39	壺	口～底	14.8	37.1	14.4	茶褐色	橙褐色	橙褐色	なし	口縁く字状、頸部ほぼ直立し、胴部で僅かにふくらむ。肩部に浅く沈線巡らす。	1トF-20I層
	40	壺	口縁部	11.6	-	-	暗茶褐色	茶褐色	赤褐色	なし	口縁く字状、頸部ほぼ直立し、胴部で僅かにふくらむ。	4トE-13IV層
	41	壺	口縁部	13.4	-	-	赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	粗赤色粒 多い	口縁く字状、頸部ほぼ直立し、胴部で僅かにふくらむ。頸部下に3条沈線巡らす。	2トH-13I層
	42	壺	口縁部	13.4	-	-	茶褐色	暗茶褐色	茶褐色	粗赤色粒 多い	僅かに鉤状の玉縁口縁で、粘土外へ広げ内側へ折り返して成形。頸部下に沈線1条。口唇に合わせ口焼成の痕あり。	4トE-13IV層
	43	壺か甕	底部	-	-	15.0	暗茶褐色	茶褐色	茶褐色	粗赤色粒 僅か	内底面の成形・調整が38と似ることから甕か。底面を一方向に指ナデし仕上げに縁辺をなでる。	3トG・H-17III層
	44	壺か甕	底部	-	-	11.0	茶褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	粗赤色粒 多い	小型だが厚手の底部。底部～胴部の角は面取りされる。	2ト北抜H-15III層
	45	壺か甕	底部	-	-	11.6	暗茶褐色	茶褐色	淡茶褐色	なし	底面上げ底状。内部に石灰分付着。	1トF-17石積2IIb層
	46	壺か甕	底部	-	-	18.0	灰色・ 橙褐色	橙褐色	橙褐色	なし	底部～胴部の角は粗く面取りされる。内部に石灰分多く付着。	1トF-18石積1IV層
	47	蓋	庇～袴	8.0	-	5.0	茶色	灰色・ 橙褐色	茶色・ 橙褐色	なし	急須の蓋。中央脇に蒸気抜き用の孔を上下からあける。上面と脚内側に泥砂塗りつける。	2トH-15I層
	48	不明	底部か	-	-	5.8	暗茶褐色	暗灰色	灰茶褐色	粗石英粒 僅か	燭台などの脚か。筒状に轆轤成形後、底部外側の一部に抉りを入れる。	4トE-13I層
	49	澆瓶	口～底	6.7	19.8	14.0	暗茶褐色	灰色・ 茶褐色	茶褐色	なし	頂部に把手、胴部に口縁有する澆瓶。把手は横長の円形で、全面轆轤引きし口縁付着。内面石灰分厚く付着。	3トG・H-17III層
	50	火入れ	底部	-	-	12.4	灰橙褐色	橙褐色	橙褐色	粗赤色粒 僅か	破片内面上部に煤付着。底部～胴部の角は面取り。胴部には沈線数条。	1トF-14I層
51	焔炉	底部	-	-	幅 17.1	橙褐色	橙褐色	橙褐色	粗白色・赤 色粒僅か	楕円か半円形焔炉などの底部と思われる。胎土に粗穀の痕跡。	1トF-16I層	



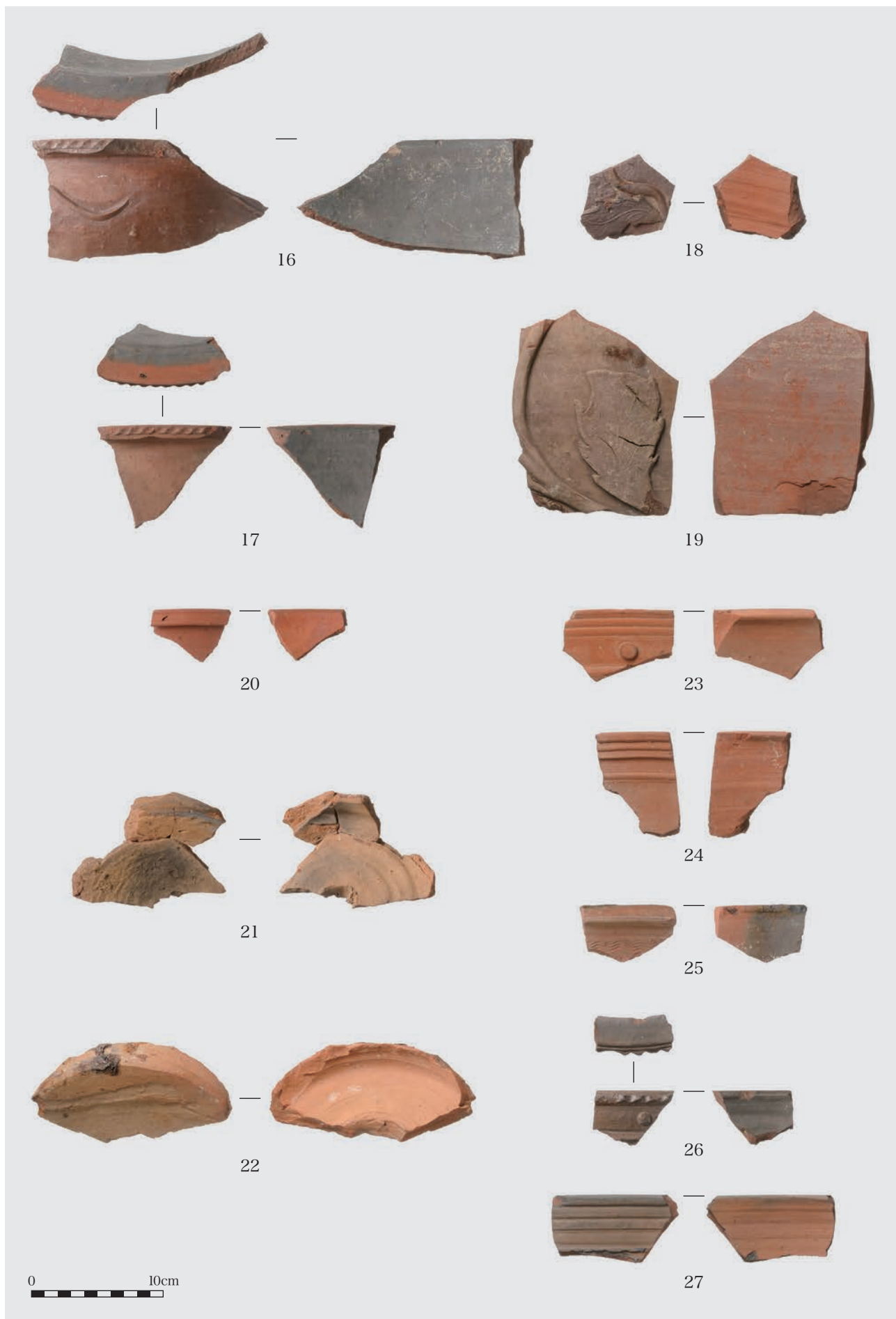
第79図 沖縄産無釉陶器 1



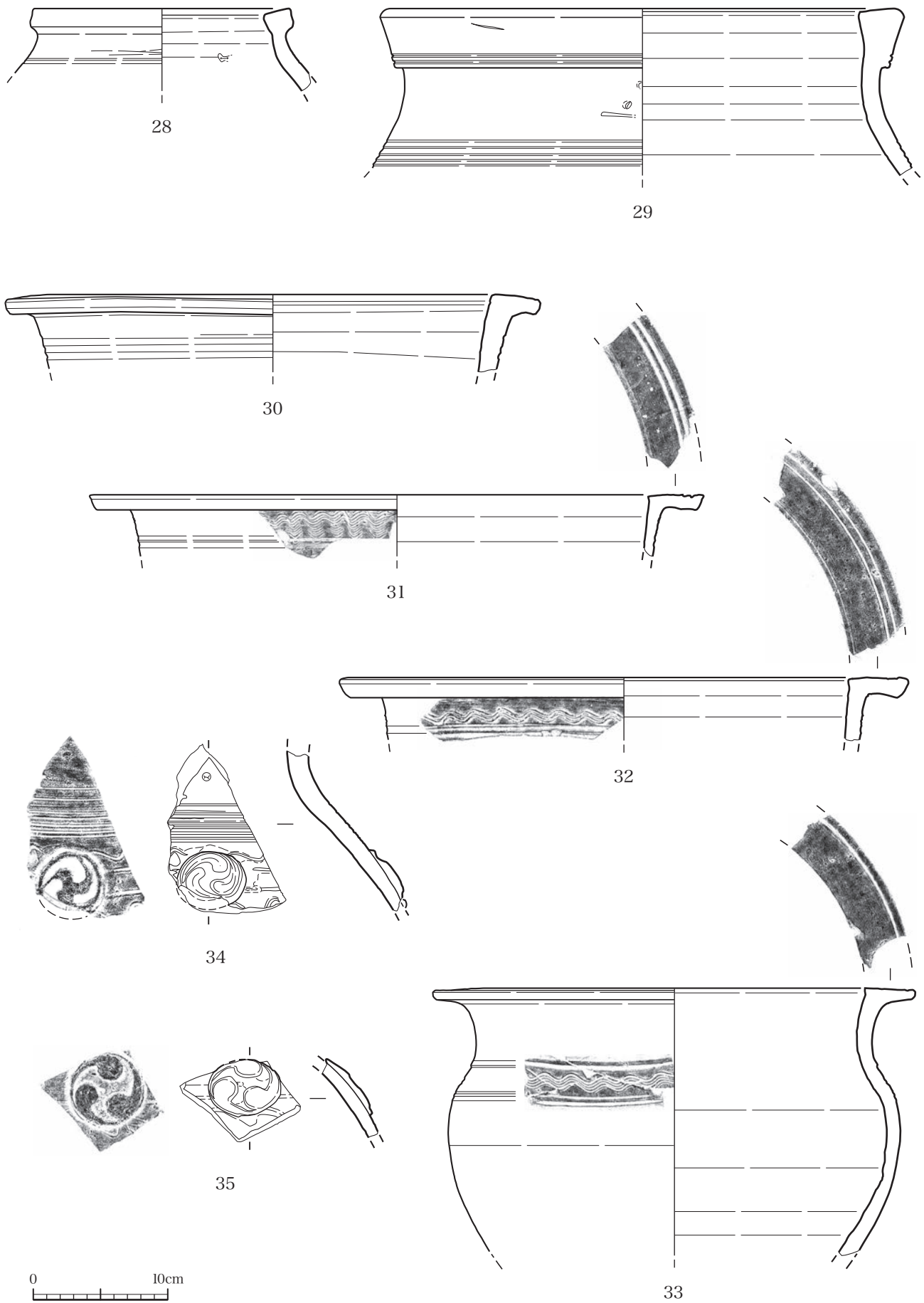
図版100 沖繩産無釉陶器 1



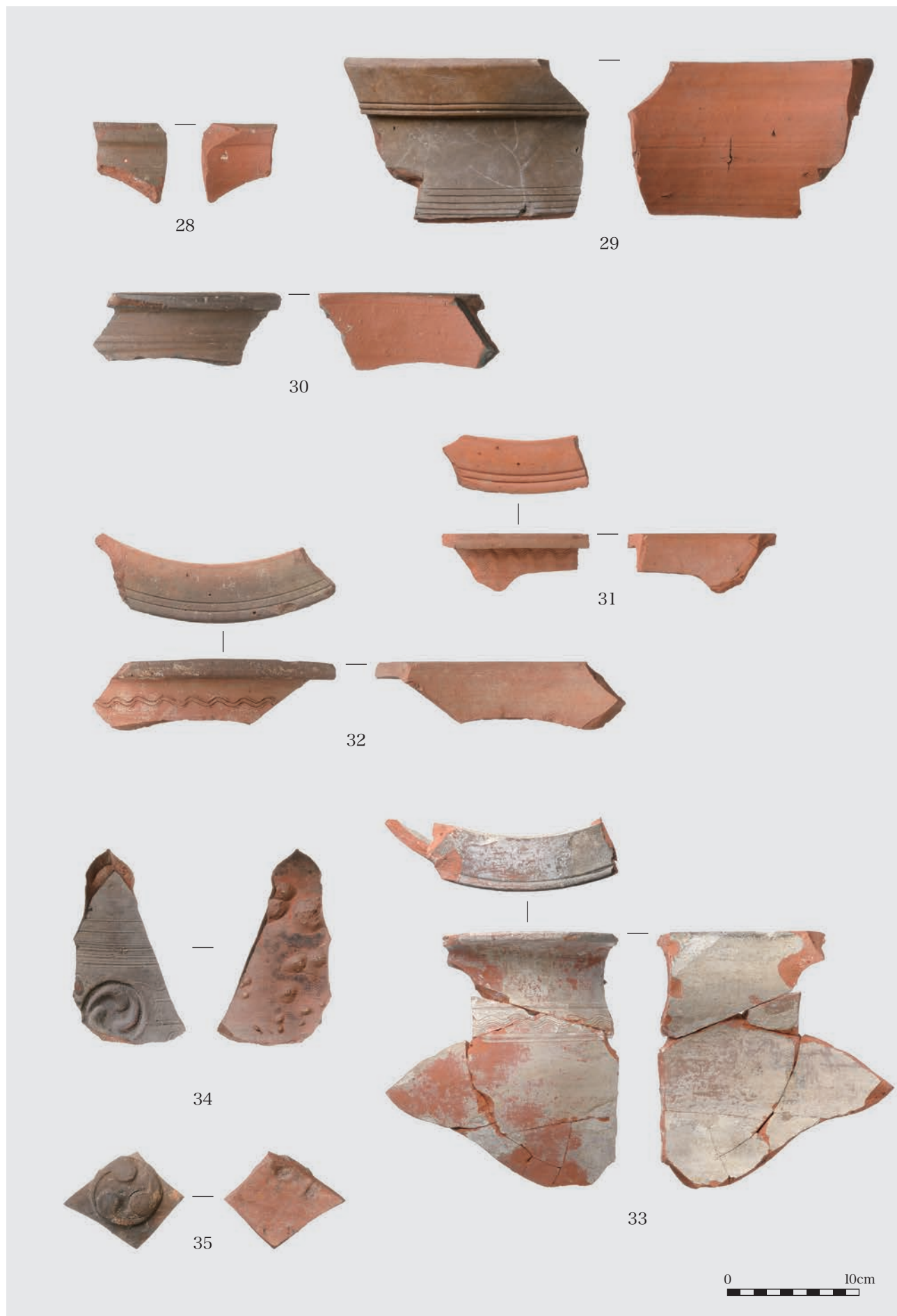
第80図 沖縄産無釉陶器 2



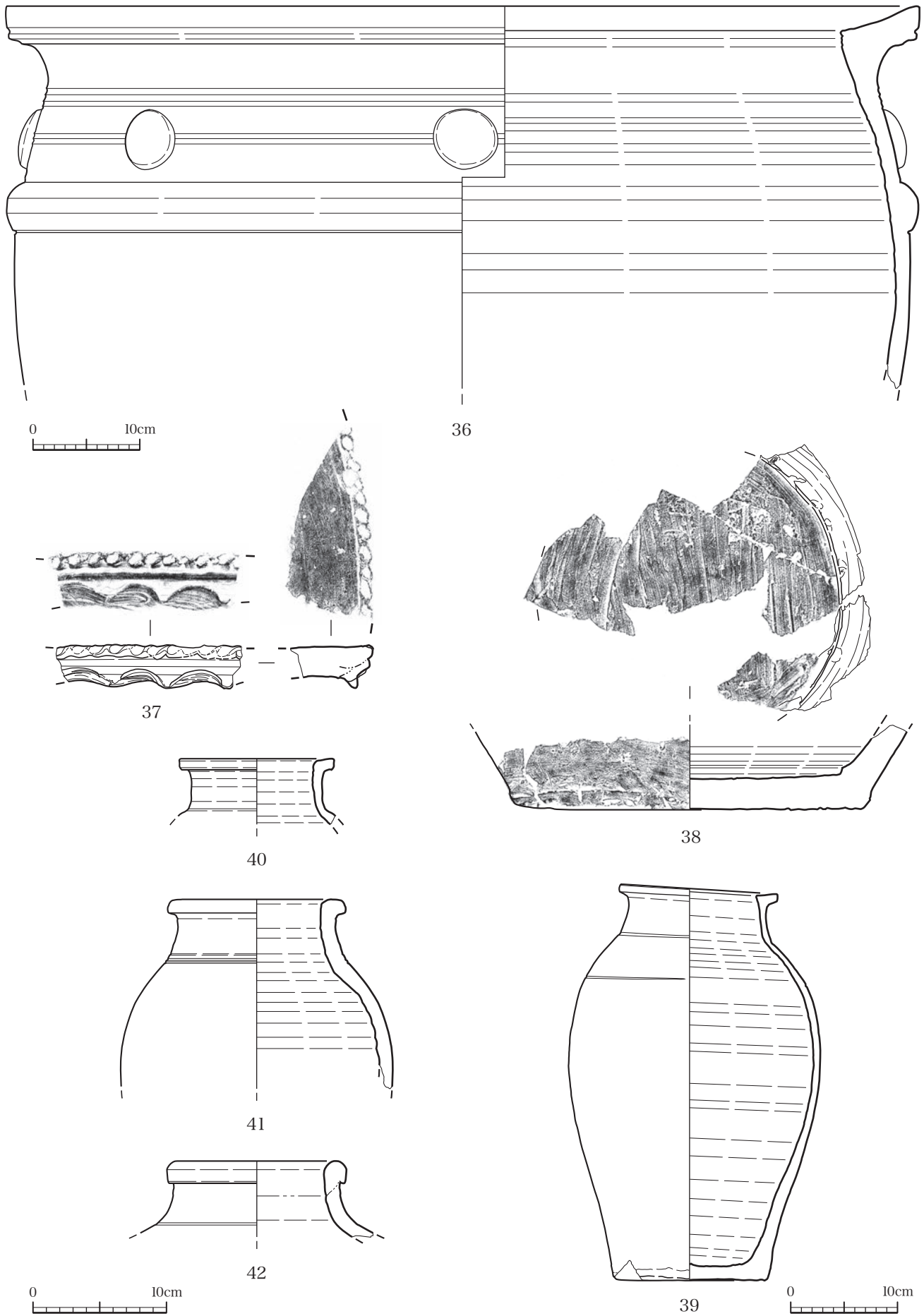
図版101 沖繩産無釉陶器 2



第81図 沖縄産無釉陶器 3



図版102 沖繩産無釉陶器 3

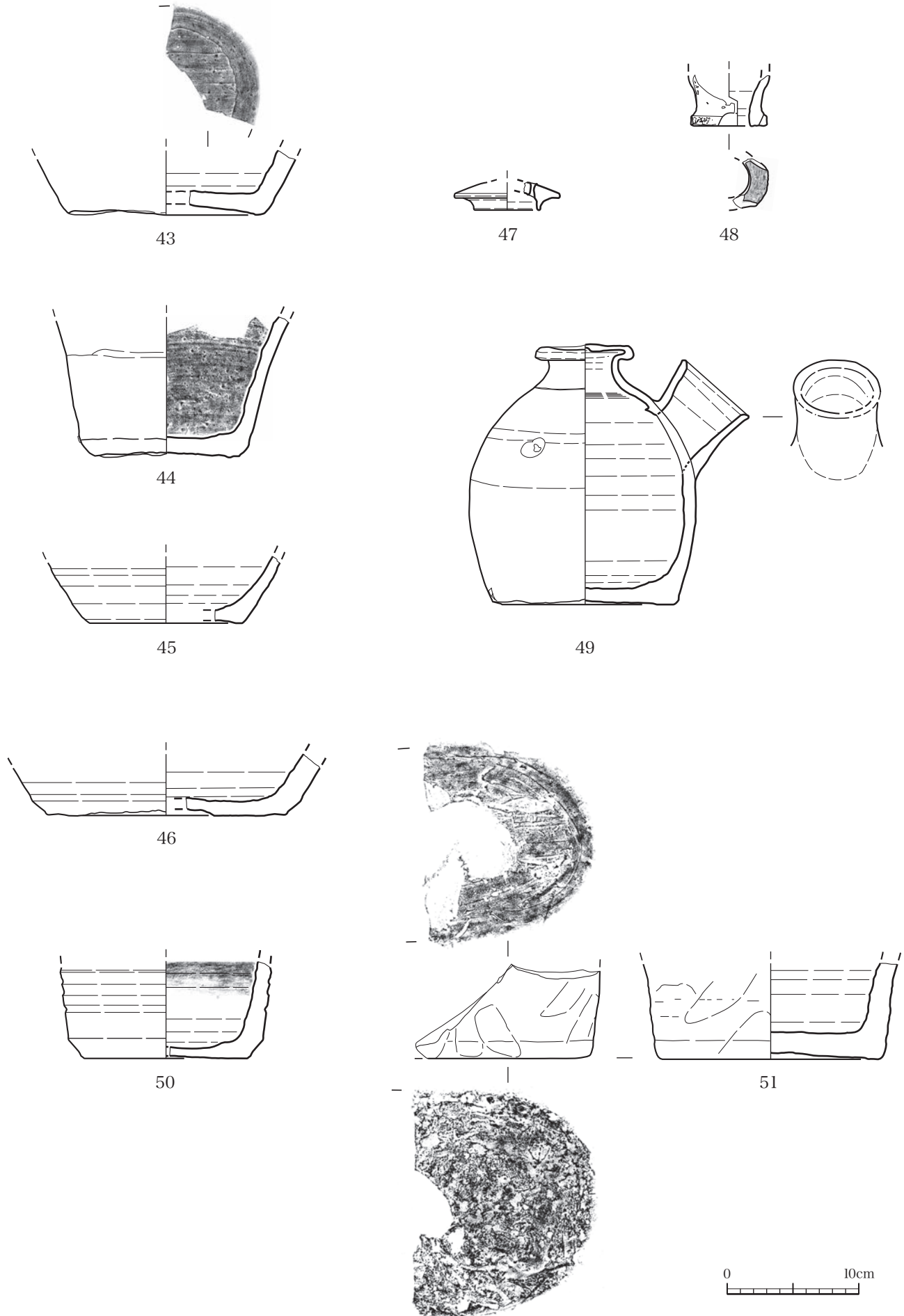


第82図 沖縄産無釉陶器 4





図版103 沖繩産無釉陶器 4



第83図 沖縄産無釉陶器 5



図版104 沖繩産無釉陶器 5

## 11 陶質土器

陶質土器とは、表面に釉をかけない窯焼成の土器で、土器と陶器の中間的性質をもつものである。また、壺屋で「アカムヌー」あるいは「カマグワーヤチ」とも呼ばれ、主に近世の集落跡(古島)などから出土している。

今回の調査では総数1,241点が出土しており、器種は鍋・火炉・火取・急須・蓋・壺・皿・鉢・七輪などが得られ、そのうち24点を図化している。以下、種類ごとに概観し個々の詳細は観察表に提示する。

### ① 皿(1・2)

第84図1は口縁部にススが付着するため、明灯皿と考えられるものである。同図2は、1に比べ器壁は薄く用途が異なることが考えられる。

### ② 鉢(3～7)

今回得られた資料では、方言で「ミジクブサー」と呼ばれる水鉢タイプ(3・4)、器壁を厚く成形している浅鉢タイプ(5・6)のほか、植木鉢と思われるタイプ(7)がある。

### ③ 急須(8・9)

球状の胴部をもつ資料で、蓋とセットで使用されるものである。今回得られた資料には注口、把手も含まれるが接合できなかった(8・9)。

### ④ 壺(10)

口縁資料で、肩部が強く張る器形になると思われるもの(10)。

### ⑤ 蓋(11～17)

蓋には急須の蓋と思われるもの(11～13)、鍋蓋(14～17)の2種がある。

### ⑥ 火炉(18・20・21)

方言で「ヒールー」と呼ばれるものである。胴部が球形を呈し、外面に白土による圏線が引かれるタイプ(18・20)、頸部が内側に折れるタイプ(21)がある。

### ⑦ 火取(22)

方言で「ヒートゥイ」と呼ばれるもの(22)。

### ⑧ 鍋(19)

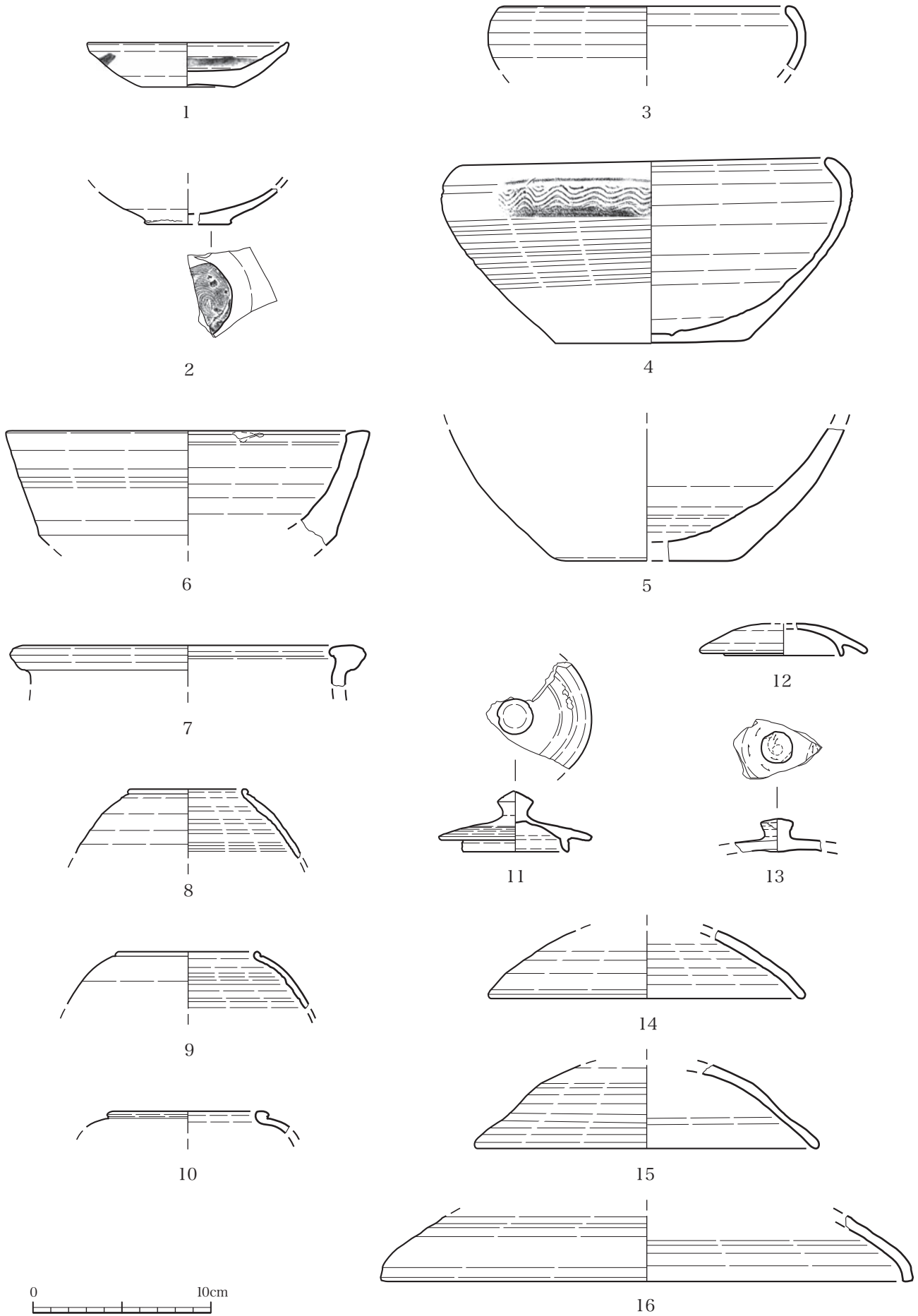
方言で「サークー」と呼ばれるもので、口頸部が「く」の字に折れ口縁に把手を貼り付け、器壁が非常に薄い(19)。

### ⑨ その他(23・24)

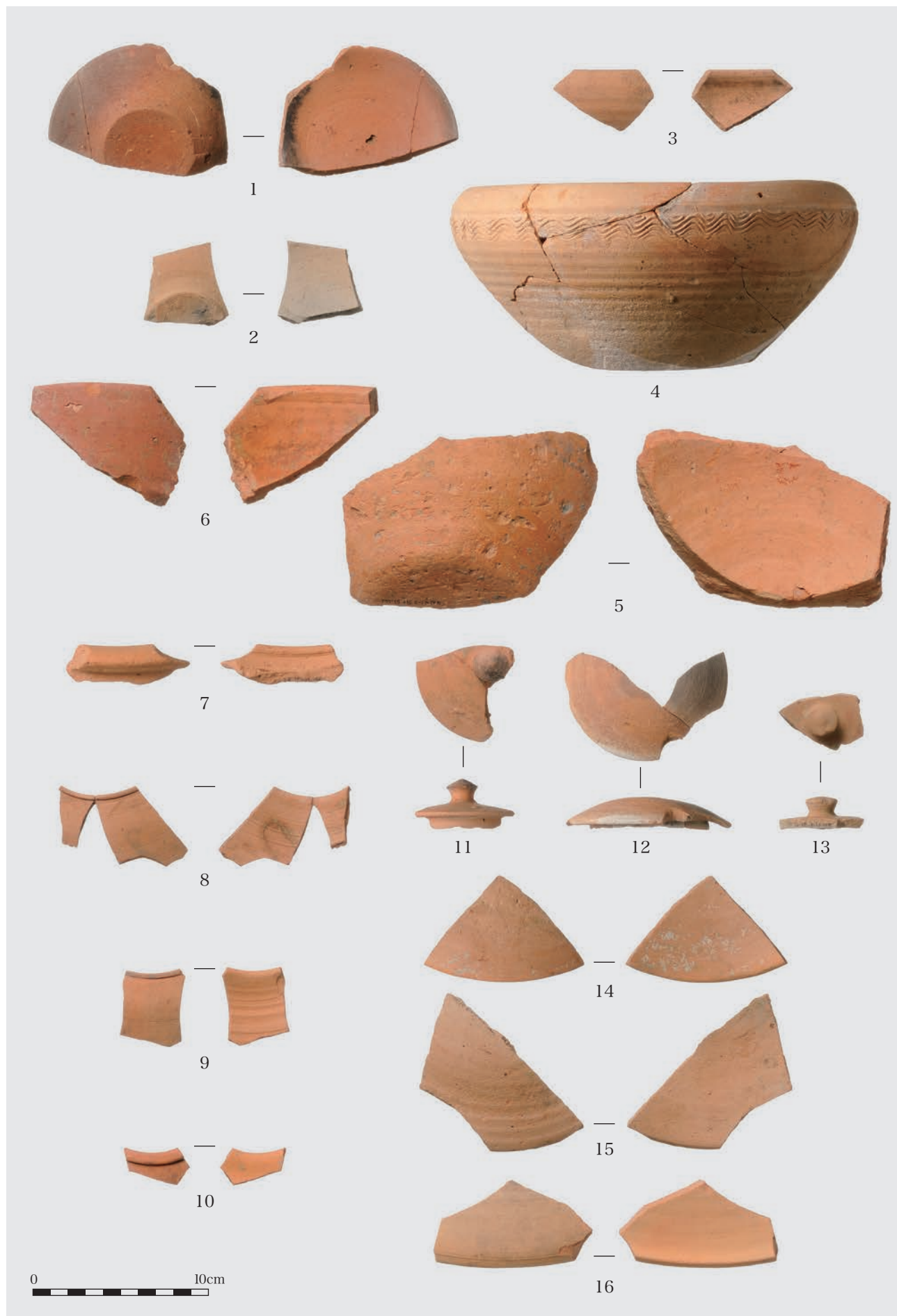
第85図23は七輪の胴部と思われる資料で、火を受けている箇所は段を有しており、サナ受けと考えられる。同図24は袋物と思われ胴部が張り出す器形になると考えられる。

第44表 陶質土器観察一覧

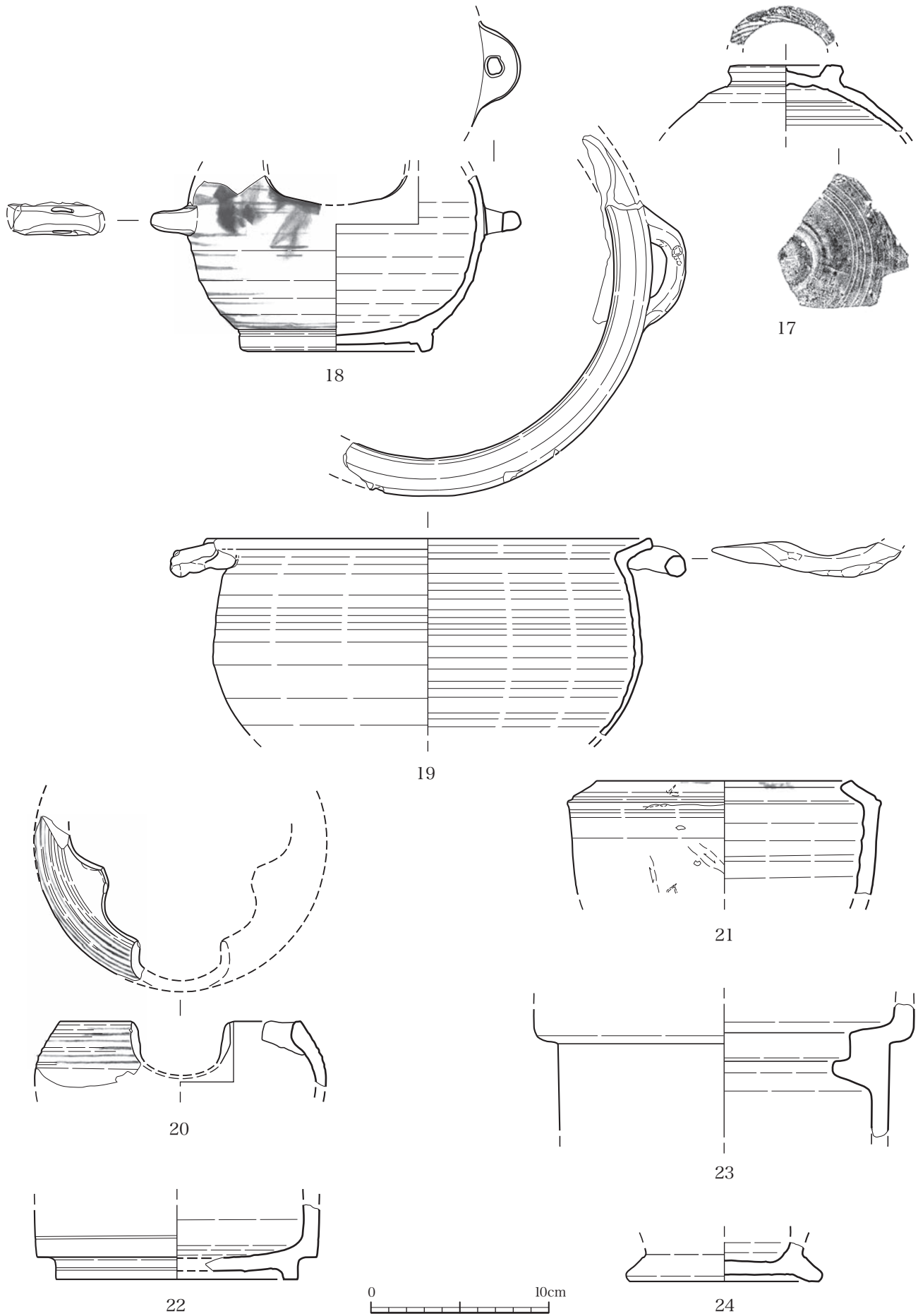
挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	法量(cm)				色調	成形・調整・文様など	グリッド層
				口径 (底)	器高	底径 (袴)	胴径 (撮)			
第84図 図版105	1	灯明皿	口 底	11.3	2.5	5.2	-	外底:赤色 外口:赤灰色 見込:明赤褐色	内面、外面上半は轆轤などで。外面下半、外底は轆轤削り。内側に煤が付着。断面はやや尖る舌状。混入物に白色砂粒を含む。	3トレG-17Ⅲ層
	2	皿	底	-	-	4.8	-	外面:橙 見込み:灰白・淡黄橙	外面底糸切り痕が明確に残る。底部の作りは粗く、一部歪む箇所がある。混入物は細かく、白色粒、雲母が見られる。	2トレH-13I層
	3	鉢	口	16.2	-	-	-	橙色	内外面ともに轆轤などで。外面は轆轤目が顕著。口縁は内湾、やや肥厚する。断面は舌状。混入物は細かく雲母、白色粒を含む。	2トレH-14表採
	4	鉢	口 底	20.6	10.4	10.4	10.8	外面:淡黄橙色 底:淡黄橙色 内面:暗褐色	内面、口縁部は轆轤などで。外面下半は轆轤削り。外面に5条の波状文を有し上端を凹線でなで消す。混入物は雲母が僅かに混入。	3トレG・H-17Ⅲ層
	5	鉢	底	-	-	10.4	-	橙色	底部資料で平底。外面はなでが粗い。断面は細かい気泡が散見できる。混入物は細かい雲母・白色粒が見られる。	4トレE-13IV層
	6	鉢	口	20.4	-	-	-	内面:橙色 外面:明赤褐色	内外面ともに轆轤などで。内面は轆轤目が顕著。口唇は内側に傾斜するように成形。断面は方形状を呈し、僅かに雲母が混入。	4トレE-13Ⅲ層
	7	鉢	口	20.0	-	-	-	橙色	口唇を平らに整形し、口縁は肥厚。外面の口唇端は平ら、内面は玉縁状に整形。混入物は白色粒、赤色粒、僅かに雲母が混入。	3トレⅡ層
	8	急須	口	6.8	-	-	-	橙色	内外面ともに轆轤などで。内面は轆轤目が顕著。口縁は玉縁状を呈し、胴部で膨らみを持つ。混入物は雲母、僅かに白色粒が混入。	1トレF-16I層
	9	急須	口	8.1	-	-	-	橙色	内外面ロクロナデ。内面は轆轤目が顕著。口縁は玉縁状を呈す。外面は少しすすけている。混入物は雲母、僅かに白色粒が混入。	1トレF-17石積2Ⅱb層
	10	壺	口	9.1	-	-	-	橙色	口唇を平らに成形され、端部はへらで削られ丸みを帯びる。内外面ともにロクロナデが残る。混入物は雲母が僅かに混入。	1トレF-13I層
	11	蓋	撮み 袴	8.6	3.4	6.0	2.0	橙色	宝珠状の撮みを頸長に作る。撮み、底内外面轆轤などで。頂部にスス付着。袴は内側へら削り? 底は緩やかに傾斜し断面は舌状。	4トレH-E-13Ⅲ層
	12	蓋	底 袴	9.4	-	6.7	-	橙色	内外面ともに轆轤などが残る。断面は底で舌状を呈し、袴はへら削り? 先がやや尖るよう整形。混入物は雲母、細かい白色粒。	3トレG・H-17Ⅲ層
	13	蓋	撮み	-	-	-	1.8	外面:淡褐色 内面:淡黄褐色	頂部に宝珠の撮みを作るが、ラインがはっきりとしない。撮み、外面にナデ痕が残る。混入物は白色・雲母がわずかに見られる。	4トレE-13IV層
	14	蓋	底	17.8	-	-	-	橙色	内外面ともに轆轤などで。内面に轆轤目が残る。外面頂部近くは轆轤削り。断面は舌状。混入物は雲母が見られる。	4トレI層
	15	蓋	底	19.3	-	-	-	橙色	内外面轆轤などで。外面は轆轤目が顕著。外面上部内外面轆轤削り。外面中位を削り? くびれを作る。混入物は雲母、白色微粒。	4トレE-13IV層
	16	蓋	底	29.9	-	-	-	橙色	内外面轆轤などで。外面は轆轤目が顕著。底端部は平らに整形され、断面は方形。混入物はわずかに雲母が含まれる。	3トレG・H-17I層
第85図 図版106	17	蓋	撮み	-	-	-	6.4	橙色	内外面轆轤などで。撮み付近は轆轤削り。内面は約1mm幅で4~7条沈線有す。撮みは貼付けにより台形を呈し、上面のなでは粗く凹凸が顕著。混入物は雲母、白色粒。	4トレI層
	18	火炉	底	-	-	10.9	16.7	橙色	内外面轆轤などで。内面は轆轤目が顕著。外部には白化粧土による圈線を施す。火窓の部分に煤付着。高台は貼付けにより台形を呈す。混入物は雲母が僅か。	4トレE-13IV層
	19	鍋	口	25.3	-	-	24.1	橙色	口頸部が「く」の字に折れ、口縁に把手をつける。胴部で膨らみを持つ形。内外面ともに轆轤などで。内面は轆轤目が顕著に残る。	1トレF-17石積2Ⅲ層
	20	火炉	口	13.5	-	-	16.4	橙色	内外面ともに轆轤などで。外面に白化粧土の圈線を施す。口唇に器物をのせる三角の突起を貼り付ける。口縁には半円状の火窓が設けられる。	3トレG・H-17I層
	21	火炉	口	14.3	-	-	-	橙色	内外面ともに轆轤などで。内面はロクロ目が顕著。肩部で内側に屈曲し段をつくる。屈曲部は玉縁状に成形される。口唇部にススが付着。	4トレE-13IV層
	22	火取	底部	-	-	13.6	-	橙色	内外面ともに轆轤などで。筒状に立ち上がり高台は台形を呈す。混入物は黒・白色粒、雲母が見られる。胎土は橙に灰黄が挟まれる様に変化する。	1トレF-14I層
	23	七輪?	胴	-	-	-	-	淡橙色	段になっている個所に火を受けた痕が見られるため、サナ受けだったと思われる。混入物は粗く、気泡が多い。	4トレE-17Ⅱ層
	24	袋物	底部	-	-	11.0	-	畳付:淡赤褐色 外面:暗灰色	貼り付けにより形成され上げ底を呈する。内外面ともになでが丁寧。混入物は雲母、白色粒でとても細かい。	3トレG・H-17I層



第84図 陶質土器 1

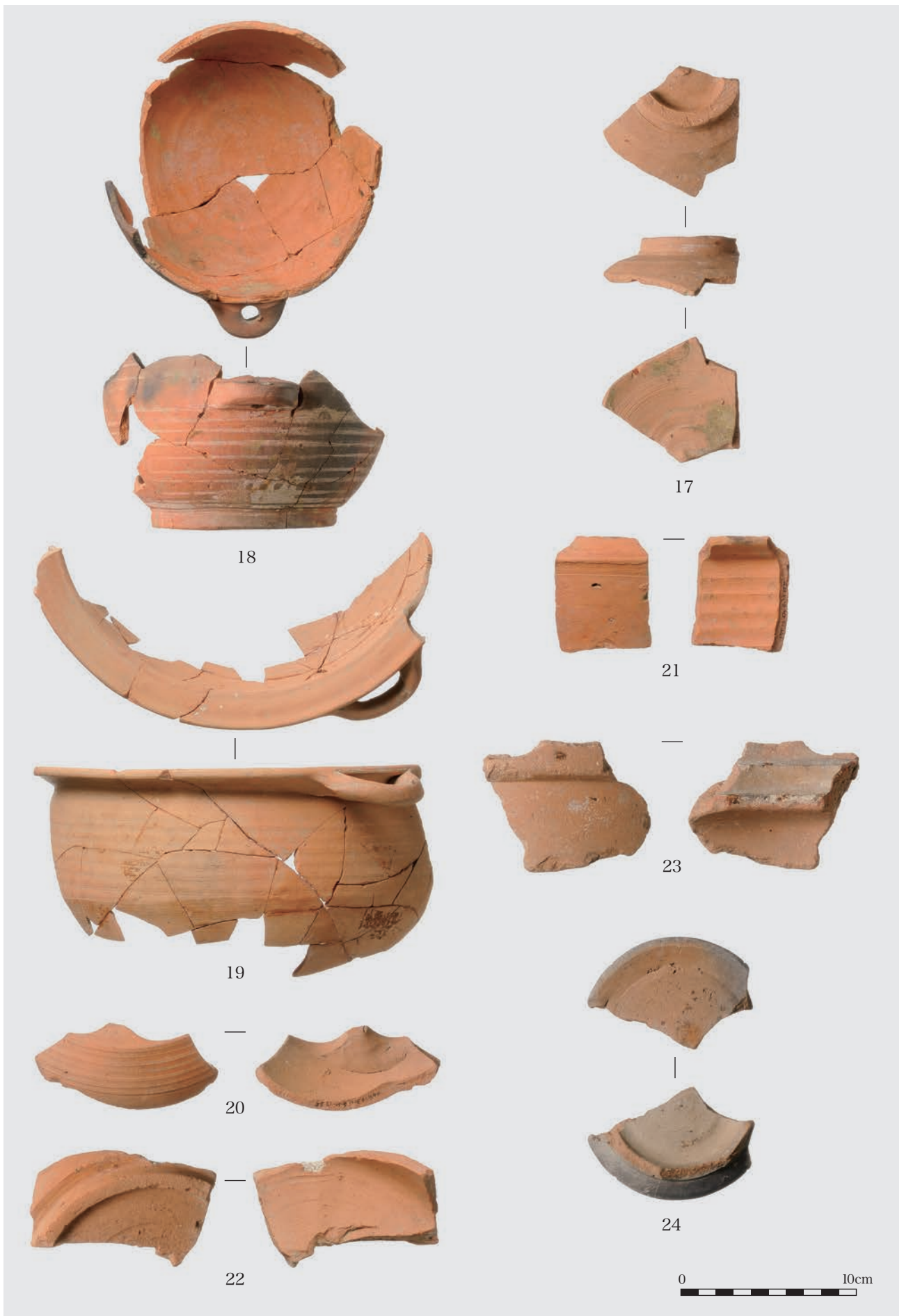


図版105 陶質土器 1



第85図 陶質土器2





図版106 陶質土器2

## 12 土器・硬質土器・瓦質土器・土製品・埴埴

### 1. 土器・硬質土器 (1~6)

土器はグスク土器、宮古式土器、パナリ焼(八重山式土器)、硬質土器(本土産焙烙)が出土した(総数115点)。最も多いものは宮古式で57点、次にグスク土器(25点)、パナリ焼(17点)、硬質土器(15点)、不明(1点)と続く。年代的には近世に位置付けられる資料が主体となる。出土した資料は殆どが小破片であり、ここでは器形的特徴が窺える資料6点を図化し報告する。

以下、種別毎に概観し、個々の詳細については観察一覧表において記す。

第86図1はグスク土器の口縁部片で、図上復元ができた壺形の資料である。器面はあばた状を呈しており、指頭押圧痕やナデ調整痕がみられる。

同図2・3は多量の砂粒や赤色土粒が混入することから宮古式土器に分類されるものである。2は唐草文を意匠として外器面に施された胴部片で、内器面には条痕が認められる。他遺跡において類例がみられない資料であり、器形・器種などの詳細に関しては不明である。3は底部片で、器面には指頭押圧痕やナデ調整による擦痕が認められる。

同図4・5は胎土に貝殻片が多量に混入することからパナリ焼(八重山式土器)の範疇と考えられる。4・5は共に鉢形で、4は逆「ハ」の字状に開く器形と思われる。同図6は土師質な胎土から硬質土器(本土産焙烙)としたもので、中城御殿ではこれまでの調査でも出土している。外器面には煤が付着している。

### 2. 瓦質土器 (7~9)

瓦質土器は総数21点が出土し、鉢・播鉢が確認でき、このほかに植木鉢とみられる資料も出土している。また胎土などから本土産とされる資料が3点出土しているがいずれも小破片である。

以下に器種別の概要を述べ、各々の詳細は観察表に記す。

第86図7は播鉢の口縁部破片である。底部から口縁部へ直線的に外傾する器形で、口縁部は直口し口唇部は平坦となる。

8・9は鉢の口縁部片と底部片である。8は口縁部片で、胴部で膨らみを持ち口縁部で内傾する器形となる。内外器面ともにロクロ痕がみられる。9は底部片であり、内底面にロクロ痕がみられる。

### 3. 土製品 (10~12)

土製品は土人形、土鈴、砥石の3点が出土している。10は人物座像(天神像か)の土人形で、頭部は欠損している。側面および底面にバリや差込孔などの製作時の痕跡を残す。土師質な胎土の特徴から県外のものと考えられ、類似する製品が東京都の内藤町遺跡などの近世遺跡で出土している。

11は土鈴の破片で、身の部分のみ残存している。外面下部に施された溝部分には漆喰が塗られており、何らかの文様をモチーフとしている可能性がある。胎土は陶質で沖縄産無釉陶器のものに類似している。県内では首里城跡のほか壺屋古窯群など生産遺跡で類例が出土しており、また本土では同形のものが汐留遺跡等の近世遺跡で認められる。土鈴は魔除け・招福・開運などの縁起物として江戸時代以降に使用されるようになる(上原2004)。

12は砥石としたもので、形態は札状の砥石に類似する。埴の転用品とみられる資料で、上部は穿孔され、表裏側面部は中央部で凹み線状痕がみられる。本資料が砥石の代用品として使用されたのかは類例が乏しく不明なため、今回は土製品として扱った。

### 4. 埴埴 (13)

埴埴は4点出土した。13は図上復元ができた碗形の口縁部片である。口唇部は丸く仕上げられている。外器面は部分的に発泡し、下部には暗赤褐色ガラス質の付着物が溶着している。内器面には指頭痕がみられる。推算口径は8cmで器厚は0.9~1.1cm前後である。

第45表 土器・硬質土器・瓦質土器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	分類	器種	部位	口径 器底径 (cm)	観察事項				グリッド 層
						文様	器色・胎土・混入物	器面調整	その他	
第86図 図版107	1	グスク土器	壺	口縁部	19.0 — —	無文	外器面：灰黄色、内器面：橙色、胎土：泥質、混入物：赤色土粒、黒色粒、石灰質砂粒	外器面：横位のナデ調整、指頭押圧痕、内器面：横位・斜位のナデ削り、指頭押圧痕	内外器面ともにあばた状を呈している。器厚：0.5~0.8cm前後	2トレH-13 Ⅲ層
	2	宮古式	—	胴部	—	唐草文	内外器面：にぶい黄橙色、胎土：泥質、混入物：赤色土粒(多量)、黒色鋳物、雲母、石灰質砂粒(多量)	外器面：ナデ調整、内器面：斜位の条痕	外器面の一部に煤の付着が認められる。器厚：1.2cm前後	1トF-13 I層
	3	宮古式	—	底部	—	無文	外器面：にぶい褐色、内器面：橙色、胎土：泥質、混入物：赤色土粒(多量)、石灰質砂粒(多量)	内外器面：指頭押圧痕	器厚：1.1cm前後	2トレ H-13・14 表採
	4	パナリ焼 (八重山式)	鉢	口縁部	—	無文	内外器面：明赤褐色、胎土：泥質、混入物：貝殻片、黒色鋳物、千枚岩?、石灰質砂粒(多量)	内外器面：ナデ調整、指頭押圧痕	逆「ハ」の字に開く器形か。外器面上部に煤が付着。器厚：0.5cm前後	3トレG・ H-17Ⅱ層
	5	パナリ焼 (八重山式)	鉢	口縁部	—	無文	内外器面：橙色、胎土：泥質、混入物：貝殻片、黒色鋳物、千枚岩?、赤色土粒、石灰質砂粒(多量)	内外器面：削り、ナデ調整、指頭押圧痕	器厚：0.7~0.8cm前後	2トレH-13 Ⅲ層
	6	硬質土器	焙烙	口縁部	—	無文	内外器面：にぶい黄橙色、胎土：土師質、混入物：黒色鋳物、雲母	内外器面：ロクロ痕	外器面の一部に煤が付着。器厚：0.6~0.8cm前後	1トF-15 I層
	7	瓦質土器	搦鉢	口縁部	—	無文	内外器面：灰色、断面：灰色、胎土：瓦質、混入物：赤色粒、黒色粒、石灰質砂粒	内外器面：ナデ調整	器厚：0.9cm前後	1トF-20 I層
	8	瓦質土器	鉢	口縁部	—	無文	外器面：灰色、内器面：灰黄色、断面：灰オリーブ胎土：瓦質、混入物：赤色粒、黒色粒、石灰質砂粒	内外器面：ロクロ痕	器厚：0.5cm前後	4トE-12 I層
	9	瓦質土器	鉢	底部	— — 10.4	無文	内外器面：灰色、断面：灰黄色、胎土：瓦質、混入物：赤色粒、黒色粒、雲母、石灰質砂粒	内底面：ロクロ痕	器厚：0.9cm前後、器底厚：1.0cm	1トF-17 I層

第46表 土製品観察一覧

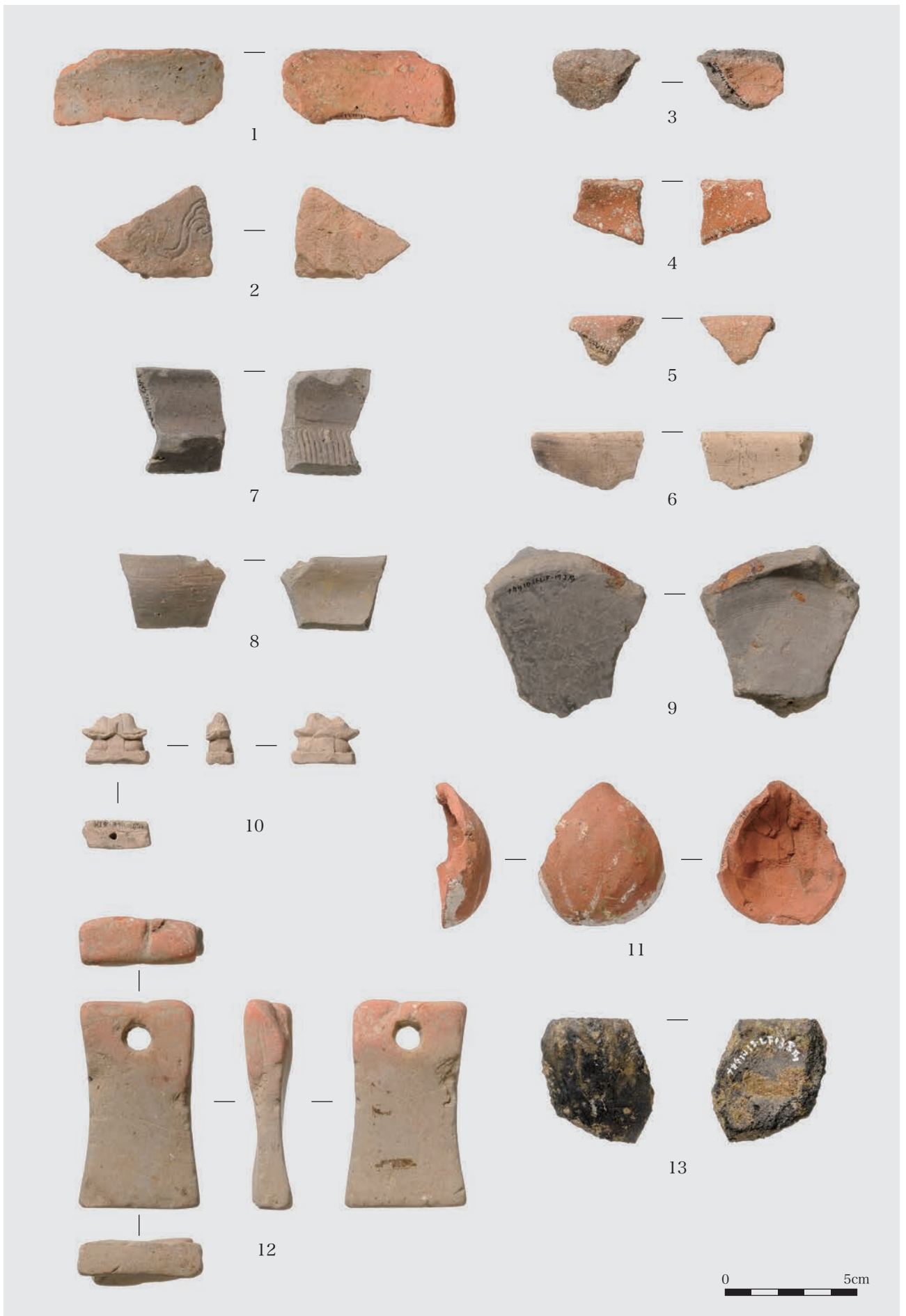
挿図番号 図版番号	番号	分類	色調・胎土	製作方法	法量 (cm・g)	観察事項	グリッド 層
第86図 図版107	10	土人形	色調：にぶい黄橙色、胎土：土師質	前後型合せ	縦：(2.0)、横：2.65、厚：1.1、重：(5.2)	人物座像(天神像か)で頭部は欠損。側面にバリやバリを削り取った痕、底面に棒の差込孔がみられる。県外産か	4トE-18 I層
	11	土鈴	色調：明赤褐色、胎土：陶質	手捏ね	縦：(5.6)、横：(5.0)、厚：0.6、重：(21.8)	外面下部の鈴の切れ込み部分に沿って漆喰が塗られる。内外面には成形時の指頭痕、内面には横位の条痕。	1トF-16 I層
	12	砥石か	色調：橙色・褐色、胎土：瓦質	搏を再加工後に全面研磨か	縦：8.1、横：4.7、厚：1.9、重：74.6	搏の転用品。形態は札状の砥石に類似し、表裏側面部に線状痕がみられる。上部に直径1cmの孔を穿つ。	4トE-18 I層

第47表 埴塼観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	分類	器種	部位	法量(cm・g)	観察事項	グリッド 層
第86図 図版107	13	埴塼	碗形	口縁部	口径：8.0、器厚：0.9~1.1	図上復元ができた碗形の資料で口唇部は丸く仕上げられている。外器面は部分的に発泡し、下部には暗赤褐色ガラス質の付着物が溶着している。内器面には指頭痕がみられる。	1トF-13 I層



第86図 土器・硬質土器・瓦質土器・土製品・埴埴



図版107 土器・硬質土器・瓦質土器・土製品・埴塼

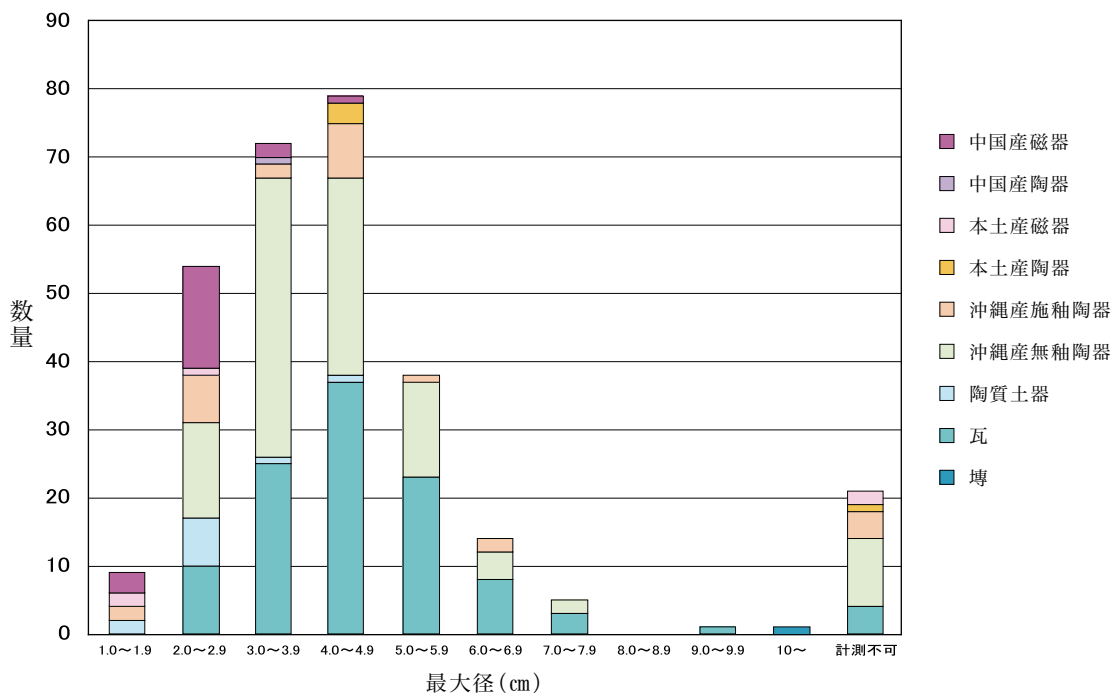
## 13 円盤状製品・基石

### 1. 円盤状製品 (13～20)

平成22年度の調査では総数294点の円盤状製品が出土した。トレンチ別ではトレンチ1(78点)、トレンチ2(17点)、トレンチ3(79点)、トレンチ4(117点)、出土地不明(5点)となる。

今回の調査で出土した全資料の最大径を計測し素材ごとに集計を行った(第87図)。平成20・21年度調査の報告でも指摘されているように、「大小の作り分けに際して素材の材質を考慮していた可能性」(沖縄県立埋蔵文化財センター2011)が今回も認められる。沖縄産無釉陶器(114点)や瓦(110点)を素材としたものが多い。円盤状製品は加工方法から剥離により加工するものと剥離後に研磨を行うものがあり、今回の調査では前者が圧倒的に多く(291点)、後者に分類されるものは3点が認められ、いずれも明朝系瓦を素材としたものである。また剥離の方法は片面(外面)を中心に行うものと、内外両面から行うものに大別できる。磁器など薄手ものは前者、厚手の陶器や瓦・埴は後者というような傾向が認められる。以下に素材ごとに概観し詳細は観察表に記述する。

第88図1～8は中国産の陶磁器を素材としたもので、同図2は中国産染付が素材で長径1.3cmと比較的小型となる。9は薩摩焼、10～16は沖縄産陶器、17は陶質土器、18・19は瓦を素材としている。20は埴を素材にした長径10.9cmの大型の製品である。



第87図 円盤状製品サイズ別出土状況

### 2. 基石 (21・22)

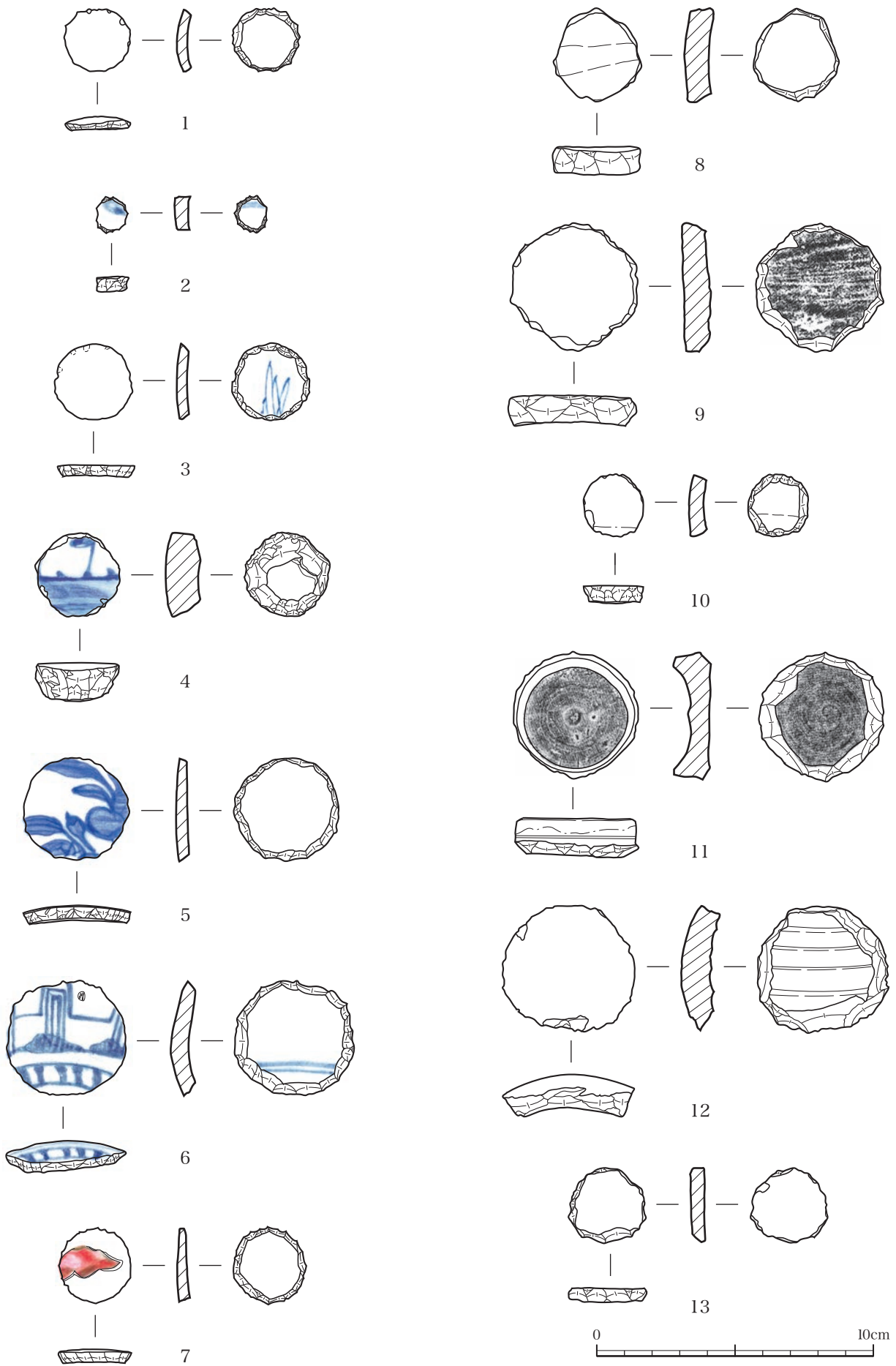
基石は2点出土した。第89図21は頁岩を素材とした黒色の基石で、断面形はコイン形を呈する。同図22は貝製で浅黄橙色を呈し断面形はレンズ形を呈する。

第48表 円盤状製品観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	製作 方法	素材	使用部位	法量(cm・g)					観察事項		グリッド 層
					縦	横	厚	重量	打面	加工順序	その他特徴	
第88図 図版108	1	剥離	中国産白磁	胴部	2.2	2.4	0.4	2.8	外面	外面から	小碗。徳化窯産。	1トレF-17 I層
	2	剥離	中国産染付	胴部	1.3	1.15	0.5	1.0	両面	順序不明	碗で外面に不明文様。景德鎮窯産。	1トレF-20 I層
	3	剥離	中国産染付	胴部	2.75	2.8	0.4	4.8	外面	外面から	皿か。内面に草文。	3トレG・H-17 II層
	4	剥離	中国産染付	胴部	3.0	3.05	1.3	14.8	両面	外面→内面	鉢で外面に文明文様。福建産。	3トレG・H-17 I層
	5	剥離	中国産染付	胴部	3.7	3.8	0.4	9.5	外面	外面から	碗で外面に草花文。福建産。	4トレE-16 I層
	6	剥離	中国産染付	胴部	4.1	4.3	0.7	15.9	外面	外面から	碗で外面に寿文+蓮弁文、内面に圈線。徳化窯産。	4トレE-13 IV層
	7	剥離	中国産色絵	胴部	2.8	2.6	0.4	3.7	外面	外面から	碗。外面に赤で不明文様。福建産。	4トレI層
	8	剥離	中国産 褐釉陶器	胴部	3.4	3.2	0.9	13.7	両面	順序不明	壺・甕類。	1トレF-17 石積2III層
	9	剥離	薩摩産陶器	胴部	4.6	4.6	1.0	29.7	両面	順序不明	鉢。	3トレG・H-17 I層
	10	剥離	沖縄産 施釉陶器	胴部	2.25	2.15	0.6	4.1	両面	順序不明	碗か。	3トレG-17 III層
	11	剥離	沖縄産 施釉陶器	底部	4.6	4.4	1.4	27.9	外面	外面から	小碗の底部片。	4トレE-13 IV層
	12	剥離	沖縄産 施釉陶器	胴部	4.55	4.8	1.1	29.9	外面	外面から	袋物。	2トレ北拡 H-15I層
	13	剥離	沖縄産 無釉陶器	胴部	2.6	2.8	0.5	5.3	両面	順序不明	壺・甕類か。 初期無釉陶器。	4トレE-17 石積2IV層
第89図 図版109	14	剥離	沖縄産 無釉陶器	胴部	3.3	3.4	0.8	11.9	両面	外面→内面	鉢か。	4トレE-13 III層
	15	剥離	沖縄産 無釉陶器	胴部	4.15	4.35	1.0	24.0	両面	外面→内面	播鉢。	2トレ北拡 H-15III層
	16	剥離	沖縄産 無釉陶器	胴部	5.6	5.6	2.2	78.3	両面	外面→内面	甕。	3トレG・H-17 I層
	17	剥離	陶質土器	胴部	1.6	1.7	0.3	1.0	外面	外面から		4トレE-12 I層
	18	剥離	明朝系瓦	筒部	4.1	4.1	1.1	22.8	両面	外面→内面		3トレG-17 II層
	19	剥離	明朝系瓦	筒部	5.3	5.3	1.5	48.6	両面	順序不明		1トレF-18 石積1III層
	20	剥離	埴	身部	10.6	10.9	3.6	398.4	両面	順序不明		3トレG・H-17 I層

第49表 基石観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	名称	色	素材	法量(cm・g)				観察事項	グリッド 層
					縦	横	厚	重量		
第89図 図版109	21	基石	黒	頁岩	2.3	2.3	0.4	3.3	縁辺一部剥落している。コイン形。	3トレG・H-17 I層
	22	基石	浅黄橙色	貝	2.05	2.05	0.35	2.7	縁辺一部欠損する。レンズ形。	1トレF-14 I層

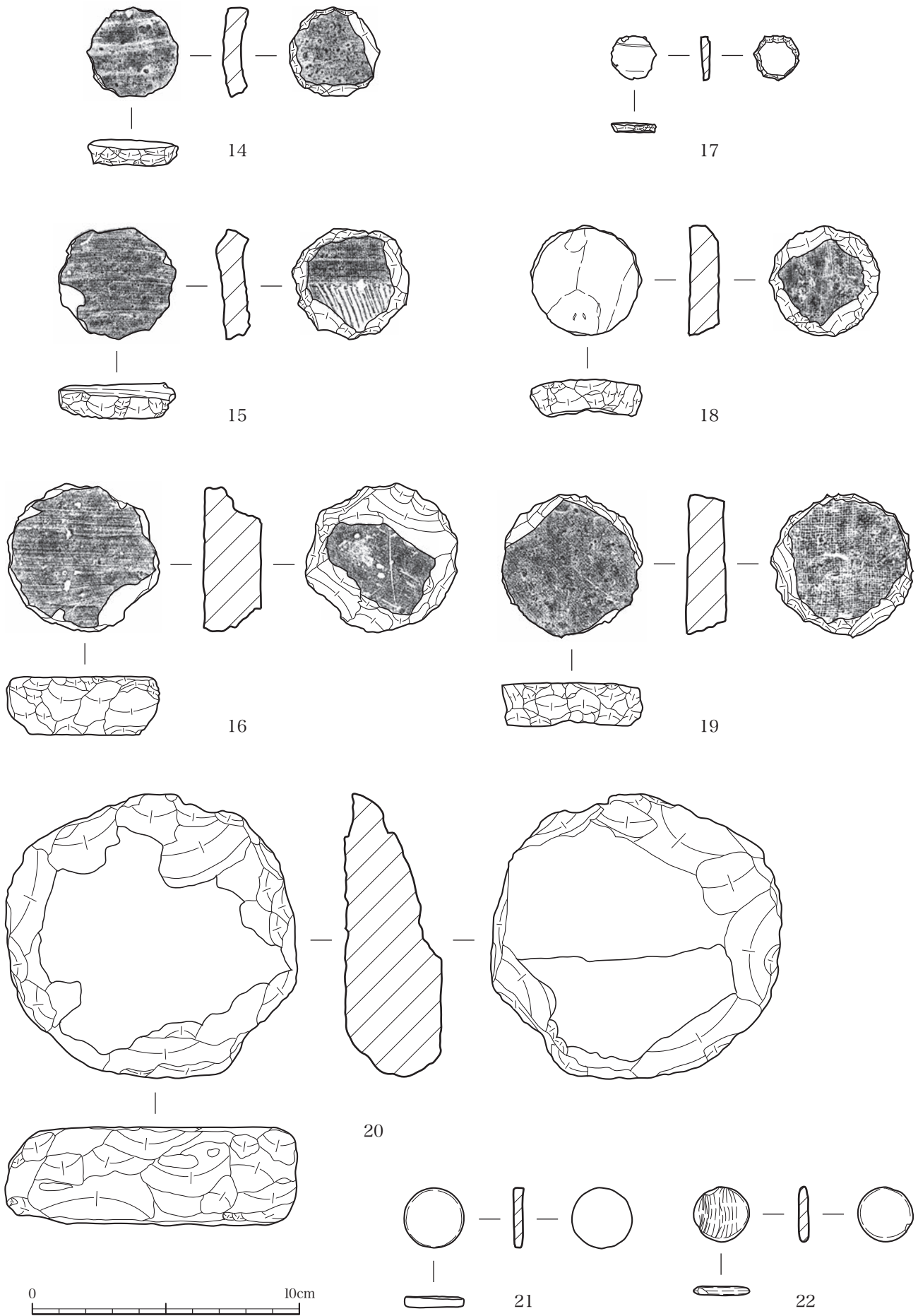


第88図 円盤状製品1

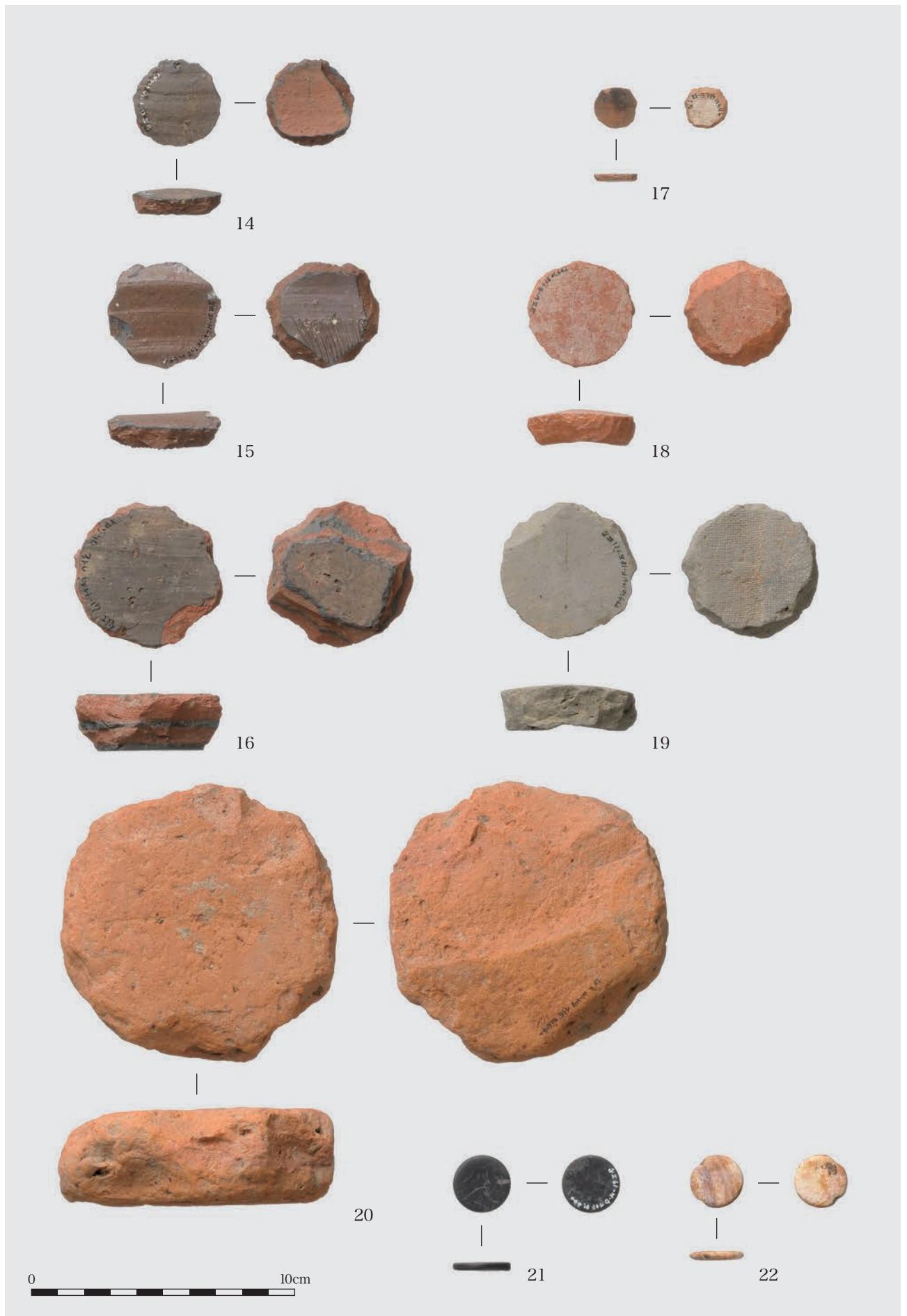




図版108 円盤状製品1



第89図 円盤状製品2



図版109 円盤状製品2

## 14 金属製品

近代に建造され、戦前まで機能した中城御殿では、建築材や調度品、道具や装身具として、多くの金属製品が使用された。そのため出土品も膨大で、表土などから出土する明らかに現代遺物と思われる資料を除外して、総数で85点が得られている。以下に機能ごとに概観し、その特徴的な資料26点を図化して写真で3件を掲載した。またその個々の特徴を観察表に示した。

### 1. 建築材 (1~5・14・26)

建築に関わる金属製品としては、釘類の出土が最多である。鉄製、青銅製があり、鉄製では丸釘と角釘が存在するが、丸釘が多い。青銅製の釘は小型製品が多く、調度品等に使用されたものが含まれると思われる。その他鋳や錠前の鍵 (第90図左参考)、蝶番の部品等が出土している。

### 2. 飾り金具・器物類 (6~10・12・13・15・27・29)

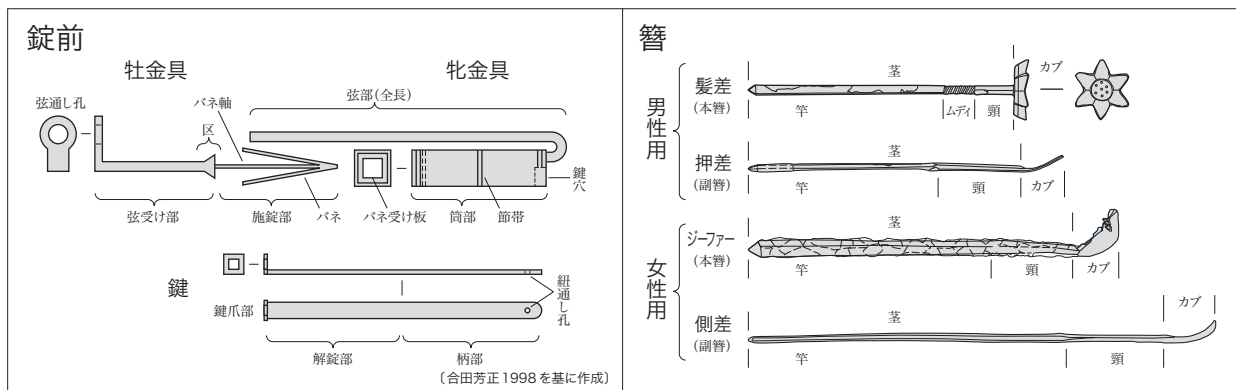
飾り金具では鍔座金具や櫃や調度品に付随する鍵座金具、飾り金具のほか、蚊帳の吊り金具や器物の把手金具が得られている。また、器物として青銅製の香炉や近代以降の鍋、鉄製の缶が出土している。

### 3. 道具類 (16・17・23~25)

金属製の道具類にも青銅製と鉄製があり、青銅製は分銅や方位磁石等の小型製品が僅かに得られ、鉄製では平鍬やツルハシ、ロストルといった大型の農具や工業に係る製品が出土している。

### 4. 装身具類 (18~22・28)

装身具類で多いのは簪で、男性用の髪差(本簪)、押差(副簪)と、女性用のジーファー(本簪)、側差(副簪)のほか (第90図右参考)、指輪が得られている。また特異な遺物として金床の義歯が1点出土している。



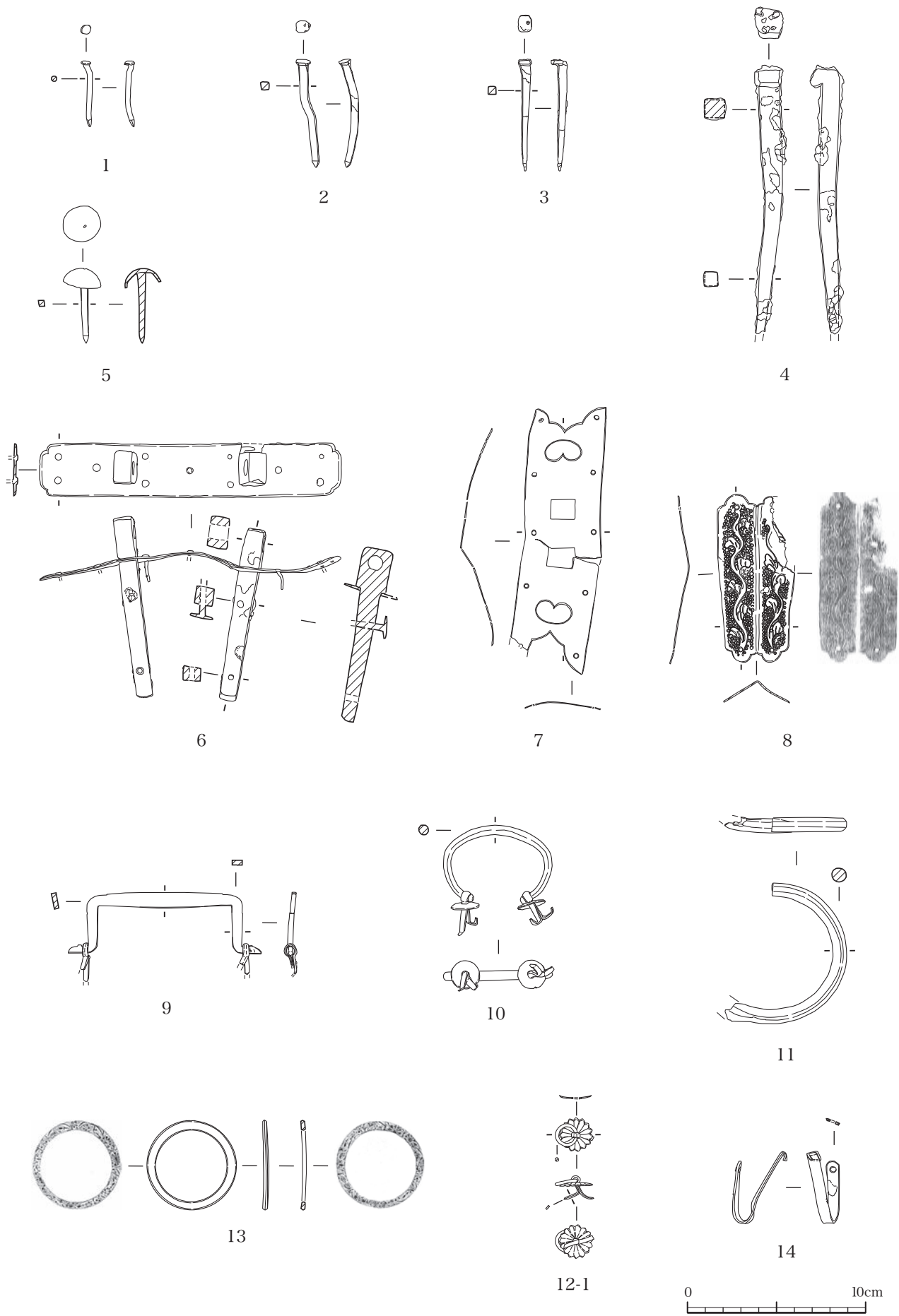
第90図 錠前・簪の部位名称

第50表 金属製品観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	種類	材質	完破 部位	法量 (cm・g)				加工・ 施文法	所 見	グリッド 層
					縦	横	厚	重量			
第91図 図版110	1	釘	青銅	完形	3.7	径 0.27	頭部 0.57	1.7	鍛造	先端四角、軸部断面丸で頭部丸餅形の小型釘。	1トF-12 石3Ⅲ層
	2	釘	青銅	完形	6.05	径 0.52	頭部 0.79	8.8	鍛造	頭部四方に広がる角釘。先端のみ尖る。	1トF-20 I層
	3	釘	青銅	完形	6.25	径 0.77	頭部 0.89	7.2	鍛造	頭部一方に折れる角釘。先細り。	1トF-17 II層

第50表 金属製品観察一覧2

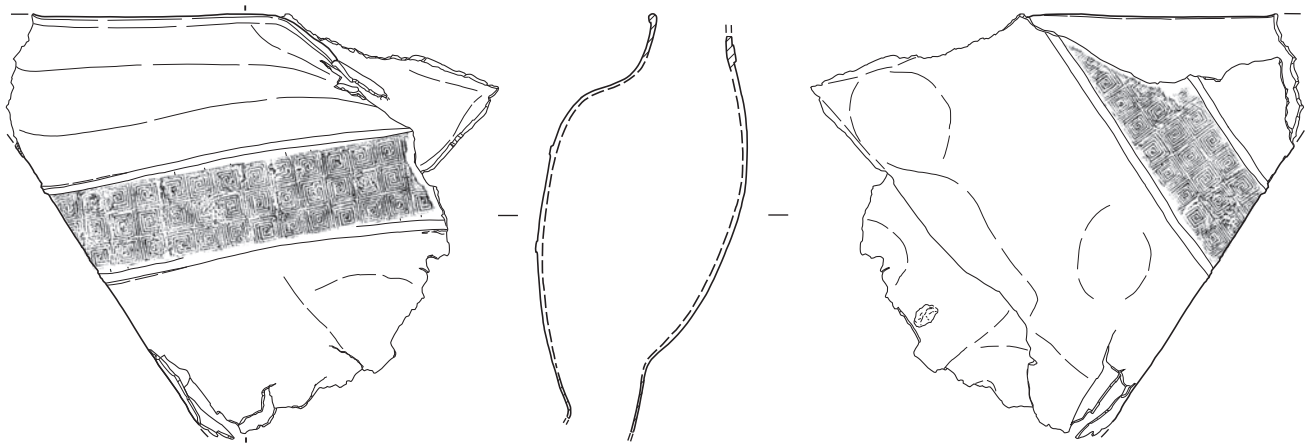
挿図番号 図版番号	番号	種類	材質	完破 部位	法量(cm・g)				加工・ 施文法	所 見	グリッド 層	
					縦	横	厚	重量				
第91図 図版110	4	釘	鉄	ほぼ 完形	15.0	径 1.3	頭部 1.6	92.1	鍛造	頭部一方に折れる角釘。	1トF-17 II層	
	5	鋌	青銅	完形	4.2	径 0.38	頭部 2.15	9.7	鍛造	頭部半球形、軸断面方形の鋌で先端のみ尖る。頭部打ち出しか。	2トH-15 IIb層	
	6	鍵座金具	青銅	完形	16.9	3.1	1.2	219.4	鑄造 彫金	ケー(櫃)の正面、身と蓋の境界部に設置する金具と思われる。鍛造の板に錠前を通す孔のある金具を組み合わせる。鋌で木胎に固定。	2トレ北 抵 H-15埋 葬 2内IIb層	
	7	飾り金具	青銅	完形	4.2	15.0	0.05	29.4	鍛造	調度品などの飾り金具。左右を魚尾状に加工し、内に猪目透かし入れ、その内に金具固定の方形孔。表面無文。上下縁辺に鋌孔10点。猪目の造りから、見本を基に19世紀後半製作か。	不明	
	8	飾り金具	青銅	ほぼ 完形	9.45	4.3	0.1	21.2	鍛造 彫金	断面し字の調度品などの角に付す飾り金具。左右を先が丸い如意頭状に切り、太い唐草を蹴彫りし、大きめの魚々子を間隔あけて打つ。琉球製。	4トE-16 I層	
	9	釣り手	青銅	完形	3.4	10.9	0.28	25.6	鍛造	酒注や煙草盆などの釣り手か。板状で端部は丸く加工。両端に割ピンが残存。	1トI 1層	
	10	把手金具	青銅	完形	4.4	6.1	0.54	21.7	鍛造	引き出しなどの引き手か。断面丸のC状金具両端に割ピンにより円盤状の座金具がつながり残存。一部鍍金残る。	2トH-14 77aII層	
	11	不明	青銅か 真鍮	半欠	6.8	7.9	0.79	56.4	鍛造	断面丸の円形か楕円になるとと思われる製品。用途不明。	1トF-15 石組I層	
	12-1	鑑座金具	青銅	完形	1.8	1.8	0.13	3.0	鍛造 彫金	菊形の座金具に割ピンと鑑がつながる。菊は立体的に打ち出す。位牌とともに暗渠内から出土。	2トH-16暗 渠内IIb層	
	12-2	鑑座金具	青銅	完形	1.67	1.1	0.13	2.7	鍛造 彫金	菊形の座金具に割ピンと鑑がつながる。菊は立体的に打ち出す。位牌とともに暗渠内から出土。割ピンは黒漆塗膜を貫通する。	2トH-16・ 17暗渠内 IIb層	
	13	鑑	青銅	完形	5.05	5.05	0.27	13.3	鑄造	蚊帳の吊り鑑と思われる製品。陽刻により表裏面とも松竹梅文巡らす。断面長円形。幅4.7mm。	3トG・H-17 I層	
	14	鍵	青銅	完形	0.6	8.7	0.14	5.0	鍛造	湾曲した錠前の鍵。鍵爪ロ字形。柄部に紐通し孔あり。1段バネ軸錠前に適応か。	2トH-15 IIb層	
	第92図 図版111	15	香炉か	青銅	口縁	16.9	19.6	0.2	695.0	鑄造	歪み著しいが香炉か水差しか。口唇玉縁で胴膨らむ形状。胴に幅3.6mmの凸帯2条巡らせ、間に方形の雷文帯3段巡らす。同一資料の胴に2点の孔あるため縦耳付着か。	1層
		16	分銅	青銅	完形	4.0	3.1	3.0	167.5	鑄造	竿秤の錘と思われる。吊鐘形で頂部にリングが付く。胴には縦に「三〇〇大玉」などの文字が陰刻される。	2トレ北 抵 H-15埋 葬 2内IIb層
17		方位磁石	真鍮か	完形	6.4	6.4	1.4	72.1	鍛造 軋付け	蓋付きのコンパス。蓋は身の側面と錆により接着しており、蓋内面にガラス片残る。方位は十二支により内側小文字で正転、圏線で区画し外側逆転で表示。身の中央に支点と針の基部残る。方位表示から航海用か占術用と思われる。	2トH-15 溝2内IIb層	
18		簪 (髪差)	青銅	完形	11.15	2.35	0.35	16.1	鍛造 軋付け	カブ高4.8mm、頸長15.5mm、ムディ長13mm、竿長78mm。六弁花形カブは頂・側・底を別造軋付け後、竿を軋付け。ムディ捻り明瞭。断面頸六角、竿方形。	1トF-17 石積2I層	
19		簪 (押差)	青銅	完形	12.5	0.5	0.3	5.6	鍛造	耳搔き状。カブ厚0.4mm、カブ長17.1mm、頸長30mm、竿長77.9mm。頸は断面六角、竿は扁平な六角。	4トE-13 IV層	
20		簪 (シ-77-)	青銅	完形	14.7	1.9	0.8	22.4	鍛造	匙状。カブ厚1mm、カブ長20.7mm、頸長28.3mm、竿長99mm。頸断面扁平六角、竿六角。腐食激しい。	1トF-15 石組I層	
21		簪 (側差)	青銅	完形	18.55	0.5	0.35	9.8	鍛造	耳搔き状。カブ厚0.4mm、カブ長17.1mm、頸長41.3mm、竿長125mm。断面はカブ三日月形、頸で丸、竿は六角。	1トF-18 石積I層	
22		指輪	青銅	完形	2.45	2.45	0.26	2.9	鍛造	断面隅丸六角形の指輪。	2トH-15 溝3IIb層	
第93図 図版112	23	平鋏	鉄	完形	30.7	14.9	0.43	2040.0	鍛造 溶接	刃の上部に柄を入れる半円形の耳を溶接。刃先やや丸い。裏面上部に刻印で縦に「アカ小」文字。柄の一部付着。	3トG・H-17 I層	
	24	ツルハシ	鉄	完形	42.7	7.0	5.0	2135.0	鑄造	トレンチ3階段踊り場土坑の底面から検出。土坑掘削に使用か。柄の一部付着。	3トG・H-17 II層	
	25	ロストル	鉄	半欠	4.6	20.6	3.05	800.0	鑄造	窯や焔炉の燃焼効率を高めるため、薪等燃料の下に設置する火格子。断面台形。	表採	
	26	蝶番か	鉄	完形	10.8	2.7	1.2	200.1	鑄造	蝶番の部品か。心棒孔径12mm、鋌孔径8mm。	3トG・H-17 I層	
図版112	27	鍋	アルミ	完形	9.0	24.4	0.6	188.3	鍛造	口縁両側に把手が付く鍋。青色に塗装か。暗渠内のブリキ缶1に納められ、鍋内部には第66図94の碗が入っていた。	2トH-16・ 17暗渠内 IIb層	
	28	義歯	金・磁器	完形	3.26	1.73	1.4	6.7	鍛造か	白歯の義歯。金床で歯は磁器製か。金床の片方に隣の歯に固定するための抉りあり。	1トF-13 I層	
	29	缶	鉄	完形	身21 蓋5.5	径37 ~39	0.08	2500.0	鍛造	缶1。缶胴接合は半田、蓋天板・身底板は巻締接合で缶2・3も共通。下から資料27のアルミ鍋出土。	2トH-16・ 17暗渠内 IIb層	
	30	缶	鉄	完形	身52 蓋8.5	径32.5 ~33.5	0.08	2500.0	鍛造	缶2。位牌納入缶。外れた身の底板に紙ラベル貼られ縦書き「年度小作料」下部に横書き「¥」の印字、その右に手書きで「2 1 0」の文字。	2トH-16・ 17暗渠内 IIb層	
	31	缶	鉄	完形	身52 蓋8.5	径32.5 ~33.5	0.08	2500.0	鍛造	缶3。蓋が外れて破損。内部は空の状態。	2トH-16・ 17暗渠内 IIb層	



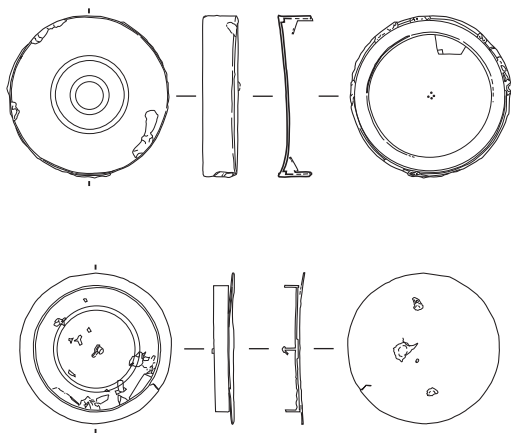
第91図 金属製品 1



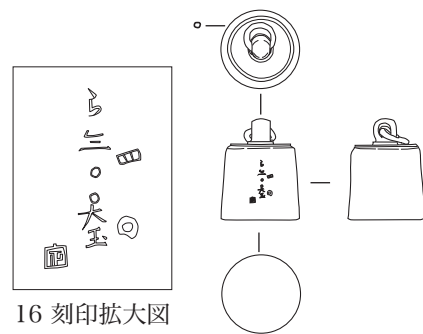
図版110 金属製品1



15-1

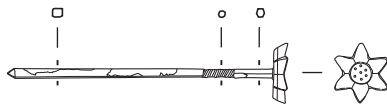


17

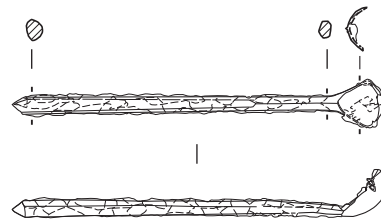


16 刻印拡大図

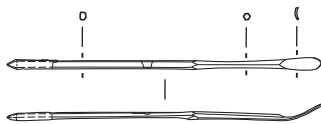
16



18



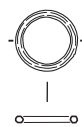
20



19



21



22



第92図 金属製品2

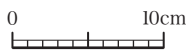
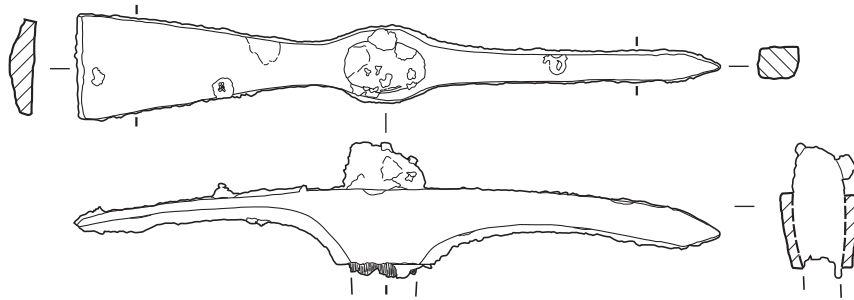




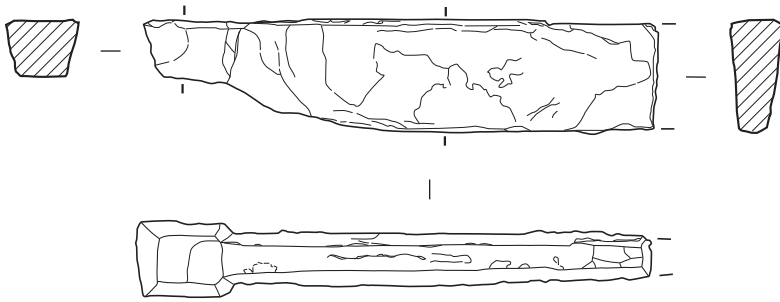
図版111 金属製品2



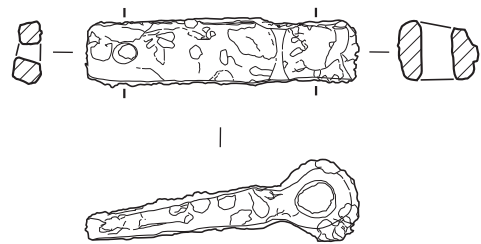
23



24



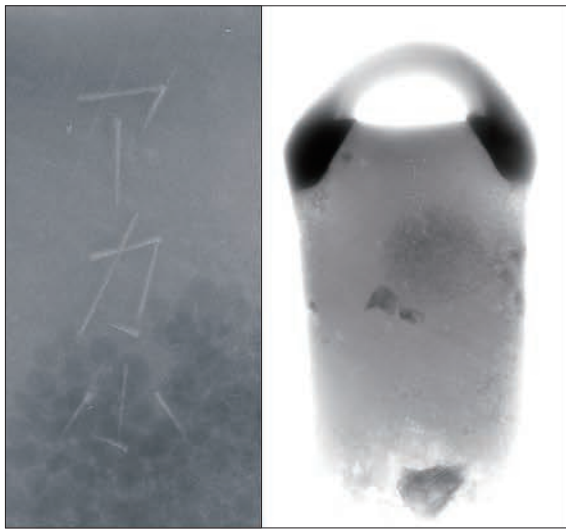
25



26



第93図 金属製品3



23 刻印拡大(X線)

23 X線画像



23



25

27

0 10cm



24

0 10cm



26

28

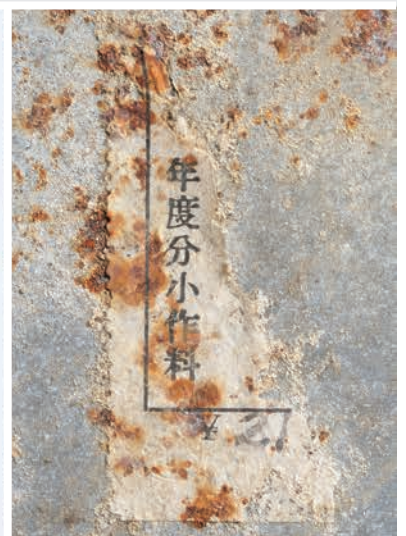
0 10cm



29 (缶1)

30 (缶2)

31 (缶3)



30 (缶2) 蓋貼付ラベル拡大

## 15 煙管

平成22年度の調査では総数25点の煙管が出土した。出土資料はパイプ形のものに限られ柱状形・釣鐘形のものでは得られていない。沖縄諸島出土の煙管については近年新たな分類案(島2010、石井2011、沖縄県立埋蔵文化財センター2011)が提示されているが、ここでは形態的な分類はせず素材ごとに分けて述べる。

### 1. パイプ形無釉陶器製煙管 (1~3)

第95図1・2は沖縄産無釉陶器製の雁首で、火皿と肩部に幅広の面取りが施され縦断面八角形状となる。同図3は面取りが細かくほぼ縦断面円形となっている。1~3はいずれも火皿の高さは低く、外面には面取り・ナゲ調整による擦痕、内面には火皿・肩部を成形する際の線状痕がみられる。また、基本的に無釉となるが2は初期無釉陶器製(沖縄県立埋蔵文化財センター2010b)で泥釉が掛かる。

### 2. パイプ形施釉陶器製煙管 (4~9)

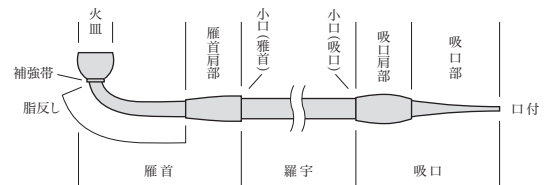
同図4~6は沖縄産施釉陶器製の雁首である。全体的に丸みを帯び、5のように小口付近で膨らみ稜を形成するものもある。白色の素地に透明釉を掛けるもの(4・6)や白化粧後に緑釉が施釉されるもの(5)がある。小口は平坦なもの(4・5)と凹みを持つもの(6)がある。4は肩部に沈線文、5は印花文がみられる。

同図7~9は沖縄産施釉陶器製の吸口で、雁首と同様に全体的に丸みを帯びる。7は灰色の素地に黒褐色釉、8は白色の素地に透明釉、9は橙色の素地に緑釉がそれぞれ施釉されている。9は小口付近の釉を波状となるように施釉している。

### 3. パイプ形金属製煙管 (10・11)

同図10は金属製分離型の雁首である。火皿は欠損し長さは3cmで短かめとなる。肩部内には炭化した羅字が破損した状態で残存している。材質は青銅ではなく詳細は不明。形態的には古泉弘による煙管編年(古泉1983)のVI期に類似。

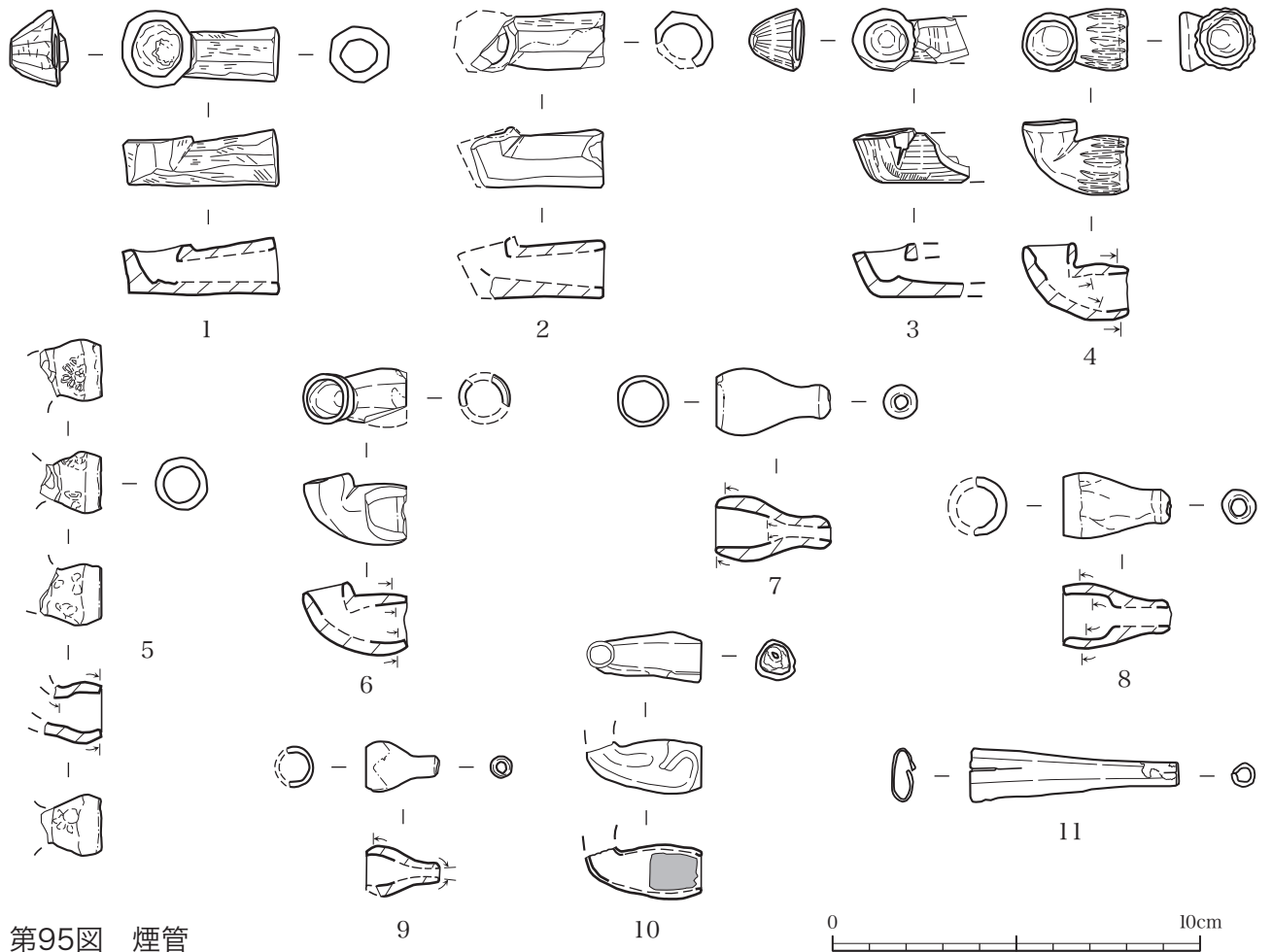
同図11は金属製分離型の吸口である。小口から口付まで直線的に細長く伸びるもので、接合部が側面にみられる。



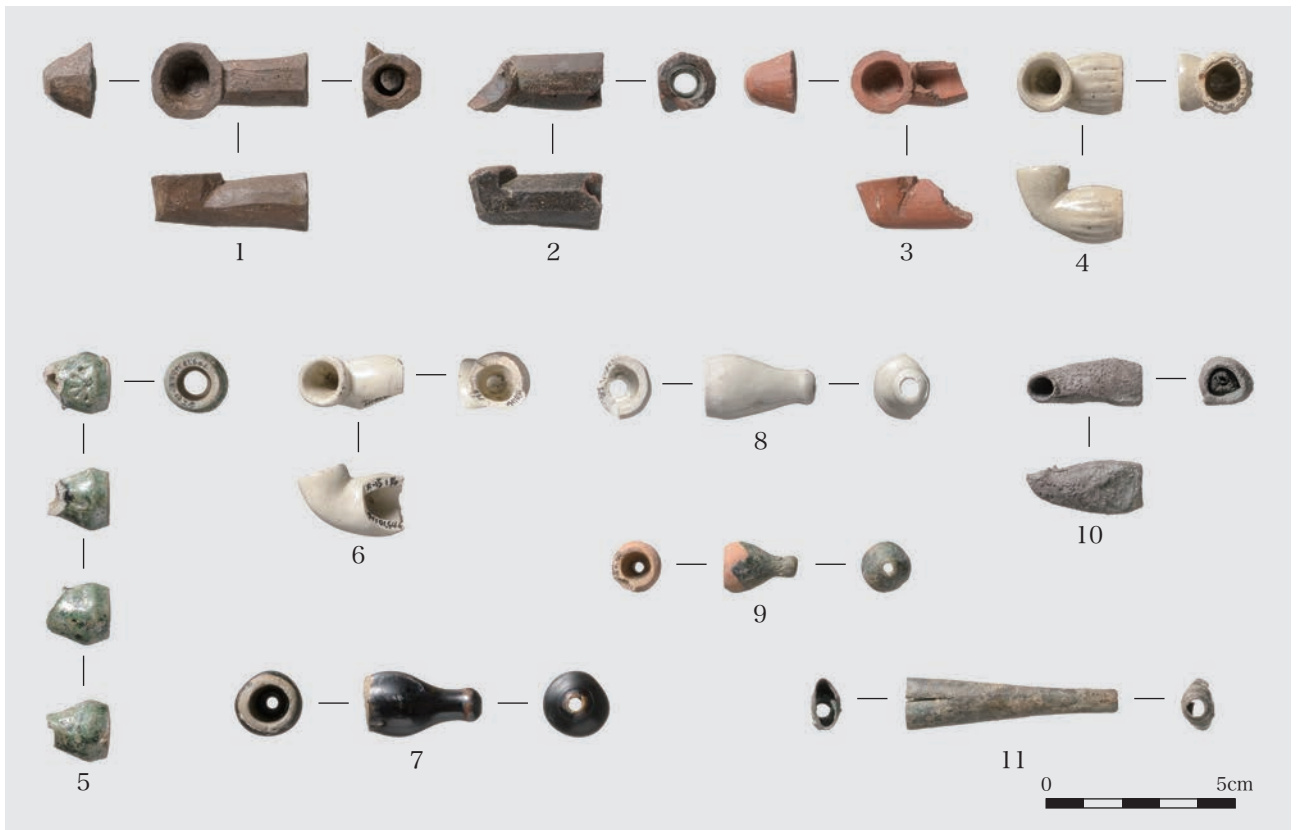
第94図 煙管の部位名称(石井2011)

第51表 煙管観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	部位	材質	素地 / 釉	法量 (cm・g)					観察事項				グリッド 層
					火皿 外径 内径	小口 外径 内径	口付 外径 内径	長さ 高さ	重量	火皿 高	断面 形状	小口 形状	その他特徴	
第95図 図版113	1	雁首	沖縄産陶器	黒褐色/無釉	2.05 1.5	1.55 1.0	—	4.25 1.35	9.5	低	8面	平坦	内面に線状痕。	2トレH-13III層
	2	雁首	沖縄産陶器	赤褐色/無釉	—	(1.55)	—	(3.6) 1.65	8.1	低	8面	平坦	下面に目跡。泥釉。	4トレE-13IV層
	3	雁首	沖縄産陶器	赤褐色/無釉	1.65 1.1	—	—	(3.15)	5.0	低	—	—	内面に線状痕	2トレH-15溝1内III層
	4	雁首	沖縄産陶器	浅黄色/透明釉	1.55 1.2	1.45 1.05	—	2.85 2.1	6.7	高	丸	平坦	沈線文を密に施す。	4トレE-13I層
	5	雁首	沖縄産陶器	灰白色/緑釉	—	1.4 1.0	—	(1.65)	3.4	—	丸	平坦	印花文が3つ施される。	4トレE-13I層
	6	雁首	沖縄産陶器	白色/透明釉	1.4 1.05	(1.4) (1.0)	—	2.8 1.95	5.5	高	丸	凹形		1トレF-15I層
	7	吸口	沖縄産陶器	灰色/黒褐色釉	—	1.4 1.1	0.9 0.35	3.1 1.8	6.8	—	丸	平坦		4トレE-14I層
	8	吸口	沖縄産陶器	灰白色/透明釉	—	(1.6) (1.1)	0.8 0.45	2.9 1.75	4.5	—	丸	平坦		1トレF-16I層
	9	吸口	沖縄産陶器	橙色/緑釉	—	(1.1) (0.8)	0.55 0.3	2.0 1.35	2.0	—	丸	平坦	小口付近の釉を波状に施釉。	4トレE-13IV層
	10	雁首	金属製	—	—	1.1 0.9	—	(3.1) (1.5)	11.1	—	丸	—	炭化した羅字が残存。鍛造。	2トレ北拡H-15I層
	11	吸口	青銅	—	—	0.65 0.40	0.65 0.35	5.65	5.8	—	丸	—	鍛造。	1トレI層



第95図 煙管



図版113 煙管

## 16 骨・貝製品

### 1. 骨製品(1～5)

骨製品では箸、管状製品、ハブラシが出土している。出土した箸は全て破片であるが、表面の規則性のある筋や破損した断面の状況から、何らかの哺乳類骨を加工して製作したことが考えられる。表面は光沢を成すほど平滑に仕上げられており、角を調整しない資料(1)と隅丸状に成形している資料(2・3)とがみられる。

管状製品(4)も骨幹部であることから種の特定は困難であるが、哺乳類骨を切断して加工した製品である。単体での出土のため、用途については判然としない。

次にハブラシ(5)であるが、骨製と樹脂製の2種が出土しており、樹脂製はその他の遺物で報告する。この製品も全面が加工され、自然面が残されていないことから種について特定できないが、哺乳類骨を使用しているものと思われる。植毛孔に真鍮などの平線で毛を固定する植え込み式のハブラシで、柄の内側に社名となる「友恵」が刻印されている。この社名から連絡先を検索して問い合わせたところ、大阪府八尾市内で友恵刷子工業株式会社として現在もハブラシ製造業を中心に操業しており、大阪市内において大正8(1919)年頃から操業を開始したとの情報をいただいた。

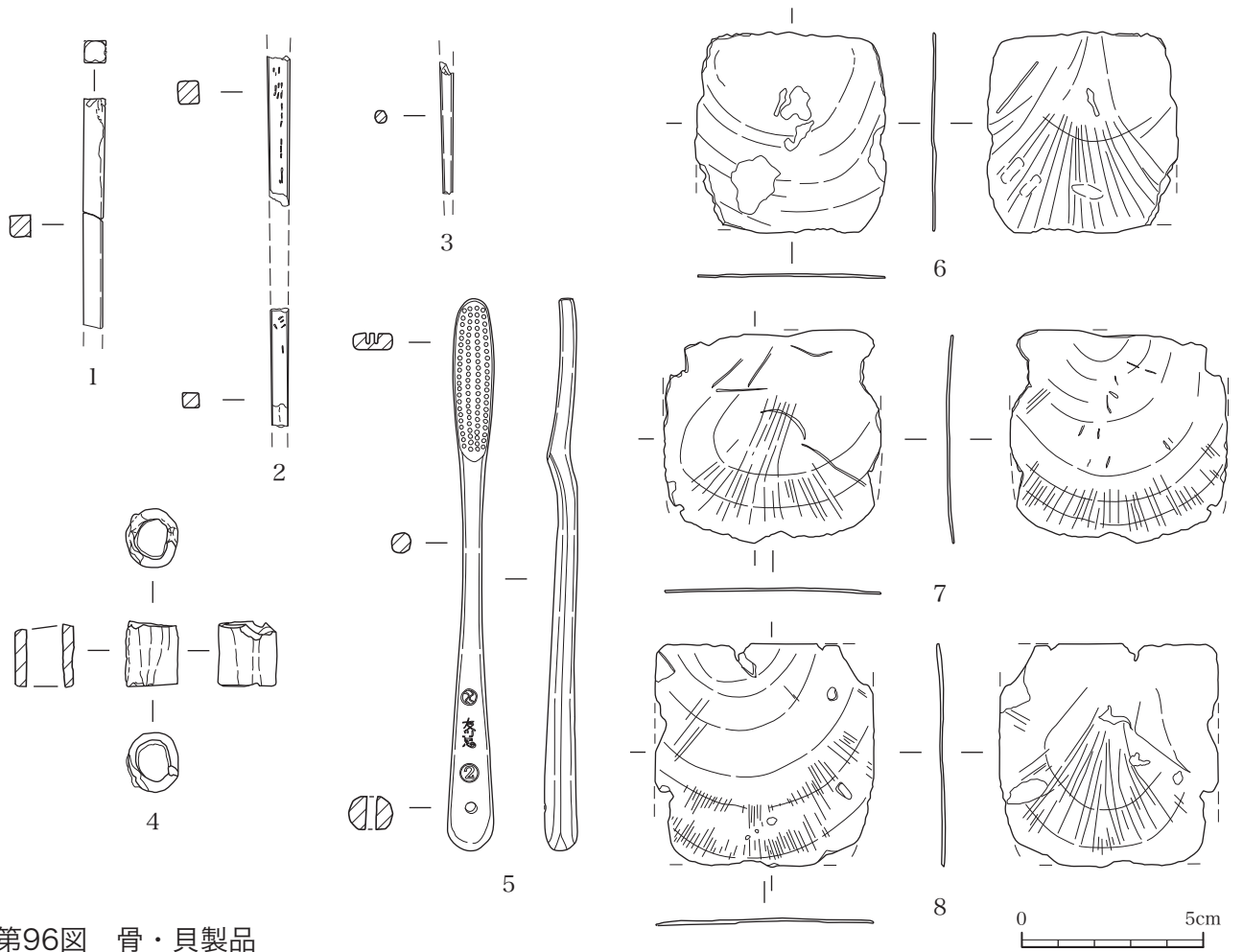
### 2. 貝製品(6～8)

貝製品では、薄い二枚貝を方形に加工した製品が複数枚得られている(6～8)。資料は主にトレンチ1方形石組み1底面に集中して出土しており、当初は用途・性格が判然としなかった。しかし、鎌倉芳太郎や田辺泰らの文化人による戦前の記述や写真により、中城御殿の便所や廊下の灯りとりとして、薄貝が嵌め込まれた貝窓が存在することを知り、本資料がその貝窓の貝である可能性が浮上した。田辺泰の写真を見る限りでは、高窓の枠に縦位にさし込まれた格子の間に、方形の薄貝が嵌め込まれている状況が確認できる(図版9)。出土した製品は風化により脆く、角が欠け表面に土や鉄分が付着するものの、日にかざすと光を透過することから、便所や廊下の灯りとりとして十分に機能していたことが考えられる。本資料を千葉県立中央博物館の黒住耐二氏に同定を依頼したところ、マドガイであることが判明した。

マドガイは台湾以南の東南アジア・大陸沿岸部に分布する極薄の二枚貝で、潮間帯・泥干潟に生息する。沖縄に生息しない貝であることから、建築材として何らかの形で持ち込まれたことが考えられる。

第52表 骨・貝製品観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	種類	部位	材質	法量(cm)			観察事項	グリッド 層
					縦	横	高厚		
第96図 図版114	1	箸	頭部	骨	6.35	0.59	0.59	骨製の箸と思われる資料。断面正方形で角鋭利。被熱か。	2トH-15IIb層
	2	箸	胴部	骨	4.09 3.26	0.66 0.48	0.62 0.48	骨製の箸と思われる資料。断面正方形で角丸く調整。被熱か。	2トH-15IIb層
	3	箸	胴部	骨	3.59	0.36 0.23	0.36 0.23	骨製の箸と思われる資料で先端に近い部分。横断面丸く成形し表面磨く。	2トH-15溝3 IIb層
	4	管状製品	完形	骨	1.66	1.41	1.64	ほ乳類骨の骨幹を切断した製品。切断した角を磨いて調整。骨の厚み3mm。	1トF-13I層
	5	ハブラシ	完形	骨	15.2	1.25	0.87	牛骨製か。植毛孔4列92孔で平線なし。柄部断面楕円、内側縦に陰刻で巴文、下に「友恵②」の文字。柄端部に孔。友恵刷子は大正8年頃大阪で創業し、友恵刷子工業株式会社として現存。	2トH-15溝3 IIb層
	6	貝窓	完形	二枚貝	5.25	5.55	0.05 ~0.1	マドガイ製。扁平な二枚貝を、方形に加工。窓格子の縦枠に並べて嵌め込み、玄関やトイレの灯りとりとして使用。	1トF-15 石組IⅢ層
	7	貝窓	完形	二枚貝	5.9	5.95	0.1	マドガイ製。扁平な二枚貝を、方形に加工。窓格子の縦枠に並べて嵌め込み、玄関やトイレの灯りとりとして使用。	1トF-15 石組IⅢ層
	8	貝窓	完形	二枚貝	6.05	6.15	0.1	マドガイ製。扁平な二枚貝を、方形に加工。窓格子の縦枠に並べて嵌め込み、玄関やトイレの灯りとりとして使用。	1トF-15 石組IⅢ層



第96図 骨・貝製品



図版114 骨・貝製品

## 17 ガラス玉・ガラス製品

中城御殿は近代になってからの建造であることから、創建当初から窓ガラスなどの建築材や器物などの製品が使用されていたことが考えられる。また、中城御殿が沖縄戦により破壊されて以降も様々な変遷を辿っており、その間膨大なガラスが使用された。そのため、発掘中常時出土する遺物の一つとしてガラスがあり、それは近年まで使用された清涼飲料瓶や酒瓶・薬瓶のほか、窓ガラスとして使用された板ガラスや器物、ガラス玉がある。ここでは終戦直後まで使用されたと思われるガラス製品について報告する。

### 1. ガラス玉 (1~12)

ガラス玉は総数で12点得られ、全てを図化した。色調で分類すると、黄色が3点と最も多く、その他青色、青緑色などがみられる。これらは既報告において細分された範疇に含まれる。大半が被熱を受けており、表面があばた状になるか変形し、孔が塞がる資料や溶解して突起状の形状を成す資料もみられる。詳細は観察表に譲る。

第53表 ガラス玉観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	法量(mm・g)				色	観察事項	グリッド 層
		高さ	最大径	孔径	重量			
第97図 図版116	1	3.0	4.0	1.4	0.09	白色	横位に巻き付け成形時の筋が入る。	2トH-16I層
	2	6.0	7.0	2.9	0.45	透明	被熱。気泡多く含む。	1トF-19I層
	3	3.0	4.5	1.9	0.13	青色	被熱して表面あばた状。銀化し白色の膜覆う。	1トF-16I層
	4	2.0	2.5	1.5	0.03	青緑色半透明	厚みがない玉。風化により表面剥離したか。	1トF-18I層
	5	4.0	4.5	0.8	0.14	青色半透明	横位に巻き付け成形時の筋が入る。	4トE-13I層
	6	4.0	4.0	1.2	0.14	青緑色	被熱して表面あばた状。一部銀化し白色の膜覆う。	2トH-15II層
	7	3.0	4.0	1.6	0.12	黄色	被熱により変形。横位に巻き付け成形時の筋が入る。	2トH-15石組3IIb層
	8	3.0	4.2	1.6	0.13	黄色	被熱して変形し、表面あばた状。	2トH-15石組3IIb層
	9	3.0	4.0	1.2	0.11	黄色	一部銀化し白色の膜覆う。	2トH-15I層
	10	2.5	3.5	1.1	0.07	茶色	風化により銀化し、茶色の皮膜が覆う。	4トE-13III層
	11	3.0	3.5	1.0	0.09	青緑色半透明	被熱して変形し、表面あばた状。	1トF-13I層
	12	3.5	5.0	-	0.26	黒	被熱により孔ふさがり変形・変色。	2トH-14表採

### 2. ガラス製器 (13・14)

器物と考えられる資料の破片は、主にトレンチ2周辺から得られている。特に図版13-2資料は埋甕2内IIb層から出土していることにより、中城御殿に存在した器物であることが考えられる。この製品については、御殿内に海外からの贈答品としてガラス製の器が含まれていたとする戦前の状況が聞き取りにより得られていることから、本製品は多くの宝物の一つであった可能性がある。製品の特徴は第54表に示した。

第54表 ガラス製器観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	分類	法量(cm)			色調	成形	形状		文様・銘	所見	グリッド 層
			口径	器高	底径			口縁	底			
第97図 図版116	13	鉢	-	-	-	透明	不明	波状	-	口縁外面切子で沈線2条を霞文で挟み口縁金箔施す。	切子の鉢。口唇断面方形で金箔残る。埋甕2内でも出土(13-2)。カット部分表面に微細な研磨痕。	2トI層
	14	蓋	11.3	-	10.2	透明	型	有段	-	菊花状に型成形。	形造りの蓋物の蓋。縁辺にバリ残る。	2トH-15IIb層



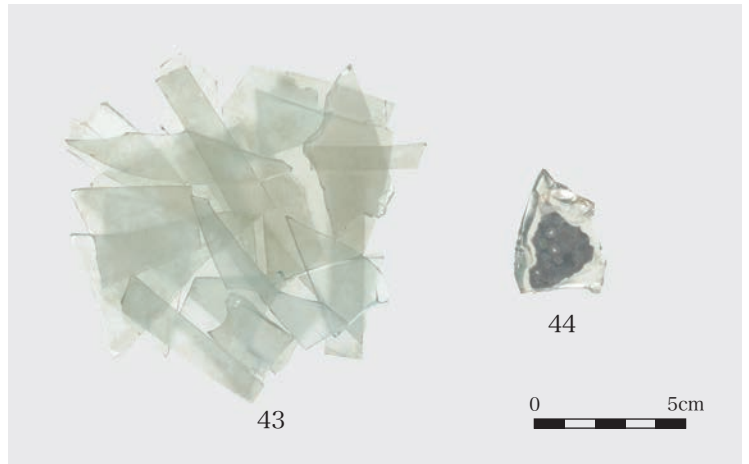
### 3. ガラス瓶ほか (15~42)

中城御殿は戦前まで機能しており、また戦後も様々な土地利用が行われている関係で、ガラス製の瓶は多量に出土している。ここでは特に遺構や層序を理解する上で必要と思われる資料は図化して報告し、それ以外の当地の変遷を知る上で必要と思われる製品は、観察表と写真で掲載した。戦前の瓶と思われる資料の特徴として、薬や調味料、インクの瓶が多い傾向にある。15は化学調味料の瓶で、台所とされる寄満付近の出土である。16はインク瓶で女中居間周辺から、17はⅢ層、中城御殿築造前か改修に係るものと思われる造成層から出土しており、遺構や層の年代・性格を知る情報となる。資料詳細は第56表に示したが、製品の参考として『ガラス瓶の考古学』(桜井2006)を使用した。

### 4. 板ガラス (43・44)

板ガラス片は御殿敷地内のほぼ全面から出土しているが、第Ⅱ層までは現代遺物を多く含んでいることから、ここでは中城御殿内で使用されていたと思われる4ヶ所の遺構内Ⅱb層・Ⅲ層に含まれる板ガラス片128点を抽出し、その厚さと数量を計測した(図版115-43・第55表)。板ガラスは全て片面が磨られた磨りガラスである。表面は波打つことなく平滑で、気泡を含めた不純物もみられず、縁辺の処理も丁寧である。その厚さは遺構により異なるが、トレンチ1方形石組み1内Ⅲ層の2.1mm~2.3mmが厚手で数量も多く検出され、次いでトレンチ2埋甕1内Ⅱb層の1.5mm、トレンチ4溝7内Ⅱb層の1.3mmの順で多い。この内、方形石組み1では北之御殿付近で48点が得られ、埋甕1は新御殿の縁側に面した場所に位置し49点が出土しており、他の遺構に比べて出土数が多い傾向にあることから、付近に板ガラスを多用していた箇所が存在していたことが考えられる。

出土する板ガラスの中には、メッキが施された鏡と思われる資料が含まれる(図版115-44)。厚さは6.4mmと厚手でメッキ部は腐食し剥落する箇所もみられる。



図版 115 板ガラス・鏡

第 55 表 板ガラス計測・集計表(遺構内Ⅱb~Ⅲ層)

グリッド 厚さ(mm)	1トE-15 方形石組1内Ⅲ層	2トH-14 埋甕1内Ⅱb層	2トH-15 方形石組3内Ⅱb層	4トH-14 溝7内2b層	合計
1.2				1	1
1.3		6	4	12	22
1.4	1	6			7
1.5		15		1	16
1.6		6			6
1.7		8	4	1	13
1.8	1	3		1	5
1.9	1	3	1	3	8
2.1		19	1	2	22
2.2		15	2		17
2.3		11			11
合計	48	49	10	21	128

第56表 ガラス瓶ほか観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	分類	法量(cm)			色調	成形	形状		文様・銘	所見	グリッド 層
			口径	器高	底径			口縁	底			
第97図 図版116	15	調味料瓶	2.2	8.3	2.8 5.0	透明	型	外ネジ	上げ底	底面エンボスで「AJINOMOTO 4」。	昭和 3～26 年まで製造の化学調味料の瓶。	4トE-15 溝6I層
	16	インク瓶	2.3	4.9	5.2	青緑色 透明	型	玉縁	高台状	底面エンボスで「BRACKINK」か。	いかり肩で底形円形の瓶。気泡多く含む。	1トF-15 石組1III層
	17	薬瓶	1.6	6.2	3.3 1.8	茶色透明	型	角縁	上げ底	胴にエンボスで縦に「健胃整腸ヘルプ」。	胃腸薬の瓶か。底形長方形で表裏底3枚の型成形。	2トH-13III層
	18	薬瓶か	1.3	6.6	2.2	透明	型	角縁	上げ底	胴にエンボスで「乙」。	なで肩で底形方形の瓶。気泡多く含む。	2トI層
	19	化粧瓶か	-	-	1.5	透明	型	-	上げ底	上から捻り、コブ、瓜型を型成形。	薄手なで肩で底形花形の瓶。銀化著しい。	3トG-17I層
	20	染料瓶	1.7	4.7	2.4	透明	型	角縁	上げ底	胴にエンボスで「紅清製」、底面に「七」。	ややいかり肩の底形円形瓶。胴すじ入る。昭和20年頃の食紅瓶。	4トE-17II層
	21	清涼飲料瓶か	2.0	5.8	2.6	透明	型	角縁	上げ底	底面エンボスでデフォルメした「Meiji」。	ややいかり肩の底形円形瓶。銀化著しい。	4トE-17II層
	22	清涼飲料瓶か	3.2	5.7	3.7	透明	型	玉縁	上げ底	無文。	なで肩広口底形円形瓶。銀化やや進む。	4トE-16I層
	23	薬瓶か	2.4	9.1	4.2	淡青色 透明	型	玉縁	上げ底	無文。	いかり肩で底形円形の瓶。気泡多く含む。	4トE-17II層
	24	薬瓶か	1.5	7.1	2.8	青緑色 透明	型	角縁	上げ底	胴にエンボスで「定容」。	口縁両側面に孔と口唇2箇所にかかりあり。機械栓の針金固定か。	4トE-16I層
	25	薬瓶か	1.6	8.1	3.3	青色 半透明	型	角縁	上げ底	胴下部表裏面にエンボスで記号、底面に「30」と「7」。	いかり肩で底形円形の瓶。	3トG・H-17 II層
	26	薬瓶か	1.6	6.5	3.1	緑色透明	型	角縁	上げ底	無文。	いかり肩で底形円形。胴シワ、底偏肉。	2トI層
	27	目薬瓶	1.7	-	-	淡緑色 透明	型	玉縁	-	胴表裏に3本の陽刻線。側面に「DAIGAKU」と「EYELOTION」。	両口式点眼瓶。点眼部破損。少し銀化。	4トE-17II層
	28	薬瓶か	1.6	4.9	3.2 1.7	茶色 半透明	型	外ネジ	上げ底	無文。	いかり肩で底形方形の瓶。胴シワ、胴薄、底偏肉。	4トE-17II層
	29	染料瓶	2.7	4.4	3.3	透明	型	外ネジ	高台状	胴下部にエンボスで横位に「みや古染」。	筒型で底形円形、底偏肉。	4トE-17II層
	30	化粧瓶	1.5	8.4	3.7	透明	型	外ネジ	高台状	胴下部にエンボスで「お染白百合香油」と「お染め」、底面に「26」。	側面レモン形で底形円形。化粧水か香水瓶で銀化。	4トE-17III層
	31	化粧瓶	3.5	7.8	5.3 3.1	緑色 半透明	型	二重 玉縁	上げ底	無文。胴下部から放射状に8本の稜。	側面10角形、底形菱形の扁平厚手瓶。胴シワ、気泡、底偏肉。	4トE-17II層
	32	化粧瓶	3.8	4.5	3.1	緑色 半透明	型	外ネジ	高台状	胴に縦位3本線5ヶ所。底面<口>内「BBB」。	広口の底形円形瓶。胴シワ、気泡、底厚。	4トE-17II層
	33	化粧瓶	1.5	9.7	3.2	コバルト色 半透明	型	外ネジ	上げ底	6面体上部にエンボスで草文。	いかり肩で底形六角形。胴シワ、底偏肉。化粧水か香水瓶。	4トE-17II層
	34	化粧瓶	3.4	4.6	3.0	白色	型	外ネジ	高台状	無文。	側面方形で広口、底形円形の化粧クリーム瓶か。	4トE-17II層
	35	化粧瓶	4.7	3.1	4.8	黒色	型	外ネジ	高台状	無文。	側面が内湾鉢形で広口。化粧クリーム瓶か。	4トE-17II層
	36	化粧瓶蓋	2.2	1.9	-	白色	型	角縁	-	無文。	化粧瓶の蓋か。底形円形で口縁接地部艶消し。撮部12角形。	4トE-17II層
	37	化粧瓶	4.6	2.5	5.1	白色	型	変形 外ネジ	高台状	底面エンボスで=の上に「1」、「32」、「19」。	側面方形広口で化粧クリーム瓶か。底形20角形。	4トE-17II層
	38	インク瓶	1.9	4.5	3.7	淡緑色 透明	型	外ネジ	上げ底	底面エンボスで「ト」、「10」。	円筒形の瓶。肩に凸帯。	4トE-17II層
	39	糊瓶	5.0	4.3	5.5	緑色透明	型	外ネジ	上げ底	無文。	被熱して歪んだ円筒形の広口瓶。気泡混入、胴シワ。	I層
	40	清涼飲料瓶	3.3	15.0	6.0	淡緑色 透明	型	内湾	高台状	胴部型で瓜型、表裏面エンボスで大「Coca-Cola」下に小「TRADE MARK」。底面エンボスで「7」、「B」。	やや銀化したコーラ瓶。口縁切断し断面角を調整して二次使用か。	4トE-17II層
41	清涼飲料瓶	6.0	8.4	5.9	透明	型	直口	高台状	胴部型で瓜型、下部エンボスで「1944」間に〇中に「C」。	胴上部を針金により切断し、切断面角を調整。コップとして再利用か。	4トE-17II層	
42	おはじき	1.6	0.4	-	透明	型	-	-	陰陽の型で表裏桜形。	桜形の型で成形。縁辺にバリ残る。	2ト北拡 H-15I層	



第97図 図版116 ガラス玉・ガラス製品 1



図版117 ガラス製品2

※本図版内の拓本の一部は拡大して掲載した。

## 18 石製品・石器・石造製品

平成22年度の調査では、石器14点、石製品3点、石造製品が5点出土した。これらの石材鑑定を神谷厚昭氏に依頼した結果、国外産（中国・台湾）の石材を素材とする石製容器が出土していることが判明している。また石筆・石盤といった石製文具も得られた。以下に種別ごとの概要を述べ、個々の詳細は観察表に記述する。

### 1. 石製品（1～3）

石製品では石製容器が得られている。

第118図1～3は石製容器の碗（1）、皿（2）、蓋（3）である。いずれの資料にも精巧な文様が施されており、1の碗には陽刻で唐草文、2の皿には陰刻による楼閣文・草花文・唐草様文、3の蓋には蓋甲に陽刻で建物？＋雲文、側面に陰刻で唐草文が施されている。文様のモチーフは中国産の青花や色絵をモデルとしている可能性がある。石材はいずれも国外産（中国・台湾）で、1は翡翠、2と3は蠟石を素材としている。石材と装飾技術の関係に着目すると、1の翡翠には基本的に陽刻による装飾が施されているのに対し、2と3の蠟石には陰刻による装飾が主体とみられる。また、これらの表面は基本的に研磨痕が不明瞭なほど丁寧な研磨が施されているが、2の外底部には研磨痕が明瞭に残存している。3に関しては首里城右掖門地区出土資料に蠟石製で類するものがある。これらは中国からの搬入品と考えられる。

### 2. 石器（4～11）

石器は敲石磨石、砥石、石杵、石臼（上臼）、石錘のほか、石筆、石盤が得られている。

第99図4は敲石磨石である。敲打痕と滑面を有することから、敲石及び磨石として複合的に使用されていたと思われる。裏面には滑面が一部残っており、裏面の剥落は使用に伴うものと思われる。緑色片岩を素材とする。

同図5は石杵で、下端部に敲打痕がみられる。また中央部に溝状の窪みがあるが、使用に伴うものかは不明確である。

同図6・7は砥石である。7は大きさ・重量から置砥と考えられ、表面には線状痕がみられる。ともに砂岩製で、刃物の形を整える荒砥として用いられたものとする（上原2010）。

同図8・9は石製文具で8は石筆で蠟石を素材とする。9は黒色の石材を素材とし盤状となる形態から石盤と考えられる。これらがセットとして使用されていたかどうかは出土状況が異なるため不明である。

同図10は石錘で、表裏面の溝に紐を掛けて使用したことが想定できる。

第100図11は石臼の上臼である。落とし口は中央から横へずれた位置にあり、このようなタイプは新しいものとされる（上江洲1973）。

### 3. 石造製品（12）

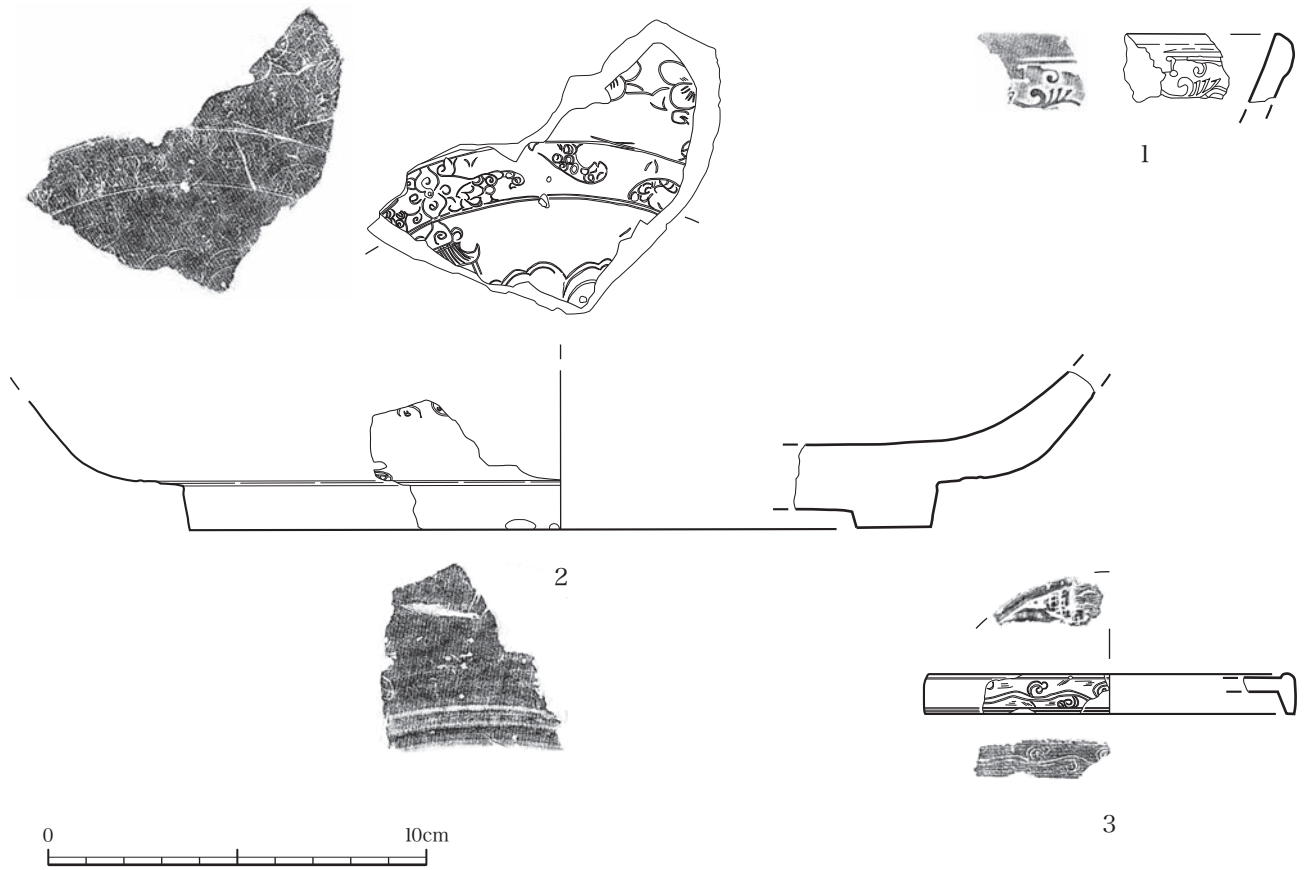
第100図12は石灯籠の一部と考えられる。表面は牡丹の花が彫刻され、左側面は平坦となる。底面は整形の際のノミ痕がみられる。石材に関しては九州産の可能性もある。この石灯籠については、現存する古写真において庭園などに配置された状況が写されているほか（巻頭図版18）、県立博物館・美術館の屋外展示スペースにおいても、中城御殿のものとして展示・収蔵されていることから（図版169）、本資料もその一部として御殿内を飾っていた可能性がある。

第57表 石製品・石器・石造製品観察一覧1

挿図番号 図版番号	番号	器種	部位	石材	法量(cm・g)		観察事項			グリッド・層
					口径 器高 底径	重量	整形/施文方法	文様	備考	
第98図 図版118	1	石製碗	口縁部	翡翠	—	(6.4)	研磨調整/陽刻	外面に唐草文、区画線。	石材は国外産	1トレF-20 I層
					—					
					—					
	2	石製皿	底部	蛸石	—	(161.7)	研磨調整/陰刻	内面に草花文、二重圏線内に唐草様文、内底に楼閣文、外面の文様は不鮮明	石材は国外産 (台湾・中国)	1トレF-12 I層
					—					
					19.6					
	3	石製蓋	庇く袴	蛸石	9.8	(4.7)	研磨調整/陽刻・陰刻	蓋甲に陽刻で建物?+雲文、袴外面に陰刻で唐草文	石材は国外産 (台湾・中国)	3トレG・H-17 I層
					1.05					
					—					

第57表 石製品・石器・石造製品観察一覧2

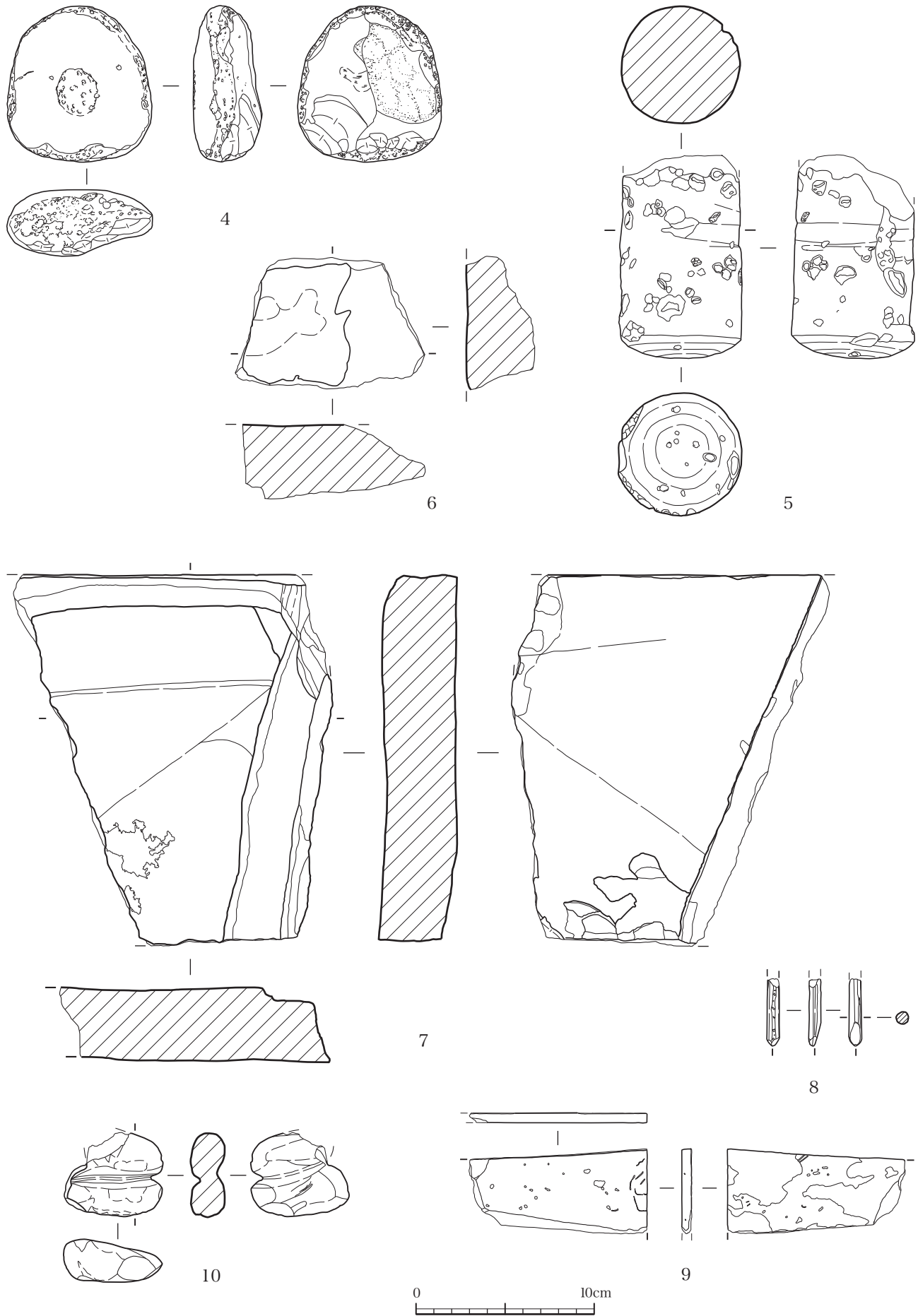
挿図番号 図版番号	番号	器種	石材	法量(cm・g)		観察事項			グリッド・層
				縦・横厚	重量	整形/製作痕跡	使用痕・文様	備考	
第99図 図版119	4	敲石 磨石	緑色片岩	8.8	232.3	敲打・研磨調整。	表面中央と両端及び両側面に敲打痕。表面、裏面の一部に滑面。		1トレF-19 IV層
				8.05					
				3.65					
	5	石杵	石灰岩	(11.4)	(819.6)	研磨調整。	下端部に敲打痕。	葉等を搗る際に使用か	表採
				6.9					
				6.85					
	6	砥石	砂岩	(7.4)	(229.4)	板状礫を打割整形。裏面は自面。	表面に滑面。		4トレE-17 II層
				(10.2)					
				(3.8)					
	7	砥石	砂岩	20.85	(2547.7)	研磨調整。	表裏面に滑面。表面に横位・斜位の線状痕。	置砥。	3トレG・H-17 I層
				(17.9)					
				4.15					
	8	石筆	蛸石	(3.7)	(3.3)	削り出しにより整形。	先端部が若干丸みを帯びている。		2トレH-14 IIb層
				0.7					
0.7									
9	石盤	不明	(4.75)	(51.4)	研磨調整。	なし。		表採	
			(9.95)						
			0.55						
10	石錘	細粒砂岩 (ニービ)	(4.65)	(70.3)	研磨調整。	なし。		3トレG・H-17 I層	
			5.5						
			1.9						
第100図 図版119	11	石臼	細粒砂岩 (ニービ)	口径 (31.2) 孔径(3.5)	(2520.0)	研磨調整。	なし。	上臼	1トレF-17 I層
				(19.0)					
				(24.4)					
12	石灯笼	安山岩	(30.9)	(14700.0)	彫刻。底面にノミ痕。	表面に牡丹の花か	石材は九州産の可能性あり	表採	



第98図 石製品・石器・石造製品 1



図版118 石製品・石器・石造製品 1

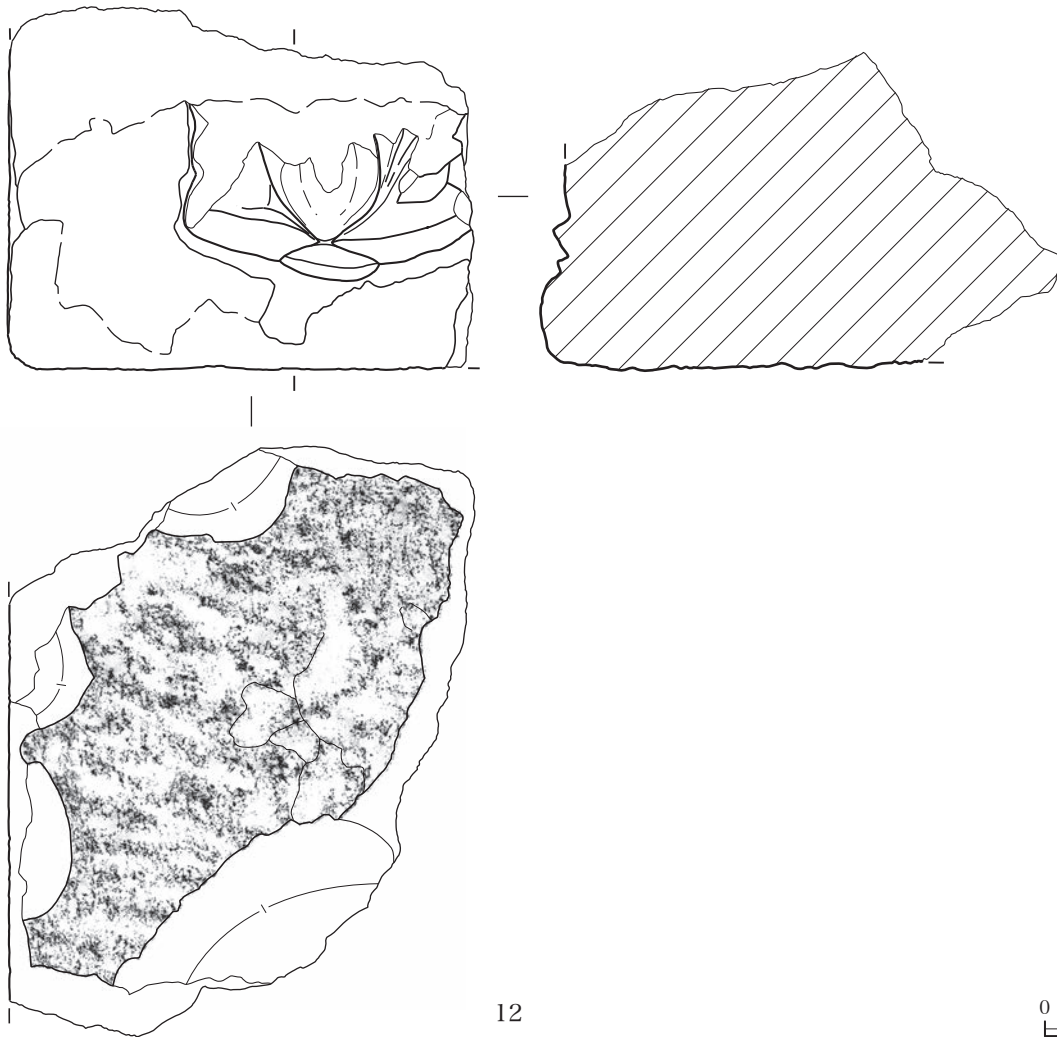
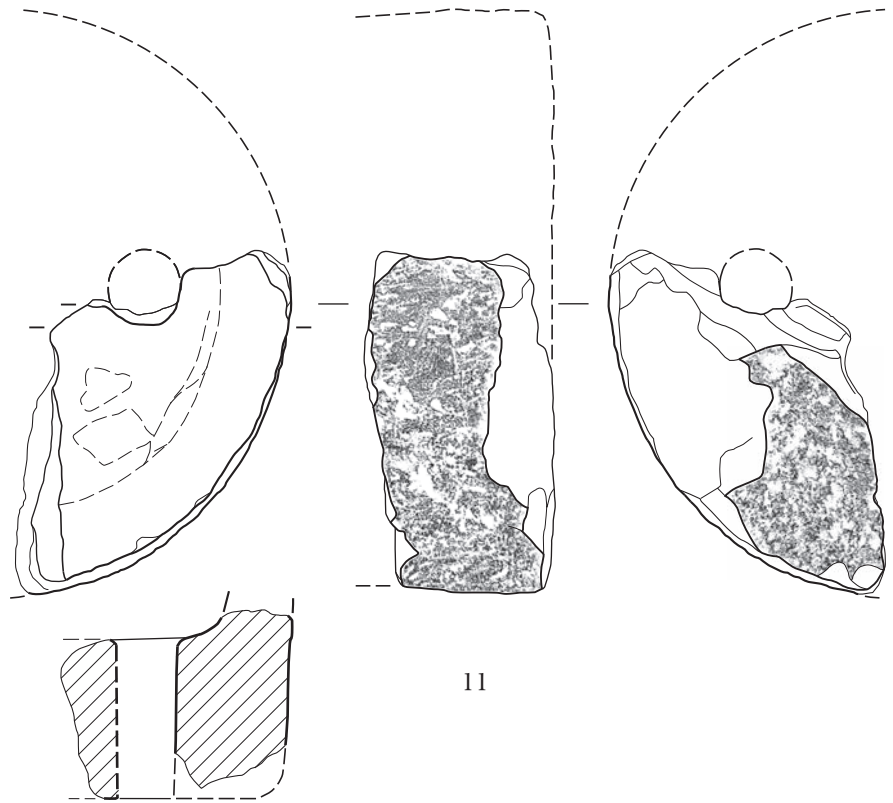


第99図 石製品・石器・石造製品2

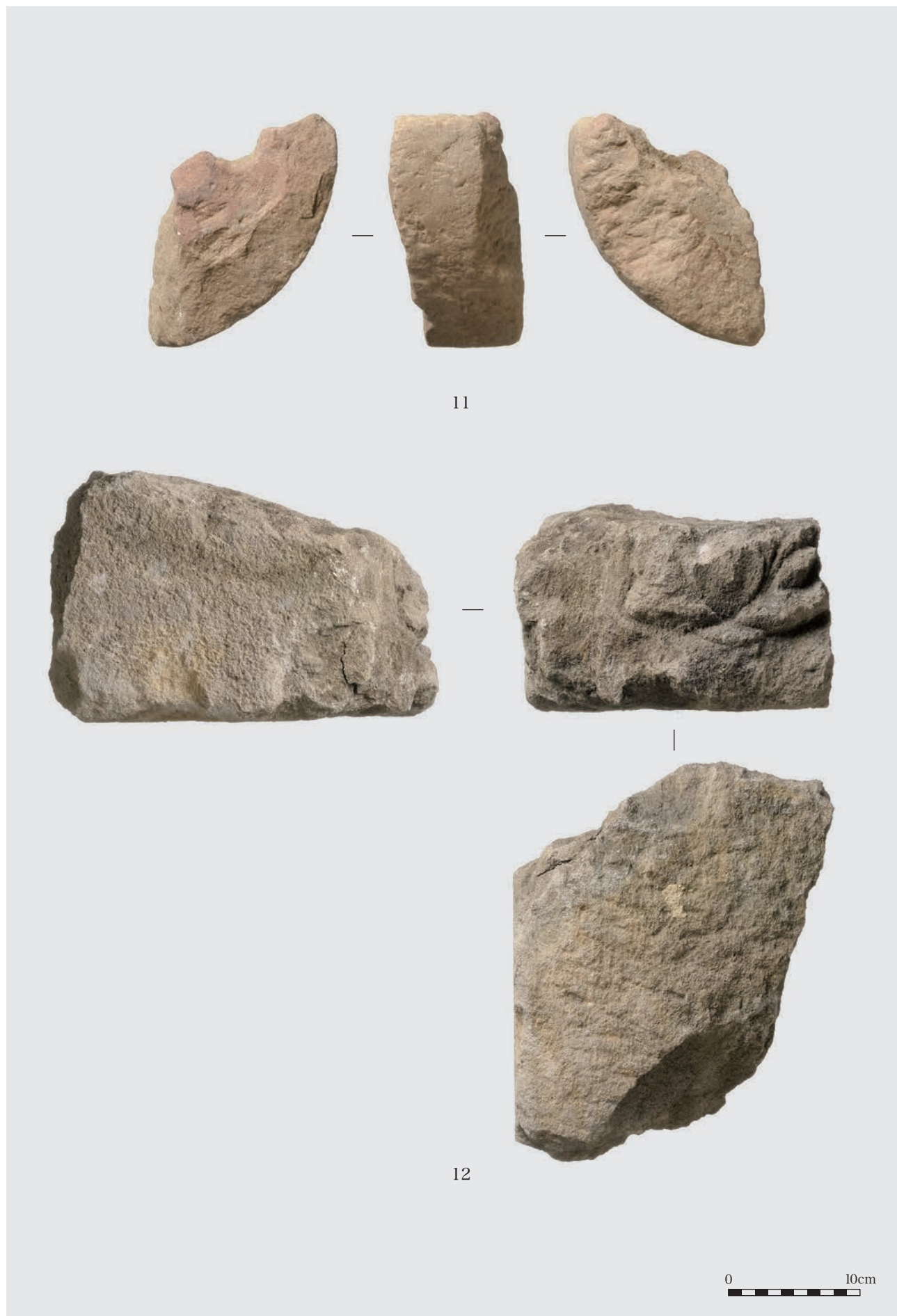




図版119 石製品・石器・石造製品2



第100図 石製品・石器・石造製品3



図版120 石製品・石器・石造製品3

## 19 瓦・埴

### 1. 瓦 (1～19)

瓦は造瓦技術別に大別すると、近世以降の明朝系瓦が1384点、小片のため重量のみ計測したものが42.2kg、近世大和瓦が48点得られた。以下、種類別に記述する。なお、個々の特徴に付いては観察表に記載する。

#### ①明朝系瓦 (1～15)

明朝系瓦は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦に分けられ、それぞれ灰色系と赤色系(褐色を含む)がある。以下、種類別に記述する。なお、本報告書では上原静氏の分類(上原 2008)を参考にした。

(1) 軒丸瓦：軒丸瓦は93点得られた。瓦当文様は、花を横からみた文様構図の草花文の側視1型、葉や茎が簡略化され花部のみを大きく描く側視2型、花に対して正面から描いた構造を持つ正視型が得られた。側視型のモチーフは牡丹であり正視型のモチーフは梅である。色調別には灰色、褐色、赤色が得られ、赤色が多い。

(2) 軒平瓦：軒平瓦は70点得られた。瓦当文様は、草花文の側視1型、側視2型が得られた。色調別には灰色、褐色、赤色が得られ、赤色が多く、褐色は僅かに1点である。

(3) 丸瓦：丸瓦は513点、小片のため重量のみ計測したものが34.7kg得られた。そのうち、第102図11、第103図12の様に線刻のあるものを印有りとして集計し、実測した2点のみ得られている。

(4) 平瓦：平瓦は706点、小片のため重量のみ計測したものが7.5kgである。そのうち、桶紐綴り痕があるものが431点得られている。

#### ②近世大和瓦 (16～19)

近世大和系瓦は48点得られた(軒瓦2点、棧瓦8点、平瓦38点)。今回の調査において、無文の軒瓦部分が検出された(第104図16・17)。この無文軒瓦は饅頭瓦もしくは万十瓦の名前で呼ばれるものと思われ、丸瓦と平瓦が一体になっている棧瓦である可能性が高い。

棧瓦の登場は17世紀後半だが、無文になるのは機械化が徐々に進む大正時代末からである。横面の文様は金型ではうまくいかず、巴文のあった頭は無文のお饅頭に、唐草文のあった横長の垂れの部分も無文の細長い平面になってしまった。名称も軒瓦は饅頭瓦と呼称されている。文様のある軒瓦の注文があれば、手作りで文様をつけていた(駒井 1974)。この事から、大正末～昭和に増築、もしくは改築を行なった際に大和系の瓦も使用されたのではないかと推察される。

中城御殿2の報告において、棧瓦、平瓦が得られたが丸瓦は見られず、棧瓦の曲面部が一定量見られる点から近世大和瓦は棧瓦のみで構成されていた可能性があるが、平面部が出土しているため平瓦の存在も考慮し近世大和系の棧瓦・平瓦としたが、今回の調査でも、櫛目が斜位に交差するように施された平面部も出土しており(第104図19)、平面部は平瓦として集計を行なった。残念ながら今のところ古写真には大和瓦が葺かれている建物がみられないため、どの様に大和系瓦が葺かれていたのかは不明である。

## 2. 埴 (20~23)

埴は総数26点出土した。灰色系が9点、褐色系が1点、赤色系が16点が得られた。その平面形態から分類して4タイプが得られているが、小片が多い。なお、分類は上原静氏の分類を参考にした。個々の特徴については観察表に記載する。

## ①端部噛み合わせタイプ(21)

平面形が一般的に長方形で、長軸の側面か短軸の両側面に段を形成し、それぞれを噛み合わせて使用される。用途として地下に埋設される暗渠などとして使用するものが見られる。

## ②下駄状タイプ(20)

平面形が長方形をなし、厚手はみられない。最大の特徴は下駄状に歯がつくもので、その端部にかかりを作るものとそうでないものがある。下駄状のかかりを成形している点から、傾斜部分や蓋の様な用途が推察されるタイプである。図示した第105図20は幅狭タイプであり、幅狭タイプと判断できた資料はこの1点のみであった。

## ③平面敷きタイプ(22・23)

平面形が正方形と三角形を呈するのが基本形態である。

平面形が三角形になると判断できる資料は図示した1点のみであり、鋭角を成すため平面形が三角形を呈することがうかがえる(第105図23)。平面三角形タイプの成形は基本的に四角埴を対角線から切り取って二枚にしたもので、切り取った側面に横位の線状痕がみられる(上原 2010)。この資料では、切り取られた面は滑らかになり丁寧なナデ調整がみられる。

第58表 瓦・埴観察一覧1

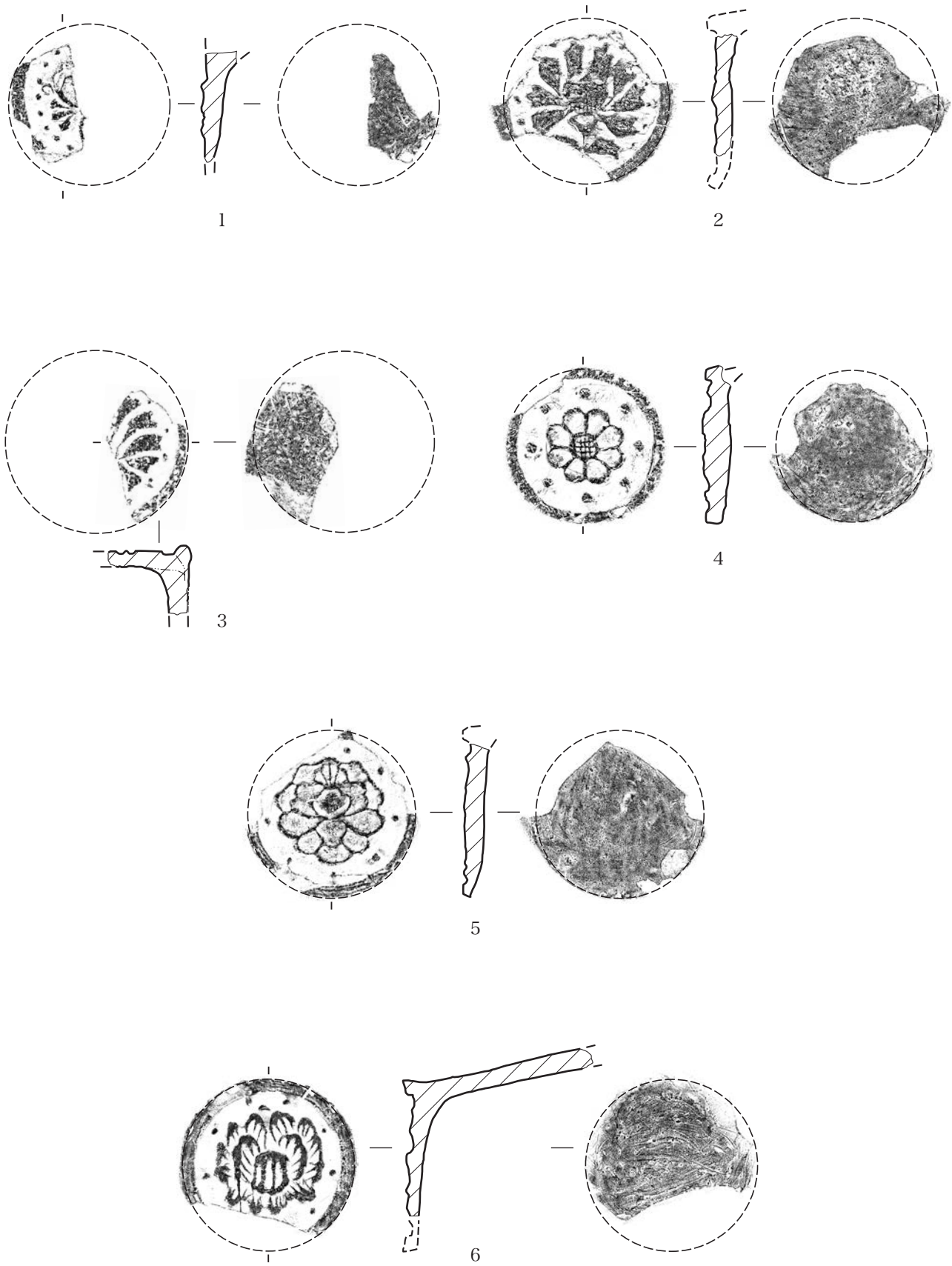
図 図版番号	番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量	グリッド 層
第101図 図版121	1	明朝系	軒丸瓦	瓦当	褐色	文様は牡丹文様で彫りは立体的である。兎の耳状に伸びるとみられる花卉の上端は剥離している。その下に短い唐草と三枚一組の花卉が配される。瓦当断面は顎部分で薄くなり、器面裏はやや粗くナデ調整が行われる。器面はやや風化する。残存長9.9 cm × 6.0 cm、厚さ1.8 cm。	1トレF-14I層
	2	明朝系	軒丸瓦	瓦当	褐色	文様は9枚の花卉と茎、草から成る。花芯にあたる部分に、3 mm大の砂粒が見られるが不鮮明である。文殊も不鮮明で、楕円形を呈する。瓦当裏及び縁は横位にナデ調整を行った痕が見られる。残存長10.4 cm × 15.1 cm、厚さ1.4 cm	2トレH-13III層
	3	明朝系	軒丸瓦	瓦当～ 丸瓦	灰色	丸瓦部分が残る資料である。文様は鮮明。木版の痕がみられ、丸瓦との接合部は上縁が一部が剥離している。瓦当裏は漆喰が付着する。器面は風化が進む。残存長13.1 cm × 7.3 cm、厚さ瓦当部で1.6 cm、丸瓦部で0.8 cm。	表採
	4	明朝系	軒丸瓦	瓦当	赤色	瓦当の縁部下を一部欠くが残りの良い資料。梅状の極めて簡略化された花文様で花芯は格子状、花卉は8枚からなる。文様は鮮明。横位に筋目が残る木版と見られる。表面はヒビ割れが多いが、瓦当裏は指ナデ調整の痕が見られ、わずかに漆喰が付着する。推定瓦当径約14 cm、厚さ1.5 cm。	2トレH-15 溝3IIb層

第58表 瓦・塼観察一覧2

図 図版番号	番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態的特徴、文様、法量	グリッド 層
第101図 図版121	5	明朝系	軒丸瓦	瓦当	赤色	文様は輪郭がやや不鮮明。木版である。瓦当裏に縦位の指押さえの痕があり、下位には横位にナデ調整を行った痕が見られる。瓦当断面は顎部分で薄くなる。瓦当径約 14.5 cm、厚さ 1.6 cm	1トレF-171層
	6	明朝系	軒丸瓦	瓦当	赤色	文様はやや鮮明だが輪郭が丸みを帯びる。縦位に木目があり木版である。丸瓦部分との接合部分はやや鈍角。瓦当裏に指ナデ調整の痕が見られる。丸瓦表面には漆喰が付着し、裏面には布目痕が見られる。瓦当断面は全体的に薄手で、顎部分に向かって薄くなる。推定瓦当径 15.7 cm、厚さ 1.1 cm。	3トレG・H-171層
第102図 図版122	7	明朝系	軒平瓦	瓦当	赤色	文様はやや不鮮明である。花芯の中央から左側に黄土色の付着物が広がる。上縁に指ナデ痕が見られる。瓦当裏面は手の平を使って調整を行った痕が見られ、平瓦接合部は横位に指ナデ調整を行った痕が見られる。残存長 13.1 cm × 11.4 cm、厚さ 2 cm。	2トレ北拡H-14 IIb層
	8	明朝系	軒平瓦	瓦当	赤色	文様の簡略化が進んだ資料。花卉の稜線は3本に減り、花芯下部の花卉の稜線は直線的になる。文様は鮮明。全体的にナデ調整が行なわれ、瓦当裏面も丁寧なナデ調整が見られるが焼成はやや悪い。平瓦部分に漆喰が付着する。推定弦幅 22.3 cm、長さ 11.4 cm、厚さ 1.7 cm	1トレF-17II層
	9	明朝系	軒平瓦	瓦当	赤色	上端は外縁が剥離する。文様は鮮明で立体的な花文である。瓦当裏は横位の指ナデの痕が見られ、焼成はやや悪い。残存長 10.1 cm × 14.6 cm、厚さ 1.3 cm。	1トレF-14I層
	10	明朝系	軒平瓦	瓦当	赤色	文様は鮮明。横位に木目が見られる木版。下端が欠けるが、平瓦まで残る資料。葉の一部と左端は火を受け変色したと思われる。金属が付着したものか。瓦当裏の平瓦との接合部分は横位の指ナデ、その下位からは斜位に指ナデ調整を行った痕が見られる。平瓦表面に布目が見られ、僅かだが漆喰が付着する。弦幅約 22.3 cm、残存長 9.8 cm、厚さ 2.1 cm。	2トレH-15溝3 IIb層
	11	明朝系	丸瓦・ 印あり	玉縁部	赤色	玉縁残存長 4.4 cmで上端を欠失する。玉縁部中央部よりやや右側にへら描きの印があり、ゆるやかな右上がりの弧を描く。表面に 2.5 cm幅のナデ調整が行われる。玉縁裏面は1回の面取りが行われる。一条の布綴り痕が見られる。残存長 15 cm × 13.7 cm、厚さ 1.7 cm。	4トレE-13IV層
第103図 図版123	12	明朝系	丸瓦・ 印あり	玉縁部	褐色	玉縁部をほぼ半分欠失するが、印のある資料。印の全体は不明だが、玉縁中央に右上がりの斜線を1本引き、その上下を横位の沈線が挟む。表面左側に漆喰、戦火により溶解したと思われる金属が付着する。玉縁裏は一回の面取りが行われ、布糸綴り痕の上から指で押さえた痕がみられる。玉縁部 4.9 cm、残存長 20.8 cm × 11.3 cm。厚さ 2.1 cm。	4トレE-17II層
	13	明朝系	丸瓦	玉縁～ 端部	赤色	端部を一部欠失するが全体がうかがえる資料。玉縁部の長さ 4.6 cm。玉縁部と筒部の境には横位に指ナデ痕が見られ、その下から端部にかけて浅い縦位の調整が行われる。下端部は横位に指ナデ調整の痕がみられる。玉縁裏は1回の面取りが行われ、裏面上部には布目、布糸綴りの痕が見られるが、下部は指ナデ消している。30.6 cm × 16.2 cm。	1トレF-17II層
	14	明朝系	丸瓦	端部	褐色	丸瓦の端部が残る資料。下端から3cm上に2条の横位沈線を引き、この線を接点に筒部に向けて2条1組の沈線が描かれている。裏面に布目痕が見られ、下端部は面取りが1回行われている。	4トレE-17I層

第58表 瓦・埴観察一覧3

図 図版番号	番号	技術	種類	部位	色調	製作技術、形態の特徴、文様、法量	グリッド 層
第104図 図版124	15	明朝系	平瓦	広端～ 狭端部	赤色	完形品。凸面は丁寧なナデ調整が行われるが狭端部はやや粗い横位の調整痕がみられる。凹面は布目痕がみられ、広端部は浅い桶紐綴り圧痕が8個見られるが不明瞭である。長軸26cm×狭端長17cm×広端長21.9cm。厚さ1.5cm。	1トレF-17II層
	16	近代 大和系	軒丸瓦	瓦当	灰色	ひらがなのへの字状になる棧瓦に饅頭状の瓦当が付く資料と見られる。瓦当裏側の1端に隣の瓦と引っ掛けて固定できるような約3cm角の段が付く。器面はなめらかで光沢があり、表面に漆喰が付着する。瓦当は約8.4cm×8.9cmのやや横広な円を形成する。残存長9.5cm×11.1cm、厚さ2cm。	I層
	17	近代 大和系	棧瓦	筒部	灰色	小片のため詳細は不明。棧瓦のへの字状に湾曲する頂部である。器面は光沢がありなめらかである。残存長8.4cm×5.3cm、厚さ1.7cm。	表採
	18	近代 大和系	平瓦	端部	灰色	小片のため詳細は不明。凸面に11条1組の櫛描き沈線が斜位に交差するように引かれている。器面は光沢がありなめらかだが、端部はざらざらしており混入物が確認できる。残存長8.4cm×13cm、厚さ1.9cm	3トレG・H-17I層
	19	近代 大和系	軒平瓦	瓦当	灰色	形状から、軒平瓦とした資料である。瓦当は無文で垂れ部分は短い。瓦当部と平瓦部の境界は横位のナデ調整が見られる。瓦当と凹面に漆喰が付着する。残存弦幅19.8cm、垂れ9.8cm。厚さは1.7cmである。	1トレF-17I層
第105図 図版125	20	下駄状式	埴	ほぼ完形	褐色系	上端をわずかに欠くが、ほぼ完形に近い資料である。下駄状式に該当すると思われる。下駄状に段を作るが土台となる部位は左右で高さ、幅に差がある。器面は丁寧なヘラによる調整が行われる。長軸22.3cm×5.9cm。厚さは下駄状の突起部分で6cm、その左右はそれぞれ3.2cm×2.8cmを測る。	4トレI層
	21	端部噛み 合わせ式	埴	角1有り	灰色	小片であるため詳細は不明。挟りの部分が欠落している。挟りのある側面の隣の辺の一端はゆるやかな傾斜がつけられている。6.8cm×7.3cm。厚さ3.4cm、傾斜の付けられた1端は3.3cmで約1.6cmで2分するように段を作る。	1トレF-19I層
	22	平敷式	埴	角1有り	灰色	4面のうち、1面のみ断面と同様の青灰色を呈し、他3面は灰褐色を呈し、漆喰が付着する。器面の調整はやや丁寧である。残存長20.8cm×15.5cm、厚さ5cm。	2トレI層
	23	平敷式	埴	角1有り	灰色	平面観が三角形になる平敷式の資料である。器面の調整はやや粗い。側面の1辺が滑らかになり、切り取った面と思われる。残存長10.9cm×17.9cm、厚さは約3.7cm。	1トレF-20III層

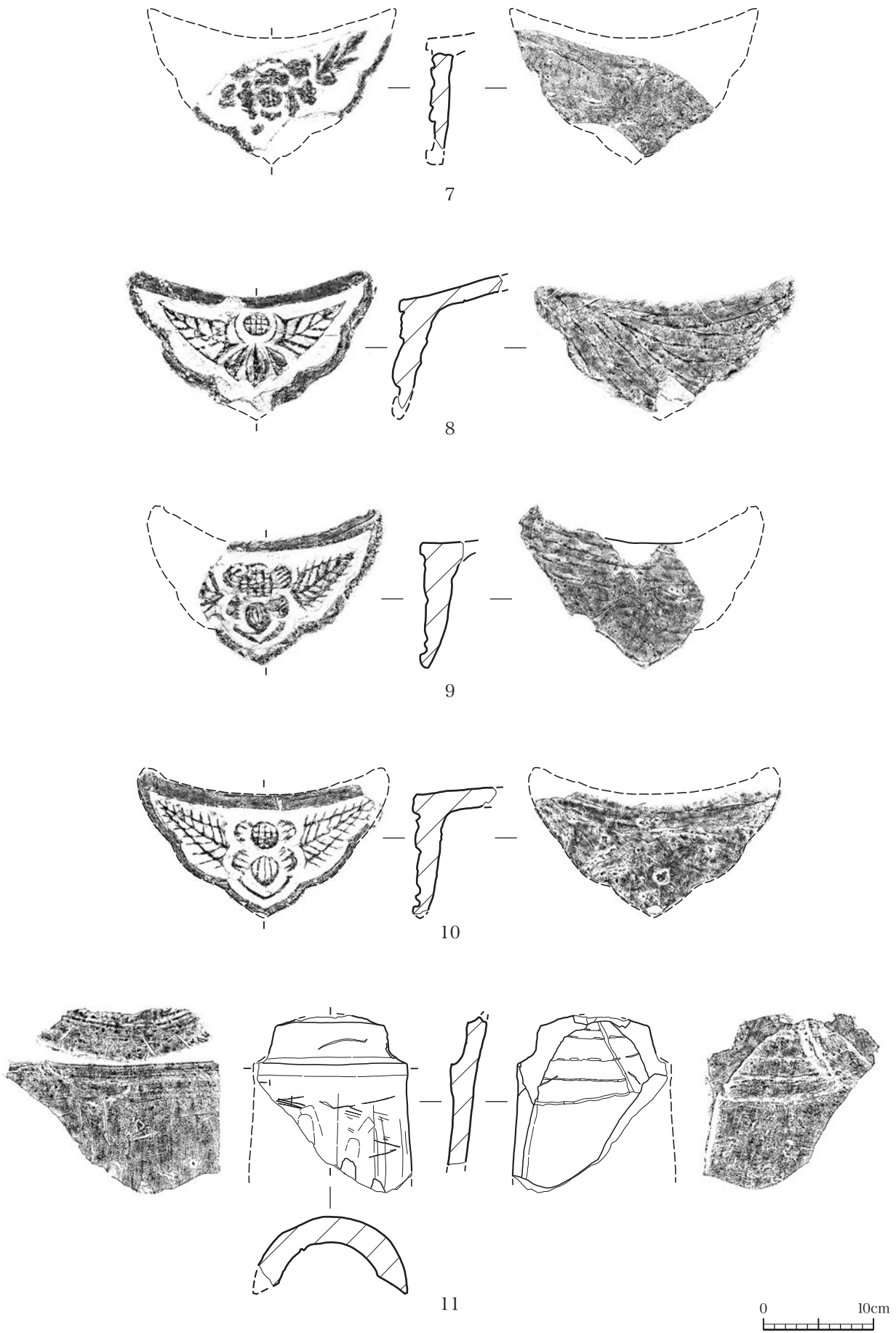


第101図 瓦1

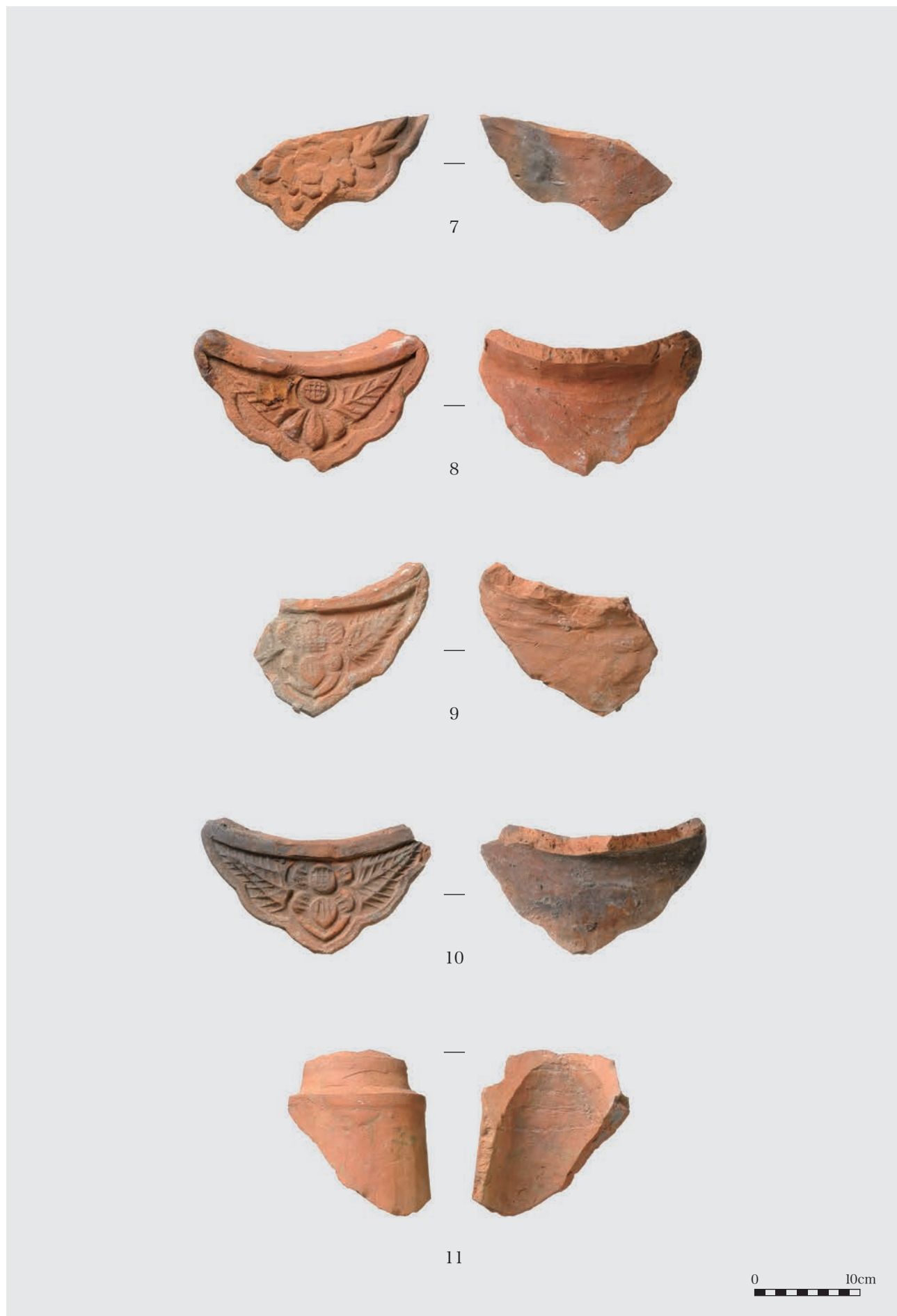




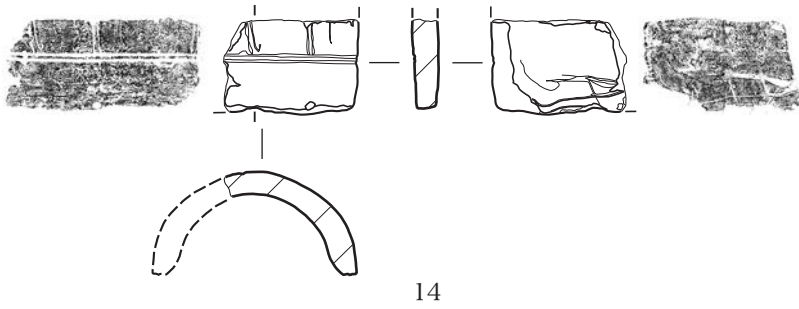
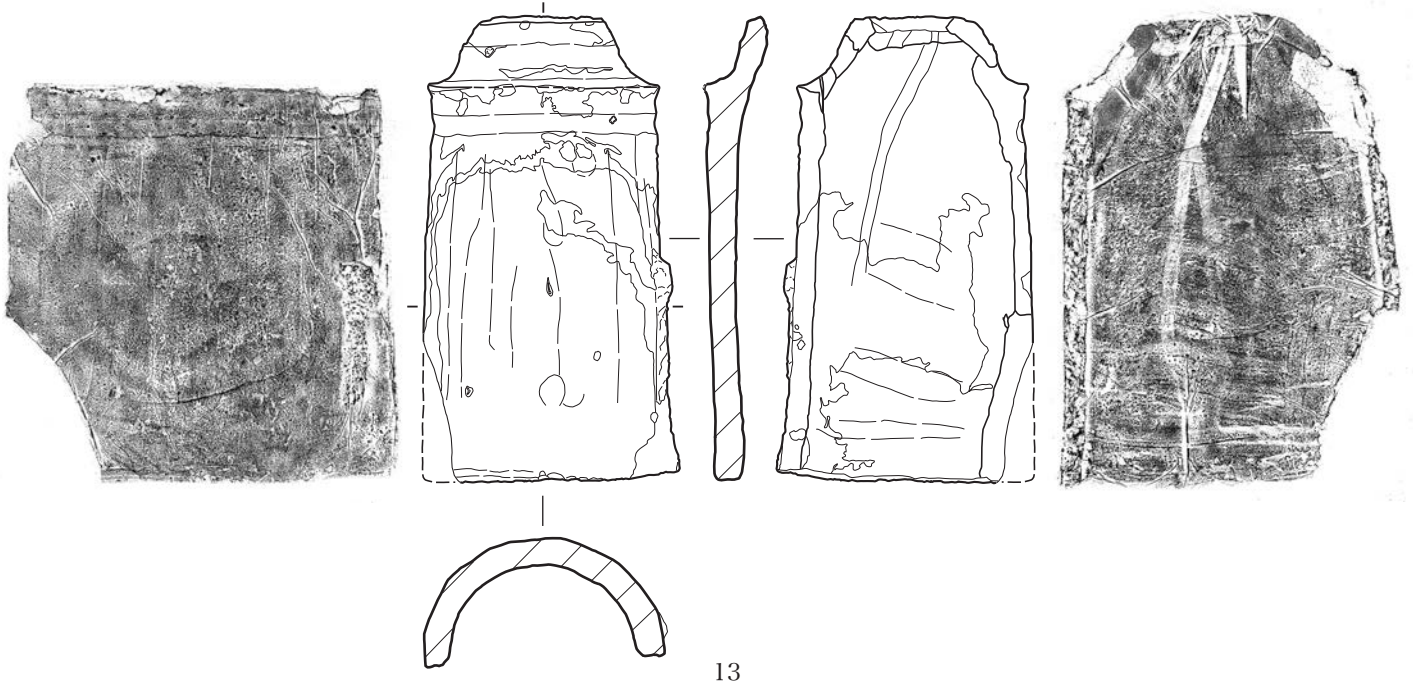
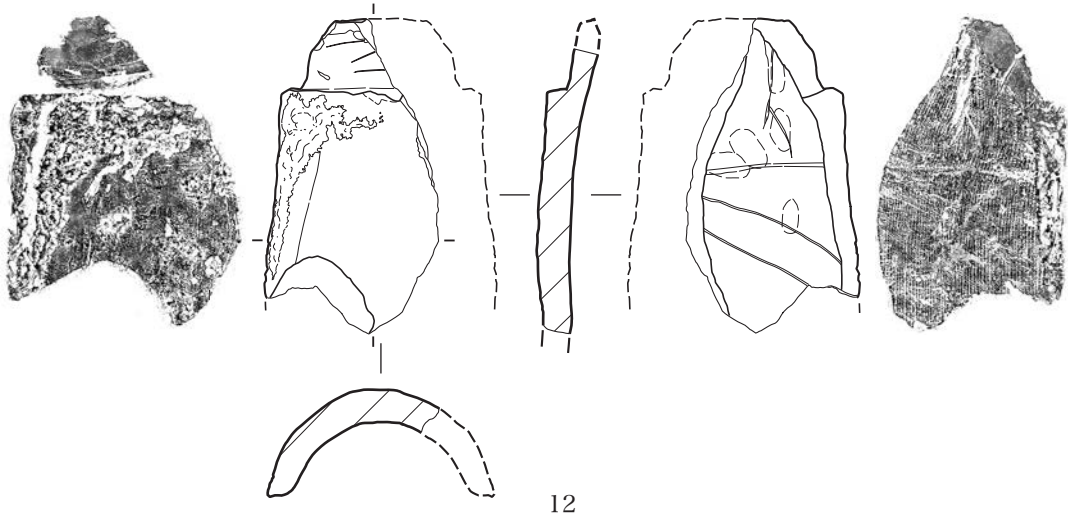
図版121 瓦1



第102図 瓦2



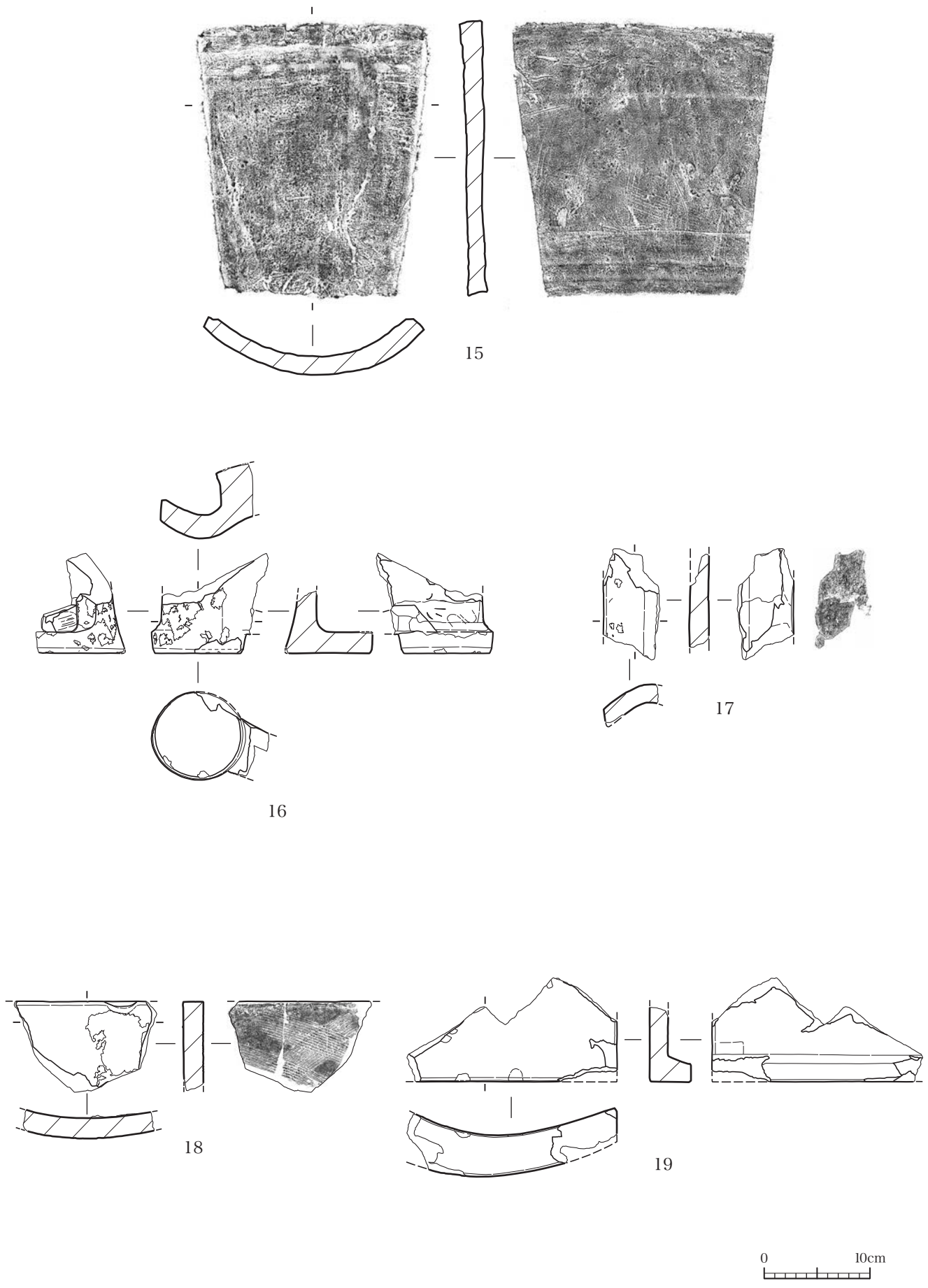
図版122 瓦2



第103図 瓦3



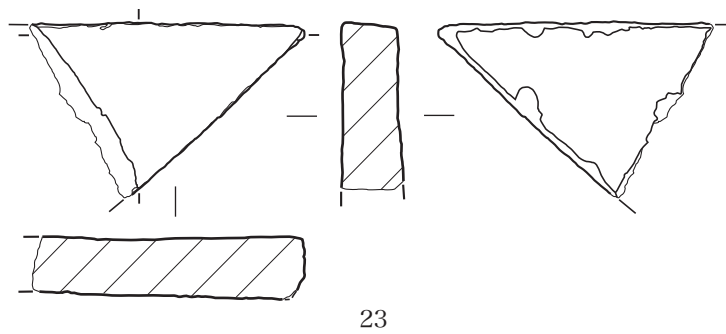
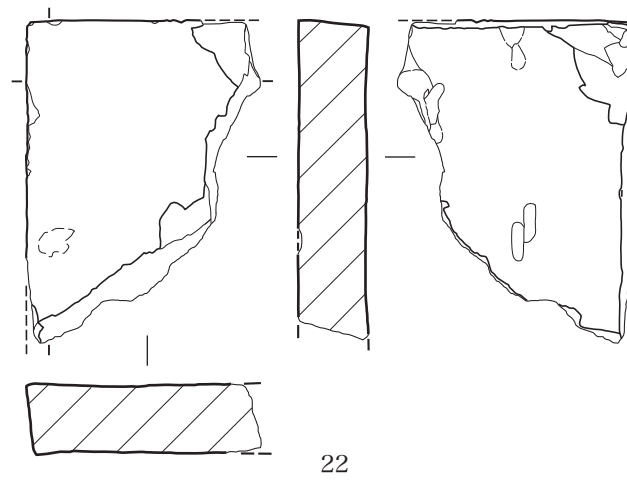
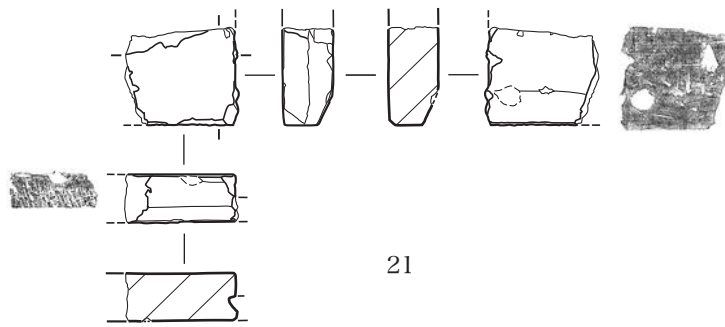
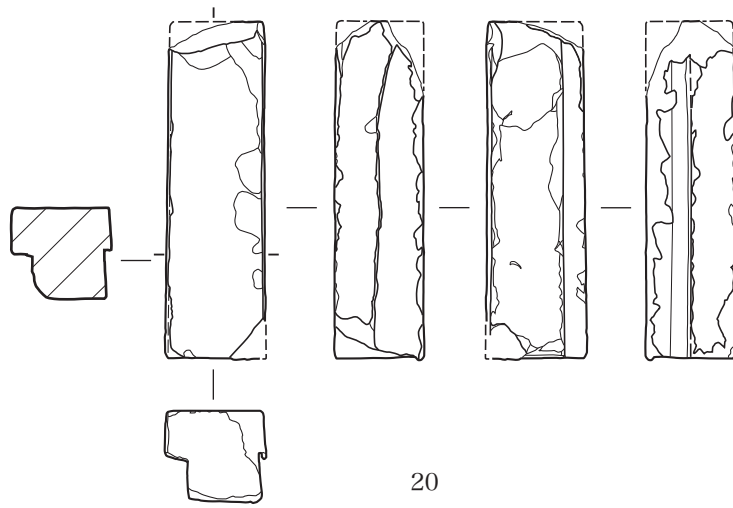
図版123 瓦3



第104図 瓦4



図版124 瓦4



第105図 埴





圖版125 磚

## 20 漆製品

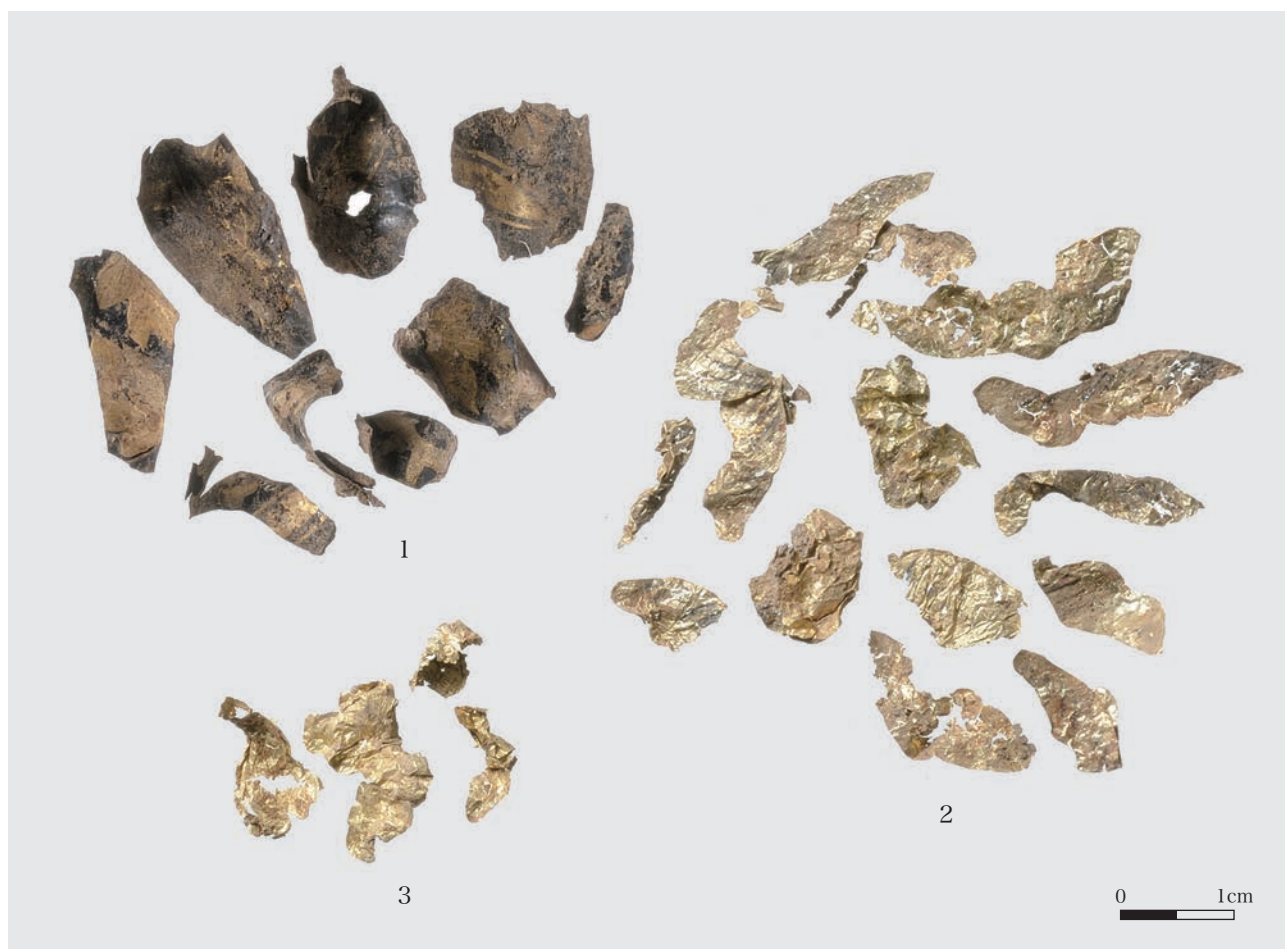
ここで漆製品としたのは、木胎に漆を塗布した製品（位牌）とその痕跡として出土した塗膜及び金箔を指す。ここではこの3件に分けて報告を行うが、塗膜や金箔に関しては図化が困難な状態であることから、写真で報告する。

### 1. 漆塗膜（1）

漆塗膜はトレンチ2北側拡張部H-15グリッド埋甕2内を中心に確認されている（図版46-5）。黒漆の表面に金箔で蔓草状の文様が施されている（図版126-1）。破片が細かいことから当初の形を想定することは難しいが、かつて中城御殿内に納められていた多くの漆器類のひとつであることが考えられる。

### 2. 金箔（2・3）

金箔はトレンチ2北側拡張部H-15グリッド埋甕2内を中心に確認されている（図版126-2・3）。出土した金箔は、凝視すると上記した漆塗膜に施されていた箔絵と似た蔓草状の形状をしており、その中に黒漆で細描の葉脈が引かれている。この点から、本資料は当初漆器類に貼られていたものが、何らかの理由により剥落したことが考えられる。



図版126 漆製品

### 3. 位牌(4)

位牌はトレンチ2 H-16グリッド暗渠内、缶2内に納められた状態で発見された(図版37・38・127-1)。この埋納状況から、位牌は戦時中の緊急措置として暗渠内に避難させたことが考えられる。

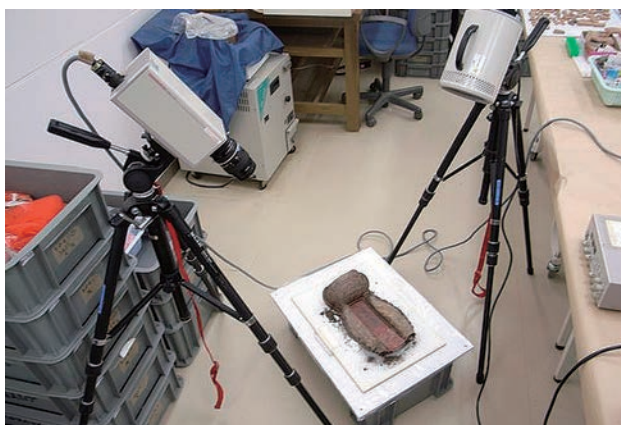
位牌は木製で本体部の高さは36 cm、幅20.4 cm、厚さ4.5 cmを測り、台座となる受花は縦3.5 cm、横14.5 cm、奥行き9.0 cmを測る(第106図・図版128)。朱及び茶色の漆が用いられており、本体中央を占める朱塗りの札板を囲う枠及び、下部の受花には、緻密な彫刻がされた上に銅箔・金箔が施される。その意匠として、左右の枠には鳳凰と瑞雲、枠上部には日輪・瑞雲・雨ならびに連弁が彫刻され、受花にも連弁が彫刻される。この内、日輪と鳳凰部分には金箔が使用されるのに対し、ほかは銅色の箔が貼られ、色調の違いで日輪と鳳凰を浮き立たせる技法を採用している。

また、札板の一部に不明瞭な墨書が確認されたことから、赤外線照射して解読を試みた(図版127-2・3)。しかし、札中央部に「妙」の字と、その下部に解読不明文字がある以外、文字の痕跡は確認できず、対象となる人物の特定に至らなかった。だが、その意匠と残存する「妙」の字から、王家の女性のものであることが考えられる。その類例は、王家王族や関連する寺院などの施設にあり古写真として残されているほか、沖縄県立博物館・美術館には国王の位牌図面となる下図や、王家と関わりのある位牌が収蔵・展示されている。

出土した位牌は、長期間湿度が高い環境におかれたことにより、木胎部の劣化が著しかったことから保存処理を委託し、その際に微細な破片を分析にかけた。その結果、木胎部はヒノキ科を用い、漆は水銀朱で中国産のものを使用していることが判明した。また、保存処理の段階で位牌の内部構造を確認する目的で、X線撮影を行った(図版129-3)。その結果、位牌は少なくとも6点のパーツにより組み上げられたものであることが判明した。組み上げはX線画像により、位牌頭部及び本体部の双方にホゾ切りがされ、角柱状の木片が打ち込まれる状況が確認できることから、ダボ組み



1. 缶2に入った位牌

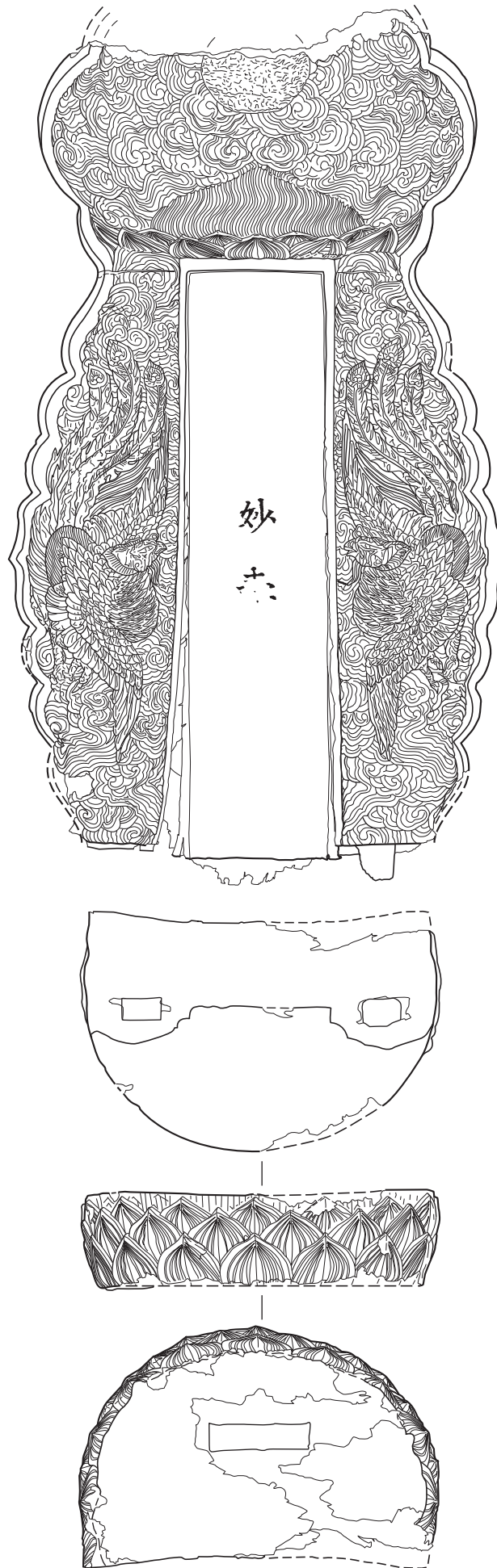


2. 赤外線照射による墨書確認作業状況

図版127 位牌1



3. 赤外線照射により確認された墨書



0 5cm

第106図 位牌1



図版128 位牌2

によるものであることがわかる。また、中央の札は枠の端部に彫られた溝にはめ込まれている(図版129-2)。この表面に漆を塗布することにより、接合面を目立たなくするとともに、強度を高めているものと思われる。なお、位牌表面には部分的に布片が付着しているのが確認できたことから、その材質を分析したところ、絹糸を粗く織り上げたものであることがわかっている(第4章第3節参照)。また位牌周辺からは、位牌のものと異なる漆塗膜や鍍座金具(図版110-12-2)が出土しており、当初は厨子のような箱に収められた状態であったことが想定できる。



1. 位牌頭部



2. 位牌ホゾ部



3. 位牌本体上部 X線画像



4. 位牌本体・台座接合状況

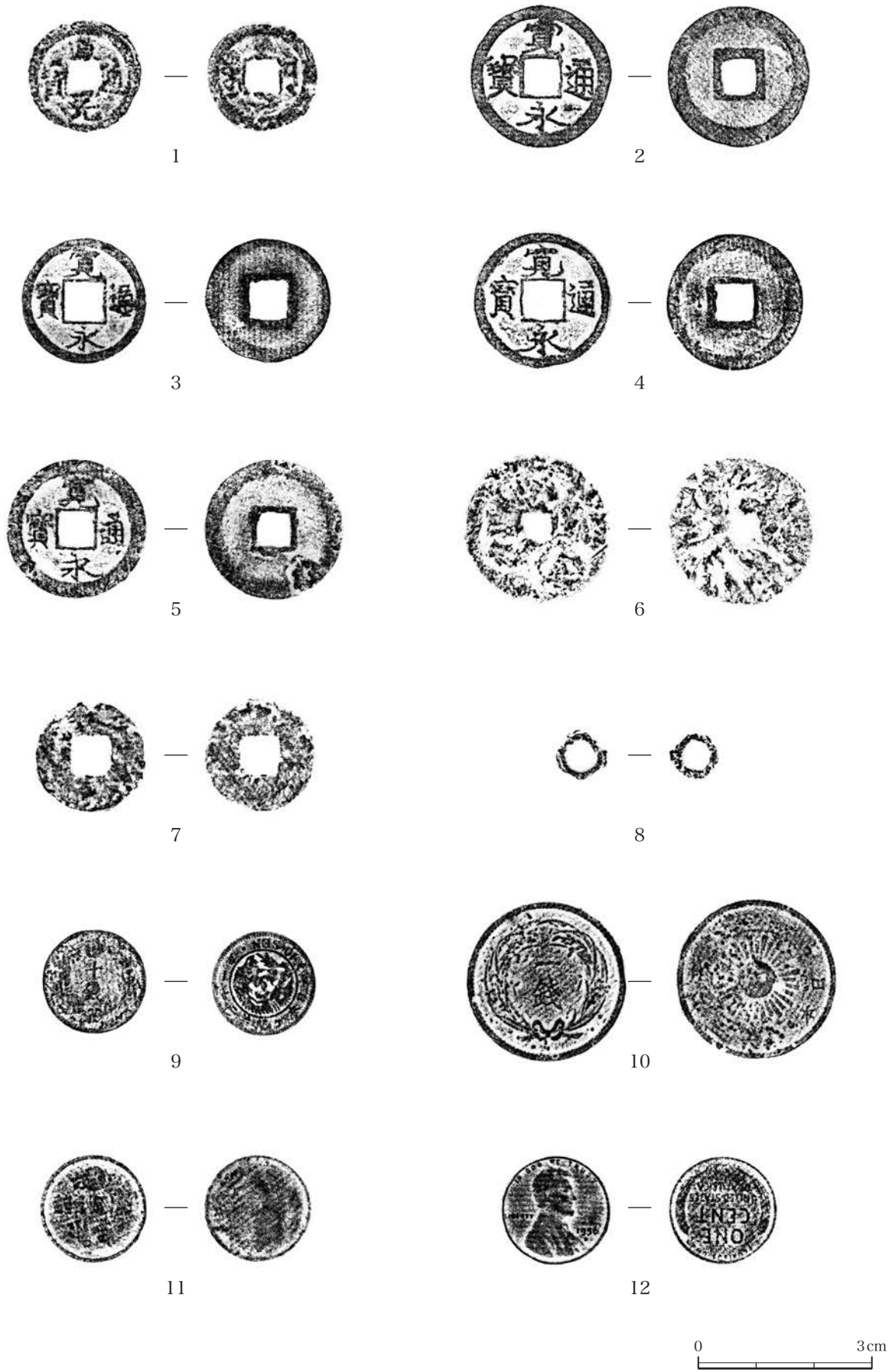
## 21 銭貨

銭貨は総計38点が出土した。内訳は寛永通寶が12点、道光通寶が1点、不明有文銭が1点、無文銭が18点、輪銭が1点、近代・現代銭が5点となる。平成20・21年度の調査と同様に寛永通寶と無文銭が多く、近世～近代・現代のものに限られることが特徴である。

以下に特徴的な資料12点を報告する。

第59表 銭貨観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	銭種	国・王朝	初鑄年	法量(cm・g)				備考	グリッド・層
					外径	孔径	厚	重量		
第107図 図版130	1	道光通寶	清	1821	19.4	5.3	1.2	1.96	銭文が潰れる。特に「道」が不明瞭	4トレE-13I層
	2	寛永通寶	江戸幕府	1636	24.6	6.1	1.1	3.12	I期(古寛永)	1トレF-20I層
	3	寛永通寶	江戸幕府	1697	21.8	6.5	1.0	2.04	III期(新寛永)	4トレE-13III層
	4	寛永通寶	江戸幕府	1697	23.6	6.5	1.1	2.74	III期(新寛永)	1トレF-16I層
	5	寛永通寶	江戸幕府	1697	24.5	5.9	1.0	29.1	III期(新寛永)	4トレE-13IV層
	6	無文銭	—	—	24.9	5.3	2.2	4.00		4トレE-13IV層
	7	無文銭	—	—	19.2	6.6	1.1	1.23		1トレF-19IV層
	8	輪銭	—	—	8.6	4.8	0.9	0.09	バリが残る。	4トレE-18I層
	9	十銭	明治21	—	18.1	—	1.1	2.46	近代銭。竜10銭銀貨。	4トレE-13I層
	10	一銭	大正2	—	27.9	—	1.6	6.82	近代銭。稲1銭青銅貨。	1トレF-17II層
	11	五十銭	昭和22か23	—	18.9	—	1.5	2.56	近代銭。小型50銭黄銅貨。	不明
	12	1セント	アメリカ合衆国	—	18.9	—	1.5	3.08	リンカーン・セント。1956年。	表採



第107図 錢貨





図版130 錢貨

## 22 その他の遺物

中城御殿では明治18(1885)年に王族が東京に移転してもなお、尚侯爵邸として一部の王族や使用人らは御殿に滞在した。その後、沖縄戦の最中には、一部の建物が陸軍少佐の宿舎として使用され、終戦直後は多くの一時引揚者らがバラックを建て滞在する。当地はその後も首里市役所や首里バス会社のほか、琉球政府立博物館、沖縄県立博物館が存在しており、絶え間なく土地利用が行われている。この関連遺物として第5節7では近代陶磁器としてまとめ、第5節17の中では主にガラス瓶ほかについて報告したが、ここではこれに加え、当地の土地利用変遷を示す資料を報告する。次に概要を記し、詳細は観察表で報告する。

戦時中の遺物としてボタンをあげた(1~3)。クロム青磁製と樹脂製があり、いずれも軍服か国民服のものと思われる。続いて碇子は一定量得られており、その中から特徴的な6点を報告する(6~11)。中城御殿の機能は戦前まで存続し、近代的なインフラとして、少なくとも送電が行われていたことが古写真から読み取ることができ(図版6・8・16ほか)、これらはその一部であることが考えられる。

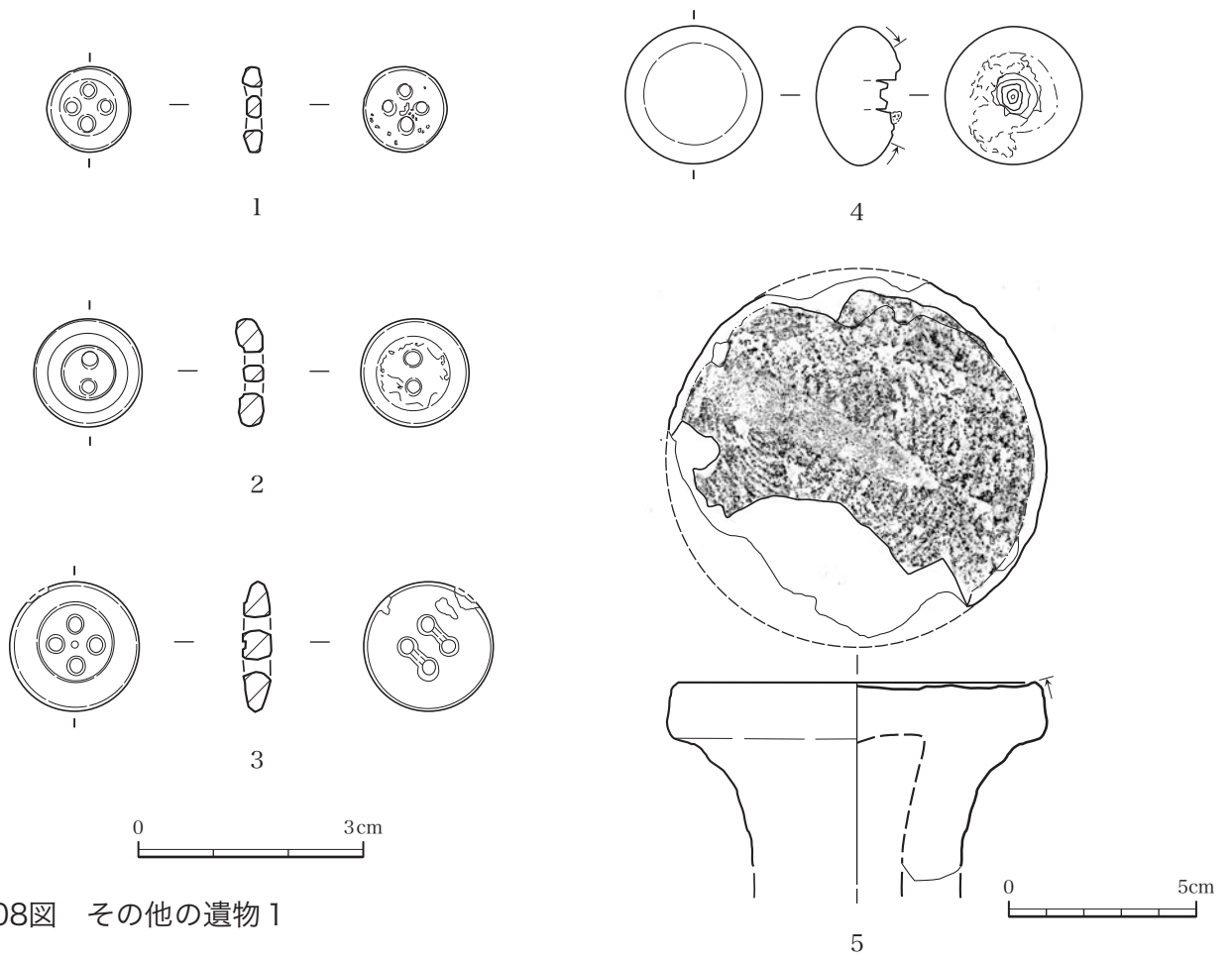
次に終戦直後の遺物と考えられる資料は、トレンチ1・4第II層を中心に多数出土している(14~19)。タイヤやチューブを加工した草履が得られているほか、この端切れとなる二次製品も出土しており、当地で製作していた可能性が高い。16・19は米軍用と思われバラック時代に持ち込まれたことが考えられる。

その他、ハブラシは骨製と樹脂製があり、骨製は第5節16で報告したが、ここでは樹脂製をまとめた。資料はいずれもトレンチ2溝3下部からの出土で、位置的に新御殿のトイレや水場と考えられる地点であることから、本資料の出土により洗面所としての機能も考えることができる。また資料4は磁器製ドアノブか調度品の引き手と思われる製品である。西洋陶器やガラス器などとともに存在した西洋製品の一部であろうか。

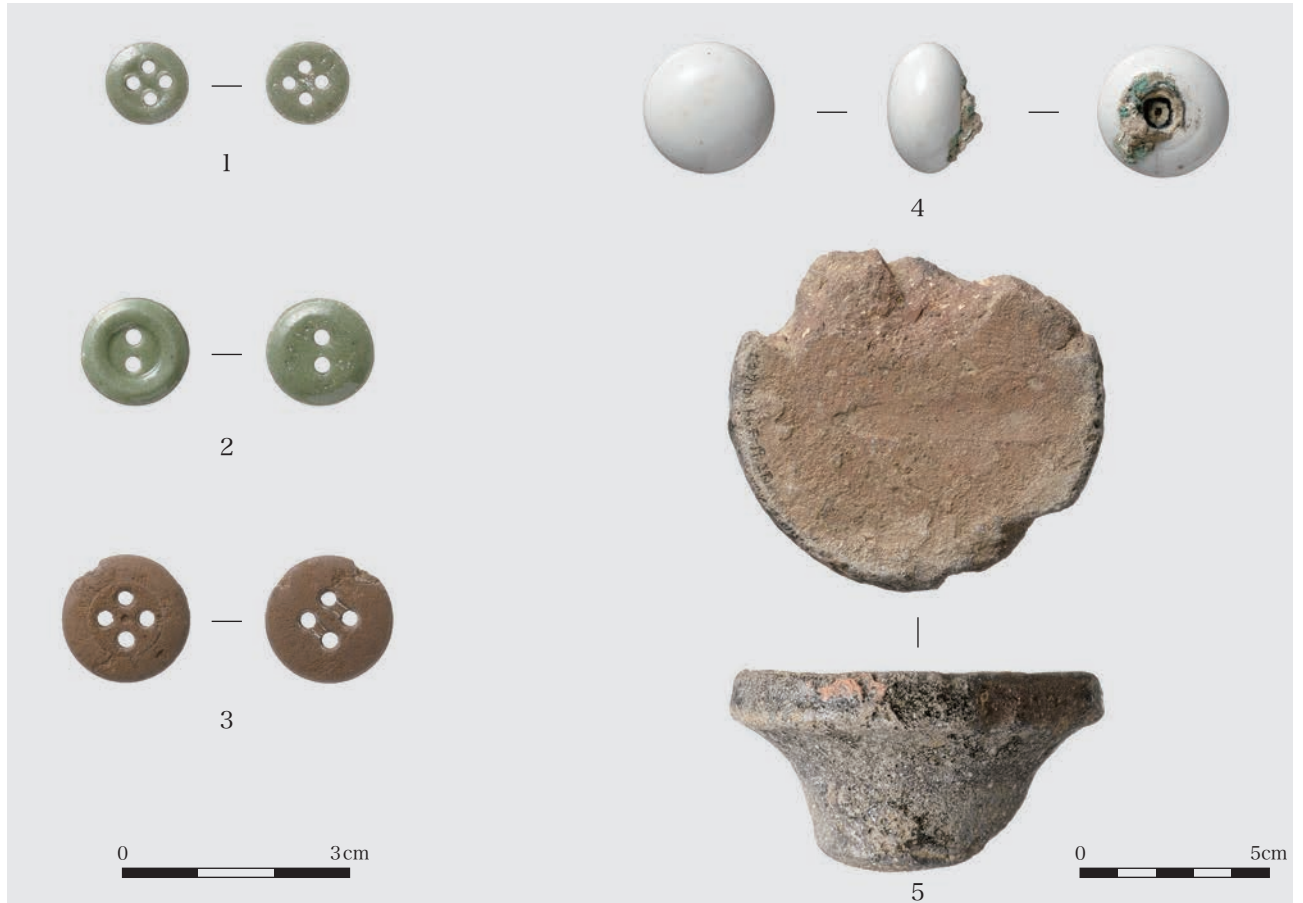
次に資料5は窯道具である。通常は陶磁器焼成地で得られる資料であるが、一帯に窯跡がないことから、近世以降に何らかの理由で持ち込まれたことが考えられる。

第60表 その他の遺物観察一覧

挿図番号 図版番号	番号	種類	法量 (cm)			混入物	所見	グリッド 層
			縦	横	厚 奥行き			
第108図 図版131	1	ボタン	1.15	1.1	0.25	磁器	磁器製のボタン。緑色で糸通し孔4点。軍服か国民服のものか。金属製品の代用品。	4NF-17II層
	2	ボタン	1.45	1.45	0.35	磁器	磁器製のボタン。緑色で糸通し孔2点。軍服か国民服のものか。金属製品の代用品。	2NF-15I層
	3	ボタン	1.75	1.7	0.35	樹脂	樹脂製のボタン。茶色で糸通し孔4点。軍服か国民服か。	2NF-15I層
	4	引き手	3.6	3.6	2.1	磁器	戸棚などの引き手かドアノブ。平面円形、横断面楕円で裏に金属残る孔あり。白磁で外面施釉するが孔周りに無釉。	1NF-15 石組1III層
	5	窯道具	5.21	10.1 5.83	-	陶器	陶器焼成用の焼台(トチン)半欠品。柱部分内中空。頂面無釉で外面黒褐色釉厚く付着。	1NF-19I層
図版132	6	碇子	4.0	6.84	6.84	磁器	白磁菊型の碇子で鋳込み成型。外面透明釉。口縁内ネジ。	3NG・H-17 I層
	7	碇子	4.38	4.07	4.07	磁器・真鍮	白磁の釣鐘形碇子。内部に電球用の真鍮製ソケット付属。口縁に「特許笠松式」と「四九」のクロム印。	1NF-17II層
	8	碇子	5.35	3.64	3.64	磁器	筒状白磁の碇子。外面~孔内施釉し底面無釉。	表採
	9	碇子	4.82	2.84	2.84	磁器	筒型で白磁で側面施釉。中央孔の番線で2点組み合わせる。	1NF-17II層
	10	碇子	4.04	3.16	3.16	磁器	楕円形の鉄釉碇子。接地部無釉。孔2点对角に溝2本巡る。	1NF-17II層
	11	碇子	1.31	6.95	1.9	磁器	長方形の白磁碇子。底面無釉で頂面釉剥ぎ。孔2点と端部に溝。	1NF-17II層
	12	ハブラシ	13.62	1.06	0.35	樹脂	髷甲柄。柄の内側縦に陽刻で「銀パイ」。植毛孔4列で孔内に平線残る。ハンドル下部に孔1点。	2NF-15 溝3IIb層
	13	ハブラシ	15.0	1.16	0.39	樹脂・真鍮	黄褐色。植毛孔3列で孔内に平線残る。ハンドル下部に孔1点あり真鍮製環貫通。	2NF-15 溝3IIb層
	14	草履	20.5	9.0	1.8	ゴムタイヤ	ゴムタイヤを加工した草履。タイヤを小判形にカットし、鼻緒を通す孔を3点あけケーブルの被膜を通す。かかと部に別造のゴムを鋸で接着。	4NF-17II層
	15	草履	18.8	8.0	1.8	ゴムタイヤ	ゴムタイヤを加工した草履。小判形にカットし、鼻緒を通す孔を3点あける。かかと部に別造のゴムを鋸で接着。	4NF-17II層
	16	靴底	30.3	10.6	3.0	ゴム・布	米軍用ブーツ底面か。内面メッシュの中敷き。	4NF-17II層
	17	ゴム製品	-	-	1.1	ゴムタイヤ	二次製品。小判形に切り取られることからゴムタイヤ製草履を切り取った端切れと思われる。	1NF-17II層
	18	ゴム製品	-	-	0.29	タイヤ チューブ	二次製品。チューブを円形にくり抜いた端切れ。	4NF-17II層
	19	布製品	-	-	-	布・紐	軍用ヘルメットの中敷きか。米国製か。	4NF-17II層



第108図 その他の遺物1



図版131 その他の遺物1

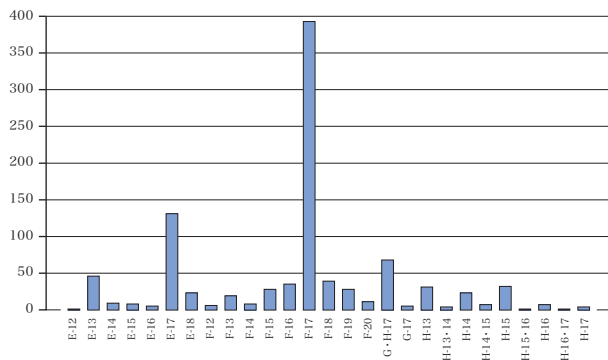


図版132 その他の遺物2

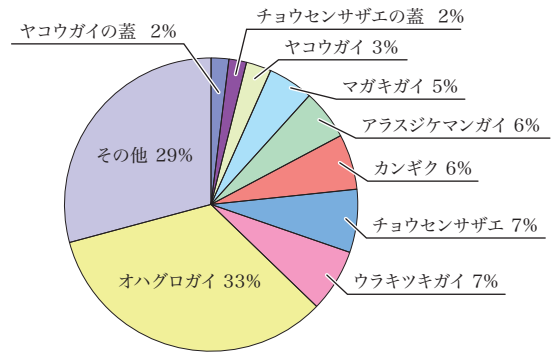
## 23 貝類遺体

平成22年度の中城御殿跡より出土した貝類遺体は、腹足綱(巻貝)23科70種、斧足綱(二枚貝)19科41種で、計42科111種が確認されている(第93・94表)。また、最小個体数および種の同定は同遺跡報告書(沖縄県立埋蔵文化財センター 2011a)と同様に行い、第110図～第112図に関しては15点未満の種をその他として総称している。

出土地で比較すると、F-17グリッドの検出量が他の地区とは異なることが分かる(第109図)。同グリッドではオハグロガイ(II-2-c)が300点を超える圧倒的な検出量をみせており、さらにそのほとんどが完形である。しかしこのF-17グリッドのオハグロガイを除けば、中城御殿の他の地区とあまり変化のない検出状況であることがわかった。



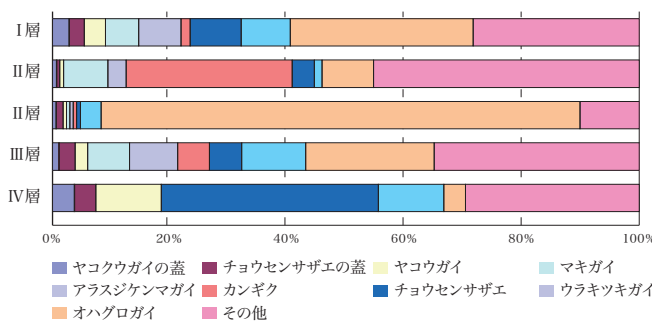
第109図 出土地別検出状況



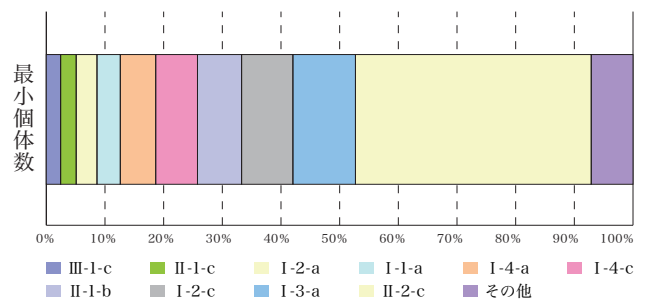
第110図 種別検出状況

層別にみると、中城御殿以前の時期とされるIV層では微量な検出となっているが、III層からはその7倍近くに増加する結果がみられた。また、II層・IIb層では若干減少する傾向が窺えるも、その差は僅かであるため断定するには至らない。IIb～III層から多く出土する状況を踏まえると、戦前までF-17グリッド石積み2付近を捨て場として使用していたであろうことが推測される。

生息地ごとに比較するとII-2-cが総検出量の約40%を占めるが、これは先述したオハグロガイの影響を受けるものであり、上記の種を除いた割合においてはサンゴ礁域に生息するものが多くみられる(第112図)。



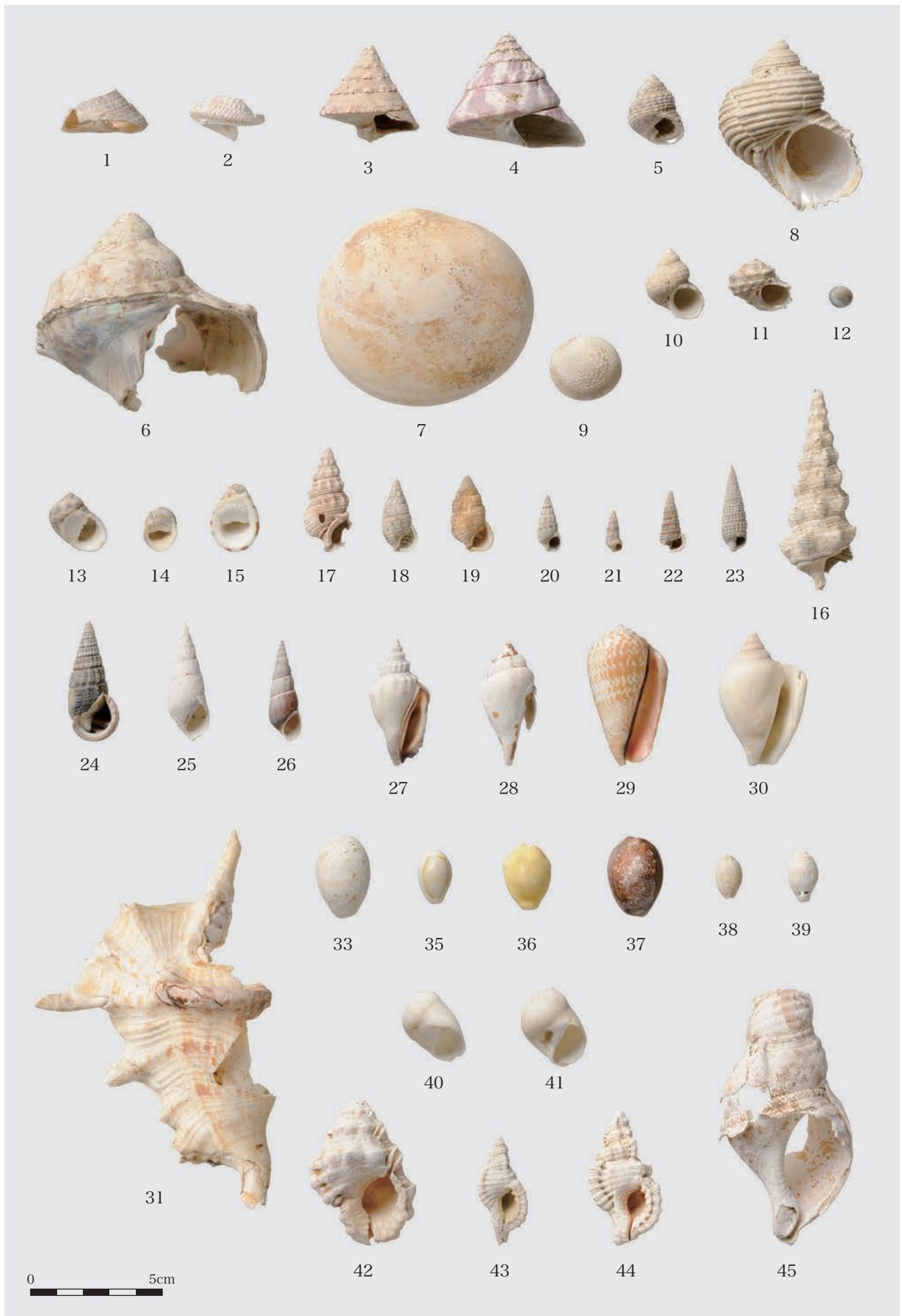
第111図 各層における種別検出率



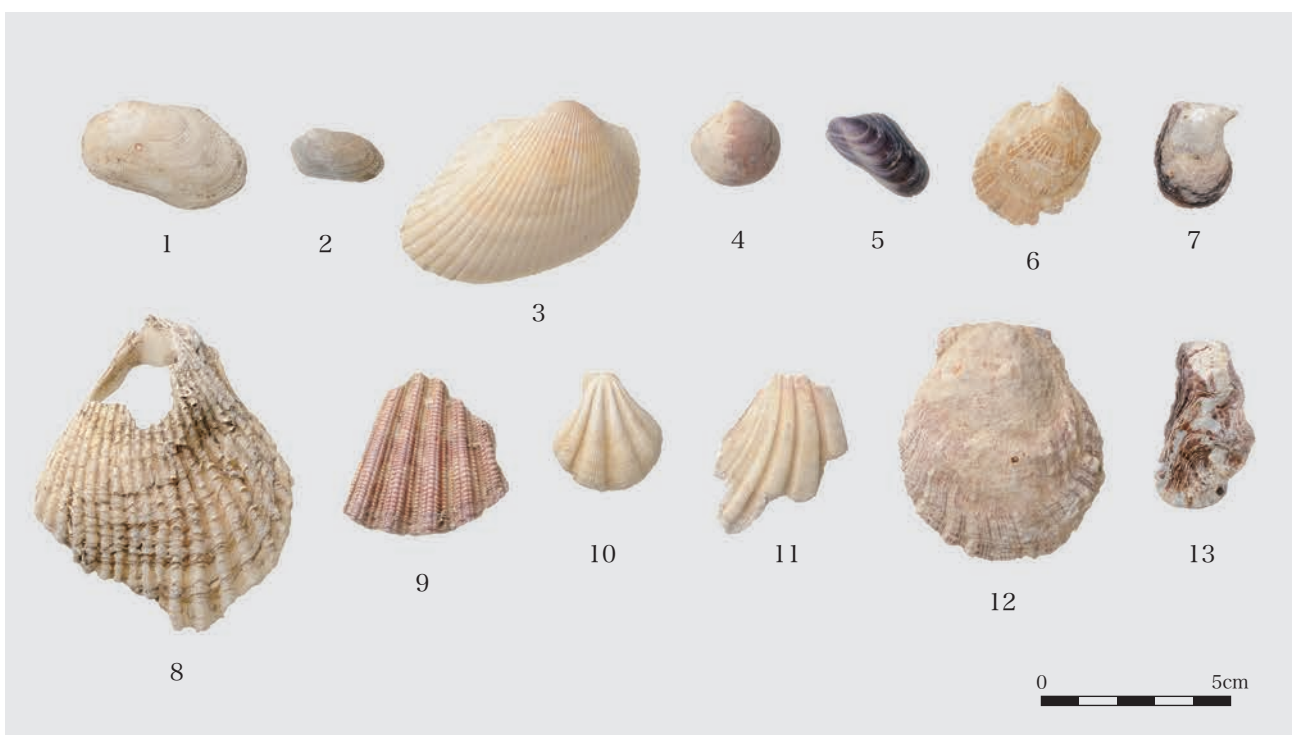
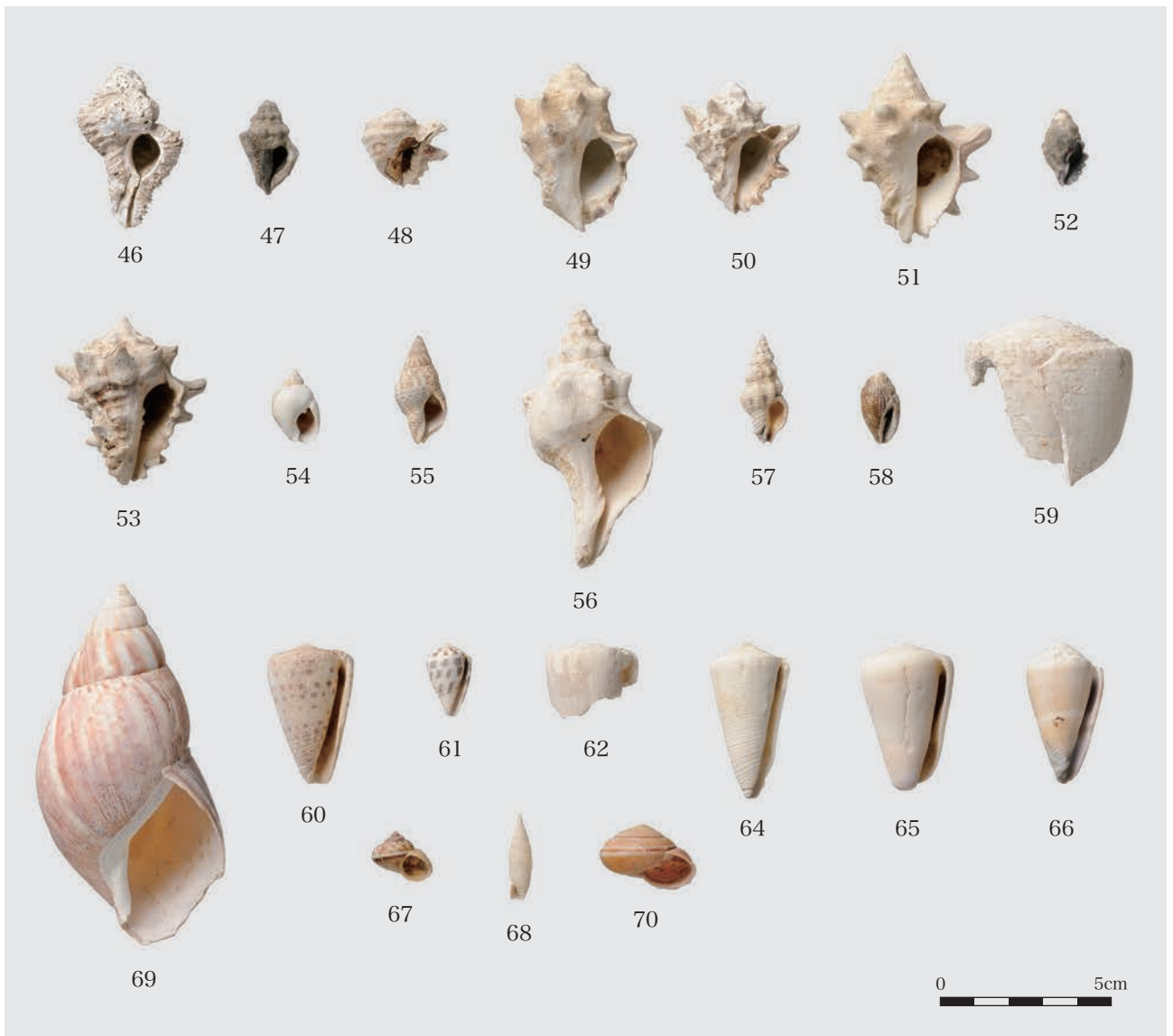
第112図 生息場所組成表

第61表 貝類生息場所類型 (habitat) 表 (沖縄県教育委員会 1987)

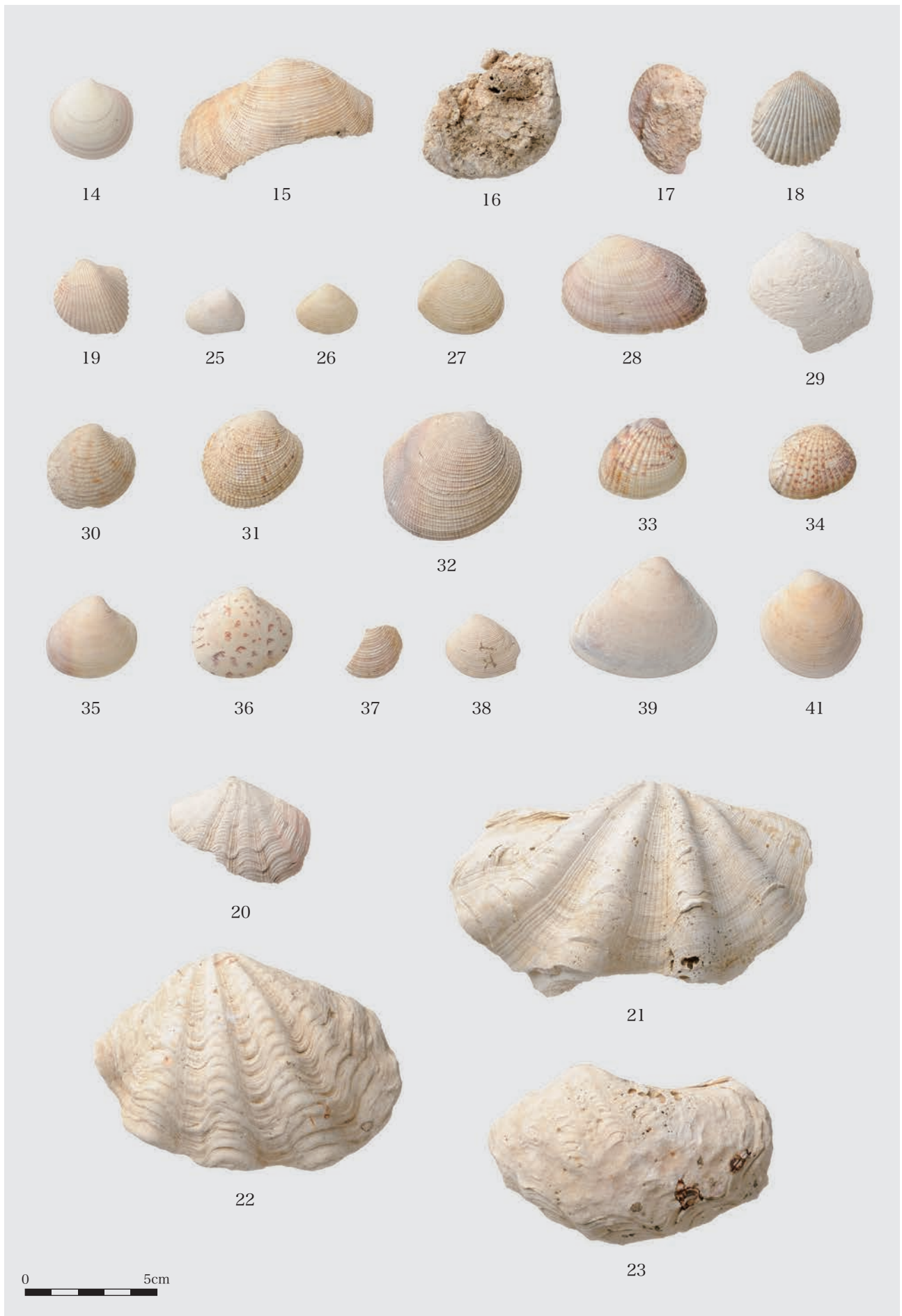
外洋～内湾	水深	底質	
I 外洋 - サンゴ礁域	0 潮間帯上部 (Iではノッチ、IIIではマングローブ)	a 岩礁/岩盤 b 転石 c 礫/砂/泥底 d 植物上 e 淡水の流入する礫底	
	1 潮間帯中・下部		
	II 内湾 - 転石域		2 亜潮間帯上部 (Iではイノー)
			3 干瀬 (Iにのみ適用)
III 河口干潟 - マングローブ域	4 礁斜面およびその下部		
	5 止水		
IV 淡水域	6 流水		
	7 林内		
V 陸域	8 林内・林縁部		
	9 林縁部		
	10 海浜域		
	VI その他		11 打ち上げ物 12 化石



図版133 貝類遺体1 巻貝 (番号は第94表と一致)



図版134 貝類遺体2 上：巻貝 下：二枚貝（番号は第93・94表と一致）



図版135 貝類遺体3 二枚貝 (番号は第93表と一致)



## 24 脊椎動物遺体

菅原広史(浦添市教育委員会)

### 1. 脊椎動物遺体の出土概要

中城御殿から出土する脊椎動物遺体については、前次調査の報告が既になされているが(沖縄県立埋蔵文化財センター 2010a、2011)、本次調査においてはこれまで以上に重要な資料が得られた。これらの分析を行うとともに、既報告資料の情報とも合わせ、中城御殿における動物の利用様相について、本節で言及する。

脊椎動物遺体は調査したそれぞれのグリッドから出土しているが、中でも特にトレンチ4に検出された方形石組み4(第4章参照)から出土した資料が注目される。同遺構内には多量の動物骨が高い密度で埋没していたことから、中城御殿内における廃棄物の投棄施設であったと目される。動物骨は大半が魚類・ニワトリ・ブタのもので占められている点で、基本的に食糧残渣であると考えられる。遺構内の供伴遺物は比較的新しく、出土資料は近代以降の時期に相当すると思われ、本資料は当該期における上級階層の食性を考察する上で重要な要素と言えよう。

本稿では、平成22年度の調査で出土した脊椎動物遺体資料について記載を行いつつ、上述の方形石組み4から出土した資料を主に対象としながら考察を行っていく。

### 2. 資料と概要と分析の方法

#### (1) 資料の概要

本調査において出土した動物骨は、その取り扱い方法により2種類に分けられる。一つは他の遺物と同様、発掘調査現場において作業中に目視により出土を確認したもので、グリッド・層位・遺構ごとに一括して取上げている。

もう一つはトレンチ4から検出された方形石組み4内から出土した動物骨で、これらは篩を用いて採集したものである。当該遺構の精査を行っていた際、覆土中に多量の動物骨が包含されていることが確認された。そこで遺構を掘り下げるにあたって搬出される覆土を遺物が包含された状態で全て土嚢袋に回収し、現場から持ち帰った。持ち帰った土は、埋蔵文化財センターにおいて乾燥させ、1.5mmメッシュの篩にかけた後に骨や各種遺物を拾い上げた。

#### (2) 分析の方法

動物骨の分析は種同定と骨長計測を基礎作業として行い、これらの結果を基に考察を行うこととした。種同定は現生標本との形態比較を基本とし、筆者の所蔵する骨格標本を比較に用いた。資料の量や遺存状態、分析の時間等との兼ね合いから、分析対象とする部位を絞って行った。魚骨では主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・椎骨を基本対象部位とし、分類群によっては必要に応じて咽頭骨・口蓋骨など他の部位を加えた。骨長計測は、前上顎骨・歯骨・咽頭骨・椎骨で計測位置が残存しているもののみ行った。

一方、鳥類・哺乳類は部位同定可能な資料を基本対象としたが、椎骨は環椎・軸椎を除いて同定対象外とし、四肢骨などの長管骨において全周が残存していないものや、肩甲骨・寛骨の破片資料についても対象外とした。また、四肢骨で全周が残存するものの、両端が欠失し骨幹のみ残存している状態のものが多数見られたが、参照した標本との比較のみでは確実な同定が困難である資料は「鳥類」「哺乳類」と記載し、詳細な判断を保留した。肩甲骨では関節周辺、寛骨は寛骨臼が残存するものについて同定の対象とした。計測についてはDriecsh1976に従い、対象部位・位置を選定している。

集計作業および最小個体数(MNI)の算出については、前述の方形石組み4出土のものと、それ以外の地点からの出土資料とを区別し、それぞれで集計・算出を行った後に合計している。

### 3. 同定結果の記載

本資料の同定の結果、魚類27群・鳥類2群・爬虫類1群・哺乳類8群が得られた(第62表)。主な分類群について同定の上での着目点、分類群としての特徴等を以下に記載する。

#### (1) 魚類

##### ○サメ類

椎骨のみが同定された分類群である。そのほとんどは椎体長が短く、上下に2つずつの孔を有する形状で、メジロザメに近似するタイプへ比定できる。本群の資料は主に遺構外から出土したものから構成されている。椎骨の直径を計測してみると、最小値10.5mmから最大値28.8mmまでサイズに大小のばらつきが見られる。

##### ○トビウオ科

椎骨のみが同定されている一群である。椎骨のサイズを見ると関節面の直径がいずれも3.5mm程度と小型である。そのためか、ピックアップ資料中からは検出されておらず、篩かけを行った方形石組み4中からのみ検出されている。

第62表 脊椎動物遺体出土分類群一覧

軟骨魚綱	サメ類 エイ類	Chondrichthyes Lamniformes Rajiformes
硬骨魚綱	ウナギ属 ニシン科 ボラ科 トビウオ科 ダツ科 カマス属 ハタ科マハタ型 ハタ科スジアラ型 イトヒキアジ属 ギンガメアジ属 メアジ近似種 シイラ属 フエダイ科 クロダイ属 ヨコシマクロダイ メイチダイ属 フエフキダイ属ハマフエフキ型 フエフキダイ属 ベラ科シロクラベラ型 ベラ科タキベラ型 ベラ科 アオブダイ属 カツオ アイゴ属 ハリセンボン科	Osteichthyes <i>Anguilla</i> sp. Clupeidae Mugilidae Exocoetidae Belonidae <i>Sphyræna</i> sp. Serranidae cf. <i>Epinephelus</i> Serranidae cf. <i>Plectropomus</i> <i>Alectis</i> sp. <i>Caranx</i> sp. Carangidae cf. <i>Selar crumenophthalmus</i> <i>Coryphaena</i> sp. Kyphosidae <i>Acanthopagru</i> sp. <i>Monotaxis grondoculis</i> <i>Gymnocranius</i> sp. <i>Lethrinus</i> cf. <i>L.nebulosus</i> <i>Lethrinus</i> Labridae cf. <i>Choerodon shoenleinii</i> Labridae cf. <i>Bodianus perditio</i> Labridae <i>Scarus</i> sp. <i>Katuwonus pelamis</i> <i>Siganus</i> sp. Diodontidae
爬虫綱	ヘビ類	Reptilia Ophidia
鳥綱	ニワトリ	Aves <i>Galus galus</i>
哺乳綱	トガリネズミ科 ネズミ科 ネコ イヌ ウマ イノシシ/ブタ ヤギ ウシ	Mammalia Soricidae Muridae <i>Felis catus</i> <i>Canis familiaris</i> <i>Equus ferus</i> <i>Sus scrofa</i> / <i>S.scrofa ver. domesticus</i> <i>Capra hircus</i> <i>Bos taurus</i>

## ○アジ科

主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・腹椎・尾椎が同定されている。アジ科はギンガメアジ属・イトヒキアジ属などに代表される大型に成長する種類とメアジ属などに属する小型のものに類別される。サイズが明確に異なるため両者の区別は容易であるが、形態比較に際しては、それぞれの標本を参照している。大型種は主上顎骨や前上顎骨・歯骨・角骨・方骨などが主に検出される部位である。歯列形状からギンガメアジとイトヒキアジに近似するものをそれぞれ同定している。一方で小型種については前上顎骨・歯骨・腹椎および尾椎が同定された。椎骨は椎体関節面の直径が主に2~3mm程度ながらも比較的形状が特徴的であることから、判別が可能である。

アジ科は大型種・小型種合わせてMNI=27とフエフキダイ科に次ぐ数を得ているが、ほとんどが方形石組み4内からの出土である。遺構内土壌の篩かけにより小型種の骨が確実に採集できたことが影響している可能性を、その要因の一つとして考慮しておく必要がある。

## ○カマス属

前上顎骨の破片と歯骨・椎骨が同定されているが、その数の大半は椎骨で占められる。腹椎・尾椎ともに椎体が長く、表面が平滑、椎体中央の径が細くなるなどの特徴から、同定は比較的容易である。本群はサイズの分布幅が比較的広く、ピックアップ資料と篩別資料の両者から出土が確認されている。

## ○シイラ属

椎骨が数点検出されている。椎骨の突起の形態や側面観、脆弱性を感じさせる質感などが他の分類群の椎骨と比べて特徴的な要素であることから判別は比較的たやすい。出土は少数ながら「回遊魚」が利用されていたことを示す重要な要素である。また、捕獲のためには外洋への進出が必要であることや現在のところ出土事例が限られていることから、上位階層と結び付く分類群であるとも指摘される(樋泉他2009)。

## ○ハタ科

主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・擬鎖骨が主な検出部位である。このうち前上顎骨と歯骨の歯列形状からマハタ型とスジアラ型に細分できる。沖縄諸島の遺跡出土魚類でサンゴ礁に生息する分類群の代表格一つに挙げられるが、本資料中ではMNI=9と比較的出土数は少ないと言える。

## ○フエダイ科

主上顎骨の関節や外側面形状、前上顎骨・歯骨の歯列形状などが特徴的である。出土自体はよくみられるが、出土数が組成の多くを占めることはあまりないため、本資料におけるMNI組成第3位は珍しい傾向であると言える。

## ○フエフキダイ科

同定された魚類群の中で最多を占める分類群である。主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・口蓋骨を中心に検出されている。フエフキダイ科は前上顎骨の形状から属以下に分類群を細別することができ(樋泉・名島2007)、本資料においてその大半はフエフキダイ属に比定されるものであると考えられる。更に、同属中でもハマフエフキの現生標本に近似する資料については「ハマフエフキ型」、それと異なる形状を持つないし破損により全体形を観察できない資料については「型不明」として記載している。なおフエフキダイ科には、このほかメイチダイ属・ヨコシマクロダイが同定された。

## ○ベラ科

主上顎骨・前上顎骨・歯骨・上下咽頭骨が主要な同定部位であり、比較的残存しやすい分類群であり、その出土数もフエフキダイ科に次ぐ魚類組成中の上位に含まれる。上下の咽頭骨からさらに細分が可能であり、全体形及び歯列の形状から本群は「シロクラベラ型」および「タキベラ型」に同定される(金子1996、菅原2010)。また、ベラ科に同定した尾椎もシロクラベラの標本に近似したものである。

沖縄本島では、ベラ科は首里城をはじめ中城湾岸の遺跡において比較的量を多く出土することが知られており、十数種類程度の咽頭骨の形態が確認されているが、ベラ科の中で比較すると「シロクラベラ型」が圧倒的多数を占める。数多の種に分類されるベラ科であるが、特定の種に利用が集中する傾向が見られ、中城御殿においても同様の傾向が認められると言える。

### ○ブダイ科

アオブダイ属に同定される前上顎骨・歯骨・下咽頭骨に加え、属不明の主上顎骨や方骨などが同定された。いずれの部位も特徴的な形態であることから同定は容易な一群である。

ベラ科と同様顎骨や咽頭骨が頑強であることから遺存しやすい一群で、出土する魚類のMNIやNISP組成において上位に位置づけられる事例が非常に多いが、本資料からはMNI=3で魚類組成中ではあまり目立たない。他の魚骨が多数出土する状況下において、本群の出土数が限られることは、遺跡中においてブダイ科の利用が低調であった可能性が高いことを示すものであると考えられる。

### ○保留・未同定

一部の角骨や方骨などの部位で、現生標本と比較したものの、近似する標本を見出すことができなかった資料は未同定と記載する。同定された分類群のバリエーションの一つであるか、あるいは同定されていない分類群のものであるかを含め、今後の検討課題である。

一方椎骨などの部位では、異なる分類群同士で類似する形態を持つ、あるいは同一分類群内での変異が大きい事例が少なくない。そのため、標本に近似する形態を持つものの、確実に分類できるか疑問の余地が残る資料については判断を「保留」している。

## (2) 爬虫類

爬虫類としてはヘビ類の椎骨が同定されたのみである。サイズは小型の魚類と同程度であるが、形態的には魚類などとは明確に異なることから、「ヘビ類」に同定することは容易である。しかし、その中での詳細な種別は標本の比較検討が十分でないため判断できていない。

遺構中やグリッド一括資料中など出土位置は各所に散見される。自然的な混入であろうと想定される一方、方形石組み内からも出土していることは、ヘビ類が本遺跡内において何らかの人為的な取り扱いがされた可能性も示唆される。

## (3) 鳥類

鳥類は比較することができた標本がニワトリのみであったことから、ニワトリとそれ以外の鳥類とする分類に留めた。この場合「鳥類」と記載して、詳細な同定は今後の課題としたい。

### ○ニワトリ

魚類や哺乳類をも含めた上でも、本資料中では最多級の同定標本数(NISP=399)・最小個体数(MNI=39)を誇る分類群である。同定は基本的に四肢骨を対象とし、趾骨や椎骨は分析対象から除いたが、それらの大半はニワトリであるとみられることから、概ね全身の部位が含まれていると考えられる。本群は各グリッド及び石組み遺構中いずれからも出土しているが、その内約85%超は方形石組み4中より出土したものである。解体痕が観察される資料もあり、全身が揃った状態で中城御殿へ持ち込まれた後、調理等がなされたことが示唆される。

### ○その他の鳥類

一覧表等において「鳥類」と記載した分類群は、ニワトリのものである可能性があるものの残存状況が十分でないため判断を保留したものと、欠損等が少なくニワトリとは確実に異なると判断できる分類群が存在している。後者は特に「鳥類保留」と区別して表記し、サイズや形態からみて複数種が含まれることが見てとれる。ニワトリに比べるとかなり少数でサイズも小さいことから、同一の遺構から出土しているとは言え、ニワトリと同様に食用目的で持ち込まれたものであるかどうか、定かではない。種同定を今後の課題とし、それを待った上での改めて検討を行いたい。

## (4) 哺乳類

## ○トガリネズミ科、ネズミ科

頭蓋骨や下顎骨が検出されており、歯列や歯の形状が特徴的であることから同定は比較的容易である。ただし、同定数がそれほど多くないことや、生物的特徴などを兼ね合わせて考えると、自然に混入したものである可能性が高いと思われる。

## ○ウマ

切歯2点・後臼歯1点がみられるのみであり、特定の遺構に関わって出土したものではない。存在を窺えるものの、具体的な利用相に言及することは難しい。

## ○イヌ

検出はされたものの、中足骨が数点出土するに留まっていることから、本分類群が中城御殿にとってどのような存在意義を持つかは、他の資料を併せて考察することが必要になろう。

## ○ネコ

下顎骨を始め、環椎・四肢骨・中手骨・中足骨などが複数個体分同定された。これらの一部は、方形石組み4中からまとまって出土している。遺構の性格を踏まえると、自然に混入したものである可能性は低いと思われるが、魚類や家畜類などと同様に食用とされたものであるのか、あるいは異なる過程を経て埋没したものであるかは、検討を要する。

## ○イノシシ/ブタ

哺乳類中では最多の同定数を占める分類群である。頭蓋骨・四肢骨をはじめ全身の部位が検出されているが、縫合あるいは骨端は、ほとんどが未癒合の状態である。顎骨あるいは遊離歯をみると乳歯の残存、未咬耗の第1・2後臼歯がみられることから、出土している個体の大半が若齢の個体であると考えられる。なお、本分析では対象外とした哺乳類の椎骨についても、その大半は本分類群に属するものであると思われる。

この分類群に同定される骨を観察すると、更に二つの群へと細別可能な様相が窺える。即ち、現生のリュウキュウイノシシの標本に近似する一群と、ブタの標本に近似する一群である。前者を「イノシシ/ブタ」、後者を「ブタ」と記載して、一覧表・集計表上で区別している。具体的には頭頂骨・後頭骨の骨厚の差、歯列の舌側方向への歪曲、同一歯種における著しいサイズの差、橈骨・尺骨・中手骨・脛骨・中足骨などの長さに対する骨幹幅の比率の差、あるいは骨表面の質感などが分類要素である。出土骨を観察すると、例えば頭蓋骨で緻密質が「厚い」、四肢骨が「太い」など、確実にブタの標本に近似する形状を持つと判断されるものがあることから、これらをブタに比定した。一方、中間的な形状・破損により形態不明瞭である場合・イノシシの標本と近似するものについてはイノシシ/ブタに類別している。

また、計測結果からは概ねブタとした資料はより大きな値をとり、イノシシ近似骨では小さい傾向が窺える。例えば第3中手骨の近位端幅(Bp)を比較してみると前者は15.6～16.9mm(平均16.3mm、N=5)であるのに対し、後者の値は11.5～13.0(平均12.0mm、N=5)とその差は明確である。脛骨の骨幹最小幅では前者の値で15.1～21.4mm(平均17.9mm、N=7)、後者では10.5～14.2(平均10.2mm、N=10)と、やはりその差は大きい(第4表)。

上記観察所見から、本資料中に少なからずブタが存在していると考えて差し支えないと思われる。イノシシ/ブタとした分類資料もブタが含まれる可能性は高いが、一方で、ブタの一群と明確に異なる要素も観察されることから、イノシシが混在している可能性も考慮する必要があるだろう。

本群はNISP=298・MNI=22を同定しているが、このうち方形石組み4内からの出土資料は1/4程度で、その他は遺構外からである点が、本群の出土傾向の特徴と言える。また、四肢骨を中心にカットマークが散見されるが、今回の分析では対象外とした椎骨で、本群に属すると思われるものの中に切断された椎体が含まれている点を追記する。

○ヤギ

哺乳類の組成中、イノシシ/ブタに次ぐ同定数を示す、第2の優占群である。概ね全身の部位が検出されており、骨端や関節部分を残存するものが目立つため同定は比較的容易である。四肢骨を中心にカットマークおよびスパイラルフラクチャーが観察された。

地点別の出土傾向をみると、方形石組み4内あるいは各グリッド出土遺物の両方に含まれ、やや遺構内出土数が多い状況である。他の哺乳類群が、両者のいずれかに大きく偏る傾向にある中で、ヤギはやや異なる様相がみてとれる。

○ウシ

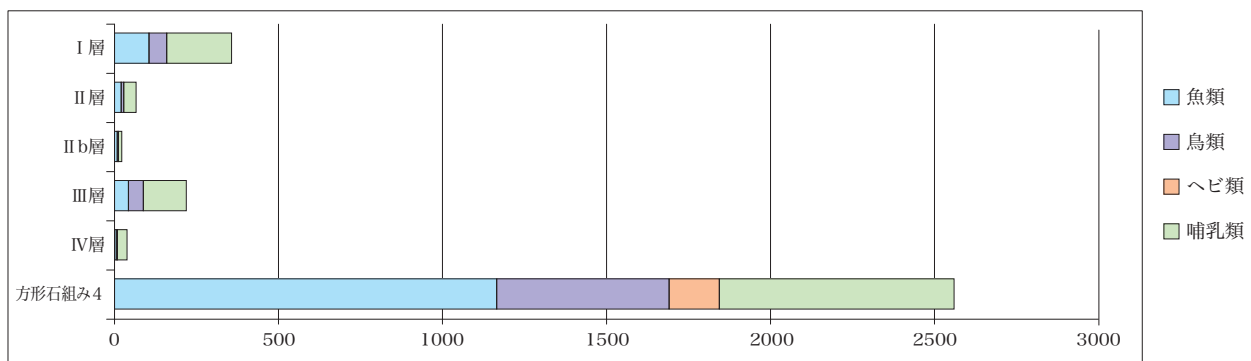
遊離歯、中手骨、中足骨、指骨など28点が同定され、中には乳歯・骨端が未癒合の幼獣骨を含んでいる。ウシに同定した資料の大半は各グリッドI層から出土しているもので、方形石組み4内の出土資料中には見られない点の特徴的と思われる。遊離歯以外の四肢骨・指骨14点中7点に解体痕が観察されており、少数ながら他の分類群より高い頻度で出現している印象である。

4. 分析結果

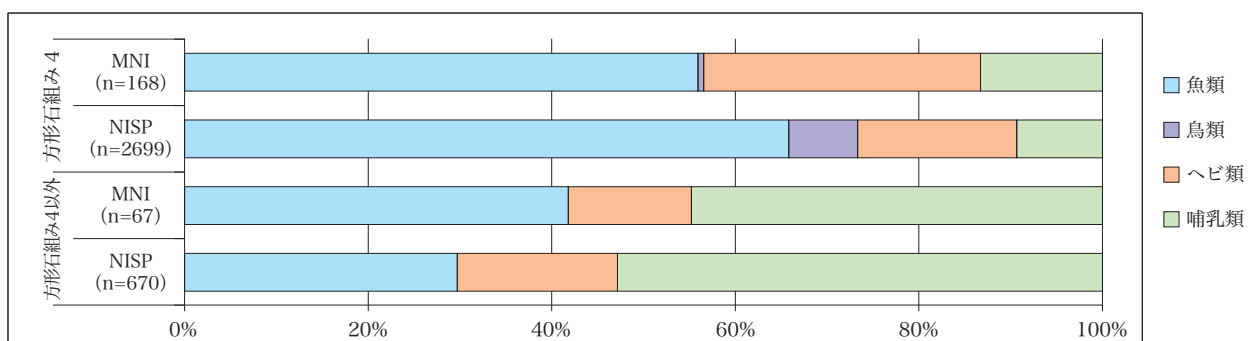
(1) 脊椎動物遺体の組成 (第113・114図)

今回の調査で出土している動物骨はトレンチ4に検出された方形石組み4から出土したものが圧倒的多数である。当該遺構は構造・位置・出土遺物などから判断すると、中城御殿における生活排出物を投棄するための遺構であると考えられる(第4章)。出土数をみると、遺構から出土した動物遺体は遺構外各層位のそれと比べ多数を占めることから(第113図)、動物骨を本遺構に集約する行為が日常的に行われていたことが想起される。一方、遺構外から出土しているものについてはI層およびIII層からの出土が目立つものの、具体的な埋没過程を推察することは難しいと思われる。

同定された分類群の内訳をみると、方形石組み4内では魚類が約60%と最優占群になり、次いで哺乳類、鳥類と続く。遺構外では逆に哺乳類が約50%を占め第1群となる。この要因の一つには、方形石組み4内の遺物は篩を用いて回収しているため、微細骨を回収していることで、組成の傾向が遺構外とやや異なっている可能性が挙げられる。しかし遺構外において微細骨が含まれていたかどうかは不明である。



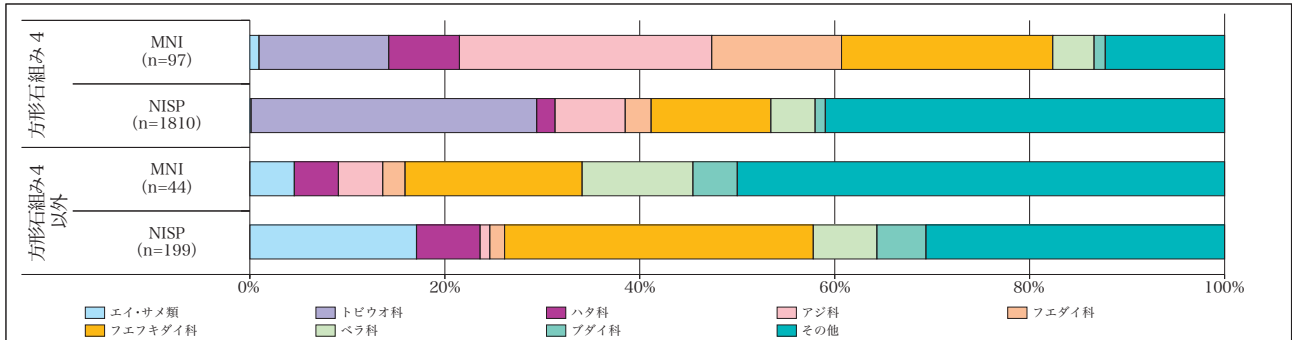
第113図 脊椎動物遺体の層別同定標本数 (NISP)



第114図 方形石組み4及び遺構外の脊椎動物遺体組成

・魚類組成(第115図)

主要な構成群は最小個体数の優占順にフエフキダイ科・アジ科・フエダイ科・トビウオ科・ハタ科・ベラ科であるが、いずれかの分類群が圧倒的多数を占める状況ではない。第1群がフエフキダイ科となることは過去の中城御殿の報告(沖縄県立埋蔵文化財センター 2010a)とも合致するが、アジ科あるいはフエダイ科が組成の上位を占める例はあまり類をみない。また篩別資料によって、ニシン科、アジ科小型種、トビウオ科、カマス属など微小椎骨などから同定されたことにより、これらの群が中城御殿の食糧残滓に含まれることが確認された。



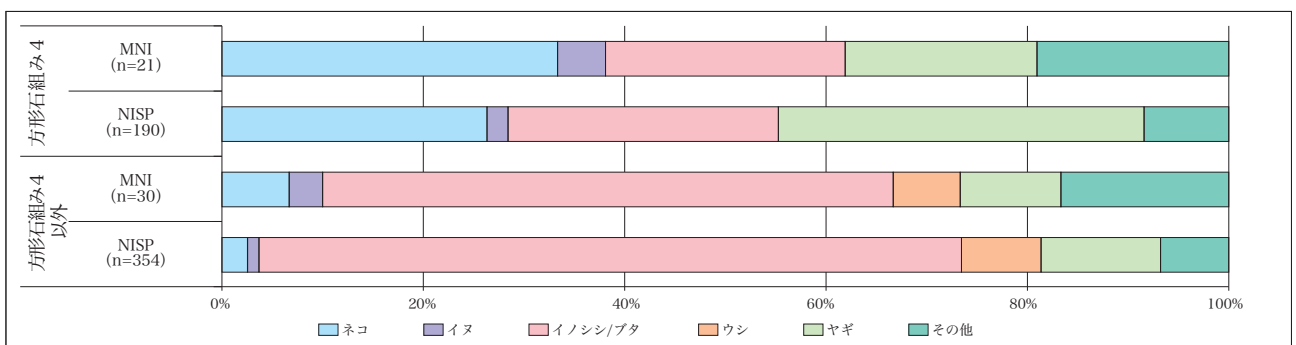
第115図 魚類組成図

・鳥類組成

全分類群別のNISPないしMNIではニワトリが全体の第1位であり、その出土の大半は方形石組み4内からの出土である。その数を魚類全体と比較すると劣るものの、食用として持ち込んだ鳥類の頻度は高いものであったと言えよう。

・哺乳類組成(第116図)

哺乳類ではブタあるいはイノシシ類が第1優占群であり、高い組成比率を示すことから食肉利用はこの群が大きな位置を占めていたものと考えられる。これに加えウシ・ヤギが主な食肉対象獣であろうと考えられるが、この3群は方形石組み4外からの出土比率が高く、他の分類群と傾向が異なる。ウシやウマに至っては遺構外出土資料のみである。このことは中城御殿への搬入、解体・調理、廃棄といった一連の過程が他の分類群のそれと異なっていた可能性を示すものである。これらの分類群はより「大型」サイズであるため、特に廃棄の段には一括して方形石組み4に投棄するのではなく、場合により個別の取り扱いがなされていたものと推察される。



第116図 哺乳類組成図

(2) 人為的損傷について

ニワトリ、ブタ、イノシシ/ブタ、ウシ、ヤギの骨には主に3パターン的人為的損傷が認められた。即ち、刃物による切創(カットマーク=C.M.)、加撃による折損(スパイラルフラクチャー=S.F.)及び切断痕である。切創は細い刃物で比較的浅く付されたものが多く観察された。折損は、骨を打ち割ることで骨髓を利用すると解される。本資料中では上記いずれの分類群にもこれら切創及び折損が確認された。また、椎骨を中心に切断痕が観察されている。

### (3) 既報告資料との比較

中城御殿ではこれまで平成20・21年度に実施された調査成果の報告書が刊行されている(沖縄県立埋蔵文化財センター 2010a, 2011)。それによると脊椎動物遺体は、今回の資料におけるグリッド出土資料と同様の出土状況下で得られたものである。出土内容を比較すると、哺乳類ではトガリネズミ科を除き同定された分類群は共通しており、出土組成も第1優占群のイノシシ/ブタ類が約半数を占める傾向は類似する。魚類についても既報告資料・今資料ともに、特定の分類群に偏るわけではなく多様な種類を利用していたことを示す結果が得られている。ただし、方形石組み4の出土資料には、さらに多くの分類群が今資料では得られたことから、魚類利用相については認識を新たなものとする必要がある。

## 5. 小考：中城御殿出土脊椎動物遺体の意義

今次調査を含めこれまでの発掘調査で出土した動物遺体は、中城御殿が移築された1870年から戦中に至るまでの間、御殿に居住した当時の社会において最上級の階層に属する人々と動物の関係性を示すものである。中でも特に今次調査で検出された方形石組み4から出土した動物骨は、遺構の年代がある位程度特定されていることも受け、近代における王家の食性を直接窺い知ることができる資料として重要な意義を持つ。これまで述べてきた分析結果からは、中城御殿における食用としての動物利用が、多様な魚類とニワトリ・ブタを中心とする家畜類に特徴付けられることを示すことができる。

家畜類の利用は、首里城跡においてニワトリとイノシシ/ブタ類が重点的に出土する傾向から、これらが食肉利用の中核をなしていたことが指摘されている(金子2005)。本分析の結果は中城御殿と首里城の間の家畜類の出土組成に類似を認めるものであり、中城御殿の生活様式が首里城に準ずると考えられる証左と言えよう。

魚類については、フエフキダイ科・ハタ科・ベラ科・ブダイ科など、沖縄において普遍的に見られる主要分類群は両者に共通するが、シイラ属やカツオなどの外洋性回遊魚やトビウオ科、アジ科小型種、ニシン科などの小型魚類は、首里城跡からの出土はあまり知られていない。しかし、2007年度に行われた首里城跡御内原北地区で検出された円形石組み遺構(シーリ)内出土の節別資料からは、上記のような分類群が少なからず出土した(菅原2010)ことから、より多彩な魚類の利用がなされていたことが窺われた。フエフキダイ科など一部の魚類が重要視されるものの、一方で「雑多な」魚類が消費され、中城御殿でもまた同様の食性が営まれていたのではないかと考えられる。

## 6. おわりに

中城御殿の調査で出土している陶磁器や金属製品などの中には、他に類を見ないような稀少遺物が多数出土しており、本遺跡が当時の社会にとって重要な存在であったことを如実に示している。しかし、脊椎動物遺体を分析しても取り立てて異質な動物が存在する訳ではない。それ故に、これらの動物遺体は生活の基盤を成す要素の集積なのであろう。「琉球王国の世子邸宅」、そして「近代」という限定された空間・時期の人間の基礎活動を考察することができる。

今後、中城御殿跡の更なる調査や首里城跡をはじめとする周辺遺跡との資料の比較を進めることで、当時の社会文化に言及することが期待できよう。

## 謝辞

本稿の執筆に当たっては沖縄県立埋蔵文化財センターの仲座久宜氏に多大なるご便宜を賜った。末筆ながら記して感謝と御礼を申し上げる次第である。





第64表 方形石組 4 II b層出土の魚骨・ヘビ骨一覧表 1

分類群	部位	LR	数	計測位置	計測値 (mm)
サメ類	歯	—	2	—	—
サメ類A	椎骨	—	3	—	—
ウナギ属	腹椎	—	5	—	—
ウナギ属	尾椎	—	2	—	—
ニシン科	腹椎	—	1	縦径	2.6
ニシン科	腹椎	—	5	—	—
ニシン科	尾椎	—	10	—	—
ボラ科	腹椎	—	1	—	—
トビウオ科	腹椎	—	1	縦径	3.5
トビウオ科	尾椎	—	1	縦径	3.8
トビウオ科	腹椎	—	363	—	—
トビウオ科	尾椎	—	166	—	—
カマス属	前上顎骨	R	1	—	—
カマス属	歯骨	R	1	—	—
カマス属	咽頭骨?	L	1	—	—
カマス属	腹椎	—	1	縦径	9.0
カマス属	腹椎	—	37	—	—
カマス属	尾椎	—	12	—	—
ハタ科スジアラ型	前上顎骨	L	2	不可	—
ハタ科スジアラ型	歯骨	L	1	歯骨高	16.6
ハタ科マハタ型	歯骨	R	1	歯骨高	11.7
ハタ科	主上顎骨	L	1	—	—
ハタ科	主上顎骨	L	1	—	—
ハタ科	主上顎骨	R	5	—	—
ハタ科	前上顎骨	L	1	—	—
ハタ科	角骨	L	2	—	—
ハタ科	角骨	R	1	—	—
ハタ科	方骨	L	5	—	—
ハタ科	方骨	R	7	—	—
ハタ科	方骨	L	1	—	—
ハタ科	擬鎖骨	L	5	—	—
ハタ科	擬鎖骨	R	1	—	—
ハタ科	擬鎖骨	R	3	—	—
ハタ型	腹椎	—	1	縦径	15.0
ハタ型	腹椎	—	49	—	—
ハタ型	尾椎	—	24	—	—
アジ科イトヒキアジ近似	歯骨	L	1	歯骨高	9.4
アジ科イトヒキアジ近似	歯骨	R	1	歯骨高	10.7
アジ科ギンガメアジ近似	前上顎骨	R	1	不可	—
アジ科ギンガメアジ近似	歯骨	L	1	歯骨高	10.8
アジ科ギンガメアジ近似	歯骨	L	1	歯骨高	12.6
アジ科大型種	主上顎骨	L	1	—	—
アジ科大型種	歯骨	L	1	歯骨高	9.2
アジ科大型種	歯骨	L	1	歯骨高	9.3
アジ科大型種	歯骨	L	1	歯骨高	8.5
アジ科大型種	歯骨	L	1	歯骨高	7.6
アジ科大型種	歯骨	L	1	歯骨高	13.0
アジ科大型種	歯骨	L	1	歯骨高	6.4
アジ科大型種	歯骨	L	1	歯骨高	7.7
アジ科大型種	歯骨	L	1	歯骨高	10.0
アジ科大型種	歯骨	L	1	歯骨高	8.5
アジ科大型種	歯骨	L	1	歯骨高	6.0
アジ科大型種	歯骨	R	1	歯骨高	6.5
アジ科大型種	歯骨	R	1	歯骨高	6.6
アジ科大型種	歯骨	R	1	歯骨高	9.7
アジ科大型種	歯骨	R	1	歯骨高	15.5
アジ科大型種	歯骨	R	1	歯骨高	9.3

分類群	部位	LR	数	計測位置	計測値 (mm)
アジ科大型種	角骨	R	1	—	—
アジ科大型種	方骨	R	1	—	—
アジ科大型種	尾椎	—	1	縦径	14.5
アジ科大型種	尾椎	—	17	—	—
メアジ近似種	主上顎骨	L	1	—	—
メアジ近似種	主上顎骨	R	1	—	—
メアジ近似種	前上顎骨	L	11	不可	—
メアジ近似種	前上顎骨	R	9	不可	—
メアジ近似種	歯骨	L	1	歯骨高	3.2
メアジ近似種	歯骨	L	1	歯骨高	3.0
アジ科小型種	角骨	R	1	—	—
アジ科小型種	方骨	L	11	—	—
アジ科小型種	方骨	R	8	—	—
アジ科小型種	腹椎	—	37	—	—
アジ科類似	前上顎骨	L	1	—	—
アジ科類似	前上顎骨	R	1	—	—
アジ科類似	歯骨	L	1	歯骨高	4.3
アジ科類似	歯骨	R	1	歯骨高	3.0
シイラ属	腹椎	—	1	—	—
シイラ属	尾椎	—	3	—	—
フェダイ科	主上顎骨	L	1	—	—
フェダイ科	主上顎骨	L	8	—	—
フェダイ科	主上顎骨	R	7	—	—
フェダイ科	前上顎骨	L	1	前上顎骨長	28.6
フェダイ科	前上顎骨	L	12	不可	—
フェダイ科	前上顎骨	R	10	不可	—
フェダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	8.7
フェダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	6.0
フェダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	11.1
フェダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	6.4
フェダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	7.0
フェダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	9.6
フェダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	9.2
フェダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	12.4
フェダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	10.9
フェダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	7.0
フェダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	6.5
フェダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	8.5
コショウダイ類?	歯骨	L	1	歯骨高	9.6
コショウダイ類?	歯骨	L	1	歯骨高	9.2
タイ科	前上顎骨	L	1	前上顎骨長	31.1
タイ科	前上顎骨	R	1	前上顎骨長	26.3
ヨコシマクロダイ	主上顎骨	R	1	—	—
ヨコシマクロダイ	歯骨	L	1	歯骨高	25.5
ヨコシマクロダイ	歯骨	R	1	不明	—
メイチダイ属	前上顎骨	L	1	前上顎骨長	26.6
フェエキダイ属ハマフェエキ型	前上顎骨	L	1	前上顎骨長	38.0
フェエキダイ属ハマフェエキ型	前上顎骨	L	1	前上顎骨長	31.8
フェエキダイ属ハマフェエキ型	前上顎骨	L	1	前上顎骨長 柄状突起長	21.1 26.5
フェエキダイ属ハマフェエキ型	前上顎骨	L	1	前上顎骨長 柄状突起長	23.8 28.9
フェエキダイ属ハマフェエキ型	前上顎骨	L	1	前上顎骨長	34.2
フェエキダイ属ハマフェエキ型	前上顎骨	L	1	前上顎骨長	20.1
フェエキダイ属ハマフェエキ型	前上顎骨	L	1	不可	—
フェエキダイ属ハマフェエキ型	前上顎骨	L	1	不可	—
フェエキダイ属ハマフェエキ型	前上顎骨	R	1	前上顎骨長	40.4

第64表 方形石組4 II b層出土の魚骨・ヘビ骨一覧表2

分類群	部位	LR	数	計測位置	計測値(mm)
フエフキダイ属ハマフエフキ型	前上顎骨	R	1	柄状突起長	56.4
フエフキダイ属ハマフエフキ型	前上顎骨	R	1	前上顎骨長	31.1
フエフキダイ属ハマフエフキ型	前上顎骨	R	1	前上顎骨長	24.1
				柄状突起長	28.2
フエフキダイ属ハマフエフキ型	前上顎骨	R	1	前上顎骨長	20.4
				柄状突起長	26.1
フエフキダイ属ハマフエフキ型	前上顎骨	R	1	前上顎骨長	47.6
フエフキダイ属ハマフエフキ型	前上顎骨	R	1	前上顎骨長	36.5
フエフキダイ属ハマフエフキ型	前上顎骨	R	1	前上顎骨長	23.6
フエフキダイ属ハマフエフキ型	前上顎骨	R	1	前上顎骨長	40.0
フエフキダイ属型不明	前上顎骨	R	1	不可	—
フエフキダイ属型不明	前上顎骨	R	1	前上顎骨長	51.9
フエフキダイ属	口蓋骨	L	1	—	—
フエフキダイ属	口蓋骨	L	14	—	—
フエフキダイ属	口蓋骨	R	1	—	—
フエフキダイ属	口蓋骨	R	20	—	—
フエフキダイ科	主上顎骨	L	1	—	—
フエフキダイ科	主上顎骨	L	9	—	—
フエフキダイ科	主上顎骨	R	1	—	—
フエフキダイ科	主上顎骨	R	8	—	—
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨長	41.9
				歯骨高	11.6
				歯骨長	44.6
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	12.9
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	11.3
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	11.3
				歯骨高	8.1
				歯骨長	28.8
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	9.6
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	7.6
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	11.7
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	10.4
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	5.1
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	9.0
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	10.8
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	5.8
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	10.8
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	14.4
フエフキダイ科	歯骨	L	1	歯骨高	17.7
				歯骨高	9.6
				歯骨長	38.1
フエフキダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	10.3
				歯骨長	38.5
				歯骨高	10.0
				歯骨長	43.8
フエフキダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	7.0
				歯骨長	24.0
フエフキダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	10.5
フエフキダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	10.3
フエフキダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	6.6
フエフキダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	11.0
フエフキダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	10.2
フエフキダイ科	歯骨	R	1	歯骨高	不可
フエフキダイ科	歯骨	R	1	歯骨長	46.8
フエフキダイ科	角骨	L	1	—	—
フエフキダイ科	角骨	R	1	—	—
フエフキダイ科	角骨	L	10	—	—
フエフキダイ科	角骨	R	13	—	—
フエフキダイ科	方骨	L	1	—	—
フエフキダイ科	方骨	L	13	—	—
フエフキダイ科	方骨	R	12	—	—
フエフキダイ科	腹椎	—	1	縦径	12.5
フエフキダイ科	腹椎	—	64	—	—
タイ型	尾椎	—	1	縦径	11.4
タイ型	尾椎	—	337	—	—
ベラ科シロクラベラ型	上咽頭骨	L	1	—	—
ベラ科シロクラベラ型	上咽頭骨	R	1	—	—
ベラ科	上咽頭骨	L	1	—	—
ベラ科	主上顎骨	R	1	—	—
ベラ科	前上顎骨	L	1	柄状突起長	31.6
ベラ科	前上顎骨	R	2	不可	—
ベラ科	前上顎骨	R	1	前上顎骨長	29.8
ベラ科	歯骨	L	1	歯骨高	22.1
ベラ科	歯骨	L	1	歯骨高	24.7
ベラ科	歯骨	R	1	歯骨高	17.7
ベラ科	歯骨	R	1	歯骨高	25.1
ベラ科	歯骨	R	1	歯骨高	17.7
ベラ科	歯骨	R	1	歯骨高	17.3
ベラ科	顎骨	不明	1	—	—
ベラ科	角骨	L	1	—	—
ベラ科	腹椎	—	1	縦径	8.6
ベラ科	尾椎	—	1	縦径	9.3
ベラ科	尾椎	—	53	—	—
ベラ科	腹椎	—	9	—	—
アオブダイ属	前上顎骨	R	1	前上顎骨長	15.7
アオブダイ属	歯骨	R	1	歯骨高	9.9
アオブダイ属	下咽頭骨	—	1	歯列面幅	10.0
ブダイ科	角骨	L	1	—	—
ブダイ科	尾椎	—	1	縦径	13.2
ブダイ科	腹椎	—	9	—	—
ブダイ科	尾椎	—	8	—	—
カツオ	腹椎	—	2	—	—
カツオ	尾椎	—	3	—	—
カツオ	尾椎	—	1	縦径	11.3
カツオ	尾椎	—	2	—	—
アイゴ属	腹椎	—	4	—	—
アイゴ属	尾椎	—	8	—	—
アイゴ属	尾椎	—	1	縦径	4.8
ハリセンボン科	棘	—	3	—	—
未同定	方骨	L	1	—	—
未同定	角骨	L	1	—	—
未同定	角骨	L	1	—	—
未同定	角骨	R	1	—	—
未同定	角骨	R	1	—	—
未同定	尾椎?	—	1	縦径	9.7
未同定	腹椎	—	50	—	—
未同定	尾椎	—	85	—	—
保留	歯骨	L	1	歯骨高	6.9
保留	第1椎	—	93	—	—
保留	腹椎	—	100	—	—
保留	尾椎	—	5	—	—
ヘビ類	椎骨	—	173	—	—

第3章 調査の方法と成果

第65表 脊椎動物遺体(鳥類・哺乳類)出土一覧表1 (方形石組み4出土分を除く)

分類群	部位	LR	残存状況	計測位置	計測値(mm)	出土位置				所見
						グリッド	トレンチ	遺構	層位	
ニワトリ	鳥口骨	L	近	不可	—	E-17	4	—	Ⅲ	鳥口骨近位端は上腕骨粗面及び肩甲骨粗面の残存を指す
ニワトリ	鳥口骨	R	近	不可	—	E-15	4	—	I	—
ニワトリ	鳥口骨	R	近	不可	—	F-16	1	石組2	Ⅱ	SF
ニワトリ	肩甲骨	L	近	不可	14.8	E-17	4	—	Ⅲ	—
ニワトリ	肩甲骨	L	近	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
ニワトリ	肩甲骨	R	近	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
ニワトリ	肩甲骨	R	近	不可	—	E-15	4	溝6	I	—
ニワトリ	上腕骨	L	近	Bp	20.8	H-13	2	—	Ⅲ	—
ニワトリ	上腕骨	R	近	Bp	17.6	H-13	2	—	Ⅲ	—
ニワトリ	尺骨	L	完存	Bp	9.7	E-14	4	—	I	—
				Dip	14.1					
				SC	4.7					
				Did	7.4					
ニワトリ	尺骨	L	近	Bp	8.8	E-15	4	—	I	—
				Dip	13.8					
				Bp	7.8					
				Dip	11.5					
ニワトリ	尺骨	L	近	Bp	8.6	H-13	2	—	Ⅲ	—
				Dip	13.2					
				Bp	8.1					
				Dip	11.6					
ニワトリ	尺骨	R	完存	SC	4.4	E-15	4	—	I	—
				Did	7.8					
				Bp	9.3					
				Dip	14					
ニワトリ	尺骨	R	遠	Bd	9.0	F-19	1	—	Ⅲ	—
ニワトリ	手根中手骨	L	第4中手欠損	Bp	12.1	F-16	1	石組2	Ⅲ	—
ニワトリ	手根中手骨	R	完存	GL	38.8	E-14	4	—	I	—
				Bp	11.8					
				Did	7.2					
				Bp	13.2					
ニワトリ	手根中手骨	R	近	Bp	13.2	H-16	2	—	Ⅲb	—
ニワトリ	大腿骨	L	近	Bp	19.7	E-17	4	—	Ⅱ	—
ニワトリ	大腿骨	L	近	SC	8.1	E-17	4	—	Ⅱ	—
ニワトリ	大腿骨	L	近	Bp	15.0	H-13-14	2	—	表祭	—
ニワトリ	大腿骨	L	近	Bp	15.8	H-13	2	—	Ⅲ	CM
ニワトリ	大腿骨	R	近	SC	7.5	F-16	1	石組2	Ⅲ	—
ニワトリ	大腿骨	R	近	SC	7.7	E-15	4	溝6	I	—
ニワトリ	大腿骨	R	近	Bd	17.9	E-15	4	溝6	I	—
ニワトリ	大腿骨	R	近	Bp	19	E-17	R	—	Ⅲ	SF
ニワトリ	大腿骨	R	近	Bp	17.4	H-13	2	—	Ⅲ	—
ニワトリ	大腿骨	R	近	Bp	16.8	E-15	4	—	I	—
ニワトリ	大腿骨	R	遠	Bd	17.5	E-13	4	—	I	—
ニワトリ	脛足根骨	L	近	不可	—	E-13	4	—	I	—
ニワトリ	脛足根骨	L	近	不可	—	E-14	4	—	I	—
ニワトリ	脛足根骨	L	遠	Bd	13.9	H-13	2	—	Ⅲ	—
				Dd	14.5					
				Bd	13.9					
				Dd	13.9					
ニワトリ	脛足根骨	L	遠	Dd	13.9	E-13	4	—	I	SF
ニワトリ	脛足根骨	R	近	不可	—	E-15	4	溝6	I	—
ニワトリ	脛足根骨	R	近	不可	—	E-15	4	—	I	—
ニワトリ	脛足根骨	R	遠	Bd	12.3	E-13	4	—	I	SF
ニワトリ	足根中足骨	R	近	Bp	16.6	F-17	1	—	Ⅱ	OS
ニワトリ	足根中足骨	R	距突起	不可	—	F-19	1	—	I	OS
ニワトリ	足根中足骨	R	距突起	不可	—	E-15	4	—	I	OS
ニワトリ	足根中足骨	R	距突起	不可	—	F-14	1	—	Ⅱ	OS
ニワトリ?	肩甲骨	L	近	不可	—	E-15	4	—	I	幼
ニワトリ?	上腕骨	R	(近)	不可	—	E-14	4	—	I	幼
ニワトリ?	尺骨	R	近	不可	—	F-16	1	石組2	Ⅲ	幼
ニワトリ?	脛足根骨	R	(遠)	不可	—	G-13	2	—	Ⅲ	幼
ニワトリ?	足根中足骨	L	近	不可	—	F-16	1	石組2	Ⅲ	幼
鳥類保留	鳥口骨	L	粗面	不可	—	E-15	4	石組4	I	—
鳥類保留	鳥口骨	R	粗面	不可	—	E-13	4	—	Ⅳ	—
鳥類保留	鳥口骨	R	遠	不可	—	F-16	1	石組2	Ⅲ	—
鳥類保留	肩甲骨	R	近	不可	—	4	—	I	—	—
鳥類保留	橈骨	L	遠	Bd	6.7	E-13	4	—	I	橈骨タイプC
鳥類保留	橈骨	L	遠	Bd	6.1	E-15	4	—	I	橈骨タイプA
鳥類保留	橈骨	R	遠	Bd	5.9	H-13	2	—	Ⅲ	橈骨タイプA
鳥類保留	橈骨	R	遠	Bd	7.6	E-17	4	—	Ⅲ	橈骨タイプA
鳥類保留	橈骨	R	ほぼ完存	GL	64.2	F-16	1	石組2	Ⅲ	橈骨タイプA
鳥類保留	橈骨	R	近幹	不可	—	F-15	1	石組1	Ⅲ	—
鳥類保留	手根中手骨	L	幹	不可	—	E-15	4	—	I	—
鳥類保留	大腿骨	L	近	GL	73.0	E-13	4	—	I	—
				Bp	14.1					
				SC	7.1					
				Bp	7.1					
鳥類保留	足根中足骨	L	遠	不可	—	E-15	4	—	I	—
鳥類保留	足根中足骨	L	遠	不可	—	E-15	4	溝6	Ⅱb	—
鳥類保留	足根中足骨	L	(遠)	不可	—	E-15	4	—	I	幼
鳥類保留	足根中足骨	R	近	SC	8.5	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類保留	足根中足骨	R	幹	SC	7.2	E-13	4	—	Ⅳ	—
鳥類保留	鳥口骨	L	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類保留	鳥口骨	L	遠	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類保留	上腕骨	R	幹	不可	—	4	—	I	—	—
鳥類保留	尺骨	L	幹	不可	—	E-17	4	—	Ⅲ	—
鳥類保留	尺骨	L	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類保留	尺骨	R	幹	不可	—	F-16	1	石組2	Ⅲ	—
鳥類保留	尺骨	R	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類保留	尺骨	R	幹	不可	—	E-13	4	—	I	—
鳥類保留	大腿骨	L	遠	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類保留	大腿骨	L	幹	不可	—	E-15	4	溝1	I	—
鳥類保留	大腿骨	L	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類保留	大腿骨	L	幹	不可	—	F-18	1	石組1	Ⅲ	—
鳥類保留	大腿骨	R	幹	不可	—	H-15	2	石組3	Ⅱb	—
鳥類保留	大腿骨	R	近	不可	—	E-13	4	—	I	—
鳥類保留	大腿骨	R	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類保留	脛足根骨	L	幹	不可	—	E-17	4	—	Ⅱ	—

分類群	部位	LR	残存状況	計測位置	計測値(mm)	出土位置				所見
						グリッド	トレンチ	遺構	層位	
鳥類不可	脛足根骨	L	幹	不可	—	E-13	4	—	I	—
鳥類不可	脛足根骨	L	幹	不可	—	F-17	1	—	Ⅱ	—
鳥類不可	脛足根骨	R	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類不可	脛足根骨	R	近	不可	—	E-15	4	—	I	—
鳥類不可	脛足根骨	不	幹	不可	—	E-15	4	溝1	I	—
鳥類不可	足根中足骨	L	幹	不可	—	E-13	4	—	I	—
鳥類不可	足根中足骨	不	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類不可	足根中足骨	不	幹	不可	—	E-15	4	石組4	Ⅱb	—
鳥類不可	足根中足骨	不	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類不可	足根中足骨	不	幹	不可	—	E-15	4	—	I	—
鳥類不可	足根中足骨	不	幹	不可	—	E-15	4	—	I	—
鳥類不可	足根中足骨	不	幹	不可	—	E-15	4	—	I	—
鳥類不可	足根中足骨	不	幹	不可	—	E-13	4	—	Ⅳ	—
鳥類不可	長管骨	不	幹	不可	—	E-13	4	—	Ⅳ	—
鳥類不可	長管骨	不	幹	不可	—	E-13	4	—	I	—
鳥類不可	長管骨	不	幹	不可	—	E-15	4	—	I	—
鳥類不可	長管骨	不	幹	不可	—	E-17	4	—	Ⅲ	—
鳥類不可	長管骨	不	幹	不可	—	G-H-17	3	—	I	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	E-17	4	—	Ⅲ	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	E-15	4	—	I	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	E-17	4	—	Ⅱ	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	E-15	4	—	I	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	E-15	4	—	I	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	E-17	4	—	Ⅱ	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	E-14	4	—	I	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	F-13	1	—	I	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	H-16	2	—	I	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	H-13	4	—	I	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	H-13	1	—	I	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	E-15	4	溝1	I	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
鳥類不可	四肢骨	不	幹	不可	—	E-14	4	—	I	—
ネズミ科	上腕骨	L	(近)~遠	—	—	H-15	2	—	Ⅱb	—
トガリネズミ科	頭蓋骨	—	一切断部	—	—	F-19	1	—	I	—
トガリネズミ科	頭蓋骨	—	前頭骨	—	—	H-15	2	石組3	Ⅱb	—
トガリネズミ科	頭蓋骨	—	前頭骨	—	—	F-16	1	石組2	Ⅲ	—
ネコ	下顎骨	L	下顎体+咬筋窩	第4表参照	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
ネコ	下顎骨	L	新突起+関節突起	—	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
ネコ	軸椎	—	ほぼ完存	—	—	E-13	4	—	I	—
ネコ	踵骨	R	ほぼ完存	不可	—	F-20	1	—	I	—
ネコ	踵骨	R	一部欠損	不可	—	E-15	4	—	I	—
ネコ	第2中足骨	R	完存	GL	43.38	E-15	4	—	表採	—
				Bd	4.9					
ネコ	第3中足骨	R	近	不可	—	E-17	4	—	I	—
ネコ	第4中手骨	R	完存	GL	27.9	E-15	4	—	I	—
				Bd	4.1					
ネコ	中手/中足骨	不	遠	不可	—	E-13	4	—	Ⅲ	—
イヌ	上顎骨	R	—	不可	—	E-17	4	—	Ⅱ	p <sup>2</sup> (P <sup>3</sup> )(P <sup>4</sup> )
イヌ	P <sup>4</sup>	L	歯冠	不可	—	E-17	4	—	Ⅱ	歯根未形成、未明出 or 明出中
イヌ	第4中手骨	R	近	不可	—	—	—	—	—	—
イヌ	第3中足骨	L	近幹	不可	—	E-15	4	—	I	—
ウマ	I <sup>1/2/3</sup>	R	ほぼ完存	—	—	E-13	4	—	I	—
ウマ	I	不	破片	—	—	F-19	1	—	I	—
ウマ	M3	R	破片	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
ブタ	頭蓋骨	—	頭頂骨+後頭骨	—	—	F-18	1	石組1	Ⅲ	—
ブタ	頭蓋骨	L	—	—	—	H-16	2	—	Ⅱb	—
ブタ	頭蓋骨	L	—	—	—	G-H-17	3	—	Ⅱ	—
ブタ	頭蓋骨	L	—	—	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
ブタ	頭蓋骨	R	—	—	—	F-17	1	石組2	Ⅲ	—
ブタ	頭蓋骨	R	—	—	—	F-15	1	—	I	—
ブタ	頭蓋骨	—	—	—	—	E-17	4	—	Ⅱ	—
ブタ	胸頭骨	L	関節節周辺	—	—	F-17	1	石組2	Ⅱ	—
ブタ	胸頭骨	L	関節節周辺	—	—	H-13	2	—	Ⅲ	—
ブタ	下顎骨	L	下顎体	不可	—	—	—	—	I	P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub>
ブタ	下顎骨	L	下顎体	不可	—	H-13	2	—	Ⅲ	P <sub>2</sub> P <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub>
ブタ	上腕骨	L	幹	SD	16.6	H-17	3	—		



第3章 調査の方法と成果

第65表 脊椎動物遺体(鳥類・哺乳類)出土一覧表 3(方形石組み4出土分を除く)

分類群	部位	LR	残存状況	計測位置	計測値(mm)	出土位置				所見
						グリッド	トレンチ	遺構	階位	
イノシシ/ブタ	脛骨	R	骨	不可	—	F-20	1	—	—	—
イノシシ/ブタ	脛骨	R	骨	不可	—	E-18	4	—	IV	—
イノシシ/ブタ	脛骨	R	骨	不可	—	E-15	4	—	IIb	—
イノシシ/ブタ	脛骨	R	骨	不可	—	E-13	4	—	I	—
イノシシ/ブタ	脛骨	不	骨	不可	—	F-13	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	脛骨	不	骨	不可	—	G-H17	3	—	I	CM
イノシシ/ブタ	脛骨	不	骨	不可	—	G-H17	3	—	I	—
イノシシ/ブタ	距骨	L	一部欠損	不可	28.9	F-19	1	—	I	CM
イノシシ/ブタ	距骨	L	—	不可	—	F-19	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	距骨	R	距骨滑車	不可	—	H-13	2	—	III	—
イノシシ/ブタ	踵骨	L	距骨関節面周辺	不可	—	E-13	4	—	I	—
イノシシ/ブタ	踵骨	L	(踵骨隆起)～関節	不可	—	F-20	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	踵骨	L	(踵骨隆起)～関節	不可	—	F-20	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	踵骨	L	距骨関節面周辺	不可	—	F-19	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	踵骨	R	距骨関節面周辺	不可	—	F-20	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	踵骨	R	距骨関節面周辺	不可	—	F-20	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	踵骨	R	距骨関節面周辺	不可	—	E-13	4	—	I	—
イノシシ/ブタ	踵骨	R	距骨関節面周辺	不可	—	F-19	1	—	III	—
イノシシ/ブタ	踵骨	R	距骨関節面周辺	不可	—	E-13	4	—	I	—
イノシシ/ブタ	踵骨	R	(踵骨隆起)～関節	不可	—	F-19	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	踵骨	R	(踵骨隆起)～関節	不可	—	F-19	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	第2中足骨	R	近～(遠)	不可	—	F-19	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	第3中足骨	R	近～(遠)	不可	11.8	F-19	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	第3中足骨	L	近～幹	Bp 10.9 B 8.3	H-13	2	—	表採	—	焼
イノシシ/ブタ	第3中足骨	L	近～幹	Bp 12.7	E-13	4	—	IV	—	CM
イノシシ/ブタ	第3中足骨	L	近～幹	Bp 11.9 B 10	E-18	4	—	I	—	—
イノシシ/ブタ	第3中足骨	R	近～(遠)	Bp 13.4 B 9.2	F-19	1	—	I	—	—
イノシシ/ブタ	第3中足骨	R	近～幹	Bp 13.1 B 10.1	F-19	1	—	III	—	—
イノシシ/ブタ	第3中足骨	R	近～幹	Bp 13.2 B 9.9	F-19	1	—	I	—	—
イノシシ/ブタ	第4中足骨	L	近～遠	Bp 12.0 B 9.6	H-15	2	—	I	—	—
イノシシ/ブタ	第4中足骨	L	近～(遠)	Bp 10.8	G-H17	3	—	I	—	—
イノシシ/ブタ	第4中足骨	R	近～遠幹	Bp 15.8	E-13	4	—	IV	—	—
イノシシ/ブタ	第5中足骨	R	近	不可	—	F-20	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	不	(遠)	不可	—	F-19	1	—	III	—
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	不	(遠)	不可	—	F-19	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	不	(遠)	不可	—	F-20	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	不	骨	不可	—	H-14	2	—	表採	—
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	不	骨	不可	—	E-13	4	—	IV	—
イノシシ/ブタ	中手/中足骨	不	骨～(遠)	不可	—	E-15	4	溝7	I	—
イノシシ/ブタ	第2/5中手/中足骨	不	骨～(遠)	不可	—	E-13	4	—	I	—
イノシシ/ブタ	第2/5中手/中足骨	不	骨～(遠)	不可	—	F-19	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	第2/5中手/中足骨	不	骨～(遠)	不可	—	G-17	3	—	III	—
イノシシ/ブタ	中節骨	不	近～遠	不可	—	H-13	2	—	III	—
イノシシ/ブタ	中節骨	不	近～遠	不可	—	H-13	2	—	III	—
イノシシ/ブタ	基礎骨	不	完存	不可	—	F-15	1	—	III	—
イノシシ/ブタ	基礎骨	不	完存	不可	—	E-13	4	—	IV	—
イノシシ/ブタ	基礎骨	不	(近)～遠	不可	—	F-19	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	基礎骨	不	(近)～遠	不可	—	F-19	1	—	III	—
イノシシ/ブタ	基礎骨	不	(近)～遠	不可	—	F-19	1	—	IV	—
イノシシ/ブタ	基礎骨	不	(近)～遠	不可	—	E-13	4	—	I	—
イノシシ/ブタ	基礎骨	不	(近)～遠	不可	—	H-13	2	—	III	—
イノシシ/ブタ	基礎骨	不	(近)～遠	不可	—	F-19	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	基礎骨	不	(近)～遠	不可	—	F-15	2	—	I	—
イノシシ/ブタ	基礎骨	不	遠	不可	—	F-20	1	—	I	—
イノシシ/ブタ	基礎骨	不	近～遠	不可	—	H-15	2	—	I	—
イノシシ/ブタ	基礎骨	不	(近)～遠	不可	—	F-19	1	—	III	—
ウシ	M <sup>1/2</sup>	R	完存	—	—	F-15	1	—	I	—
ウシ	P <sup>1/4</sup>	R	ほぼ完存	—	—	F-14	1	—	I	—
ウシ	m ↑	R	一部欠損	—	—	F-15	1	—	III	—
ウシ	M <sup>1/2</sup>	L	歯冠	歯冠長 29.3 歯冠幅 22.2 歯冠高 17.9	F-20	1	—	I	—	—
ウシ	M <sup>1/2</sup>	R	一部欠損	歯冠長 21.3(+) 歯冠幅 22.7 歯冠高 14	E-13	4	—	IV	—	—
ウシ	M ↑	L	歯冠破片	不可	—	H-13	2	—	III	—
ウシ	M ↑	R	歯冠破片	不可	—	H-16	2	—	表土	—
ウシ	P <sup>3/4</sup>	L	歯冠	—	—	F-17	1	—	I	—
ウシ	P <sup>3/4</sup>	L	一部欠損	—	—	H-13	2	—	III	—
ウシ	m <sub>3</sub>	L	ほぼ完存	—	—	F-20	1	—	I	—
ウシ	M <sup>1/2</sup>	L	歯冠	不可	—	F-16	1	—	I	—
ウシ	M <sub>2</sub>	L	一部欠損	歯冠長 39.1 歯冠幅 16.9 計測位置 歯冠高 30.4	H-14	2	北抵	III	—	—

分類群	部位	LR	残存状況	計測位置	計測値(mm)	出土位置				所見
						グリッド	トレンチ	遺構	階位	
ウシ	M <sub>2</sub>	R	歯冠	歯冠長 歯冠幅 歯冠高	35.8 15.8 27	F-15	1	—	I	—
ウシ	肩甲骨	L	関節周辺	SLC	32.6	F-17	1	—	I	幼獣
ウシ	中手骨	L	近	Bp	59.1	E-13	4	—	I	CM,SF
ウシ	中手骨	不	遠	Bd	65.4	F-15	1	—	I	CM
ウシ	大腿骨	不	破片	不可	—	G-H17	3	—	II	—
ウシ	脛骨	L	遠	不可	—	F-19	1	—	I	未癒合で脱落した端部
ウシ	中心第4足根骨	R	完存	GB	55.8	G-H17	3	—	I	CM
ウシ	中足骨	L	近幹～遠	SD	24.8	F-19	1	—	I	SF
ウシ	中足骨	L	近～幹	SD	29.1	F-17	1	—	II	SF
ウシ	中足骨	R	遠幹	不可	—	F-15	1	—	I	CM
ウシ	中節骨	不	完存	GL Bp SD Bd	38.7 29.1 23.8 22.5	E-17	4	—	II	—
ウシ	末節骨	不	完存	—	—	F-17	1	石積2	III	—
ウシ	末節骨	—	ほぼ完存	—	—	H-13	2	—	III	—
ウシ	基礎骨	不	幹～遠	Bd	22.2	F-20	1	—	I	SM,幼?
ウシ?	距骨	R	ほぼ完存	不可	—	F-14	1	—	I	幼獣?
ヤギ	前頭骨	R	角突起	—	—	F-17	1	石積2	IIb	CM
ヤギ	上腭骨	R	—	—	G-17	3	—	I	I	P <sup>1</sup> M <sup>1</sup>
ヤギ	P <sup>2</sup>	L	ほぼ完存	—	—	E-15	4	溝6	I	—
ヤギ	P <sup>2</sup>	L	ほぼ完存	—	—	E-15	4	溝6	I	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	歯冠	歯冠長 12.4 歯冠幅 10.4 歯冠高 12.7	F-17	1	—	II	—	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	R	歯冠	歯冠長 9.9 歯冠幅 17.8 歯冠高 13.0	E-15	4	—	I	—	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	R	歯冠	歯冠長 10.8 歯冠幅 19.9 歯冠高 17.6	G-17	3	—	I	—	—
ヤギ	M <sup>1</sup>	L	歯冠	歯冠長 12.5 歯冠幅 26.2 歯冠高 12.5	E-17	4	—	I	—	—
ヤギ	M <sup>1</sup>	L	歯冠	不可	—	E-17	4	—	III	—
ヤギ	下顎骨	L	—	不可	—	F-19	1	—	I	P <sub>2</sub>
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	歯冠	歯冠長 13.2 歯冠幅 7.4 歯冠高 23.3	E-15	4	溝6	II	—	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	歯冠	歯冠長 13.7 歯冠幅 7.2 歯冠高 26.7	E-13	4	—	I	—	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	歯冠	歯冠長 14.4 歯冠幅 7.4 歯冠高 27.3	E-15	4	石積4	I	—	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	歯冠	歯冠長 11.0 歯冠幅 6.9 歯冠高 17.4	E-15	4	石積4	I	—	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	歯冠	歯冠長 11.6 歯冠幅 7.4 歯冠高 18	E-15	4	—	I	—	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	R	歯冠	歯冠長 10.0 歯冠幅 6.2 歯冠高 19.4	E-15	4	—	I	—	—
ヤギ	上腭骨	L	幹～遠	SD 9.8 Bd 22.2	E-17	4	—	I	—	—
ヤギ	上腭骨	L	幹	不可	—	E-17	4	—	III	CM
ヤギ	上腭骨	L	遠幹	不可	—	G-17	3	—	III	SF
ヤギ	上腭骨	R	遠	Bd 23.3	E-13	4	—	IV	SF	—
ヤギ	上腭骨	R	遠幹	不可	—	E-15	4	溝6	I	SF
ヤギ	橈骨	L	幹	SD 10.7	E-12	4	—	I	—	—
ヤギ	橈骨	L	幹	SD 11.7	E-15	4	—	I	—	—
ヤギ	橈骨	R	近～幹	Bp 22.4 SD 13.7	F-14	1	—	I	—	—
ヤギ	橈骨	R	幹	不可	—	E-15	4	—	I	—
ヤギ	中手骨	L	近	Bp 20.1	E-15	4	—	I	—	—
ヤギ	中手骨	L	幹	不可	—	E-17	4	—	I	—
ヤギ	大腿骨	R	近～遠幹	不可	—	E-17	4	—	II	SF
ヤギ	大腿骨	R	近幹	不可	—	E-17	4	—	II	SF
ヤギ	脛骨	L	近幹～遠	SD 12.6 Bd 22.4 SD 12.6	H-13	2	—	III	—	CM
ヤギ	脛骨	R	近幹～遠	Bd 22.6	E-13	4	—	IV	—	—
ヤギ	脛骨	R	近幹～遠幹	SD 11	F-18	1	石積1	III	—	—
ヤギ	距骨	R	ほぼ完存	GL 1	25	E-15	1	—	I	—
ヤギ	中足骨	R	近～幹	不可	—	E-13	4	—	I	CM
ヤギ	中手/中足骨	不	骨	不可	—	E-17	4	—	II	付着物有
ヤギ	基礎骨	不	完存	GL 32.5 Bp 11.2 SD 9.5 Bd 10.5	E-15	4	—	I	—	—
ヤギ	基礎骨	不	完存	GL 28.7 Bp 9.2 SD 7.6 Bd 9.1	E-15	4	溝6	II	—	—
ヤギ	中節骨	不	完存	GL 22.9 Bp 10.7 SD 7.1 Bd 7.3	G-H17	1	—	III	—	—
哺乳類	大腿骨	L	遠	Bd 13.5	E-17	4	—	III	SF	—
哺乳類	基礎骨	不	(近)～遠	SD 8.6 Bd 8.7	E-14	4	溝7	IIb	—	—
哺乳類	基礎骨	不	(近)～遠	SD 8.0 Bd 9.1	H-13	2	—	III	—	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	G-H17	3	—	I	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	E-14	4	—	I	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	F-13	1	—	I	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	E-14	4	—	I	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	H-14	2	—	I	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	E-13	4	—	I	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	F-19	1	—	I	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	F-20	1	—	I	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	E-17	4	—	II	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	F-17	1	—	I	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	—	—	—	—	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	H-13	2	—	III	—
哺乳類	四肢骨	不	幹	不可	—	F-19	1	—	I	—



第66表 方形石組4 II b層出土の鳥類・哺乳類骨一覧表2

分類群	部位	LR	数	残存状況	計測位置	計測値(mm)	所見
ニワトリ	腕骨	R	1	遠	Bd	8.1	—
ニワトリ	腕骨	R	1	遠	Bd	7.2	—
ニワトリ	腕骨	R	1	遠	Bd	6.9	—
ニワトリ	腕骨	R	1	遠	Bd	8.7	—
ニワトリ	腕骨	R	1	遠	Bd	8.5	—
ニワトリ	腕骨	R	1	遠	—	—	—
ニワトリ	腕骨	R	1	遠	Bd	不可	—
ニワトリ	腕骨	R	1	遠	Bd	不可	—
ニワトリ	腕骨	R	1	遠	Bd	不可	—
ニワトリ	尺骨	L	1	近	Bp	9.7	SF
					Dip	16.1	—
ニワトリ	尺骨	L	1	近	Bp	9.6	—
					Dip	14.4	—
ニワトリ	尺骨	L	1	近	Bp	10.5	—
					Dip	16.4	—
ニワトリ	尺骨	L	1	近	Bp	10.4	—
					Dip	10.0	—
ニワトリ	尺骨	L	1	近	Bp	10.0	—
					Dip	12.4	—
ニワトリ	尺骨	L	1	遠幹～遠	Bd	11.5	—
ニワトリ	尺骨	L	1	遠幹～遠	Bd	11.8	—
ニワトリ	尺骨	L	1	遠幹～遠	Bd	9.1	—
ニワトリ	尺骨	L	1	幹～遠	Did	12.9	—
ニワトリ	尺骨	L	1	遠	Bd	9.6	—
ニワトリ	尺骨	L	1	遠	Bd	8.8	—
ニワトリ	尺骨	L	1	遠	Bd	10.9	—
ニワトリ	尺骨	L	1	遠	Bd	10.2	—
ニワトリ	尺骨	L	1	遠	Bd	11.0	—
ニワトリ	尺骨	L	1	遠	Bd	8.2	—
ニワトリ	尺骨	R	1	近	Bp	10.1	—
					Dip	13.7+	—
ニワトリ	尺骨	R	1	近	Bp	8.6	—
					Dip	12.8	—
ニワトリ	尺骨	R	1	近	Bp	8.7	—
					Dip	12.3	—
ニワトリ	尺骨	R	1	近～近幹	Bp	9.9	—
					Dip	14.4	—
ニワトリ	尺骨	R	1	遠	Bd	8.7	—
ニワトリ	尺骨	R	1	遠	Bd	10.5	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	近	Bp	13.2	SF
ニワトリ	手根中手骨	L	1	近	Bp	12.1	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	近	Bp	13.2	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	近	Bp	11.3	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	近	Bp	12.4	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	近	Bp	12.2	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	近	Bp	13.8	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	近	Bp	12.5	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	遠	Did	7.5	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	遠	Did	8.9	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	遠	Did	7.5	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	遠	Did	7.5	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	遠	不可	—	—
ニワトリ	手根中手骨	L	1	遠	不可	—	—
ニワトリ	手根中手骨	R	1	近	Bp	13.1	—
ニワトリ	手根中手骨	R	1	近	Bp	12.8	—
ニワトリ	手根中手骨	R	1	遠	Did	8.3	—
					GL	91.8	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	完存	Bp	19.6	—
					Lm	85.6	—
					SC	9.2	—
					Bd	18.9	—
					GL	113.7	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	完存	SC	9.2	—
					Bd	21.8+	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	完存	GL	83.8	—
					Bp	18.1	—
					Bd	27.2	—
					SC	7.7	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	近～幹	Bp	17.0	CM
					SC	7.7	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	近～幹	Bp	20.5	SF
ニワトリ	大腿骨	L	1	近～幹	Bp	22.9	SF
ニワトリ	大腿骨	L	1	近～幹	Bp	16.9	—
					SC	6.9	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	近	Bp	18.3	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	近	Bp	21.4	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	近	不可	—	幼
ニワトリ	大腿骨	L	1	近破片	不可	—	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	幹～遠	Bd	20.2	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	幹～遠	Bd	18.2	SF
ニワトリ	大腿骨	L	1	幹～遠	不可	—	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	遠	Bd	17.5	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	遠	Bd	20.1	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	遠	Bd	15.4	—
ニワトリ	大腿骨	L	1	遠	不可	—	—
ニワトリ	大腿骨	R	1	完存	GL	109.9	—
					Bp	22.4	—
					Lm	101.3	—
					SC	8.8	—
					Bd	22.9	—
ニワトリ	大腿骨	R	1	完存	GL	99.2	—
					Bp	19.2+	—
					Bd	20.7	—
					SC	8.9	—
					GL	88.7	—
ニワトリ	大腿骨	R	1	完存	Bp	19.1	—
					Bd	18.1	—
					SC	8.0	—
					GL	103.2	—
ニワトリ	大腿骨	R	1	完存	Bp	22.0	—
					Bd	21.1	—
					SC	9.0	—
ニワトリ	大腿骨	R	1	近	Bp	21.6	—
ニワトリ	大腿骨	R	1	近	Bp	18.6	—
ニワトリ	大腿骨	R	1	近～幹	Bp	19.4	SF
					SC	7.7	—
ニワトリ	大腿骨	R	1	近～幹	Bp	20.1	—
					SC	7.8	—

分類群	部位	LR	数	残存状況	計測位置	計測値(mm)	所見
ニワトリ	大腿骨	R	1	近～幹	Bp	18.2	—
					SC	8.0	—
ニワトリ	大腿骨	R	1	遠	Bd	19.9	SF
ニワトリ	大腿骨	R	1	遠	Bd	20.6	SF
ニワトリ	大腿骨	R	1	遠	Bd	18.6	—
ニワトリ	大腿骨	R	1	遠	Bd	19.0	—
ニワトリ	大腿骨	R	1	遠	Bd	15.3	—
ニワトリ	脛骨	L	1	近幹～遠	Dd	14.7	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	近	Dip	33.9	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	近	Dip	23.1	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	近	Dip	28.6	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	近	Dip	20.6	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	近～幹	Dip	26.7	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	近～幹	Dip	26.6	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	近～幹	不可	—	—
ニワトリ?	脛足根骨	L	1	(近)～幹	不可	—	幼
ニワトリ	脛足根骨	L	1	遠	Bd	14.9	—
					Dd	16.3	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	遠	Bd	13.4	—
					Dd	13.2	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	遠	Bd	16.4	—
					Dd	16.4	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	遠	Bd	13.0	—
					Dd	14.4	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	遠	Bd	13.6	切断
					Dd	14.8+	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	遠	Bd	15.6	—
					Dd	16.2	—
ニワトリ	脛足根骨	L	1	遠	Bd	13.8	—
					Dd	13.9	—
ニワトリ	脛骨	R	1	完存	GL	148.0	—
					Dip	18.8	—
					La	142.5	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近	Dip	22.1	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～幹	Dip	27.9	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～幹	Dip	20.5	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～幹	Dip	24.6	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～幹	Dip	26.9	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～幹	Dip	27.5	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～幹	Dip	22.3	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～幹	Dip	26.7	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～幹	Dip	不可	CM
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～遠幹	Dip	32.3	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～幹	Dip	25.8	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～遠	Bd	16.8	—
					Dd	17.0	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～遠	Bd	13.1	—
					Dd	13.9	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近～遠	Bd	13.4	—
					Dd	13.2	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	遠	Bd	15.1	SF
					Dd	15.0	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	遠	Bd	14.4	—
					Dd	13.9	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	遠	Bd	15.8	—
					Dd	16.5	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	遠	Bd	14.1	切断
					Dd	13.5	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	遠	Bd	15.8	—
					Dd	15.6	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	遠	Bd	15.3	CM
					Dd	15.2	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	遠	Bd	12.2	—
					Dd	10.8	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	遠	Bd	12.5	—
					Dd	13.2	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	遠	Bd	10.1	—
					Dd	10.9	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近	Dip	24.2	—
ニワトリ	脛足根骨	R	1	近	不可	—	—
ニワトリ?	脛足根骨	R	1	近	不可	—	—
					GL	94.2	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	完存	Bp	18.5	—
					SC	10.7	—
					Bd	17.5	—
					GL	92.9	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	完存	Bp	17.8	オス
					SC	10.0	—
					Bd	16.7	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	幹～遠	SC	7.5	オス
ニワトリ	足根中足骨	L	1	距突起～遠	Bd	20.5	オス
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近～幹	Bd	18.6	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近～幹	Bd	15.3	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	Bp	17.8	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	Bp	17.9	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	Bp	19.2	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	Bp	18.4	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	Bp	17.9	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	Bp	16.5	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	Bp	17.1	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	Bp	15.7	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	Bp	14.3	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	Bp	14.7	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	Bp	17.4	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	不可	—	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	近	不可	—	未癒合で脱落した端部
ニワトリ	足根中足骨	L	1	遠	Bd	14.3	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	遠	Bd	19.0	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	遠	Bd	16.6	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	遠	Bd	17.4	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	遠	Bd	14.8	—
ニワトリ	足根中足骨	L	1	距突起	不可	—	オス
ニワトリ	足根中足骨	L	1	距突起	不可	—	オス
ニワトリ	足根中足骨	R	1	近～遠	Bd	17.6	オス
ニワトリ	足根中足骨	R	1	近～遠	Bp	18.3	—
ニワトリ	足根中足骨	R	1	近～遠	SC	9.3	オス





第66表 方形石組4 II b層出土の鳥類・哺乳類骨一覧表4

分類群	部位	LR	数	残存状況	計測位置	計測値 (mm)	所見
ネコ	第2中足骨	R	1	完存	GL	41.8	—
ネコ	第2中足骨	R	1	近～幹	Bd	4.7	—
ネコ	第3中足骨	R	1	完存	GL	48.7	—
ネコ	第3中足骨	R	1	完存	Bd	5.7	—
ネコ	第3中足骨	L	1	近～遠幹	不可	—	—
ネコ	第3中足骨	R	1	近～幹	不可	—	—
ネコ	第3中足骨	R	1	近～幹	不可	—	—
ネコ	第3中足骨	R	1	完存	GL	44.6	—
ネコ	第4中足骨	L	1	完存	Bd	5.4	—
ネコ	第4中足骨	L	1	完存	GL	48.9	—
ネコ	第4中足骨	L	1	完存	Bd	5.2	—
ネコ	第4中足骨	L	1	近～遠幹	不可	—	—
ネコ	第4中足骨	L	1	近～幹	不可	—	—
ネコ	第4中足骨	L	1	近～遠幹	不可	—	—
ネコ	第4中足骨	L	1	完存	GL	45.5	—
ネコ	第4中足骨	L	1	完存	Bd	4.8	—
ネコ	第4中足骨	L	1	近～幹	不可	—	—
ネコ	第4中足骨	L	1	完存	GL	46.0	—
ネコ	第4中足骨	L	1	完存	Bd	4.9	—
イヌ	第4中足骨	L	1	完存	GL	62.7	—
イヌ	第5中足骨	L	1	完存	Bd	8.5	—
イヌ	第5中足骨	L	1	完存	GL	56.4	—
イヌ	第3中足骨	L	1	近	Bd	8.3	—
イヌ	第4中足骨	R	1	近	不可	—	—
ブタ	下顎骨	L	1	吻合～オートガイ孔	不可	—	—
ブタ	肩甲骨	R	1	関節	SLC	23.5	CM
ブタ	肩甲骨	R	1	関節周辺	SLC	26.4	CM
ブタ	肩甲骨	R	1	関節	SLC	22.1	CM
ブタ	肩甲骨	L	1	関節周辺～肩甲骨棘	SLC	21.7	CM
ブタ	上腕骨	L	1	(近)	不可	—	SF
ブタ	上腕骨	L	1	(近)	不可	—	SF
ブタ	橈骨	L	1	近～(遠)	Bp	29.9	—
ブタ	橈骨	L	1	近～(遠)	SD	20.3	—
ブタ	橈骨	R	1	近破片	不可	—	—
ブタ	第3中手骨	L	1	近～幹	Bp	16.9	CM
ブタ	第3中手骨	L	1	近～幹	B	14.6	—
ブタ	第3中手骨	R	1	近～(遠)	Bp	16.8	—
ブタ	第3中手骨	R	1	近～(遠)	B	13.7	—
ブタ	第4中手骨	R	1	近～(遠)	Bp	15.9	—
ブタ	第4中手骨	R	1	近～(遠)	B	13.2	—
ブタ	大腿骨	L	1	(遠)	不可	—	CM, SF
ブタ	大腿骨	L	1	遠幹	不可	—	CM, SF
ブタ	大腿骨	R	1	(遠)	不可	—	CM, SF
ブタ	大腿骨	R	1	(近)	不可	—	SF
ブタ	大腿骨	R	1	(近)	不可	—	SF
ブタ	大腿骨	R	1	(近)	不可	—	SF
ブタ	脛骨	R	1	近幹～遠幹	SD	21.4	—
ブタ	脛骨	R	1	遠	不可	—	未癒合で脱落した端部
ブタ	脛骨	L	1	遠	不可	—	未癒合で脱落した端部
ブタ	第3中足骨	L	1	近～(遠)	Bp	14.7	—
ブタ	第3中足骨	L	1	近～(遠)	B	12.7	—
ブタ	第5中足骨	L	1	近～(遠)	不可	—	—
ブタ	基節骨	不	1	(近)～遠	SD	14.4	—
ブタ	基節骨	不	1	(近)～遠	Bd	16.6	—
ブタ	基節骨	不	1	(近)～遠	SD	13.1	—
ブタ	基節骨	不	1	(近)～遠	Bd	15.0	—
イノシシ/ブタ	環椎	L	1	前後関節窩	不可	—	—
イノシシ/ブタ	環椎	L	1	前後関節窩	不可	—	—
イノシシ/ブタ	環椎	R	1	半存	不可	—	中央で切断、CM
イノシシ/ブタ	環椎	R	1	前後関節窩	不可	—	中央付近で切断
イノシシ/ブタ	軸椎	不	1	ほぼ完存	不可	—	軸部切断
イノシシ/ブタ	橈骨	L	1	遠	不可	—	未癒合で脱落した端部
イノシシ/ブタ	橈骨	R	1	遠	不可	—	未癒合で脱落した端部
イノシシ/ブタ	寛骨	L	1	寛骨白	不可	—	—
イノシシ/ブタ	寛骨	L	1	寛骨白(腸骨側)	不可	—	—
イノシシ/ブタ	寛骨	L	1	寛骨白(腸骨側)	不可	—	—
イノシシ/ブタ	寛骨	L	1	寛骨白(恥骨側)	不可	—	—
イノシシ/ブタ	寛骨	L	1	寛骨白(恥骨側)	不可	—	—
イノシシ/ブタ	寛骨	L	1	寛骨白(恥骨側)	不可	—	—
イノシシ/ブタ	寛骨	R	1	寛骨白(腸骨側)	不可	—	—
イノシシ/ブタ	寛骨	R	1	寛骨白(恥骨側)	不可	—	—
イノシシ/ブタ	腓骨	不	1	(近)	不可	—	—
イノシシ/ブタ	腓骨	不	1	(遠)	不可	—	—
イノシシ/ブタ	距骨	R	1	完存	GLl	39.6	—
イノシシ/ブタ	距骨	R	1	完存	GLm	32.8	—
イノシシ/ブタ	踵骨	R	1	一部欠損	不可	—	—
イノシシ/ブタ	踵骨	L	1	(踵骨隆起)関節面	不可	—	—
イノシシ/ブタ	第2中手骨	R	1	近～(遠)	不可	—	—
イノシシ/ブタ	第5中手骨	R	1	近～(遠)	不可	—	—
イノシシ/ブタ	第5中足骨	L	1	近～(遠)	不可	—	—
イノシシ/ブタ	末節骨	不	1	完存	不可	—	—
イノシシ/ブタ	末節骨	不	1	完存	不可	—	—
ヤギ	角芯	R	1	幹	不可	—	全体的に研磨
ヤギ	角芯	不	1	近～遠	不可	—	角部は完存も短い
ヤギ	上顎骨	L	1	歯槽	第4表参照	—	M <sup>1/2</sup>
ヤギ	P <sup>3/4</sup>	R	1	歯冠	不可	—	—
ヤギ	P <sup>3/4</sup>	R	1	歯冠	不可	—	—
ヤギ	P↑	L	1	ほぼ完存	不可	—	—
ヤギ	P↑	L	1	ほぼ完存	不可	—	—
ヤギ	P↑	L	1	ほぼ完存	不可	—	—
ヤギ	P↑	L	1	ほぼ完存	不可	—	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠長	14.5	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠幅	11.3	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠長	14.8	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠幅	11.9	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠長	13.1	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠幅	11.3	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠高	27.4	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠長	10.8	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠幅	11.3	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠高	10.1	—

分類群	部位	LR	数	残存状況	計測位置	計測値 (mm)	所見
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠長	12.0	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠幅	10.0	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	L	1	歯冠	歯冠高	18.7	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	R	1	歯冠	歯冠長	13.4	歯根未形成
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	R	1	歯冠	歯冠幅	11.1	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	R	1	ほぼ完存	歯冠長	10.5	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	R	1	ほぼ完存	歯冠幅	10.0	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	R	1	ほぼ完存	歯冠高	9.7	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	R	1	ほぼ完存	歯冠長	11.1	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	R	1	ほぼ完存	歯冠幅	11.7	—
ヤギ	M <sup>1/2</sup>	R	1	ほぼ完存	歯冠高	7.5	—
ヤギ	M <sup>3</sup>	L	1	歯冠	歯冠長	16.6	—
ヤギ	M <sup>3</sup>	L	1	歯冠	歯冠幅	12.5	—
ヤギ	M <sup>3</sup>	L	1	歯冠	歯冠長	19.4	—
ヤギ	M <sup>3</sup>	L	1	歯冠	歯冠幅	14.1	—
ヤギ	M↑	L	1	歯冠破片	不可	—	—
ヤギ	下顎骨	L	1	吻合～M <sub>3</sub>	第4表参照	—	(P <sub>2</sub> )P <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> (M <sub>3</sub> )
ヤギ	下顎骨	L	1	関節突起	不可	—	—
ヤギ	下顎骨	L	1	関節突起	不可	—	—
ヤギ	下顎骨	L	1	下顎体	不可	—	P <sub>2</sub> P <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub> ※歯根のみ残存
ヤギ	下顎骨	R	1	関節突起	不可	—	CM
ヤギ	P <sub>3/4</sub>	R	1	完存	不可	—	—
ヤギ	P <sub>3/4</sub>	R	1	完存	不可	—	—
ヤギ	M <sub>1</sub>	L	1	ほぼ完存	歯冠長	9.9	咬合面破損
ヤギ	M <sub>1</sub>	L	1	ほぼ完存	歯冠幅	6.3	—
ヤギ	M <sub>1</sub>	L	1	ほぼ完存	歯冠長	9.6	—
ヤギ	M <sub>1</sub>	L	1	ほぼ完存	歯冠幅	6.4	—
ヤギ	M <sub>2</sub>	L	1	歯冠	歯冠長	15.2	—
ヤギ	M <sub>2</sub>	L	1	歯冠	歯冠幅	8.3	—
ヤギ	M <sub>2</sub>	L	1	歯冠	歯冠高	30.5	—
ヤギ	M <sub>3</sub>	L	1	歯冠	歯冠長	19.7	—
ヤギ	M <sub>3</sub>	L	1	歯冠	歯冠幅	7.5	—
ヤギ	M <sub>1/2</sub>	L	1	歯根一部欠損	歯冠長	10.1	—
ヤギ	M <sub>1/2</sub>	L	1	歯根一部欠損	歯冠幅	7.5	—
ヤギ	M <sub>1/2</sub>	L	1	歯根一部欠損	歯冠高	6.8	—
ヤギ	M↓	不	1	破片	不可	—	—
ヤギ	軸椎	不	1	椎体	不可	—	—
ヤギ	肩甲骨	L	1	関節面～肩甲骨棘	SLC	13.9	—
ヤギ	肩甲骨	L	1	関節面～肩甲骨棘	GLP	23.6	—
ヤギ	肩甲骨	L	1	関節面～肩甲骨棘	BG	16.5	—
ヤギ	肩甲骨	L	1	関節面～肩甲骨棘	BG	23.2	CM
ヤギ	肩甲骨	R	1	関節～肩甲骨棘	SLC	15.8	—
ヤギ	肩甲骨	R	1	関節～肩甲骨棘	BG	24.1	—
ヤギ	上腕骨	L	1	幹～遠	Bd	24.0	—
ヤギ	上腕骨	L	1	遠	BT	24.2	—
ヤギ	上腕骨	L	1	遠	Bd	24.3	—
ヤギ	上腕骨	L	1	遠	Bd	23.2	SF
ヤギ	上腕骨	L	1	幹～遠	Bd	23.2	SF
ヤギ	上腕骨	L	1	遠	Bd	24.1+	滑車の半分を切断
ヤギ	橈骨	L	1	近～遠幹	不可	—	尺骨癒合
ヤギ	橈骨	R	1	近～近幹	Bp	24.6	SF
ヤギ	橈骨	R	1	近	Bp	24.7	CM
ヤギ	橈骨	R	1	近	Bp	24.9	—
ヤギ	橈骨	R	1	近幹	不可	—	—
ヤギ	橈尺骨	L	1	遠位端	Bd	23.1	遠位端で癒合
ヤギ	尺骨	L	1	肘頭～滑車切痕	SDO	17.0	—
ヤギ	尺骨	L	1	肘頭～滑車切痕	DPA	20.0	—
ヤギ	尺骨	R	1	肘頭～滑車切痕	SDO	16.8	—
ヤギ	尺骨	R	1	肘頭～滑車切痕	DPA	20.3	CM?
ヤギ	尺骨	R	1	肘頭～滑車切痕	BPC	15.0	—
ヤギ	尺骨	R	1	肘頭～滑車切痕	SDO	16.8	—
ヤギ	尺骨	R	1	肘頭～滑車切痕	DPA	21.3	—
ヤギ	中手骨	R	1	近～遠幹	Bp	17.8(+)	—
ヤギ	寛骨	L	1	腸骨+桡骨	SB	6.1	—
ヤギ	大腿骨	R	1	近	Bp	35.5	SF,CM
ヤギ	脛骨	L	1	遠	不可	—	未癒合で脱落した端部
ヤギ	脛骨	R	1	幹	不可	—	SF
ヤギ	距骨	L	1	完存	GLl	18.7	—
ヤギ	距骨	L	1	完存	GLm	20.5	—
ヤギ	距骨	L	1	完存	GLl	22.9	—
ヤギ	距骨	L	1	完存	GLm	20.8	—
ヤギ	距骨	R	1	完存	GLl	20.2	—
ヤギ	距骨	R	1	完存	GLm	18.6	CM
ヤギ	距骨	R	1	ほぼ完存	GLl	22.4	—
ヤギ	距骨	R	1	破片	GLm	21.5-	—
ヤギ	踵骨	L	1	完存	不可	—	—
ヤギ	踵骨	L	1	完存	GL	45.7	—
ヤギ	踵骨	R	1	距骨関節面欠損	GB	16.8	—
ヤギ	踵骨	R	1	距骨関節面欠損	不可	—	—
ヤギ	中足骨	R	1	近～遠	GL	88.2	—
ヤギ	中足骨	R	1	近～遠	Bp	16.5	遠位端一部欠損
ヤギ	中足骨	R	1	近～遠	SD	9.6	—
ヤギ	中足骨	R	1	幹	SD	10.1	—
ヤギ	中手/中足骨	不	1	遠幹	不可	—	—
ヤギ	基節骨	不	1	完存	GL	29.4	—
ヤギ	基節骨	不	1	完存	Bp	9.5	—
ヤギ	基節骨	不	1	完存	SD	7.7	—
ヤギ	基節骨	不	1	完存	Bd	9.1	—
ヤギ	基節骨	不	1	完存	GL	27.5	—
ヤギ	基節骨	不	1	完存	Bp	10.5	—
ヤギ	基節骨	不	1	完存	SD	8.3	—
ヤギ	基節骨	不	1	完存	Bd	11.0	—
ヤギ	基節骨	不	1	完存	GL	29.0	—
ヤギ	基節骨	不	1	完存			

第67表 哺乳類の顎骨の詳細および計測値

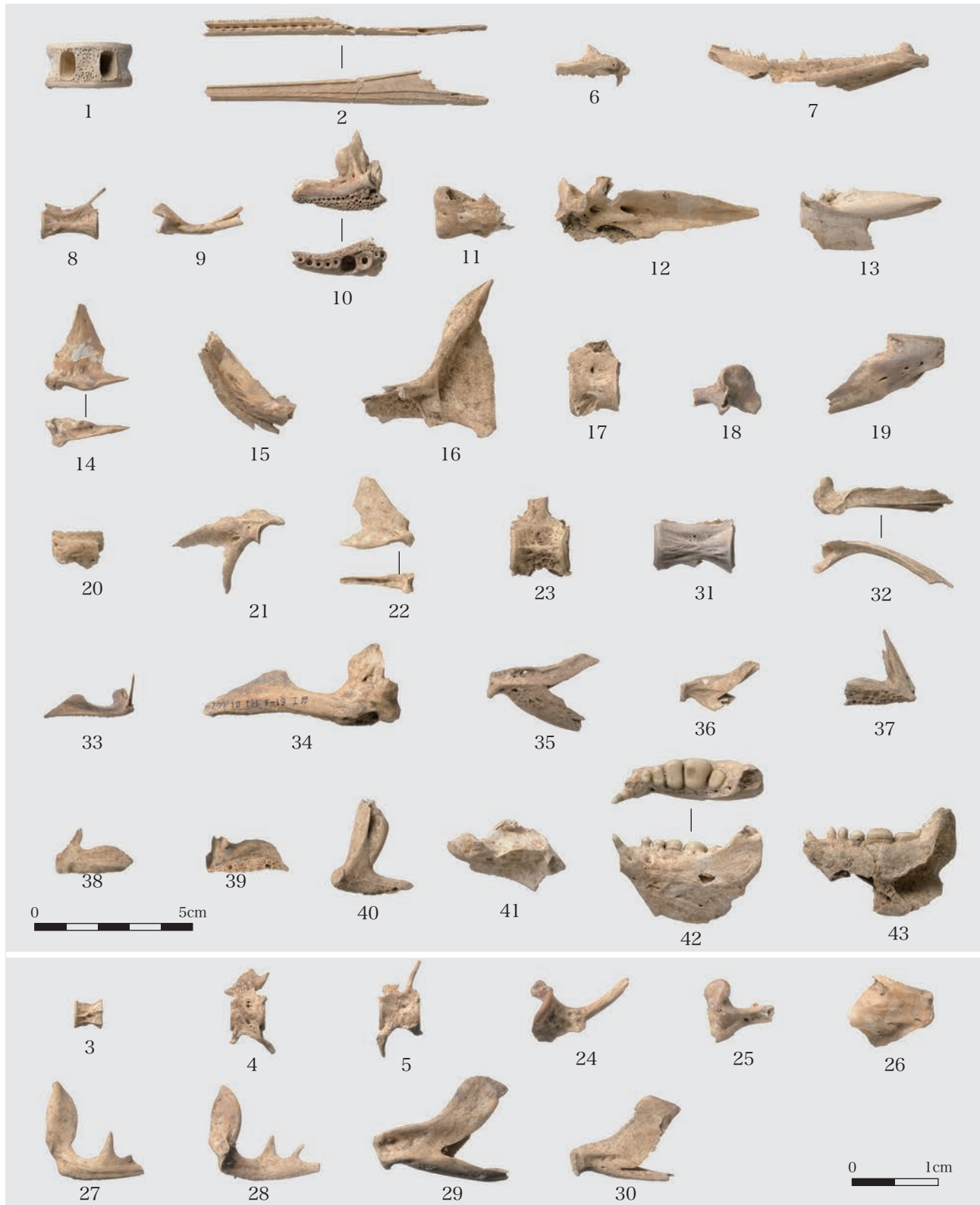
分類群	部位	LR	残存状況	出土位置				残存歯の状況	計測位置および計測値 (mm)										備考
				グリッド	トレンチ	遺構	層位		1;	2;	3;	4;	5;	6; MIL	6; MIB	7;	9;	10;	
ネコ	下顎骨	L	下顎体~咬筋窩	H-13	2	—	III	—	—	—	—	—	19.7	—	—	7.8	9.9	9.8	
ネコ	下顎骨	L	筋突起+関節突起	H-13	2	—	III	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ネコ	下顎骨	L	完存	E-15	方形石	組み	4	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> CP <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub>	55.4	51.9	48.1	44.5	17.3	7.1	3.0	6.8	10.1	9.0	
ネコ	下顎骨	L	吻合~咬筋窩	E-15	方形石	組み	4	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> I <sub>3</sub> CP <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub>	—	—	—	—	18.4	7.0	2.9	7.4	11.1	9.7	
ネコ	下顎骨	L	吻合~関節突起	E-15	方形石	組み	4	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> I <sub>3</sub> CP <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub>	61.6	57.9	53.9	49.8	21.9	7.7	3.5	7.7	11.8	10.6	
ネコ	下顎骨	L	下顎体	E-15	方形石	組み	4	CP <sub>3</sub> P <sub>4</sub>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ネコ	下顎骨	R	下顎体~咬筋窩	E-15	方形石	組み	4	CP <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub>	—	—	—	—	18	—	—	8.1	9.8	9.2	
ネコ	下顎骨	R	下顎体	E-15	方形石	組み	4	P <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ネコ	下顎骨	R	吻合~M <sub>1</sub>	E-15	方形石	組み	4	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> CP <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub>	—	—	—	—	19.2	7.1	3.0	7.0	10.6	9.3	
ヤギ	下顎骨	L	吻合~M <sub>3</sub>	E-15	方形石	組み	4	(P <sub>2</sub> )P <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> (M <sub>3</sub> )	—	—	—	—	—	6.0	—	—	29.3	—	

分類群	部位	LR	残存状況	出土位置				残存歯の状況	計測位置および計測値 (mm)								備考	
				グリッド	トレンチ	遺構	層位		m3:L	m3:B	M1:L	M1:B	M2:L	M2:B	M3:L	M3:B		
イヌ	上顎骨	R	—	E-17	4	—	II	P <sup>2</sup> (P <sup>3</sup> )(P <sup>4</sup> )	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ブタ	下顎骨	L	下顎体	—	4	—	I	P <sub>4</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ブタ	下顎骨	L	下顎体	H-13	2	—	III	P <sub>2</sub> P <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ブタ	下顎骨	L	吻合~オトガイ孔	E-15	方形石	組み	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
イノシシ/ブタ	上顎骨	R	歯列	F-17	1	石積	2	III	P <sup>4</sup> M <sub>1</sub> M <sup>2</sup> (M <sup>3</sup> )	—	—	13.9	10.6	16.7	12.5	—	—	
イノシシ/ブタ	上顎骨	R	歯列	E-13	4	—	IV	Cm <sup>1</sup> m <sup>2</sup> m <sup>3</sup> M <sup>1</sup> M <sub>3</sub>	—	—	12.1	9.7	—	—	—	—	—	
イノシシ/ブタ	上顎骨	R	—	F-15	1	—	I	P <sup>2</sup> P <sup>3</sup> (P <sup>4</sup> )M <sup>1</sup>	—	—	14.7	10.7	—	—	—	—	—	CM
イノシシ/ブタ	上顎骨	不	破片	F-15	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
イノシシ/ブタ	上顎骨	L	歯槽	F-15	—	—	—	m <sup>2</sup> m <sup>3</sup> M <sup>1</sup>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
イノシシ/ブタ	下顎骨	L	—	H-13	2	—	III	P <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> (M <sub>3</sub> )	—	—	14.3	9.2	—	—	—	—	—	CM
イノシシ/ブタ	下顎骨	L	下顎体	F-20	1	—	III	M <sub>1</sub> (M <sub>2</sub> )	—	—	14.3	9.3	16.3	—	—	—	—	
イノシシ/ブタ	下顎骨	R	—	H-13	2	—	III	m <sub>1</sub> m <sub>2</sub> m <sub>3</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub>	15.2	7.2	13.5	9.3	17.3	11.2	—	—	—	CM
イノシシ/ブタ	下顎骨	R	—	F-17	1	—	II	M <sub>2</sub> (M <sub>3</sub> )	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
イノシシ/ブタ	下顎骨	R	—	E-18	4	—	IV	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> I <sub>3</sub> Cm <sub>1</sub> m <sub>2</sub> m <sub>3</sub> M <sub>1</sub>	14.6	6.4	12.5	8.0	—	—	—	—	—	
イノシシ/ブタ	下顎骨	R	下顎体	F-19	1	—	I	P <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub>	—	—	13.6	8.8	18.1	11.9	—	—	—	
イノシシ/ブタ	下顎骨	R	吻合部~下顎体	E-13	4	—	III	CP <sub>2</sub> P <sub>3</sub> (P <sub>4</sub> )	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
イノシシ/ブタ	下顎骨	R	関節突起	F-19	1	—	I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
イノシシ/ブタ	下顎骨	R	関節突起	F-19	1	—	I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
イノシシ/ブタ	下顎骨	—	切歯部	H-13	2	—	III	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ヤギ	上顎骨	R	—	G-17	3	—	I	P <sup>4</sup> M <sup>1</sup>	—	—	10.5	—	—	—	—	—	—	
ヤギ	上顎骨	L	歯槽	E-15	方形石	組み	4	M <sup>1/2</sup>	—	—	13.9	11.2	—	—	—	—	—	
ヤギ	下顎骨	L	関節突起	E-15	方形石	組み	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ヤギ	下顎骨	L	関節突起	E-15	方形石	組み	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ヤギ	下顎骨	L	下顎体	E-15	方形石	組み	4	P <sub>2</sub> P <sub>3</sub> P <sub>4</sub> M <sub>1</sub>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	※歯根のみ残存
ヤギ	下顎骨	R	関節突起	E-15	方形石	組み	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	CM

※歯種表記：歯槽残存、下線：残存歯、( )：未明出

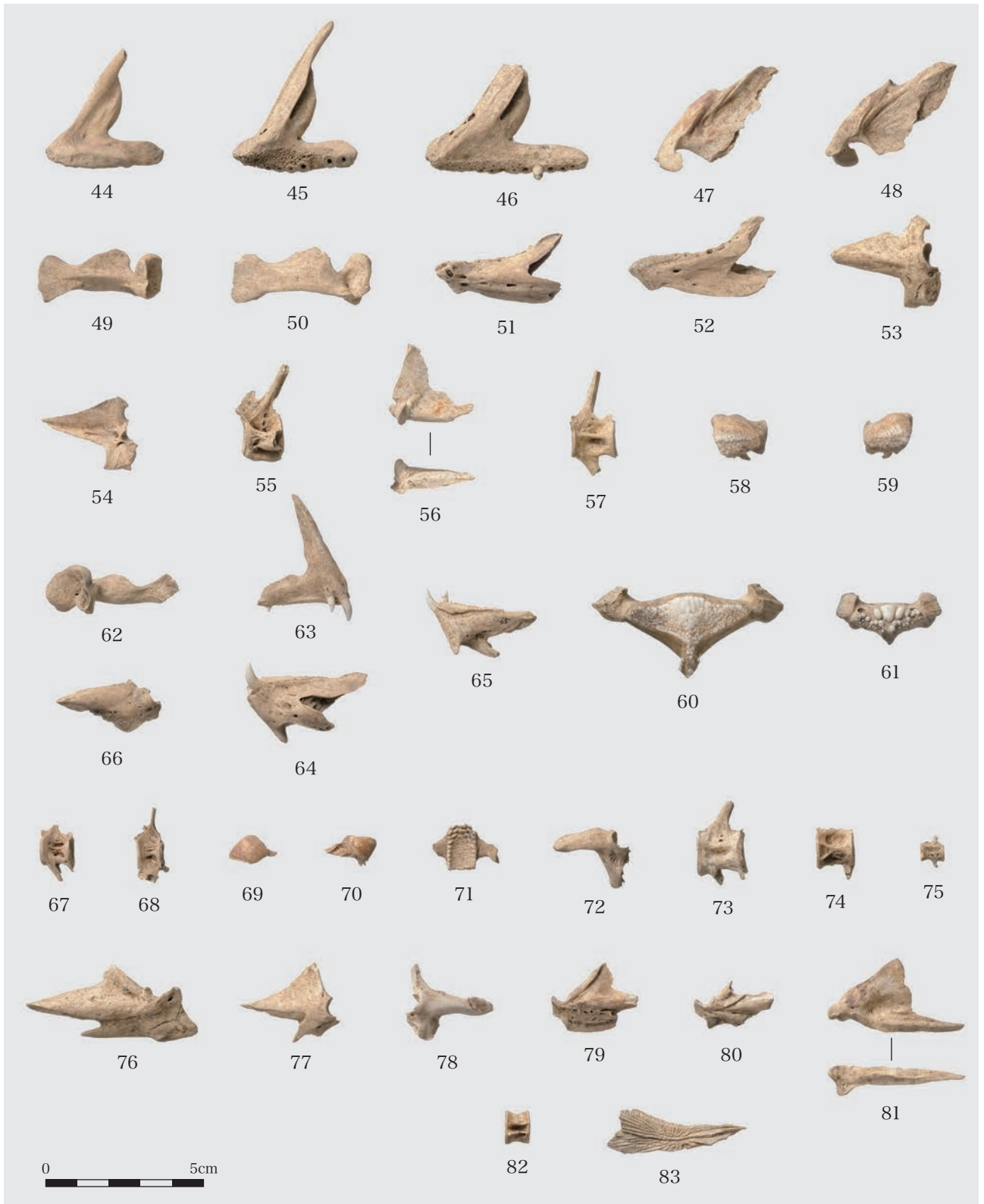
※L：Length、B: Breadth

※計測位置はDriesch1976に準拠



図版136 脊椎動物遺体 1

- |          |            |            |            |           |            |            |            |            |
|----------|------------|------------|------------|-----------|------------|------------|------------|------------|
| サメ類A     | 1. 椎骨      | ダツ科        | 2. 左 歯骨    | ニシン科      | 3. 腹椎      | トビウオ科      | 4. 腹椎      | 5. 尾椎      |
| カマス属     | 6. 右 前上顎骨  | 7. 右 歯骨    | 8. 腹椎      | ハタ科       | 9. 左 主上顎骨  | 10. 左 前上顎骨 | 11. 左 歯骨   | 12. 左 角骨   |
|          | 13. 右 角骨   | 14. 左 方骨   | 15. 右 前鰓蓋骨 | 16. 右 擬鎖骨 | 17. 腹椎     | アジ科大型種     | 18. 左 主上顎骨 | 19. 右 歯骨   |
|          | 20. 左 歯骨   | 21. 右 角骨   | 22. 右 方骨   | 23. 尾椎    | アジ科小型種     | 24. 左 主上顎骨 | 25. 右 主上顎骨 | 26. 右 歯骨   |
| アジ科小型種近似 | 27. 左 前上顎骨 | 28. 右 前上顎骨 | 29. 左 歯骨   | 30. 右 歯骨  | シイラ属       | 31. 尾椎     | 32. 左 主上顎骨 | 33. 左 前上顎骨 |
| フエダイ科    | 34. 右 前上顎骨 | 35. 左 歯骨   | 36. 右 歯骨   | タイ科       | 37. 左 前上顎骨 | 38. 左 前上顎骨 | 39. 右 前上顎骨 | 40. 右 前上顎骨 |
| クロダイ属    |            |            |            | ヨコシマクロダイ属 | 41. 右 主上顎骨 | 42. 左 歯骨   | 43. 右 歯骨   |            |



図版137 脊椎動物遺体2

- フエフキダイ属 44. 左 前上顎骨 45. 右 前上顎骨 46. 右 前上顎骨 47. 左 口蓋骨 48. 右 口蓋骨  
 フエフキダイ科 49. 左 主上顎骨 50. 右 主上顎骨 51. 左 歯骨 52. 右 歯骨 53. 左 角骨 54. 右 角骨  
 55. 腹椎 56. 左 方骨 タイ型 57. 尾椎 ベラ科シロクラベラ型 58. 左 上咽頭骨  
 59. 右 上咽頭骨 60. 下咽頭骨 ベラ型タキベラ型 61. 下咽頭骨 ベラ科 62. 右 主上顎骨  
 アオブダイ属 63. 右 前上顎骨 64. 左 歯骨 65. 右 歯骨 66. 左 角骨 67. 尾椎 68. 腹椎  
 カツオ 74. 尾椎 アイゴ属 75. 尾椎 未同定 76. 左 角骨 77. 左 角骨 保留 78. 右 角骨  
 未同定 79. 右 角骨 80. 右 角骨 81. 左 方骨 82. 尾椎? 83. 不明



図版138 脊椎動物遺体3

- ニワトリ 1. 左 烏口骨 2. 右 烏口骨 3. 左 肩甲骨 4. 右 肩甲骨 5. 左上腕骨 6. 右上腕骨  
 7. 左 橈骨 8. 左 橈骨 9. 左 尺骨 10. 左 尺骨 11. 左 中手骨 12. 右 中手骨 13. 左 大腿骨  
 14. 右 大腿骨 15. 左 脛骨 16. 右 脛骨 17. 左 中足骨 18. 右 中足骨 鳥類 19. 左 烏口骨  
 20. 右 烏口骨 21. 右 烏口骨 22. 右 肩甲骨 23. 右 肩甲骨 24. 右 肩甲骨 25. 左上腕骨  
 26. 右上腕骨 27. 左 尺骨 28. 右 尺骨 29. 右 尺骨 30. 左 中手骨 31. 左 脛骨 32. 右 脛骨  
 33. 左 中足骨 34. 右 中足骨 トガリネズミ科 35. 頭蓋骨 36. 左下顎骨 37. 左下顎骨  
 ネズミ科 38. 右下顎骨 39. 左上腕骨 40. 右 寛骨 41. 左 大腿骨 42. 右 脛骨 ネコ 43. 環椎  
 44. 左下顎骨 45. 右下顎骨 6. 右 肩甲骨 47. 右 尺骨 48. 左 第2中手骨 49. 左 第4中手骨  
 50. 左 第5中手骨 51. 左 踵骨 52. 左 踵骨 53. 左 第2中足骨 54. 左 第3中足骨 55. 左 第4中足骨



図版139 脊椎動物遺体4

- イヌ 1. 左 第4中足骨 2. 左 第5中足骨 ウマ 3. 右 I 1/2/3 ブタ 4. 頭蓋骨 17. 左 橈骨  
 18. 左 尺骨 20. 右 尺骨 23. 左 第3中手骨 33. 左 第3中足骨 37. 基節骨 38. 中節骨  
 イノシシ/ブタ 5. 右上顎骨 6. 右上顎骨 7. 左上顎骨 8. 左下顎骨 9. 右下顎骨 10. 右下顎骨  
 11. 右下顎骨 12. 右肩甲骨 13. 左上腕骨 14. 右上腕骨 15. 左 橈骨 16. 右 橈骨  
 19. 左 尺骨 21. 左 第2中手骨 22. 左 第3中手骨 24. 左 第4中手骨 25. 左 大腿骨  
 26. 右 大腿骨 27. 左 脛骨 28. 左 脛骨 29. 左 脛骨 30. 右 脛骨 31. 左 踵骨 32. 右 距骨  
 34. 左 第3中足骨 35. 右 第4中足骨 36. 基節骨



図版140 脊椎動物遺体5

- 上段 ヤギ 1. 右角芯 2. 左上顎骨 3. 左 M<sup>1/2</sup> 4. 左 M<sup>1/2</sup> 5. 左 M<sup>3</sup> 6. 左下顎骨 7. 左 M<sup>3</sup>  
 8. 左肩甲骨 9. 左上腕骨 10. 右上腕骨 11. 右橈骨 12. 左橈尺骨 13. 右尺骨  
 14. 右中手骨 15. 左寛骨 16. 右大腿骨 17. 左脛骨 18. 右脛骨 19. 右脛骨 20. 左踵骨  
 21. 左距骨 22. 右距骨 23. 右中足骨 24. 基節骨
- 下段 ウシ 1. 右 P<sup>3/4</sup> 2. 右 M<sup>1/2</sup> 3. 右 I<sup>1/2/3</sup> 4. 左 m<sub>3</sub> 5. 左 P<sup>3/4</sup> 6. 左 M<sup>3</sup>  
 7. 左肩甲骨 8. 左中手骨 9. 中手骨 10. 右中心第4足根骨 11. 左中足骨 12. 中節骨  
 13. 末節骨



平成22年度 中城御殿跡発掘調査  
出土遺物集計表

- 第68表 中国産青磁
- 第69表 中国産白磁
- 第70表 中国産青花1・2
- 第71表 中国産色絵
- 第72表 中国・タイ・ミャンマー産褐釉陶器1・2
- 第73表 その他の輸入陶磁器
- 第74表 本土産陶磁器1・2
- 第75表 沖縄産施釉陶器1・2
- 第76表 初期沖縄産無釉陶器1・2
- 第77表 沖縄産無釉陶器1・2
- 第78表 陶質土器1・2
- 第79表 土器・瓦質土器・土製品・埴埴1・2
- 第80表 円盤状製品・碁石1・2
- 第81表 金属製品
- 第82表 煙管
- 第83表 貝・骨製品
- 第84表 ガラス玉・ガラス製品
- 第85～89表 瓦1・2ほか
- 第90表 埴
- 第91表 石器・石製品・石造製品
- 第92表 銭貨
- 第93～94表 貝類遺体
- 第95～97表 脊椎動物遺体























第76表 初期沖縄産無釉陶器 I

出土地 器種・部位	Iトレンチ										2トレンチ																															
	F-12		F-13		F-14 ~ F-16		F-15		F-16		F-17		F-17 ~ F-19		F-18		F-19		F-20		不明		H-13		H-14		H-15		H-16													
	I層	III層 石敷	I層	III層 表採	I層	III層 表採	I層	III層 石敷2	I層	III層 石敷2	不明	III層 石敷1	I層	III層 石敷1	I層	III層	I層	III層	I層	III層	I層	III層	I層	III層	I層	III層	I層	III層	I層	III層	I層	III層	I層	III層	I層	III層						
碗																																										
皿				1																																						
鉢																																										
植木鉢																																										
播鉢																																										
壺																																										
壺か甕																																										
瓶																																										
瓶か壺																																										
甕																																										
火入																																										
火缸																																										
片口か 急須																																										
筒物																																										
蓋																																										
底~脛																																										
合計	1	1	8	1	1	4	1	18	2	1	1	10	1	3	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		











第79表 土器・瓦質土器・土製品・埴埴1

種類・器種・部位	出土地		1トレンチ													2トレンチ															
	F-13	F-14	F-15	F-16	F-17			F-17	F-18	F-19				F-20	H-13	H-13・14	H-14	H-15			H-16・17										
	1層	1層	1層	1層	1層	IIb層	石積2	石積2	表探	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層				
土器	鉢	口																													
	鉢	胴			1																										
	鉢	底																													
	壺	口																													
	焙烙土師器か	不明																													
	不明	口/頸																													
瓦質土器	鉢	口																													
	鉢	胴																													
	鉢	底																													
	植木鉢	口																													
	植木鉢	胴																													
土製品	土鈴	-																													
	底石か	-																													
	碗形	口																													
	碗形	底																													
	埴埴	口																													
合計			5	2	9	1	1	2	1	1	1	1	1	3	5	7	7	1	3	10	4	4	1	3	6	1	2	1	1	3	1

第79表 土器・瓦質土器・土製品・埴埴2

種類・器種・部位	出土地		2トレンチ				3トレンチ				4トレンチ												不明	不明	合計					
	H-17	不明	H-14	H-15	G・H-17		G-17		不明	E-12	E-13		E-14	E-15		E-16	E-17			E-18						不明				
	1層	表探	IIb層	1層	II層	III層	I層	II層	I層	I層	I層	III層	IV層	I層	I層	IIb層	I層	I層	II層	III層	I層	IIb層				IV層	I層	I層	表探	
土器	鉢	口																												
	鉢	胴																												
	鉢	底																												
	壺	口																												
	焙烙土師器か	不明																												
	不明	口/頸																												
瓦質土器	鉢	口																												
	鉢	胴																												
	鉢	底																												
	植木鉢	口																												
	植木鉢	胴																												
土製品	土鈴	-																												
	底石か	-																												
	碗形	口																												
	碗形	底																												
	埴埴	口																												
合計			2	1	1	3	2	1	1	1	1	2	2	3	1	5	1	1	4	1	1	1	1	2	9	1	1	1	6	143

第80表 円盤状製品・基石1

種類・分類	出土地		1トレンチ													2トレンチ													
	F-12	F-13	F-14	F-15	F-16	F-17			F-18				F-19	F-20	H-13	H-14	H-15	H-16	H-17	不明									
	1層	1層	不明	1層	1層	III層	1層	石積2	II層	石積2	石積2	不明	1層	石積1	石積1	石積1	1層	1層	III層	1層	1層	1層	1層	1層	1層				
円盤状製品	中国産白磁																												
	中国産青花																												
	中国産色絵																												
	中国産褐釉陶器																												
	冲縄産施釉陶器																												
	冲縄産無釉陶器																												
	陶質土器																												
	本土産陶磁器																												
	薩摩産陶器																												
	明朝系瓦(灰)																												
	明朝系瓦(褐色)																												
	明朝系瓦(赤)																												
	明朝系瓦(赤褐色)																												
基石	埴																												
	貝																												
	頁岩																												
合計			2	8	2	5	8	2	3	2	7	3	2	13	4	1	9	2	1	5	2	2	2	2	3	1	1	1	1

第80表 円盤状製品・基石2

種類・分類	出土地		2トレンチ				3トレンチ				4トレンチ												不明	合計					
	H-15	H-15	G・H-17		G-17		不明	E-12	E-13		E-14		E-15	E-16	E-17			E-18	不明										
	1層	III層	I層	II層	III層	I層	II層	石積1	I層	II層	I層	III層	IV層	I層	I層	I層	I層	II層	III層	IV層	石積2	I層			I層	I層	表探		
円盤状製品	中国産白磁																												
	中国産青花																												
	中国産色絵																												
	中国産褐釉陶器																												
	冲縄産施釉陶器																												
	冲縄産無釉陶器																												
	陶質土器																												
	本土産陶磁器																												
	薩摩産陶器																												
	明朝系瓦(灰)																												
	明朝系瓦(褐色)																												
	明朝系瓦(赤)																												
	明朝系瓦(赤褐色)																												
基石	埴																												
	貝																												
	頁岩																												
合計			3	1	43	6	1	4	4	1	9	9	1	4	37	7	36	3	5	2	4	5	2	1	4	7	1	4	296

第81表 金属製品

Table with columns for material type (e.g., 金属製品, ガラス), production stage (e.g., 1トレンチ, 2トレンチ), and quantity. It includes a total row at the bottom.

第82表 煙管

Table for '煙管' (Smoking pipes) with columns for production stage (1トレンチ to 4トレンチ) and quantity. It includes a total row at the bottom.

第83表 貝・骨製品

Table for '貝・骨製品' (Shell/Bone products) with columns for production stage (1トレンチ to 2トレンチ) and quantity. It includes a total row at the bottom.

第84表 ガラス玉・ガラス製品

Table for 'ガラス玉・ガラス製品' (Glass beads/products) with columns for production stage (1トレンチ to 4トレンチ) and quantity. It includes a total row at the bottom.

第85表 明朝系軒瓦1

器種・色調・分類	出土地	1トレンチ										2トレンチ															
		F-12	F-13	F-14	F-15	F-16	F-17		F-17 ~19	F-18	F-19	F-20	H-13	H-13-14	H-14		H-15										
		I層	I層	表探	I層	I層	I層	I層	II層	表探	I層	III層	I層	III層	表探	I層	III層	溝1	溝2	溝3	-						
軒丸瓦	灰色	1-II B 不明				1								1													
	褐色	不明				1								1													
	赤褐色	不明																									
	赤色	1-I A							1	2																	
		2-I A												2													
		1-I B												1													
不明	2-II													1													
	不明																										
	不明																										
軒平瓦	灰色	V						1																			
	褐色	VC																									
	赤色	II a																									
		1-III B																									
		不明																									
	不明		2																								
合計			3	2	1	3	1	7	4	6	1	1	1	3	6	2	3	1	1	1	2	6	14	1	1	18	9

第85表 明朝系軒瓦2

器種・色調・分類	出土地	2トレンチ				2トレンチ北側拡張			3トレンチ			4トレンチ						不明	不明	合計									
		H-15-16 II b層	H-16	H-16-17	H-17	不明	H-14	H-15	不明	G・H-17	G-17	不明	E-13	E-14	E-15	E-16	E-17												
		溝1	I層	表探	I層	II層	I層	I層	II層	I層	I層	I層	II層	III層	I層	II層	IV層				I層	II層	溝7	I層	I層	II層	I層	表探	
軒丸瓦	灰色	1-II B 不明																									3		
	褐色	不明																									1		
	赤褐色	不明																									4		
	赤色	1-I A																										1	
		2-I A																										19	
		1-I B																										1	
不明	2-II																										27		
	不明																										30		
	不明																										3		
軒平瓦	灰色	V																									8		
	褐色	VC																									1		
	赤色	II a																										8	
		1-III B																										23	
		不明																										27	
	不明		1																								27		
合計			3	5	1	1	1	2	3	2	2	2	19	2	1	1	4	1	1	1	1	1	1	1	2	6	1	1	163

第86表 明朝系丸瓦遺存状況

色調	部位	角	合計
灰色	玉縁部	角1つ	65
		角なし	67
		玉縁片	43
	端部	角1つ	27
		角なし	1
		玉縁片	44
褐色	玉縁部	角1つ	17
		角なし	7
		玉縁片	6
	端部	角1つ	6
		角2つ	1
		端部片	1
赤褐色	端部	端部片	1
赤色	玉縁~端部	玉縁片	2
		端部角	1
	玉縁部	角1つ	63
		角2つ	6
		角なし	48
		玉縁片	37
		角1つ	17
	端部	端部片	55
合計			515

第87表 明朝系平瓦遺存状況

色調	部位	角	合計
灰色	狭端部	角1つ	62
		角なし	69
		角1つ	99
	広端部	角2つ	1
		角なし	110
		角1つ	6
褐色	狭端部	角1つ	9
		角なし	15
	広端部	角1つ	18
赤褐色	狭端部	角1つ	11
		角なし	5
	広端部	角1つ	7
赤色	完形	角1つ	1
		角2つ	3
	狭端部	角なし	44
		角1つ	91
		角2つ	1
	広端部	角なし	78
		角なし	7
		角なし	76
合計			706

第89表 近世大和瓦遺存状況

器種	部位	角	榭目	合計	
軒丸瓦	瓦当	-	無し	1	
軒平瓦	瓦当	-	無し	1	
棧瓦	側面部・曲面	角なし	無し	1	
		角なし	無し	1	
	筒部	曲面	角なし	無し	2
		平面	角なし	無し	3
平瓦	側面部	角なし	有り	4	
		角なし	無し	2	
	端部	角なし	有り	5	
		角なし	無し	3	
	筒部	角なし	有り	10	
		角なし	無し	14	
合計				48	

第88表 明朝系平瓦における桶板留紐痕状況

色調・分類	広端~ 狭端部	広端部														合計			
		灰色				褐色			赤褐色			赤色							
		横長さ1.1 ~1.9cm	横長さ 1.1cm以下	横長さ1.1 ~1.9cm	横長さ 2.0cm~	不明	横長さ1.1 ~1.9cm	横長さ 2.0cm~	不明	横長さ1.1 ~1.9cm	横長さ 2.0cm~	不明	横長さ 1.1cm以下	横長さ1.1 ~1.9cm	横長さ 2.0cm~		不明		
浅い庄痕	2.0未満	1		15	3					2	1				31	4		57	
	2.0~2.5cm			13	2				5				1		2			23	
	2.5~3.0cm			1											2			3	
	3.0~3.5cm														1			1	
	計測不可			3	34	6			6				2		1	22		74	
深い庄痕	2.0未満			16	5										8	1		30	
	2.0~2.5cm			5	4			2	5			1				1		18	
	2.5~3.0cm			1				1								1		3	
	4.0~4.5cm							1										1	
	計測不明			1	9	14			78	1	3		9	4		6	4	1	37
合計				1	4	94	34	78	16	8	9	10	1	6	1	70	8	91	431

第90表 博

出土地	1トレンチ				2トレンチ				3トレンチ				4トレンチ				合計			
	F-13 I層	F-14 I層	F-15 III層 石組1	F-18 III層 石組1	F-19 I層	F-20 III層	H-14 I層	H-15 IIb層 大御庭 石組3	H-15 I層	不明	G・H-17 I層	II層	III層	不明	E-12 I層	E-14 I層		E-15 IIb層 石組4	E-17 II層	不明 I層
灰色	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1								9
褐色系																				1
赤色	1				1	1	1	1	1	4					1	1	1	2		16
合計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6	1	1	1	1	1	1	1	2	1	26

第91表 石器・石製品・石造製品

種類・器種・部位	1トレンチ				2トレンチ				3トレンチ		4トレンチ		合計		
	F-12 I層	F-14 I層	F-17 I層	F-19 IV層	F-20 I層	H-13 III層	H-14 IIb層	H-15 IIb層	H-16 I層	G・H-17 I層	不明 I層	E-17 II層		不明 表採	
蔵石磨石	—			1										1	
砥石	—									1		1		2	
硯	—					1		1			1			3	
蓋	—								2					2	
石臼	—		1											1	
石杵	—												1	1	
石錘	—									1				1	
石盤	—												1	1	
石筆	—						1							1	
不明	—		1											1	
石製蓋 庇〜袴										1				1	
石製皿 底				1										1	
石製碗 口					1									1	
石灯籠														1	
礎石片		1							1	1				4	
合計	1	2	1	1	1	1	1	1	2	1	4	1	2	3	22

第92表 銭貨

出土地	1トレンチ				2トレンチ				3トレンチ			4トレンチ				合計	
	F-16 I層	F-17 II層	F-18 I層	F-18 III層 石積1	F-19 IV層	F-20 I層	H-13 III層	H-14 I層	H-15 III層	H-16-17 IIb層	G-17 I層	III層	E-13 III層	E-15 I層	E-18 I層		不明 I層
道光通寶																	1
寛永通寶(I期)						1				1							3
寛永通寶(III期)	1			1									2	1	1		9
無文銭	1		4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	18
輪銭															1		1
近・現代銭	1												1				5
不明銭	1																1
合計	2	3	1	4	2	1	1	1	1	1	1	1	5	1	4	1	38













第95表 魚類・ヘビ類集計表

分類群	部位	層・L/R											方形石組み4 I Ib	合計						
		表採/表土		I	II	III	IV	不明	小計	I Ib		合計								
		L/R	L/R	L/R	L/R	L/R	L/R	L/R	L/R	L/R	L/R									
サメ類	歯椎骨	1		7	8		2	12		2	1	33	2	3	2	36				
エイ類	椎骨											1			1	1				
ダツ科	顎骨		2									2			2	2				
ニシン科	腹椎		1									1			1	1				
ボラ科	尾椎											5			5	5				
トビウオ科	腹椎											10			10	10				
	尾椎											1			1	1				
	腹椎											363			363	363				
	尾椎											166			166	166				
カマス属	前上顎骨											1			1	1				
	歯骨											1			1	1				
	顎頭骨?											1			1	1				
	腹椎			1								1			1	1				
	尾椎			2								37			37	38				
ハタ科スジアラ型	前上顎骨											2			2	2				
	歯骨			1								1			1	1				
	前鰓蓋骨			1								1			1	1				
ハタ科マハタ型	歯骨								1			1			1	1				
ハタ科	主上顎骨			1					1		1	2	2	5	3	7				
	前上顎骨											1			1	1				
	角骨		2								2	1	1	4	2	2				
	方骨			1							1	1	6	7	7	8				
	疑頭骨						1		1		2	5	4	5	6	6				
ハタ型	腹椎			1		1					3		50		53	53				
	尾椎			2							6		24		30	30				
アジ科イトヒキアジ近似	歯骨											1	1	1	1	1				
アジ科ギンガメアジ近似	前上顎骨											2			2	2				
	歯骨											10	5	10	5	5				
アジ科大型種	主上顎骨											1	1		1	1				
	前上顎骨											10	5	10	5	5				
	角骨											1	1		1	1				
	方骨											1	1		1	1				
	尾椎				1							18			19	19				
メアジ近似種	主上顎骨											1	1	1	1	1				
	前上顎骨											1	1	1	1	1				
	歯骨										1				1	1				
メアジ類似	前上顎骨											11	9	11	9	9				
	歯骨											2	2		2	2				
アジ科小型種	角骨											11	8	11	8	8				
	方骨											37		37		37				
アジ科類似	前上顎骨											1	1	1	1	1				
	歯骨											1	1	1	1	1				
シイラ属	腹椎											1		1		1				
	尾椎			2								2		3		5				
フェダイ科	主上顎骨											9	7	9	7	7				
	前上顎骨			1	1							13	10	13	10	11				
	歯骨					1						5	7	5	7	8				
コショウダイ類?	歯骨											2	2		2	2				
タイ科	前上顎骨											1	1	1	1	1				
クロダイ属	前上顎骨						2				2	2	1	1	3	3				
	歯骨						1				1	1	1	2	2	2				
ヨコシマクロダイ	主上顎骨											1		1		1				
	前上顎骨											1	1	1	1	1				
	歯骨											1	1	1	1	1				
メイチダイ属	前上顎骨						1					1		2		2				
フェフキダイ属ハマフェフキ型	前上顎骨			1	2		1	1		3		2	6	8	8	10	14			
フェフキダイ属型不明	前上顎骨			1	2		2	1				2	4		2	2	6			
フェフキダイ属	口蓋骨	2		1								2	1	1	15	21	17	1	22	
フェフキダイ科	主上顎骨		1	3	2		1	2		1	4	6	10	9	14	15	15	15		
	歯骨			4	2		3			2	5	7	17	11	22	18	18	18		
	角骨			3	2		1			1	4	4	11	14	15	18	18	18		
	方骨			2						2	2	2	14	12	16	14	14	14		
	第1椎										4				4		4		4	
	腹椎						1				5		65		70		70		70	
	尾椎			1				2			22		338		360		360		360	
ベラ科シロクラベラ型	上顎頭骨			1								1	1	1	1	1	1	1	1	
	下顎頭骨			3								4			4		4		4	
ベラ科タキベラ型	下顎頭骨											1			1		1		1	
ベラ科	上顎頭骨				1							1	1	1	1	1	1	1	1	
	主上顎骨			1								1	1	1	1	1	1	1	1	
	前上顎骨											1	1	3	1	4	4	4	4	
	歯骨											2	4	2	4	2	4	2	4	
	顎骨			1								1			2		2		2	
	角骨											1			1		1		1	
	腹椎											10		10		10		10		10
	尾椎			4								4		54		58		58		58
アオブダイ属	前上顎骨											1		1		2		2		2
	歯骨											1		1		1		1		1
	下顎頭骨				1						1	2		1		3		3		3
ブダイ科	角骨											1		1		1		1		1
	尾椎			3								4		9		13		13		13
	腹椎											9		9		9		9		9
カツオ	腹椎											2		2		2		2		2
	尾椎											6		6		6		6		6
アイゴ属	腹椎											4		4		4		4		4
	尾椎											9		9		9		9		9
ハリセンボン科	顎骨											1		1		1		1		1
	線											3		3		3		3		3
未同定	方骨											1		1		1		1		1
	角骨											2		2		2		2		2
	尾椎			1								1		17		18		18		18
	不明			1								1		1		1		1		1
保留	歯骨											1		1		1		1		1
	角骨											1		1		1		1		1
	第1椎											93		93		93		93		93
	腹椎			2								2		100		102		102		102
	尾椎											10		6		16		16		16
ヘビ類	椎骨			1								10		173		173		173		173

第96表 鳥類・哺乳類集計表1

分類群	部位	残存状況	層・L/R											方形石組み4 I Ib	合計						
			表採		I	II	III	IV	不明	小計	I Ib		合計								
			L/R	L/R	L/R	L/R	L/R	L/R	L/R	L/R	L/R	L/R									
		完存												2		2		2		2	
		近~遠												1		1		1		1	
		近												1	1	9		10		10	
		近破片												1	1	1		1		1	
		近~幹												1	11	4		11		11	
		近~粗面														11		11		11	
		粗面														6		6		6	
		粗面~幹														3		3		3	
		粗面~(遠)														1		1		1	
		幹~遠													3		3		3		3
		遠													7		7		7		7
		遠													13		13		13		13
		近~幹												1	2	5		20		20	
		遠												2	18	5		20		20	
		完存													1		1		1		1
		近													1		1		1		1
		(近)													1		1		1		1
		近~幹													1		1		1		1
		近幹~遠幹													1		1		1		1
		遠													1		1		1		1
		(遠)													1		1		1		1
		遠																			

第96表 鳥類・哺乳類集計表2

分類群	部位	残存状況	層・L/R								方形石組み4	合計		
			表採		I	II	IIb	III	IV	不明	小計		IIb	
			L / R	L / R	L / R	L / R	L / R	L / R	L / R	L / R	L / R		L / R	
鳥類不可	鳥口骨	幹 遠					1 1				1 1		1 1	
	上腕骨	幹		1							1		1	
	尺骨	幹		1			2	2			2	3	2	
	大腿骨	近幹			1							1		1
		遠		1			1	2	1			3	2	6
	脛足根骨	近			1							1	1	2
		遠		1	1	2			1			3	1	11
足根中足骨	幹		1	2		1	2	1		1	6	15	1	
四肢骨	幹		3		2		3				8		21	
長管骨	幹		13				6	1			20	44	64	
	近/遠											1	1	
トガリネズミ科	頭蓋骨	—		1			1	1			1	3	3	
	下顎骨	—										2	2	
ネズミ科	下顎骨	関節突起欠損										1	1	
	上腕骨	(近)~遠				1					1		1	
		近幹~遠 幹~遠										1	2	
	寛骨	恥骨欠損 寛骨白										1	1	
		近~(遠) 近~幹 近幹~幹 (遠)										1 1 1 2	1 1 1 2	
脛骨	(近)~幹 幹~遠 (近)~遠幹										1 1 1	1 1 1		
											1	1		
ネコ	下顎骨	完存					2				2	4	3	
	環椎	完存										1	1	
	軸椎	完存		1							1		1	
	腰椎	完存										1	1	
	腰椎	ほぼ完存										1	1	
	肩甲骨	関節面										1	1	
	橈骨	完存										1	1	
	尺骨	肘頭~幹 滑車切痕~幹 遠											1 1 1	1 1 1
		完存 近~幹 近~近幹											1 1 2	1 1 2
	第2中手骨	完存 近~幹 近~近幹										1 1 2	1 1 2	
	第3中手骨	完存										1	1	
	第4中手骨	完存		1								1	1	
	第5中手骨	完存										1	1	
	中手/中足骨	遠					1					1	1	
	大腿骨	近~幹											1	1
		(近) 遠											1 2	1 2
	踵骨	完存 ほぼ完存			2							2	1	2
		完存 近~幹 近~(遠)		1								1	2 1 1	2 2 1
	第2中足骨	完存 近 近~(遠)											1 1 1	1 1 1
完存 近 近~遠幹 近~幹				1								1 1 2	1 1 2	
第3中足骨	完存 近 近~遠幹 近~幹											3 1 2 1	3 1 2 1	
	完存 近~遠幹 近~近幹											1	1	
第4中足骨	完存 近~遠幹 近~近幹											3 1 2 1	3 1 2 1	
イヌ	上顎骨	—			1							1	1	
	P <sup>a</sup>	—			1								1	
	第4中手骨	近								1	1		1	
	第3中足骨	近										1	1	
		近幹		1								1	1	
第4中足骨	完存 近										1	1		
第5中足骨	完存										1	1		
ウマ	I	上顎歯 破片		1							1		1	
	M <sub>3</sub>	破片		1				1			1		1	
ブタ	頭蓋骨	—					1				1		1	
	頭頂骨	—		1	1	1	1	1			3	1	2	
	側頭部	—			1			1			2		2	
	下顎骨	—		1			1				2	1	3	
	肩甲骨	関節 関節周辺											2 1	2 1
		関節周辺~肩甲骨棘										1		1
	上腕骨	(近) 幹		1	2	1						2	2	2
近~(遠) 近~幹 近破片 幹~(遠) (遠)				1							1	1	1	
橈骨	完存 近~遠幹 近~近幹 近~近幹				2							2 2 1	2 2 1	
			1								1		1	

第96表 鳥類・哺乳類集計表3

分類群	部位	残存状況	層・L/R										方形石組み4	合計						
			表 採	I		II		IIb		III		IV			不明	小計		IIb		
			L / R	L / R	R / L	L / R	R / L	L / R	R / L	L / R	R / L	L / R	R / L		L / R	L / R	L / R	L / R		
ブタ	尺骨	(肘)~滑車切痕 滑車切痕~尺骨体 滑車切痕 尺骨体 (肘)~尺骨体		1 1	3						1				1 1 2	3		1 1 2	3 3 2	
	第3中手骨	完存 近 近~幹 近~(遠)				1	1			1				1 1	2 1		1	1 1 1	2 1 1	
	第4中手骨	近~(遠)															1	1	1	
	大腿骨	(近) 遠幹 (遠)															1 1	1 1	3 1	
	脛骨	近 近幹~遠幹 幹 幹~遠 遠			1					1	1	1			1 3 1	4		1 1 1 1	1 4 1 1	
	第3中足骨	近~(遠) 近~幹		1											1			1	1	
	第4中足骨	近~幹		1											1			1		
	第5中足骨	近~(遠)															1		1	
	中手/中足骨	幹			1				1						2				2	
	基節骨	完存 (近)~遠			2										2			2	2	
	中節骨	完存			1										1		2	2	3	
イノシシ/ブタ	I <sup>1</sup>	—								1				1	2			1	2	
	I(下顎)	—		1	1	1			4	4	2			5	3	5		5	3	5
	i(上顎)	—			1										1			1		
	i(下顎)	—						1	1					1	1			1	1	
	C(上顎)	—			1										1			1		
	C(下顎)	—		2	1			1	1					3	2			3	2	
	m?	—			1				2					3					3	
	m <sub>3</sub>	—						1						1				1		
	P <sup>4</sup>	—			1										1				1	
	P(下顎)	—						2						2				2		
	M <sub>1/2</sub>	—			3			1			1			4	1			4	1	
	M <sub>2</sub>	—			1	1								1	1			1	1	
	M <sub>3</sub>	—			1									1				1		
	前頭骨	—			1				1					2				2		
	後頭骨	—			1	2	1				1			1	3	1		1	3	1
	側頭骨	—			2									2				2		
	上顎骨	—			1	1	1			1	1			3	1	1		3	1	1
	下顎骨	—				3			2	1	2		1	2	1	7		2	1	7
	環椎	半存			1						1			2			2	2	4	2
	軸椎	完存			1										1		1		2	
	肩甲骨	関節周辺 近幹~遠 幹 幹~(遠) 遠幹 遠			1					1		1			1	1			1	1
	上腕骨	近幹~遠 幹 幹~(遠) 遠幹 遠			1	3				1		1			1	4			1	4
	橈骨	近~幹 近~遠幹 幹 幹~(遠) (遠) 遠			1						1		1	1	1	1		1	1	1
イノシシ/ブタ	尺骨	(肘)~幹 滑車切痕 滑車切痕~尺骨体		1 1	1				1					1 2 3	1			1 2 3	1 1 1	
	第2中手骨	完存 近~(遠)						1						1			1	1		
	第3中手骨	近~(遠) 近~幹		3	1			1						4	1			4	1	
	第4中手骨	近~(遠) 近~幹		1		1			1					2				2		
	第5中手骨	近~(遠) 近		1 1	1				1	1				1 2	2	1	1	1 2	3 1	
	寛骨	寛骨臼 (腸骨) (恥骨)															1 2 2	1 1 1	1 2 2	
	大腿骨	遠幹~(遠) 幹~(遠) 幹~遠幹 遠幹 (近)~幹 (遠)		1 1 1 1					1		1			1 2 1 2				1 2 2	1 1 1	
	脛骨	(近) 近幹~遠幹 近幹~(遠) (近)~幹 幹 (近)~遠 幹~(遠)		1 1 1 1		1			1	1	3		1	2 1 4 1	7		1	1 4 1	7 7 3	
	腓骨	(近) (遠)															1 1		1 1	
	踵骨	(踵)~関節面 関節		2 2	2 4					1				2 2	2 5		1 1	3 2	3 5	
	距骨	完存 滑車		1 1					1					1 1			1	1 1	1 1	

第96表 鳥類・哺乳類集計表4

分類群	部位	残存状況	層・L/R										方形石組み4	合計		
			表採		I	II	IIb	III	IV	不明	小計	IIb				
			L / R	L / R	L / R	L / R	L / R	L / R	L / R	L / R	L / R	L / R				
イノシシ/ブタ	第2中足骨	近～(遠)			1								1		1	
	第3中足骨	近～(遠)		1	1								1		1	
		近～幹	1		1			1	1				2		2	
		近～遠		1									1		1	
	第4中足骨	近～遠		1									1		1	
		近～(遠)		1									1		1	
		近～遠幹								1			1		1	
	第5中足骨	近			1								1		1	
	中手/中足骨	近～(遠)												1		1
幹		1						1	1			2		2		
(遠)			2					1				3		3		
基節骨	幹～(遠)			3				1				4		4		
	完存			1				1	1			2		2		
	(近)～遠			5				3	1			9		9		
中節骨	近～遠			1								1		1		
	完存											1		1		
	遠			1								1		1		
末節骨	完存						1					1		1		
											2			2		
ウシ	I	—			1								1		1	
	P <sup>3/4</sup>	—			1								1		1	
	m(上顎)	—						1					1		1	
	M <sup>1/2</sup>	—		1						1			1		1	
	M(上顎)	—	1					1					1		1	
	P <sub>3/4</sub>	—		1				1					2		2	
	m <sub>3</sub>	—		1									1		1	
	M <sub>1/2</sub>	—		1									1		1	
	M <sub>3</sub>	—		1	1								1	1	1	
	肩甲骨	関節周辺		1				1					1	1	1	
	中手骨	近		1									1		1	
		遠			1								1		1	
	大腿骨	破片				1							1		1	
	脛骨	遠		1									1		1	
	中心第4足根骨	完存			1								1		1	
	中足骨	近～遠				1							1		1	
		近幹～遠		1									1		1	
		遠幹			1								1		1	
	距骨	完存			1								1		1	
	基節骨	幹～遠		1									1		1	
	中節骨	完存				2							2		2	
末節骨	完存						2					2		2		
ヤギ	角心	—					1						1	1	1	
	上顎骨	—			1								1	1	1	
	P <sup>2</sup>	—		2									2		2	
	P <sup>3/4</sup>	齒冠												2	2	
	P↑	ほぼ完存											4		4	
	M <sup>1/2</sup>	齒冠			2	1							1	2	5	
	M <sup>1/2</sup>	ほぼ完存												2	2	
	M <sup>3</sup>	齒冠		1				1					2	2	4	
	M↑	齒冠破片											1		1	
	下顎骨	吻合～M <sub>3</sub>												1		1
		関節突起												2	1	2
		下顎体		1										1		2
	P <sub>3/4</sub>	完存												2	2	
	M <sub>1</sub>	ほぼ完存												2	2	
	M <sub>2</sub>	齒冠												1	1	
	M <sub>3</sub>	齒冠		1										1	1	
	M <sub>1/2</sub>	—		4	1	1								5	1	6
	M↓	破片													1	1
	肩甲骨	関節面～肩甲棘												1	1	1
		関節周辺												1		1
		幹～遠		1										1	1	2
	上腕骨	幹			1									1		1
		遠幹						1						1		1
		遠								1				1		2
	橈骨	近												2		2
		近～近幹												1		1
		近幹			1									1		1
		近～遠幹												1		1
	橈尺骨	幹		2	1									2	1	1
		遠位端												1		1
尺骨	肘頭～滑車切痕											1	2	1	2	
中手骨	近		1			1							1		1	
	近～遠幹												1		1	
寛骨	腸骨+坐骨												1		1	
大腿骨	近												1		1	
	近～近幹					1							1		1	
	近幹					1							1		1	
脛骨	近幹～遠						1						1		1	
	近幹～遠幹							1		1			1		1	
	幹												1		1	
踵骨	完存												1		1	
	距骨関節面欠損												1		1	
距骨	完存			1									1		1	
	破片												2		2	
	遠												1		1	
中足骨	近～遠												1		1	
	近～幹												1		1	
	幹												1		1	
中手/中足骨	幹				2								2		2	
	遠幹												1		1	
	近					2							3		7	
基節骨	完存		1		2							3		4		
中節骨	完存							1				1		1		
末節骨	完存											1		1		
大腿骨	遠						1						1		1	
基節骨	(近)～遠						1	1					2		2	
四肢骨	幹			11		1		1					1	14	14	

第97表 同定標本数(NISP)及び最小個体数(MNI)一覧表

分類群	グリッド出土		方形石組み4		合計	
	NISP	MNI	NISP	MNI	NISP	MNI
サメ類	33	1	5	1	38	2
エイ類	1	1			1	1
ダツ科	3	1			3	1
ニシン科			15	1	15	1
ボラ科			1	1	1	1
トビウオ科			529	13	529	13
カマス属	3	1	52	3	55	4
ハタ科スジアラ型	2		3		5	
ハタ科マハタ型	1	2	1	7	2	9
ハタ科	10		33		43	
ハタ型	9	—	74	—	83	—
アジ科イトヒキアジ近似			2		2	
アジ科ギンガメアジ近似			3		3	
アジ科大型種	1		38		39	
メアジ近似種	1	2	2	25	3	27
メアジ類似			22		22	
アジ科小型種			57		57	
アジ科類似			4		4	
シイラ属	2	1	4	1	6	2
フェダイ科	3	1	51	13	54	14
コショウダイ類?			2	1	2	1
タイ科			2	1	2	1
クロダイ属	6	2	4	1	10	3
ヨコシマクロダイ	1		3		4	
メイチダイ属	1		1		2	
フェフキダイ属ハマフェフキ型	8		16		24	
フェフキダイ属型不明	6	8	2	21	8	29
フェフキダイ属	4		36		40	
フェフキダイ科	43		163		206	
タイ型	22	—	338	—	360	—
ベラ科シロクラベラ型	4		2		6	
ベラ科タキベラ型	1	5		4	1	9
ベラ科	8		78		86	
アオブダイ属	6		3		9	
ブダイ科	4	2	19	1	23	3
カツオ			8	1	8	1
アイゴ属			13	1	13	1
ハリセンボン科	1	1	3	1	4	2
魚類未同定・保留	15	—	221	—	236	—
ヘビ類			173	1	173	1
ニワトリ	44	5	355	34	399	39
鳥類保留	17	4	93	15	110	19
鳥類不可	56	—	78	—	134	—
トガリネズミ科	3	3	1	1	4	4
ネズミ科	1	1	15	3	16	4
ネコ	9	2	50	7	59	9
イヌ	4	1	4	1	8	2
ウマ	3	1			3	1
ブタ	52	5	27	3	79	8
イノシシ／ブタ	195	12	24	2	219	14
ウシ	28	2			28	2
ヤギ	42	3	69	4	111	7
哺乳類	17	—		—	17	—

## 第4章 自然科学分析

### はじめに

平成22年度の発掘調査において、自然科学分析と木製品の保存処理を株式会社文化財サービスに委託した。ここでは自然科学分析について、委託分析報告書の内容を基に報告を行う。なお、本分析に際し東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室、明治大学理工学部応用化学科有機合成化学研究室、同天然物化学研究室、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得た。

分析の対象としたのは、遺構がトイレとして機能していた痕跡を探る目的で、トレンチ1方形石組み2及びトレンチ2方形石組み3について、遺構底面の土壌に含まれる寄生虫卵分析を行う。また、遺物の分析については、トレンチ2大御庭面直上から多数出土した炭化材の樹種を調べることで、当該期の建築用材に関わる資料を作成する。さらにトレンチ2暗渠中から出土した朱塗りの位牌については、使用木材の樹種と位牌に付着していた布の材質を明らかにするとともに、使用された漆塗膜の特徴を、顕微鏡観察と成分分析により把握することとする。次に試料の概要と分析法、結果を個別に報告する。

### 第1節 方形石組み遺構内の土壌分析

#### 1. 試料

試料は、トレンチ2H-15方形石組み3内で認められたⅢb層最下層より採取された土壌1点(以下「方形石組み3」)と、トレンチ1F-16方形石組み2底面炭層(下)に確認されたⅢ層より採取された土壌1点(以下「方形石組み2」)の計2点である。

#### 2. 分析方法

試料10ccを正確に秤り取る。これについて水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛, 比重2.3)による有機物の分離の順に物理・化学的処理を施し、寄生虫卵および花粉・胞子を分離・濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、プレパラート全面を走査して出現する全ての寄生虫卵と花粉・胞子化石について同定・計数する。同定に際しては、パリノ・サーヴェイ株式会社保有の現生標本の他、寄生虫卵は佐伯ほか(1998)、斉藤・田中(2007)等を、花粉化石は島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)等を参考にする。

結果は、寄生虫卵については堆積物1ccあたりに含まれる寄生虫卵の個数を一覧表として示し、花粉・胞子化石については同定及び計数結果の一覧表として表示する。寄生虫卵の個数については有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸める。また、100個体未満は「<100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸める。なお、表中で複数の種類をハイフンで結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

#### 3. 結果

結果を第98表に示す。寄生虫卵は方形石組み2からのみ検出された。検出された寄生虫卵は、回虫卵、横川吸虫卵、不明吸虫卵で、いずれも堆積物1ccあたり100個体未満と含量が少ない。保存状態は、いずれも良好といえず、卵殻が破損している個体も認められた。なお、不明吸虫卵については、形状は肝吸虫卵に似るが、肝吸虫卵特有の表面模様や卵蓋結合部の突出等が認められなかったため、不明吸虫卵とした。

また、各試料からは花粉化石も検出されたが、産出状況は良好といえず、保存状態も悪い。方形石組み3をみ

ると、木本花粉ではマツ属、ニレ属一ケヤキ属が、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、タデ科、アカザ科、タンポポ亜科が検出される。方形石組み2をみると、木本花粉ではマツ属、コナラ属アカガシ亜属、ウルシ属、ウコギ属が、草本花粉ではイネ科、タデ属、アカザ科、アブラナ科、オミナエシ属、ベニバナ属、タンポポ亜科が検出され、草本花粉の割合が高い傾向にある。

なお、いずれの試料も分析残渣中に微粒炭(微細な炭化植物片)が多く認められる。微粒炭の中には、分野壁孔などの木材組織が確認できるものも含まれている。

4. 考察

トイレ遺構の検証例については、福岡県の鴻臚館跡や石川県の大宮坊跡で報告されており、1cm<sup>3</sup>あたり1万~数万個の寄生虫卵が検出されている(金原・金原,1994;金原ほか,1995a)。また、1cm<sup>3</sup>あたり100個未満については、ある程度の人口密度を持つ集落による汚染の範囲内とみなされている(金原ほか,1995a,b)。今回の分析結果を見ると、寄生虫卵は方形石組み3内からは1個体も検出されず、方形石組み2からは検出されるものの、総数で1ccあたり100個体未満であった。上述の事例などを考慮すると、方形石組み2の産状は、汚染の範囲内に収まる値である。ただし、寄生虫卵の分解に対する抵抗性は花粉化石と同程度とされており(黒崎ほか,1993)、寄生虫卵や花粉化石が破損・溶解している状況で検出されることなどを考慮すると、分解の影響を受けて本来含有していた寄生虫卵含量を反映していない可能性がある。

検出された寄生虫卵は、回虫卵、横川吸虫卵、不明吸虫卵であった。回虫は、糞便とともに排出された虫卵が野菜や野草、飲み水などの摂取によって経口感染するものである。横川吸虫は、カワニナなどを第1中間宿主に、アユ・シラウオなどを第2中間宿主にすることから、これらを摂取することにより感染する。このことから、検出された寄生虫卵が糞便に由来するものであるならば、当時の食生活の一端を明らかにできる可能性がある。なお、トイレ遺構の検証については、①寄生虫卵の多産、②食物残渣(可食植物の種実遺体、骨など)の産出、③昆虫遺骸の産出、④土壤理化学性(リンなどの過多、未分解物質が多いなど)、⑤脂肪酸分析(コプロスタノールなどの多産)、⑥花粉分析(花ごと食べる種類の多産)、⑦珪藻分析(海産物付着種などの多産)、などの複数の分析項目を組み合わせることにより、より詳細な情報を得ることが可能となる。今回の分析からは、トイレ遺構の可能性を示唆できなかったが、微細物分析や土壤理化学分析などを実施することにより、さらなる検討が可能になると思われる。

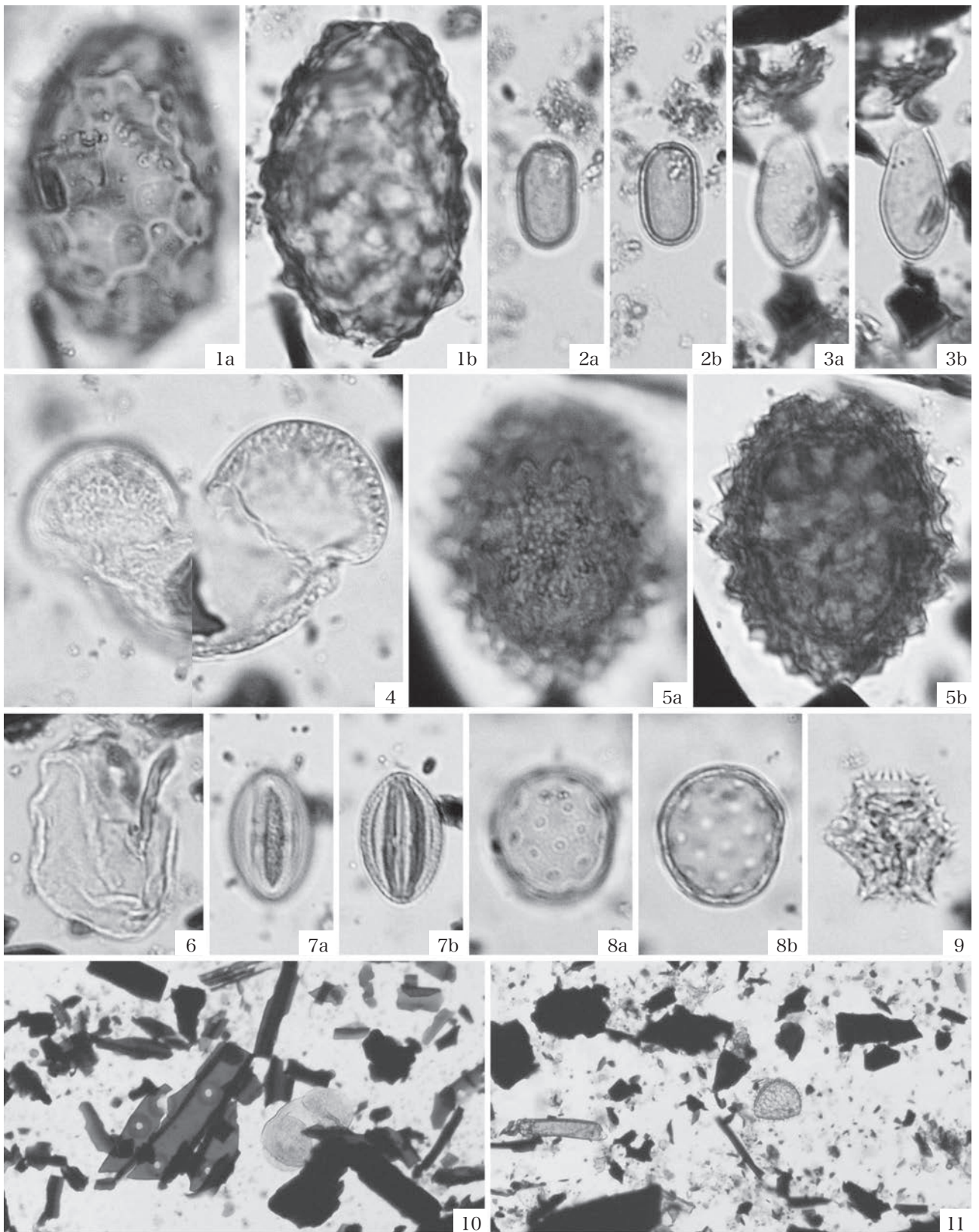
また、今回分析した試料からは、少ないながらも花粉化石が検出された。上述のように、花粉化石も保存状態が悪く、花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められたことから、得られた花粉化石群集は、当時の古植生を正確に反映していないと言える。少なくとも検出された種類から、マツ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属一ケヤキ属、ウルシ属、ウコギ科等の木本類の生育が窺える。マツ属は崩落地や二次林などに先駆的に生育する種類であり、アカガシ亜属は常緑広葉樹林の主要構成要素である。それらが遺跡周辺に分布し、ウルシ属やウコギ科などの林縁要素、荒地や河岸などに生育するニレ属一ケヤキ属などを伴っていた可能性がある。草本類についてみると、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ科、アブラナ科、オミナエシ属、タンポポ亜科など、開けた明るい場所に生育する「人里植物」が多く認められる。よって、中城御殿内の庭あるいはその周囲の草地植生に由来する可能性がある。また、方形石組み2からは、栽培植物のベニバナ属も検出されたことから、当時の植物利用の可能性が指摘される。

第98表 寄生虫卵分析結果

種 類	トレンチ2 H-15	トレンチ1 F-16
	方形石組み3内 II層最下層	方形石組み2底面 炭層(下) III層
寄生虫卵(個/cc)		
回虫卵	0	<100
横川吸虫卵	0	<100
不明吸虫卵	0	<100
合 計		
寄生虫卵	0	<100
木本花粉		
マツ属複雑管束亜属	2	-
マツ属(不明)	22	4
コナラ属アカガシ亜属	-	1
ニレ属一ケヤキ属	1	-
ウルシ属	-	1
ウコギ科	-	1
草本花粉		
イネ科	7	2
カヤツリグサ科	2	-
タデ属	1	13
アカザ科	10	4
アブラナ科	-	4
オミナエシ属	-	2
ベニバナ属	-	1
タンポポ亜科	1	11
不明花粉		
不明花粉	1	17
シダ類胞子		
シダ類胞子	27	29
合 計		
木本花粉	25	7
草本花粉	21	37
不明花粉	1	17
シダ類胞子	27	29
合計(不明を除く)	73	73

1) 寄生虫卵については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。  
2) <100: 100個体未満。





1. 回虫卵(方形石組み 2)	2. 横川吸虫卵(方形石組み 2)	50 μm	50 μm
3. 不明吸虫卵(方形石組み 2)	4. マツ属(方形石組み 2)	(1-9)	(10,11)
5. ベニバナ属(方形石組み 2)	6. イネ科(方形石組み 2)		
7. タデ属(方形石組み 3)	8. アカザ科(方形石組み 3)		
9. タンポポ垂科(方形石組み 3)	10. 分析プレパラート内の状況(方形石組み 3)		
11. 分析プレパラート内の状況(方形石組み 2)			

図版 141 寄生虫卵・花粉化石

## 第2節 出土炭化材の樹種

### 1. 試料

試料は、トレンチ2で検出された大御庭砂利面直上の炭層から出土した炭化材6点(炭化材1～6)である。炭層は、沖縄戦時(1945年4月)の火災層とされている。

### 2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、3断面の割断面を作製して実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本及び独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

### 3. 結果

炭化材の樹種同定結果を第99表に示す。炭化材は、針葉樹2分類群(スギ・マキ属)と広葉樹3種類(ヤマモモ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

#### ○スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

#### ○マキ属 (*Podocarpus*) マキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。樹脂細胞が早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔構成され、柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1～2個。放射組織は単列、1～10細胞高。

#### ○ヤマモモ (*Myrica rubra* Sieb. et Zucc.) ヤマモモ科

散孔材で道管壁は薄く、単独または2-4個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

### 4. 考察

トレンチ2は、屋根伏図によると新御殿と大御庭、浮き道が存在した付近に当たり、新御殿のものと思われる石畳などの遺構が検出されている。炭化材は、大御庭跡砂利面直上炭層から出土しており、スギ、マキ属、ヤマモモが確認された。この結果から、炭化材が少なくとも3種類で構成されていることが推定される。スギは木理が通直で割裂性が高く、加工は容易である。マキ属は、イヌマキとナギがあり、いずれも重硬・緻密で強度・耐水性・耐白蟻性が高い。ヤマモモは重硬・緻密で強度が高い。

確認された樹種のうち、スギは沖縄には分布していない樹木であることから、炭化材は何らかの搬入品に由来する可能性がある。また、マキ属は沖縄にはイヌマキが広く分布し、ナギも希に認められ、その材質から建築部材として最も重要な種類とされることから、今回のマキ属も建築部材に由来する可能性がある。ヤマモモは、果実を生食あるいは塩漬にして食用とするほか、泡盛に漬けて楊梅酒とする(天野,1989)。木材が建築部材などに利用された可能性の他、果樹として植栽されていた可能性もある。これらの炭化材の由来を明らかにするためには、出土状況や形状等も含めた検討が必要である。

第99表 炭化材樹種同定結果

トレンチ	遺構・層位	試料名	樹種
トレンチ2	大御庭砂利面直上炭層	炭化材1	マキ属
		炭化材2	マキ属
		炭化材3	スギ
		炭化材4	マキ属
		炭化材5	ヤマモモ
		炭化材6	マキ属

## 第3節 位牌の分析

### 1. 試料

分析の対象とした位牌は、トレンチ2で検出された暗渠の中から、金属製の缶に取められた状態で出土しており、戦時中に避難させたものと考えられている。本報告では、位牌の本体に由来する木片1点と、台座に由来する木片(木片12)1点の計2点を樹種同定の試料とし、位牌を包んでいたと考えられている布片1点については、材質分析の試料とする。さらに、位牌本体の札部分に塗られていたとされる赤色漆片1点と、台座に塗られていたとされる茶色漆片1点については、薄片作製による顕微鏡観察と成分分析の試料とする。

### 2. 分析方法

#### (1) 樹種同定

剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液)で封入してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やRichter他(2006)を参考にする。

#### (2) 布の分析

外観を観察した後、分割して繊維の横断面が出るように試料台に固定する。スパッタリングコーターで炭素をコーティングした上で、走査型電子顕微鏡で断面形態等を観察する。また、残った布片をハイドロサルファイト、クエン酸ソーダ、塩素等を用いて漂白した後、繊維染色試薬(ボーケンステイン)による染織試験を併せて実施する。

#### (3) 漆塗膜薄片作製・観察

塗膜片を合成樹脂で包埋し、樹脂を固化させる。ダイヤモンドカッターで断面が出るように切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドグラスに接着し、反対側も切断と研磨を行ってプレパラートとする。プレパラートは生物顕微鏡、落射蛍光顕微鏡、偏光顕微鏡、反射顕微鏡を用いて構造や混和物について観察する。

#### (4) 漆塗膜の成分分析

漆塗膜の主成分(脂質成分)の分析には、熱分解-ガスクロマトグラフィー/質量分析(Py-GC/MS)を用いた。熱分解にはフロンティア・ラボ株式会社製ダブルショットパイロライザーHP-2020iD、ガスクロマトグラフはAgilent社製ガスクロマトグラムHP6890、質量分析装置はHPG5975A、キャピラリー分離カラムはUAPY1(HT/MS)(100% methyl silicone, 30m, 0.25mm, 膜厚は0.25 $\mu$ m)を用いた。分析に用いた試料量はおよそ1.0mgであった。

また、分析条件としてはこれまで漆の分析に広く利用されている熱分解温度500 $^{\circ}$ C、イオン化電圧は70eV、ガスクロマトグラムカラム温度:40 $^{\circ}$ C(2min Hold) - (12 $^{\circ}$ C/min) - 320 $^{\circ}$ C(10min Hold)、インジェクション温度:280 $^{\circ}$ C、インターフェイス温度:280 $^{\circ}$ C、質量分析計室内温度:180 $^{\circ}$ C、カラム流量:ヘリウム(1.0ml/min)を用いた。

また、上記分析方法以外に産地を推定する新手法として、ストロンチウム同位体分析を行った。同分析法の手順として、まず漆膜についてテフロンビーカー中で前処理を行う。始めに試料に対して14M硝酸(HNO<sub>3</sub>)を加え加熱分解し、その後乾固した。次に試料の状態に応じて14M硝酸、過塩素酸(HClO<sub>4</sub>)、過酸化水素(H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>)を加え加熱分解した後、乾固した。これを有機物が残らなくなるまで繰り返した。乾固した後、3M硝酸1mlで溶解した。カラムに抽出クロマトグラフィーレジン(Sr Resin;50-100 $\mu$ m, Eichrom社)0.5mlを導入した後、2%硝酸5ml $\times$ 3、3M硝酸4mlを流してコンディショニングした。レジンに試料を塗布し、3M硝酸10ml、7M硝酸6ml、3M硝酸2mlを流して、Sr以外の元素を除去した。最後に2%硝酸7.5mlを流して、Srを回収した。その後、東京大学地震研究所に設置されている多重検出型-誘導結合プラズマ/質量分析計; MC-ICP/MS(Iso Probe, Micro Mass)でストロンチウム同位体比(87Sr/86Sr)を測定した。

### 3. 結果

#### (1) 樹種同定

位牌の本体と台座は、2点とも針葉樹のヒノキ科に同定された。解剖学的特徴等を記す。

##### ○ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型またはスギ型であり、1分野に1-2個。放射組織は単列、1-15細胞高。

#### (2) 布の分析

布片は、約5mm四方の破片である。直径約0.3~0.2mmの太い糸と、直径約0.1mm~それ以下の細い糸とがある。太い糸を約0.5mm間隔で配置し、細い糸が太い糸に直交するように織られている。細い糸は2本1組で、太い糸を鉢み込むように、太い糸の間で交差しながら織られており、細い糸も約0.5mm間隔で配置されている。

糸を構成する繊維は、いずれの糸もよく似ており、径約10μmで断面形態は不定形である。細い糸と太い糸で、繊維の数が異なっており、細い糸では30~40本、太い糸では100本以上が集まっている様子が確認できる。

染織試験のための漂白では、塩素で繊維が溶解した。また、繊維は、染色前は透明であるが、染色後はエンジ色を呈する。

以上の特徴から、糸を構成する繊維は絹と判断される。

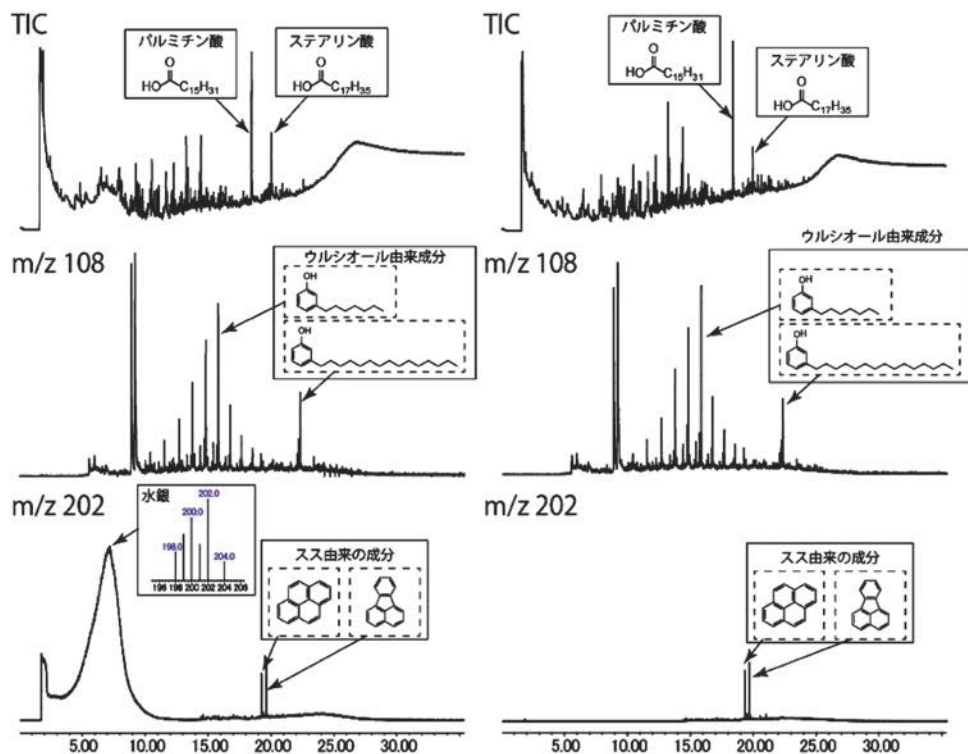
#### (3) 漆塗膜薄片作製・観察

##### ○位牌本体の赤漆

木地の上には、300μm以上の厚い下地層が認められる。下地は、鉱物粒が認められることから、漆と土・粘土などを混和した漆地粉下地と考えられる。下地の上には、赤色顔料を混和した赤漆層が認められる。赤色顔料は、成分分析の結果から水銀朱であることがわかった。赤漆層は約30-40μmであるが、層界がみられることから、2回に分けて塗布されたと考えられる。

##### ○台座の茶色漆

木地の上には、下地層が約50-60μmの厚さで認められる。下地は骨粉を用いていると考えられる。下地の上には混和物の無い透明漆が30-40μmの厚さで認められる。透明漆と下地の間に薄い黒色の層があり、下地の上に何らかが塗布されている可能性がある。



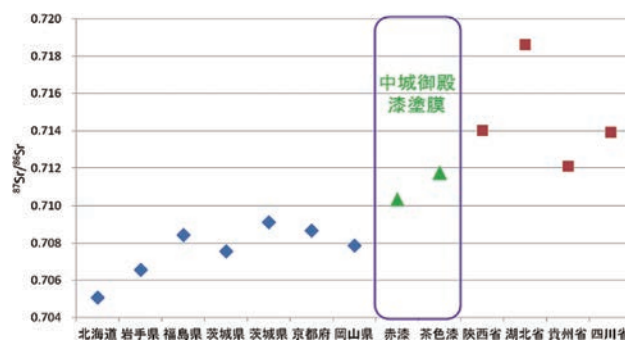
第117図 Py-GC/MS分析結果 (左：赤漆 右：茶漆)

#### (4) 漆塗膜の成分分析

Py-GC/MS分析結果(第117図)から、茶色漆と赤漆の2つの試料は双方ともウルシオールであることが確認された。ウルシオールは日本・中国に生育している *Rhus verniciflua* (ウルシノキ) から採取される樹液に含まれている。このことから、これらの試料はこれらの地域でとれた樹液を利用して製作されたことが分かった。

また、赤漆には分子量202の成分が低沸点域に検出されている。この成分のマススペクトルから、水銀である事が推察される。この試料が赤色である事と合わせて考えると、この水銀は顔料である水銀朱に由来するものと考えられる。一方、分子量202において茶色漆と赤漆の双方に確認された成分は、ベンゼン環を多く含むピレンやフルオラセンが検出された。これらの成分は主に炭などの炭化物に含まれる成分である。

加えて、TIC(全イオンクロマトグラフィ)には多くのパルミチン酸とステアリン酸が確認された。この成分は植物油(亜麻仁油や荏油など)を熱分解した際に多く検出される成分である。また、ストロンチウム同位体比の測定結果は、赤漆： $87\text{Sr}/86\text{Sr}=0.7103\pm 0.0002$ となり、茶色漆： $87\text{Sr}/86\text{Sr}=0.7117\pm 0.0002$ という値を示した。これを現生の列島産漆・大陸産漆の $87\text{Sr}/86\text{Sr}$ と比較すると第118図のようになる。



第118図 現生および出土漆の $87\text{Sr}/86\text{Sr}$

#### 4. 考察

位牌は全体に彫刻による装飾が施され、本体と台座に分けられる。また、本体は装飾部分と札部分が別部材で作られている。札部分は赤く塗られ、台座には茶色の塗膜が認められる。

樹種同定試料は、本体の装飾部分と台座から採取されており、いずれも針葉樹のヒノキ科に同定された。日本産のヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコ等の有用材が含まれる。また、タイワンヒノキなど、沖縄に近い台湾や中国大陸にも分布している。なお、沖縄には、オキナワハイネズが分布しているが、位牌が作れるサイズの木材は得られないことから、位牌あるいは木材が外部から持ち込まれたことが推定される。

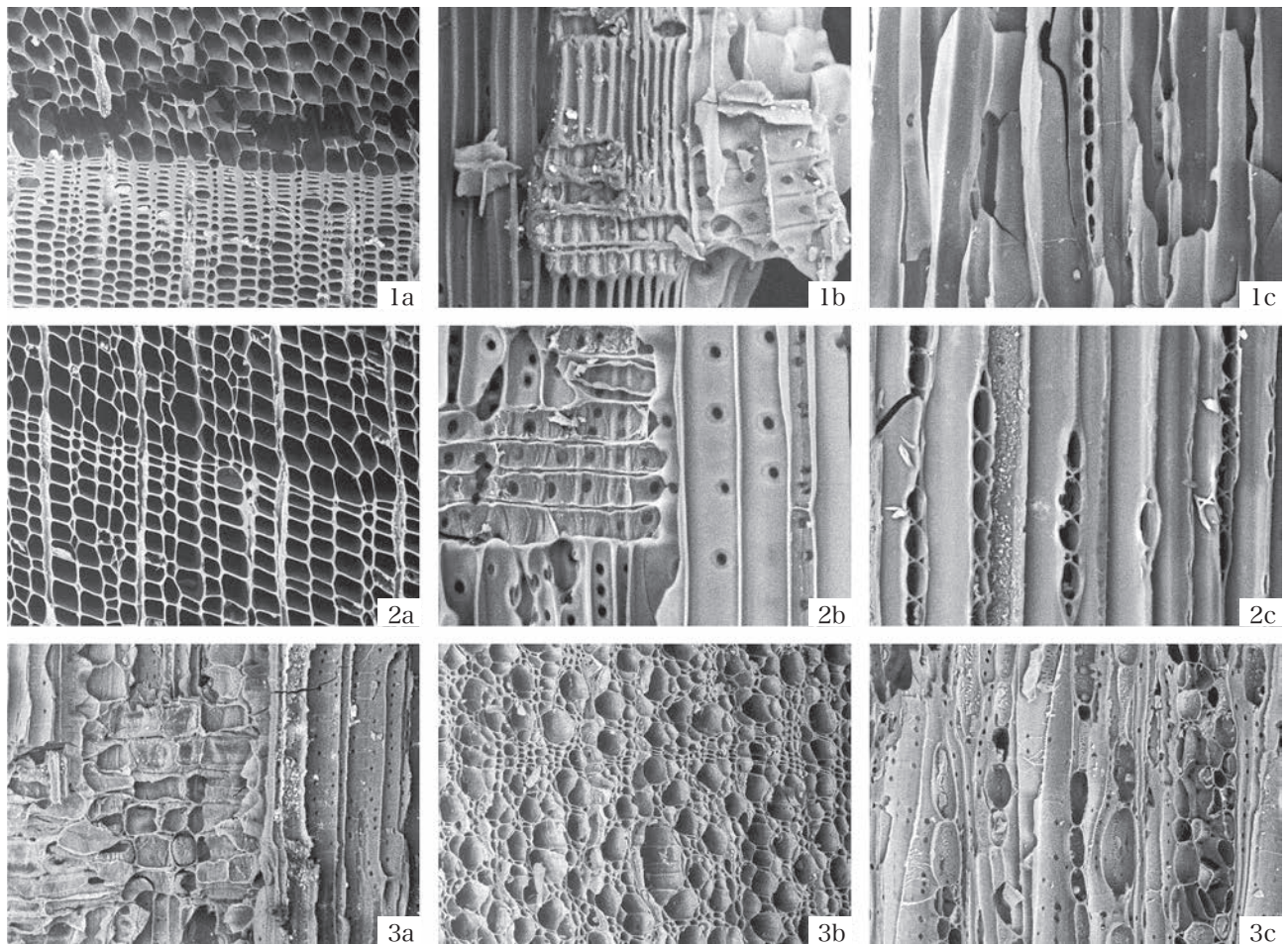
位牌に付着していた布片は、糸が約0.5mm幅で編まれており、比較的織り目が粗い布であったことが推定される。布片は、経糸と緯糸で糸の太さが異なるが、いずれも糸を構成する繊維は絹であり、糸の太さの違いは、束ねている絹の本数の違いに起因する。

漆塗膜片は、本体の札部分から採取した赤色の塗膜と、台座に認められた茶色の塗膜とがある。札の赤色部分は、厚い下地層の上に水銀朱を混ぜた赤漆が塗られている。一方、台座の茶色部分は、骨粉を用いた下地の上に透明漆が塗られている。これだけでは茶色にならないが、下地と漆層の間に薄い黒色の層が見られることから、下地の上に何らかが薄く塗られており、これによって茶色を呈していることが推定される。

成分分析の結果からは、この試料が日本国内で所謂「漆」と呼ばれている成分である事が分かった。さらに、断面の分析結果において示唆された薄い黒色の層は、ススに由来する成分である可能性が高いと考えられる。また、植物油に由来する成分が多く検出されたことから、粘度調節もしくは光沢の上昇を目的にこれらの油を加えていたことが推察された。さらに、赤色の部分は水銀朱を利用していると考えられる結果となった。

次に、試料とした漆のストロンチウム同位体比の結果から、中国産の漆液を用いた可能性が高い結果が得られている。塗りの工程として確認された骨粉下地は、中国・韓国において多用されていると言われ、茶色漆に含まれる骨粉はこれを支持していると言える。現時点で琉球における漆生産の情報が少なく、琉球列島に生育した可能性のあるウルシについてのストロンチウム同位体情報も不十分であるため、今回の分析では断定的な結論を下すことは困難な状況である。

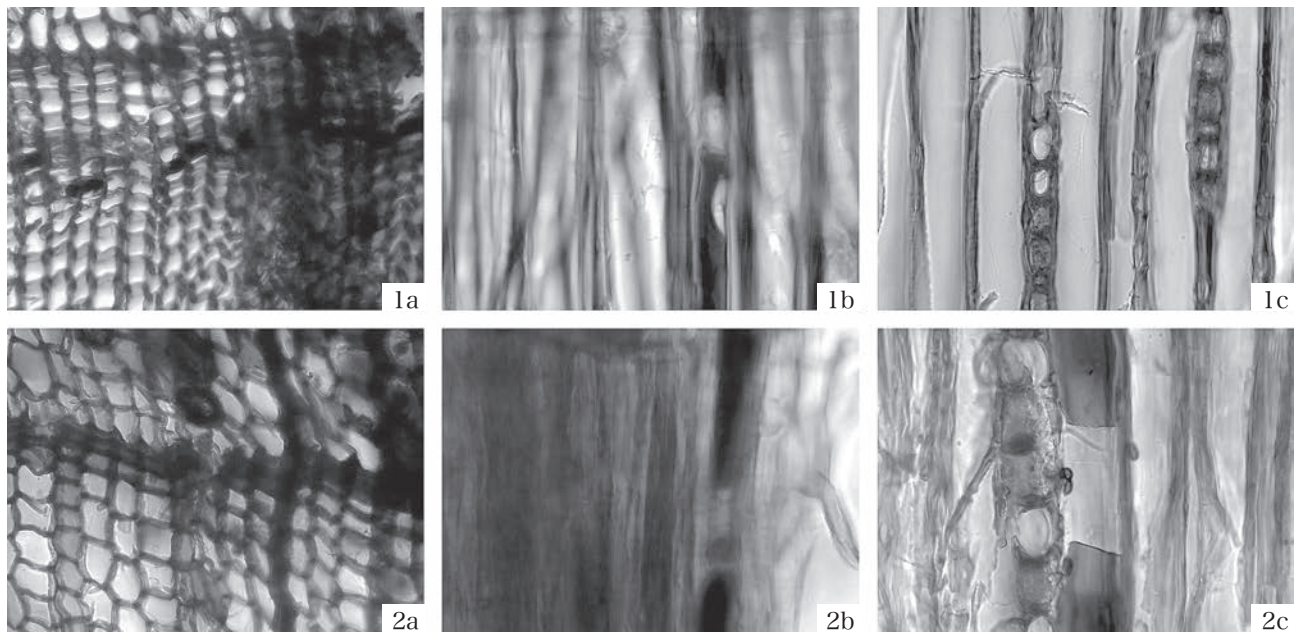
また、この二つの試料は異なる地域で採取された同種の漆であると考えられることもできる。しかし、下地に骨粉が含まれているため、ストロンチウム含有量が多いと思われる骨の影響も検討する必要がある。二つの資料のストロンチウム含有量を測定した上で、今後も検討していく予定である。



1. スギ(トレンチ2大御庭面直上IIb層：炭化材 3)  
 2. マキ属(トレンチ2大御庭面直上IIb層：炭化材 4)  
 3. ヤマモモ(トレンチ2大御庭面直上IIb層：炭化材 5)  
 a：木口、b：柁目、c：板目

200μm : 3a  
 200μm : 1-2a, 3b, c  
 100μm : 1-2b, c

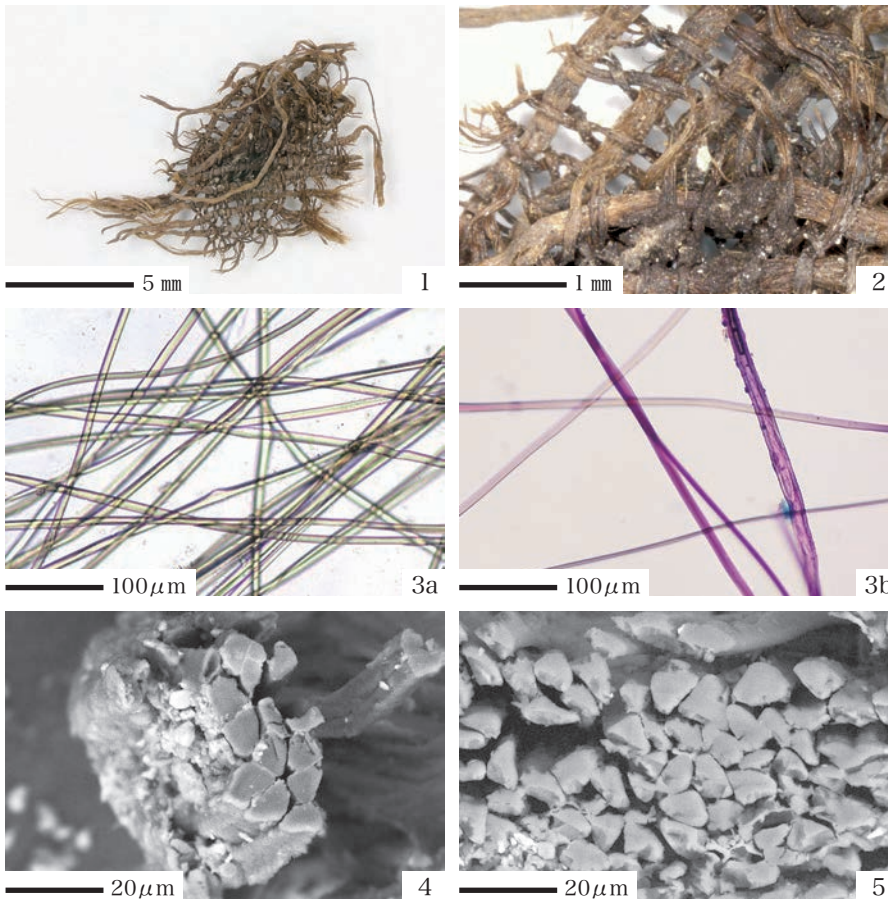
図版142 炭化材



1. ヒノキ科(トレンチ2暗渠内出土位牌本体)  
 2. ヒノキ科(トレンチ2暗渠内出土位牌台座)  
 a：木口、b：柁目、c：板目

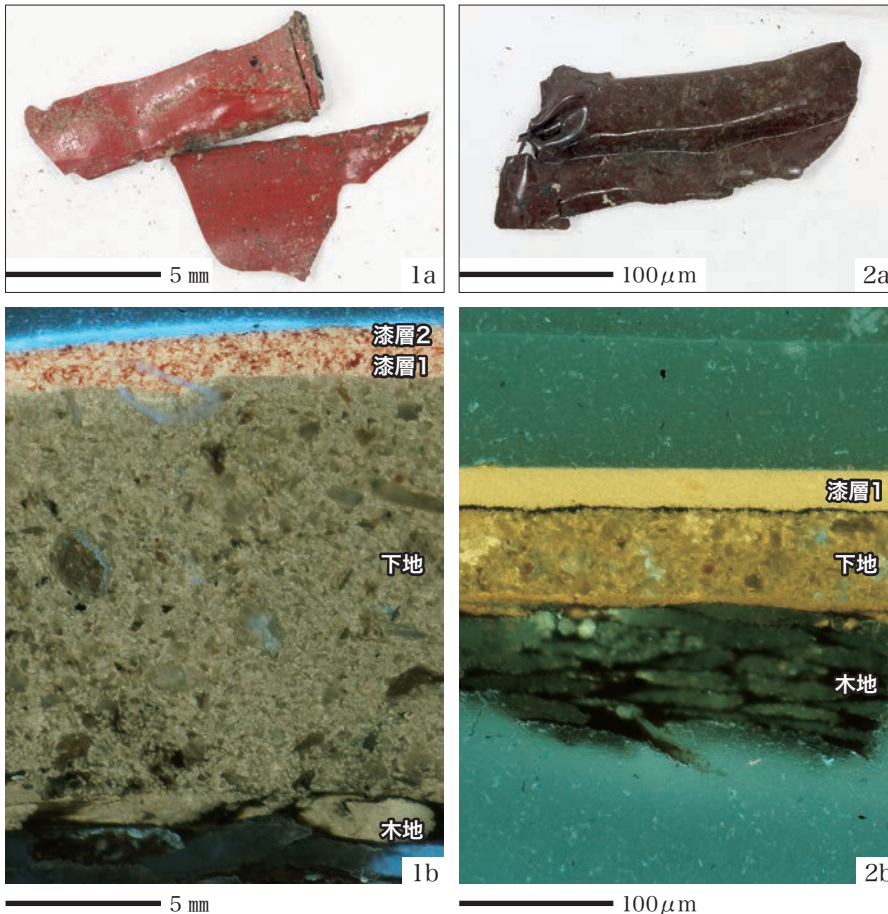
100μm : a  
 100μm : b, c

図版143 木材



1. 布の全景写真
2. 布編み目の拡大写真
3. 布繊維の染色試験写真  
a: 漂白時 b: 染色後
4. 布繊維(細)断面の電子顕微鏡写真
5. 布繊維(太)断面の電子顕微鏡写真

図版144 布



1. 位牌本体・札部分の赤色漆
2. 位牌台座の茶色漆
- a. 試料写真 b. 塗膜断面

図版145 漆塗膜

## 第5章 総括

以上、平成22年度に実施した中城御殿跡発掘調査の報告を行った。ここでは総括として、遺構と遺物に分けて考察を行い、まとめとしたい。

### 第1節 遺構

第3章第4節2において、トレンチごとに個々の遺構を報告したが、ここではまとめとして、屋根伏図や聞き取り調査により復元した間取りから建物の位置を想定し、そこから遺構の機能・性格を特定する作業を試みたい(第119図)。

今回の調査では、主に御内原の北側と、北之御殿の一角においてトレンチを4本設け、遺構確認調査を実施した。トレンチを設けた箇所が存在していたと思われる施設は、判明しているだけで御内原エリアの①新御殿、②大御庭、③女中居間、④寄満・女中部屋があり、その他、屋根伏せや聞き取り調査においても判然としなかった、御内原と上之御殿を行き来するための⑤門・階段や、上之御殿エリアでは、⑥上之御殿と⑦大岩の拝所がある。また、これらを区画する⑧石牆及び暗渠・開渠が検出されているほか、⑨中城御殿設置以前の遺構と思われる石積みや階段・石畳を検出した。次にこの1～9の順に遺構の状況をまとめる。

#### 1. 新御殿

新御殿は、かつて御内原の西端部に位置していた建物である。聞き取り調査によると、この建物は創建当初から存在したものでなく、廃藩置県後に「鈴の下」と称する女官詰所を撤去して新設されたと言われる。遺構はトレンチ2西側より、建物北端部から裏手にあたる範囲が検出されている。

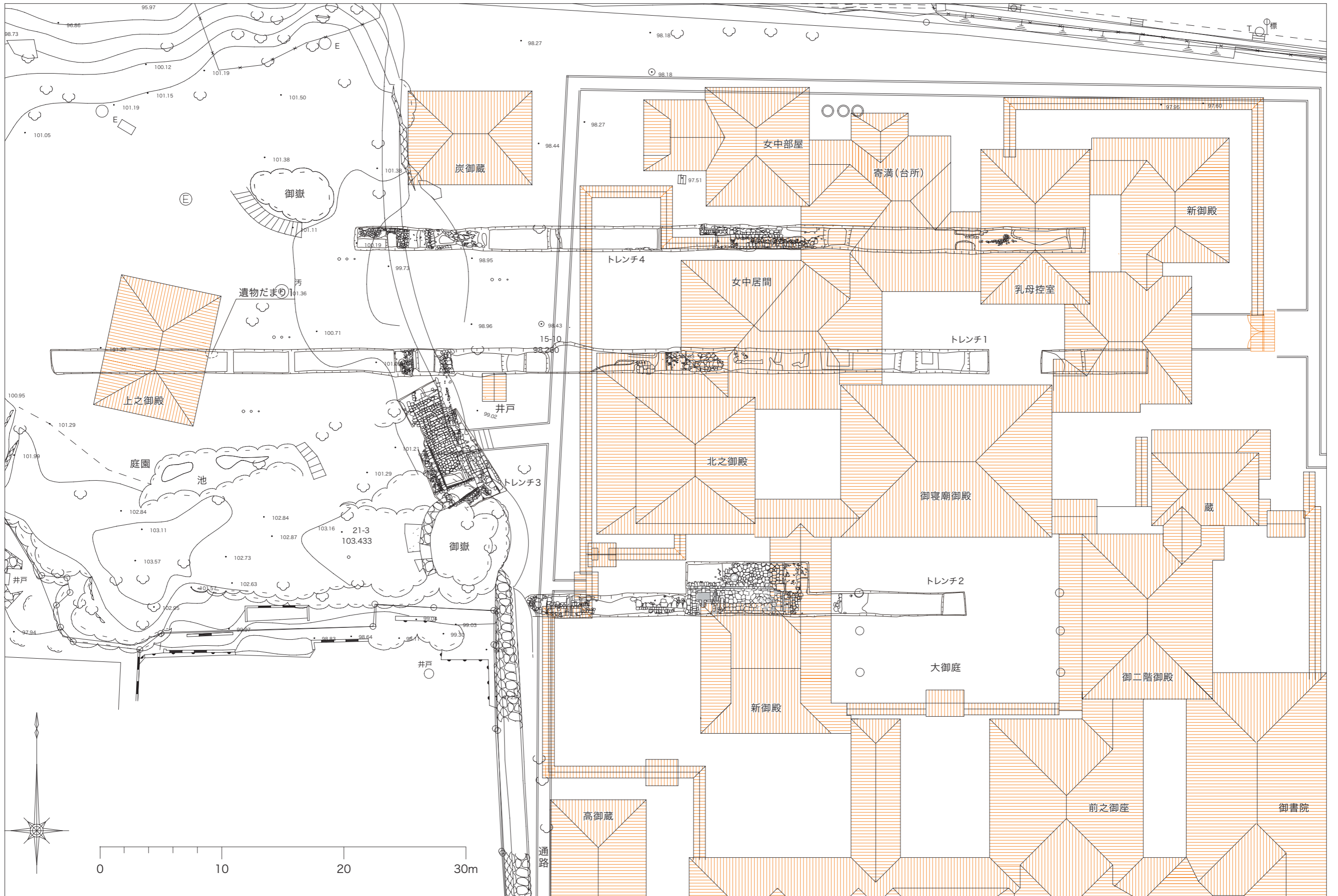
石畳はその区画により、トレンチ2石畳1～6として分けて報告した。これらはその検出状況から、新旧の2時期が存在することが確認されている。この内、新期に属すると思われる石畳は、このトレンチ2で検出した石畳2と、トレンチを一部北側に拡張した箇所で検出した石畳1である。屋根伏図を参考にすると、石畳2が建物内北端部と思われる地点で、縁石により縁取られた石畳や溝のほか、西側には方形石組み3(トイレ遺構)が確認されている。この石畳2は、その目地が丁寧にモルタルで埋められている点と、周囲が溝で囲われている点から室内の水場として使用していたことが考えられ、浴室などの機能を想定できる。

次に石畳1は、建物裏手にあたることを考えられ、その中に軒下を伝い落ちる雨水を貯えたと思われる大甕の底部が、埋甕2として検出されている(図版146)。この石畳1付近と埋甕2の状況に似た光景が古写真に残されており(図版148)、イメージの助けとなっている。

これに対して、旧石畳と考えられる遺構は石畳3～6で、いずれも小規模での検出であるが、石畳2及び溝1との切り合いや配置の状況から、当初は新御殿築造以前の「鈴の下」とされた建物の遺構を想定していた。しかし、屋根伏図(第3図)と中城御殿御普請板図翻刻図(第5図)を比較すると、新御殿は改築前の間取りより北西へ広く設えられており、若干の補正は必要だが、遺構は屋根伏図と概ね一致することがわかる(第119図)。従って、検出された遺構は新御殿のもので、新旧の切り合いは新御殿建造後の改築に伴うものである可能性が高い。

続いて、トイレと考えられる方形石組み3は石畳4・5間に位置し、両遺構を破壊して築造していることで、先後関係を読むことができる。遺構は枡形便槽としての機能が考えられる石組みと、上部に大便器を設置していたと思われるスロープ状の溝をセットとする。石組み内面はモルタルにより丁寧に塗り固められ、底面を傾斜させて仕上げることで、汲み取りを容易にする工夫が施されている。なお、本遺構の東側には、同様な勾配を成す2本の溝が設けられ、その内溝4は方形石組み3に、溝5は排水用の溝3につながる構造





第119図 遺構平面図と屋根伏図の重ね図

※屋根伏図は中城御殿跡地整備検討委員会資料(沖縄県都市計画・モノレル課提供)



である。周辺には衛生陶器と思われる厚手の磁器片が多数得られており、その破片形状から、クロム青磁製の朝顔形小便器が設置されていたことが想定できる。

このトイレについては、首里城では少なくとも、廃藩置県以降に軍隊宿舎や各種学校として使用される頃から造られると思われる、そこでは埋設した陶製の甕や鉢を便器・便槽として使用していた。それまではトイレを設備として構築しておらず、『御冠船之時御座構之図』などの古絵図にみえるように、部屋の一角を間仕切りし、「糞箱」と「小便筒」に用を足すのが常であったようである。また、その内容物はゴミ穴に投棄していたことが発掘により判明している(沖縄県立埋蔵文化財センター2010b)。

この変遷をみると、中城御殿のトイレ遺構は、石造モルタル張りの汲み取り式である上、大使用と小使用とで便器を分け、しかもその便器として青磁や白磁・染付を設けている。これらの点から、新御殿は当時の最新技術を駆使した衛生的にも優れた設備が備え付けられた建物であり、近代以降の間取・築造法を知る上で重要といえる。

今回の調査では、新御殿北側の一部が検出されたが、遺構の残りはかなり良好であり、今後の調査でもまとまった遺構の検出が期待される。



図版146 トレンチ2埋甕2ほか



図版147 新御殿の庭の門(正面)

(井伊文子)



図版148 裏木戸を開けた所にある水甕

(井伊文子)

2. 大御庭

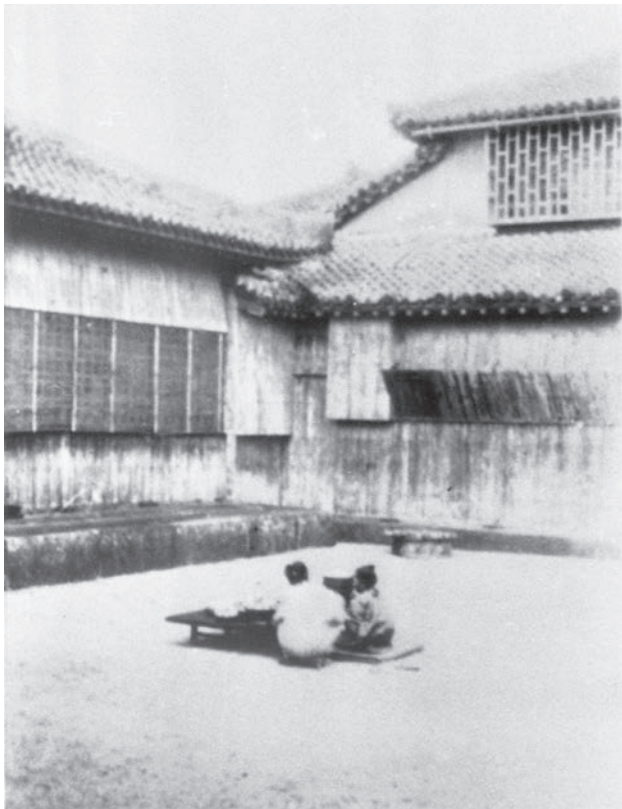
大御庭は、中城御殿で執り行われた各種祭祀の祭場として用いられた神聖な庭であったとされる。一面にサンゴ砂利が敷かれた方形の広場で、かつては西に新御殿、北に御寝廟殿、東に二階御殿、南に中門を配していた。またこの庭の東西辺には、それぞれ3箇所ずつ防火用の大甕が埋め込まれていたとされ、この状況は古写真(図版150・151)や聞き取り調査において確認されている。

大御庭跡はトレンチ2東側で検出されている。遺構というよりは庭を構成する砂利面・層としての検出で、その一部に埋甕1が設置された状態で検出している。また、新御殿の基壇と思われる石列2が甕の西側に検出されており、この状況は屋根伏せや古写真の状況と一致している(図版151)。その断面を観察すると、砂利面の下層は中城御殿造営時に持ち込まれたと思われる造成層が厚く堆積しており、その中からは近世を中心とする遺物が多数出土している。また、砂利層上に堆積した炭化物の材同定を行ったところ、スギ、マキ属、ヤマモモが確認された。前2者は建築材として使用されたことが考えられ、ヤマモモは果樹として植栽されていた可能性がある。

大御庭や基壇の範囲はトレンチ外にも広がることが想定でき、今後の調査で石列や砂利面を追うことにより、その広がりがより明確になるものと思われる。



図版149 トレンチ2埋甕1・石列2(東から)



図版150 御寝廟前の庭

(井伊文子)



図版151 新御殿の正面

(井伊文子)

### 3. 女中居間

女中居間の一部と思われる遺構は、トレンチ1において検出された。遺構は表面が破壊されていたことから建物区画を示すものではないが、建物の地下に存在していたと思われる方形石組み遺構や石列が確認されている(図版152下)。この内、方形石組み遺構は2基検出しており、内容物や構造から方形石組み1は排水枡かゴミ穴(シーリ)の可能性はある。また、その西側に近接して確認された方形石組み2は、トレンチ2で確認された方形石組み3(トイレ遺構)の形態と類似することと、周辺から便器と思われる衛生陶器が出土していること、さらに微量ではあるが、底面採取土壌から寄生虫卵が確認されていることから、遺構はトイレの便槽である可能性が示唆される。近年発見された中城御殿御普請板図においても「厠」の表記が随所に確認でき、トイレは複数箇所設置されていたことが想定できる。

この一帯は、戦中の被弾や戦後の開発により破壊された遺構が多いものの、今回確認された建物の地下構造物などは残されていることが判明した。また、遺構が見あたらない部分に関しても、中城御殿造営時の造成層が確認されており、その堆積や出土遺物から造成法や変遷をみることが可能である。

### 4. 寄満・女中部屋

当時の台所であった寄満や女中部屋が存在していたと思われる地点において、東西に走る溝や方形石組み遺構を検出した(図版152上)。溝は西側に下る勾配を示しており、その長さは分断して確認されている遺構を合わせると15m以上におよぶ。このさらに西側には、開渠3とした巨大な排水溝が存在しており、かつては建物周辺や床下に縦横に巡らされた側溝の水が敷地外周に集積され、排出されていたことが想定できる。また、溝7の一部には旧石畳2がみられ、改築の痕跡であることが考えられる。

次に方形石組み4は、内部には動物骨が多量に堆積していたことから、ゴミ穴(シーリ)としての機能が考えられる。内面はモルタル張りで、底面は傾斜させて仕上げるなど、構造は方形石組み1・3と同様で、溜まった内容物のかき出しやすさを考慮したものとなっている。このゴミ穴(シーリ)については、17世紀前半の例が首里城跡でも確認されており(沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b)、今回の事例は同様なゴミ穴が近代末期まで使用されている点と、その内容物から食材の変遷を比較できる点で興味深い結果となった。



図版152 トレンチ1・4 女中居間・寄満付近遺構平面(画像上が北)

## 5. 門・階段

御内原の西端にあたる箇所において、上之御殿へ通ずる門及び階段跡が検出された(図版153)。この門の情報については古写真の一部に残るが(図版154)、聞き取り等においても明確なものが得られていなかった。しかし、今回の調査により、御内原から浮道を伝い、門をくぐって右(北)に折れ、階段を9段上ることの上之御殿が建つエリアに至ることが判明した。門跡は検出した礎石の数と、古写真に見える中門(図版8)の例から4本柱の切妻屋根で、扉が設置されていたことが想定できる。図版154の古写真右手の門に屋根はみられないものの、暗がりの間口に木製柱と桁、扉の一部が写されている。これらの情報を合わせると、門扉は東に観音開きする構造で、柱が扉より高いことから、かつてはその上に板屋根が設置されていた可能性がある。

この変遷について、古写真(図版154)において木製柱が据えられている西辺部の礎石2・3上にモルタルによる補修がみられない点と、東辺に残る礎石1上面にはモルタルの補修が残ることから、次の想定が可能である。それは、4本柱の門扉は創建当初に存在したものの、ある時期に西側に存在した2本の柱と屋根が撤去され、その後礎石上にモルタルによる補修が行われたとするものである。モルタルによる補修は各所に点在しているが、この状況はその使用時期について想定する上でヒントになる。

この階段や周囲を囲う石積みは精緻な相方積みで、花柄に積むなど趣向が凝らされている。また、階段南側には植え込みと思われるテラスが設けられており、何らかの観葉植物が植栽されていたことが想定できる。さらに、階段は北に上につれ徐々に幅広くなるよう施工されており、より広く長く見せる効果を狙ったものと思われる。

続いて、階段踊り場の一角には、戦時中に掘削したと思われる土坑が残る。聞き取りにより、戦況が悪化してきた1945(昭和20)年3月下旬頃、中城御殿に納められていた多くの宝物類を、敷地内の数箇所に穴を掘るなどして避難させたという情報が得られていることから、土坑は宝物を避難させる目的で掘削されたことが想定できる。この階段遺構周辺の残りは全体的に良好で、北側に設置したトレンチ1及び4においても連続する遺構が確認されていることから、一帯には石牆や浮道などの遺構が広範囲で残存しているものと思われる。

## 6. 上之御殿

屋根伏せからすると、上之御殿建物の南側を通過するようにトレンチ1を設けて発掘を行った。その結果、トレンチ内からはコンクリート基礎や岩盤が検出されるのみで、遺構は残されていなかった。その理由として、当地は高所に位置することで砲撃の標的にされやすかったことと、戦後の開発時に改変されたことが考えられる。この上之御殿の機能について明確な資料は確認されていないが、1920(大正9)年に尚泰子息の尚時が妻静子とともに上之御殿に移り住むという記録があることから(第1表)、王族の生活が営めるだけの施設が存在したことがわかる。なお、上之御殿跡付近では遺物溜まり1とした陶磁器がまとまって出土する土坑が確認されており、今後周辺を調査する際には留意する必要がある。



図版153 トレンチ3階段跡

公衆送信権により未表示

図版154 尚家の井戸(右手に門と階段あり)

(坂本万七撮影 日本民藝館所蔵)

## 7. 大岩の拝所

大岩の拝所としたのは、トレンチ4西端に検出した遺構を指す(図版156)。掘削範囲の関係で全容は不明であるが、数点の切石が並んだ状態で北壁面に検出されている。本遺構の下位には中城御殿以前のものと思われる石畳や階段跡が検出されており、これを破壊して本遺構が設置されている。古写真によると、大岩の周囲には、右回りで上のように螺旋状の石階段が巡らされており、岩の上面を拝所として使用していたとされる(図版157)。現在、大岩の南面には、階段の一部を構成していたと思われる段状のはつり痕及びモルタルが残されており(図版155)、それを裏付けている。



図版155 大岩の上部に残る階段状のはつり痕(南より)



図版156 大岩とトレンチ4西端の遺構



図版157 御拝所

(井伊文字)

## 8. 石牆・暗渠・開渠

ここで言う石牆は、御内原の西側に位置する南北方向に走る石積みを指し、各トレンチで検出した。トレンチ2以外は片面積みで、御内原と上之御殿の両エリアを区画するとともに、上之御殿エリアをテラス状に高める役割も有する。遺構の天端は残されていないが、これらの遺構につながる石牆が、調査区北側に天端を

有した状態で現存する(図版158)。この高さからおおよそその天端高を割り出すと、根石から370 cm前後で、石積み前面の旧地表面と思われるⅢ層上面からは、310 cm前後の高さを有していたことが考えられる。

このような石牆の前面には、敷地内の水を集積し、敷地外に排出する役割を持つ大規模な開渠や暗渠が築造されている。開渠はトレンチ1以外の石牆前面に検出され、トレンチ3においては幅50 cm以上、深さ100 cmを測り、その東壁石積みには暗渠の排水口が設置されている。このなかでもトレンチ4では、幅45 cm以上、深さ110 cmの開渠が湾曲した状態で敷設されている。中城御殿の造成土は、総じて粘質のため透水性が悪く、地表面の大半は石畳や三和土による舗装が行われていたことが想定できる。そのため中城御殿の築造にあたっては、大雨などの際に敷地内が冠水しないよう、排水にかかる施設は床下や地下施設として計画的に設計していたことが考えられる。この状況の参考になる古写真が残る(図版159)。写真は瓦塀と浮道、フクギ並木が写る御内原裏手を撮影したものだが、この浮道の下部に湾曲する溝・暗渠が写されており、トレンチ4で検出した開渠4と類似して



図版158 敷地北側に現存する石牆(東より)

公衆送信権のため未表示

(坂本万七撮影 日本民藝館所蔵)

図版159 瓦塀

いる。他の地点においても、同様な開渠や暗渠が多数確認されていることから、遺構上面が破壊されていても、その下部に地下構造物として暗渠や開渠、方形石組みなどの遺構が残存している可能性は高く、今後の調査においても慎重に確認する必要がある。

### 9. 中城御殿以前の遺構及び増改築の痕跡

中城御殿以前のものと考えられる遺構は、トレンチ1・3石積み1、トレンチ4旧石積み、旧階段、旧石畳1・3である。伴出する遺物に近代以降の遺物がみられない点と、遺構検出に際し先後関係が読めることで新旧を分けている。概して旧遺構は新遺構の下位あるいは後面にあり、旧遺構を破壊するか、埋め殺して新遺構を築造している例も確認されている(図版160)。

次に増改築の痕跡として、新御殿と寄溝・女中部屋の項でも記したが、トレンチ2石畳3～6及び西側の溝1・暗渠、トレンチ4旧石畳2が確認されている(図版146)。これらは周辺の遺構とほぼ同レベルに位置するが、切りあい関係から新旧を読み取ることが可能である。この対象となる地点に存在した建物は、いずれも廃藩置県以降に建て替えが行われたとする情報がある。この旧遺構が残されている理由として、増改築の際に旧遺構を全て取り除くのではなく、必要分除去して新たな石畳や溝を施工していることが考えられる。





図版 160 トレンチ3・1・4 (門・階段・石牆ほか) 平面 (画像上が北)

## 第2節 遺物

これまで第3章第4節において、層序と遺構から出土した主な遺物を掲載し、第3章第5節において種別ごとにその詳細を報告した。ここでは総括として、遺構ごとの出土傾向や中城御殿特有の遺物について、古写真やその他の情報を織り交ぜながらまとめてみることにする。

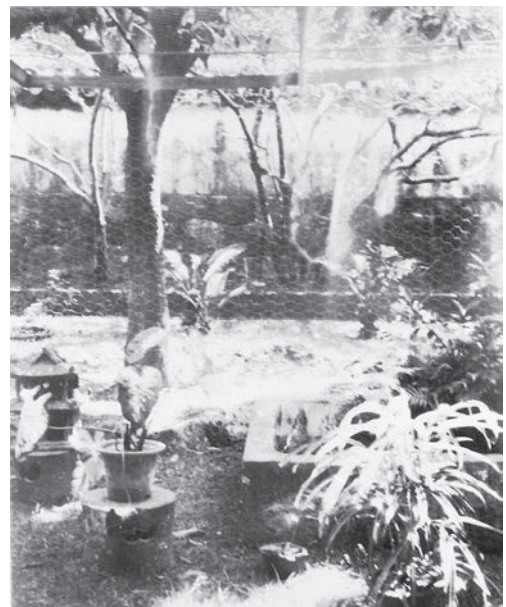
中城御殿では、これまでの調査においても、調査地点によって出土遺物の種別などに一定の傾向がみえることが報告されているが(沖縄県立埋蔵文化財センター 2010a、2011)、今回の調査においても建物の機能や性格により、遺物の種別が異なる状況が確認された。この観点から遺物の傾向をまとめるにあたり、調査地点と屋根伏せによる建物の情報をすり合わせ(第119図)、①新御殿周辺、②寄満・女官部屋周辺とし、また、トレンチ1・3で確認された③遺物溜まりと、④中城御殿以前の遺物、⑤戦前～終戦後の遺物、⑥その他特徴的な遺物、⑦自然遺物とに分けて報告することによりまとめたい。

### 1. 新御殿周辺

新御殿一帯と思われるトレンチ2 H-15 グリッド付近の遺物は、戦災により被熱及び破碎した陶磁器が多い傾向にある(巻頭図版9、第22図)。その年代は近代の製品が大半である。産地及び種別は、国産では肥前、瀬戸美濃、薩摩の色絵(錦手・金彩)や染付の蓋付き碗・小碗が多く、方形石組み3(トイレ遺構)周辺においては、青磁や白磁の衛生陶器片が多数出土している。その他、中国景德鎮産の蜃手や、青磁・瑠璃釉・色絵の官窯製と思われる製品、西洋陶器が一定量出土しており、沖縄産陶器は色絵の小碗や急須などが少量含まれている。この結果から、新御殿一帯では日本や中国・ヨーロッパからの輸入陶磁器類、特に茶器類を多用していたことがわかる。この状況は井伊文子氏が写る新御殿内部の古写真や随筆などにも確認でき(井伊文子1972)、喫茶が盛んに行われていたことが想定できる(図版161)。また、その他植木鉢が出土しており、新御殿の庭を写した古写真にも多数の鉢植えが存在する点で一致している(図版162)。

そして陶磁器以外の遺物として特筆できるのは、金属製品やガラス製品、漆製品である。金属製品は調度品などの飾り金具や部品類のほか、分銅、方位磁石などがある。中城御殿内には多数の長持(図版165)をはじめとする調度品が納められていたとされ、出土品はそれらの部品と考えられる。次に、ガラス製品は切子細工に金彩が施された器物片が数点得られている。これに関し、御殿内に存在していた宝物の一部には、ドイツ皇帝から贈られたガラスの器が含まれていたとする証言もあり(真栄平房敬1975)、様々な種別の宝物が存在していたことがわかる。

公衆送信権により未表示



(井伊文子)

図版161 新御殿の内部

図版162 新御殿の庭

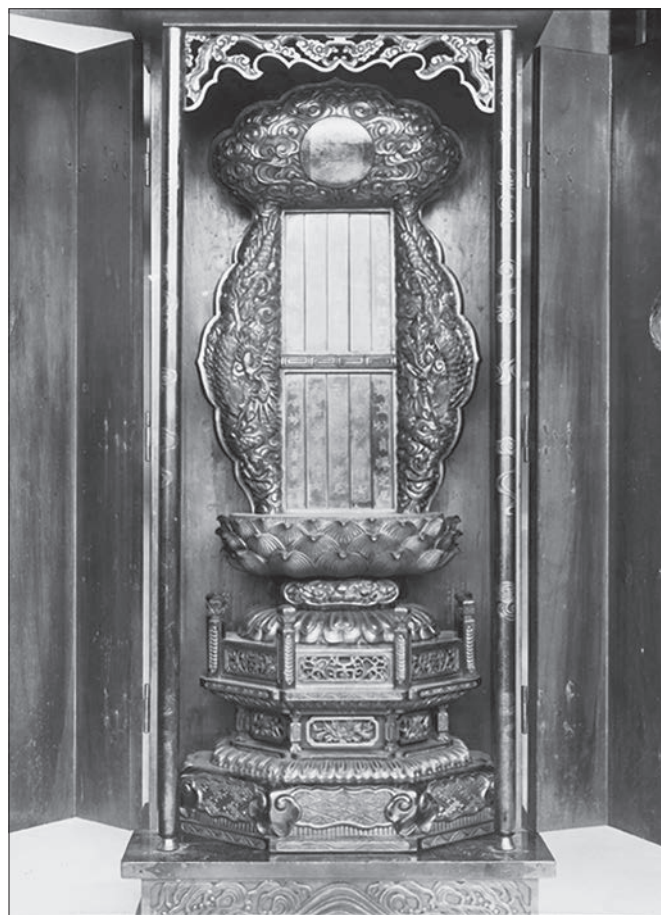
(井伊文子)

また、同グリッドからは黒漆上に葉文の箔絵が施された塗膜が多数得られている。その他金箔が単体で出土する状況も確認されており、鎌倉芳太郎の古写真にも多数の漆器や漆製品が写されていることから、多くの漆器類が存在していたことがわかる(図版164)。

次に、H-16グリッド暗渠内から発見された、木製朱塗りの位牌について記す(巻頭図版9、第3章第3節2・第4節20、第6章)。位牌は主に朱色及び茶色漆が用いられており、朱塗りの札板周辺は緻密な彫刻が施され、彫刻上には金箔が貼られる。この位牌の破片を、用材や産地を特定する目的で自然科学分析にかけた結果、本体・台座ともにヒノキ科の木材が用いられており、その表面は骨粉を下地とし、中国産の水銀朱が使用されていることがわかっている。また、位牌の表面に付着していた布片の分析から、絹糸を織り上げたものであることが判明している。周辺からは位牌以外の漆塗膜や鍔座金具などの出土もあることから、この位牌は当初、絹製の布でくるんだ状態で、厨子等の漆器に収められた状態であったことが考えられる。発見の状況からは、戦況が悪化する最中、緊急措置として暗渠内に避難させたことが想定できる。

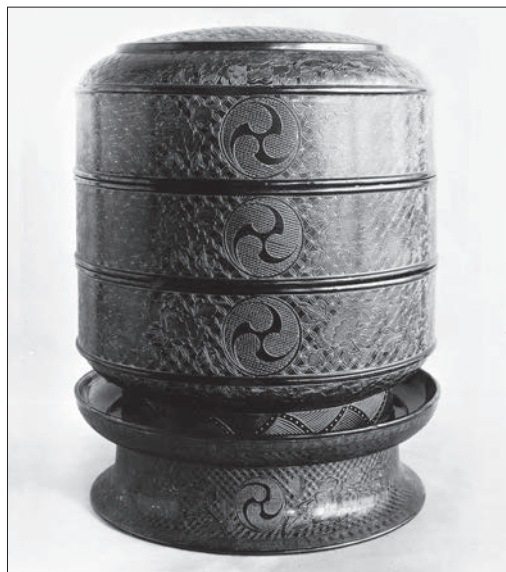
さらにこの位牌が発見された暗渠は、今回の発掘により、廃藩置県以降に行われたとされる新御殿築造の際に分断され、機能していなかったことが確認されている。このことから位牌を避難させた人物は、暗渠に水が入らないことを知る、御殿の施設や設備に精通した者であったことが考えられる。

この位牌の存在は、廃藩置県以降に首里城やその他の御殿から、中城御殿に多量の宝物類や祭壇などを持ち込んだとする情報と関連するものと思われる(真栄平房敬 1975、2003)。また、位牌が納められていた缶蓋の表面には、「・・・年



(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)

図版163 円覚寺 開山芥院隠和尚大禅師位牌



(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)

図版164 三御節(饗宴用) 朱塗沈金御籠飯と台盆



(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)

図版165 朱塗箔絵鳳凰雲文櫃

度小作料」と記された紙のラベルが残されていた。位牌が確認された暗渠の南側には、年貢や諸物を納めたとされる高御蔵(材木蔵)が近接しており、この施設との関連も興味深い。

次に、位牌の製作年代についてである。本資料は一部に不鮮明な墨書が残るものの、年号が確認されていない上、戦時中に避難させたと思われる出土状況から、年代について判然としない。ここで年代の参考になる資料として、祭祀を司る神女が使用した神女簪と、石碑の2点をあげてみる。神女簪はカブ簪とも称され、奄美から沖縄本島まで分布している。その中で16世紀の製作とされる聞得大君簪はあまりにも有名である(沖縄県教育委員会2008)。この簪のカブ意匠は雲龍で位牌のデザインとは異なるが、高肉で緻密に打ち出す技法や、図様構成に類似する傾向をみることができる。

次の例としてあげた石碑に関しては、位牌の主文様である日輪双鳳凰文が、円覚禅寺記碑(1497年)、たまおとんのひもん(1501年)、国王頌徳碑(1522年)、崇元寺下馬碑(1527年)などの、15～16世紀に建立された石碑の碑首に彫刻される。この文様構成はその後の石碑にみられないことから、王府や王家を象徴する日輪双鳳凰文が解体する契機は、島津氏の侵攻にあるとする見解もある(沖縄県立博物館1993)。これらの事例から位牌の年代を察するのは資料不足の感もあるが、古くは16世紀以前の製品であることも考えられ、今後伝世品や古写真(図版163)などから情報収集を行う必要がある。

## 2. 寄満・女官部屋周辺

寄満・女官部屋周辺の遺物を中心にまとめる。寄満付近はトレンチ4E-14・15グリッドを中心としており、遺構は東西に走る溝2本と方形石組み遺構1基を検出した。遺物の量はトレンチ2と比較して少ないが、沖縄産陶器や明治以降の瀬戸美濃産陶磁器が多い傾向にある(巻頭図版11、第40図)。沖縄産陶器では施釉された鉢が多く出土している。これらの見込み部分は摩滅が著しいことから、調理用具としての機能が考えられる。この寄満と近接する御寝廟殿を写した古写真には、軒先に施釉された数点の鉢が伏せて置かれる状況が確認でき(図版166)、日用雑器として盛んに使用されていたことを窺わせている。本土産磁器はプリントによる色絵が中心で、溝6・7内から碗や皿が数点出土しているほか、方形石組み4の内部からも、小碗や急須類がわずかに得られている。また、底部にエンボスで「AJINOMOTO」銘のあるガラス瓶が溝7内から出土しており、厨房としての機能を彷彿とさせている。陶磁器全体の傾向としては、日用雑器や調理及び貯蔵具が多く、トレンチ2でみられるような錦手・色絵などは極端に少ない。また、方形石組み4は膨大な獣魚骨が出土していることからゴミ穴(シーリ)と考えられ、付近が寄満であった可能性をさらに高めている。

## 3. 遺物溜まり

今回の調査で特異な事例として、2ヶ所で遺物が集中する状況が検出され、そこから様々な陶磁器が得られている。この内、遺物溜まり1としたトレンチ1西側からは、表層近くの土坑内に石灰岩礫が詰められ、その上部に多量の陶磁器がモルタルで固められた状態で出土している。遺物の組成は沖縄産陶器が中心で、大型の施釉陶器が多く含まれる点が特徴的である(巻頭図版7、第14図)。中でも施釉の甕や鉢の部類が多く、甕の内底部に三巴文を有する資料が含まれる。その他、施釉された大型の瓶などもみられるが、これらの資料は他で類例がない点と家紋が入る点で、王家からの注文品であることが考え



(井伊文字)

図版166 御寝廟御殿

られる。このように、遺物溜まり1の組成は、日用雑器的な器物は少なく、装飾的要素の強い別注品が中心となる点で特異と言える。時期的には、わずかに出土している本土産色絵から明治以降と考えられるが、全体がモルタルで固められている点で、もう少し下る可能性がある。

これに対し、トレンチ3より確認された遺物溜まり2においては、主に沖縄産陶器と本土産磁器が占めている状況である(巻頭図版8、第34図)。その中で目立つ遺物として、沖縄産陶器においては、施釉の大鉢や外底に墨書のある火入れのほか、無釉の瘦瓶がある。本土産は瀬戸美濃産の白磁・染付の小碗が複数個体得られており、その他、中国清朝の青花小碗などが得られている。これらの年代は、本土産磁器から明治以降と考えられるが、階段遺構を構成する石積みの裏側から検出している点で、階段遺構築造前とするか、築造後埋設されたか判断に窮するところである。しかし、遺物の残存が良好で接合率がかなり高い点から、破片を廃棄したと言うより、岩陰に完形品をまとめて置いたか、あるいは完形に近い製品を廃棄したことが考えられ、この場合遺構築造前の遺物であることが考えられる。

これら遺物溜まりの資料は、明治期以降の製品を中心とするが、中城御殿が機能していた時期と重なり、その組成や年代を知る上で参考になる。

#### 4. 中城御殿以前の遺物

中城御殿築造以前の遺物としてあげたのは、中城御殿造営にあたり投入された造成層や、生活層を含む第Ⅲ・Ⅳ層から出土した遺物で、その概要は主な遺物として第3章第4節1に提示した。遺物の年代は、近世～近代が占める傾向にある(巻頭図版12・13、図版23・41)。中でも初期沖縄産無釉陶器や薩摩産陶器が多く、続いて肥前ほか本土産陶磁器や中国南部産の染付など、産地及び器種もバラエティーに富む。1700年頃制作とされる首里古地図によると、当地に数件の土族屋敷が描かれていることから、これらの遺物はその痕跡か、あるいは造営の際に他方から持ち込まれた造成土に混入していたことが考えられ、当地の変遷を知る上で貴重な資料と言える。

#### 5. 戦前～終戦後の遺物

戦前から戦後の遺物と考えられる遺物は、主に第Ⅱ層から出土している。この状況については第3章第4節に提示し、主な遺物は第3章第5節7・18・22に示した(巻頭図版14)。この第Ⅱ層は戦後、荒廃した敷地内を利用するため、主に砲弾痕などの穴に周辺の瓦礫を投入・造成したと思われる層である。内部には多量の陶磁器類のほか、機械部品や建材などの金属製品、板ガラスやガラス瓶、プラスチック(セルロイド)製品、布・ゴム製品が混在している。陶磁器中には攪乱により混入した近世・近代の製品も含まれるが、大半は戦前に焼成されたものが占めている。中でも外底面に産地の頭文字と番号が打たれた軍用食器を含む統制陶器が多く含まれ、その銘は「岐」岐阜、「肥」肥前、「ト」砥部か、「波」波佐見などがあり、各地から持ち込まれている様子を窺うことができる。その他、自動車のゴムタイヤやチューブを加工・転用した草履や、米軍の払い下げ品と思われる靴底や衣類が多量に出土している。この状況は、中城御殿の一部が戦中に陸軍の陣地として使用された点と、戦後において引揚者が一時滞在していたとする記録とも調和しており、当地の土地利用の変遷を知ることができるとともに、戦後の復興に躍進する人々のたくましさを伝えている。

#### 6. その他特徴的な遺物

中城御殿特有な遺物としてあげたのは、貝窓の貝、石灯籠、石製容器、中国官窯製と思われる陶磁器の4件である。貝窓の貝は、トレンチ1の方形石組み1内よりまとめて出土している。扁平な二枚貝を方形に加工した製品で、発見当初は用途が判然としなかったが、各種文献や古写真から貝窓であることが判明した資料である。この文献の記述によると、貝窓は玄関(御番所)や便所の灯りとりとして用いられているとのことであった(図版167)。しかし、今回確認された地点は玄関から離れており、貝窓は各所に存在していた可能性が想定される。この貝窓に使用した貝種については、沖縄を含めた日本に生息しないマドガイであることが判明しており、今後類例を探すとともに流通や加工法についても解明していく必要がある。

次に石灯籠であるが、今調査ではその破片と思われる資料が1点得られている。破損が著しく全形は不明であるが、3面がわずかに残ることにより角柱状の製品であることがわかる。材質は安山岩で、側視したボタンの花が彫刻されている。この石灯籠については、庭園を写した古写真(巻頭図版18)や来訪した文化人らの記述にも残されているほか、沖縄県立博物館・美術館の屋外展示コーナーには、古写真(図版168)と類似する石灯籠が数点現存しており(図版169)、大きさや質感を想像する上で参考になる。

続いて石製容器であるが、この製品については平成20・21年度の中城御殿跡発掘調査において多数出土しているほか、首里城内でもわずかに出土例がある(沖縄県立埋蔵文化財センター2010b)。本資料の一部については、形状や点数から漆器の東道盆内に納める中皿の可能性が高いことが伝世資料からみることができ(浦添市美術館1995)。しかし、平成22年度調査において出土した製品にはこれに準ずるものがなく、形状やサイズから碗や鉢など、単体で使用すると思われる製品が占める



図版167 玄関貝窓

(田辺泰 1972)



図版168 石灯籠

(沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵)



図版169 石灯籠

(沖縄県立博物館・美術館所蔵)

傾向にある。材質は中国や台湾産と思われるヒスイや蠟石が用いられており、製品に刻まれた文様や、伴出する輸入陶磁器の産地を併せて考えると、中国で製作された可能性が高いと思われる。中国では古来より、玉製品を装飾品や日用品のほか、儀礼の場や富・権力の象徴として用いられ、様々な製品が製作されてきた(山口県立萩・浦上記念館2009)。中城御殿から発掘されたこれらの製品も、その影響を受けて持ち込まれたことが考えられ、今後産地や用途についての情報収集が必要となろう。

最後に、中国官窯製品と思われる陶磁器についてである。その種別は青磁皿、色絵碗・壺、染付碗・壺、瑠璃釉碗・皿で構成されている。これらの外底には、「大清雍正年製」と「大清乾隆年製」の銘が確認されており、18世紀前半～末まで製作されたことがわかる。これらは破片から数個体分が存在していたことが考えられる。中城御殿の建立年代と陶磁器年代との相違はあるが、伝世品として、あるいは廃藩置県後に正殿や各種御殿から持ち込まれた、多くの宝物類の一部であることが考えられる(真栄平房敬 1975、2003)。

## 7. 自然遺物

自然遺物は量的に多いと言えないが、貝類と動物骨が一定量得られている。貝類の特徴としては、トレンチ1 F-17よりオハグロガイが多数出土しているほかは、目立った貝種及び量の出土はみられない。動物骨に関しては、特に方形石組み4としたゴミ穴(シーリ)からまとまって出土している(第3章5節24)。全体として魚骨が多く、次いでブタ、ニワトリが続く。本遺構からはこれらの動物骨のほか、近代、特に大正～昭和初期にかけての陶磁器が出土していることから、沖縄戦により破壊される直前の食に関する廃棄物であることが考えられ、それから当時の食性傾向を知ることができるとともに、首里城跡の事例(沖縄県立埋蔵文化財センター2010b)との比較から、中城御殿の食関連の生活様式が、首里城に準ずる営みを持つことが理解できた。

以上、平成22年度実施分の中城御殿跡発掘調査報告を行った。これまで述べてきたように、中城御殿の遺構は、かつての構造や間取り、性格を示す状態で、調査区のほぼ全面にわたって良好な状態で残されており、これに伴い往事の生活を伝える多くの遺物が出土している。この状況から今後の調査においても、多くの遺構及び遺物が検出される可能性は高く、戦後の開発により改変された範囲であっても、慎重に表土掘削を含めた発掘を行う必要がある。

また、今後の調査計画及び遺構解釈に際し、中城御殿の表部分に関しては、近年発見された中城御殿御普請板図を重ねることにより、さらに精度が増すことが考えられる。しかし、新御殿や寄満など、1875(明治8)年の竣工後に増改築された建物に関しては、今調査により旧遺構を最小限取り外し、新たな石畳などの建物基礎を構築していることが判明している。このことから、今後の調査において検出される遺構も、増改築が行われた地点にあっては増改築後のものである可能性が高く、米軍航空写真による屋根伏図や、聞き取りによる復元平面図を前提にしておく必要があるものと思われる。

最後に、調査及び資料整理作業に際しては多くの方々に力を貸していただき、また指導・助言を賜った。記して感謝申し上げたい。

# 引用・参考文献

## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

- 沖縄県土木建築部 1994『首里城公園基本設計』沖縄県土木建築部  
首里城公園基本計画調査委員会 1993『首里城公園基本計画調査報告書』首里城公園基本計画調査委員会

## 第2章 位置と環境

- 井伊文子 1972『仏桑花燃ゆ』燈影舎  
井伊文子 1978『仏桑華の花ひらく』柏樹社  
上原永盛編 1935『沖縄県人物風景写真大観』沖縄通信社  
沖縄県都市計画・モノレール課 2010「中城御殿跡地整備検討委員会資料」沖縄県都市計画・モノレール課  
沖縄県立博物館 1993『旧中城御殿—石牆工事地域にかかる第一次発掘調査—』沖縄県立博物館  
沖縄県立博物館 1994『旧中城御殿—旧中城御殿石垣工事にかかる第2次発掘調査—』沖縄県立博物館  
沖縄県立博物館 1995『旧中城御殿—旧中城御殿石垣工事にかかる第3次発掘調査—』沖縄県立博物館  
沖縄県立博物館 1996『沖縄県立博物館50年史』沖縄県立博物館  
沖縄県立博物館 1992『旧中城御殿関係資料集』沖縄県立博物館  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010a『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
嘉手納宗徳 1970『首里古地図』沖縄風土記刊行会  
海洋博記念公園管理財団 2010『首里城尚家関係者ヒアリング調査業務報告書』海洋博記念公園管理財団  
鎌倉芳太郎 1982『沖縄文化の遺宝』岩波書店  
球陽研究会(編) 1974『琉球 読み下し編』沖縄文化史料集成5 角川書店  
田辺泰(編) 1972『琉球建築』座右宝刊行会  
津軽照子 1942『うら紙草子』河北書房  
都築昌子 2005「龍のひそむ島—近世琉球の風水—」『沖縄県史各論編第4巻 近世』沖縄県教育委員会  
平凡社地方資料センター 2002『沖縄県の地名 日本歴史地名体系48巻』平凡社  
真栄平房敬 1975「戦争と王家の宝物(上・下)」『沖縄タイムス』1975年11月25・26日 沖縄タイムス社  
真栄平房敬 2003「中城御殿の御道具について—御道具と文書の保存と管理—」『尚家関係資料総合調査報告書II 美術工芸編』那覇市市民文化部歴史資料室  
真栄平房敬 2009「中城御殿の思い出と復元促進にむけて」『蘇る首里城 首里城復元期成会35年の歩み』首里城復元期成会  
琉球政府 1965「琉球藩雑記」『沖縄県史』14 琉球政府

## 第3章 調査の方法と成果

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010a『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 沖縄県立埋蔵文化財センター

### 第4節 層序と遺構・主な遺物

- 沖縄県立博物館 1992『旧中城御殿関係資料集』沖縄県立博物館  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010a『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
仲座久宜 2009「シーリ遺構からみる御内原のくらし」『紀要 沖縄埋文研究6』沖縄県立埋蔵文化財センター

### 第5節 出土遺物

#### 1 中国産青磁

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2008「沖縄における貿易陶磁研究」『紀要 沖縄埋文研究5』沖縄県立埋蔵文化財センター



## 2 中国産白磁

沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『渡地村跡—臨港道路那覇第1号線整備に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 3 中国産青花

沖縄県教育委員会 1993『湧田古窯跡(1)—県庁舎行政棟建設に係る発掘調査—』沖縄県文化財調査報告書 第111集 沖縄県教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

西田宏子・出川哲朗 1997『明末清初の民窯』中国の陶磁第10巻株式会社平凡社

## 4 中国産色絵

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

矢島律子 1996『明の五彩』中国の陶磁第9巻 株式会社平凡社

## 5 中国・タイ産褐釉陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 6 その他の輸入陶磁器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

中沢富士雄 1996『清の官窯』中国の陶磁第11巻 株式会社平凡社

## 7 本土産陶磁器

INAXギャラリー企画委員会 1984『図説：廁まんだら』INAX出版

INAXライブミュージアム 2007『染付古便器の粹 清らかさの考察』INAX出版

INAXライブミュージアム 2011『やきものを積んだ街かど 再利用のデザイン』INAX出版

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

(財)岐阜県陶磁資料館 2001『戦時中の統制したやきもの』(財)岐阜県陶磁資料館

(財)岐阜県陶磁資料館 2008『萩谷コレクション 全国の戦時中のやきもの』(財)岐阜県陶磁資料館

佐賀県立九州陶磁文化館 2006『近現代肥前陶磁銘款集』佐賀県立九州陶磁文化館

土岐津町誌編纂委員会 1999『土岐津町誌』土岐市土岐口財産区

## 8 沖縄産施釉陶器

沖縄県立博物館 1995『旧中城御殿—旧中城御殿石垣工事にかかる第3次発掘調査—』沖縄県立博物館

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 9 初期沖縄産無釉陶器

新垣力 2009『16~17世紀における琉球での陶器生産の様相とその周辺』『考古学からみた薩摩の侵攻400年』沖縄考古学会

新垣力 2011『無釉陶器の成立と展開』『琉球陶器の来た道』沖縄県立博物館・美術館

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 10 沖縄産無釉陶器

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 11 陶質土器

- 大塚初重・戸伏充則 1996『最新 日本考古学用語辞典』柏書房  
沖縄県教育委員会 1990『阿波根古島遺跡—那覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告—』沖縄県文化財調査報告書 第96集 沖縄県教育委員会  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 12 土器・硬質土器・瓦質土器・土製品・埴埴

- 上原静 2009「首里城西のアザナ跡の鍛冶・铸造工房」『紀要 沖縄埋文研究6』沖縄県立埋蔵文化財センター  
上原静 2004「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える』今帰仁村教育委員会  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
瀬戸哲也 2009「南の境界・琉球の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会  
瀬戸哲也 2011「沖縄の瓦質土器について」『琉球陶器の来た道』沖縄県立博物館・美術館  
東京都埋蔵文化財センター 2003『汐留遺跡Ⅲ—旧汐留貨物駅跡地内の調査—第5分冊』東京都埋蔵文化財センター調査報告 第125集 東京都埋蔵文化財センター  
東京都埋蔵文化財センター 2010『新宿区内藤町遺跡—新宿御苑大温室の整備に伴う埋蔵文化財発掘調査—』東京都埋蔵文化財センター調査報告書 第246集 東京都埋蔵文化財センター  
那覇市教育委員会 1992『壺屋古窯群Ⅰ—個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査』那覇市文化財調査報告書 第23集 那覇市教育委員会

## 13 円盤状製品・碁石

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 14 金属製品

- 沖縄県教育委員会 2008『沖縄の金工品関係資料調査報告書』沖縄県史料調査シリーズ 第4集・沖縄県文化財調査報告書 第146集 沖縄県教育委員会  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2009『首里城跡—京の内跡発掘調査報告書(Ⅱ)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第49集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
久保智康 2005『金色のかざり—金属工芸にみる日本美—』京都国立博物館  
久保智康 2010『琉球の金工』日本の美術第533号 (株)ぎょうせい  
合田芳正 1998『古代の鍵』考古学ライブラリー 66 ニューサイエンス社  
名護市教育委員会 2004『クスノキ製造—久志大川ダム建設に伴う久志大川上流域生産遺跡緊急発掘調査報告書—』名護市文化財調査報告16 名護市教育委員会  
名護博物館 2003『沖縄の度量衡～はかりを通した人々の暮らし～』第20回名護博物館企画展 名護博物館

## 15 銭貨

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
永井久美男 1996『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会  
永井久美男 1998『近世の出土銭Ⅱ—分類図版篇—』兵庫埋蔵銭調査会  
日本貨幣商共同組合 2002『日本貨幣カタログ』2002年度版 日本貨幣商共同組合

## 16 煙管

- 石井龍太 2011「琉球出土キセルの基礎的研究～琉球喫煙文化の研究～」『東京大学考古学研究室紀要』第25号 東京大学考古学研究室  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『第9節 沖縄産無釉陶器』『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(Ⅰ)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
古泉弘 1983『江戸を掘る—近世都市考古学への招待』柏書房  
島 弘 2010「沖縄諸島出土の煙管について」『シンポジウム VOCと日蘭交流—VOC遺跡の調査と嗜好品—』たばこと塩の博物館・江戸遺跡研究会

## 17 骨・貝製品

- 沖縄県立博物館 1992『旧中城御殿関係資料集』沖縄県立博物館  
田辺泰編 1972『琉球建築』座右宝刊行会

## 18 ガラス玉・ガラス製品

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立

埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
沖縄県教育委員会 2011『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』沖縄県文化財調査報告書 第149集 沖縄県教育委員会  
桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房

## 19 石製品・石造物・石器

上江洲均 1973『沖縄の民具』考古民俗叢書12 慶友社  
上原静 2010「琉球砥石考」『南島考古』第29号 沖縄考古学会  
沖縄県立博物館 1992『旧中城御殿関係資料集』沖縄県立博物館  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 20 瓦・埴

上原静 2008「沖縄諸島における琉球瓦の再編年」『沖縄国際大学総合学術研究紀要』第11巻第2号(通巻14号) p1-62 沖縄国際大学  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(1)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
駒井鋼之助 1974「現代までの粘土瓦の足跡」『かわら日本史』雄山閣

## 21 漆製品

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
鎌倉芳太郎 1982『沖縄文化の遺宝』岩波書店

## 22 その他の遺物

沖縄県立博物館 1996『沖縄県立博物館50年史』沖縄県立博物館

## 23 貝類遺体

久保弘文・黒住耐二 1995『沖縄の海の貝・陸の貝』沖縄出版  
沖縄県教育庁文化課 1987「第6節 軟体動物遺存体」『石川市古我地原貝塚』沖縄県文化財調査報告書 第84集 沖縄県教育委員会  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター

## 24 脊椎動物遺体

沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(I)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010a『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告書(I)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第53集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告書(2)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
加藤嘉太郎・山内昭二 2003『新編家畜比較解剖学図説 上巻』養賢堂  
金子浩昌 2005「脊椎動物遺体」『首里城跡—書院・鎖之間地区発掘調査報告—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第28集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
金城須美子 1997「琉球王国時代の食生活の変遷と文化史的背景」『食生活文化に関する研究助成研究紀要』第9巻 財団法人アサヒビール生活文化研究振興財団  
菅原広史 2010「第27節 シーリ遺構内の自然遺物 3. 脊椎動物遺体」『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(I)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
名島弥生・樋泉岳二 2007「南島考古学におけるフエフキダイ科の魚類の属レベルでの同定とその意義」『第11回動物考古学研究集会発表資料』動物考古学研究会  
樋泉岳二・名島弥生・菅原広史 2009「今帰仁城跡主郭東斜面から出土した脊椎動物遺体」『今帰仁城跡発掘調査報告IV』今帰仁村文化財調査報告書第26集 今帰仁村教育委員会  
樋泉岳二 2007「今帰仁城跡周辺出土の脊椎動物遺体—Ⅲ区b・東7区・シニグンニー—」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ—村内遺跡発掘調査報告—』今帰仁村文化財調査報告書第24集 今帰仁村教育委員会  
松井章 『動物考古学』同成社  
Angela Von Den Driesch 1976 A Guide to Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum Bulletin 1, Peabody Museum Press, Cambridge  
Elisabeth Schmid 1972 Atlas of Animal Bones For Prehistorians, Archaeologists and Quaternary Geologists Elsevier Publishing Company

## 第4章 自然科学分析

- 天野鉄夫 1989『図鑑 琉球列島有用樹木誌』沖縄出版,470p.
- 藤木利之・小澤智生 2007『琉球列島産植物花粉図鑑』アクアコーラル企画,155p.
- 林 昭三 1991『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料,31』京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東隆夫 1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料,32』京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東隆夫 1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料,33』京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東隆夫 1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料,34』京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東隆夫 1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料,35』京都大学木質科学研究所,47-216.
- 金原正明・金原正子 1994「鴻臚館跡の土坑(便所遺構)における寄生虫卵・花粉・種実の同定分析」『鴻臚館跡4』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第372集 福岡市教育委員会,25-38.
- 金原正明・金原正子・中村亮仁 1995a「大宮坊跡(厠跡)における自然科学的分析」『史跡石動山環境整備事業報告Ⅱ』石川県鹿島町教育委員会,51-70.
- 金原正明・金原正子・中村亮仁 1995「川合遺跡八反田地区SE402・SE405における寄生虫卵・植物遺体分析」『川合遺跡八反田地区Ⅱ本文編』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第63集 静岡県埋蔵文化財調査研究所,341-354.
- 黒崎直・松井章・金原正明・金原正子 1993「糞便堆積物の分析—特に寄生虫卵分析について—」『日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会,115-115.
- 中村純 1980「日本産花粉の標徴Ⅱ(図版)」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第12,13集』大阪市立自然科学博物館91p.v
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編) 2006「針葉樹材の識別IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification] .
- 佐伯秀治・升秀夫・早川典之 1998『臨床検査シリーズ 寄生虫鑑別アトラス—オールカラー版—』株式会社メディカルサイエンス社,162P.
- 斉藤崇人・田中義文 2007「寄生虫卵殻の形態分類」『徳永重元博士献呈論集』パリーノ・サーヴェイ株式会社,407-416.
- 島地 謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社,176p.
- 島倉巳三郎 1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集』大阪市立自然科学博物館60p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編)1998「広葉樹材の識別」『IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification] .

## 第5章 総括

- 井伊文子 1972『仏桑花燃ゆ』燈影舎
- 井伊文子 1978『仏桑華の花ひらく』柏樹社
- 上原永盛編 1935『沖縄県人物風景写真大観』沖縄通信社
- 浦添市美術館 1995『館蔵 琉球漆芸』浦添市美術館
- 沖縄県教育委員会文化課 1985『金石文 歴史資料調査報告書Ⅴ』沖縄県教育委員会
- 沖縄県都市計画・モノレール課 2010「中城御殿跡地整備検討委員会資料」沖縄県都市計画・モノレール課
- 沖縄県立博物館 1996『沖縄県立博物館50年史』沖縄県立博物館
- 沖縄県立博物館 1992『旧中城御殿関係資料集』沖縄県立博物館
- 沖縄県立博物館 1993『企画展 刻まれた歴史—沖縄の石碑と拓本』沖縄県立博物館
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010a『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告書(Ⅰ)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第53集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県教育委員会 2008『沖縄の金工品関係資料調査報告書』沖縄県史料調査シリーズ第4集・沖縄県文化財調査報告書第146集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010b『首里城跡—御内原北地区発掘調査報告書(Ⅰ)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第54集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(Ⅱ)—』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第58集 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 海洋博記念公園管理財団 2010『首里城尚家関係者ヒアリング調査業務報告書』海洋博記念公園管理財団
- 嘉手納宗徳 1970『首里古地図』沖縄風土記刊行会
- 鎌倉芳太郎 1982『沖縄文化の遺宝』岩波書店
- 田辺泰編 1972『琉球建築』座右宝刊行会
- 真栄平房敬 1975「戦争と王家の宝物(上・下)」『沖縄タイムス』1975年11月25・26日版 沖縄タイムス社
- 真栄平房敬 2003「中城御殿の御道具について—御道具と文書の保存と管理」『尚家関係資料総合調査報告書Ⅱ美術工芸編』那覇市
- 真栄平房敬 2009「中城御殿の思い出と復元促進にむけて」『蘇る首里城 首里城復元期成会35年の歩み』首里城復元期成会
- 山口県立萩・浦上記念館 2009『中華のかがやき—中国山東省古玉器—』シリーズ山東文物8 山口県立萩・浦上記念館

# 報告書抄録

ふりがな	なかぐすくうどうんあと
書名	中城御殿跡
副書名	県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書
巻次	3
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第63集
編著者名	仲座久宜(編)、伊藝由希、具志堅清大、菅原広史、宮城明恵、宮里知恵、(株)文化財サービス
発行機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
発行年月日	平成24(2012)年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
なかぐすくうどうんあと 中城御殿跡	おきなわけん なほし 沖縄県那覇市 しゅりおおなちやう 首里大中町	472018	—	26° 13' 15"	127° 43' 05"	2010.08.03 ～ 2011.02.28	約400㎡	県営首里城公園 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中城御殿跡	屋敷跡	近世 ～ 現代	石列 溝・暗渠・開渠 石積み 方形石組み (トイレ・ゴミ穴) 石畳 階段 門	中国産青磁、白磁、染付 その他輸入陶磁器 中国・タイ産褐釉陶器 本土産陶磁器 沖縄産施釉陶器 沖縄産無釉陶器 陶質土器、瓦質土器 土器、硬質土器、坩堝 円盤状製品、基石 金属製品、銭貨 煙管 貝製品、骨製品 ガラス玉、ガラス製品 石器、石製品、石造物 瓦、埴 漆製品(位牌)、漆塗膜 戦中・戦後の遺物 貝類・脊椎動物遺体	戦前の記録や航空写真をもとに、間取りを想定しつつ調査を行った結果、新御殿や女中居間、寄満などの遺構が確認された。新御殿は王子が生活した屋敷跡であり、そこから多くの色絵や染付などの陶磁器が出土している。これに対し、台所である寄満周辺からは、壺甕類などの貯蔵具のほか、碗・皿などの陶器が多数確認されており、建物の機能により種別が異なることが確認された。

要 約	<p>中城御殿は国王の世子が暮らした邸宅跡で、1875年から1945年まで存在していた。戦後は県立博物館が建てられるが、老朽化により撤去される。調査は遺構の残存状況を確認する目的で4本のトレンチを設けて行い、新御殿の石畳や各種溝のほか、御内原と上之御殿境界に位置した門及び階段跡の遺構が良好な状態で検出された。出土遺物としては、肥前・瀬戸美濃産を中心とする陶磁器や金属製品のほか、戦時中に避難させたとされる朱塗りの位牌が確認されており、中城御殿の生活を偲ばせる資料が多数出土している。</p>
-----	--

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第63集

# 中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3) —

発行日 平成24(2012)年3月31日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター  
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7  
TEL : 098-835-8751・8752

印刷 有限会社 文成印刷  
〒902-0073 沖縄県那覇市上間364



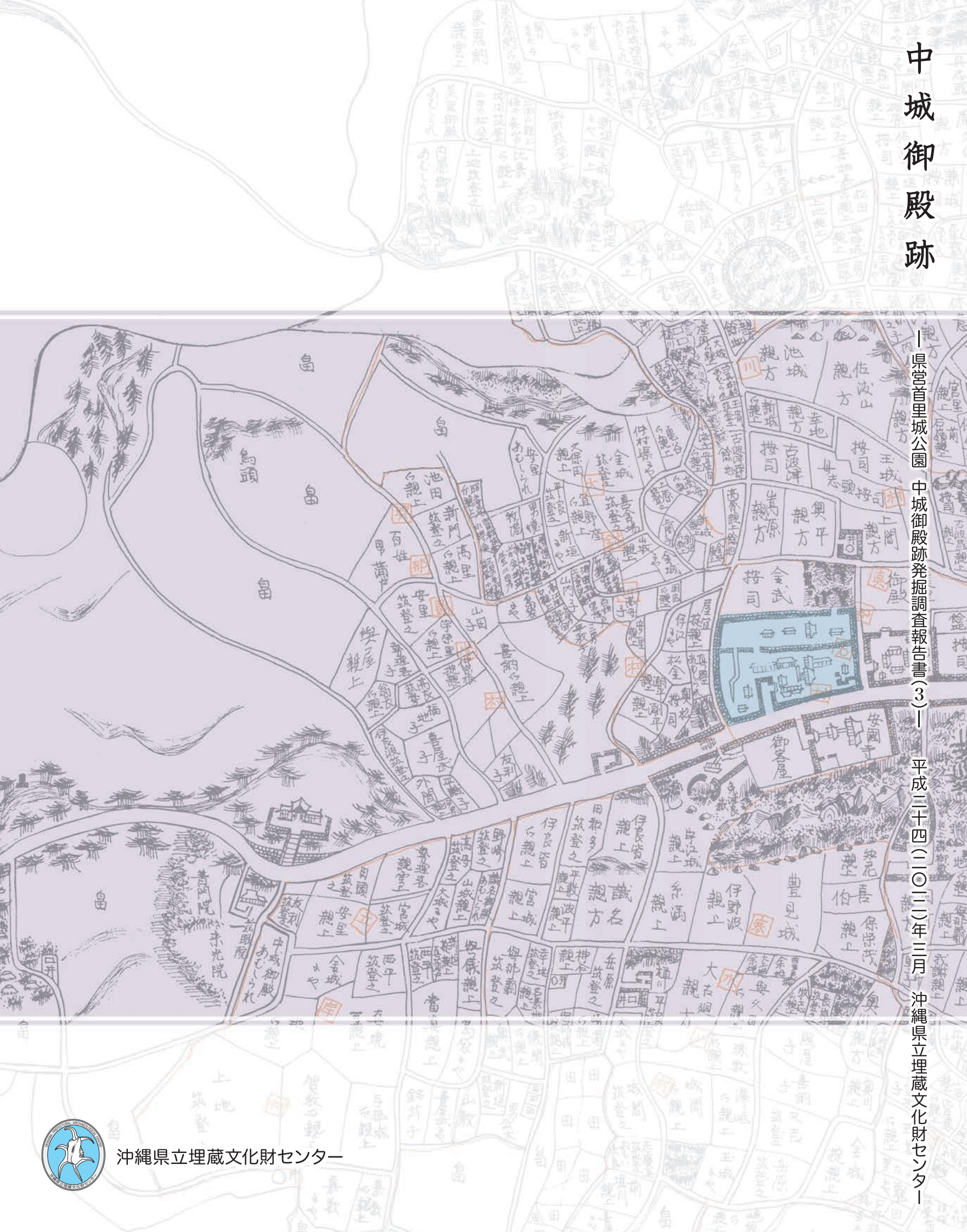






# 中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3) — 平成二十四(二〇二二)年三月 沖縄県立埋蔵文化財センター



# 中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(3) —

## 首里古地図

康熙39(1700)年に作製されたものである。これより2年前に江戸幕府から全国各藩に対して、地図を提出するよう指令が出ておるので、この地図もその一環であろう。

ところが、この地図も時代が経つにつれて、汚損はなほだしく、成豊のはじめごろには聞くことさえ出来ず、まったく使用にたえない状態になっていた。秋姓家譜によると、九世藩侯(さいしゆん)が絵図書調方筆者として、この地図を再調製したことがみえている。当時、原図は使用できないので、屋敷図帳、山敷図帳を参照し、各当事者にきいたりして、この仕事を完成し、褒賞を賜っている。

図中約千百余の公署、屋敷等が精密に記載され、270年前の状況を詳しく伝えているが、この地図が年代推定に疑問を留した理由は1700年当時の状況を伝えながらも、当事者たちの記憶違い、あるいは伝え違いによって、後代的な要素があるからである。

この地図の原図は6畳敷の大きさで、研究に不便になるため、よく観察して書きあらためたものである。(高手納宗徳)

